

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅲ

台の上遺跡・峪ノ上遺跡・五反田遺跡

2005

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅲ

だい うえ 遺跡・がけ うえ 遺跡・ごたんだ
台の上遺跡・峪ノ上遺跡・五反田遺跡

2 0 0 5

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

北陸新幹線は、東京を起点に上越新幹線高崎駅から分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・小浜市を経て大阪府に至る総延長600kmの新幹線鉄道です。全面開通により、北陸地方と関東圏・関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に先立ち、平成15・16年度の2か年にわたって調査を実施した上越市の台の上遺跡・峪ノ上遺跡・五反田遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、古墳時代後期～平安時代にかけての集落の様子が明らかとなりました。特に五反田遺跡では、整然と配置された掘立柱建物群から質量ともに優れた遺物が出土しており、一般集落とは異なる性格が推定されています。これらの成果は、高田平野における古代研究の推進に大きく寄与するものと期待されます。

この調査報告書が、上越市並びに頸南地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助を賜った上越市教育委員会、旧板倉町教育委員会、並びに地元の方々、また発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご配慮を賜った独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、同上越鉄道建設所に対して厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

新潟県教育委員会

教育長 板屋越 麟一

例 言

- 1 本報告書は、新潟県上越市大字木島字峪ノ上107ほかに所在する台の上遺跡・同峪ノ上52ほかに所在する峪ノ上遺跡、及び上越市板倉区（旧板倉町）大字米増字五反田ほかに所在する五反田遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は、北陸新幹線の建設に伴い日本鉄道建設公団（現：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、以下、鉄建公団または鉄道運輸機構）から新潟県が受託したもので、調査主体である新潟県教育委員会（以下、県教委）の依頼により財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が平成15～16年度に実施した。
- 3 出土遺物及び調査に係る各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は、「ダイノ上」「タニノ上」「04ゴタン田」「05ゴタン田」とし、出土地点や層位などを続けて記した。なお、「峪ノ上遺跡」の名称は、「がけのうえ」であることがその後判明したが、注記名は修正していない。
- 4 本書に掲載した遺物番号は遺跡ごとにすべて通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 5 引用文献は、著者及び発行（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 6 作成した図版のうち、既成の地図図を使用した場合はそれぞれその出典を記した。
- 7 航空写真撮影は、平成15年度は国際航業株式会社、平成16年度は株式会社イビソクに委託した。
- 8 自然科学分析に係る各種の同定は、株式会社パリオ・サーヴェイおよび株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。
- 9 平成15年調査で出土した土器の実測は、J.A.W.S.有限会社に委託した。
- 10 遺構平面実測及び図化は有限会社中郷測量設計に委託し、成果品はデジタルデータ（DXF形式）での納品とした。
- 11 遺構断面図のトレース及び各種図版作成・編集は、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集をし、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。遺物写真はデジタルカメラ（ニコンD100）で撮影し、デジタル化した遺構写真と合わせて編集を行った。なお、図版作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下の通りである。

本文・挿図：テキスト形式・Excel形式のデータ、トレース原図、貼り込み版下
遺構図面図版：平面図データ・断面図原図（修正済）・レイアウト図・文字データ
遺物図面図版：トレース図（個別）・拓影・レイアウト図
写真図版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図

- 12 本書の執筆は、渡邊裕之（埋文事業団 班長）、加藤義孝（同 主任調査員）、辻 範朗（同 主任調査員）、大島通夫（同 主任調査員）、山田秀樹（同 主任調査員）、相羽重徳（株式会社古田組）がこれにあたり、編集は渡邊が担当した。執筆分担は以下の通りである。なお、墨書土器の判読にあたっては、田中一穂（埋文事業団嘱託員）の協力を得た。

第I章加藤・辻・相羽

第II章1山田、2大島・渡邊

第III章1・2辻、3B大島・渡邊

第IV章1・2辻、3B山田・渡邊

第V章1・2辻、3B1）・3) 辻・渡邊、4) 山田・渡邊、4D2) 加藤、5 (株) パリオ・サーヴェイ

第VI章1・2・3B2)～6)・8)、4B・C・E1)・3) 相羽、4E2) 相羽・渡邊、5A (株) パリオ・サーヴェイ、5B九州テクノリサーチ

その他 渡邊

- 13 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（敬称略 五十音順）

相沢 央 浅井 勝利 井上喜久男 大平 理恵 尾野 善裕 久保 智康 小島 幸雄

小林 昌二 笹沢 正史 佐藤 慎 品田 高志 関 雅之 高野 武男 高橋 勉

巽 淳一郎 田中 暁穂 戸根與八郎 野村 忠司 秦 繁治 早津 賢二 平尾 政幸

藤森健太郎 水澤 幸一

目 次

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経過	1
2 調査と整理作業	1
A 試掘確認調査	1
1) 台の上・峪ノ上遺跡	1
2) 五反田遺跡	2
B 本発掘調査	2
1) 台の上遺跡	2
2) 峪ノ上遺跡	2
3) 五反田遺跡 (H15年調査)	3
4) 五反田遺跡 (平成16年調査)	3
3 調査体制	4
4 整理・報告体制	5

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境	6
A 台の上遺跡・峪ノ上遺跡	6
B 五反田遺跡	7
2 周辺の遺跡	9
A 古墳時代	9
B 古 代	9

第Ⅲ章 台の上遺跡

1 グリッドの設定	12
2 層 序	12
3 遺 構	14
A 概 要	14
B 遺構各説	14
1) 竪穴住居跡	14
2) 掘立柱建物	14
3) 井 戸	15
4) 土 坑	15
5) 溝状遺構	15
4 遺 物	15
A 古 代	16
B 中 世	16
5 小 結	17

第Ⅳ章 峪ノ上遺跡

1 グリッドの設定	18
2 基本層序	18
3 遺 構	19

A 概 要	19
B 遺構各説	19
1) 古墳時代	19
2) 平安時代	20
4 遺 物	21
A 概 要	21
B 弥生時代	21
C 古墳時代	22
1) 竪穴住居	22
2) 溝	23
3) 包 含 層	23
D 平安時代	23
1) 掘立柱建物	23
2) SD1	23
3) SD2	23
4) 包 含 層	24
E 中 世	24
5 小 結	24
A 古墳時代後期の竪穴住居	24
B 平安時代の大型掘立柱建物	25

第V章 五反田遺跡（平成15年調査）

1 グリッドの設定	27
2 基本層序	27
3 遺 構	29
A 概 要	29
B 遺構各説	29
1) 川 跡	29
2) 竪穴住居	30
3) 掘立柱建物	30
4) 土 坑	33
5) 土師器焼成遺構	33
6) 竪穴状遺構	33
7) 炭 土 坑	34
4 遺 物	35
A 奈良・平安時代の土器・陶磁器	35
1) 器 種 分 類	35
2) 遺構出土遺物	41
3) 包含層出土土器	44
4) 墨 書 土 器	47
5) 出土土器の特徴と年代	49
B 中世以降の土器・陶磁器	50
C 縄文土器	50
D そ の 他	50
1) 石製品ほか	50
2) 木 製 品	50
5 自然科学分析	52
A 放射性炭素年代測定	52
1) 試 料	52
2) 分析方法	52
3) 結果及び考察	52
B 遺構の機能・用途の検証	53
1) 試 料	53
2) 分析方法	54
3) 結 果	54
4) 考 察	54
C 木製品の樹種	55
1) 試 料	55
2) 分析方法	55
3) 結 果	55
4) 考 察	56

第VI章 五反田遺跡（平成16年調査）

1	グリッドの設定	58
2	基本層序	58
3	遺構	60
A	概要	60
B	遺構各説	60
1)	掘立柱建物	60
2)	柱穴列	61
3)	土坑	62
4)	溝	63
5)	川跡	63
6)	性格不明遺構	64
7)	ピット	65
8)	炭土坑	65
4	遺物	66
A	平安時代の土器・陶磁器	66
1)	器種分類	66
2)	遺構出土土器	70
3)	包含層出土土器	75
4)	刻文のある土器	75
5)	墨書土器	75
B	中世の土器・陶磁器	78
C	近世の陶磁器	78
D	縄文土器	79
E	その他	79
1)	木製品	79
2)	石製品	80
3)	金属製品	81
5	自然科学分析	82
A	樹種同定	82
1)	試料	82
2)	分析方法	82
3)	結果	82
4)	考察	84
B	五反田遺跡出土鍛冶・鋳造関連遺物の金属学的調査	87
1)	いきさつ	87
2)	調査方法	87
3)	調査結果	87
4)	おわりに	92

第VII章 まとめ

1	五反田遺跡出土の平安時代の土器	97
A	9世紀中葉の土器	97
B	10世紀前半の土器	99
2	五反田遺跡における遺構の変遷	101
	《要約》	107
	《引用・参考文献》	110
	《遺構観察表》	111
	《遺物観察表》	119

挿図目次

第1図	台の上・峪ノ上遺跡の位置と周辺の地形	6	第18図	エレベーション図 (B列)	59
第2図	五反田遺跡の位置と周辺の地形	7	第19図	土層柱状図	59
第3図	高田平野の地形分類図と遺跡の位置	8	第20図	掘立柱建物の主軸方位分布	61
第4図	遺跡の位置と周辺の遺跡	11	第21図	器種分類図 (1)	68
第5図	台の上遺跡埋没崖推定図	13	第22図	器種分類図 (2)	69
第6図	峪ノ上遺跡基本層序	18	第23図	墨書土器出土分布図	76
第7図	グリッド設定図及び土層柱状図	28	第24図	木材切片顕微鏡写真	86
第8図	掘立柱建物面積比較	31	第25図	FeO-TiO ₂ 二次元平衡状態図	92
第9図	掘立柱建物の主軸方位分布	32	第26図	椀形鍛冶滓・炉壁片の顕微鏡組織	93
第10図	器種分類図 (1)	36	第27図	炉壁片・鉄塊系遺物・青銅製品の顕微鏡組織	94
第11図	器種分類図 (2)	37	第28図	鑄造鉄器片・羽口片の顕微鏡組織	95
第12図	五反田遺跡 (平成15年調査) 墨書土器出土分布図	48	第29図	EPMA 調査結果 反射電子像 (COMP) 〔70%縮小〕及び定量分析値	96
第13図	各遺構覆土の模式柱状図、試料採取位置 および分析層位	53	第30図	五反田遺跡出土の9・10世紀の土器	98
第14図	SK565 (左)・566 (右) ブロック試料 の状況	53	第31図	五反田遺跡出土の10世紀前半の土器	100
第15図	花粉分析プレパラート内の状況写真	54	第32図	D区における遺構の変遷	102
第16図	木材切片顕微鏡写真	56	第33図	E区における遺構の変遷	103
第17図	グリッド設定図	59	第34図	D区・E区建物の主軸方位分布	104

表目次

第1表	周辺の遺跡	10	第12表	SK50 出土土器器種構成比率	71
第2表	掘立柱建物一覧	31	第13表	SD178 出土土器器種構成比率	72
第3表	SX3 出土土器 器種構成比率	41	第14表	SD435 出土土器器種構成比率	73
第4表	墨書土器一覧	47	第15表	SD435B 出土土器器種構成比率	74
第5表	放射性炭素年代測定結果	52	第16表	墨書土器一覧	77
第6表	暦年較正結果	53	第17表	近世陶磁器一覧	79
第7表	花粉分析結果	54	第18表	出土銭貨一覧	81
第8表	樹種同定結果	55	第19表	樹種同定結果	83
第9表	掘立柱建物一覧表	60	第20表	器種別種類構成	84
第10表	五反田遺跡出土灰釉陶器器種構成比率	69	第21表	供試材の履歴と調査項目	88
第11表	SK179 出土土器器種構成比率	70	第22表	供試材の組成	88

図版目次

図版 1	試掘確認調査の結果
図版 2	グリッド設定図
図版 3	台の上遺跡 全体配置図
図版 4	台の上遺跡 遺構分割図 (1)
図版 5	台の上遺跡 遺構分割図 (2)
図版 6	台の上遺跡 遺構分割図 (3)
図版 7	台の上遺跡 遺構個別図 (1) SK28・SE1・SX1~4・SI1

- 図版 8 台の上遺跡 遺構個別図 (2) SB1 ~ 3
- 図版 9 台の上遺跡 遺物実測図
- 図版 10 峪ノ上遺跡 全体配置図
- 図版 11 峪ノ上遺跡 遺構分割図 (1)
- 図版 12 峪ノ上遺跡 遺構分割図 (2)
- 図版 13 峪ノ上遺跡 遺構個別図 (1) SI1
- 図版 14 峪ノ上遺跡 遺構個別図 (2) SD1 ~ 4
- 図版 15 峪ノ上遺跡 遺構個別図 (3) SD5 · SB1
- 図版 16 峪ノ上遺跡 遺物実測図 (1) SI1 出土遺物
- 図版 17 峪ノ上遺跡 遺物実測図 (2) SI1 出土土器
- 図版 18 峪ノ上遺跡 遺物実測図 (3) SI1 出土土器
- 図版 19 峪ノ上遺跡 遺物実測図 (4) SI1 出土土器
- 図版 20 峪ノ上遺跡 遺物実測図 (5) SI1 · SD1 · SD2 出土土器
- 図版 21 峪ノ上遺跡 遺物実測図 (6) P103 · 包含層出土土器
- 図版 22 峪ノ上遺跡 遺物実測図 (7) 包含層出土土器 · 石製品
- 図版 23 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 全体配置図 (1) D 区
- 図版 24 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 全体配置図 (2) A · B · C 区
- 図版 25 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (1) SX21 · SX660
- 図版 26 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構分割図 (1)
- 図版 27 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構分割図 (2)
- 図版 28 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構分割図 (3)
- 図版 29 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構分割図 (4)
- 図版 30 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (2) SI417 · SI539 · SB1
- 図版 31 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (3) SB1 · SK506 · SK507
- 図版 32 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (4) SB3 · SB4
- 図版 33 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (5) SB5 · SB6
- 図版 34 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (5) SB7 · SB9
- 図版 35 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (7) SB8
- 図版 36 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (8) SB10 · SB11
- 図版 37 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (9) SB12
- 図版 38 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (10) SB13 · SB14
- 図版 39 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (11) SB15 · SB16
- 図版 40 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (12) SB18 · SB19
- 図版 41 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (13) SK508 · SK525 · SK560
- 図版 42 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (14) SK561 · SK565 · SK566 · SX4
- 図版 43 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (15) SX16 · SX3
- 図版 44 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (16) SX113 · SX114 · SX196 · SX526 · SX659
- 図版 45 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺構個別図 (17) SX540 · SX541
- 図版 46 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (1) SI417 · SI539 · SX3 出土土器
- 図版 47 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (2) SX3 出土土器
- 図版 48 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (3) SX3 · SX16 出土土器
- 図版 49 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (4) SX16 · SX526 · SX541 出土土器
- 図版 50 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (5) SX600 · SB4 出土土器
- 図版 51 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (6) SB8 · 9 · 14 · その他のピット出土土器
- 図版 52 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (7) その他のピット · 包含層出土土器
- 図版 53 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (8) 包含層出土土器
- 図版 54 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (9) 包含層出土土器
- 図版 55 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (10) 包含層出土土器

- 図版 56 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (11) 包含層出土土器
- 図版 57 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (12) 包含層出土土器
- 図版 58 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (13) 包含層出土土器
- 図版 59 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (14) 包含層出土土器
- 図版 60 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (15) 包含層出土土器
- 図版 61 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (16) 包含層出土土器・石器・石製品・SX21
- 図版 62 五反田遺跡 (平成 15 年調査) 遺物実測図 (17) 木製品
- 図版 63 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 全体図
- 図版 64 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 全体配置図
- 図版 65 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構分割図 (1)
- 図版 66 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構分割図 (2)
- 図版 67 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構分割図 (3)
- 図版 68 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構個別図 (1) SB1・SB2
- 図版 69 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構個別図 (2) SB3・SB4
- 図版 70 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構個別図 (3) SB5・SB6・柱穴列
- 図版 71 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構個別図 (4) SK50・SK70
- 図版 72 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構個別図 (5) SK95・SK179
- 図版 73 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構個別図 (6) SK347・SK503
- 図版 74 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構個別図 (7) SX66・SX386
- 図版 75 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構個別図 (8) SX387・SK68・SX211
- 図版 76 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構個別図 (9) SD178
- 図版 77 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構個別図 (10) SD176・SD662
- 図版 78 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺構個別図 (11) SD435
- 図版 79 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (1) SK179 出土土器
- 図版 80 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (2) SK179・50・95・503・382・7・347・SX211 出土土器
- 図版 81 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (3) SX280・66・386・444・281・SD713・178 出土土器
- 図版 82 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (4) SD178・SD435B 出土土器
- 図版 83 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (5) SD435A 出土土器
- 図版 84 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (6) SD435A 出土土器
- 図版 85 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (7) SD435A・SB1・3・4 出土土器
- 図版 86 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (8) SB5・6・柱穴列・その他のピット出土土器
- 図版 87 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (9) その他のピット・包含層出土土器
- 図版 88 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (10) 包含層出土土器
- 図版 89 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (11) 包含層出土土器
- 図版 90 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (12) 包含層出土土器
- 図版 91 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (13) 縄文土器・中世・近世の陶磁器・木製品
- 図版 92 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (14) 木製品・和鏡・金属器・銭貨
- 図版 93 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (15) 石製品・椀形鍛冶滓
- 図版 94 五反田遺跡 (平成 16 年調査) 遺物実測図 (16) 鍛冶滓ほか

写真目次

- 図版 95 台の上遺跡 遺跡近景・土層・A区埋没崖・SI1完掘状況ほか
- 図版 96 台の上遺跡 SB3完掘状況・SX1遺物出土状況ほか
- 図版 97 台の上遺跡 古代・中世
- 図版 98 峪ノ上遺跡 遺跡全景・SI1出土土器
- 図版 99 峪ノ上遺跡 遺跡近景・完掘状況・SI1完掘状況ほか
- 図版 100 峪ノ上遺跡 SI1・SD1・SD2ほか
- 図版 101 峪ノ上遺跡 掘立柱建物柱穴ほか
- 図版 102 峪ノ上遺跡 SI1出土土器
- 図版 103 峪ノ上遺跡 SI1出土土器
- 図版 104 峪ノ上遺跡 SI1出土土器
- 図版 105 峪ノ上遺跡 SI1出土土器
- 図版 106 峪ノ上遺跡 SD2・P103出土土器
- 図版 107 峪ノ上遺跡 包含層出土遺物
- 図版 108 五反田遺跡 (平成15年調査) SB8完掘状況・SX16検出状況
- 図版 109 五反田遺跡 (平成15年調査) 土師器焼成遺構出土土器・緑釉陶器 皿
- 図版 110 五反田遺跡 (平成15年調査) 調査区近景・全景・壁土層セクションほか
- 図版 111 五反田遺跡 (平成15年調査) SX21・SX660・C区北壁セクション・SI417カマド検出状況ほか
- 図版 112 五反田遺跡 (平成15年調査) SI417カマド・SI5391遺物出土・SB4・5・10・13周辺ほか
- 図版 113 五反田遺跡 (平成15年調査) P359 (SB3) ・P120セクションほか
- 図版 114 五反田遺跡 (平成15年調査) 掘立柱建物柱穴セクション
- 図版 115 五反田遺跡 (平成15年調査) 掘立柱建物柱穴セクション
- 図版 116 五反田遺跡 (平成15年調査) 掘立柱建物柱穴セクション
- 図版 117 五反田遺跡 (平成15年調査) 土坑セクション・SX16遺物出土状況ほか
- 図版 118 五反田遺跡 (平成15年調査) SX3・SX526・SX540・SX600・SX659
- 図版 119 五反田遺跡 (平成15年調査) SX541・SX4・SX9・P44セクション・緑釉陶器出土状況ほか
- 図版 120 五反田遺跡 (平成15年調査) SI417・SI539・SX3出土土器
- 図版 121 五反田遺跡 (平成15年調査) SX3出土土器
- 図版 122 五反田遺跡 (平成15年調査) SX3・SX16出土遺物
- 図版 123 五反田遺跡 (平成15年調査) SX16・SX526・SX541・SX21出土遺物
- 図版 124 五反田遺跡 (平成15年調査) SX600・SB4・SB8出土遺物
- 図版 125 五反田遺跡 (平成15年調査) SB9・SB12・SB14・その他のピット出土遺物
- 図版 126 五反田遺跡 (平成15年調査) 包含層出土土器
- 図版 127 五反田遺跡 (平成15年調査) 包含層出土土器
- 図版 128 五反田遺跡 (平成15年調査) 包含層出土土器
- 図版 129 五反田遺跡 (平成15年調査) 包含層出土土器
- 図版 130 五反田遺跡 (平成15年調査) 包含層出土土器・陶磁器・石製品・SX21
- 図版 131 五反田遺跡 (平成15年調査) 木製品
- 図版 132 五反田遺跡 (平成16年調査) 遺跡近景 (空中写真)
- 図版 133 五反田遺跡 (平成16年調査) SK95・SK179・P279遺物出土状況
- 図版 134 五反田遺跡 (平成16年調査) 遺跡近景・基本土層・SD435基本土層ほか
- 図版 135 五反田遺跡 (平成16年調査) SD435・SD662・SD178・P2・SK5
- 図版 136 五反田遺跡 (平成16年調査) SX387・SX211・SK70・P279・SK179
- 図版 137 五反田遺跡 (平成16年調査) SX386・SK503・SK50
- 図版 138 五反田遺跡 (平成16年調査) SK50・P210・P261ほか
- 図版 139 五反田遺跡 (平成16年調査) SK753・SX390・SK95ほか

- 図版 140 五反田遺跡 (平成16年調査) P319柱根検出状況・P380ほか
- 図版 141 五反田遺跡 (平成16年調査) SK179・SK50出土土器
- 図版 142 五反田遺跡 (平成16年調査) SK50・95・382・7・503・347・SX211・SX280出土土器
- 図版 143 五反田遺跡 (平成16年調査) SX280・66・386・444・SD713・178出土土器
- 図版 144 五反田遺跡 (平成16年調査) SD178・SD435B・SD435A出土土器
- 図版 145 五反田遺跡 (平成16年調査) SD435A出土土器
- 図版 146 五反田遺跡 (平成16年調査) SD435A出土土器
- 図版 147 五反田遺跡 (平成16年調査) SB1・3・4・5・6・柱穴列・その他のピット出土土器
- 図版 148 五反田遺跡 (平成16年調査) その他のピット・包含層出土土器
- 図版 149 五反田遺跡 (平成16年調査) 包含層出土土器
- 図版 150 五反田遺跡 (平成16年調査) 包含層出土土器・陶磁器
- 図版 151 五反田遺跡 (平成16年調査) 中世の陶磁器・木製品・和鏡・渡来銭・銭貨・金属製品
- 図版 152 五反田遺跡 (平成16年調査) 石製品 (砥石・鋼滓・水晶玉ほか)
- 図版 153 五反田遺跡 墨書・刻書土器 (1)
- 図版 154 五反田遺跡 墨書・刻書土器 (2)

第 I 章 序 説

1 調査に至る経過

北陸新幹線は、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道である。長野市・上越市・富山市小浜市を經由して東京都と大阪市を結ぶ総延長600kmのうち、高崎・長野間は平成9年10月に開業している。その後、長野市を基点とし、長野県飯山市を経て上越市に至る長野・上越間の延長60kmは、昭和47年に基本計画が、昭和48年に整備計画が決定され、平成10年3月に長野・上越間の工事実施計画が認可された。これを受けて、鉄建公団北陸新幹線建設局と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。

平成10年9月、鉄建公団から分布調査の依頼を受けた県教委は、平成10年11月に調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の具体的な規模・内容等は不明であり、今後、試掘確認調査を実施して取扱いを判断する必要があると回答した。平成14年3月鉄建公団から上越市内（上新工区7,270m²）及び板倉町内（現上越市板倉区：米増・熊川新田間17,500m²）の試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。平成14年6月に調査した結果、新遺跡である峪ノ上遺跡1,160m²と周知遺跡である台の上遺跡980m²、五反田遺跡5,680m²、仲田遺跡5,100m²について本発掘調査が必要であると回答した。

試掘確認調査の結果を受けて、鉄建公団は県教委に早期の本発掘調査を実施するよう要望した。その結果、仲田遺跡について平成14年8月、鉄建公団から県教委が受託し、9月9日から埋文事業団が本発掘調査に着手した。また、台の上遺跡、峪ノ上遺跡、五反田遺跡については平成15年3月、鉄建公団から県教委が受託し、台の上遺跡、峪ノ上遺跡は4月18日から、五反田遺跡は5月9日から埋文事業団が本調査に着手した。

なお、周知の五反田遺跡の東側に隣接する県道三和・新井線の東側部分（2,240m²）について、平成15年3月試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。平成15年4月に調査した結果、1,920m²について本発掘調査が必要であると回答した。試掘確認調査の結果を受けて、平成16年度本発掘調査実施した。

2 調査と整理作業

A 試掘確認調査

1) 台の上・峪ノ上遺跡

試掘確認調査は、平成14年6月12日～6月14日に実施した。上越市内上新工区7,270m²を調査対象とし、171.97m²（確認率2.4%）について調査した。調査は、対象地に任意に確認トレンチを設定し、重機（バックホー）及び人力で徐々に掘り下げ、遺構・遺物の有無を精査した。

調査の結果、峪ノ上遺跡に係る1～3トレンチ及び台の上遺跡に係る8～10トレンチにおいて古墳時代後期末から古代の遺物・遺構が検出された。以上の点から峪ノ上遺跡1,160m²、台の上遺跡980m²について本発掘調査が必要と判断された。

2) 五反田遺跡

試掘確認調査は、平成14年6月3日～6月11日に実施した。旧板倉町内米増～熊川新田間17,500m²を調査対象とし、338.45m²（確認率1.9%）について調査した。調査は、対象地に任意に確認トレンチを設定し、重機（バックホー）及び人力で徐々に掘り下げ、遺構・遺物の有無を精査した。

調査の結果、五反田遺跡に係る1～6トレンチにおいて古代の遺構・遺物が、仲田遺跡に係る15～20トレンチにおいて古代及び中世の遺構・遺物が検出され、五反田遺跡5,680m²、仲田遺跡5,100m²について本発掘調査が必要と判断された。なお、五反田遺跡に係る1～6トレンチからは、溝・柱穴等の遺構が多数検出された。

なお、五反田遺跡の東側部分の試掘確認調査は、平成15年4月14日・15日に実施した。2,240m²を調査対象とし、47m²（確認率2.1%）について調査した。調査は、対象地に任意に確認トレンチを設定し、重機（バックホー）及び人力で徐々に掘り下げ、遺構・遺物の有無を精査した。

調査の結果、3トレンチすべてで古代の遺構・遺物が検出され、1,920m²について本発掘調査が必要と判断された。なお、3トレンチからは、多量の遺物や多数の柱穴が検出されている。

B 本発掘調査

1) 台の上遺跡

平成15年4月14日から重機による表土剥ぎを開始した。調査員の指示により慎重に掘下げた。その結果、遺跡の旧地形は南側から北側に向かって穏やかに傾斜していることが判明した。用水や農道によって3か所に別れた調査区を、便宜上、西側（上新バイパス側）からA・B・C区と命名した。

4月23日より人力による包含層掘削を開始した。調査区内の四周に排水施設を兼ねた幅50cmのトレンチを掘削して、土層を確認しながら掘り始めた。その結果、調査区全体のかなりの範囲に攪乱が及んでいることが判明し、遺物包含層は局所的にしか存在しないことが分かった。さらに、東西方向に延びる落ち込みが検出され、トレンチ調査の結果、崖地形が埋没していることが判明した。崖の埋没後に古代の遺構確認面が形成されていることから、少なくとも奈良時代以前にさかのぼる地形であることが推測された。

出土した遺物は、表土除去の際は攪乱が激しかったため大グリット単位で、包含層中は小グリット単位で取り上げた。5月29日に遺構を完掘、6月3日ローリングタワー上からの遺跡全景写真撮影を行い、4日から現地測量を開始した。その後12日に調査を終了し、鉄建公団に引き渡した。

2) 峪ノ上遺跡

平成15年4月15日から台の上遺跡調査と平行して調査を開始した。試掘確認調査の結果より、表土の厚さが薄いと判断されたため、ホソを使って人力による表土除去を行った。併せて、調査区内四周に土層観察用と排水施設を兼ねた幅50cmの開渠を掘削した。その結果、台の上遺跡に較べて堆積状況は安定し、ほぼ平坦な地形であることが確認できた。農道を挟んで2か所に別れた調査区を、便宜上西からA区・B区と命名した。遺構・遺物の分布はB区に集中しており、また、ほとんどの遺物が遺構の覆土から出土した。B区の東半分ほどは一段低くなっていた。何か所かで斜面部の草を刈り、土層の確認を行ったが包含層は存在しなかった。斜面の下は溜池が作られており、数か所深掘りしてみたが包含層は確認できず、遺物の出土もなかった。よって、斜面から一段低い部分については本調査対象から除外した。6

月24日に空撮を行う。6月25日から29日にかけて現地測量及び竪穴住居_(S11)のカマド断ち割り調査を行う。30日に調査を終了し鉄建公団に引き渡した。

3) 五反田遺跡 (H15年調査)

平成15年5月20日から台の上・峪ノ上遺跡の発掘調査と平行して、五反田遺跡の発掘調査を開始した。D区西側より重機による表土剥ぎを進めた。調査員の指示により慎重に掘り下げた。農道等によって4カ所に分かれた調査区を便宜上東側からA区・B区・C区・D区と命名した。

6月5日より一部作業員を投入し、D区西側から包含層掘削を開始する。ホソと竹べらを併用しての作業であったが、粘性が極めて強い土質であったことと、暗渠排水がうまく機能しないことも重なり作業は難航した。6月24日より作業員全員を投入し包含層掘削を行った。土層観察・遺構観察用畦と排水施設を兼ねた開渠を大グリッドごと10m間隔で掘削した。その結果から、遺構はD区中央部の10～13グリッドに集中していることが判明した。開渠の壁面からⅢ層の中頃から掘込まれた遺構の存在を確認したが、平面では遺構の覆土と包含層との区別が難しく、最終的にはⅣ層上面まで掘削して遺構精査を行った。

A区は資材置き場として利用しており、高さ2mあまりの盛土がなされていた。調査に当たっては、矢板を打設して土留めを行い、その内部を調査対象とした。しかし、盛土中に礫や廃材に加えて、土中に多くの礫が含まれていたため、当初計画のとおり矢板を打設することができなかった。そこで短い矢板を使用し、さらに自立式から腹起こし、切梁工法に変更した。盛土を除去したところ、調査区を南北に横断するように落ちこみのプランが確認できた。一部を試掘して内部を確認した結果、旧河川が埋没していることが判明した。矢板設置の工法上、矢板打設か所から3～4m逃げる必要があったため、掘削は幅4m、長さ26mのトレンチ内のみ限定せざるを得なかった。旧表土から1.7m下で河床を検出し、「西」墨書土器と板材や柱材などわずかながら遺物も出土した。セクション図を作成して7月28日に調査を終了した。B区とC区は、A区及びD区東端の調査結果を受けて、埋没河川の存在を想定して調査を進めた。トレンチ及び深掘坑を設けて土層を観察したところ、かなりの範囲に攪乱が及び腐植土層が存在していることが確認された。また、遺物の出土がほとんどなかったことから、セクション図のみ作成のうえ、8月一杯で終了した。10月11日には一般の方を対象に現地説明会を開催し、地元板倉町の方を中心に約350名の参加を得た。

10月に入り秋雨対策としてテントを調査区内に設営、遺構発掘調査を進めた。10月31日に航空写真撮影を行い、11月11日に現地調査を終了し、鉄建公団に引き渡した。

その後現地において、図面整理、各種台帳整理、遺物整理を行い、11月26日完全に撤収した。

4) 五反田遺跡 (平成16年調査)

平成16年4月13日から重機による表土剥ぎを開始した。住宅跡であったためコンクリートブロック、水道管などの基礎部分の埋設物が多く作業は難航した。調査区中央の用水路を境に便宜上、山側を上段、平野側を下段と命名した。5月7日より作業員全員を投入し、下段西側から包含層掘削を開始した。山の湧き水の流入が激しかったため、土層観察用と排水施設を兼ねた開渠を調査区の東西南側、三辺にコの字状に掘削し、電動ポンプにて強制排水を実施した。その結果から、遺構は下段の31～34グリッドに集中していること、上段の山(東)側はほとんどが攪乱もしくは削平されており、包含層が残存していないことが判明した。遺物のほとんどはⅢ層黒色粘質土から出土しており、部分的にⅣ層とⅢ層の境に灰色粘

3 調査体制

質土（IV a層）も確認されたが、最終的にはIV a層を掘削してIV b層上面で遺構精査を行った。調査は、県道三和・新井線に隣接する下段の最も海側から順次、山側に向かって進めていった。中央に位置する既設の用水路は、調査時でも使用しており撤去することは出来なかったため、その部分（以下、用水下調査区）のみ残し、7月8日に航空写真撮影を行い上・下段の発掘調査を一部の作業を除いて終了した。7月20日には、鉄道運輸機構が用水路の付け替え工事を開始した。同時に、残る用水路下調査区の表土を重機で取り除いた。7月23日には付け替え工事が終了し、用水下調査区の発掘調査を開始した。7月29日には地元板倉町の方を対象に遺物説明会を開催し、約120名の参加を得た。8月5日にはローリングタワーを用いて、用水下調査区の完掘写真を撮影し、翌8月6日には全ての現地調査を完了し、鉄道運輸機構に引き渡した。8月18日より、柿崎町の整理事務所において、図面整理、各種台帳整理、遺物整理を行い、平成17年3月30日完全に撤収した。

3 調査体制

試掘調査

平成14（2002）年度

調査期間 台の上・峪ノ上遺跡 平成14年6月12日
～6月14日

五反田遺跡 平成14年6月3日～
6月11日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括	黒井 幸一（事務局長）
管理	長谷川 司郎（総務課長）
庶務	高野 正司（総務課主任）
調査総括	岡本 郁栄（調査課長）
調査指導	高橋 保（調査課国土交通省・鉄建公担当課長代理）
調査担当	尾崎 高宏（調査課文化財調査員）
調査職員	田中 一穂（調査課嘱託員）

平成15（2003）年度

調査期間 五反田遺跡 平成15年4月14日
～15日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括	黒井 幸一（事務局長）
管理	長谷川二三夫（総務課長）
庶務	高野 正司（総務課主任）
調査総括	藤巻 正信（調査課長・鉄建公団担当）
調査指導	藤巻 正信（調査課長・鉄建公団担当）
調査担当	石川 智紀（調査課主任調査員）
調査職員	片岡 千恵（調査課嘱託員）

本発掘調査

平成15（2003）年度

調査期間 台の上遺跡 平成15年4月14日～6月12日
峪ノ上遺跡 平成15年4月15日～6月30日

五反田遺跡 平成15年5月20日～11月11日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括	黒井 幸一（事務局長）
管理	長谷川二三夫（総務課長）
庶務	高野 正司（総務課主任）
調査総括	藤巻 正信（調査課長）
調査指導	藤巻 正信（調査課長）
調査担当	渡邊 裕之（調査課主任調査員）
調査職員	加藤 義孝（調査課主任調査員）
	辻 範朗（同上）
	大島 通夫（同上）
	山田 秀樹（同上）

平成16（2004）年度

調査期間 五反田遺跡 平成16年4月13日～8月6日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括	黒井 幸一（事務局長）
管理	長谷川二三夫（総務課長）
庶務	高野 正司（総務課主任）
調査総括	藤巻 正信（調査課長）
調査指導	田海 義正（本発掘調査担当課長代理）
調査担当	渡邊 裕之（調査課主任調査員）
調査職員	辻 範朗（同上）
	相羽 重徳（(株)古田組調査員）

4 整理・報告体制

平成15年（2003）年度

整理期間 平成15年12月1日～平成16年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

整 理 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括	黒井 幸一（事務局長）
管 理	長谷川二三夫（総務課長）
庶 務	高野 正司（総務課主任）
整理総括	藤巻 正信（調査課長）
整理指導	
整理担当	渡邊 裕之（調査課主任調査員）
整理職員	加藤 義孝（調査課主任調査員） 辻 範朗（ 同 上 ） 大島 通夫（ 同 上 ） 山田 秀樹（ 同 上 ）

平成16年（2004）年度

整理期間 五反田遺跡 平成16年8月10日～

平成17年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

整 理 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括	黒井 幸一（事務局長）
管 理	長谷川二三夫（総務課長）
庶 務	高野 正司（総務課主任）
整理総括	藤巻 正信（調査課長）
整理指導	田海 義正（本発掘調査担当課長代理）
整理担当	渡邊 裕之（調査課主任調査員）
整理職員	辻 範朗（ 同 上 ） 相羽 重徳（(株)古田組調査員） 橋 詰 てるみ（(株)古田組） 市村 英久代（ 同 上 ） 安原 文子（ 同 上 ） 阿部 はるか（ 同 上 ）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

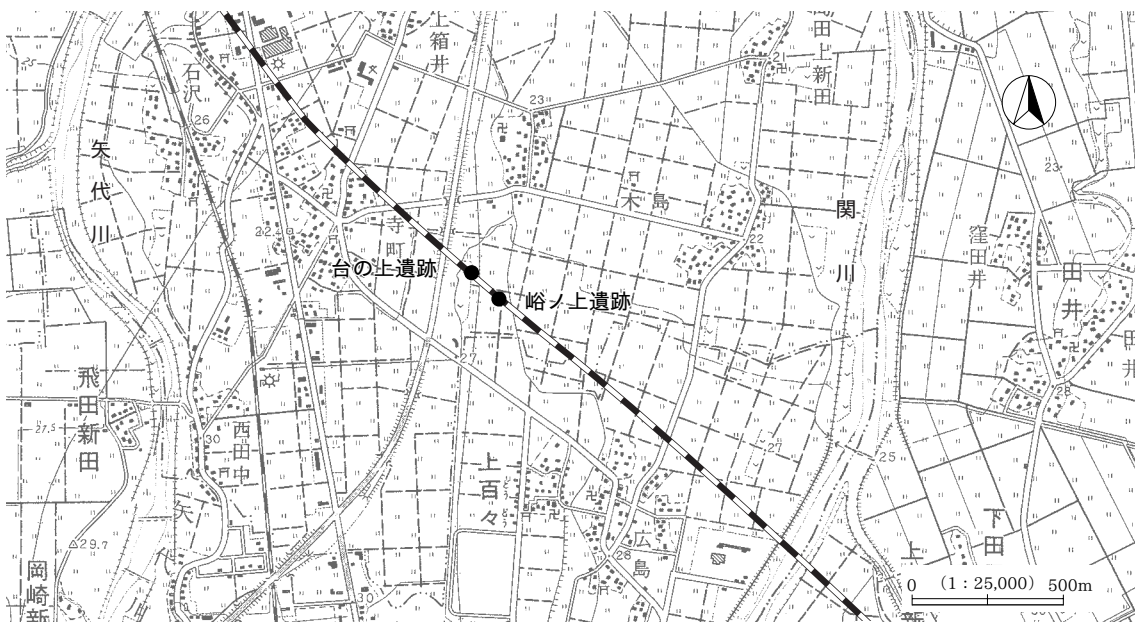
A 台の上遺跡・峪ノ上遺跡

台の上遺跡・峪ノ上遺跡は、ともに国道18号寺町交差点付近の東側、上越市大字木島字峪ノ上に所在する。両遺跡は約90mの距離に近接しており、立地や時代など共通点が多い。

両遺跡が所在する上越市は、新潟県の南西部に広がる高田平野を中心に市域が広がっている。平野北部において、海岸線と平行するように潟町砂丘が発達する他は、三方を山地（米山山地・関田山地・西頸城山地）で囲まれた地理的環境にある。高田平野には、これらの山地から多くの河川が流入している。上越地方最大の河川であり、西頸城山地を水源とする関川は、同じく西頸城山地から流れる矢代川とともに平野南部に広大な扇状地を発達させている。さらに、関田山地から関川に注ぎ込む保倉川、飯田川、櫛池川、別所川、大熊川も丘陵地から平野部への出口で、連続した扇状地を発達させている。

高田平野は、階段状の幾つかの面に分かれていることが明らかになっている。それらは、低い面から順に、関川氾濫原面・関川面・高田面の3面に区分され、高田面が最も大きな比率を占めている。関川面、関川氾濫原面は、関川が著しく大規模に蛇行しながら上位面である高田面を開析した跡であると考えられている。

両遺跡は、関川左岸の段丘上に位置し、標高は23m前後を測る。両遺跡が存在するのは段丘の東端にあたり、関川面との段差（比高約2m強）がはっきりと確認できる。「峪ノ上」という字名は、この地形に由来しているのではないかと推測される。この周辺は、西頸城山地と関田山地の山陵の一部が形成した溪口が高田平野へと大きく開口する地点にあたり、古くから北陸・越後・信濃とのつなぐ交通の要衝とされている。



第1図 台の上・峪ノ上遺跡の位置と周辺の地形〔原図 国土地理院「新井」1/25,000〕

B 五反田遺跡

五反田遺跡は、高田平野の南東縁に位置する上越市板倉区（旧中頸城郡板倉町）大字米増字五反田44番地ほかに所在する。

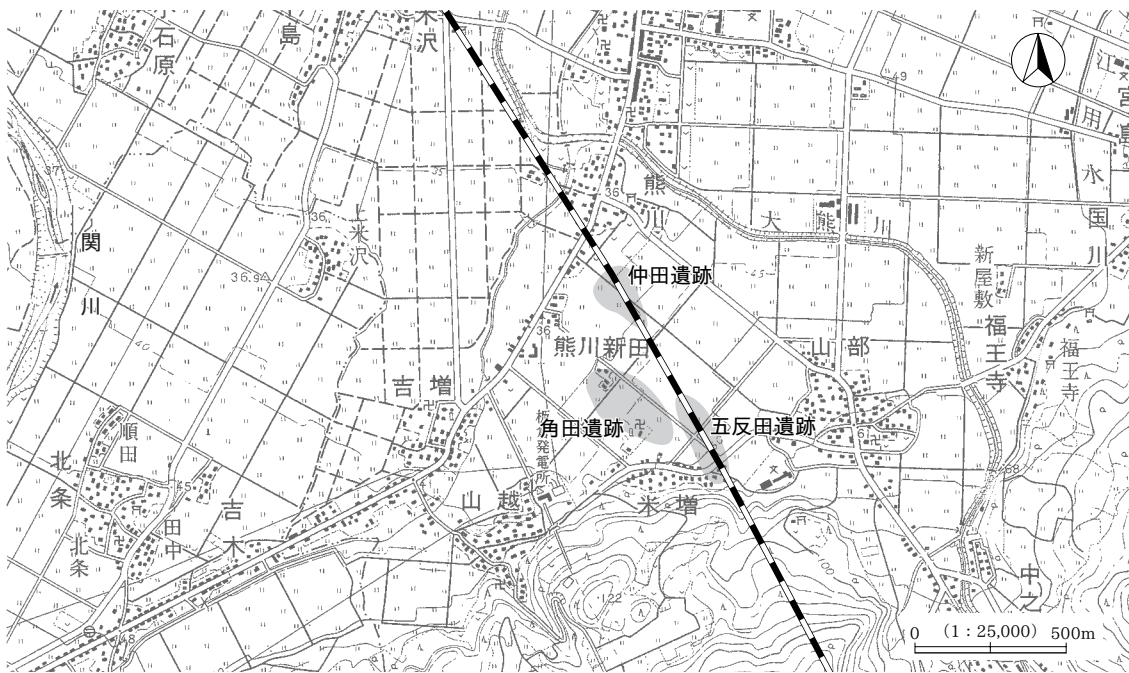
板倉区の区域は北西・南東方向に延びており、高田平野南部・東頸城丘陵の南端部付近・関田山地の3つの地形におよぶ。関田山地にかかる地域が区域の3分の1弱を占め、分水界が長野県飯山市との境界となっている。丘陵の地域は町域の3分の1強を占め、北の清里村と南の新井市との境界は、関田山地から北西に延びる丘陵の尾根を通る。高田平野の地域は3分の1弱である。板倉区では、多くの集落が高田平野の沖積低地の南部に位置している。

本遺跡は、関川によって形成された高田段丘面に位置し、標高44～46mを測る。高田面を見ると、ほとんどがこの地域の傾斜変換点である標高30m以上の地域に含まれ、扇状地によって占められている。しかし、大熊川、別所川などが、比較的狭い範囲で流れているので、地形図の等高線は扇状地特有の同心円上の配列はしておらず、連続した扇状地を発達させている。

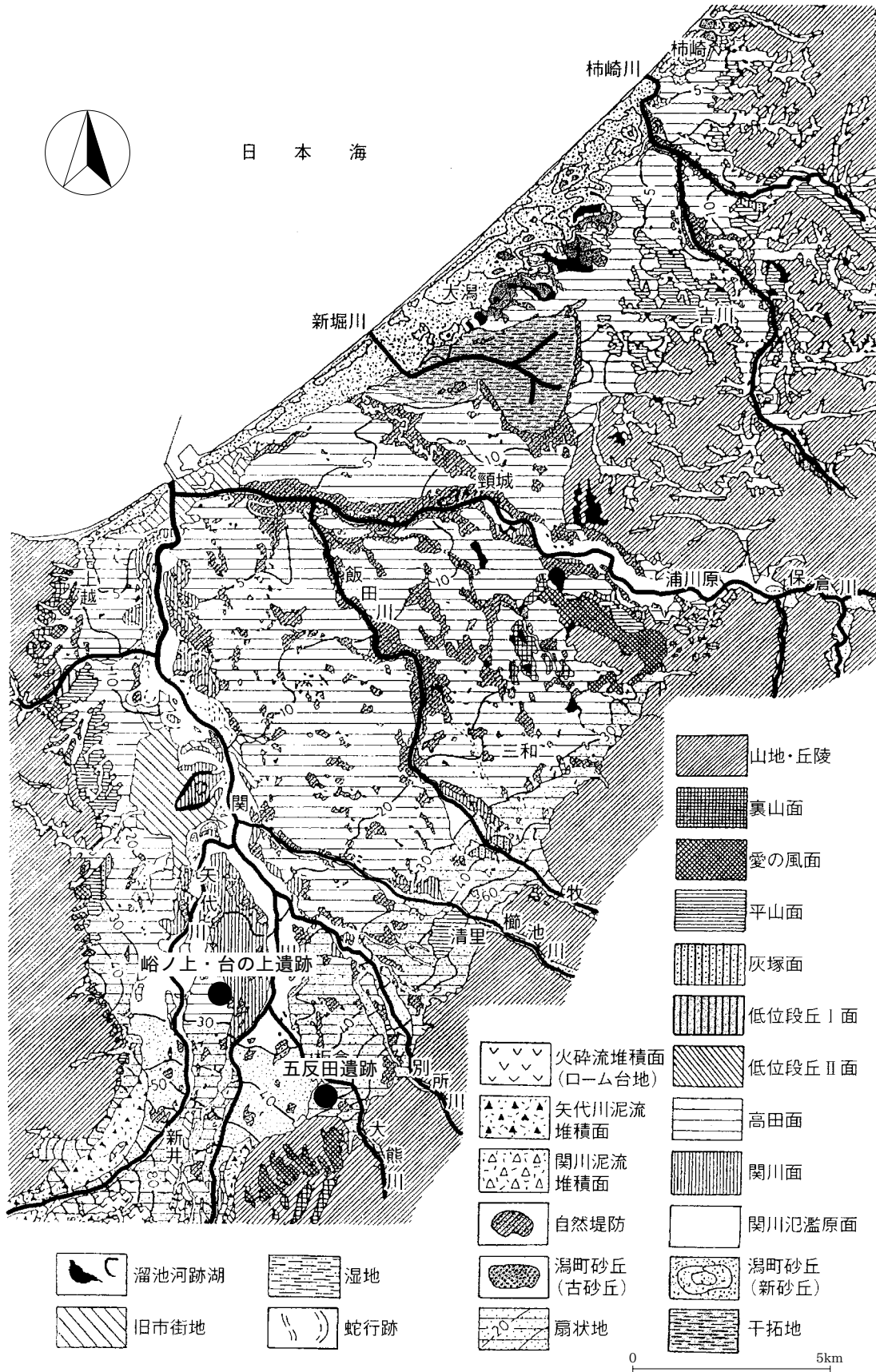
本遺跡が所在する米増集落は、大熊川が作出した扇状地の南端（大熊川左岸）に位置する。集落の南はなだらかな丘陵地帯で、集落の背後を走るように流れている上江用水を越えると、田圃や畑が広がっている。そこから南東約1kmほどの丘に、上越地方では初めてといわれる縄文時代の動物の落とし穴が、数多く発見された峰山遺跡がある。また、集落より200mほど真北に恵信尼の寿塔（角田遺跡）がある。本遺跡は、集落から見て北東側に広がる水田耕地内に位置する。

米増という地名は、江戸期から明治22（1603～1889）年の村名である。増の意味は、まします（米が有る）、増加・増殖、升形・区画等の意味があるようである。一方でヨネマスは砂地の意という説明もある。

五反田という字名は、天和元（1683）年閏年5月の越後国頸城郡米増村御検地名寄帳に記載されている。その由来は定かではないが、板倉町内だけでなく県内や全国にもよくある地名であり、それらと同様に5反の田圃という意味であろう。



第2図 五反田遺跡の位置と周辺の地形 [原図 国土地理院「新井」1/25,000]



第3図 高田平野の地形分類図と遺跡の位置
 (原図 上越市史編さん委員会『上越市史』資料編1 自然)

2 周辺の遺跡

頸城平野とその周辺の山地と丘陵に広がる古墳・古代の遺跡分布は、次に示すとおりである。

A 古墳時代

中・後期の古墳の分布は頸城平野を挟んだ南東と南西山麓に認められる。南東の古墳群は関田山脈から流れ出る飯田川・櫛池川によって形成された扇状地を中心にして分布する。上越市（旧清里村）の菅原古墳群（55）は、明治時代には108基を数えた円墳を主体とした後期群集墳であるが、現在は28基が残る。石室が露出した古墳もあり、横穴式石室であることが分かる。出土品は直刀・轡・鏑・鉄鎌・帯の鉸具・勾玉・管玉・水晶切子玉・ガラス小玉などがある。そのなかで菅原古墳31号墳は全長30mの前方後円墳で県史跡に指定されている。上越市（旧牧村）宮口古墳群（57）・（旧三和村）水科古墳群（58）も後期末の群集墳で、昭和50年代の圃場整備事業によって発掘調査が行なわれ、良好な保存状態から国史跡に指定されている。宮口古墳群の11号墳からは、金銅装円頭太刀が出土している。水科古墳群の21号墳は、本古墳群では最大の直径10.5mの葺き石を持つ横穴式石室の古墳である。主体部の奥壁に3振りの直刀が立て掛けられ、床面には左右の壁際に刀子2振りが置かれ、金環2点・銀環1点、須恵器有台椀1点も副葬されていた。両古墳群とも馬具の出土はない。

西南部の古墳群は、妙高市（旧新井市）から上越市にかけて、矢代川左岸の南葉山山麓の先端部から水田に分布する古墳群で、小丸山（60）・梨ノ木（61）・谷地林（62）・天神堂（63）・観音平（64）・青田（65）・稲荷山（66）・南山（67）・黒田（68）・灰塚（69）と連続する。

黒田古墳群は上信越自動車道建設に際して、23基のうち9基が平成8・9年に発掘調査された。2号墳は埋葬施設が2基あり、箱形木棺直葬で鉄刀・鉄剣のほか鉄斧・鑿・ヤリガンナなどの鉄製農工具類のほか白玉・竪櫛が出土した。工具類の多さに特色がある。3号墳の第1主体部は割竹形（舟形）木棺を持ち、調査したうち最も古相を呈す。古墳群の時期は中期から後期初頭と考えられる〔尾崎2002〕。これらの古墳群を造成した集落の実態は、南葉山山麓ではほとんど調査例がなく不明である。頸城平野の北寄りには、津倉田遺跡（18）、一之口遺跡（32）、山畑遺跡（34）など、竪穴住居を主体とする後期の集落が発掘調査されているが、これらの集落周辺には古墳群は存在しない。南原遺跡（73）は滑石製石製模造品の玉作り工房が検出された。出土遺物は勾玉・白玉・有孔円盤とその未成品及び工具の石製弾み車・砥石がある。共伴遺物のうち須恵器はTK47期に並行することから、6世紀前後の遺構と見られる〔大平2001〕。

B 古 代

遺跡の分布を見ると、旧板倉町の東頸城丘陵端部と別所川や大熊川の扇状地に集中する。また、飯田川や旧頸城村の旧保倉川自然堤防上にも多くの遺跡が存在する。

板倉の地名は平安時代の和名抄にあり越後国頸城郡10郷の一つで現在の町域に比定されている。多くの遺跡のなかでも、大字田井字国分寺の田井遺跡（2）から古代の土器が多く採集され、字名からも国分寺の存在が推測された〔平野1969〕。しかし、同年の農業基盤整備による確認では、瓦が1点もないことや礎石を疑わせる石の出土はなく国分寺の存在は難しいとみられる。関川左岸の妙高市北部も栗原遺跡（39）・倉田遺跡（40）・杉明遺跡（41）・月岡遺跡（42）など古代の遺跡が多い。栗原遺跡は、8世紀前葉

2 周辺の遺跡

に主体をおく大規模な掘立柱建物群や「郡」墨書の須恵器蓋などから郡衙跡と推定されている。

関川と櫛池川の合流する付近には、海獣葡萄鏡が出土した子安遺跡（26）や8世紀前半から10世紀にかけての大規模な掘立柱建物跡などが検出された下新町遺跡（27）・今池遺跡（28）がある。今池遺跡周辺は国衙の有力候補地とされる。本長者原廃寺跡（29）では、大正時代に塔礎石とみられる巨石が出土した。上越市教委の確認調査〔小島ほか1984〕では、一辺14mの方形の版築状遺構が検出された。以前の圃場整備で上部が壊れているために、礎石は確認できなかったが、主軸方向はほぼ南北で確認されている条里の方向と一致する。国分二寺跡のいずれかの可能性が高いと見られ、今後の調査が期待される。

榎井A遺跡（5）からは、「北館」・「北」・「荘」の墨書土器、農事における荘園労働の大規模な役夫動員の様子が窺われる「以四月五日御田阿口夫事」と記された木棺が検出され、荘園の可能性が高いと推定される〔小林1998〕。8世紀後半に成立した等仙寺遺跡（16）からは竪穴住居跡が9棟、掘立柱建物跡6棟、井戸跡が4基検出された。出土遺物には生活用具が多く、土師器の椀・壺や須恵器の杯・壺等のほか、土器底に「山」・「×」などを書いた墨書土器、須恵器の硯等があり、一棟の竪穴住居跡からは羽釜が出土した。

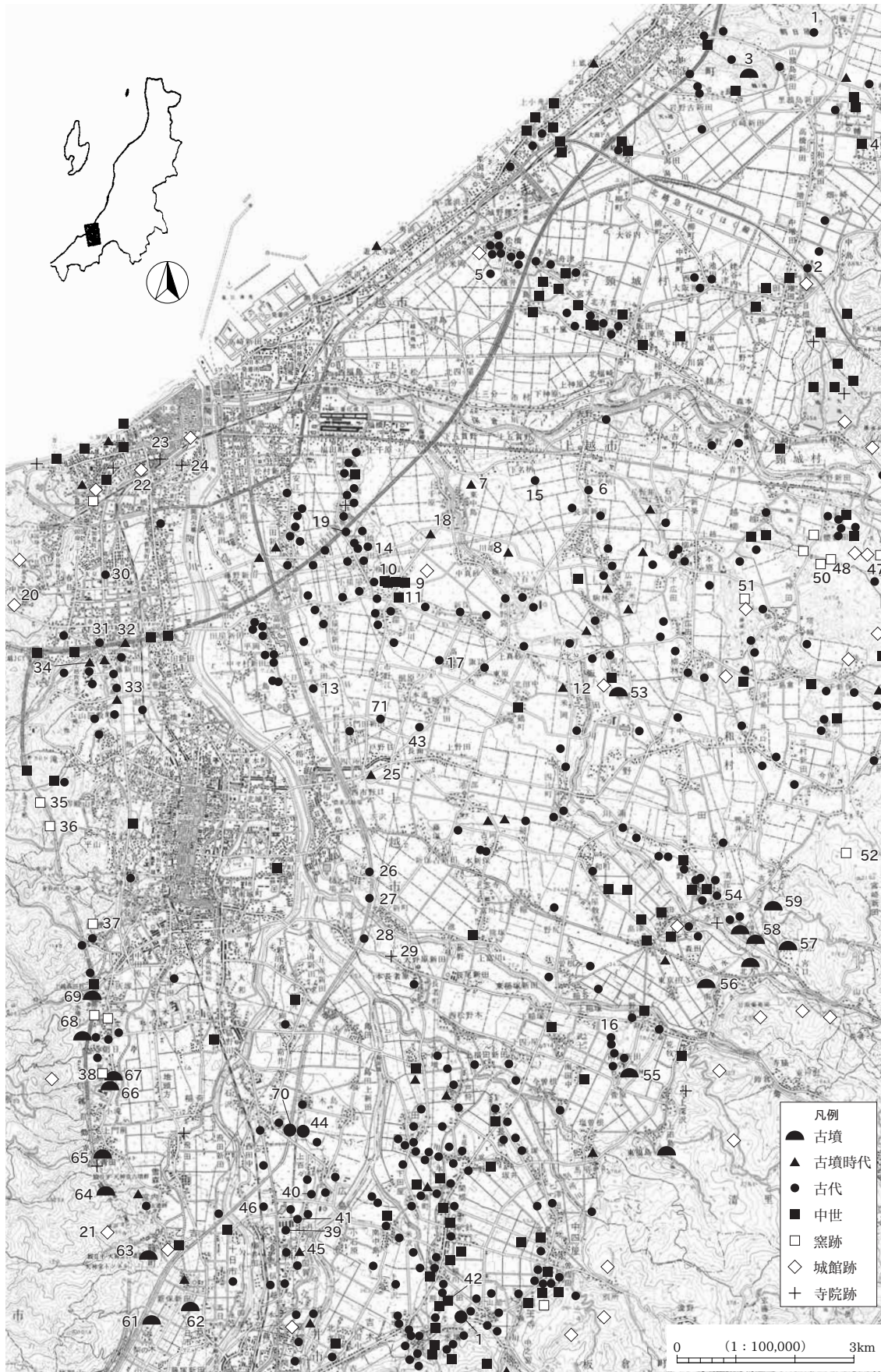
これらの遺跡に須恵器を提供したと考えられる窯は、平野西側の丘陵では下馬場古窯跡群（38）・大貫（36）・滝寺古窯跡群（35）・向橋窯跡（37）などが推定される。なかでも下馬場古窯跡群は7世紀末の操業とみられ、県内でも最古に属す。向橋窯跡の発掘調査はないが須恵器のほか瓦を焼いており、国分寺との関係が注目される。頸城平野の東辺部の丘陵裾には、8世紀から9世紀初頭にかけての窯跡として、本郷新溜池古窯跡（51）・末野古窯跡（49）・神田長嶺1号古窯跡（48）・日向古窯跡（52）などが存在する。これらの窯跡の時期と五反田遺跡の主体となる時期が一致することに加えて、須恵器胎土の観察から東側丘陵の窯産の須恵器が供給されたことが予想される。

五反田遺跡に近い山部集落の角田遺跡（72）からは、昭和50年代に「厨」の墨書土器が出土し、本遺跡の掘立柱建物群との相関に注目したい。北陸新幹線関連で調査した仲田遺跡（42）は、五反田遺跡とは同じ埋没河川の流域にある。その旧小熊川の川底から「里」・「南」の墨書土器が出土した。五反田遺跡からは人名とみられる「兼公」が5点、「万」・「豊」が2点、「西」・「寺」・「稲人」・「内」が出土しており、仲田遺跡や角田遺跡との関連性が窺える。

五反田遺跡は頸城平野のなかでも、古代の遺跡密度が特に高い地域に含まれる。遺構・遺物から見ても、いくつかの遺跡は一般集落と明らかに異なる内容を示している。今後、各遺跡の関係を精査してゆく必要がある。

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	五反田遺跡	古代	20	春日山城跡	中世	39	栗原遺跡	古代	58	水科古墳群	古墳後期
2	田井遺跡	古代	21	鮫ヶ尾城跡	中世	40	倉田遺跡	古代	59	水吉古墳群	古墳後期
3	丸山古墳	古墳前期	22	御館跡	中世	41	杉明遺跡	古代	60	小丸山古墳群	古墳後期
4	樋田遺跡	中世	23	安国寺跡	中世	42	仲田遺跡	古代・中世	61	梨ノ木古墳群	古墳後期
5	榎井A遺跡	古代	24	伝至徳寺跡	中世	43	三角田遺跡	古代	62	谷地林古墳群	古墳後期
6	前田割遺跡	古代	25	中島廻り遺跡	古墳・奈良	44	略ノ上遺跡	古墳・古代	63	天神堂古墳群	古墳中期
7	北割遺跡	古墳	26	子安遺跡	弥生～中世	45	月岡遺跡	古墳・古代	64	観音平古墳群	古墳中期
8	前田遺跡	古墳・古代	27	下新町遺跡	弥生～古代	46	東沖遺跡	古代	65	青田古墳群	古墳後期
9	横曽根I遺跡	中世	28	今池遺跡	古墳・古代	47	今熊窯跡(Ⅱ)	平安	66	稲荷山古墳群	古墳後期
10	横曽根II遺跡	中世	29	本長者原廃寺	古代	48	長峰窯跡1号	平安	67	南山古墳群	古墳後期
11	横曽根III遺跡	中世	30	四ツ屋遺跡	古代	49	末野窯跡	平安	68	黒田古墳群	古墳中期
12	下割遺跡	古墳～中世	31	八反田遺跡	古墳～中世	50	長峰窯跡2号	奈良・平安	69	灰塚古墳	古墳後期
13	越前遺跡	古代	32	一之口遺跡	古墳～中世	51	新溜池窯跡	奈良	70	台の上遺跡	古代
14	岡原・大野遺跡	古代	33	江向遺跡	古代・中世	52	日向窯跡	奈良	71	狐宮遺跡	古代
15	下名柄古屋敷遺跡	古墳～中世	34	山畑遺跡	古代	53	大野遺跡	古墳中期	72	角田遺跡	古代
16	等仙寺遺跡	古代	35	滝寺古窯跡群	古代	54	法花寺遺跡	古代	73	南原遺跡	古墳
17	保坂遺跡	古代・中世	36	大貫古窯跡群	古代	55	菅原古墳群	古墳後期			
18	津倉田遺跡	古墳・奈良	37	向橋古窯跡	古代	56	高土古墳群	古墳後期			
19	宮野遺跡	平安	38	下馬場古窯跡群	古代	57	宮口古墳群	古墳後期			

第1表 周辺の遺跡



第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡

(国土地理院発行「高田東部」「高田西部」「飯山」「妙高山」「柿崎」 1 : 50,000を縮小)

第Ⅲ章 台の上遺跡

1 グリッドの設定 (図版2・3)

台ノ上遺跡の調査は、新幹線法線内の幅13m、長さ83mの細長い範囲を対象とした。同じ法線上に存在する峪ノ上遺跡は東方約90mに位置する。

グリッドを設定するにあたっては、新幹線法線が緩やかにカーブする地点に調査区があることから、法線のセンターラインを活用することができなかった。そのため、法線脇に設けられた工事用基準点のうち、本遺跡と峪ノ上遺跡の両遺跡をほぼ直線的に見通す位置にあるT8（世界測地系 $X=117945.698$ 、 $Y=-20538.008$ ）とT13（ $X=118103.669$ 、 $Y=-20719.671$ ）を結んだラインを東西方向の主軸として、2遺跡共有のグリッドを設定した。グリッド南北方位の主軸は真北から 138° 西偏している。なお、調査区内の主な座標点は次のとおりである。17A（ $X=118395.415$ 、 $Y=-20932.545$ ）、27A（ $X=118467.595$ 、 $Y=-21015.549$ ）。

グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分したものである（図版2）。大グリッドの呼称は、東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットとし、両者の組み合わせにより表示した。例えば、グリッド設定の基準杭であるT8の北側の区画は「2A」とした。小グリッドは1～25の算用数字で表し、南西隅を1、北東隅を25として、「2B15」のように呼称した。また、調査区が農道や用水路によって区切られていたことから、便宜上、調査区西側からA区・B区・C区の3区に分けて調査をおこなった。

2 層 序 (図版7・95)

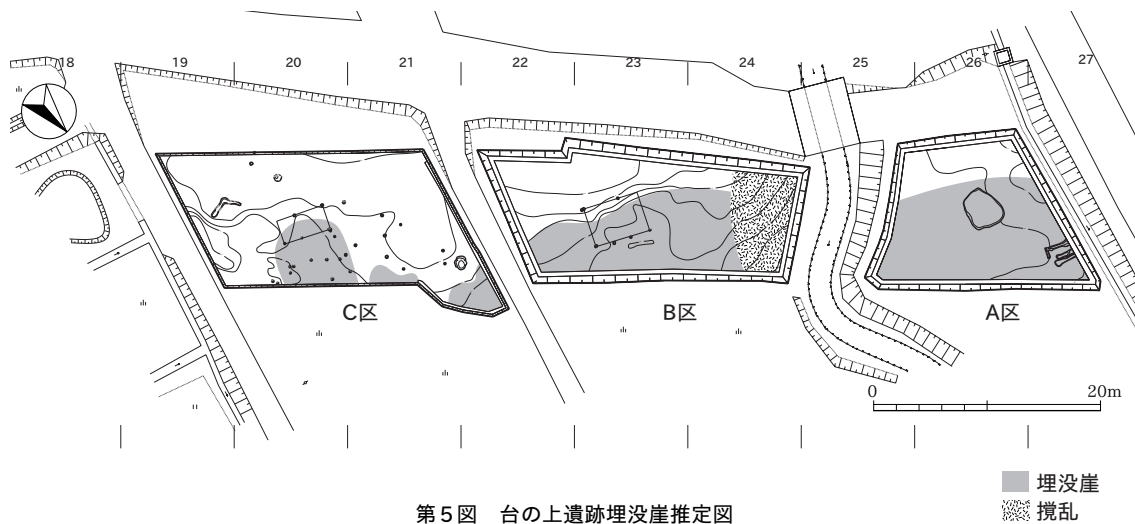
遺跡は、関川と矢代川に挟まれた段丘上にあり、調査区は、最も大きなところで比高2mほどもある段丘の崖際に位置している。表土除去以前の調査区の地形は、北に向かって緩やかに傾斜する段丘平坦部であった。しかしながら、地元住民の話では、昭和40年代に行なわれた圃場整備により、それ以前と比べてかなり改変されているということであった。

調査の開始にあたって、土層観察と排水を兼ねたトレンチを調査区の周囲に設けたところ、北に向かって急角度で傾斜する落ち込みを確認することができた（図版7・95）。遺物包含層がほとんど残っていなかったことから、当初は現代の大規模な攪乱の可能性を考えた。しかし、現在確認できる段丘崖ラインとほぼ対応していることや、埋没途中に遺構確認面が形成されていることなどから、古代以前の旧地形と判明した。Ⅲ層除去後に確認できた落ち込みのラインと、所々に設けたトレンチ壁での観察結果から旧段丘崖を復元する（第5図）と、Ⅲ層掘削後の地形にほぼ対応するように崖線が走っており、特にC区ではかなり入組む様子が伺える。段丘を埋積する土層が場所によって異なっていたことから、旧段丘崖は何度かにわたって形成され、復元した崖線は累積の結果と判断された。

ここではA区西壁セクションで確認された堆積状況を示すが、実際には、上述のように地点によりかなり異なる。Ⅰ～Ⅱ層では古代～近・現代の遺物が混在し、Ⅲ層を中心に古代の遺物が出土したが量はわ

ずかであった。

I層	耕作土	
II層	淡褐色シルト	しまり強い・粘性なし 褐色風化礫片を含む
III a層	暗灰色粘質土	しまりなし・粘性あり 褐色礫粒子・炭化物粒子を多く含む
III b層	暗灰色シルト	しまりなし・粘性ややあり III a層よりも黒味が強い 褐色礫粒子を含む
	遺構覆土	
IV層	灰白色粘質土	しまりなし・粘性あり 遺構確認面
V層	暗青灰色粘質土	しまりなし・粘性あり
VI層	黒灰色粘質土	しまりなし・粘性あり
VII層	暗灰色粘質土	しまりなし・粘性あり
VIII層	黒褐色シルト	しまりなし・粘性なし
IX層	黒褐色シルト	しまりなし・粘性ややあり X層ブロックを少量含む
X層	暗灰色シルト	しまり強い・粘性なし パウダー状を呈する
XI層	淡黄色粘質土	しまりなし・粘性あり
XII層	暗灰色砂質土	しまり強い・粘性なし 非常に硬質
XIII層	黄橙色砂質土	しまり弱い・粘性ややあり



第5図 台の上遺跡埋没崖推定図

3 遺 構

A 概 要

遺構は、調査区東側のC区にやや集中する傾向が認められるものの、全体的に希薄であった。昭和40年代に大規模な耕地整理がおこなわれ、地形がかなり改変されたとの地元住民による証言があり、また、調査時にかなりの範囲に攪乱が及ぶことが確認されたことなどから、その多くが削平されてしまった可能性がある。

検出された遺構は竪穴住居1基、溝状遺構4基、掘立柱建物3棟、井戸1基、土坑1基、ピット36基等である。竪穴住居(SI1)および溝状遺構(SX1)が8世紀後半に位置づけられるほかは、遺物の出土がなく帰属時期を明確にし得ない。しかし、覆土の特徴が共通していることや、遺物包含層から出土した遺物のほとんどが8世紀後半に位置づけられることから、ほぼ同時期の遺構として捉えておきたい。

遺構名は遺構種別の略号と遺構番号を組み合わせで表記した。遺構種別の略号は、竪穴住居=SI、掘立柱建物=SB、ピット=P、井戸=SE、土坑=SK、性格不明溝状遺構=SXとした。また、遺構番号は、種別ごとに番号を付した。なお、掘立柱建物を構成しないピットは、遺構分割図に示すほかは基本的に取り扱っていない。

B 遺 構 各 説

1) 竪穴住居跡 (図版4・7・95)

SI1の1軒のみ検出した。26A～Bグリッドに位置し、長軸353cm、短軸292cmの規模を測る。検出面から床面まで深さは約15cmと浅く、かなり削平を受けていることが判断された。南東隅には土師器甕の破片と炭化物の集中が認められたことから、カマドの痕跡と考えられる。覆土は2層からなり、上層は暗灰色シルトで、褐色・白色粒子を一面に含む。また炭化物ブロックが混入し、カマドの存在が想定される南東隅では特に集中する。A区西壁セクションでSX2～4の覆土としたⅢb層と共通する。下層は灰色シルトで、黒色土と灰白色土がブロック状に混入する。「2 基本層序」で触れたように、本遺跡は埋没崖の覆土中に遺構が形成されており、遺構確認面が地点によって異なっている。SIは埋没崖の斜面堆積中で検出され、地山は単一土層ではない。下層に含まれるブロック土はそれを反映した結果である。床面は凹凸を成し、硬化面やピットなども検出できなかった。遺物はほとんどが上層から出土し、やや高いレベルから出土した須恵器蓋(図版9-1)を除くと、土師器に限られた。出土遺物から、8世紀後半に帰属するものと考えられる。

2) 掘立柱建物 (図版5・6・8・95・96)

3棟を復元したが、構成する柱穴が全て揃う建物は皆無であり、SB2は調査範囲外へ続き規模すら把握できない。復元した主軸の方向はすべて東西を向く。C区20～21Bグリッドでは、比較的等間隔にならぶピットが検出されたが、掘立柱建物として復元することができなかった。

SB1 C区20Bグリッドに位置する。桁行2間(4.2m)×梁行1間(2.2m)の側柱建物で、面積は9.24m²を測る。主軸の方位はN-114°-Eで東西棟となる。柱間寸法は平均2.25mで、柱穴は径20～26cmの円形、深さは20～40cmと幅がある。柱穴覆土は黒灰色シルトを基本として黄色ブロックが

混入する。

SB2 C区20～21Bグリッドに位置する。建物の一部のみが検出され、遺構は調査区外へ北東方向に伸びている。桁行2間(3.4m)以上の掘立柱建物で、主軸が東西棟と仮定すると方位はN-110°-Eとなる。確認できる柱間寸法は1.16～1.74mとなり、柱穴は直径20cm～26cmの円形で、深さ25～47cmを測る。柱穴覆土は黒灰色シルトに一部暗灰色が混じる。

SB3 B区23A～Bグリッドに位置する。桁行3間(4.98m)×梁行1間(3.54m)の側柱建物で、面積は17.63m²を測る。主軸の方位はN-114°-Eで東西棟となる。柱間寸法は1.56～3.54mで、柱穴は径20～30cmの円形、深さは20cm～35cmを測る。柱穴覆土は黒色シルトで暗灰色粘質土を含む。P4とP5は切り合い関係にあり、後者が前者を切っている。

3) 井 戸 (図版6・7・95)

井戸状の遺構は、SE1の1基を検出した。C区21～22Bグリッドに位置し、素掘りである。平面は円形、断面は口径と底径に差のないバケツ形を呈する。規模は、長径238cm×短径200cm×深さ149.6cmを測る。覆土は黒色シルトの単層で、検出面で人頭大の礫が数個確認されたほかは遺物の出土は皆無であった。遺構は滞水層を穿って構築されており、調査途上において激しく水が湧き出て掘削は難航した。

4) 土 坑 (図版6・7・95)

SK28の1基を検出した。C区20Aグリッドに位置する。直径68cm×深さ45cmの規模を計る。平面計はほぼ円形を呈するが、断面形は漏斗状に先端に向かって先細りの形態となる。検出時には、覆土上層から人頭大の礫が数個出土した。覆土は黒色シルトを基本とする2層からなる。

5) 溝 状 遺 構 (図版4・6・7・96)

SX1 C区19Bグリッドに位置し、長さ330cm×幅44cm×深さ12.6cmの規模を測る。平面形は鍵の手状に折れ曲がった「く」字形を呈し、断面形は底の丸い弧状となる。覆土は単層で、黒色シルトを基本として黄褐色・白色土ブロックを混入する。ほぼ完形に復元できる須恵器横瓶(22)の破片がまとまって出土した。

SX2・3・4 A区27Bグリッドに位置し、3基が並ぶように検出された。それぞれが独立した遺構の可能性はあるが、ここではまとめて記載する。覆土はすべて共通し、A区西壁セクションのⅢb層に相当する黒色シルトで、黄褐色や白色土ブロックを混入する。調査区外へ延びるため全容は不明だが、3基共にほぼ東西に向きを揃えた溝状を呈し、SX4のみが東側端部で直角に折れ曲がる部分を持つ。長さはSX2が192cm、SX3が158cm、SX4が280cmをそれぞれ測る。底面形態は、所々でテラスや傾斜が作られて規格性がなく、立ち上がりは概して緩やかで、深さも一定しない。

4 遺 物

包含層がほとんど削平されていたため、出土した遺物はコンテナ5箱と少なく、図化できた資料は22点に過ぎない。古代(8世紀後半)が主体を占め、中世(12世紀・14～16世紀)が若干認められた。

遺物の記載・時期比定にあたっては、古代は坂井秀弥氏 [坂井 1984]、中世の白磁・青磁は山本信夫氏 [山本 2000] の論考を参照した。

以下、帰属時期ごとに出土遺物について解説する。

A 古 代 (図版9・97)

1～5は竪穴住居(SI1)出土資料で、須恵器杯蓋(1)、土師器小甕(2)・長胴甕(3～5)がある。1が遺構検出面から出土したほかは、住居南東隅の床面直上からまとまって出土した。1は山笠状の体部に宝珠形のつまみが付き、内面にはヘラ記号が記される。2は推定底径7cmを測り、底部には糸切り離し痕が明瞭である。3～5は口縁部がくの字に外反する甕で、3は口縁端部が丸味をもち、5は若干上につまみ上げられる。胴部下半を縦方向にケズリ調整する点で共通するが、4はカキメ、5はナデ、3はナデの上にハケメと、胴部上半の調整はそれぞれ異なる。また、4・5は胴部最大径が比較的上半にあって肩を有するが、3は最大径が下位に下がって長胴気味となる。

覆土上層から出土した1は、その形態からおおよそ今池IV期：8世紀末に比定されるだろう。今池IV期の長胴甕が、口縁端部を上につまみ上げて厚く仕上げるのに比べて、3・5では薄く丸い形態をなす。このことから、3・5は今池III期：8世紀後半にさかのぼる可能性があり、床面直上から出土した2～5は当該期に位置づけられよう。

6～15・22は包含層出土である。6～12は須恵器食膳具である。6は須恵器杯蓋で、天井部が広く平らで、器高は低く扁平である。7～12は須恵器有台杯で、身が浅くて一般的な形態の有台杯A(7～10)、身が深くて大型の有台杯B(12)、身が深くて口径が小さい有台杯C(11)の3器種が認められる。有台杯Aは、口径11～13cm前後とばらつきがあり、小型の7と大型の9・10とに細分できる可能性があるが、資料数が少なく一括して取り扱う。底部から体部の立ち上がり丸味をもち、口縁部は緩やかに外反するのが特徴で、底部の器壁は厚い。高台は底部のやや内側に付され、接地面はおおむね内端接地となる。8は、体部の立ち上がりが直立気味・直線的で箱形をなし、底部と体部の境が稜を形成している。高台は外端接地となり、底部の器壁がほかの土器に比べて極めて薄い。さらに、8のみが糸切りで、ほかはすべてヘラ切り離しである。これらのことから、8はより新相を示す特徴を持つものと考えられる。14は須恵器無台杯で、底部は丸くてヘラ切り、器壁は厚い。なお、須恵器食膳具の胎土の特徴には2種類が認められる。12は砂質が強くザラザラした質感であり、6～11は石英や白色粒子を含み、比較的精良で粘土質が強い。前者は高田平野西部に点在する滝寺窯跡群などに、後者は高田平野東部の末野・日向窯跡群などに主体的であり、胎土の違いは産地の別を反映している可能性が高い。

13は断面三角形の足を貼付した土師器で、内外面共にロクロナデ調整で仕上げられている。ススの付着は確認できないが、鍋と想定した。15は須恵器甕の口頸部破片。格子状のタタキが胴部外面でわずかに確認できる。22はSX1から破片となって出土した横瓶であり、遺存率が高く、ほぼ完形に復元することができた。

包含層出土土器は、須恵器杯蓋や有台杯の形態などから、今池遺跡II～III期に対比することが可能で、おおむね8世紀後半に位置づけられるであろう。

B 中 世 (図版9・97)

当該期の遺物として白磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗、京都系土師皿が出土した。

16・18～20は白磁である。16は胴部～口縁部の立ち上がりやや強い玉縁の椀で、釉色は茶黄色を呈する。内面では、口縁直下を1条ナデることで、内端部に小さな稜を形成する。器形および釉色などの特徴から白磁椀Ⅱ類に該当しよう。18は口縁部が小さく外反して上端がほぼ水平となるもので、内面には稜を作り出す。釉は比較的厚く、釉色は乳白色を呈する。白磁椀Ⅴ類またはⅧ類に該当する。19は胴部が丸味をもち、口縁部が薄く直立気味に立ち上がる皿である。内面に段を有し、外面下半は釉を掻き取る。釉色は黄白色を呈し、白磁皿Ⅷ類に該当する。20は皿の胴下半で、やはり内面に段を有する。釉色は黄色味がかり、外面下半と底面は露胎となる。底面にはケズリ工具の痕跡が認められる。白磁Ⅳ類に該当しようか。以上、白磁椀Ⅱ類・ⅢⅣ類が11世紀後半～12世紀前半、椀ⅤまたはⅧ類・ⅢⅧ類は12世紀中頃～後半に位置づけられる。

17は龍泉窯系青磁椀である。釉調はやや黄色味がかった濃緑色で、口縁部をく字状に外反させて、端部を丸く仕上げる。椀Ⅳ類に該当すると思われ、14世紀初～後半に位置づけられよう。

21は手づくね成形による土師皿で、内外面にススの付着が認められる。内面は平滑にナデ調整されるが、外面は凹凸がある。いわゆる京都系土師皿と認識され、おおむね15世紀中頃～16世紀に位置づけられよう。なお、県内中世遺跡で一般的な珠洲焼は確認できなかった。

5 小 結

台の上遺跡は後世の削平が大きく、遺物包含層はほとんど残されていないが、次のような成果があったのでここでまとめておきたい。

本遺跡で検出した遺構は、竪穴住居1基・溝状遺構4基・掘立柱建物3棟・井戸1基・土坑・ピットとわずかであった。竪穴住居覆土および遺物包含層から出土した遺物の多くが8世紀後半～末頃に比定されることから、ほとんどの遺構は当該期に帰属するものと推定される。調査区は段丘の縁辺部に位置しており、南側には平坦地が広がっている。このようなことから、調査区外に本拠地を持つ集落の一部である可能性がある。約90m東方の至近に位置する峪ノ上遺跡では、台の上遺跡と前後する時期の遺構（7世紀前半の竪穴住居、9世紀前半の掘立柱建物）が検出されている。両遺跡は同じ段丘上に立地することから何らかの関連が推測され、7世紀前半～9世紀前半におよぶ一連の遺跡群として把握することができるとも知れない。周辺の遺跡をみると、新井市杉明遺跡・倉田遺跡・東沖遺跡・栗原遺跡など、7世紀～8世紀の比較的規模の大きな遺跡が半径2km圏内に集中していることが確認され、台の上遺跡はこれら遺跡群の最も北方に位置することになる（第4図参照）。矢代川と関川によって挟まれた狭小な地域のなかで、ほぼ同時期の遺跡がこれだけまとまって成立・衰退する在り方は、これらの遺跡が有機的な関係のもとに結ばれていた〔笹澤2003〕と考えることが適当であろう。

また、遺跡との直接的な関係は不詳であるものの、8世紀以前の段丘崖を確認することができた。この段丘崖が埋没し、段丘平坦面の面積を広げた後に8世紀後半以降の遺構が形成されている。関川の河岸段丘と考えられることから、関川の旧河道を復元するうえでのデータを提示できたと言えよう。

第Ⅳ章 峪ノ上遺跡

1 グリッドの設定 (図版2・10)

峪ノ上遺跡の調査は、新幹線法線内の幅13m、長さ84mの細長い範囲を対象とした。同じ法線上に存在する台の上遺跡は西方約90mに位置する。

グリッドは台ノ上遺跡と共通して設定した。詳細は第Ⅲ章1を参照願いたい。グリッド南北方位の主軸は真北から138°西偏している。調査区内の主な座標点は次のとおりである。17A (X=118395.415、Y=-20932.545)、27A (X=118467.595、Y=-21015.549)。

グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分したものである。大グリッドの呼称は、東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットとし、両者の組み合わせにより表示した。例えば、グリッド設定の基準杭であるT8の北側の区画は「2A」とした。小グリッドは1～25の算用数字で表し、南西隅を1、北東隅を25として、「2B15」のように呼称した。また、調査区が農道や用水路によって区切られていたことから、便宜上、調査区西側からA区・B区に分けて調査をおこなった。

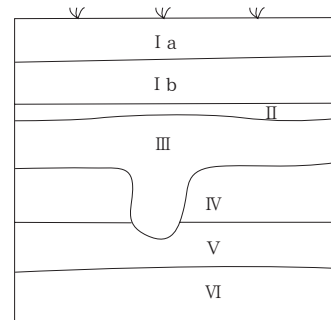
なお、1～2B～Cグリッドは、遺構が集中する台地の直下、比高2mあまりの崖下に位置している。近年の削平による窪地と予測されたため、試掘調査を行い、包含層の存在を確認することができなかった。よって、3B～Cグリッドの一部を加えた斜面および台地下については調査対象範囲から除外した。

2 基本層序

台の上遺跡と同様、本遺跡もまた関川と矢代川に挟まれた段丘上にあり、比高2mほどの段丘の崖際に位置している。近代の攪乱が大きくおよぶことはなく、遺物包含層の遺存状況は良好であった。また、台の上遺跡で認められた古代以前の旧段丘崖を本遺跡では確認することができなかったことから、峪ノ上遺跡は比較的安定した台地上に築かれていたと推測される。

基本土層は以下に示すとおりである。連なる台地上に立地しながら、台の上遺跡の基本土層とは色調や性質が異なっている。

- I層 表土 (I a層) と旧耕作土 (I b層) に区別できる。
- II層 暗青灰色粘質土。しまりなし。粘性あり。A区では鉄分の沈着が広範囲で認められて明褐色化する。
- III層 暗青褐色粘質土。しまりあり。粘性あり。褐色微粒子・炭化物粒子 (直径3～5mm) を含む。遺物包含層。
- IV層 暗灰色シルト。しまりあり。粘性なし。遺構確認面。
- V層 黒色シルト。しまり弱い。粘性なし。淡褐色粘質土がブロック状に混入。
- VI層 黄褐色砂質土。しまりなし。粘性なし。基盤層である。



第6図 峪ノ上遺跡基本層序

3 遺 構

A 概 要

遺構はB区を中心にして検出され(図版10)、A区東端部の溝1条を境界として、より西側からは全く検出することができなかった。複数期にわたって遺構が形成されており、それらの存続時期を考慮する必要のあるものの、遺構の集中域と空白域の存在は峪ノ上遺跡における空間利用の一端を示しているものと考えられる。

検出された遺構には、竪穴住居1軒、溝状遺構4条、掘立柱建物1棟、ピット約80基等がある。出土遺物から、竪穴住居が7世紀後半、SD1と掘立柱建物が9世紀代に位置づけられる。またSD2・3は共に掘立柱建物に切られて前後関係にあり、SD4はSD3と平行する位置関係にあることから同時期の可能性が高いと想定した。SD5は掘立柱建物と軸をそろえていることから建物の付属施設と考えたい。掘立柱建物の北側(5Cグリッド周辺)やB区東端(3Bグリッド)でピットがややまとまっているが、建物跡として復元することができなかった。

遺構の覆土には、A：暗赤褐色粘質土、B：灰赤色粘質土、C：黄褐色ブロックを多く含む黒色シルトの大きく3種類がある。AはB区東端ピット群、BはSD2～4、Cは掘立柱建物の柱穴に顕著であり、遺構の切り合い関係などから、Aが最も古く、続いてB、そしてCが最も新しい傾向が伺えた。

なお、遺構名は遺構種別の略号と遺構番号を組み合わせて表記した。遺構種別の略号は、竪穴住居=SI、掘立柱建物=SB、溝=SD、ピット=Pとした。また、遺構番号は種別ごとに番号を付した。なお、掘立柱建物を構成しないピットは、遺構分割図に示すほかは基本的に取り扱っていない。

B 遺 構 各 説

1) 古墳時代

竪穴住居(図版12・13, 98～100)

古墳時代後期の竪穴住居(SI1)1軒を検出した。3B・4B・4Cグリッドに位置し、長軸548cm、短軸546cmの方形を呈する。面積は約30m²で、確認面からの深さは20cmほどである。周溝は確認できず、カマドが南東隅に存在する。支柱穴は4基検出されて方形をなす。

床面のほぼ中央部では40×20cmほどの焼土塊が床直上で検出された。SD3・4およびSB1の柱穴と切り合い関係にあり、本遺構が全ての遺構に切られている。

カマドは、崩壊した構築土や土器片の集中により小さなマウンド状として検出され(図版99下)、煙道は確認することができなかった。重なる土器片を慎重に剥がしながら調査した結果、南東隅で4個体の甕が直立していることが判明した(カマド遺物出土状況2)。甕の埋設状態には正位(38)と逆位(40・34・36)とがある。その南隣では甕(23・25)・甑(48)・高杯(50)が潰れた状態で出土した。特に高杯は、直立した脚部の周辺に杯部破片が落ち込んだ状態で出土し、また、脚部の脇で潰れていた甑の大型破片の上に杯部の破片が重なっていたことから、やや高い場所に置かれていた高杯が甑の上に落下したものと考えられる。火床は2か所で検出され、共に床面が強く被熱して赤色化していた。北側の火床からは、被熱により残存状態が良くないものの、円筒形土製品(53)が埋設された状態で出土した。支脚として機能したものであろう。さらに、カマド最奥部の住居壁際からは、小型の杯(12)が出土した。カマド構築土を

全て除去した段階で出土したことや、日常什器としての杯よりも小型で丁寧に作られていることなどから、カマド構築に際して埋設されたものと考えられる。セクション図から分かるとおり、マウンド内には被熱による赤色硬化土がブロック状に認められ、かなり使いこまれたカマドであったと想定できる。カマドを中心に多くの遺物が出土しており、7世紀前半の良好な一括資料を提供している。

2) 平安時代

掘立柱建物（図版12・15, 98・99・101）

平安時代の掘立柱建物（SB1）1棟を検出した。4～5・A～Cグリッドにあり、調査区外へ延びているため全形は不明である。棟方向がほぼ東西方位と一致し、長軸は真北から94度西偏する。SI1、SD2・3と切り合い関係にあり、その全ての遺構をこの建物が切っている。柱配置に不規則な点があるが、梁行1間・桁行7間超の身舎に南北両面と東面に1間の庇が付く側柱建物として復元した。身舎と庇を含めた総面積は現状で153m²を超える。柱の掘りかたは楕円形または隅丸長方形を呈し、長軸42～140cm、短軸28～100cmと規模にばらつきがあるものの概して大型のものが多い。身舎と庇とで柱穴の規模に違いが認められない一方で、身舎内部の1間×2間の柱配置（P39・88・108・95・89・42）と東側庇を構成するP125・144が小規模な柱穴で構成されている。P59・60・36・37・51・52などで重複が認められるが、建物そのものの建て替えは認められない。柱間寸法はほぼ2.16m前後で統一されるが、身舎内部にある方形配置の柱穴と側柱との間のみで1.4～1.6mと短い点は注目される。身舎内部の方形柱配置をどのように捉えるか、類例を検索できずにいるため留保せざるを得ないが、柱筋の通りの良さから同じ建物に付属するものと考えたい。

SD5は長さ360cm・幅60cm・深さ16cmを測り、建物の棟方向に平行して存在している。大型掘立柱建物の雨落ち溝と考えている。

実測可能な遺物はP103からのみ出土した。調査の過程を振り返ってみると、まず、柱穴の確認面から少し下で土師器杯の底部（図20-79）と須恵器壺（または瓶：80）などが出土した。さらに掘り下げると、須恵器甕の大破片（81）が柱穴に落ち込むように出土した。柱穴を塞ぐほどの大破片であったことから、柱が立っていた時点での遺物の混入とは考えられず、柱を抜き取った後に埋めもどされた時に投棄されたものと判断した。さらに須恵器を取り上げた直下からは土師器杯の底部片（81）が（写真図版6）、その下層からは土師器杯（77）が出土している。何度かにわたって土師器杯の破片が投棄され、また、須恵器甕の大破片が柱穴を塞ぐように出土していることから、掘立柱建物廃棄時に付随する何らかの行為を反映したものと考えたい。土器の年代がおおよそ9世紀中葉～後葉に位置づけられることから、SB1が廃棄されたのは9世紀中葉を下限とする9世紀前半代と推定される。

溝（図版11・12・14, 99・100）

SD1 C区の7A・7Bグリッドにある。完掘後の平面図では3本以上に分かれた溝として表現されているが、検出当初は1本として確認しており、本来は同じ溝であった可能性が高い。調査区を横断するように南北方向に走り、途中から北西に50度ほど曲がって分岐する。本線部分で長さ8.9mを測り、幅は0.3～1.2mと一定していない。深さは最も深いか所でも16.3cmと浅い。また溝の底面は南から北に向かって傾斜し、地山の傾きと一致している。

分岐した部分から南側では、土師器無台杯のみが15個体以上出土した。杯の出土状況は正位と逆位があったが、その場で潰れたような状態を示すのは逆位のものがほとんどであった。遺物の特徴から、9世紀

後半に帰属するものと考えられる。

SD2 5A～B、6B～Cグリッドに位置する。調査区を横断するように、南南東から北北東に向かって緩い弧を描く溝でそのまま調査区外へ延びている。現状で長さ19.1m、幅1.6m、深さ29cmを測り、SD1と同様、溝底面は南から北に向かって傾斜する。SB1を構成するP107と切り合い関係にあり、SB1が古い。

少量出土した遺物は古墳時代から平安時代と幅があるが、古墳時代の竪穴住居(SI1)を切っているSD2および3と覆土の特徴が同じことから、平安時代に帰属する遺構と捉えておきたい。

SD3 4A～Cグリッドに位置する。調査区を横断するように延びており、現状で長さ1.54m、幅92cm、深さ27cmを測る。溝底面は南から北に向かって傾斜している。掘立柱建物(SB1)の梁行の軸とほぼ平行するが、柱穴との切り合い関係から、SB1が新しくSD3が古い。また竪穴住居(SI1)との切り合い関係は確認できなかったが、SI1を切るSD4と軸を揃えた平行関係にあり、また覆土の特徴も一致することから、SI1よりも新しい溝と考えたい。しかし出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

SD4 4Cグリッドに位置する。SD3と平行するように南北方向に走る溝で、長さ1.68m、幅72cm、深さ12.9cmを測る。平面図ではSI1で途切れているが、検出時には、さらに南側へ1mほど延びているのが確認されており、SI1を切って構築されている。覆土は暗赤褐色粘質土の単層でSD3と共通する。遺物は出土しなかったが、覆土が共通し、また軸を同じくしていることから、SD3と同時期に存在したものと想定している。SD1～3と同様に、南から北に向かって溝底面が傾斜している。

4 遺 物

A 概 要

峪ノ上遺跡から出土した遺物には、弥生時代中期・古墳時代後期(7世紀前半)・古代(9世紀)・中世(14～15世紀)が認められたが、主体は古墳時代後期と古代でほかはごくわずかであった。遺物量はコンテナ13箱におよぶが、そのほとんどを古墳時代後期の土器が占める。竪穴住居(SI1)からまとまって出土しており、当該期の良好な一括資料として注目される。古代の遺物は主に溝(SD1)と大型掘立柱建物(SB1)の柱穴から出土した。SD1では、9世紀後半の土師器杯がその場で潰れたように十数個体出土した。この溝より西側では遺構が皆無であることから、遺跡を区画する性格のものと想定される。SB1では、柱抜き取り後の柱穴に9世紀中葉の土師器杯と佐渡小泊産須恵器大甕が投棄されていた。その出土状態から、何らかの祭祀行為を想像させる。

90m西方に隣接して存在する台の上遺跡では8世紀代が主体であることから、本遺跡と台の上遺跡とは出土遺物の年代において連続する関係にある。

B 弥生時代(図版22・107)

103・104の2点のみが確認された。103は弥生中期：小松式の甕である。内外面ハケメ調整され、口縁内面にハケ工具による列点が刻まれる。104は内外面ともに赤彩され、底部のみ塗彩がない。胎土は精良で、小型甕の底部破片と思われる。弥生後期：箱清水式に比定される。弥生土器はわずか2点の出土であるが、弥生後期の遺跡として著名な上百々遺跡が南方約700mと至近の位置にあることから、その関係が注目される。

C 古墳時代

1) 竪穴住居 (図版16～20・102～105)

竪穴住居 (SI1) のカマド周辺と覆土中から大量の土器が出土した。すでに第IV章3において詳述したが、カマドの芯材として利用されたと思われるのは40・36・38・34で、その南隣から23・25・48・50などが潰れた状態で出土している。出土遺物には、須恵器杯蓋 (1・2)、土師器杯 (3～6・10・12)・鉢 (7～9)・甕 (13～38・40～43・54・55)・甌 (47～49)・高杯 (50～52・56)・円筒形土製品 (53)、土製紡錘車 (11) があり、甕が器種組成のほとんどを占める。

須恵器杯蓋には2形態がある。2はつまみや端部の返しを持たず、杯身と合子状に組み合わさるものである。古墳時代中期以来の伝統的な器種で、いわゆる杯H [奈良国立文化財研究所1978] の蓋に相当する。焼きが甘く、軟質・乳白色を呈する。1は同じくつまみを持たないものだが、復元口径が10cmと小さく、短頸壺の蓋と思われる。天井部に降灰が認められ、焼成良好で硬質な仕上がりである。

土師器杯には、口縁部が直立ぎみに立ちあがったり、強くヨコナデすることで胴部との境に弱い段を作り出すもの (3・5・6) と、口縁部が外側に大きく屈曲して胴部との境を明瞭としたもの (10・12) の2形態があり、共に須恵器杯Hを模倣したと想定され [春日1994]、丸底か小さな平底を呈するものと思われる。法量には浅身のもの (3・4・6) と深身のもの (5・10) とがある。内外面をミガキあるいはヘラナデ調整するが、5では成形時のハケメがミガキ痕の隙間から確認でき、10は胴部下半をヘラケズリする。12は器形が10と良く似るが、特に丁寧に作られた精製小型品で平底を呈する。カマド裾部に埋納されていた特殊な出土状態や、法量・製作方法ともにほかの土器との違いが大きいことから、カマド祭祀に伴って製作・使用された土器と推測される。鉢には口縁部が直立ぎみに立ちあがるもの (7・8) と、底部から口縁部まで大きく外傾するもの (9) とがある。前者は、杯と同様に口縁部をヨコナデ・胴部をミガキ調整し、後者は口縁部が意識されずに内外面ハケ調整を行っている。

甕には小型品 (13～16など) と大型品 (31・33・34など) とがあり、またそれぞれにいくつかの法量差が存在することから、本来はさらに細かい器種分類を行うべきであろうが、便宜上ここでは一括して取り扱う。小型品は口縁部が比較的直立ぎみに立ちあがるものが多く、一方大型品は「く」字状に大きく外反するものが目立つ。また後者の胴部形態には、寸胴ぎみのもの (31・33) と張りのあるもの (34) の二者が認められる。小型品・大型品ともに、口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ・内面ハケもしくはナデかヘラナデ調整するものが一般的である。全形が分かる資料は全てが平底であるが、丸底も存在するらしい (42・43)。

甌は把手破片を含めて3点を図化した。出土資料のなかには底部全体を孔とするもののみが確認され、多孔底は認められなかった。48は相対する位置に把手あるいは剥落痕が存在せず、把手が1個しか付着しないものである。なお、甕に分類したもののうち、小型品の一部は甌に含めるべきものがあるかも知れない。

高杯は、丸みをもって内湾する胴部に大きく外反する口縁部を持つ50が特徴的である。杯部内面は黒色処理され丁寧にミガキ調整が加えられる。脚部は太く、裾部が大きく開く。51・52は同じく高杯脚部であるが比較的細いものである。52では脚部製作時のしぼり痕が内面に認められる。56は50と同様に太い脚部を持つが、裾部の開きは小さく、杯部もやや深身となるらしい。

53は円筒形土製品である。被熱によって脆弱化し、取り上げる際にほとんどが崩壊してしまった。若

干のハケ調整を除き、粘土紐を積み上げただけの粗雑な作りのもので、上下につぶれたようないびつな形態をなすが、出土時の記録から直径を復元した。カマド周辺の床面で検出した2カ所の燃焼部のうち、北側の燃焼部から床に埋まった状態で出土した。上半部を欠損しているが、本来はさらに長い形状をなし、カマドの支脚として機能したものであろう。11は土製紡錘車で、断面径は台形をなす。

以上、SI1から出土した土器は、各器種の特徴および器種組成などから上越市一之口遺跡東地区〔鈴木ほか1994〕と対比することが可能で、春日真実氏による編年〔春日1999〕のI期：おおよそ7世紀前半に位置づけることができよう。

2) 溝 (図版20・106)

溝 (SD2) からは高杯 (72・73)・鉢 (74)・甑 (76) が出土したが、平安時代の須恵器大甕 (75) を伴出しており、遺構掘削時の紛れ込みと判断される。SI1出土土器群と同じ特徴をもつことから7世紀前半に位置付けられる。

3) 包 含 層 (図版21・22・107)

甑 (99・100)・甕 (97)・壺 (101) を図化した。甑は共に把手の破片で、100のみハケ調整が確認できる。101は口縁部を横ナデして面を作り、外面ヘラミガキ・内面ナデ調整を施す。

D 平安時代

1) 掘立柱建物 (図版20・21・106)

大型掘立柱建物 (SB1) を構成する柱穴 (P103) から遺物が出土した。すでに第IV章3-2) で詳述したように、柱抜き取り後の柱穴が埋没する途中で複数回にわたって遺物が投棄されていた。出土状態から、77→78→81→80・79の順に埋没・投棄が繰り返されたことが判明している。図化できた遺物には、土師器杯 (77~79)・須恵器壺または瓶 (80)・須恵器大甕 (81) がある。77の杯は浅身で、内湾しながら立ちあがり、口縁部を強くヨコナデして小さく外反する。78・79は糸切り痕を有する底部で、それぞれ5.4cm・6.4cmを測る。81は佐渡小泊産大甕の胴部破片で器壁の厚さが一定ではなく歪みが激しい。破片資料が多く編年的位置づけが難しいが、杯の形態や小泊製品の伴出から、おおよそ9世紀中葉~後葉に比定できよう。

2) SD1 (図版20・105)

土師器無台杯のみが15個体以上出土し、そのほとんどを図化した。全てが糸切り底で、黒色土器が1点含まれる。出土土器には大きく2法量が認められる。底部から口縁部にむかって大きく開く浅身のもの (57・60・61・62~68) は口径13cm前後にピークを持つ。また、直立気味に立ち上がる深身のもの (58・59・69) は58・59が12cm前後、69が14.8cmを測る。一方、底部径は法量の違いにかかわらず5~5.5cmに集中する傾向を示す。器形および法量などから、おおよそ春日編年VI2~3期：9世紀後半に位置づけられよう。

3) SD2 (図版20・106)

SB1と切り合い関係にあり、SD2が新しい。古墳時代後期に混じって、須恵器大甕 (75) の口頸部破

片が出土している。75は口縁部を一段肥厚させ、端部を張り出させて突帯状にする。頸部では、カキメの上から同一工具による刺突列を2段にわたって施している。

4) 包 含 層 (図版21・107)

須恵器有台杯 (84)・長頸瓶 (85～87)、土師器杯 (83・88～95)・小甕 (82・96)・長胴甕 (98) を図化した。

包含層出土遺物全体をとおして須恵器食膳具は極めて少ない。有台杯84は土師器杯に対して身が浅く、身が比較的厚手なのに比べて口縁部はつまみ出すように細く仕上げられている。高台が底部内側に付き、底部から胴部にかけての張り出しが大きいのが特徴的で、高台端部は窪んで凹線状をなす。底部調整痕は不明で、内面は弾けたように剥落が著しい。85～87は長頸瓶の頸部で内外面口クロナデの凹凸が明瞭である。

土師器杯は浅身のもので占められ、口径は13cm前後に集中する。底部から口縁部にむかって大きく開くもの (83・89・91～95) のほか、口縁直下でく字状に直立させるもの (90・93) がある。底部は全て糸切りである。88は小型品で、内面は比較的平滑に仕上げられているのに対し、内面はケズリに近い粗いヘラナデが施される。

96は口縁部ナデ、胴部上半ハケ・下半ケズリの小甕で、内面はケズリが施され、炭素が吸着して全面黒色化する。98は口縁部を肥厚させて、内側を上につまみあげるように仕上げている。外面にススの付着が少量認められる。

E 中 世 (図版22・107)

珠洲焼片口鉢 (102) が1点確認されているのみである。ほぼ直線的に開く器形を呈し、口縁内面が広く内割ぎ状となって面をなす。櫛目状波状文帯は認められない。口縁内面が無文となり、卸し目の間隔が粗いことから小型または中型鉢となろう。吉岡康暢氏による編年 [吉岡1994] によるIV期に比定することが可能で、14世紀後半～15世紀前半に位置づけられよう。

5 小 結

A 古墳時代後期の竪穴住居

峪ノ上遺跡からは、7世紀前半に位置づけられる竪穴住居 (SI1) 1基が良好な状態で検出された。竪穴住居 (SI1) は長軸548cm・短軸546cmの方形プランを呈し、面積は約30m²を測る。支柱穴は4本あり、貼り床などは確認されていない。住居壁際の南東隅の周辺からは2か所の火床が検出された。東側火床部では、正位または逆位の土師器長胴甕が2個体づつ列をなして4個体埋設されていたことから、土器を芯材としたカマドと判断した。火床部には支脚と考えられる円筒形土製品が埋設されていた。被熱による劣化が激しく、取り上げる時点で多くは崩壊してしまっていたが、推定長径9cmの断面楕円形の小型品で、器面には輪積み痕が残り、一部ではハケメ調整が認められる。一方、西側火床部では、上部から土師器長胴甕・甌・高杯がその場で潰れたように出土したが、カマドと判断できるような状況は認められなかった。共に煙道は確認されていない。特筆すべきは、2つの火床部に挟まれた壁際から、土師器の小型杯が出土したことである。出土地点は壁が少し張り出した部分にあたり、地山のローム土に埋め込まれたように出

土した。精緻な作り・一般的ではない法量・壁際における特異な出土状態などから、カマド祭祀に関わる遺物と考えている。さらに、床面のほぼ中央からは焼土塊が検出された。

6世紀前葉から7世紀後半におよぶ竪穴住居32棟を検出した上越市一之口遺跡東地区〔鈴木1994〕では、小型(30m²以下)・中型(36~60m²)・大型(105m²以上)の3つの規模が認められ、小型・中型が大半を占め、大型はわずかであった。注目されるのは、煙道を持つタイプと持たないタイプが存在することである。煙道を持たないタイプは少数であるが、火床が壁際にあることや支脚が出土していることから、炉ではなくカマド構造を備えたものと考えられた。また、煙道を持たないタイプは大型住居に多いことが指摘されている。

峪ノ上遺跡で検出したSI1は一之口遺跡における小型住居に該当し、方形プラン・4本主柱である点でも共通する。また、煙道を持たないタイプにあたるが、火床部が2か所あるという点で異なる。煙道を持たないタイプが炉ではなくカマドであるという一之口遺跡における指摘は、SI1の東側火床部においてカマド芯材として利用された土師器甕が出土したことから首肯することができる。そして、煙道を持たず、壁際に設置されるという共通性から、西側火床部もまたカマドと考えることができるであろう。一之口遺跡東地区において2基のカマドを備えた竪穴住居が1軒も存在しないことを前提にすると、SI1における2基の火床部は、カマドを作り替えた結果と考えるのが妥当であろう。そして、カマド芯材として利用した土器の遺存状態や支脚の有無などから、西側火床部→東側火床部という変遷を想定することができる。このように仮定した場合、カマド祭祀に関わる遺物と想定した土師器小型杯が、カマド芯材の土師器甕38(図版13)の脇から出土したことから、東側カマドに伴うものと考えることができる。

また、床面中央部の焼土は一之口遺跡東地区では認められない。北陸地方では、7世紀前葉までは炉とカマドの併設が一般的であった〔鈴木1994、原典：田嶋1992(未見)〕とすれば、7世紀前半に位置づけられる峪ノ上遺跡例は、炉からカマドへと移り変わる過渡的様相を示す事例となるのかも知れない。しかし、新潟県内における当該期の資料は未だ少なく、今後の課題である。

B 平安時代の大型掘立柱建物

峪ノ上遺跡からは、身舎と廂を含めた総面積が150m²を超える平安時代の大型掘立柱建物(SB1)1棟が検出された。建物は調査区外に続いていることから、本来の規模はさらに大きい。現存部において梁行1間×桁行7間超の身舎に、南北両面と東面に1間の廂が付く側柱建物である。棟方向は真北から94度西偏して、ほぼ東西方位と一致する。柱穴の規模にはばらつきがあるものの概して大型のものが多く、隅丸方形を呈するものが多い。特に北側の廂を構成する柱穴(P106・107・77・60など)で顕著だが、掘りかたの長軸が建物の主軸方向と直交する点が特徴的である。また、東方の妻側周辺では、身舎の中に6本柱で構成される長方形の区画(P42・89・95・109・88・39)が認められる。SB1とは別の建物である可能性も想定したが、柱筋が完全に一致することから同じ建物を構成する柱穴と判断した。建物の南側には桁行方向と平行するSD5が存在し、SB1の雨落溝と考えている。

春日真実氏の論考〔春日1995〕をもとに、身舎と廂を含めた総面積が150m²を超える大型掘立柱建物を探してみると、県内では次の3遺跡をあげることができる。

- ①上越市下新町遺跡〔坂井ほか1984〕 SB8：身舎2×7間、四面廂、総面積約195m²
- ②上越市江向遺跡〔小島ほか1993・北野2003〕 SB100：身舎2×7間、四面廂、総面積約230m²
- ③和島村八幡林遺跡C地区〔高橋ほか1993〕 SB02：身舎2×5間、四面廂、総面積180m²超。

下新町遺跡例は10世紀末、江向遺跡例は10世紀後半、八幡林遺跡例は9世紀代〔春日1995〕に位置づけられ、四面廂が付くという点で共通する。峪ノ上遺跡例は9世紀前半に位置づけられることから、八幡林遺跡例とならび4例のなかでは古い時期に該当する。峪ノ上遺跡SB1は、調査区外に延びているため全体の構造が不明であるものの、建物の規模や身舎の柱配置などから、四面廂が付く可能性が高いと考えている。また、一部ではあるものの、柱掘りかたの長軸が建物の主軸方向と直交するように並ぶ在り方は、江向遺跡例と類似しており注目される。建物の主軸方向は、下新町遺跡・江向遺跡・峪ノ上遺跡が東西方位と一致し、八幡林遺跡例のみ10度前後南に振れるが、東西方向を指向している。

峪ノ上遺跡例で認められた身舎内部の区画構造は上記3遺跡では認められない。唯一、江向遺跡において西の妻側に2×2間の下屋が付く〔北野2003〕。3本の柱穴で構成される下屋は、主柱穴に比べて格段に細く、明らかに上屋を支える機能が異なっていたことが分かる。峪ノ上遺跡例においても、主柱に比べて区画を構成する柱が細いことから、上屋構造を反映した結果と見るのが妥当であろう。建物の復元にあたって採用しなかった柱穴のなかには、規則性を有するものなども認められることから、上屋構造を想定した柱配置を再検討すべきかも知れない。

峪ノ上遺跡は、大型掘立柱建物（SB1）1棟と溝4本が検出されたのみで、集落としての在り方は不明である。ただし、他遺跡の事例と比較すれば、SB1が際立って大きな建物であることが確実であり、周辺には一定規模の集落が存在していたことは間違いない。台地の縁辺部に遺跡が存在することから、集落の中心は南西の平坦地に広がるものと想定できよう。また、総面積150m²を超える掘立柱建物は県内でもまだ数例であり、峪ノ上遺跡をもって新たな事例が追加されたことになる。帰属時期のうえでも古相に位置づけられることから、大型掘立柱建物の変遷を追跡する点においても重要なデータを提示したのと言えらるだろう。

第V章 五反田遺跡（平成15年調査）

1 グリッドの設定（第7図）

五反田遺跡の調査は、北陸新幹線法線内の幅25m、長さ280mという細長い範囲を対象とした。したがって、グリッド設定を地形や方位に合わせると誤認が生じる可能性があったため、細長い法線に平行するように設定して問題の解消を図ることとした。グリッドは、新幹線法線のセンター杭STA170k344（長野市の基点から170.344kmの地点、世界測地系 $X=114674.569$ ・ $Y=-17934.614$ ）とSTA170k451（世界測地系 $X=114766.748$ ・ $Y=-17987.955$ ）とを結んだ線を基準にしてセンターライン上に設定した。なお、南北グリッド軸の方位は真北から 60° 東偏している。また、調査区内の主な座標点は次のとおりである。1A（ $X=115286.403$ 、 $Y=-18343.401$ ）、30A（ $X=115035.401$ 、 $Y=-18198.159$ ）。

グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分したものである（図版23・24）。大グリッドの呼称は、北から南に向かって1～29までの算用数字、それと直行する方向はA～Cのアルファベットとし、両者の組み合わせにより表示した。例えば、センター杭170k541（KP-13）の北東側の区画は「19B」とした。小グリッドは、1～25の算用数字で表し、北西隅を1、南東隅を25とし、「19B15」のように大グリッド表示の後に付して呼称した。また、調査区を便宜上AからD区に分けて呼称した。

2 基本層序（第7図・図版110）

遺跡は頸城平野の南東端、関川の支流である大熊川左岸の扇状地に立地し、標高は約45mを測る。調査範囲の地形は南東から北西にむかって基本的に緩やかに傾斜するが、8～9列と3列で等高線が混み合い、地形の変換点が認められる。また、土層の堆積状況においても、土層柱状図の③—④、⑧—⑨の間でIV層が窪む様子がうかがえ、さらに、④および⑩より北西側ではIV層が欠落してしまう。なお、調査にあたっては、暗渠を敷設して地下水の浸入を防ぐよう努めた。しかしながら、地形が変換する8～9列および2～3列では常に水が滲み出すような環境にあり、地下構造と微地形との関係が予測された。これを反映するかのように、8列を境に北西に向かって遺構が希薄となり、3列より先は遺構がほぼ欠落する。基本土層は次に示すとおりである。なお、遺跡は8世紀前葉～10世紀中葉におよぶが、遺物はすべてIII層を中心に包含されていた。若干IV層からも出土したが、層位の違いによる遺物の時期差は認められなかった。

I a層：褐色粘質土。耕作土。

I b層：青色粘質土。耕作土。

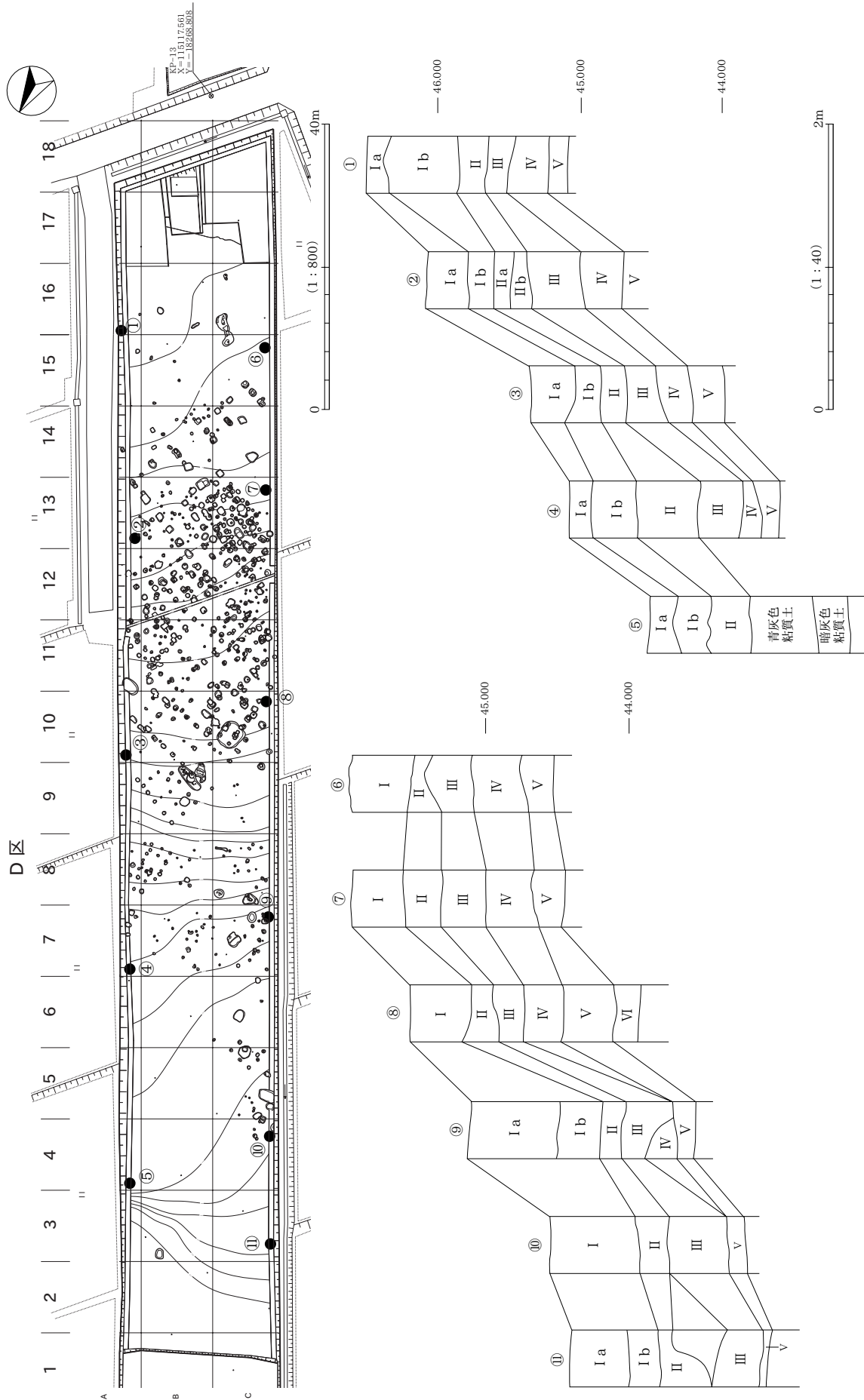
II層：灰白色粘質土。粘性が強く、しまりなし。炭化物の微粒子を含む。

III層：褐灰色粘質土。粘性が強く、しまりなし。やや紫色を帯びる。炭化物を多く含む。遺物包含層。

IV層：灰白色シルト。粘性があり、ややしまりがある。III層に比べてやや砂質である。遺構確認面。

V層：青灰色シルト。粘性がなく、ややしまりがある。還元化が著しい。

2 基本層序



第7図 グリッド設定図及び土層柱状図

3 遺 構

A 概 要

A・B・C区は川跡あるいは現代の攪乱によって占められ、D区でのみ遺構を検出した。検出された遺構は、竪穴住居（カマドのみ）2基、掘立柱建物19棟、竪穴状遺構1基、土師器焼成遺構1基、炭土坑8基、ピット約400基などである。竪穴住居が奈良時代に位置づけられるほかは、全て平安時代に帰属する。D区は幅20m・長さ32mにおよぶが、15列より南東側と6列よりも北西側で遺構が希薄となり、7～15列の範囲で集中する。南東端の17列からA区にかけて川跡が確認されており、15列以東で遺構が希薄となるのはこの影響と考えられる。また、すでに前節で触れたように、8列や3列周辺は等高線の変換点にあたり、沢状の微地形を形成している。以上のことから、D区では遺構の粗密がはっきりと認められ、比較的限定された範囲で遺構群が展開していた可能性が高い。

遺構の覆土には次の3種類が認められた。

A：炭化物を多く含む黒色粘質土

B：灰白色シルト（IV層）をブロック状に含む暗灰色粘質土

C：灰褐色粘質土

Aは炭土坑・竪穴状遺構・土師器焼成遺構、Bは掘立柱建物群の柱穴、CはSB2など少数のピットで認められた。遺構の切り合いから、AとCがBよりも新しいことが確認されたが、AとCとの新旧関係は不明である。

B 遺 構 各 説

1) 川 跡（図版23～25・111）

調査区を横断するようにA・B・C区およびD区南東隅（17～18列）から川跡が検出された。下流にあたる仲田遺跡では、南から北に向かって蛇行する小熊川の旧流路が検出されており、河床から奈良・平安時代の土器が出土している〔加藤^{ほか}2003〕。五反田遺跡で検出した川跡はそれと一連のものである可能性が高い。A区（SX21）とD区（SX660）で川岸と思われる立ち上がりが検出されたが、C区・D区では2m近くまで攪乱が及んでいたため全体の流路を確認することができなかった。A区からD区まで同じ1本の川幅であったとは考えられず、この範囲において1本の川が蛇行していたか、あるいは何度か流路が変更したものと判断しておきたい。なお、各区で検出した川跡の覆土上層では、ビニールシートや土管などの現代品が大量に投棄されていたことで共通する。SX21の河床から平安時代の土器が出土しており、古代の流路として存在していたことは間違いなく考えているが、現代の攪乱と古代の流路がほぼ一致する点に注意が必要かも知れない。なお、明治の土地更正図や米軍による航空写真・地元住民への聞き取りなどでは、川跡検出地点周辺で川や水路などの存在は確認できなかった。

SX21（図版24・25・111） A区周辺は約2mの盛土がなされていたため、調査対象範囲である12m×40mの周囲に矢板を打設し、その中の盛土を除去してから調査を開始した。しかし、旧表土を剥いでいる途中で、ビニールシートやブロック・土管などが大量に出土したことから、部分的に試掘坑を開削した結果、攪乱土の下からシルト・粘土の互層と礫層を検出した。盛土から礫層まで深さ3m以上あったことから、打設した矢板の長さでは調査対象範囲の全てを掘削できなかった。よって、5m×27mの範囲だ

けを調査対象として、旧表土から深さ1.7mまで発掘した。地山となる7層が南東側(28Bグリッド周辺)で急激に上がっていることから川岸と判断した。6層は砂とシルトが互層をなし、礫が集中して出土したことから河床面と思われる。しかし、7層は北西側に向かってさらに落ち込んでおり、川底はより深くに埋没している。また、7層と同じように5層が北西側に向かって傾斜していることから、川の流路が度々変わっていたと推測される。遺物は6層のみから出土した。大型の建築材を含む木製品がほとんどであったが、9世紀後半の土師器無台杯(343)と須恵器長頸瓶(342)が伴出した。

SX660(図版23・25・111) D区の17B～18Bグリッドで検出した。覆土(3～4層)は2層に分かれ、南側に向かって落ち込む。この周辺では古代の遺構確認面であるIV層が削平によって確認できなかったが、3層とV層が接する土層では、V層とIV層土によく似た緑褐色粘質土と青灰色シルトがマーブル状に混ざり合い、また、4層から土師器の細片が出土したことなどから、古代に存在した川跡と想定したい。トレンチ壁面でVI層がさらに落ち込む様子が窺え、さらに4層より下層でシルトと砂の互層が確認されていることから、A区と同様に、さらに下にはより大きな川が流れていた可能性が高い。

2) 竪穴住居(図版30・111・112)

奈良時代(8世紀前葉)の竪穴住居2基(SI417・539)を検出した。共に掘立柱建物群と重複しており、遺構プランの把握に努めたが、住居にともなう柱穴や床を確認することはできなかった。被熱した礫や煮炊具が直立して出土したことから竪穴住居のカマドと判断した。

SI539(図版30・112) 13C8グリッドで検出し、SB8・11・12・19の4基の掘立柱建物が重複する位置にあたる。甕が2個体出土した。6は胴部下半を欠いている以外はほぼ完全な形を留めており、やや口縁部を傾けながら直立した状態で出土した。7は口縁部～胴部上半の大型破片で、同一個体の小破片と共に倒れた状態で出土した。

SI417(図版30・111・112) 15C1グリッドで検出し、SB9と一部重複している。70cmほど離れて遺物のまとまりが2か所認められた。東側のまとまりではa～dの礫に囲まれるように2個体の甕が出土した。dは四角柱状の細長いもの、a・cは表裏面が平らな板状、bは1面だけが平らな断面三角形の礫である。dが直立し、b・cが平らな面を中央に向けて倒れこみ、aが水平な状態で出土した。全ての礫が被熱による脆弱化が認められ、礫に囲まれた中央部では厚く焼土が堆積していたことからカマドおよび住居床面と判断した。dの中央側の面では煤が付着していた。aと床面の間に多量の炭化物が認められたことから、床面よりも高い場所にaが設置されていたと推測される。2個体の甕のうち、口縁部を欠く2は直立した状態で、ほぼ完形の1は礫cと同じく中央側へ倒れこむように傾いて出土した。西側のまとまりでは、3と5の甕が逆位の状態で出土した。焼土や炭化物は認められなかった。東側の燃焼部および甕1の底部と比べて数センチほど高いレベルから出土したことから、床面ではなく、住居覆土中に含まれていた可能性がある。

3) 掘立柱建物(図版30～40, 108・112～116)

総数19棟の掘立柱建物を復元することができた。ここでは観察表では示しきれない情報を記述することに努めた。各建物の詳細なデータは巻末の遺構観察表を参照されたい。

掘立柱建物は8～15グリッド列に集中し、それ以外では4～5グリッド列に2棟(SB17・18)が認められるだけである。柱穴以外のピットや土坑の分布も同じような傾向が窺えることから、比較的限定され

た空間のなかで遺構が展開していたことが分かる。また、掘立柱建物の分布が調査区外にまで拡がることから、6～7グリッド列を挟んだ南北に建物群が形成されていた可能性が想定される。

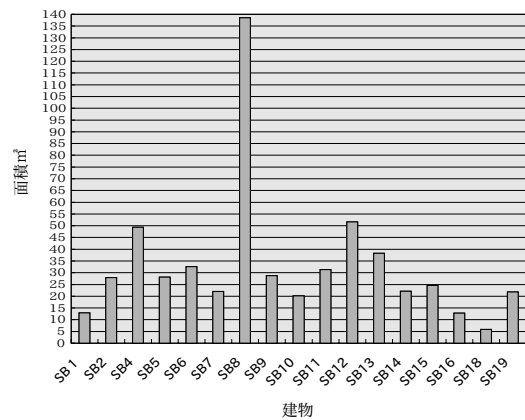
掘立柱建物の構造には側柱建物と総柱建物とがあり、側柱建物16棟・総柱建物2棟と圧倒的に前者の占める割合が多い。柱間数では3×2間が6棟と最も多く、3×1間と3×3間が各2棟、2×1間・2×2間・4×2間・4×3間・5×1間・5×2間・5×3間・8×2間が各1棟確認できる。ただし少数ながら、相対する柱間数が異なる例が認められる。SB2・10は、相対する梁間の柱間数が異なるもので、共に西側2間・東側3間となる。SB2の南東隅では柱穴を検出できなかったが、柱の間隔や対称的な柱構成から柱穴の存在を推定した。SB5は北側に庇を持つ可能性がある建物で、やはり東西の梁間で柱数が異なり、身舎の西側が2間、東側が1間となっている。一方、SB9は桁行の柱間数が異なるもので、西側2間・東側3間となる。さらに、東側梁間の柱穴間距離が不均等で、P413－411間・P412－108間が3.32m・3.1mとほぼ等しいのに比べて、P411－412は2.24mとかなり狭くなっている。また、P154と411を結ぶラインが、南北の梁間の軸とズレており、ほかの建物にくらべていびつな感がある。

平面形態では、桁行と梁間の比率が1:1.3以上となるものが10棟（SB1・2・4・8・9・11・12・13・18・19）と、1:1.2以下に収まるものが7棟（SB5・6・7・10・14・15・16）あり、長方形タイプが正方形に近いタイプよりも多い傾向にある。また、棟の方向をみると、南北棟4棟・東西棟14棟と圧倒的に後者が多く、建設にあたって強い規格が働いていたことを窺わせる。

規模では、Ⅰ類：138m²超、Ⅱ類：49～52m²、Ⅲ類：28～32m²、Ⅳ類：20～24m²、Ⅴ類：13m²弱、Ⅵ類：6m²以下に分類することが可能である。Ⅰ類はSB8、Ⅱ類はSB4・12、Ⅲ類はSB2・5・6・9・11、Ⅳ類はSB7・10・14・15・19、Ⅴ類はSB1・16、Ⅵ類はSB18がそれぞれ該当し、各類の構成比はⅠ・Ⅵ類が1棟、Ⅱ・Ⅴ類が2棟、Ⅲ・Ⅳ類が5棟となる。なお、SB13は38.2m²をはかり、ちょうどⅡ類とⅢ類の中間規模となる。さらに、平面形態と規模との関係を見てみると、Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ類が長方形タイプ単独で構成されているのに対して、Ⅲ類は長方形タイプ3棟（SB2・9・11）と正方形タイプ2棟（SB5・6）、Ⅳ類は長方形タイプ2棟（SB15・19）と正方形タイプ3棟

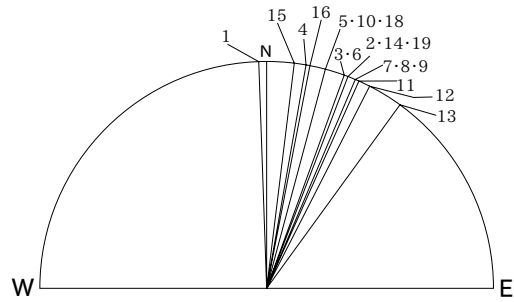
SB番号	構造	規模	面積	軸方向	柱間距離(平均)	
					桁行	梁間
1	側柱	3×2間	12.84㎡	2度西偏		
2	側柱	4×2間	27.81㎡	21度東偏		
3	側柱	5以上×3間		20度東偏	桁行 2.34m	梁間 2.34m
4	側柱	5×2間	49.27㎡	10度東偏	桁行 1.60m	梁間 1.77m
5	側柱	3×2+1間	28.05㎡	15度東偏	桁行 2.07m	梁間 2.80m
6	側柱	3×3間	32.5㎡	20度東偏	桁行 2.15m	梁間 2.70m
7	側柱	3×2間	21.94㎡	23度東偏	桁行 1.60m	梁間 1.77m
8	側柱	8×2間	138.43㎡	23度東偏	桁行 2.07m	梁間 2.80m
9	側柱	3×2間	28.71㎡	23度東偏	桁行 1.60m	梁間 1.77m
10	側柱	3×2(3)間	20.13㎡	15度東偏	桁行 2.07m	梁間 2.80m
11	側柱	3×1間	31.23㎡	24度東偏	桁行 2.15m	梁間 2.70m
12	側柱	5×1間	51.52㎡	27度東偏	桁行 1.60m	梁間 1.77m
13	側柱	4×3間	38.2㎡	36度東偏	桁行 2.07m	梁間 2.80m
14	総柱	3×2間	22.03㎡	21度東偏	桁行 2.15m	梁間 2.70m
15	側柱	3×3間	24.52㎡	7度東偏	桁行 1.60m	梁間 1.77m
16	総柱	2×2間	12.77㎡	11度東偏	桁行 2.07m	梁間 2.80m
18	側柱	2×1間	5.8㎡	15度東偏	桁行 1.60m	梁間 1.77m
19	側柱	3×1間	21.78㎡	21度東偏	桁行 2.07m	梁間 2.80m

第2表 掘立柱建物一覧



第8図 掘立柱建物面積比較

(SB7・10・14)、V類は長方形タイプ2棟(SB1・18)と正方形タイプ1棟(SB16)から構成されるとい違いがある。Ⅲ～V類には両タイプが含まれると同時にほぼ拮抗した構成比であることに注目すれば、平面形態と規模には相関関係が生じていると捉えて良いだろう。以上のように、規模と平面形態と関係に着目しながら各建物の様態を見てみると、I類とVI類を除くⅡ～V類のなかに、棟数や平面形態に示される二項対立的な構造を窺うことができ、I類とVI類を頂点とした階層的な構成が推測される。



第9図 掘立柱建物の主軸方位分布

柱穴の形態は、方形・円形・楕円形・不整形と多様だが、ひとつの掘立柱建物に対する構成比をみると、円形プラン主体が6棟(SB1・2・10・11・13・18)、方形プラン主体が7棟(SB4・6・8・9・12・14・15)、両者がほぼ同数となるものが4棟(SB5・7・16・19)ある。SB4・8・12などの大型建物が方形主体であるものの、そのほかの規模の建物では面積と柱穴プランとの相関は認められなかった。さらに、柱穴の短径と長径比をもとに建物規模とを比較してみたが、調査時の掘り過ぎあるいは不足、遺構実測時の誤差、図面計測位置の違いなど、様々な影響が考えられ、検討を中断した。しかし、相対的に方形プランの柱穴は規模が大きく、また深い傾向が窺えた。また、直径や深さにもバラつきがある。

調査にあたっては、掘り方プランを確認した後、プラン内部を一律に10cmを掘り下げて柱痕の検出に努めた。また、柱穴を底面まで掘り下げた段階で、柱が据えられてあった位置が粘土化しているものが定量認められた。しかし実際には、柱の位置が特定できたものは少ない。SB3(P44)・SB8(P355)・SB18(P545・542)では柱そのものが残っていたが、実測に耐えうるものはP44出土の357のみであった。建物の柱穴として復元できなかったピットからも柱根がいくつか出土しているが遺存状態は極めて悪かった。柱穴の覆土には、覆土B(灰白色シルトをブロック状に含む暗灰色粘質土)と覆土C(灰褐色粘質土)が認められたが、Bが一般的で、CはSB2のみに限られていた。

東西棟と南北棟の組み合わせから建物群の構成を復元するため、南北方向に対する建物軸の傾きを検討した。南北棟は桁行(長軸)を、東西棟は梁間(短軸)を主軸方向として、真北との角度を第9図で提示してある。その結果、東偏23度前後の建物が9棟(SB2・3・6・7・8・9・11・14・19)、東偏15度が3棟(SB5・10・18)を確認することができた。東偏23度前後の分布をみると、SB8を中心とした地点に集中が認められ、東西棟7棟・南北棟2棟から構成されていることが分かる。SB6・7、SB8・11・19がそれぞれ重複関係にあることから、この建物構成が単時期でないことは明らかであるが、東西棟と南北棟との配置は有意な関係を示している可能性が高いと考えられる。

建物の重複はSB8とSB5の周辺に集中し、特定の場所で建て替えが行なわれたことが窺える。また重複は東西棟同士が顕著である。柱穴の切り合い関係から建物の新旧関係が判明したのはわずかである。SB5周辺では、SB10<5<6<13といった新旧関係にあり、古い順からSB10→5→16→13と変遷したことが分かる。また、SB15はSB16とSB13に切られ、15よりも16・13が新しいと判断できる。しかし16と13の新旧関係は不明である。なお、竪穴状遺構(SX3)の床面からSB15と16の柱穴が確認されたことから、SB15→16→SX3といった新旧関係が把握できた。

遺物は柱穴の覆土から出土したが、細片が多く、時期を特定できるものはSB4・8・9・12・14で認められた。また、柱穴掘削時の埋め土か、柱抜き取り後の混入かといった建物建造時期を検討できるよ

うな出土状態が把握できた例は皆無であった。

4) 土 坑（図版26～29・41・42, 116・117）

柱穴よりも比較的大型で、炭土坑以外のものを土坑として取り扱う。調査区内から6基を検出した。506・508・560からは土師器や須恵器の破片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。よって、ここではこれらを古代の土坑とだけ位置付けておく。SK508・560・561は7C～8Cグリッドにあり、561を除き、不定形をなす。同グリッド周辺は地下水の沁み出しが顕著で、常にドロドロの状態での調査であった。形態のいびつさはそれに起因する可能性が高い。SK565と566は遺構の分布が希薄な15～16Cグリッドにあり、前者が後者より新しい。底面が比較的狭くて平らでないのが特徴的で、機能を推定するため土壌分析を行ったが有意な結果は得られなかった（第V章5B参照）。SK506は長軸がSB2とほぼ一致することから、便宜上、隣接するSK507と共に図版31に掲載した。506はちょうど中央部分のみが窪み、その周辺がテラス状になっている。東側を中心に不定形で浅く小さな穴がいくつも認められ、何かの足跡のようにも感じられた。507もまた底面が一定ではなく、何段かのテラスを形成して階段状の断面形態をなしている。

5) 土師器焼成遺構（図版29・43, 117）

SX16は14C12・17グリッドにあり、Ⅲ層中で検出した。南側の隅を確認用のトレンチで削平してしまっただが、平面形はやや台形状の隅丸長方形と推測される。南北方向150cm、東西方向126cm、掘り込みは浅くなだらかで確認面から深さ約5cmを測る。覆土は黒色炭化物の単層で、焼けた礫や多量の焼土粒子を含んでいた。遺物は土師器の腕に限られ、その場に潰れたように出土した。原形を留めたものが比較的多く、正位と逆位のものとも認められた。二枚重なったものが複数確認され、必ず正位のは正位同士で、逆位のは逆位同士で重ねられており、両者が混在するものはなかった。土器の表面は赤色化したり黒斑を生じており、被熱による器面の剥落も多くの個体で認められた。壁の一部では被熱によって赤色硬化していたが、床面ではあまり顕著な焼固は確認できなかった。

6) 竪穴状遺構（図版27・43・118）

SX3は、平面形や竪穴状に落ち込む形態などから竪穴住居の可能性を残しているが、本遺構にともなう柱穴やカマドを検出できなかったことから竪穴状遺構として取り扱う。10Cグリッドに位置し、平面形は隅丸長方形で、長軸3.64m、短軸3.0m、確認面からの深さ約22cm、面積は約10.92m²を測る。覆土には多量の炭化物や焼土のほか、被熱によって赤色化・脆弱化した拳大～人頭大の礫が含まれていた。2層は炭化物と灰だけで構成されていたが、壁や床が焼けた痕跡は認められなかった。遺物は1～3層から出土しているが、特に2層からの出土が多かった。また、出土量はほかの2層に比べて少ないものの、3層からはほぼ完形の土師器腕や大型破片などが多い傾向にあった。遺物は土師器を主体として、灰釉陶器・白磁・佐渡小泊産須恵器が確認されている。なお、白磁の同一個体破片が約3m離れたSX4から出土している。

底面および壁面からピット8基を検出した。検出面で重複が確認されていた南側壁面のものを除き、7基全てがSX3の覆土を除去した段階で検出した。ピットの覆土は灰白色シルトをブロック状に含む暗灰色粘質土（覆土B）で、SX3のそれとは明確に区別できたことから、ピットはSX3よりも古いものと判断

した。なお、覆土およびその配列から、ピットはSB15と16を構成する柱穴と確認できた。また、同一個体破片の白磁が出土したSX4は、SB15を構成するP400を切って構築されていることから、SX3と4が共にSB15よりも新しいことが判断でき、さらに、SB15の柱穴で認められた覆土Bよりも炭化物を多量に含んだ覆土Aが新しいことをも保証している。

なお、炭を多量に含む点は、ほかの炭土坑（SX4・196・526・540・541・659）との共通性が認められるが、壁面や床面が焼けていないことや、形態や規模などの点から両者を別遺構として取り扱った。

また、本遺構から出土した炭化物をもとに、放射性炭素年代測定（AMS法）による分析を行っている（第V章5A参照）。

7) 炭 土 坑（図版26～28・44・45，118・119）

ほぼ炭化物の単層である黒色土層を覆土とする土坑を炭土坑とする。焼土粒子を混入したり、土坑の底面や壁面の一部が焼けて硬化したものが多くことから、炭焼き遺構（製炭土坑）の可能性が高いが、全ての土坑で壁面等の被熱が確認できないことから機能の限定は控えたい。掘立柱建物15とSX4、SB18とSX540における切り合い関係から、掘立柱建物群よりも新しく構築されたことが判断できる。また、白磁碗の同一個体破片の共有と炭化物を多く含む覆土の特徴から、炭土坑と竪穴状遺構はほぼ同時期に埋没したものと考えている。

本遺構は12基確認したが、9基のみ図化した。図化しなかった3基の遺構は、14B12・11B16・13B24～25グリッドに存在した。このほかにも、炭化物の集中度が低かったり、掘り込みを持たないものなどは確認できなかった可能性がある。SX113・114のように掘り込みがなく、不整形を呈するものは限られ、掘り込みを持ち、隅丸方形を呈するものが多い。規模には長軸76～228cm、短軸70～170cmと幅がある。壁面や覆土中が焼けて硬化した面を持つのは541と659の2基に限られ、掘り込みが深い点で2基は共通している。分布は二か所にまとまる傾向がある。ひとつは10～14グリッドで、掘立柱建物群が集中する地点と重なっている。もうひとつは遺構が希薄となる3～6グリッド周辺で、SX600が1基だけ離れて存在する。なお、SX600は地下水や雨水の影響でセクション図を作成することが出来なかった。浅い掘り込みを有している。

4 遺 物

五反田遺跡平成15年調査区の出土遺物はコンテナ60箱におよぶ。そのほとんどを奈良・平安時代の遺物が占め、ほかには縄文時代中期・中世（14～15世紀）・近世（16世紀末）が少量含まれている。遺物の種類では、土器・陶磁器のほかに石製品と木製品があるが、出土位置や層位からそのほとんどが古代に属する可能性が高い。ここではまず、主体をなす古代の土器・陶磁器について述べた後、これ以外について順次みていくこととする。

A 奈良・平安時代の土器・陶磁器

須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁がある。その大半を須恵器が占め、土師器がそれに続く。灰釉陶器は破片数78点と定量認められ、緑釉陶器・白磁はわずかである。いくつかの遺構から出土した以外は、ほとんどの遺物が包含層からの出土である。資料化にあたっては、遺構出土例を中心に器種を網羅することに留意したが、細片のため図示できなかった器種が少なからずある。なお、器種分類および記述方法については今池遺跡〔坂井ほか1984〕・一之口遺跡西地区〔坂井ほか1986〕の各調査報告書、編年の位置付けについては、春日真実氏の研究〔春日1999〕などを参考にした。

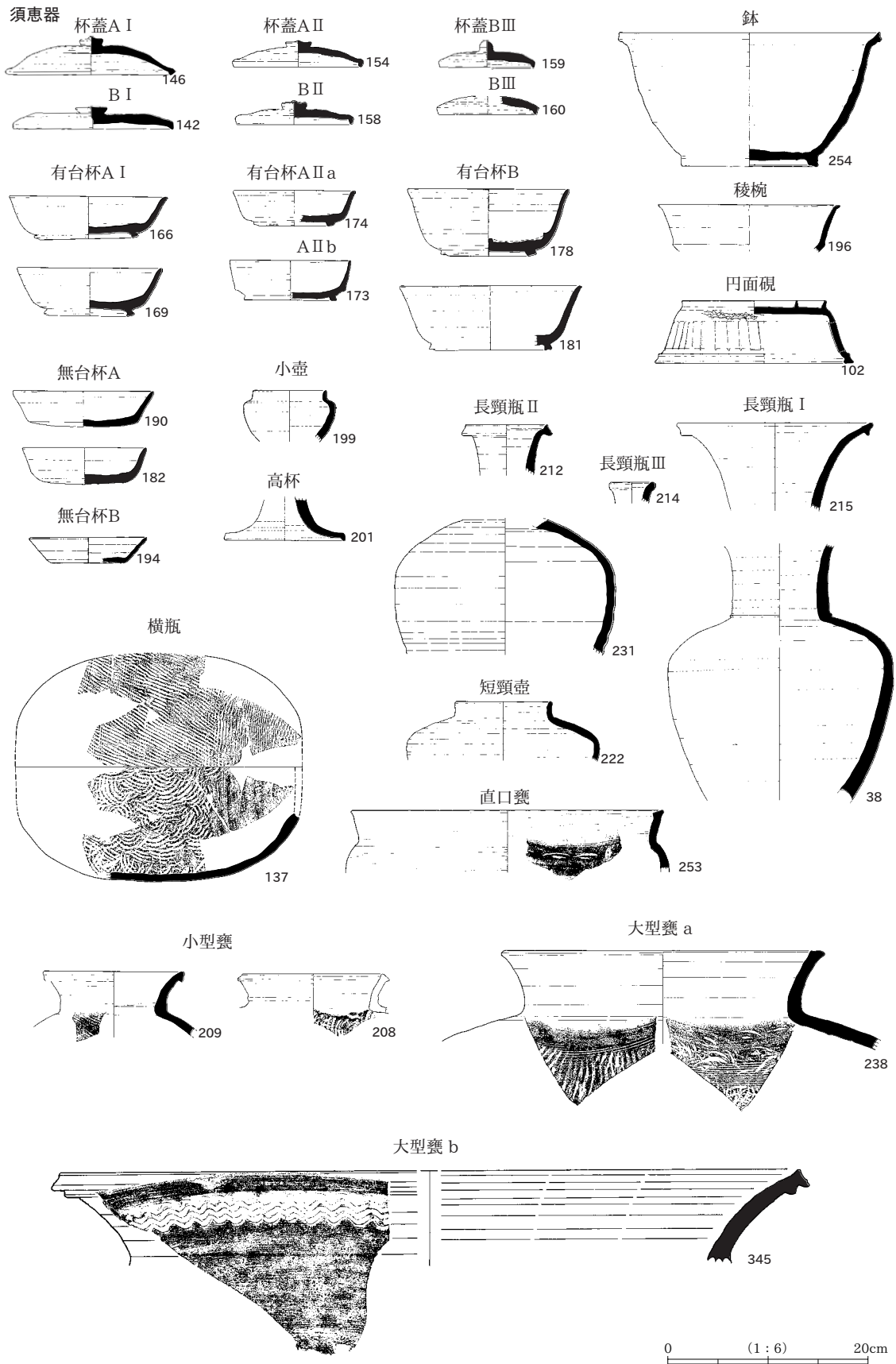
1) 器 種 分 類

本来であれば、出土資料すべてを観察のうえ、本遺跡の特徴を示す分類項目を設定すべきであるが果たせなかった。また、器種の認定基準についても十分な検討を加えていない。ここでは、既存の分類案を参考にしながら、特徴的な器種を中心に大まかな分類を行い、以後の記述の便を図ることとしたい。分類にあたっては、まずは蓋・有台杯・無台杯などの器形によって大別し、その中の形態差によってA・B・C、さらに細かい特徴や文様の有無などによってa・b・cのアルファベットを付け加えた。また、同一器種のうち、法量の異なるものはⅠ・Ⅱ・Ⅲなどのローマ数字を付けて示してある。ただし甕は、器形・法量のバラエティーが多いため、記号による表示では煩雑とならざるを得ない。そこで、小型甕・大型甕などの法量によって当初から大別し、そのうえで細別を行うこととする。

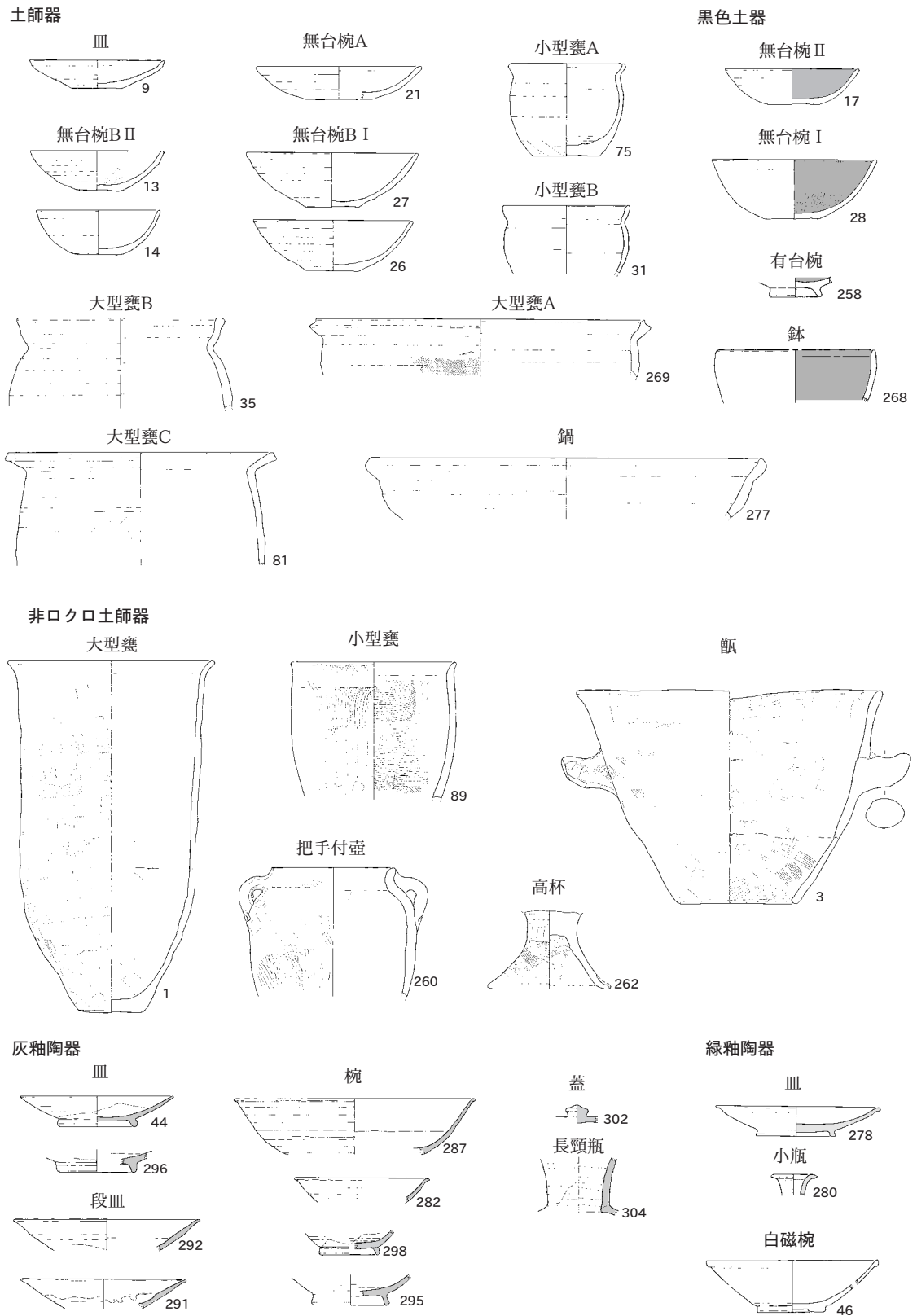
須恵器（第10図）

食膳具と貯蔵具から構成され、杯蓋・有台杯・無台杯・鉢・稜椀・高杯・円面碗・長頸瓶・小型壺・短頸壺・横瓶・小型甕・大型甕などの器種がある。胎土の特徴は大まかに次の3種類にまとめることができる。なお、胎土観察は全てを対象としたものではなく報告遺物のみを行った。胎土①群は小型の石英・白色粒子を含み、比較的精良で緻密な胎土の一群。高田平野東部の末野・日向窯跡群で主体的な胎土とされるもの。胎土②群は砂質分が強く、触るとザラザラとした感触が強い一群。高田平野西部に点在する滝寺窯跡群などに特徴的な胎土である。胎土③群は白色粒子を比較的多く含むもので、①・②に比べてきめ細かく硬質な感がある。佐渡市小泊窯跡などに特徴的な胎土とされる。本遺跡では胎土①群が最も多く、②群・③群が少量認められる。なお、観察表では、胎土②・③群のみを備考に記載し、大多数を占める胎土①群は基本的に触れていない。

杯蓋 器高が高くて山笠状を呈するAと天井部が広くて低平なBとがある。法量では、口径の大きさから大・中・小の3種に分類され、大きいものからⅠ・Ⅱ・Ⅲとする。杯蓋Ⅰは有台杯AⅠと、Ⅱは有台杯



第10図 器種分類図(1)



第11図 器種分類図(2)

AⅡとセットをなす。総量を具体的に把握してはいないが、遺跡全体を通して、最も出土点数が目立つ器種である。

杯蓋Ⅰ 口径14～16cm前後の大型品である。天井部にはロクロ削りの痕跡が明瞭である。比較的器壁が厚く、低平なBの天井部は特に厚く仕上げられたものが多い。つまみの形態には擬宝珠状(146)とボタン状(142)とが認められ、前者はAに、後者はBに特徴的である。

杯蓋Ⅱ 口径11.5～13.5cm前後の中型品である。杯蓋Ⅰに比べて器壁の厚さは相対的に薄く、山笠状のAが低平なBよりもやや目立つ。杯蓋Ⅰと同様に、器形Aと擬宝珠状つまみとに相関関係が伺えるが、一致しないものもある。

杯蓋Ⅲ 口径9～10cm前後の小型品である。杯蓋のなかではもっとも少なく、図示できたのは3点である。杯蓋ⅠやⅡのような器形による違いは認められず、低平なBのみで構成される。金属器を模倣したものと考えられる。

有台杯 身の浅いものを有台杯A、身の深いものを有台杯Bとする。前者は法量からⅠ・Ⅱに分かれ、さらに形態差からa・bに細分する。杯蓋の次に出土点数が多い。

有台杯AⅠ 口径13～14cm前後に分布の中心をもつ。底部から体部の立ち上がりが丸みをもち、やや腰が張って、口縁部は外反する。高台は底部のやや内側に付され、接地面はロクロナデにより若干くぼみ、おおむね内端接地となる。底面はヘラ切り離しで、体部から口縁部はロクロナデとする。口縁端部は丸く仕上げられる。

有台杯AⅡ 口径11～12cm前後の小型品。AⅠに比べて体部は直線的な傾向にある。底部から体部の立ち上がりが丸みをもつものをa(174)、角ばるものをb(173)とする。底部の切り離しは前者がヘラキリ、後者は糸切りが多い。また高台の形態においても、aが内端接地、bが外端接地ぎみとなることから、後者はより新相を示すものと考えられる。

有台杯B 口径は14～18cmと幅がある。身が深いことを除けば有台杯AⅠと共通し、底部から体部の立ち上がりは丸みをもち、高台も低く、おおむね内端接地となる。大型品である分、器壁が厚い。

無台杯 器形の違いからA・Bに分類する。共に口径12～13cm前後が主体をなす。

無台杯A 底部中央が外側に若干張りだして丸底ぎみとなり、底部から体部の立ちあがり丸みをもつもの。比較的器壁が厚く重量感がある。底部切り離しはヘラ切りが多く、体部はロクロ成形となる。

無台杯B 比較的広く平らな底部を持ち、体部への立ちあがり角張り、直線的に外傾する器形を呈するもの。器壁は無台杯Aに比べて薄く仕上げられている。底部切り離しはヘラ切りと糸切りとがあり、底面は水平よりも窪む。体部はロクロ成形となる。

鉢 底部から胴部にかけて、ゆるやかに内湾しながら外傾し、口縁部でやや強く外反する。器壁は厚く、大型で重量感がある。全形がうかがえる例では、高台は底部外側に付着し、比較的高くがっしりしている。例数は多くないが、確認できているものの口径は26cm前後に集中する。

稜 椀 体部下半に明瞭な稜を持つもの。胴部上半から口縁部は長く、大きく外反する。確認できた個体数は少ない。金属器模倣と考えられる。法量による細分の可能性があるが、例数が少ないことから一括して取り扱う。

円面硯 1個体が確認できた。天井部を硯面として、脚部には透かしを持つ。

高 杯 脚部破片が2点確認できた。

小型壺 肩が張り、口縁部が短く立ち上がって広口となる小型品。

短頸壺 胴上部が強く張って肩部を作り出し、口頸部で急速にすぼまる。口縁部は短く立ち上がって広口となる。定量確認できるが、全形が窺えるものはない。

長頸瓶 頸部が細く長いものを壺と区別して瓶とする。破片資料がほとんどで、全形を窺えるものは限られている。大・中・小の法量差が認められ、それぞれⅠ・Ⅱ・Ⅲとする。

長頸瓶Ⅰ 口径20cm前後となる大型品。頸部から口縁部に向かって大きく外傾する。口縁部外面に突帯を貼り付けたり、端部を肥厚させて有段口縁とするものが認められる。また、肩部が角をもって強く張り出すものや、丸みを持って球胴となるものなど、胴部形態にはいくつかのバラエティーがある。

長頸瓶Ⅱ 口径7～8cm前後の中型品である。長頸瓶Ⅰと同様、口縁部・胴部形態ともにバラエティーが認められる。

長頸瓶Ⅲ 長頸瓶Ⅰ・Ⅱよりも小さいものを便宜上ここに含めた。分類の基準にした214は口径4.4cmを測る。

横瓶 俵形の胴部に短い口頸部が付いたもの。例数は少なく、遺跡全体で5個体が確認されている。環状の把手が付くもの(205)もある。

直口甕 やや肩が張り、口頸部で直立ぎみに外反するもの。図化できた資料は253の1点のみである。

小型甕 口径13cm以下のものを一括する。全形をうかがえるものがなく詳細は不明であるが、口縁端部を厚くして面を形成する点が特徴的である。口頸部をロクロナデ、胴部をタタキとする。なお、本類として分類した中には、横瓶が含まれている可能性がある。

大型甕 口径20cmを越える大型品を一括する。口縁端部を肥厚させて面を形成するものや、外面に突帯をつけて段を形成するものなど口縁部形態は多様である。文様の有無からa・bに細分する。

大型甕a 頸部を無文とするもの。

大型甕b 1～3段程度の波状文を施文すもの。aより大型品の傾向がうかがえる。

土師器（第11図）

食膳具と煮炊具から構成され、皿・無台椀・高杯・甕・把手付甕・鍋・甑の各器種が認められる。煮炊具には、成形時にロクロを使用する「ロクロ土師器」と、使用しない「非ロクロ土師器」の2つの手法が確認できるが、前者がほとんどを占めて後者はわずかである。

皿 器高が低く、口縁部は直立ぎみに短く立ち上がる。

無台椀 口径に比して底径が約1/3となり、やや深身となるものを椀とする。器形からA・B、法量からⅠ・Ⅱに分ける。体部はロクロ成形で、底面切り離しは全て糸切りとなる。

無台椀A 皿状の浅身のもの。口径は15cm前後となる。SX016一括出土資料に特徴的である。

無台椀BⅠ 口径15.5cm前後・器高5cm前後の大型品。内面は平滑に仕上げられるが、外面はロクロナデの凹凸が目立つものが多い。

無台椀BⅡ 口径13cm前後・器高4cm前後の小型品。

小型甕 大型甕に対して小さいものを一括する。ロクロ土師器と非ロクロ土師器とがある。

〈ロクロ土師器〉口縁部が「く」字に外反して短胴となり、胴部外面はナデ、底部近くではケズリとなる。口縁部形態からA・Bに細別可能で、Aは少なく、Bが主体的となる。

小型甕A 口縁部端部がつまみ上げられ、その外側が外傾する面をなすもの。例数は少ない。

小型甕B 上端をつまみ上げずに丸くおさめ、外面頸部を強くナデで凹線状をなすものである。

〈非ロクロ土師器〉口縁部の外反度が弱く、胴部と口縁部との境界が不明瞭。器面調整はハケメとな

る。

大型甕 ロクロ土師器と非ロクロ土師器とがある。

〈ロクロ土師器〉口縁部形態によりA・B・Cに細分する。小型甕と同様にBが主体を占め、A・C共に少量である。

大型甕A 口縁上端をつまみ上げるもの。

大型甕B 口縁端部を肥厚させて面をなし、頸部を凹線状に窪ませるもの。

大型甕C 口縁部が強く外側に折れるもの。

〈非ロクロ土師器〉口縁部が短く外反度は弱い。器面調整のハケメが粗いため、粘土紐の接合痕を残すものもある。

鍋 器壁が厚い点が特徴的で、口縁部形態はロクロ土師器小型甕B・大型甕Bに類似する。

把手付壺 口縁部と肩部をつないで環状の把手が付くもの。非ロクロ成形である。1点のみ確認された。2個1対の把手が付くものとして復元実測したが実態は不明。外面にはわずかにミガキ調整痕が残る。

甌 全形がわかるものは2点のみで、共に非ロクロ成形で底部全面に孔が開く。多孔底は確認できなかった。ほかに把手の破片が2点確認されている。

高杯 脚部が数例確認され、全て非ロクロ成形である。

黒色土器

無台碗・有台碗・鉢が認められる。内面に丁寧な研磨を施した後、炭素を吸着させて黒色化したもの。内外面を黒色処理したものは確認できなかった。

無台碗 I 土師器無台杯B Iと同様の形態・法量を示すもの。

無台碗 II 土師器無台碗B IIと同様の形態・法量を示すもの。

有台碗 高台部のみが出土した。有台皿の可能性もある。

鉢 碗よりも身の深いものを一括した。

灰釉陶器 (第11図)

破片数で78点が確認され、うち28個体を図示した。皿・段皿・碗・蓋・長頸瓶の各器種が認められ、皿・段皿・碗には高台が付く。釉は、緑色にきれいに発色したものと発色が悪くほとんど無色のものがある。施釉方法はツケガケがほとんどで明瞭なハケヌリは認められない。直接重ね焼きをした痕跡が明瞭で、三叉トチン痕は確認できなかった。高台はいわゆる三日月高台が多い。胎土は2種類が確認された。ひとつは、暗灰色の色調を呈し、砂質分が強く触感がザラつくもので、白色粒子を定量含む。もうひとつは、乳白色を呈し、より精良・均質なものである。黒色粒子を定量含む。前者は猿投窯産、後者は東濃産と推定される。遺跡全体を通して猿投窯産が主体を占め、東濃産は報告外を含めて4点とわずかである。

緑釉陶器 (第11図)

碗皿類3点と小瓶1点が確認された。皿2点は光沢を持ち、黄緑色に発色した優品である。規格が全く等しく、共に三叉トチンの痕跡が明瞭で、それを掻き取ろうとした擦痕が認められる。

白磁 (第11図)

碗1点が出土した。色調はやや黄色味を帯びた白色で、釉はなめらか、緻密・精良な胎土である。幅広の蛇ノ目高台を持ち、直線的に立ち上がり玉縁状口縁に至る。内外面全面施釉されるが、高台畳付のみ釉を削り取って露胎とする。口縁部はいわゆる玉縁状をなす。白磁碗I-1類〔山本2000〕に比定され、大宰府編年における8世紀末～10世紀中頃の標識資料とされる。

2) 遺構出土遺物（図版46～52, 120～125）

SI417（図版45-1～5, 図版120） カマドとその周辺から潰れたようにまとまって出土した。非ロクロ成形の大型甕（1・2）・甗（3・5）・高杯（4）がある。甕は共に長胴平底で、外面ハケ・ヘラケズリ、内面ハケ・ナデ調整を施す。口縁部は軽くナデる程度で、1は口縁部と胴部の境が不明瞭である。粘土紐の接合痕がよく確認できる。甗は大型と小型の別があるが、共に底部全面を孔とする。5は片側にしか把手が付かない。内外面をハケ・ナデ調整し、3では内面の一部がミガキ調整される。口縁部は横ナデされて胴部との境界を明瞭とするが、器形のうえでは、胴部から一連につづいて直立気味に立ち上がる。高杯は太い柱状の基部に八字状に開く脚部をもつ。基部上端は接合痕から剥落している。甕の形態や成形手法などから、おおむね春日編年Ⅲ期：8世紀前葉に比定される。

SI539（図版46-6・7, 図版120） 直立するように2個体の甕が出土した。共にハケ調整を基本とする非ロクロ成形の甕Bである。6の口縁部が大きく外反するのに比べて、7の外反度は弱く、器壁も6に比べて厚い。SI417と同時期のものと考えられる。

SX3（図版46-8～48-46, 図版120・121） 竪穴状遺構からまとまって出土した。破片数1990片、口縁部残存率計測法で546.5／18個体の遺物が認められ、そのうち39点を図示した。主な器種には、土師器皿（8・9）、無台碗BⅠ（24～27・29）・BⅡ（10～16・18～20・22）、小型甕B（31～33）、大型甕B（35）、鍋（36）、黒色土器碗Ⅰ（23・28・30）・碗Ⅱ（17）、須恵器長頸瓶Ⅰ（37・38）・大甕a（45）、灰釉陶器皿（43～44）、白磁碗（46）などが認められる。器種構成比率（第3表）では、口縁部残存率では土師器食膳具が8割と最も多くを占め、土師器煮炊具・須恵器食膳具・須恵器貯蔵具がそれに続く。破片数でも、土師器小型甕か碗類か判別できなかったものを除くと、ほぼ同様の比率を示している。

土師器はロクロ成形で製作され、皿・無台碗の底部切り離し痕は全て回転糸切りである。土師器は全般的に遺存状態悪く、表面が摩滅して胎土中の砂礫が表面に露出している。ただし、黒色土器は内面を丁寧に研磨しているため、内面の遺存状態のみ良好である。土師器無台碗Bは、Ⅰの口径が15cm前後、Ⅱの口径が13cm前後と両者に2cmほどの開きがあるのに比べて、底部径は5～5.5cmに全てが収まり両者での差がほとんど認められない。黒色土器の形態も同様の傾向を示す。また、口縁部内面を少し肥厚させ、軽く稜をもつ形態（10・18・21・25・26・29）が特徴的である。なお、20と22は同一個体の可能性がある。小型甕・大型甕はB類のみで構成され、端部をつまみあげるA類は認められない。31・32では、口縁内外面の対応するか所のみ煤の付着が認められる。

須恵器で図化可能なのは貯蔵具のみで、食

種類	器種	口縁部 残存率/18	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)
須恵器	有台杯	4	5	0.9%	0.8%
須恵器	無台杯	7	8	1.5%	1.3%
須恵器	無台杯か有台杯	0	27	0.0%	4.5%
須恵器	蓋	10	6	2.2%	1.0%
須恵器食膳具 計		21	46	3.8%	2.3%
土師器	杯または碗 (皿を含む)	388	527	84.7%	87.4%
土師器	有台碗	11	5	2.4%	0.8%
黒色土器	碗	28	18	6.1%	3.0%
黒色土器	有台碗	0	1	0.0%	0.2%
灰釉陶器	皿	9	2	2.0%	0.3%
白磁	碗	1	4	0.2%	0.7%
土師器食膳具 計		437	557	80.0%	28.0%
食膳具 計		458	603	83.8%	30.3%
須恵器	甕	4	54	66.7%	61.4%
須恵器	壺・瓶類	2	34	33.3%	38.6%
貯蔵具 計		6	88	1.1%	4.4%
土師器	小甕	21.5	28	50.6%	31.5%
土師器	甕	21	61	49.4%	68.5%
煮炊具 計		42.5	89	7.8%	4.5%
土師器	小甕か碗類	40	1210	7.3%	60.8%
総 計		546.5	1990	100.0%	100.0%

第3表 SX3出土土器 器種構成比率

膳具は小破片ばかりである。37・38は断面三角形の突帯を貼付した長頸瓶で、37は胴上部に、38は頸胴部界に付す。なお、37・45が胎土③群で佐渡産と推測されるほかは、すべて胎土①群：高田平野東丘陵産である。

灰釉陶器は2個体が出土している。43は内面と外面高台まで施釉が施され、鮮やかな鶯色に発色している。内面には直接重ね焼きした痕跡が明瞭であり、また高台畳付にも釉の剥落が認められる。44は内外面の施釉位置が一致し、また施釉範囲が上に開口する弧を描くことからツケガケと判断できる。底面には「内」が墨書される。43は高台が直立気味で幅広となり、いわゆる三日月高台が崩れた印象を受ける。また44は高台が低く、幅広となり、踏ん張るように体部下端側に付き、明らかに新しい様相を示している。

白磁碗は胴部～底部破片が検出され、同一個体の口縁部破片がSX4から出土した。すでに器種分類の項で触れたように、乳白色の釉色と緻密な胎土、高台畳付を露胎とする点に特徴がある。高台畳付に残された工具痕から、手持ちヘラケズリで釉を掻き取ったことが分かる。また玉縁状口縁は、断面観察から肥厚部分に隙間が確認され、いわゆる折り返し口縁とされるものである。

土師器無台碗の形態的特徴・皿形態の共伴・器種構成比率における土師器食膳具の卓越などから、本遺構出土資料は春日編年Ⅶ1期：10世紀前半におおむね位置づけることができる。また、灰釉陶器は三日月高台からの形骸化が認められ、いわゆるK-90号窯式よりもO-53号窯式に近いことから、10世紀前葉に下る可能性がある。在地土器の年代観とおおむね一致するものと考えて良からう。白磁碗はすでに触れたように、大宰府編年の8世紀末～10世紀中頃の標識資料とされ、編年の位置づけの基準とはならないが、白磁が威信財として取り扱われたと想定すれば伝世品である可能性が高い。

SX16 (図版48-47～49-66, 図版122・123) 24個体を図示することができた。器種は土師器無台碗Aのみに限られ、底部切り離しは全て糸切りである。その場で潰れて出土し、粘土紐の接合痕からそのまま剥がれた例が多い。器形の歪みや器面の弾けが著しく、焼成時の失敗品と思われる。口径が12.7～13.6cm前後とバラつきがあるのはそのためかも知れない。一方、器高は3.0～3.6cm・底径は5.0～5.5cm前後に集中する。土圧による変形の可能性もあるが、底径が一定であり、身の浅い点で共通することから、一定の規格性にもとづく法量と考えられる。表面の摩滅や剥落が著しいため成形痕は不明瞭であり、かろうじてロクロ成形の凹凸が確認できる。底部は厚く円盤状に作られ、水平よりも若干窪み気味となる。また、口縁部内面を少し肥厚させ、軽く稜をもつ形態はSX3出土の土師器無台碗Bと共通する。おおむね春日編年Ⅶ期に位置づけられよう。

SX526 (図版49-71～79, 図版123) 須恵器杯蓋BⅡ(71)・無台杯A(74)・無台杯B(72)・長頸瓶Ⅰ(80)、土師器無台碗BⅡ(73)・小型甕A(75・77)・小型甕B(76・78～79)がある。須恵器の胎土は71が胎土②群で高田平野西部、72は胎土③群で佐渡産と推測される。72は外側に長く反る体部上半と丸みを帯びた底部が特徴的で、底部は手持ちヘラケズリされて切り離し痕が確認できない。72の底面は水平よりも窪み、ヘラ切り離し痕が明瞭である。また内面では中央部が高まってヘソ状の凸部を形成する。内外面共にロクロ成形により平滑に仕上げられる。73は口縁端部が薄く、底部からの立ち上がりで強くヨコナデされて窪む点が特徴的である。80は器壁の薄さや作りから長頸瓶であることが判断できるが、口径は小破片のため推定である。75～79の小型甕は内外面に煤が付着し、表面は被熱により摩滅が著しい。74が8世紀初の可能性があるが、おおむね春日編年Ⅴ2期：9世紀中葉に比定できる。

SX541 (図版49-81, 図版123) 図示できたのは土師器大型甕C(81)1個体である。外面上半をロクロナデ、下半を縦方向のヘラケズリする。内面はロクロナデで平滑に仕上げ、内外面には黒斑を生じる。

SX600（図版50-83～91，図版124） 須恵器有台杯A I（84）・無台杯A（83）・小型壺（87）、非ロクロ土師器甕（86・88・89・90・91）、甑（85）がある。84は口径のわりに器高が低い。高台は底面外側に付き、潰れたように低く、外端接地となる。接地面中央が広く窪む。底面は中央に向かって外側へ張り出す。83・84ともにヘラ切り。86～91は内外面ハケメ調整で、口縁部はわずかに外反するなど胴部との境界が不明瞭である。90が例外的に段を作り出す。端部は丸くおさめる。89では胴部下半を縦位のヘラケズリする。非ロクロ土師器が定量伴う器種構成ならびに須恵器有台杯の形態などから、おおむね春日編年Ⅲ期：8世紀前葉に位置づけられよう。

SX21（図版61-82・342～344，図版130） A区で検出された川跡の河床面から出土した。須恵器長頸瓶Ⅱ（342）・大型甕B（344）、土師器無台杯BⅡ（343）・有台椀（82）がある。82は唯一の土師器有台椀である。口径11.8cm・底径5.6cmと小型品で、高台は底面内側に付き、直立気味となる。接地面はほぼ平坦で、中央がやや窪む。内外面ロクロナデで、特に内面は平滑に仕上げられる。343・342は春日編年Ⅵ期、82はⅦ期に比定され、おおむね9～10世紀代に位置づけらる。

SB4（図版50-92～103，図版124） 掘立柱建物の柱穴から出土したもので、小破片が多い。須恵器杯蓋A I（93）・AⅡ（94）・BⅡ（92）、須恵器有台杯AⅡ（97）・無台杯A（99）・無台杯B（101）、黒色土器（103）、円面硯（102）がある。須恵器有台杯97・98は共に高台が低く潰れ、97では接地面が窪んで凹線をなし、98の窪みは弱い。また、98の底部は特に器壁が厚い。97は酸化炎焼成で褐色を呈する。須恵器無台杯99は内外に火だすき痕が残る。円面硯（102）は、同心円状に2条の突帯を天井部に貼り付け、内側突帯の内面を硯面とする。脚部には単位が不明なものの、矩形の透かしが開き、透かしの間には縦位の単沈線が配置される。また脚部上段には3本同時施文による波状文が描かれる。103は黒色土器椀の底部片で、内面には漆が薄く付着し、漆紙の可能性が高い。剥落した漆薄片を細かく観察したが文字は発見できなかった。99・102は胎土②群で高田平野西部産と推測される。おおむね春日編年Ⅳ～Ⅴ期：8世紀後半～9世紀前半に位置づけられよう。

SB8（図版51-104～111，図版124） 須恵器杯蓋A I（106）・AⅡ（104）・BⅡ（105）、須恵器有台杯A I（109）・AⅡ（108）・B（110）、須恵器無台杯A（113）・B（111）、ロクロ土師器甕（107）などがある。108・109の高台は内端接地となり、内面の凹凸が激しい。111の底部は糸切りで、体部と底部の境を強くナデで窪む点が特徴的である。酸化炎焼成。111・112は酸化炎焼成で褐色がかかる。109の内面には×のヘラ記号が刻まれ、104の天井部には墨痕、113の底部には「兼公」の文字が読み取れる。多少の時期幅があるようだが、おおむね春日編年のⅣ～Ⅴ期：8世紀後半～9世紀前半に位置づけられよう。

SB9（図版51-114～118，図版125） 須恵器杯蓋B I（117）、須恵器無台杯A（116）・B（114・115）、非ロクロ土師器大型甕（118）がある。114・116は酸化炎焼成で白色を呈する。115は底面内側が極めて平滑となり、転用硯の可能性が高い。117は端部の返しが弱い低平な杯蓋で、天井部には沈線3条が施されている。118は器面が摩滅しており、調整痕が不明瞭である。口縁端部は面をなす。おおむね春日編年Ⅲ～Ⅳ期：8世紀代に収まるものと考えられる。

SB14（図版51-119・120，図版125） 須恵器杯蓋AⅡ（119）・BⅡ（120）の2点がある。119は天井部糸切り後にロクロケズリされる。120は酸化炎焼成で白色を呈する。

SB12（図版51-121，図版125） 須恵器貯蔵具1点がある。酸化炎焼成で褐色化する。内面はハケ調整の後にナデ、外面はロクロナデ調整である。

その他のピット（図版51-122～52-141，図版125） 須恵器杯蓋AⅡ（122・123）・BⅡ（124）・BⅠ（126・127）、須恵器有台杯AⅡ（128・129）、須恵器無台杯A（130～133）、須恵器長頸瓶Ⅱ（135・136）、横瓶（137）、非ロクロ土師器大型甕（138～139・141）がある。なお、137は胎土③群で佐渡産と推測される。124・126の天井部にはヘラ切りの痕跡が残り、少しナデが加えられている。125は吸盤状の大型のツマミを付した蓋である。129は酸化炎焼成で褐色を呈する。高台が底面内側につき、直立気味となる。高台接地面の内面がわずかに窪み、底部からの立ち上がりは角を持つ。128に比して器壁が薄い。130・133は特に焼成が不良で土師質となったもの。底面ヘラ切り離して、粘土のまくれが認められる。内面中央は凸部が形成される。内外面には火だすきの痕が認められる。131は底面ヘラ切り後にナデ調整される。134が8世紀前葉にさかのぼり、137の佐渡産須恵器が9世紀後半に下る可能性が高いほかは、おおむね春日編年Ⅳ期：8世紀後半から9世紀前葉に収まるものと考えられる。

3) 包含層出土土器（図版52～61・126～130）

図化にあたっては、器種構成やバラエティーを示すものを優先した。以下では、実測図や観察表では表現しきれない点を中心に記述する。

須恵器

杯蓋 AⅠ（146・149）・BⅠ（142～145・147・148）・AⅡ（150～154・156・157）・BⅡ（155・158）・Ⅲ（159～161）などがある。法量を同じくする142～149では、低平な形態のBでは天井部の平ら部分が厚く仕上げられているのが特徴的である。特に144では内面のふくらみが顕著である。154は内面に1条の沈線からなるヘラ記号が施される。147は天井部に幅1mmの平行沈線がめぐり、沈線間は幅5mmと浅いが、沈線幅が一定であることから、砂粒が動いたのではなく2条一組の工具による施文と判断した。天井部ではケズリのほか、粘土がまだ軟らかいうちに調整したため、胎土中の砂粒が動かずナデに似た調整痕を示すものがある（154・155・157・158など）。法量の小さいものに多く目立つことと関係するかも知れない。145は焼き歪みのため天井部がへこむ。また天井部には、ほかの蓋の返り部あるいは有台杯の高台端部が融着している。降灰が部分的に認められることから、蓋の上に正位の蓋または有台杯を重ねて焼いたことが分かる。162・163はつまみの形態がほかとは異なるものである。胎土は③群で佐渡産と推測される。162は直径3.5cmのボタン形で低いつまみが付く。つまみ中央の突部が外面から見えるのが通例であるが、これはつまみ内部が窪んで突部が隠れている。体部はロクロナデによる器面の凹凸が激しい。163は直径7cmの大型環状のつまみを付けたもの。つまみ取り付け時に強く撫で付けたため、つまみ外面に幅5mm程度の深い凹線が作り出されている。164・165は金属器模倣と思われるものである。164は丸底ぎみの椀をひっくり返したような器形で、端部を短く外反させる。小破片のため全容は不明であるが、天井部には幅1mmの深く鋭い沈線が1条確認できる。165もまた天井部に沈線1条が施されるが、沈線幅は1.5～1mmと場所によって異なり、雑に施した様子が窺われる。外面全面には自然釉が付着する。

有台杯 AⅠ（166～171）・AⅡ（172～175）・B（176～181）がある。166は口径15.6cmとAⅠのなかでも格段に大きい。高台が外側に付き、踏ん張るようにハの字状をなす。体部は外傾し、緩やかに湾曲しながら外反する。口径の大きさや高台の形態などから8世紀前葉にさかのぼるとされる。また、166・167は見込み部分にふくらみを持つ。168～171は直線的に外傾する体部が特徴的で、高台も底部内側に付く。また168・171では底部内面を平滑に仕上げる。172・173¹⁾は体部が直線的に立ち上

がり、体部と底部との境が角ばって稜を形成する。高台は内側に付き、外端接地ぎみとなる。172では口縁直下を強くナデて窪ませ、短く外反させる。共に底部切り離しは回転糸切りで、器壁も薄い。一方、174・175は体部の立ち上がりが丸みを持つ。高台は相対的に低く、内端接地となる。体部から口縁部にかけて内湾しながら外傾する。胎土は177が③群：佐渡産、176が②群：西丘陵産の可能性はあるほかはすべて①群となる。¹⁾ 173は胎土分析の結果、上越市滝寺窯跡産に分類された。

無台杯 A (182～187)・B (188～195) がある。Aは全てヘラ切りで、その後に粗くナデ調整される。手持ちによるナデ調整が多い。底部が厚く、とくに見込みの部分がふくらむのが特徴的である。183では火だすき痕が内外面で認められる。Bは191・193が糸切りであるほかは全てヘラ切りである。Aに比べてヘラ切り後のナデ調整が丁寧で底面は平滑となる。器壁も総じて薄い。191・193は口縁部直下をナデて窪ませ、口縁部が短く外反する点でも共通する。さらに193では、底部から体部の立ち上がりを強くナデて窪ませている。これらの特徴は有台杯AⅡの172などと共通しており、糸切り手法と関係する特徴かも知れない。194・195は胎土③群：佐渡産、191・193は胎土②群：高田平野西部産である。

稜椀 (196・197) 法量的には大型品と小型品とに分かれる可能性がある。口縁部を短く外折させて、端部が面をなす。198は明確な稜を形成しないが、胴部中ほどには粘土紐の接合痕跡をそのまま残して段とする。体部はロクロナデにより平滑に調整されているが、粘土のはみ出し部は軽くナデる程度で留まる。

小型壺 (199) 内面の口縁～体部上半と外面の体部下半に、降灰による帯状の黒色化部分が認められる。外面はカキメが明瞭である。

高杯 (200・201) 内外面をロクロナデで平滑に仕上げる。200は杯身と脚部との接合部で剥落している。脚部内面はロクロナデ調整されるが、根元部だけに指押さえの痕跡が残る。200・201は色調・胎土ともに酷似することから同一個体の可能性が高い。

横瓶 (202～205) 202はタタキ、203はカキメが明瞭である。204・205は降灰のため器面調整が明確ではないが、205ではカキメが若干確認できる。205では環状の把手が付く。202は胎土③群で、佐渡産の可能性である。

長頸瓶 I (215・216)・II (212・213・217・218など)・III (214) などがあるが、胴部については細分できなかった。耳形突起を付けた228はIとなる可能性が高い。内面または内外面に降灰の痕跡を示すものが多い。219では頸胴部界と肩部、220は肩部、227では胴部中ほどに1～3条の沈線が施される。金属器を模倣したものかも知れない。なお、215・227・228は胎土③群であり、佐渡産の可能性が高い。

短頸壺 (221・222) 221では肩部に沈線2条まで認められる。

大型甕 (234～249) 頸部文様のないa (234～240)と文様の施したb (242～244)とがある。bは口縁直下に突帯を貼り付けて加飾するのに対して、aは端部を肥厚させるだけの比較的簡素な作りである。体部破片については、タタキおよび当て具のバラエティーを示すよう選択のうえ拓本を掲載した。分類を果たしてはいないが、工具にはいくつかの種類が認められる。菊花状の当て具痕を示す239と246は佐渡産須恵器に散見され、それを裏付けるように胎土は③群である。頸部に施される文様には、区画沈線があるもの(243・244)とないもの(242)とがある。波状文には1～3段まで認められ、5本程度の櫛歯状工具を用いて施文されている。

小型甕 (206～211) 206～208は胎土③群で、佐渡産の可能性が高い。210は酸化炎焼成で軟質、色調は淡褐色を呈する。胴部ではタタキと当て具痕が明瞭である。

4 遺 物

鉢 (250～252・254) 252・254は胎土③群である。抽出に努めたが4点を図示することができたのみである。組成率は極めて少ないと考えられる。

直口甕 (253) 図化できない資料を含めて253の1点のみが確認できたに過ぎない。口縁部外面はロクロナデ、口縁部内側および胴部外面はカキメ調整とする。また、胴部内面に当て具と思われる痕跡が残ることから、タタキ成形と推測される。

土師器

無台碗BⅡ (256)、小型甕 (259)、大型甕A (269)・B (274～276)・C (273)、鍋 (277)、非ロクロ土師器：把手付壺 (260)・高杯 (262～264)・甑 (265・266)・甕 (270～272)、黒色土器有台碗 (257～258)・鉢 (267・268) などがある。全体に占める土師器の出土量は少なく、確認できる器種はほとんどを図化した。

緑釉陶器

皿 (278・279) 2点・小瓶 (280) 1点・碗 (281) 1点がある。皿2点は高台の形態・底部径が全く同一であり、同一規格で作製されたと思われる。内外面は平滑に研磨され、釉色は鮮やかな黄緑色で光沢を持つ。施釉は底部畳付まで認められる。2点とも内面見込みと底部に三叉トチンの目跡が明瞭であることから猿投産が明らかで、ほぼ同一か所には擦痕も認められる。トチンの目跡を中心に交差するように擦痕が施されていることから、目跡除去を目的としたものと考えるのが妥当であろう。一方、280・281は釉の剥落が著しく、遺存状態は良くない。しかし、280・281ともにヘラミガキ調整が明瞭で、猿投産であることを示している。

灰釉陶器

皿 (288・289・300～301)、段皿 (291～293)、碗 (282～287・290・294～299)・蓋 (302)・長頸瓶 (304) がある。できるだけ多くの資料を掲載するために、小破片でも可能なかぎり実測に努めた。よって、器種分類に誤認が生じている可能性があるが、碗が卓越する点に関しては大きな修正は必要ないと考える。口縁部～底部までがそろって全形が窺えるものは皆無であるものの、口径に対して誤差の少ない底径をみると、碗のなかには大 (294・297など)・小 (298・299など) の法量差があることがわかる。施釉方法が明瞭なものについてはツケガケがほとんど、明らかにハケヌリと識別できるものはない。また、高台の形態は全て三日月高台で、角高台は確認できなかった。しかし、296は高台の高さが低く、かつ接地面が広い点に特徴があり、やや新しい様相を示すものかも知れない。301は皿または段皿の底部と思われるが、内面には施釉前の刻線が3条みえる。302は短頸壺の蓋と思われ、外面には自然と思われる釉がかかる。ほとんどが、砂質が強い胎土であることから猿投産と思われるが、296・304は硬質で精良な胎土を示すことから東濃産の可能性が高い。

ヘラ記号のある土器 (305～309)

須恵器杯蓋の内部や有台杯・無台杯の底部に刻線が施される。2本の刻線が交差したものが最も多く、305のみ3本から構成されている。

円盤状に加工された土器 (310～313)

周辺を打ち欠いたり、接合痕から剥落させたりして円盤状に仕上げたと推測されるものである。310・311は灰釉陶器碗または皿の底部破片で、周辺を打ち欠いて形を整えよる様子が窺える。312・313は須恵器有台杯の底部片で、周囲は粘土紐の接合部で構成されている。断面部では研磨などの加工痕は認められない。

4) 墨書土器（第4表・第12図）

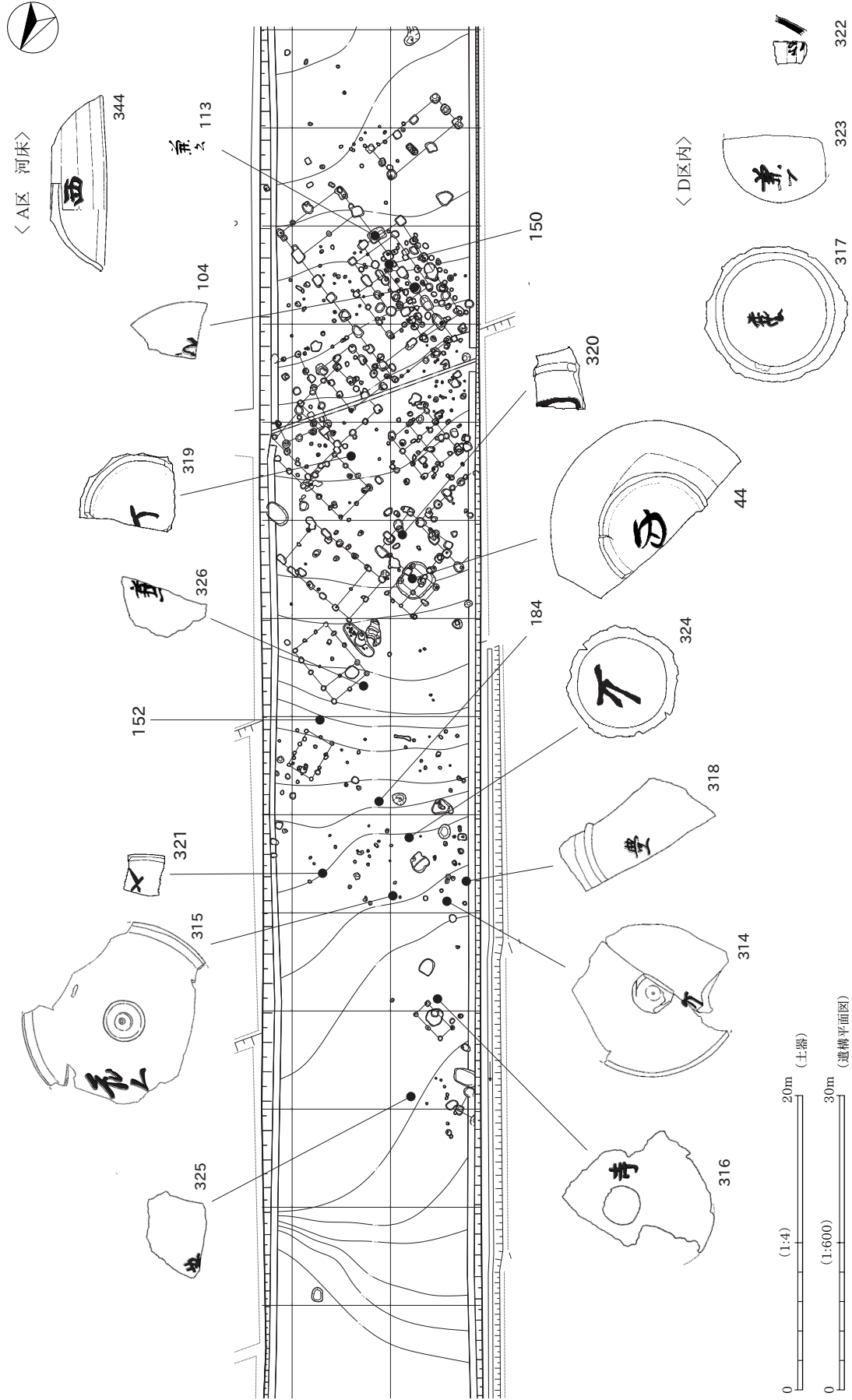
文字の判読ができない墨痕だけのものを含めて、20点の墨書土器を確認することができた（第4表）。判読できた文字は「兼公」が5点と最も多く、「万」が2点、「豊」が2点、「西」・「稲人」・「寺」・「内」が各1点となる。墨書土器の器種には須恵器杯蓋7点・有台杯2点・無台杯5点、灰釉陶器皿3点、土師器無台碗3点が認められるが、須恵器が多いのは、遺跡全体の器種組成に占める須恵器の比率が高いことと対応したものであろうか。また、杯・碗・皿の底部外面に墨書されるものが13点と最も多く、胴部外面に施された例は322のみである。杯蓋では天井部がほとんどで、104・321のみ杯蓋内面に墨書がある。

墨書土器の出土位置をみると、ある特定の地区に集中することがなく、D区全体にわたって出土する傾向にある。ほとんどの遺物が遺構集中域である7～15列に集中するのに比べて対称的である。このことは、墨書土器の出土位置が遺跡内における場の性格と相関関係にあることを想起させる。竪穴状遺構(SX3)から出土した44「内」、遺跡内最大の掘立柱建物であるSB8を構成する柱穴から出土した113「兼公」などは、これらの施設もしくは施設が位置する場の性格と関係している可能性がある。また、「寺」の墨書がある316は、掘立柱建物群から離れて位置するSB18の周辺から出土しており、この建物あるいは調査区外の西方に広がると想定される遺構群との関係が推察される。しかし、ほとんどの遺物が包含層中からの出土であり、出土状態からは遺構や場の性格を明らかにするようなデータを見出すことができなかった。

墨書土器の大部分は春日編年Ⅳ2～3期に該当すると考えられ、おおむね8世紀末～9世紀初頭に年代的位置を与えることができよう。ただし、323・324は春日編年Ⅴ期：9世紀前半、343はⅥ期：9世紀後半、44の灰釉陶器はO-53号窯式：10世紀前葉にそれぞれ位置づけられ、主体となる時期よりも新しいものが存在する。

報告番号	出土位置	釈文	種別	器種	部位	判読備考	備考
44	SX3	内	灰釉陶器	皿	底部外面		
104	SB8	□	須恵器	杯蓋	内面		倒立で墨書される
113	SB8	兼公	須恵器	無台杯	底部外面		
150	13B24・25	兼公	須恵器	杯蓋	天井部		
152	8B9・5～7A	□	須恵器	杯蓋	天井部		墨線の残画がわずかに残るのみ
184	8B21・7B20	□「平力」院	須恵器	無台杯	底部外面		
314	7C16	万	須恵器	杯蓋	天井部		
315	7B21・7C2	稲人カ	須恵器	杯蓋	天井部		
316	6C6・11	寺	須恵器	杯蓋	天井部		
317	D区	兼公	須恵器	有台杯	底部外面		
318	7C17	豊	須恵器	有台杯	底部外面		
319	11B14	□	灰釉陶器	皿	底部外面	丁または人？	墨線一画のため判断できず
320	10C4	□	灰釉陶器	皿	底部外面		
321	7B7	□	須恵器	杯蓋	内面		
322	D区	□	須恵器	杯	胴部外面		横位で墨書される
323	D区	兼公	須恵器	無台杯	底部外面		
324	7C4・8C13	万	土師器	無台碗	底部外面		
325	5C1	豊カ	須恵器	無台杯	底部外面		
326	9B17	兼公	須恵器	無台杯	底部外面		
344	SX21	西	土師器	無台碗	底部外面		

第4表 墨書土器一覧



第12図 五反田遺跡 (平成15年調査) 墨書土器出土分布図

5) 出土土器の特徴と年代

以上記述してきた出土遺物について、すでに遺構出土資料については編年位置を明らかにしてきたが、ここでもう一度まとめて記述しておこう。

五反田遺跡で出土した土器・陶磁器の主体を占めるのは、春日編年Ⅳ～Ⅴ期（8世紀後半～9世紀前半）とⅦ1期（10世紀前葉）で、Ⅲ期（8世紀前葉）とⅥ期（9世紀後半）はわずかである。上越地方のなかでも比較的多く出土した灰釉陶器は、いわゆるK-90窯式：9世紀後半に比定され、それに対応する在出土器の希少さが課題となる。

8世紀前葉の遺物は、竪穴住居（SI417・SI539）、炭土坑（SX600）、その周辺の包含層などから出土している。非ロクロ成形土師器と低平で口径の大きな須恵器食膳具（142・166など）に代表され、黒色土器鉢（267・268）なども組成するであろう。同時期の集落跡で、五反田遺跡とは3.5kmの距離にある新井市栗原遺跡〔坂井^{ほか}1982〕出土土器と共通点が多い。

8世紀後半～9世紀前半の遺物は、SB4・8・9・14の掘立柱建物柱穴およびその周辺の包含層、SX526・541の炭土坑から主体的に出土している。掘立柱建物の集中域である9～14列から多く出土することや、建物の主軸方向がほぼ一致することから、ほとんどの掘立柱建物が当該期に帰属するものと考えられ、五反田遺跡平成15年調査区における最盛期と言えよう。上越地方における土器編年の基準となっている今池遺跡〔坂井^{ほか}1984〕と比較してみると、須恵器食膳具の特徴は、SK21B・SK257・SK102・SD201などと共通する要素を持っている。当該期が示す年代幅は約1世紀と広く、既存の研究成果から細分は避けられない。しかし本遺跡では良好な一括資料に恵まれず、個別資料の型式変化を追う事はできるものの、組成として画期を見出すことができなかつた。よってここでは、一定の年代幅があることを前提にしたうえで、五反田遺跡の最盛期が当該期にあることを確認しておくことに留めたい。

10世紀前葉は、竪穴状遺構（SX3）・土師器焼成遺構（SX16）の2基から定量の遺物が出土した。特にSX3は当該期の器種組成を把握するうえで良好な一括資料と言え、灰釉陶器（43・44）の共伴は広域編年をおこなううえで貴重な事例を提供している。44は三日月高台が形骸化する様子が明瞭であることから、いわゆるO-53号窯式のなかでも古相、尾野善裕氏によるⅥ期新段階〔尾野2000〕に比定される。当該期は890～920年の実年代が与えられており、SX3出土土器群はこの幅のなかで捉えることができよう。また、県内初の出土例となるであろう白磁椀Ⅰ類（46）は、大宰府編年により8世紀末～10世紀中葉の基準資料とされている。平安時代において、白磁は威信財として高く評価されていたことから、より古い時期に五反田遺跡に搬入されて伝世された後、SX3に投棄されたと考えたい。そして、隣接する掘立柱建物群が8世紀末～9世紀前葉に位置づくことから、白磁椀が掘立柱建物群のうちの1棟で保有されたと考えるのが妥当と思われる。さらに、炭土坑（SX4）から白磁椀と同一個体破片が出土していることや、遺構の切り合い関係から、炭土坑のほとんどが当該期に帰属するものと考えられる。掘立柱建物群が軒を連ねた8世紀後半～9世紀前半に比べて、竪穴状遺構・土師器焼成遺構・炭土坑で構成される10世紀前葉になると、五反田遺跡の景観は大きく様変わりしていたと思われる。

9世紀後半は、A区で検出された川跡（SX21）から若干の遺物が出土したのみで、明確な遺構の存在は不明である。A区と県道を挟んだ東側に位置する平成16年調査区（第Ⅵ章参照）では、9世紀後半の掘立柱建物群が検出されていることから、川跡出土遺物はD区とは異なる遺構群に帰属する可能性が高い。一方、D区の包含層中からは佐渡産須恵器が少なからず出土している。佐渡から越後への須恵器の流入は

9世紀中葉から本格化し、9世紀後半～10世紀初頭を中心として、10世紀前葉には消滅するとされている〔春日1999〕。生産地における実態を把握のうえ、本遺跡出土の佐渡産須恵器を同定する必要があるが、一定量の出土点数があることを考慮すると、越後に大量流入する9世紀後半に属する佐渡産須恵器が全くないとは考えがたい。在地産土師器・須恵器のいくらかが伴うのであろう。

B 中世以降の土器・陶磁器 (図版60-327～331, 図版130)

出土量はわずかであり、6点を図示した。329・330は珠洲焼である。329は甕で、口縁部はくの字に外折し、端部は丸くおさまる。口縁が立ち気味となり、肩の張り出しと頸部のすぼまりが弱くなっている。330は壺で、甕と同様にくの字に口縁部が外に開く。これらの特徴は、吉岡康暢氏による編年〔吉岡1994〕のV期に相当し、おおむね14世紀後半～15世紀前半の年代を与えることができる。303は、高台の四方を削り込んだいわゆる割高台の白磁碗で、15世紀中葉～後葉に位置づけられる。327・328は青磁碗の口縁部である。331は志野焼の皿で、16世紀末に位置づけられよう。

C 縄文土器 (図版60-332, 図版130)

古代の遺物と一緒に縄文土器数点が出土し、うち1点を図示した。332は縄文中期前葉の深鉢底部破片で、比較的小型品である。外面は半裁竹管によって垂下する沈線文が3条を1単位として複数施されている。また、同時期と思われる磨製石斧も同一層から出土している。

D その他 (図版61-333～341, 図版130)

1) 石製品ほか (図版61-333～341, 図版130)

明らかに縄文時代中期に属する332を除いて、明確に帰属時期を判断することができない。

333は縄文時代の小型磨製石斧である。刃部の一部を欠いているほかは遺存状態が良い。334・335は紡錘車で、前者は土製・後者は石製である。334は表面が摩滅してはいるが、比較的精良な胎土である。336～338は断面四角形の砥石で、4面を機能面としている。338では一方の端部にヘソ状の凸部が形成されており、螺旋状に擦痕が認められる。砥面は緩やかな窪みを形成しており、鉄器を砥いだ結果であろう。表面には金属器によるとと思われる細かな擦痕が観察される。339は性格不明の石製品で、四角柱状に加工して、帯状に浅い溝がめぐる。右側面では装飾とも思われるわずかな窪みが加工されている。340・341は凹石である。扁平な礫を素材として、正面は大きく深く窪みをなし、一方裏面では浅く小さな窪みが集中するようなあり方を示す。縄文土器や磨製石斧が出土していることから縄文時代に帰属するものと考えたいが、古代～中世の遺跡で同様の石器が散見されることから、帰属時期については判断を保留したい。

2) 木製品 (図版62-345～358, 図版131)

木製品はA区川跡SX21に集中して検出された。全体的に木製品の出土数は少なく、柱根など摩耗が著しいものが多かった。樹種同定の結果、P44から検出された柱根がモクレン属に属すほかはすべてスギと同定された。以下、主な遺構ごとに報告する。

SX21 (345～351・357・358)

345～348は川跡底直上部に近接して検出された。345・346は曲物の底板である。共に表面は平滑

に削られている。周側面は丸味を出すための削痕が顕著に見られ、それぞれ木釘穴1個が穿たれている。形状及び周側面の削痕・樹種からして同一個体の可能性が高い。表裏とも線状痕などは見られず組板などほかのものに転用された形跡は認められない。347・348は、345・346を底板とする曲物の側板の一部と考えられる。349は墨書土器の脇から検出された。裏面は丁寧に削り調整されている。表面は先端部分で5回ほどの削り痕が認められ先端は平べったく尖らせてある。検出時、上端部が欠損し中央部分で折れ曲がった状態であった。刀子形の祭祀具で使用後廃棄された可能性も考えられる。350は径3mmほどの円孔が1個認められる。両端は欠損しており正確な長さははっきりしない。円孔より上部に向かって幅が少しずつ広がっている。表裏とも丁寧に削平されており特に表面は滑らかに調整されている。やや内彎しており曲物側板の一部かも知れない。

351は先端部分に向かって広がっている。先端部分は頭状形に面取されており、横から見ると舟の先端部のようにも見える。角材の先端部3cmの所から1.7mm×8.7mmの長方形の孔を穿ている。後方部分も同じ幅で方形に切り抜かれている。側面部には左右対称に3対の径3mmほどの孔がほぼ等間隔で穿たれている。後方の切り抜かれた側面にも一対の孔が認められるが、左右対象とはなっていない。後方部分は上下、左右とも厚さ2mmほど削平されている。上部は一部欠損している。用途不明であるが、精巧な作りからするとほかの部材と組み合わせたり何らかの部具の一部と考えられる。357は厚さが3cmとかなり頑丈な板材である。先端部分は欠損しているが片面に沿って現存長5.5cm×3.5cm×0.8cmの包込_穴が穿たれている。数カ所に炭が付着している。不定方向に数条の線状痕が認められる。358は長さ約3mほどの梁材である。一側縁の一端には長さ約30cm、幅約10cm、厚さ約4cmの合欠が、他端には端先から約9cmの所に約13cmの台形状の切欠きが認められる。仕口は、鑿等で丁寧に調整してある。数カ所に炭の付着が認められる。

SX526 (352・353)

352・353は同じ炭溜まり遺構(SX526)の底の部分から検出された。352は垂直に面取されている。摩耗が激しく全体像ははっきりしない。部材の一部と考えられる。353も摩耗が激しく全体像ははっきりしない。木片又は部材の一部と考えられる。

P315 (354・355)

354・355はP315から検出された柱材である。同一建築物の部材の一部と思われる。354は木口のほぼ中央部に約4cm×5cm×4.5cmの包込柄穴が認められる。柄穴は、丁寧に欠き粗く彫り込まれている。柄穴の反対部分は切斷されており長さは不明である。355は両端が切斷されまた表面の剥離が進んでおり加工痕などは確認できない。

P44 (356)

356はP44から検出された柱根である。調査区内の11ピットに柱根が残存していた。しかし、その多くは腐蝕が顕著で、一定の加工面が認められるのは図化した1点のみである。径は約16cm、残存長約65cm。芯外丸材を使用し、底面は手斧で平らにし、粗く面取している。底部周側面には抉りが入っており、縄掛け用と考えられる。

5 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

新潟県（旧）中頸城郡板倉町に所在する五反田遺跡は、大熊川左岸の扇状地上に位置している。本遺跡の発掘調査の結果、8～10世紀の掘立柱建物跡や竪穴住居跡、土師器焼成遺構、炭化物集中等の遺構や、流路跡等が検出され、当該期の遺物と考えられる土師器や須恵器、陶器、さらに木製品などが確認されている。

本報告では、上記した遺構の年代観および機能や用途、さらに、遺構や流路跡内から出土した木製品の樹種について、自然科学分析手法を用いて検討を行う。

A 放射性炭素年代測定

1) 試料

試料は、SX3、SX4から採取された炭化物混じり土壌2点、Pit44から出土した柱根1点の計3点である。なお、SX3及びSX4の炭化物混じり土壌については、それぞれの土壌中より炭化物を適量（SX3炭化物0.33g、SX4炭化物0.45g）採取し、分析試料としている。これらの試料については、樹種を判断しうる木材組織が認められず、種類の特定には至らなかった。また、Pit44の柱根は、調査担当者と協議を行い、柱根の遺存状況や年輪等の部位を考慮し、分析試料の採取を行っている。当試料については、後述する樹種同定試料（W8）と同一試料である。

2) 分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、加速器質量分析法（AMS法）により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与え計算を行っている。

3) 結果及び考察

結果を第5・6表に示す。試料の測定年代（補正年代）は、SX3炭化物は約1300年前の7世紀頃、SX4炭化物は約1500年前の約5世紀頃、Pit44の柱根は約1200年前の8世紀頃の値を示す。一方、これらの試料の暦年較正年代は、相対比も高い値を見ると、SX3炭化物は7世紀中頃～8世紀中頃、SX4炭化物は6世紀～7世紀初頭、Pit44柱根は8世紀～9世紀頃を示す。

本分析結果は、補正年代・暦年較正年代ともに発掘調査成果で示唆された8～10世紀という年代と概ね整合する。ただし、SX3・SX4の炭化物等

出土遺構	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
SX3	炭化物	1330 ± 50	-24.17 ± 1.07	1310 ± 50	IAAA-31698
SX4	炭化物	1520 ± 40	-20.82 ± 1.18	1450 ± 30	IAAA-31700
Pit44	木材	1240 ± 40	-24.35 ± 1.08	1230 ± 40	IAAA-31699

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

第5表 放射性炭素年代測定結果

出土遺構	試料の質	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)		相対比	Code No.
SX3	炭化物	1330 ± 50	cal AD 658 - cal AD 718	cal BP 1,292 - 1,232	0.768	IAAA-31698
			cal AD 747 - cal AD 767	cal BP 1,203 - 1,183	0.232	
SX4	炭化物	1520 ± 40	cal AD 442 - cal AD 448	cal BP 1,508 - 1,502	0.041	IAAA-31700
			cal AD 468 - cal AD 482	cal BP 1,482 - 1,468	0.093	
			cal AD 530 - cal AD 604	cal BP 1,420 - 1,346	0.832	
			cal AD 610 - cal AD 616	cal BP 1,340 - 1,334	0.034	
Pit44	木材 (柱根)	1240 ± 40	cal AD 692 - cal AD 701	cal BP 1,258 - 1,249	0.059	IAAA-31699
			cal AD 713 - cal AD 751	cal BP 1,237 - 1,199	0.349	
			cal AD 762 - cal AD 782	cal BP 1,188 - 1,168	0.187	
			cal AD 790 - cal AD 826	cal BP 1,160 - 1,124	0.270	
			cal AD 841 - cal AD 860	cal BP 1,109 - 1,090	0.134	

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第6表 暦年較正結果

の由来は不明であるため、試料の由来、遺構の性格等も含めて検討することが望まれる。

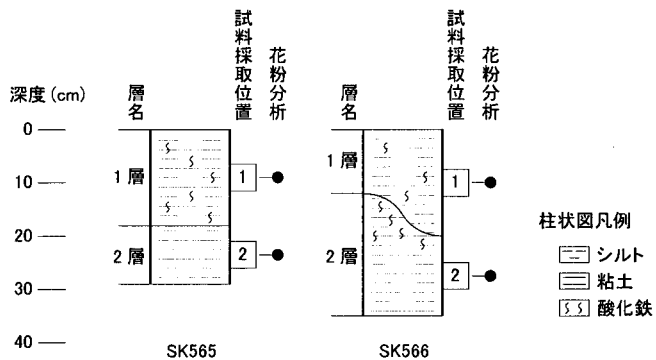
B 遺構の機能・用途の検証

1) 試料

試料はSK565・SK566 覆土から採取された土壌ブロック2点である。以下に、各試料の概要及び肉眼観察結果を示す。

SK565

SK565 覆土の土壌ブロックは、高さ29cmの柱状試料である。当試料は、上位より1・2層に分層されており、1層は暗褐色シルト質粘土で、糸根状の斑鉄の濃集が認められる。2層は暗褐色シルト質粘土で、灰褐色～灰白色の粘土ブロック(径約1cm)が多く認められる。

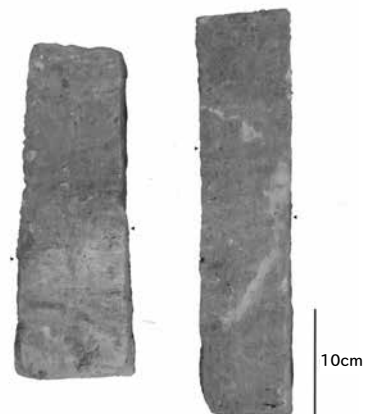


第13図 各遺構覆土の模式柱状図、試料採取位置および分析層位

SK566

SK566 覆土の土壌ブロックは、高さ35cmの柱状試料である。当試料は、上位より1・2層に分層される。1層は暗灰色～暗褐色シルト質粘土で、酸化鉄が認められる。2層は暗灰色シルト質粘土で、灰白色の粘土ブロック(径約5mm)がパッチ状に認められる。

これら2遺構の土壌ブロックを対象に、各土層(SK565 1・2層・SK566 1・2層)から土壌をそれぞれ採取し、計4点の花粉分析及び寄生虫卵分析を行う。各遺構覆土の模式柱状図、試料採取位置および分析層位を第13図に、試料の状況写真を第14図に示す。



第14図 SK565 (左)・566 (右) ブロック試料の状況

2) 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

3) 結果

結果を第7表に示す。表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

いずれの試料においても検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。検出された花粉化石は、木本花粉ではツガ属、マツ属、クルミ属が、草本花粉ではイネ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属が数個対認められただけである。これらの検出された花粉化石の保存状態は悪く、ほとんどは花粉外膜が溶解あるいは壊れている状態で産出していた。また、いずれの試料からも寄生虫卵は認められなかったが、炭化した微細植物片が多量に検出されている。プレパラート内の状況写真を第15図に示す。

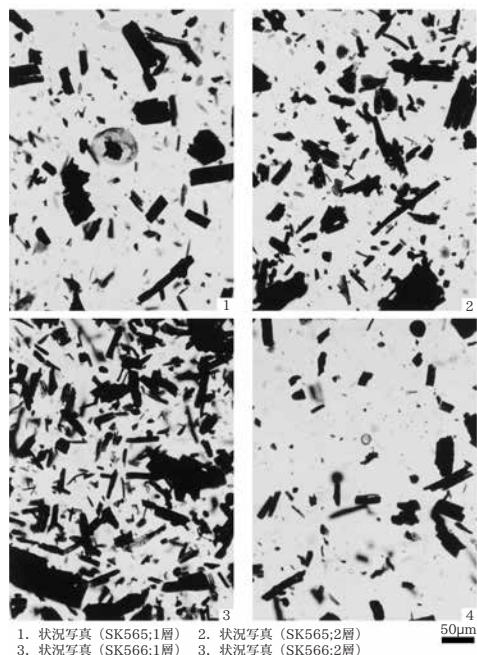
4) 考察

産出した木本類は、ツガ属、マツ属など針葉樹に由来する花粉化石が多く、シダ類胞子も認められる。花粉やシダ類胞子は、一般的に腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている [中村1967；徳永・山内1971]。また、草本類においても比較的分解に強い花粉や、分解が進んでも同定可能な花粉が検出されている。花粉が常に酸化状態に置かれている場所では、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている。このことから今回検出された花粉やシダ類胞子化石は、覆土中に取込まれた花粉が、その後の経年変化により分解・消失し、分解に強い花粉が選択的に残存したと考えられる。

本分析結果では、花粉化石の産状が良好でないことや寄生虫卵等も検出されないことから、これらの遺構の用途や

種 類	SK565		SK566		
	試料番号	1層	2層	1層	2層
木本花粉					
ツガ属		2	1	2	1
マツ属		1	1	-	2
クルミ属		-	-	1	-
草本花粉					
イネ科		-	-	-	6
サナエタデ節－ウナギツカミ節		1	-	-	-
ナデシコ科		-	-	-	1
ヨモギ属		-	-	-	2
不明花粉		-	-	-	1
シダ類胞子					
シダ類胞子		10	5	12	11
合 計					
木本花粉		3	2	3	3
草本花粉		1	0	0	9
不明花粉		0	0	0	1
シダ類胞子		10	5	12	11
総計（不明を除く）		14	7	15	23

第7表 花粉分析結果



第15図 花粉分析プレパラート内の状況写真

機能については言及することはできない。なお、いずれの試料からも炭化した微細植物片が多量に検出されていることから、これらの遺構内、遺構覆土の母材となる周辺土壤中に灰等が存在した可能性がある。この点については、本遺跡の基本土層との比較や、遺構覆土について灰像分析や微細植物片の抽出、土壤理化学成分の検証等を行い、総合的に検討することが望まれる。

新潟県内、特に本遺跡周辺では頸城村で行われた花粉分析の調査成果〔高野^{ほか}1988〕があり、縄文時代に相当する層準からは、クルミ属、サワグルミ属、トチノキ属等の花粉が多産し、ブナ属とコナラ亜属がこれに次ぎ、ハンノキ属やエゴノキ属等も認められる。一方、近世初頭以前とされる層では、マツ属花粉が優占し、スギ属も増加傾向を示す状況が確認されることから、人間の植生破壊やスギの植林が行われたことが指摘されている。本分析試料については、遺構の年代等は不明であり前述の調査事例との比較はできないが、遺構覆土埋積時にこれらの花粉が取り込まれたと仮定すると、遺跡周辺の低地等にクルミ属、サワグルミ属、トチノキ属等が生育していた可能性がある。

C 木製品の樹種

1) 試料

試料は、柱穴や流路跡から出土した柱根や柱材、木製品等の計9点（試料番号1～9）である。これらの試料の採取は、調査担当者として試料採取位置等の協議・設定を行っている。また、観察の可能な試料については木取りの確認も行っている。各試料の詳細は、結果と共に第8表に示す。

2) 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3) 結果

結果を第8表に示す。試料は、落葉広葉樹のモクレン属（試料番号8）、針葉樹のスギ（試料番号1～7・9）に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don)

スギ科スギ属

試料番号	地区	グリッド	遺構	層位	器種	樹種
1	A区		SX21	6層	用途不明製品	スギ
2	A区		SX21	6層	刀子形木製品?	スギ
3	A区		SX21	6層	底板	スギ
4	A区		SX21	6層	底板	スギ
5	D区	9C20	P315	1層	柱材	スギ
6	D区	9C20	P315	1層	柱材	スギ
7	A区		SX21	6層	柱材	スギ
8	B区	10C19	Pit44		柱材	モクレン属
9	A区		SX21	6層	板材	スギ

第8表 樹種同定結果

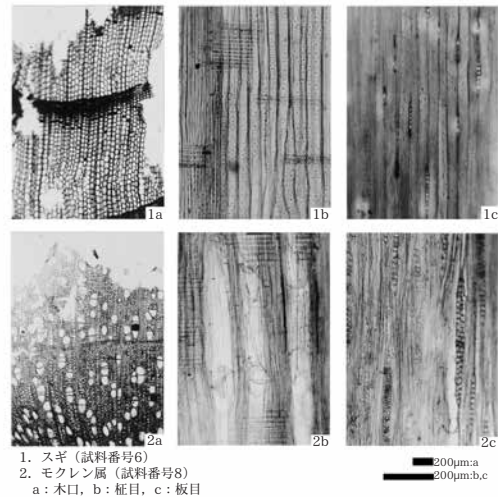
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～40細胞高。

4) 考 察

木取りの観察を行った試料の中で、用途不明の木製品（試料番号1）は角材状となり、正面が板目、側面が柾目となる。刀子形木製品？（試料番号2）と底板（試料番号3・4）はいずれも板目板である。板材（試料番号9）は、木取りの観察を行っていないが、採取した木片の特徴から板目板か柾目板と判断され、いわゆる追い柾のように木取り方向と年輪が斜めになる状況ではないと考えられる。柱材は、角材（試料番号5～7）と丸木材（試料番号8）となる。



第16図 木材切片顕微鏡写真

縦挽き用の鋸（大鋸）が渡来したとされる室町時代まで

は、楔で木を割って板や角材を製作していた〔成田1996〕とされ、それ以前の木材加工は、割裂性が重視されていたことが考えられる。スギ等の針葉樹材は、木理が通直で、一般的に広葉樹材に比べ割裂性が高く、板や角材の製作が容易である。また、針葉樹材は仮道管を主要素としており、木目が均質で細かい。これらの特徴を考慮して、スギが多用された可能性がある。新潟県内における木製品の分析調査でもスギの利用が多数認められており〔川村1983；パリノ・サーヴェイ株式会社2002〕、本分析結果と調和的である。スギは、適湿地を好み沖積地や谷筋などに生育し、低地林を形成する場合もある。前述の頸城村で行われた花粉分析結果でも、縄文時代に相当する層準から落葉広葉樹の花粉化石に混じりスギ属の花粉が産出しており、周辺にスギが生育していた可能性が指摘されている〔高野ほか1988〕。本遺跡の継続した年代の資料がなく詳細は不明であるが、本分析結果を考慮すると古代～中世頃にもスギ材の入手が可能であったと推測される。

一方、丸木の柱材に用いられたモクレン属は、広葉樹材としては比較的加工が容易で割裂性が高く、道管も小径で比較的均質である。ただし、強度や保存性は中程度の種類であり、後述するクリ材に比較して柱材としての材質は劣る。

新潟県内における古代の掘立柱建物跡の柱材（柱根）の分析調査では、強度や耐朽性に優れたクリ材とスギの利用が多数確認されている〔越路町教育委員会・パリノ・サーヴェイ株式会社1992；パリノ・サーヴェイ株式会社1997・2000・2001・2002〕。一方、同一遺構内や同一遺跡の遺構間で種類構成が雑多な調査事例も確認されており、これらの木材利用の違いは、建物の規模、用途等を反映している可能性も指摘されている〔パリノ・サーヴェイ株式会社2000〕。本遺跡の掘立柱建物跡における樹種利用については、今後、本遺跡周辺の植生や本遺跡の柱根の分析調査例を蓄積し、検討する必要がある。

引用文献

- 川村恵洋 1983 「曾根遺跡出土木材の識別」『新大演報』16 p.75-82
 越路町教育委員会・パリノ・サーヴェイ株式会社 1992 『越路町文化財報告書第19輯 岩田遺跡出土遺物 自然科学分析報告書』p.33
 高野武男・長谷川正・米山正次・藤田剛・黒田一武 1988 「頸城村の地形と地質 頸城村史編さん委員会編」『頸城村史』新潟県中頸城郡頸城村 p.3-51
 徳永重元・山内輝子 1971 『花粉・孢子・化石の研究法』共立出版株式会社 p.50-73

- 中村 純 1967 『花粉分析』 古今書院 p.232
- 成田壽一郎 1996 『曲物・籬物』 理工学社 p.205
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1997 「岩田遺跡第2次調査における自然科学分析調査報」『越路町文化財報告書第21
輯 岩田遺跡 第2次発掘調査報告書』 越路町教育委員会,18-25
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2000 「自然科学分析」『吉田町文化財調査報告書第5集 新潟県西蒲原郡吉田町 江添
C遺跡 -吉田町米納津地内国営排水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』 吉田町教育委
員会・山武考古学研究所 p.206-213
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2001 「三角田遺跡から出土した木材の樹種」『燕市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
三角田遺跡 国営新荒井川排水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 燕市教育委員会・吉田
町教育委員会 p.45-49
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2002 「蔵ノ坪遺跡から出土した木材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第115集
一般国道7号 中条バイパス関係発掘調査報告書 蔵ノ坪遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新
潟県埋蔵文化財調査事業団 p.45-59

第Ⅵ章 五反田遺跡（平成16年調査）

1 グリッドの設定

北陸新幹線の計画法線がほぼ直線であることから、法線のセンターラインを基準とした。また、平成15（2003）年度調査との位置関係を明確に把握するため、平成15年度調査の際に使用したグリッドを延長し、本調査区を覆うように設定した（第17図）。すなわち、工事用基準点のKP-12が30Cとなり、グリッドの単位、呼称、軸線などは平成15年度調査に準拠する。なお、平成15年調査区がA・B・C・D区に分かれたことから、平成16年調査区をE区と呼称する。

グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分したものである（第17図）。大グリッドの呼称は、センターラインと水平方向を算用数字、垂直方向をアルファベットとし、両者の組み合わせにより表示した。昇降の順は、終点側（西）から起点側（東）に向かい1・2・3…、北から南に向かいA・B・C…である。小グリッドは、算用数字で表記し、北西隅を1、南東隅を25とし、「31B-5」のように大グリッド表示の後につけて呼称した。尚、本年度の調査は新幹線法線に加えて、建設時に付随する工事用道路部分も調査対象であったため、平成15年度調査には想定していなかった北方面の調査区に対応すべく、Aグリッドより北方を順に0A・0B・0C…と呼称した。グリッドの南北軸の方位は、真北に対して60度東偏する。杭の国家座標値は、30CがX=115025.383、Y=-18215.469である。

2 基本層序

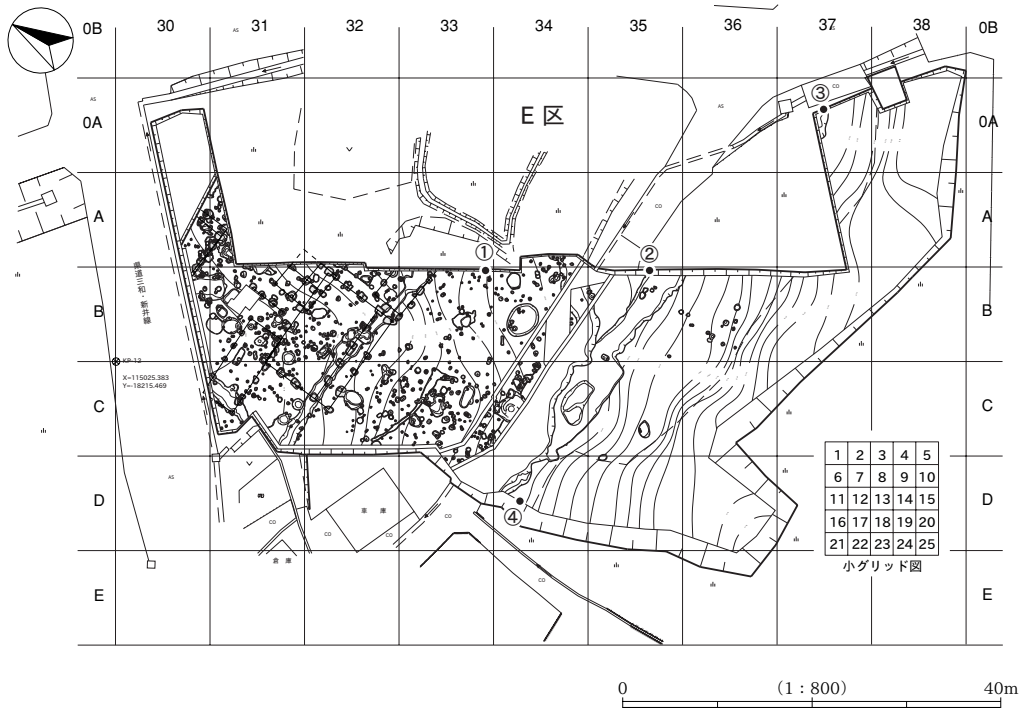
平成16年度調査区は東方に控える関田山脈に連なる丘陵の裾部に位置する。そのため、東方（北陸新幹線起点側）から西方（同終点側）に向かい傾斜する。標高49～51m付近に位置し、その比高は約3mである。特に、グリッド34列以南では丘陵裾にかなり接近していることから傾斜角は急である。県道三和・新井線に近接するグリッド31列は、包含層が薄く、上部が削平されるなど、攪乱が顕著である。また、褐鉄鉱の沈着が顕著に見られ、色調がやや赤褐色味を帯びる傾向が認められた。遺物包含層はⅢ層とⅣa層の2層があるが、Ⅳa層の分布は一様ではなく33列を境に西側では確認されていない（セクション①）。また、34Dと37Bを結んだラインより山側では、Ⅰ～Ⅵ層まで大きく削平されている（セクション④）。従って、34Dと37Bより山側の地点に遺構がかつて存在した可能性は否定できない。しかし、基盤のⅥ層が東に向かって斜度を増すことから、遺構の集中度は高くないものと推測している。

遺構検出面はⅣb層であるが、35B～D列より以南では基本的にⅣb・Ⅴ層が存在せず、Ⅵ層を確認面とした。大型の柱穴や土坑ではⅢ層・Ⅳa層中でプランを検出できたものがあつた。しかし、不明瞭であつたため、最終的には全てⅣb層まで掘り下げて遺構確認を行った。

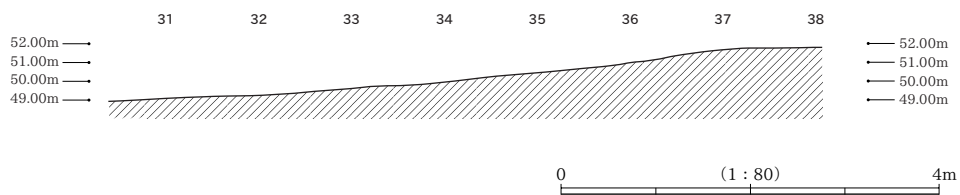
Ⅰ層：灰色～黒灰色粘質土。砂利～人頭大以上の礫を含む。盛土層。

Ⅱ層：暗灰色粘質土。旧表土。近世以降の遺物包含層。

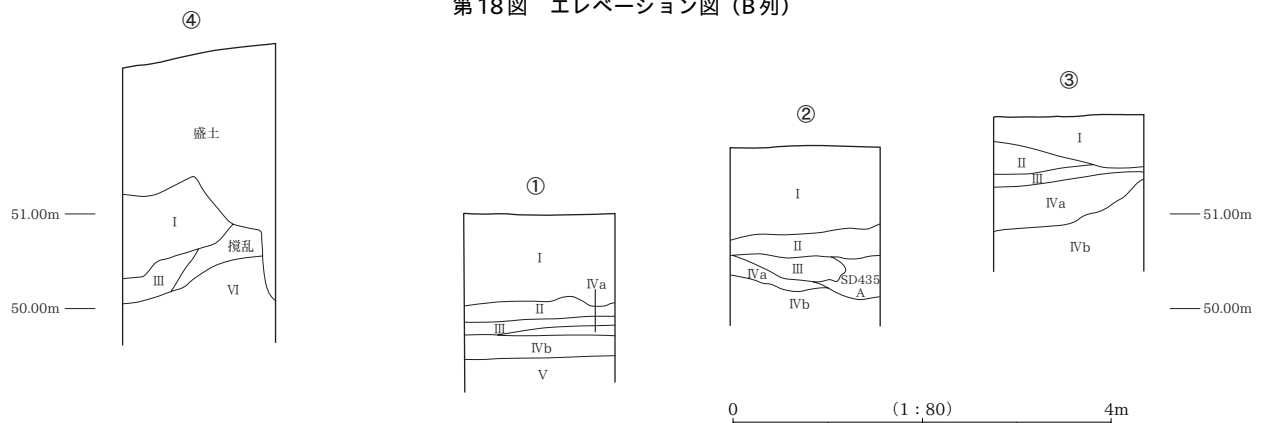
- III層：黒色粘質土。遺物包含層。
- IV a層：褐灰色粘質土。遺物包含層。
- IV b層：青灰色粘質土。遺構確認面。
- V層：緑灰色シルト。
- VI層：礫層。



第17図 グリッド設定図



第18図 エレベーション図 (B列)



第19図 土層柱状図

3 遺 構

A 概 要

平成16年調査区では掘立柱建物6棟、柱穴列1条、溝3条、川跡2条、土坑15基、ピット約600基、性格不明遺構9基、集石7か所を検出した。覆土は、基本的に3種に分類でき、基本層序Ⅲ層を起源とする黒色粘質土で構成される覆土をA類、Ⅳa層を起源とする灰褐色粘質土で構成される覆土をB類、B類に近似した土質で構成され地山(Ⅳb層)をブロック状に多量に含む覆土をD類とした。なお調査時にはC類を設定したが、その後Ⅳb層を含む比率の違いにすぎないことが判明したことから、C類を削除して、D類に統括した。A類は溝や土坑のような大型の遺構で顕著に認められ、B類は柱穴を含むピットなどの小規模な遺構に多く認められた。D類は、掘立柱建物を構成する比較的大型の柱穴の一部で確認されている。A類とB類は切り合い関係にあり、A類が新しい。D類はA類に切られることからD類はA類より古い。

本調査区では東から西に向かい傾斜している(第Ⅵ章2参照)。特に、東端部は丘陵裾にかなり接近していることから傾斜角は急である。先述のように包含層が削平されている点を考慮しても、遺構数は極めて散見である。グリッド34・35列には自然流路と考えられるSD435が等高線とほぼ等しい角度で調査区を貫流している。この以北では遺構数が激増し、大型の土坑や溝、ピットなどが分布している。ピットは検出位置に粗密が認められ、複数のブロックを形成している。グリッド32列付近にはSD178が東西に貫流しているが、その以北は益々傾斜角が緩やかとなる。遺構数はピットを中心に更に密度を濃くし、規模の大きなピットも現れ、明確に掘立柱建物群が認識できるようになる。

遺構名は遺構種別の略号と遺構番号を組み合わせで表記した。遺構種別の略号は、掘立柱建物=SB、ピット=P、土坑=SK、性格不明遺構・集石遺構=SXとした。また、遺構番号は、種別に関係なく連続した番号を付した。なお、掘立柱建物を構成しないピットは、遺構分割図に示すほかは基本的に取り扱っていない。

B 遺 構 各 説

1) 掘立柱建物(図版64・66・68・70・138・140)

確認した建物は、31A～Cグリッドおよび32B・Cグリッドに位置する、側柱建物5棟(SB1・2、4～6)と総柱建物1棟(SB3)の計6棟である。

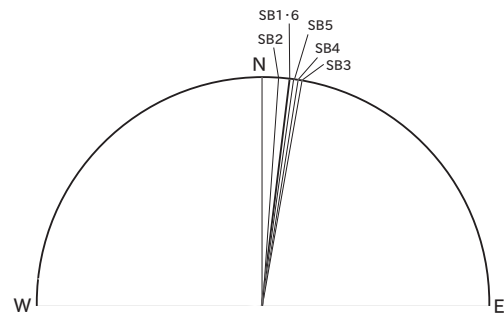
総柱建物は2×2間以上であるSB3を1棟検出した。平均柱間距離は2.34mと2mを超える。柱穴のプランは深度、規模ともにバラツキがあるものの平面形は略長方形ないしは楕円形を呈し、建物の軸方向に揃う傾向がある。

側柱建物は大半が調査区外に延びており全容を量りかねるが、最大規模のものはSB1で、5×4間で南側に庇を持つ。

SB 番号	構造	規模	面積	軸方向	柱間距離 (平均)	
					桁行	梁間
1	側柱	5×4+1間	101.8m ²	7度東偏	2.25 m	2.25 m
					1.68 + 2.14 m	3.90 m
2	側柱	5×1間	36.3m ²	4度東偏	2.34 m	2.34 m
					1.60 m	1.77 m
3	総柱	2×2間	21.8m ²	10度東偏	2.07 m	2.80 m
					2.15 m	2.70 m
4	側柱	3×2間	17.5m ²	9度東偏	2.80 m	2.80 m
					2.15 m	2.70 m
5	側柱	2×1間	11.3m ²	8度東偏	2.15 m	2.15 m
					2.15 m	2.15 m
6	側柱	2×1間	11.3m ²	7度東偏	2.15 m	2.15 m
					2.15 m	2.15 m

第9表 掘立柱建物一覧表

床面積は101.8m²を測り、本調査区内で確認されている掘立柱建物の中で群を抜いて大規模な建物であり、本調査区における中心的な役割を果たしていたと考えられる。身舎の柱穴は軸線を直線に、深さを一定にし、かつ、総て方形の掘かたを呈す。また、掘かたプランの長軸も梁間方向（南北）に揃う傾向があるなど規格性に富んでいる。一方、庇部と考えられる南側の柱穴列（セクション15-15'）は掘かたも一定でなく、深さも揃わない。P518とP606の間にトレンチを入れたが柱穴を明瞭に



第20図 掘立柱建物の主軸方位分布

確認できなかった。SB2およびSB4～6はともに平面プランが調査区外に延び、全容を量りかねるが、確認できている部分ではSB2が5×1間、SB4が3×2間、SB5・6が2×1間である。どれも床面積は10～40m²を測り、本調査区においては一般的な建物である。柱穴の掘かたに注目してみるとSB4は規模にバラツキがみられるものの、梁間方向に長軸を有する方形ないしは楕円形のプランをもち、深さも一定である。SB5・6は、ともに深さに若干のバラツキがあるものの、梁間方向に長軸を有する規模の揃った、略方形を呈するプランをもつ柱穴で構成される傾向がある。SB5はSB6と比して、P524、380、187の南西側に張り出し部をもち、覆土はともに灰褐色粘質土を呈するが、SB5がIV b層をブロック状に多く含むのに対し、SB6の覆土には混じりが極めて少ない等の違いがあるものの、規模・平面プランおよび柱穴規模などに類似性がみられることから、新旧関係は不明であるが建て替えの可能性がある。SB2では床面積36.3m²とやや大型の側柱建物で柱穴は、ほかの掘立柱建物に比して小型で、かつ掘かたプランも円形や方形と一定していない。覆土や柱穴規模、深さに類似性が認められたので同一建物を構成する柱穴列として捉えたが、本遺構を構成する柱穴群の平均柱間距離は、桁間の東側3間分（P77・75・292・261・57・628・271・490）と西側2間分（P671・657・667）には差異がみられ、東側が1.68mに対し、西側は2.14mを測る。また、桁行の軸方向も東側が3度東偏するに対し、西側が6度東偏と異なることから、東側と西側が別棟である可能性も否定できない。

次に、桁行の平均柱間距離に注目してみると、SB1が2.25m、SB5が2.80m、SB6が2.70mと2mを超えるのに対し、SB4は1.77m、SB2は1.68m（東側）である。建物の軸方向は、SB2が南北軸に対し4度東偏するのを除いては、7～10度東偏する。周辺の遺構との切り合い関係は、SB1を構成するP302・572・634・637がSD178完掘後に検出されていることからSB1はSD178より古い。また、同じくP900がSK179の完掘後に検出されていることからSB1はSK179より古い。さらに、P89がSB2の柱穴列の1つであるP57に切られていることから、SB1はSB2より古い。SB6を構成するP5から出土した灰釉陶器皿（9）がSK179と接合していることから、それらはほぼ同時期に埋没した可能性が高い。

2) 柱 穴 列 (図版66・70)

3間の柱穴列である。本列を構成する柱穴群のうちP526・82・84に柱痕が認められ、掘かたの規模から掘立柱建物を構成する可能性が高い。また、軸方向も南北軸から7度東偏しており、周辺の掘立柱建物群と類似している。しかし、確認された上記の掘立柱建物に比して、平均柱間距離は平均1.32mと狭いことや、周辺に本列と対応する柱穴列が認められないことから、掘立柱建物とは認定できなかった。

3) 土 坑

SK50 (図版 65・66・71・137・138)

31Bグリッドに位置する。1.36×1.34mの規模を測る。平面形は略円形を呈する。深さは0.34mを測り、断面形は播鉢状を呈する。土層断面観察から中央付近に杭、または柱が立っていた可能性がある。1～3層には炭化物を多量に含む。1層からは多量の土師器と水晶玉・鉄製品などが出土している。2層からは完形率の高い土師器が多く出土している。1層と2層からの出土品からはさほどの時期差は認められない。P319・320に切られる。

SK68 (図版 65)

31Bグリッドに位置する。1.44×0.96mの規模を測る。平面形はほぼ長方形を呈する。深さは0.60mを測るが、北側にテラスを有し、張り出している。覆土は上層が黒色粘質土、下層が灰褐色粘質土の2層で構成され、南側には地山に似た、ないしは地山を多く含む覆土がほぼ水平に堆積している。本遺構の周辺には掘立柱建物群と軸を揃えるようにピットが並んでおり、関連がある可能性がある。

SK70 (図版 65・71・136)

31Bグリッドに位置する。2.05×1.72mの規模を測る。平面形は略円形を呈する。深さは0.30mを測り、断面形は播鉢状を呈する。覆土は黒色粘質土による単層である。底面は比較的平坦である。同じく黒色粘質土を覆土に持つP186に切られる。完掘後、底面から灰褐色粘性土を覆土にもつP183・184・185を検出した。土層断面観察(図版71)からP183は本遺構に切られていることがわかる。

SK95 (図版 65・72・133・139・152)

32Bグリッドに位置する。3.20×1.80mの規模を測る。平面形は楕円形を呈する。深さは0.30mを測る。覆土は2層認められ、上層が黒色粘質土、下層が灰褐色粘質土で構成され、ほぼ水平に堆積している。本遺構の上面では被熱による赤色化や、煤の付着が認められる人頭大以上の礫(図版152-440～443)が多量に検出された。しかし、覆土中に焼土は検出されず、壁面・底面の焼固なども認められない。礫は最大級のもので直径40cm程を測る。平面プランをみると、大きな礫を外周に配置し、比較的小さな礫を中央付近に充填する傾向が認められる。

SK179 (図版 66・72・136)

32Cグリッドに位置する。長軸6.00mの規模を測る。平面形はひさご形を呈する。覆土は4層から成るが、1・2層と3・4層が類似していることから、前者を上層、後者を下層と呼称する。下層には炭化物が多く認められた。覆土の堆積は、掘り込みの底面に沿った状態で播鉢状に堆積している。このことから、西側の浅部と東側の深部は同一の遺構であり、同時期に埋没したと考えられる。なお、本遺構完掘後、西側浅部の東よりからP900が検出された。P900がSB1の柱穴列を構成していることから、SK179はSB1よりも新しいことが分かる。遺物は、下層(3層)から最も多く出土した。完掘後、南側から灰褐色粘質土を覆土に持つSK279を検出し、本遺構がSK279より新しいことが判明した。本遺構出土の灰釉陶器皿(9)がSB6(5)と、同(11)がSX211と、同(8)がSK347と接合した。

SK347 (図版 67・73)

33Cグリッドに位置する。長軸2.47mの規模を測る。平面形はひさご形を呈する。深さは0.35mを測る。覆土は2層から成り、上層が黒色粘質土、下層が灰褐色粘質土を基調とする。東側が浅くなるが、SK179同様、覆土の堆積状況から判断して、同一遺構であり、同時期に埋没したと考えられる。土層断

面観察（図版73）より、P348は本遺構が埋没後、掘り込まれたと考えられる。灰釉陶器皿（8）がSK347と接合した。

SK503（図版67・73・137）

33Cグリッドに位置する。2.46×1.10mの規模を測る。平面形は楕円形を呈する。深さは0.35mを測る。覆土は2層から成るが、共に灰褐色粘質土を基調とする。水平堆積であり、1層と2層の境目には腐食物が認められる。遺構検出面より上位に人頭大程の礫が数個出土した。本遺構はP507に切られる。本遺構出土の須恵器壺（168）がSD435と接合した。

4) 溝

本調査区からは、3条確認されている。

SD176（図版66・67・77）

32C・33Cグリッドに位置する延長約12m×幅0.40～0.70m×深さ0.10mの規模を測る非常に浅い溝である。底付近には荒砂が堆積している。南から北に約4mすすんだところで西方向に折れ曲がり、南方向に弧を描きながら流れる。本溝の両端の立ち上がりは明確ではない。周辺にはピット群がみられ、関連性が指摘できる。特に本溝の以南には以北に比して大型のピットや土坑が多く、境界の役割をはたしていた可能性もある。

SD178（図版66・76・135）

32Cグリッドから33Bグリッドにかけて調査区を貫流する溝である。幅2.20～0.60m×深さ0.40m程の規模を測る。覆土は黒色粘質土で構成され、底面近くに細かな砂礫層が認められることから滞水していたと考えられる。本遺構は、地山の等高線に概ね一致した流路方向を示しながら東西に貫流しているものの、東側では、等高線を切って流れている。また、周囲の掘立柱建物と軸方向を概ね同一にする。さらに、本遺構を境に以北では掘立柱建物が検出されるなど、土地利用の境界として重要な位置を占めていた可能性もある。SB1を構成するP302・572・634・637がSD178完掘後に検出されていることから、SD178はSB1より新しい。本遺構出土の須恵器短頸壺（159）がSD435と接合したことから、両者は同時期に埋没していた可能性が高い。

SD662（図版65・77・135）

調査区北西部に位置する31Cグリッドを南北方向に貫流する。幅約1.60m×深さ0.45mの規模を測る。覆土は2層から成り、シルト質が強く、下層に砂礫層が認められることから流路と判断した。また、平面プランが一定でなく、掘り込みも一定でないことなどから、自然流路の可能性が高い。出土遺物は、古代に帰属する土師器、須恵器のほか、17世紀に帰属する近世陶磁器も共伴しており、本遺構の最終埋没年代の下限を示している。覆土には、未分解有機物が含まれており、ほかの遺構内覆土とは様相を異にしている点も本遺構の埋没年代の新しさを示している。本溝の西岸には、小規模のピットが数基並列して確認されているが、本溝との関連性は明らかではない。

5) 川 跡（図版67・78・135）

33～34グリッドから、SD435AとSD435Bの2本の川跡が検出された。両者は重複関係にあり、前者が後者よりも新しい。流路はほぼ東西方位に一致する。川跡を境にして東側では遺構が極端に減少することから、集落を区画する機能が備わっていた可能性がある。

SD435Aは黒色粘質土、SD435Bは黒～灰褐色粘質土の覆土を基調とし、砂や礫が多く混入する。特にSD435Aでは砂・シルトが互層をなすと同時に脈打つような層の乱れが確認され、流路の変更が複数回あったことを示している。検出時のプランの在り方から当初は1本の川跡として調査を開始した。しかし、一段低い地点から、完形に近い須恵器・土師器片や拳大の礫などを多く含む砂層（図版135）が特徴的に検出され、その広がり帯状を示すことが判明した。そこで改めて土層断面を行い、掘りかたの検出に努めた結果、もう1本の流路：SD435Bを認識することができた。SD435Aでは皿層がブロック状に含まれるのに対してSD435Bでは全く含まれないこと、わずかではあるが、SD435BとSD435Aの重複関係が把握できたこと（セクションC）などから、AとBの新旧完形を把握した。なお、本遺跡の覆土分類と対照すれば、SD435Aは「覆土A」、SD435Bは「覆土B」に相当し、ほかの遺構で認められた覆土の新旧関係と矛盾しない。また、SD435Bの掘りかたプランは、遺物の出土状況などから、川跡として機能していた当時の川底を比較的良好に残していると判断される。しかしSD435Aは流路の変更が複数回あったと判断され、検出時には黒色粘質土がSD435Bにまで広がって分布していたことから、旧状は留めていないものと思われる。

また、SD435A付近からは4か所の集石（SX391・392、集石1・2）が検出されている（図版67）。石の配列に規則性が認められなかったことから、人為的な遺構との判断は保留したが、明らかな人為的集石が他地点で存在したことから平面的な記録化のみ行った。人頭大以上の比較的大型礫が目立ち、その周辺には小礫が散在していた。全ての集石はSD435A埋没後の皿層中から検出されている。

6) 性格不明遺構

SX66（図版65・74）

30・31Bグリッドに位置する。長軸3.00mの規模を測り、北側は調査区外に延びる。平面形はほぼ長方形を呈する。深さは0.15mを測り、断面形は方形を呈する落ち込み。覆土は灰褐色粘質土を基調とする2層から成り、両者ともほぼ水平に堆積している。底面は緩やかな凹凸が多く認められる。黒色粘質土を覆土にもつP2・3・67・193・194・195・197に切られる。また、完掘後の底面からP203・384を検出しており、本遺構がそれらより新しいことが判明した。P2は直径0.84mを測り、炭化物を多量に含む覆土で構成された平面円形のピットであるが、土層断面観察（図版74）より本遺構の上位から掘り込んでおり、底面は本遺構とほぼ同レベルであったことが分かる。P2からは、須恵器の大甕の底部（259）が、P3・4からは須恵器の大甕の口頸部（257・260）がまとまって出土している。P194からは、土師器杯（243・244・246）、黒色土器蓋（263）、羽口（440）が出土している。

SX211（図版65・75・136）

32Bグリッドに位置する。4m×3mの規模を測る土器集中、及び拳大程の礫による集石であるが、人頭大以上の礫も数個含まれている。遺物は小破片のものが多く、遺存率は概して低い。皿層上面からIV a層にかけて集積しており、その大部分は皿層中からの出土である。遺物を取り除きながら、遺構確認面に到達した時点で精査を行ったところ、北側は調査区外に延びるため全容は不明であるが、2m×2mの灰褐色粘質土を覆土にもつ不定形の落ち込みを検出した。深さは0.10m程を測り、断面方形である。遺物量は少ない。本遺構出土の灰釉陶器皿（11）がSK179と接合した。

SX386（図版67・74・137）

34Bグリッドに位置する。3.80×3.00mの規模を測る。平面形は楕円形を呈する。深さは0.24mを

測り、断面形は播鉢状を呈する落ち込み。覆土は3層で構成される。1層・2層は黒色粘質土を基調とするが、1層の上位には炭化物が多量に混入して層を成しており、下位には礫が包含されていた。3層は灰褐色粘質土を基調とする層である。総てほぼ水平に堆積している。底面は凹凸が無く、比較的平坦である。完掘後、底面からP483～488を検出した。

SX387（図版67・75・136）

33Cグリッドに位置する。1.00×1.00mの規模を測り、平面形は略円形を呈する集石である。礫はIII層上面に分布し、人頭大程度の大きさの礫でプランの外枠を巡らせ、その中を拳大程度の礫で充填するような傾向が認められる。本集石を構成する礫には多くに被熱による煤の付着や赤色化が認められたが、加工の痕は認められず遺構として確定はできない。本跡において、同様な集石にはSX281（33B）、SX301（32B）、SX391（35B）、SX392（35C）、集石1・2（34C）がある。それぞれの位置関係には規則性は認められず、集石の下位には掘り込みは検出されなかった。なお、SK95も遺構確認面で同様な集石が認められたが、下位に掘り込みを有する点で本構とは異質であり、土坑として取り扱った。

7) ピ ッ ト

約600基検出した。それらの中には、前述のように柱痕が認められるなど覆土の堆積状況から明らかに柱穴と判断されるピットがあり、検出位置にはいくつかのブロック（集中区）を形成していることから、未確認の建物を構成する可能性がある。ただし、柱穴規模は本調査区北部の掘立柱建物群（SB1～6）のもの比べて小規模であることから、用途が異なる可能性が高い。本調査区からは、掘立柱建物として認定できなかった柱穴から、9本の柱根が出土した。樹種同定の結果（第VI章5A参照）、オニグルミ、ヤナギ属、ブナ属、クリ、エノキ属、キハダといった多様な広葉樹材で構成されるが、強度や保存性の低いヤナギ属が含まれている点に注目したい。平成15年調査区内においては、大部分がスギであった点と比較すると、今年度調査における柱材の樹種選択性は低いといえよう。ただし、分析対象に大型の掘立柱建物が含まれていないことから、調査区全体の傾向ではなく、建物規模および建物の用途を反映している可能性がある。次に、本調査区の傾斜角とピットの検出密度についてみる。本調査区は、山裾を流れるSD435以南が比較的急であるのに対し、以北は緩やかに傾斜する。ピットを含む遺構数もSD435を境にして、以北では検出数が急増する。SD178以北は益々傾斜角が緩やかとなり、遺構数はピットを中心に更に密度を濃くするとともに大型化の傾向にあり、明確に掘立柱建物群が存在する。このように、地山の傾斜角と遺構の検出数には相関関係が認められ、土地利用に選択が働いていたことを示唆する。

8) 炭 土 坑（図版67・140）

五反田遺跡平成15年調査区では8基を検出したが、本年調査区ではSX444の1基のみを検出した。35Dグリッドに位置し、長軸85cm×短軸55cmを測る。楕円形プランを呈し、覆土中には多量の炭化物が含まれていた。底面と壁面では焼けて硬化した部分が認められ、遺構内で火が焚かれたことが明らかである。遺構底面から土師器碗の底部片が1個体出土している。

4 遺 物

平成16年度調査区の出土遺物はコンテナ90箱におよぶ。そのほとんどが平安時代の土器・陶磁器が占め、縄文後期・中世(11～13世紀)・近世(17世紀)が少量認められるに過ぎない。遺物の種類では、土器・陶磁器類のほかに石製品・金属製品・木製品がある。平安時代の掘立柱建物群に伴う柱根以外では、帰属時期が不明確であるものがほとんどであるが、出土状態や遺物の形態などから、平安時代～中世に属するものが多いと推測される。

A 平安時代の土器・陶磁器

須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・白磁などがあり、その大半を土師器が占める。灰釉陶器は破片数で805点(復元されたものは1点として集計)を数え、上越地方では屈指の出土量を誇る。遺物は自然流路であるSD435を中心にSK179・SK50・SD178などで比較的まとまっているが、ほとんどは包含層中からの出土である。遺物の年代は、9世紀中葉前後と10世紀の2時期にまとまりが認められる。

なお、遺物の分類および記述にあたっては一之口遺跡西地区調査報告書[坂井1986]、遺物の編年的位置および年代観については春日真実氏の研究成果[春日1999]を参考にした。

1) 器種分類

基本的には五反田遺跡平成15年調査区と基準を同じくするが、今年度調査区で新たに認識された器種が少なからず存在することから、改めて器種分類を試みる。なお、取り上げたのは主要な器種のみであり、出土土器のすべてに検討を加えて網羅的に分類したものではない。

土 師 器

無台椀・有台椀・皿・壺・足高高台付鉢・鍋・小型甕・大型甕がある。胎土中に海綿骨針を含むものが多い点が注目され、平成15年調査区出土資料とは異なっている。

無台椀 内外面はロクロナデ、底部切り離しは全て糸切りである。法量から大・中・小に分かれ、大きいものからⅠ・Ⅱ・Ⅲとする。

無台椀Ⅰ 口径17cm前後・器高5cm前後の大型品。

無台椀Ⅱ 口径12～14cm前後・器高3～4cm前後の中型品。Ⅰ～Ⅲのなかで最も多い。

無台椀Ⅲ 口径9cm前後・器高3cm前後の小型品。内外面にスス・タール・油脂が付着する場合がある。

有台椀 無台椀に比べて深めの体部に低い高台が付く。内面にススやタールが付着するものが多い。

皿 法量から大・小に分かれ、大きいものからⅠ・Ⅱとする。

皿Ⅰ 口径11cm前後のもの。本類に分類したなかには、本来蓋とすべきものが含まれているかも知れない。

皿Ⅱ 口径8cm前後のもの。内外面にスス・タール・油脂の付着が認められる例が多い。

壺 出土量は少ない。頸部が短く、肩の張りが弱い、いわゆる短頸壺の器形を呈する。

足高高台付鉢 形態としては高台付鍋とすべきものである。大きく外傾する身部に比較的高い高台が付くものである。全形を窺えるものがないが、大型品が多いらしい。高台には透かしが開いているものもある。

る。内外面ロクロ調整で仕上げる。長野県北部で類例が多い。

鍋 体部から口縁部に向かって大きく外傾し、口縁端部を厚く仕上げて面を持つ。

甕 法量から大型・小型に分けた。中型とすべき法量のものも存在するが、全形を知る事ができる例がなく、便宜上設定しなかった。

大型甕 口縁部形態にはa・bの2種類がある。aは口縁部がくの字状に内湾または内屈し、端部をつまみ上げて外面が凹線状に窪むもの。bは口縁部が直線的に外反して、端部をまるく仕上げたり、肥厚させて角状にしたものである。しかし、より詳細に見てみると、口縁部はくの字状に内屈強くするが、つまみ上げが明瞭でなく、外側に面を作り出すような形態も認められる（17・18・196など）。口縁部形態aの形骸化、あるいはa・bの折衷形といった可能性が考えられるが、便宜上ここでは細別を避け、aの範疇で捉えて置くこととする。器面調整はロクロナデを主体として、カキメ・ケズリのほか、わずかにタタキが認められる。

小型甕 大型甕同様に口縁部形態a・bが認められるが、bがほとんどを占める。器面調整は大型甕に準ずるものの、タタキ技法は認められない。

黒色土器

内面を丁寧にミガキ、炭素を吸着させた土器であり、内面のみを黒色化したもの（いわゆる「内黒土器」と内外面共に黒色化したもの（「内外面黒色土器」）の2者がある。さらに内黒土器のうち、ミガキ調整によって暗文を描くものを「暗文土器」とする。無台碗・有台碗・皿・蓋・鉢などの器種がある。

無台碗 外面をロクロナデとする点では土師器無台碗と共通するが、底部からの立ち上がりと底面にヘラケズリを加える点が異なる。なお、回転ヘラケズリがほとんどで、わずかに手持ちヘラケズリが確認できる。内面は、口縁部周辺では横方向、見込み付近では放射状にヘラミガキを施す。法量には大・中・小があり、大きいものからⅠ・Ⅱ・Ⅲとする。

無台碗Ⅰ 口径17～18cm前後・器高7cm前後を測る大型品。口径では土師器無台碗Ⅰと共通するが、口径に対する高さの比率が大きく、深身となる。

無台碗Ⅱ 口径14～15cm前後・器高4～5cm前後を測り、Ⅰ・Ⅲに比べて浅身の形態をなす。

無台碗Ⅲ 口径12～14cm前後で、土師器無台碗Ⅱと共通する法量を示す。

有台碗 内外面の調整方法は無台碗と共通し、外面ロクロナデ・ヘラケズリ、内面ヘラミガキ調整を施す。無台碗に比較的高い高台を付した形態となり、灰釉陶器碗を模倣したものと思われる。

皿 確認できたのは1例のみである。蓋の可能性もある。

蓋 須恵器杯蓋を模倣したと思われ、ツマミを付す。1点が確認された。

内外黒色土器 碗・壺?が認められ、出土点数は数点を数えるのみである。

暗文土器 無台碗の内面に幾何学状の文様をヘラミガキで表出する。

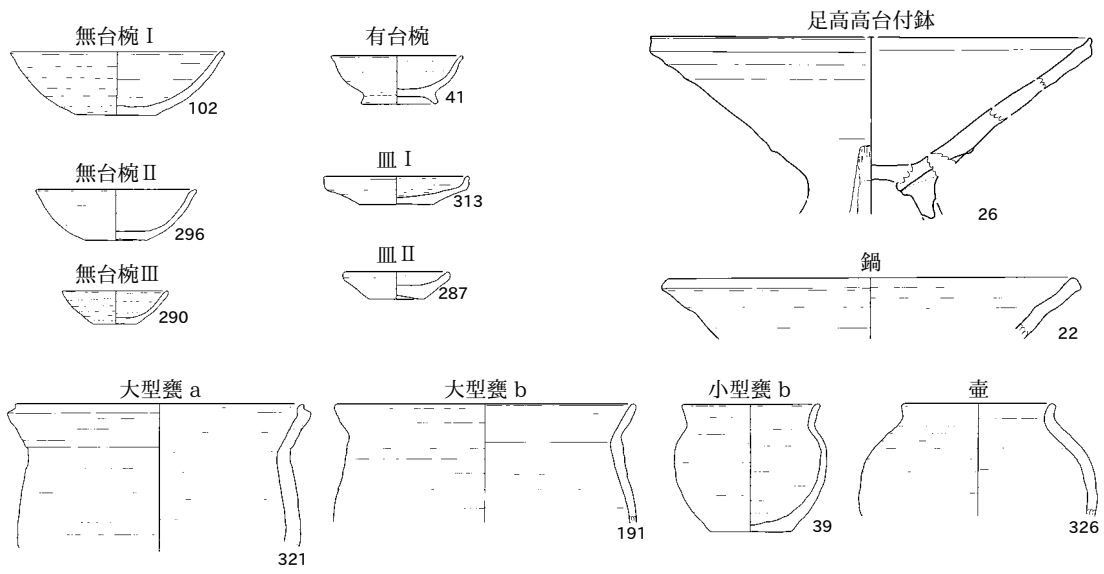
鉢 口径28cmを測る大型品で、1点のみ確認された。

須恵器

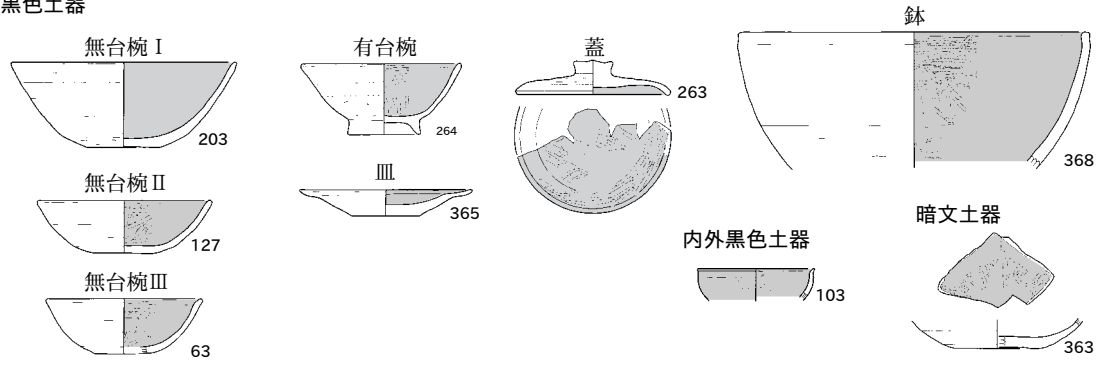
杯蓋・有台杯・無台杯・鉢・長頸瓶・短頸壺・横瓶・大型甕などがある。SD435からまとまって出土している以外、出土量はわずかである。よって、ここでは大まかな分類に留める。なお胎土の特徴には、平成15年調査区と同様に胎土①・②・③群の大きく3種類（第V章4A1参照）が認められ、高田平野東部窯跡群産と思われる①群が卓越する。

杯蓋 口径13cm前後、器高が高くて山笠状の形態を示すものがほとんどである。ツマミは比較的大き

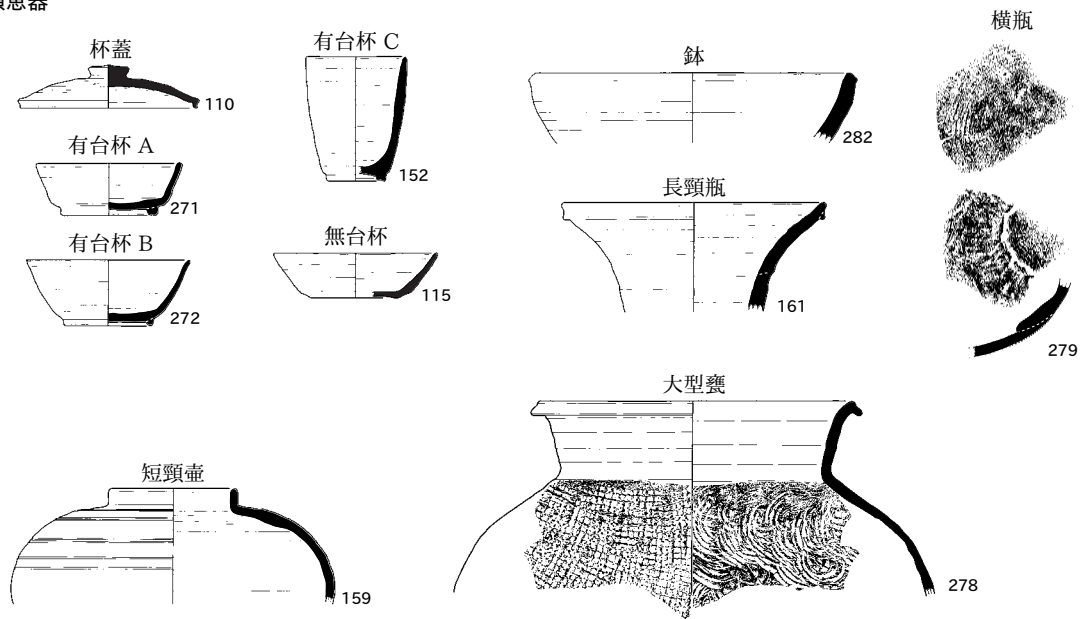
土師器



黒色土器

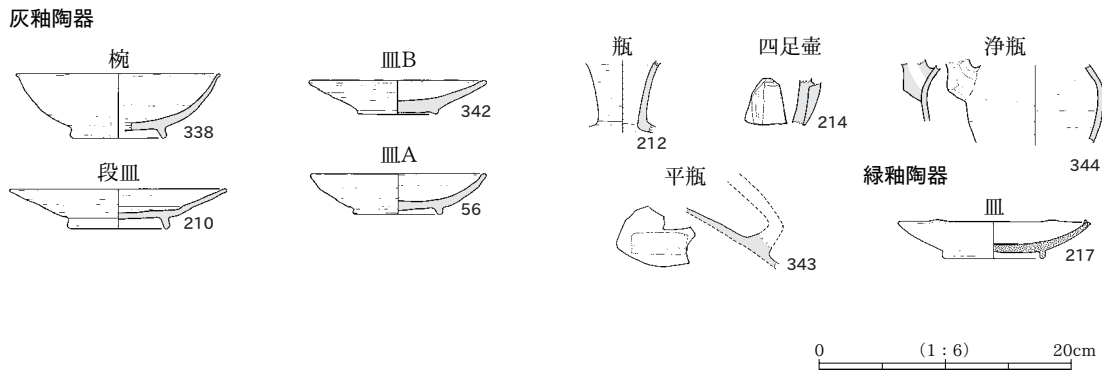


須恵器



0 (1:6) 20cm

第21図 器種分類図(1)



第22図 器種分類図(2)

く、ボタン状・擬宝珠状の2者がある。

有台杯 逆台形状の形態をなす一般的な浅身のものをA、やや深身で椀形のをB、コップ状の深く細いものをCとする。Cは極めて少なく、1点が図示できたのみである。底部切り離しは糸切りとヘラ切りの両者が認められるが、前者が多い。

無台杯 法量による差は認められず、口径12～13cm前後に集中する。底部切り離しは糸切りとヘラ切りとがあり、両者はほぼ拮抗する。

鉢 口径25cmを越える大型品で、器壁は厚く、重量感がある。例数は少なく、2点のみ図示した。

横瓶 1点を図示することができた。

短頸壺 胴上部が強張り、口頸部で強くすぼまるもの。口縁部は短く立ち上がって広口となる。例数が少なく、なおかつ全形を窺えるものがない。金属器を模倣したものと思われる、胴部上半に数段にわたって沈線を施した例が認められる。

長頸瓶 頸部が細く長いものを壺と区別して瓶とする。全体の器形が分からないものがほとんどで、形態や法量による細分は行っていない。

大型甕 口縁部直下に波状文を持つものと持たないものがあり、後者がほとんどを占める。

灰 釉 陶 器

破片数にして805片、口縁部残存率で335/18個体が出土した。出土量が多いことに加えて、椀・段皿・皿・瓶・平瓶・四足壺・浄瓶といった多様な器種が認められることに特徴がある。仏具の可能性が高い浄瓶は2点確認されている。施釉方法はツケガケがほとんどで、明確なハケヌリは確認できなかった。また釉が薄く、発色の悪いものが少なからず存在する。胎土には、砂質が強く粗い感じの猿投産と、緻密で硬質な東濃産の2者が認められる。なお皿にはAとBに細分できる。Aは、底部から体部にかけて内湾しながら外傾し、口縁部で短く外

器種	口縁部 残存率/18	破片数	比 率 (残存率)	比 率 (破片数)
椀	167	162	49.9%	20.1%
皿	120	120	35.8%	14.9%
椀か皿	39	403	11.6%	50.1%
不明	1	1	0.3%	0.1%
供膳具 計	327	686	97.6%	85.2%
瓶	5	30	1.5%	3.7%
三筋壺	0	1	0.0%	0.1%
壺	0	4	0.0%	0.5%
平瓶	2	13	0.6%	1.6%
水瓶	0	1	0.0%	0.1%
壺瓶類	1	68	0.3%	8.5%
不明	0	2	0.0%	0.2%
貯蔵具 計	8	119	2.4%	14.8%
総 計	335	805	100.0%	100.0%

第10表 五反田遺跡出土灰釉陶器器種構成比率

側に折れる。高台が比較的高く、内端接地ぎみとなる。一方のBは、底部から直線的に外傾しながら立ち上がり、そのまま口縁部へと至る。高台はつぶれたように極めて低い。

緑釉陶器

皿2点、香炉蓋1点を確認することができた。胎土の特徴から、共に猿投産の可能性が高い。(尾野善裕氏御教示)

2) 遺構出土土器

SK179 (図版79-1～25・80-25, 図版141) 掘立柱建物群に隣接して検出された大型の土坑で、炭化物を多く含んだ覆土から多くの遺物が出土した。なお、本遺構は大型掘立柱建物SB1の柱穴と切り合い関係にあり、SB1よりも新しく構築されたことが明かである。土器は、破片数1301片、口縁部残存率計測法で507/18個体が認められ、26点を図示した。主な器種には、須恵器有台杯A(1)・有台杯B(2)・大型甕(16)、土師器無台椀AⅡ(4～7)・小型甕(25)・大型甕(17～20・23～24)・鍋(21～22)・足高高台付鉢(26)、灰釉陶器椀(8・12)・皿B(9～11)・瓶(13)などがある。口縁部残存率では土師器食膳具が7割を占めて最も多く、土師器煮炊具、黒色土器食膳具がそれに続く。須恵器の比率はきわめて少ない。198は酸化炎焼成で淡褐色を呈する。食膳具の底部切り離しは糸切りのみで構成される。灰釉陶器のうち、9・12が東濃産。ほかは猿投産である。26は接合しない複数の小破片からの復元実測であり、口径を含めて推測の部分が多い。

高台には矩形の透かしが穿たれ、透かしは4単位となるらしい。内外面ともにロクロナデにより平滑に仕上げられるが、胎土は直径3mm程度の比較的大粒の砂粒を多く含み、やや粗い感がある。

SK50 (図版80-27～39, 図版141・142) 掘立柱建物群に隣接して検出された土坑で、覆土中からは水晶玉・性格不明鉄製品が共伴している。土器は、破片数727点、口縁部残存率計測法で320/18個体が認められ、13点を図示した。主な器種には土師器無台椀Ⅱ(27～36)・鍋(37)・小型甕(38～39)がある。土師器は、軟質で赤橙色を呈し、大粒の砂粒を多く含む点で共通する。器種構成では、土師器食膳具・煮炊具の占める比率が高く、須恵器・黒色土器が破片で定量存在する。

SK95 (図版80-40・41, 図版142)

種類	器種	口縁部 残存率/18	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)
須恵器	有台杯	8	2	1.6%	0.2%
須恵器	無台杯	4	5	0.8%	0.4%
須恵器	無台杯か有台杯	10	16	2.0%	1.2%
須恵器	不明	0	0	0.0%	0.0%
須恵器食膳具	計	22	23	4.4%	1.8%
土師器	椀	364	868	71.8%	66.7%
土師器	有台椀	7	3	1.5%	0.2%
土師器	無台椀	11	91	2.2%	7.0%
土師器	蓋	0	2	0.0%	0.2%
土師器	不明	0	0	0.0%	0.0%
黒色土器	椀	33	63	6.5%	4.8%
黒色土器	有台椀	0	2	0.0%	0.2%
黒色土器	無台椀	3	9	0.6%	0.7%
黒色土器	蓋	0	1	0.0%	0.1%
黒色土器	不明	0	0	0.0%	0.0%
灰釉陶器	椀	10	6	2.0%	0.5%
灰釉陶器	皿	11	24	2.2%	1.8%
灰釉陶器	椀か皿	3	5	0.6%	0.4%
灰釉陶器	不明	0	1	0.0%	0.1%
土師器食膳具	計	442	1075	87.4%	82.7%
食膳具	計	464	1098	91.5%	84.4%
須恵器	甕	0	19	0.0%	1.5%
須恵器	壺・瓶類	2	7	0.4%	0.5%
須恵器	不明	0	0	0.0%	0.0%
灰釉陶器	瓶	4	2	0.8%	0.2%
灰釉陶器	壺・瓶類	0	1	0.0%	0.1%
貯蔵具	計	6	29	1.2%	2.2%
土師器	小甕	13	14	2.6%	1.1%
土師器	甕	23	14	4.5%	1.1%
土師器	足高高台鉢	1	1	0.2%	0.1%
土師器	甕か鍋	0	145	0.0%	11.1%
土師器	不明	0	0	0.0%	0.0%
煮炊具	計	37	174	7.3%	13.4%
総計		507	1301	100.0%	100.0%

第11表 SK179出土土器器種構成比率

被熱した大量の大型礫を覆土上部に含んだ土坑で、少量ではあるが、礫の間に挟まるように大型破片や完形品が出土した。図示できたのは、黒色土器有台碗（40）と土師器有台碗（41）の2点である。法量や形態は2点でよく似ているが、40では内外面ミガキ調整を施して内面に炭素を吸着させているのに対して、41の胎土はやや粗く、内面にはススや油脂の付着が認められる。41は灯明などとして使用された可能性がある。

SK503（図版80-42～44，図版142） 土師器小型甕（44）、黒色土器有台碗（42）・無台碗Ⅱ（43）がある。

種類	器種	口縁部 残存率／18	破片数	比 率 (残存率)	比 率 (破片数)
須恵器	有台杯	0	3	0.0%	0.4%
須恵器	無台杯	0	33	0.0%	4.5%
須恵器	無台杯か有台杯	2	216	0.6%	29.7%
須恵器	不明	0	0	0.0%	0.0%
須恵器食膳具	計	2	252	0.6%	34.6%
土師器	碗	243	325	75.9%	44.7%
土師器	有台碗	0	1	0.0%	0.1%
土師器	無台碗	44	14	13.8%	1.9%
土師器	不明	0	10	0.0%	1.4%
黒色土器	碗	6	25	1.9%	3.4%
黒色土器	有台碗	0	2	0.0%	0.3%
黒色土器	無台碗	0	3	0.0%	0.4%
黒色土器	不明	0	0	0.0%	0.0%
灰釉陶器	皿	0	1	0.0%	0.1%
土師器食膳具	計	293	381	91.6%	52.3%
食 膳 具	計	295	633	92.2%	87.0%
須恵器	甕	0	4	0.0%	0.6%
須恵器	壺・瓶類	1	3	0.3%	0.4%
須恵器	不明	0	2	0.0%	0.3%
貯蔵具	計	1	9	0.3%	1.3%
土師器	小甕	12	23	3.8%	3.2%
土師器	甕	9	5	2.8%	0.7%
土師器	鍋	3	1	0.9%	0.1%
土師器	甕・鍋	0	56	0.0%	7.7%
土師器	不明	0	0	0.0%	0.0%
煮 炊 具	計	24	85	7.5%	11.7%
総 計		320	727	100.0%	100.0%

第12表 SK50出土土器器種構成比率

SK382（図版80-45，図版142）

45は土師器無台碗の底部と思われるが、1条の墨書が底部に認められる。底部切り離しは糸切りである。

SK7（図版80-46，図版142） 土師器無台碗Ⅲ（46）がある。底部切り離しは糸切りである。

SK347（図版80-47～49，図版142） 須恵器無台杯（47）、灰釉陶器皿B（48～49）がある。47では胴部外面に「太」、49では底部外面に「大」の墨書が認められる。48・49は施釉が薄く、発色がほとんど認められない。高台は高く、直立気味となり、比較的しっかりしている。

SX211（図版80-50～59，図版142） 大量の土器が密集して出土したが、小破片が多く、図示できたのは10点のみである。主な器種には土師器無台碗Ⅱ（50～54・58～59）、黒色土器碗Ⅱ（55）、灰釉陶器皿B（56）、緑釉陶器皿（57）がある。52・55には体部外面に墨書が認められ、55は「太」の可能性がある。57は濃緑色の特徴的な発色を示す。

SK280（図版81-60～68，図版143） 須恵器無台杯？（60）、土師器無台碗Ⅱ（61～62）・小型甕（66）、黒色土器無台碗Ⅰ（64～65）・無台碗Ⅲ（63）・有台碗（67～68）がある。66の外面にはススが明瞭である。67と68は高台の形態・高さに違いがあり、異なる法量となる可能性が高い。

SX66（図版81-69～71，図版143） 土師器無台碗Ⅱ（69）・須恵器大型甕（71）がある。71は頸部のすぼまりが強いものである。内外面ではタタキと当て具の痕跡が認められるが、ハケメ工具でそれを消すように調整している点が特徴的である。

SX386（図版81-72-73，図版143） 黒色土器有台碗（72・73）がある。72では底部糸切りをナゲ消すが、73では底部糸切りがそのまま残っている。

SD713（図版81-74，図版143） 土師器無台碗Ⅲ（74）がある。体部中ほどの内外面に対応する部分にススが帯状に付着している。

SX444（図版81-75，図版143） 75は底面および底部からの立ち上がり部を手持ちヘラケズリする。

砂粒を多く含み、胎土は比較的粗い。

SX281 (図版81-76) 体部外面に墨書された土師器碗が出土した。

SD178 (図版81-77～89・82-90～109, 図版143・144) 掘立柱建物群の東はずれで南北を縦断するように分布する溝である。大型掘立柱建物SB1の柱穴と切り合い関係にあり、SD178が新しい。破片数4009片、口縁部残存率計測法で2183/18個体が出土し、33点を図示した。破片数・口縁部残存率ともに7割以上を土師器食膳具と煮炊具が占め、定量の黑色土器と少量の須恵器・灰釉陶器が伴う。須恵器有台杯A(77)・無台杯(78)・長頸瓶(79)・短頸壺(80)・大型壺(81～83)、土師器無台碗I(101～102)・無台碗II(90～100)・小型甕(84・88)・大型甕(86～87)、黑色土器無台碗II(104)・有台碗(105)、内外黑色土器(103)、灰釉陶器碗

種類	器種	口縁部 残存率/18	破片数	比 率 (残存率)	比 率 (破片数)
須恵器	有台杯	5	3	0.2%	0.1%
須恵器	無台杯	6	5	0.3%	0.1%
須恵器	無台杯か有台杯	69	22	3.2%	0.5%
須恵器	蓋	8	4	0.4%	0.1%
須恵器	不明	0	0	0.0%	0.0%
須恵器食膳具	計	88	34	4.1%	0.8%
土師器	碗	1604	2859	73.5%	71.3%
土師器	有台碗	0	18	0.0%	0.4%
土師器	無台碗	52	176	2.4%	4.4%
土師器	蓋	11	2	0.5%	0.0%
土師器	不明	0	16	0.0%	0.4%
黑色土器	碗	153	133	7.0%	3.3%
黑色土器	有台碗	3	9	0.1%	0.2%
黑色土器	無台碗	0	8	0.0%	0.2%
黑色土器	不明	0	0	0.0%	0.0%
灰釉陶器	碗	34	24	1.6%	0.6%
灰釉陶器	皿	18	13	0.8%	0.3%
灰釉陶器	碗か皿	10	53	0.5%	1.3%
土師器食膳具	計	1885	3311	86.4%	82.4%
食 膳 具	計	1973	3345	90.4%	83.4%
須恵器	甕	4	94	0.2%	2.3%
須恵器	短頸壺	2	1	0.1%	0.0%
須恵器	長頸瓶	0	1	0.0%	0.0%
須恵器	壺・瓶類	19	46	0.9%	1.1%
須恵器	不明	0	4	0.0%	0.1%
貯 蔵 具	計	25	146	1.1%	3.6%
土師器	小甕	31	48	1.4%	1.2%
土師器	甕	127	119	5.8%	3.0%
土師器	鍋	23	7	1.1%	0.2%
土師器	鉢	2	7	0.1%	0.2%
土師器	可搬式竈	2	2	0.1%	0.0%
土師器	甕か鍋	0	334	0.0%	8.3%
土師器	不明	0	1	0.0%	0.0%
煮 炊 具	計	185	518	8.5%	13.0%
総 計		2183	4009	100.0%	100.0%

第13表 SD178出土土器器種構成比率

(106～108)・皿B(109)などがある。77・78はともに底部ヘラ切りである。80は口縁部から肩部にかけて自然釉が発色している。85は非ロクロ成形の甕で、外面ではハケメとケズリ、内面ではハケメ調整が施される。口縁部は、接合部から粘土紐が剥落した際にできる擬口縁の可能性はある。89は器種同定が困難なもので、上下反転の可能性はある。口縁部に模される部位は内側に傾斜し、内面下方にむかって折れ曲がるように続く。外面側端部が幅広い面を形成して少し窪む様子は、土師器大型甕や鍋の口縁部形態に似た例がある。また内面には剥がれたような痕跡が認められ、何らかの突起物が付着していたことが明らかである。なお剥落痕は4か所程度に復元することができる。二次焼成あるいはスス・炭化物などの付着物は認められない。甕あるいは移動式カマドの一種であろうか。

SD435 (図版82-110～128・83-129～157・84-158～185・85-186～216, 図版143～146) 大量の遺物が出土した自然流路である。2本の川が切りあっており、SD435Bが古く、Aが新しい。しかし、AとBの流路は複雑にからみあってきたため、両者を分離して遺物を取り上げることができなかった。SD435Bとして図示した遺物は、川底に張り付くようにまとまって出土した明らかにBに属すると判断されたものであり、SD435Aとして図示したものの中にもBの遺物が混在している可能性が高い。

SD435Bとして取り上げたものは、破片数で3,184片、口縁部残存率計測法で769/18個体を数え、そのうち19点を図示した。口縁部残存率計測法では、土師器食膳具が7割以上を占めるものの、1割を超える比較的多くの須恵器が伴う点は、SD435Aを含むほかの遺構一括例や包含層のあり方とは異なる。

須恵器杯蓋（110～113）・有台杯A（114）・無台杯（115～117）・長頸瓶（119～124）、土師器無台碗Ⅱ（126）・甕（128）、黒色土器無台碗Ⅱ（127）、灰釉陶器浄瓶（125）がある。113は内面に墨が付着し、磨耗が著しいことから転用硯と判断できる。124は耳状の突起が付いた須恵器長頸瓶である。突起には上部から盲孔が穿たれている。128は尖底気味となった土師器甕の胴下半で、外面は格子タタキ、内面にはハケメが認められる。

SD435Aは破片数で10,820片、口縁部残存率計測法で3,768／18個体が出土し、うち88点を図示した。土師器食膳具が主体を占め、須恵器・黒色土器がほぼ均衡して組成する。須恵器杯蓋（129～134）・有台杯A（135～137）・有台杯C（152）・無台杯（138～151）・大型甕（153～158）・短頸壺（159～160）・長頸瓶（161～166・168）・壺蓋（167）、土師器無台碗Ⅱ（169～182）・無台碗Ⅰ（183）・有台碗（188）・小型甕（192～194）・大型甕a（195～196）・大型甕b（191）、黒色土器無台碗Ⅰ（203）・無台碗Ⅲ（197～201・204）・有台碗（202・205～206）、灰釉陶器碗（207～209）・段皿（210）・皿B（211）・瓶（212～213）・四足壺（214）、緑釉陶器皿（217）などがある。須恵器食膳具の底部切り離しはヘラ切り9点（137～138・142～144・146・149～151）、糸切り5点（136・139～140・145・147）と図示したものなかでは前者が多い。一方、土師器食膳具は全て糸切りで、169・177・184では口縁部内面または見込みにタール状の付着物が認められる。186は体部が大きく外傾する逆台形状の碗で、底部が厚く作られ、見込みと底部外面にはスガが付着する。187はいわゆる柱状高台と呼ばれる厚く小さな底部が特徴的である。186・187ともに中世に下る可能性が高い。189・190は比較的高い脚部が付く器種である。黒色土器内面のヘラミガキは口縁内面を横方向・胴部内面を縦方向とするのが一般的で、見込みでは放射状となる（204）。205は見込みに渦巻き状の暗文を施している。206は有台碗として分類したが、非常に浅身で有台皿とでも呼ぶべき形態を示している。本遺跡では浄瓶の胴部破片が2点確認

種類	器種	口縁部 残存率／18	破片数	比 率 (残存率)	比 率 (破片数)
須恵器	有台杯	20	16	0.5%	0.1%
須恵器	無台杯	49	101	1.3%	0.9%
須恵器	無台杯か有台杯	222	347	5.9%	3.2%
須恵器	蓋	43	30	1.1%	0.3%
須恵器	不明	0	0	0.0%	0.0%
須恵器食膳具	計	334	494	8.8%	4.5%
土師器	碗	2590	5452	68.7%	50.4%
土師器	有台碗	0	22	0.0%	0.2%
土師器	無台碗	118	914	3.1%	8.4%
土師器	柱状高台碗	0	3	0.0%	0.0%
土師器	蓋	7	13	0.2%	0.1%
土師器	不明	0	266	0.0%	2.5%
黒色土器	碗	327	978	8.7%	9.0%
黒色土器	有台碗	4	24	0.1%	0.2%
黒色土器	無台碗	21	114	0.6%	1.1%
黒色土器	蓋	5	6	0.1%	0.1%
黒色土器	不明	0	0	0.0%	0.0%
灰釉陶器	碗	17	9	0.5%	0.1%
灰釉陶器	皿	3	2	0.1%	0.0%
灰釉陶器	段皿	8	1	0.2%	0.0%
灰釉陶器	碗か皿	0	11	0.0%	0.1%
緑釉陶器	皿	6	1	0.2%	0.0%
白磁	碗	3	2	0.1%	0.0%
土師器食膳具	計	3109	7818	82.6%	72.2%
食 膳 具	計	3443	8312	91.4%	76.8%
須恵器	甕	17	212	0.5%	2.0%
須恵器	短頸壺	6	1	0.2%	0.0%
須恵器	小壺	0	3	0.0%	0.0%
須恵器	突帯付四耳壺	0	1	0.0%	0.0%
須恵器	長頸瓶	9	6	0.2%	0.1%
須恵器	横瓶	0	2	0.0%	0.0%
須恵器	壺・瓶類	21	95	0.6%	0.9%
須恵器	不明	0	4	0.0%	0.0%
灰釉陶器	三筋壺	0	1	0.0%	0.0%
灰釉陶器	瓶	0	3	0.0%	0.0%
灰釉陶器	壺・瓶類	0	11	0.0%	0.1%
貯 蔵 具	計	53	339	1.4%	3.1%
土師器	小甕	98	250	2.6%	2.3%
土師器	甕	164	123	4.4%	1.1%
土師器	鍋	10	29	0.3%	0.3%
土師器	鉢	0	5	0.0%	0.0%
土師器	甕か鍋	0	1700	0.0%	15.7%
土師器	不明	0	62	0.0%	0.6%
煮 炊 具	計	272	2169	7.2%	20.1%
総 計		3768	10820	100.0%	100.0%

第14表 SD435出土土器器種構成比率

されており、213が浄瓶の頸部片である可能性もある。しかし、内面上端に降灰が認められることから水瓶の可能性が高いと考えている。なお、210の内面でハケヌリの単位が明瞭であるものの、207～209・211では内面全面に施釉が認められるという違いがある。217は、口縁端部に刻み・見込みに円文を加えて装飾化したいわゆる輪花皿である。高台畳付と底部を含めて全面施釉され、濃緑色に発色している。なお、215・216は中世の白磁碗である（4-B参照）。

SB1 218は須恵器有台杯Aで、高台は底部内側に入り、体部の立ち上がりはやや丸みをおびる。219は、ドーナツ状の粘土紐の中に円盤状の粘土塊を詰めて成形した、いわゆる充填手法による底部片である。平安時代より古いものかもしれない。220は甌の把手である。

SB3（図版85-222～225，図版147） 土師器無台碗Ⅱ（222～224）、灰釉陶器碗（225）がある。223では口縁部内面、224では口縁部内外面にタールの付着が認められる。225は暗灰色で砂質の強い胎土であることから、猿投産であることが分かる。

SB4（図版85-221，図版147） 土師器大型甕1点を図示することができた。胴部上半ではロクロナデによる凹凸が明瞭で、それ以下は内外面共にケズリとする。内面では一部にハケメが見える。

SB5（図版86-229，図版147） 土師器無台碗Ⅱ（229）1点を図示することができた。器面摩滅のため、底部切り離し痕が確認できない。

SB6（図版86-226～228，図版147） 須恵器大甕の口縁部（226・228）と胴部（227）の破片を図示した。

柱穴列（図版86-230・231，図版147） 土師器無台碗2点を図示した。230・231共に浅身の器形となり、231は無台碗Ⅱに該当するものの、230はむしろ皿とすべき形態を呈する。230は糸切りで、231は摩滅のため底部切り離し痕が確認できない。

その他のピット（図版86-232～256・87-257～269，図版147・148） 掘立柱建物群の周辺に位置するピットで、建物として復元できなかったピットから出土した土器である。ほとんどが単独出土であるものの、いくつかのピットからはややまとまって出土した。ここでは、複数の土器を出土したピットについてのみ記述することとする。

種類	器種	口縁部 残存率／18	破片数	比 率 (残存率)	比 率 (破片数)
須恵器	有台杯	0	3	0.0%	0.1%
須恵器	無台杯	0	11	0.0%	0.3%
須恵器	無台杯か有台杯	85	70	11.1%	2.2%
須恵器	蓋	7	14	0.9%	0.4%
須恵器食膳具	計	92	98	12.0%	3.0%
土師器	碗	579	2201	75.3%	69.1%
土師器	有台碗	0	4	0.0%	0.1%
土師器	無台碗	0	217	0.0%	6.8%
土師器	蓋	2	3	0.3%	0.1%
土師器	不明	0	5	0.0%	0.2%
黒色土器	碗	29	124	3.8%	3.9%
黒色土器	有台碗	0	13	0.0%	0.4%
黒色土器	無台碗	4	26	0.5%	0.8%
黒色土器	蓋	3	1	0.4%	0.0%
黒色土器	不明	0	16	0.0%	0.5%
灰釉陶器	碗	1	1	0.1%	0.0%
土師器食膳具	計	618	2611	80.4%	81.9%
食膳具	計	710	2709	92.3%	85.0%
須恵器	甕	0	38	0.0%	1.2%
須恵器	長頸瓶	0	3	0.0%	0.1%
須恵器	壺・瓶類	6	18	0.8%	0.6%
須恵器	壺蓋	2	1	0.3%	0.0%
須恵器	不明	0	1	0.0%	0.0%
灰釉陶器	壺瓶類	0	2	0.0%	0.1%
貯 蔵 具	計	8	63	1.1%	2.0%
土師器	小甕	10	51	1.3%	1.6%
土師器	甕	37	34	4.8%	1.1%
土師器	鍋	4	5	0.5%	0.2%
土師器	鉢	0	1	0.0%	0.0%
土師器	甕か鍋	0	306	0.0%	9.6%
土師器	不明	0	15	0.0%	0.5%
煮 炊 具	計	51	412	6.6%	13.0%
総 計		769	3184	100.0%	100.0%

第15表 SD435B出土土器器種構成比率

P194 土師器無台椀Ⅱ（243・244・246）、黒色土器蓋（263）が出土した。244は焼成後のキ字状の刻線が胴部に認められる。313はボタン状の比較的大きなツマミを付す。内面のヘラミガキは中央部がやや放射状をなし、その外側は端部に沿って円を描く。

P404 土師器大甕（256）、黒色土器有台椀（261・265・266）がある。

P306 須恵器杯（235）、土師器無台椀（240・249・250）・大型甕（254）・皿Ⅱ（236）、灰釉陶器椀（269）がある。236は内面にタールが帯状に付着し、部分的に油脂やススも認められることから、灯明皿として使用されたことが明らかである。胎土はシルト質で、サラサラした触感が特徴的であり、ほかの土師器椀とは異なる。

P3 須恵器大甕（257・258）・長頸瓶（260）がある。257はピット4からも同一個体破片が出土している。

3) 包含層出土土器（図版87-270～277・88-278～306・89-307～330・90-331～368, 図版148～150）

須恵器杯蓋（270）・有台杯A（271）・有台杯B（272）・無台杯（273～274）・水瓶（275）・長頸瓶（276）・小型甕（277）・大型甕（278・280）・横瓶（279）・鉢（281～282）、土師器皿Ⅱ（286～287）・皿Ⅰ（289・313）・無台椀Ⅲ（290）・無台椀Ⅱ（291～305・309）・無台椀Ⅰ（307～308）・足高高台鉢（306）・大型甕（319～325）・小型甕（327～329）・鍋（330）・壺（326）、灰釉陶器皿A（331～334）・皿B（341・342）・椀（335～340）・平瓶（343）・浄瓶（344）、緑釉陶器皿（346～348）・椀（349）・香炉蓋（350）、黒色土器無台椀Ⅰ（362）・無台椀Ⅲ（352・354～358・360～361）・皿（365）・鉢（368）、内外黒色土器（359・367）、暗文土器（363～364）などが認められる。

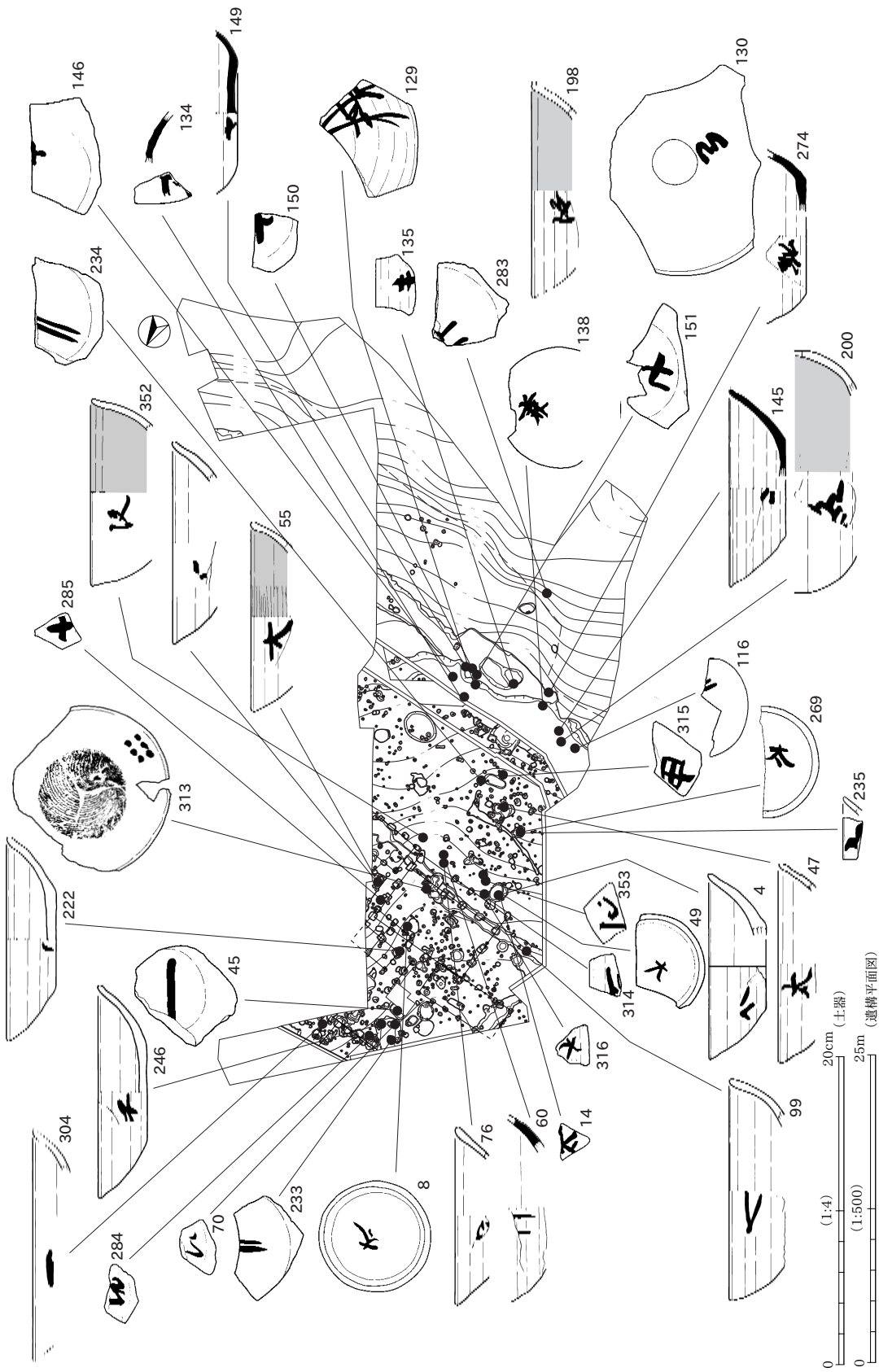
302・366は内外面にタールが付着しており、灯明皿として利用された可能性が高い。309の底部穿孔は焼成後に行なわれており、内面から外面に向かって穿孔されている。310～312の土師器椀は底部から体部への立ち上がり部分と底面をヘラケズリするものであり、黒色土器の製作方法と共通する。311ではヘラケズリ前の糸切り痕が底面で確認できる。326は広口壺の器形を呈するが、内外面にススが付着しており煮炊具としての機能が想定される。320の土師器大甕の体部下半はタタキ技法によって成形されている。外面には平行条線によるタタキ、内面は無文の当て具が使用されている。330の鍋もまたタタキ技法で成形され、格子目タタキの工具痕が認められる。349の緑釉陶器皿Aは、底部糸切り痕がナデ消され、その上から内外全面施釉される。また347は底部のみが露胎で、それ以外は全面施釉が見られる。高台接地面を少し窪ませて段を作り出しているのが特徴的である。近江産の可能性はある。

4) 刻文のある土器（図版85-196・89-317・318, 図版146・149）

数条の細くするどい沈線で記号を書いたものをここでまとめる。すべての記号が沈線を交差させてものである。196は土師器大甕の内面に3条沈線を交差させている。317・318は土師器椀の底部で、糸切りの上から、317は2本、318は4本の沈線を交差させる。墨書土器のなかに、十字に墨線を交差させるものが定量存在しており、何らかの関係の有しているのかも知れない。

5) 墨書土器（第16表・第23図）

文字の判読できない墨痕だけのものを含めて、47点の墨書土器を確認することができた（第16表）。判読できた文字は、可能性あるものも含めて、「太」が6点、「七」が4点、「山」が2点、「由」・「中」・「兼」



第23図 墨書土器出土分布図

報告番号	グリッド	遺構	釈文	判読備考	部位	種別	器種	備考
8		SK179	太		底部外面	灰釉陶器	有台碗	写真方向違い
14		SK179	太		体部外面	須恵器		正位力
45		SK382	一カ	墨線1本のみ	底部外面	土師器		
47		SK347	太		体部外面	須恵器	無台杯	正位で墨書
49		SK347	太もしくは大カ		底部外面	灰釉陶器	有台碗	
52		SX211	□	ナ文字に直行する墨痕のみ、墨痕の左半分は欠損	体部外面	土師器	碗	
55		SX211	太もしくは大カ		体部外面	土師器	杯	正位で墨書
60		SX280	□	「村・材」などカ	体部外面	須恵器		
70		SX66	□〔山カ〕		底部外面	土師器	無台杯	
76		SX281	□	牧・枚などカ	体部外面	土師器		倒位で墨書
99		SD178	□	墨線2本のみ	体部外面	土師器		
129		SD435A	中		体部外面	須恵器	蓋	
130		SD435A	□〔山カ〕		外面	須恵器	杯蓋	漆書
134		SD435A	□		体部外面	須恵器		
135		SD435A	□		体部外面	須恵器	無台杯	
138		SD435A	兼	本来は兼公カ公は墨痕が消失したカ	底部外面	須恵器		
146		SD435A	□	太や七などカ	底部外面	須恵器	無台杯	
149		SD435	□	太や七などカ	体部外面	須恵器	無台杯	
150		SD435A	□	太や七などカ	底部外面	須恵器	無台杯	
151		SD435A	七□	「七」の他に墨点あり	底部外面	須恵器	無台杯	
198		SD435	□	政カ改カ	体部外面	黒色土器		No.10と墨書された土器の部位は共通
200		SD435A	□		体部外面	黒色土器		
233		P196	□	墨線2本のみ	底部外面	須恵器	無台杯	
234		P387	□	墨線2本のみ	底部外面	須恵器	無台杯	
235		P306	□	太カ七カ	体部外面	須恵器		
269		P306	太		底部外面	灰釉陶器	有台碗	
274	34D2Ⅲ		□	稲などカ	体部外面	須恵器	無台杯	倒位で墨書
283	35C24Ⅲ		□	「村・材」などカ	底部外面	須恵器	無台杯	
284	30A25Ⅱ		□〔山カ〕		底部外面	須恵器	無台杯	
285	32B2Ⅲ		□	太や七などカ	体部外面	須恵器		
304	31A11Ⅱ		□	丁もしくは人カ	体部外面	土師器		H15年調査区出土のNo.319と関連するか
313	32c3Ⅲ		□	墨点3つつを2列に列べる	体部外面	土師器	無台碗	
314	32C8Ⅲ		□	墨線が2～3本みられる	体部外面	土師器		
315	33C14Ⅲ		由		体部外面	土師器		倒位で墨書
316	32C7Ⅲ		太もしくは大カ		体部外面	土師器		倒位で墨書
352	33B11Ⅲ		□	政カ改カ	体部外面	土師器	無台碗	
353	32C8Ⅲ		□□	向きの異なる墨痕が2つあり	体部外面	黒色土器		
A		SX211	□	ナ文字に直行する墨痕のみ	体部外面	土師器	碗	口縁部付近
B		SD435	□	墨痕のみ	体部外面	須恵器		
C	33B8Ⅲ		□	墨痕のみ	体部外面	土師器	杯	
D			□	墨線2本のみ	底部外面	土師器	無台杯	
E	32C7Ⅲ		□		体部外面	土師器		
F	31B5Ⅲ		□	曲線の墨線のみ	底部外面	土師器	無台杯	落書的
G	33C5Ⅲ		□	人偏のみ	体部外面	須恵器		
H		SK050	□	墨線2本のみ	体部外面	土師器		
I	32C7Ⅲ		□		体部外面	土師器		
J	32C8Ⅲ		□	墨点のみ	底部外面	灰釉陶器	有台碗	

第16表 墨書土器一覧

などが1点となる。また文字以外のものでは、墨線1本や2本、また墨線が交差するものなどが合わせて9点認められる。墨痕を6つならべた313のような例もある。墨書土器の器種には、土師器が22点と最も多く、須恵器21点、灰釉陶器4点となる。墨書部位としては、体部外面が最も多く、底部外面がそれに続く。

墨書土器の出土位置には二つのまとまりが認められる。ひとつは掘立柱建物群が集中する30～32グリッド列で、もうひとつはSD435を中心とした33～34グリッド列である。ちょうど遺構の分布が希薄となる32～33グリッド列の一部では、帯状に墨書土器出土の空白域となっている。文字判読例として

はもっとも多い「太」（「大」）は掘立柱建物群と重なるように分布している。

B 中世の土器・陶磁器

北陸では、12世紀中頃に現れる「珠洲焼きの成立と広域流通、中国陶磁器の定量的流通、京都系土師皿の流入」という画期をもって「中世的土器様式」の成立期とする見解〔坂井1990〕がある。本項ではこの見解に従い12世紀から16世紀までの遺物を扱う。中世の遺物は、青磁、白磁と珠洲が少量見られた。それらは、SD435と包含層中から出土している。出土状況及び量は極めて散見的であり、本調査区内に該期の積極的な生活痕跡は認めがたい。しかしながら、約1km離れた仲田遺跡では同時期（中世Ⅰ期〔加藤2003〕）の生活域が発見されていることから関連が注目される。なお、青磁・白磁の分類・編年は横田賢次郎・森田勉氏〔横田・森田1978〕〔森田1983〕に拠った。

青磁（図版91-378・図版151）

378は包含層中（Ⅱ層）からの出土である。龍泉窯系劃面文碗の底部。12世紀中頃～後半の所産。畳付けは削りで面取りされる。本調査区での出土は本品1点のみである。

白磁（図版85-215・216、図版146）

216（SD435A）は、白磁Ⅶ類碗の口縁部で、12世紀後半の所産である。215（SD435A）は、白磁Ⅱ類碗の口縁部である。11世紀後半～12世紀前半の所産である。口縁端部は折り返して細い玉縁状に作出される。345は白磁Ⅳ類碗の口縁部で11世紀後半から12世紀前半の所産。幅広の玉縁状口縁を持つ。376は白磁皿の底部で15世紀の所産。全体的に黄白色味を帯びる。底部畳付けは削り取られ無釉。375は白磁Ⅴ類碗の胴部片で、12世紀中頃～後半の所産。内面には湾曲した5～7条1単位の櫛描を有し、外面には蓮弁文と考えらる刻線を有する。胎土は精緻な白色でスは少ない。釉調は透明性があり、ムラがない。

珠洲（図版91-377、図版151）

377は、珠洲の片口鉢底部である。吉岡康暢氏の年代観によると、Ⅲ期（13世紀後半）以降〔吉岡1994〕の可能性が高い。卸目は8条1単位であり、やや幅広い原体で太く深く作り出されている。本調査区での出土は本品1点のみである。

C 近世の陶磁器

近世の遺物の大半は包含層中（Ⅱ層）からの出土である。遺物が陶磁器類のほか、金属製品が少量出土している。陶磁器類の生産地については、近世の全時期を通じて、総ての器種で肥前系陶磁器が大半を占めるが、壺類でのみ越中瀬戸が優位を占めるという上越地方の近世遺跡に典型的にみられる産地組成である（第17表）。最も出土量の多い肥前系陶磁器の年代〔大橋1993〕に注目してみると、17世紀代（大橋Ⅰ～Ⅲ期）では少量であるが定量の出土量を保っており、18世紀以降（大橋Ⅳ・Ⅴ期）になると急増する（第17表）。該期に属する遺構はSD662のみである。SD662は古代の遺物とともに17世紀代の遺物を包含することから17世紀を下限とする。ここでは、SD662の遺物を報告するに留める。

SD662（図版91-379～381、図版151）

379は、肥前系陶器の皿の底部である。見込みに砂目積みの痕跡が認められる。380は、越中瀬戸の向付である。胴部下半まで鉄釉が掛けられ、底部は削り込みで作出される。381は、肥前系陶器の挿鉢の胴部である。遺存部には釉薬は認められない。口唇部にのみ施釉されるタイプであろう。379・380は、17世紀前半に比定され、381は17世紀前半から中頃に比定される。

器種／産地	肥前系磁器	肥前系陶器	越中瀬戸陶器	瀬戸美濃系磁器	瀬戸美濃系陶器	関西系陶器	京・信楽系陶器	越前陶器	須佐唐津陶器	景德鎮(中国)	瓦器(産地不明)	不明	小計
椀	127	23		6		5	2					4	167
皿	41	15	1	1		1	1			1		4	65
坏	10									2		2	14
鉢		14			2	4		2			4	18	44
蓋	7											1	8
播鉢		51	4						1			8	64
壺	3		30				1					8	42
甕		16										4	20
瓶	42	4					9					15	70
鍋												2	2
段重	1												1
土瓶							1					1	2
水滴	2												2
火入・香炉	1	3										2	6
火消壺											1		1
灯明受皿		1					4						5
匣鉢			1										1
不明	11	1			1		3					9	25
小計	245	128	36	7	3	10	21	2	1	3	5	78	539

第17表 近世陶磁器一覧

D 縄文土器 (図版91-369～374, 図版150)

10点前後の縄文土器片が出土した。文様部分の破片が少なく、また細片が多いため、帰属する型式を特定することができなかった。369・373は縄文の条が縦走し、370では横走気味となる。369は口縁部破片で、恐らくは胴部全面に縄文を施し、口縁部のみを無文とした粗製土器であろう。口縁部は内湾しながら緩やかに外反し、端部は面取りせず、細く収まる。372は器面の摩滅が著しいが、文様が描かれた唯一のものである。縦に走る鋸歯状の沈線区画が認められ、その左側のみで縄文が認められることから、磨消縄文手法によって文様が表出されたものと判断できる。モチーフは不明である。374は底部付近の破片で、底部から一定の幅を丁寧にナデて無文としているのが見える。371は底部で、いわゆる網代底である。土器片の厚みが比較的薄く、施された縄文の節が細かいこと。さらに、磨消縄文手法を採用している点などを考慮すると、縄文後期後半以降に位置づくものと考えられる。なお、369のみ海綿骨針を胎土中に含む。

E その他

1) 木製品

柱根 (図版91-382～388, 図版151)

448～454は、柱根である。総て掘立柱建物とは伴わない柱根で、キハダ(382・383)、ブナ属(385)、オニグルミ(384)、ヤナギ属(386・388)、エノキ属(387)などの広葉樹材を使用している。柱根は側面の下端部を削り調整し、柱底は概ね平坦近く、ないしは中央部が盛り上がるように削り込んでいる。遺存率の低いものもあるが、柱底の平面形は円形を呈していると復元でき、直径は10.0～14.5cm程である。

漆器 (図版92-402～404, 図版151)

漆器は3点出土しているが、総て横木取りである。樹種は漆器木地として一般的なケヤキとブナ属が使用されている。402と403は、内外面に黒漆を塗布した漆椀。403は、遺存率が低いため、椀に分類したが、天地が逆となり蓋である可能性も否定できない。402は、SD435の川底より出土したもので、胴

部外面には面取りを施されている。胴部下半には段を有し、底部を作出している。底部は漆が剥落している。404は、内外面に赤漆を塗布した漆椀。畳付部は摩滅により漆が剥落している。胴部は下半で張り出し、真っ直ぐに立ち上がる器形である。

曲物底板 (図版92-389～391, 図版151)

3点出土した。すべて平面円形を呈しており、断面台形状をなす。樹種はスギである。木取りは、391が板目、389・390が柾目である。391は、推定直径23.0cmを測り、遺存片端に直径5mmの円孔が穿たれている。389は、SD435から出土し、推定直径12.5cmを測る。木目に沿って欠損している。390は、直径12.8cmを測る。完形。

板状木製品 (図版92-392～400・405, 図版151)

樹種は総てスギである。395～399はSD435、400はSK434からの出土、そのほかは包含層からの出土である。393は、長さ9.2cm、幅4.5cmを測り、平面形は角にやや丸みを持つ長方形を呈す。直径1.5cm程の円孔が穿たれている。柾目材。397は、長さ6.3cm、幅2.0cmを測り、平面形は長方形を呈す。中央付近に厚さ0.5mmの板状木製品が本板材を貫通している。柾目材。392は、長さ12.0cm幅、2.9cmを測り、平面形は長方形を呈す。断面形は蒲鉾型を呈す。下方に直径2.5cm程の円孔が穿たれる。板目材。394は、幅3.5cmを測るが、両端が欠損しているため全容は量りかねる。柾目材。405は、長さ8.4cm、幅2.0cmを測る。角材と分類すべきか。厚さは1.7cmを測るが、ほぼ中央より下半は3mmほどの厚さで削られている。395は、幅2.3cmを測る。両端は欠損しており、残存する平面形は長方形を呈す。柾目材。396は、長さ7.3cm、幅2.7cmを測り、下端はやや先細る。断面形は左方が厚く右方に向かって薄くなっていく。上半部には、不正形ながら直径1.0cm程の円孔を両面から穿たれているが、貫通していない。399は、幅2.7cmを測るが、両端は欠損しており、残存する平面形は菱形を呈す。右端に、長軸1.0cm、短軸0.6cmの楕円形の穴が穿たれている。板目材。398は、推定直径31.8cmを測る、円形の板材か。厚さは最大2.9cmを測り、端部では2.0cmとやや薄くなる。柾目材。400は、幅5.7cm、長さ22.0cmを測るが、欠損部が多く全容は不明である。厚さは1.0cmを測る。柾目材。

二叉状木製品 (図版92-406, 図版151)

ケヤキのY字状芯持丸木による製品。SD435からの出土である。樹皮がついたままである。

木筒 (図版92-401, 図版151)

長さ15.0cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測り、先端を尖らせる。表裏とも削って器面を調整している。墨痕は不鮮明で明確に読み下せないが、「[源] カ口 [五斗] カ口」か。包含層中からの出土である。

2) 石 製 品 (図版93-415～428, 図版152)

石製品は、砥石が14点で最も多く、そのほかに紡錘車1点・水晶製品1点が出土している。

415～426は、砥石である。石材は、417と421が砂岩であり、420が粘板岩であるほかは、凝灰岩が利用されている。形状には平面長方形を呈するものと、バチ型を呈するものがある。平面長方形のほとんどの製品は両端部もしくは片端部が欠損しており、本来の大きさは復元できかねるが、幅員からは3種に分類できる。A類：幅員5cm程度を測るもので、415・416・417が該当する。厚さは様々であり、規格性は認められない。幅2mm程度の擦溝が認められる。B類：幅員3.3～3.4cmを測るもので、421・423・418が該当する。厚さは2.0～3.5cm程度であるがややバラツキがみられる。423の長軸は8.4cmを測る。擦痕は、砂岩である421にはA類と同じような幅4mm程度の太く深い擦溝が1条認め

られるものの、ほか2点には、端部に数条の擦溝がみられる程度で、基本的には砥石の四面を細かい擦痕が覆っている。C類：幅員2.5cm程度を測るもので、419・422が該当する。厚さは2.4cm前後を測り、やや規格性が認められる。419の長軸は6.0cmを測る。ともに白色を基調とした凝灰岩が利用されている。擦痕はB類と近似した様相が認められる。

バチ型の製品は3点とも凝灰岩が使用されているが、下面に叩打痕が認められるもの（424・426）と認められないもの（425）がある。424と425は6面の内、側面の4面を砥面として使用している。426の側面には明確に擦痕が認められないが、四面とも横断面に凹凸がみられることから、擦方向は主に横位であった可能性が高い。425は6面の内、左右の側面を除く4面を砥面として使用している。

427は、SD176から出土した紡錘車である。断面形は、端面で7mmの厚さを持ち、中央で膨らむ。推定復元で直径4.8cmを測り、中央に直径9mmの円孔を有する。

428は水晶製品（玉）である。約半分を欠損しており、推定直径19mmの球形品である。気泡が全く認められないことから水晶製と判断したが、透明度は極めて高い。破損品のため全形は不詳であるものの、孔の痕跡は認められず、念珠と特定することができない。10世紀前半の土師器や不明金属製品（409）と共に、SK50覆土から出土しており、特別な出土状態は認められなかった。

3) 金属製品（図版92-407～414, 図版151）

金属製品には、鏡・鉄器・銭貨のほか、鍛冶・铸造関連遺物がある。

408は和鏡である。SD435の覆土上層から出土した。半分強を欠損し、残存長93mm・周縁幅約2mm、界圏幅1mm、鈕孔径3mmを測る。破断部は溶解して全体的に歪みを生じていることから、破損の原因が被熱によることが明らかである。鏡背の摩滅が著しく、帰属時期同定の指標である鈕座の文様が不鮮明ではあるものの、折枝文を配置した構図や鏡胎の特徴から山吹双鳥鏡に分類され〔久保1999〕、12世紀第2四半期に位置づけることができる（久保智康氏御教示）。407は刀子状の製品である。青銅性の鞘状の筒と、その中に収められた板状金属部からなる。409は一方が釘状の先基部となり、もう一方が複数に分かれた板状をなす。ソフトX線撮影を行ったものの、1本の製品の基部側が複数に裂けたものか、あるいは板状の製品が複数枚融着したものかは判断できなかった。なお、409はSK50からの出土で、覆土同一層からは水晶製玉（428）を伴出した。銭貨は5点出土し、詳細は第18表に示した。

鍛冶・铸造関連遺物は十数点出土し、うち11点を図示した。金属学的調査の結果、鉄滓・炉壁・羽口等が確認された。平成14・15年両調査区を通して、五反田遺跡からは鉄・青銅器生産を示す遺構は検出されなかった。しかし、これら遺物の出土から、遺跡周辺で鍛冶・铸造製品が生産されていた可能性が高まった。なお、詳細については第VI章5Bを参照願いたい。

報告番号	銭貨名	裏面	初鑄年	時代	備考
410	乾元重寶	無文	758年	唐	
411	寛永通寶	無文	1636年	近世	古寛永
412	寛永通寶	無文	1697年	近世	新寛永
413	寛永通寶	11波	1769年	近世	四文銭
414	天保通寶	当百	1835年	近世	

『日本出土銭総覧 1996年版』兵庫埋蔵銭調査会

第18表 出土銭貨一覧

5 自然科学分析

A 樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1) 試料

試料は、柱材（柱根）や漆器、曲物底板状を含む板状の木製品等 25 点（試料番号 1～24）である。試料番号 22 は複数点の木製品からなり、このうち 2 点を対象としている。このことから、当試料については枝番を付して区別している。試料の詳細は、結果とともに第 19 表に示す。

これらの試料のうち、板材等については木取を観察した後、直接切片の採取を行った。また、このほかの木製品や柱材は、木取を観察した後、5mm 角程度の木片を採取した。なお、木片の採取は、接合部や破損部のある木製品はこれらの部位を対象としたが、遺存状況の良好な木製品は加工面を避け採取を行った。試料番号 24 については、一部炭化した部分が認められたことから、この炭化した部分を対象に試料採取を行った。

2) 分析方法

木片で採取した試料は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製する。各試料別に切片をガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

試料番号 24 は、乾燥させた後、3 断面の割断面を作成し、双眼実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3) 結果

結果を第 19 表に示す。試料は、針葉樹 1 種類（スギ）と広葉樹 7 種類（オニグルミ・ヤナギ属・ブナ属・クリ・エノキ属・ケヤキ・キハダ）に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2～4 個。放射組織は単列、1～15 細胞高。

オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または 2～4 個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近でやや急に管径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性～異性、1～4 細胞幅、1～40 細胞高。

ヤナギ属 (*Salix*) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または 2～3 個が複合して散在し、年輪界付近でやや管径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1～15 細胞高。

試料番号	グリッド	遺構	層位	器種	木取	樹種
1		P564		柱	芯持丸木	キハダ
2		P563		柱	芯持丸木	ブナ属
3		P250		柱	芯持丸木	オニグルミ
4	31B23	P8		柱	ミカン割?	キハダ
5	31B25	P319		柱	芯持丸木?	ヤナギ属
6		P76		柱	半裁	ヤナギ属
7		P725		柱	割材	キハダ
8	33B10	P394		柱	芯持丸木	エノキ属
9	31B23	P346		柱	不明	クリ
10	31C15		Ⅲ	漆器（両面黒漆）	横木取	ケヤキ
11	34C13	SD435	砂層	漆器（両面黒漆）	横木取	ブナ属
12	34D3		Ⅲ	漆器（両面赤漆）	横木取	ケヤキ
13	34B3		IV a	板状木製品	板目	スギ
14		SD435		板状木製品	柾目	スギ
15	37・38OA		Ⅲ	板状木製品	柾目	スギ
16	35B17		Ⅲ	板状木製品	柾目	スギ
17	34C13	SD435		板状木製品（曲物側板?）	柾目	スギ
18	32C3		Ⅲ	板状木製品	板目	スギ
19	32C8		Ⅲ	板状木製品	柾目	スギ
20	34C14	SD435		板状木製品	角材	スギ
21	34D1	SD435		板状木製品	柾目	スギ
22-2	34D1	SD435		板状木製品（穿孔有）	板目	スギ
22-3	34D1	SD435		板状木製品	柾目	スギ
23	33B5	SK434	M1層	板状木製品	柾目	スギ
24	34C10	SD435		二又状	Y字状芯持丸木	ケヤキ

第19表 樹種同定結果

ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は2～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は2～4列、孔圏外への移行は緩やか、晩材部では塊状に複合して接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～10細胞幅、1～50細胞高で鞘細胞が認められる。

ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～8細胞幅、1～50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は2～5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～40細胞高。

4) 考 察

木製品 25 点からは、針葉樹 1 種類（スギ）と広葉樹 7 種類（オニグルミ・ヤナギ属・ブナ属・クリ・エノキ属・ケヤキ・キハダ）が確認された。25 点のうち約半数の 12 点がスギであり、このほかに、オニグルミ、ヤナギ属、ブナ属、クリ、エノキ属、ケヤキ、キハダが 1～3 点ずつ認められた。これらの樹種の特徴をみると、スギは、気乾比重約 0.38 で日本産針葉樹の中ではサワラ、ネズコに次いで軽軟な木材とされ、木理は通直で割裂性が高く、加工が容易な材質を有する。一方、広葉樹材では、ヤナギ属は気乾比重約 0.45～0.60 で広葉樹材の中では比較的軽軟～中庸の部類に入り、加工は容易であるが保存性は低い材質を有し、オニグルミは、気乾比重約 0.53 であるが、強度は比較的高く、狂いが少なく加工は容易な材質、ブナ属は気乾比重約 0.65 で強度は比較的高く、加工も容易であるが保存性が低い材質、クリは気乾比重約 0.60 で加工はやや困難な部類に入り、強度および耐朽性が高い材質、エノキ属は気乾比重約 0.62 で、比較的硬いが強度はそれほど高くない材質、ケヤキは気乾比重約 0.69 で、強度および耐朽性が高い材質、キハダは気乾比重約 0.48 でやや軽軟であるが、強度は高い材質を有している。

一方、器種別の樹種構成（第 20 表）では、板状木製品は板目板・柾目板・角材状となる 3 種類が認められたが、全てスギであった。板状の木製品にのみにスギが認められることから、割裂性が高く、板の加工が容易なスギ材の性質を利用したことが窺われる。

漆器は、いずれも破片の形状から横木取と考えられ、ブナ属とケヤキが認められた。いずれも轆轤による漆器木地の木材として一般的な種類であり [橋本 1979]、一之口遺跡でもケヤキ（皿）やトチノキ（椀）の利用が認められている。

ところで、本地域周辺では、当遺跡の過去の分析事例をはじめとして、仲田遺跡、下割遺跡、海道遺跡等における古代～中世の柱材や木製品の調査事例がある。本遺跡では川跡や柱穴内から出土した柱材や木製品が対象とされ、大部分がスギであることが確認されている（未公表資料）。仲田遺跡では、中世の木製品が多量に出土しており、これらの調査成果から、曲物をはじめとして生活関連にスギが多用されることが推測されている。また、漆器（椀等）には、ブナ属、ケヤキ、トチノキが、柱材にはクリ・コナラ節が多く、このほかにトネリコ属・キハダ・ヤマグワ等の重硬な材質の木材が確認されている [三村・植田 2003]。下割遺跡から出土した中世の木製品では、曲物・箸等にスギが多く認められ、柱材にはスギ・クリ・モクレン属の利用が確認されている [パリノ・サーヴェイ株式会社 2003・2004]。海道遺跡では、古代～近世の木製品が出土

しており、このうち中世の木製品では、全体的にスギが多用され、特に曲物・箸等でその傾向が顕著であることが確認されている（未公表資料）。これらの成果を考慮すると、本分析結果で板状木製品にスギが認められる点は調和的といえる。

このような、スギを多用

器種・木取	樹種	スギ	オニグルミ	ヤナギ属	ブナ属	クリ	エノキ属	ケヤキ	キハダ	合計
板状木製品	板目	2								2
	角材	1								1
	柾目	9								9
漆器	横木取				1			2		3
柱	芯持丸木		1	1	1		1		1	5
	半裁			1						1
	ミカン割?								1	1
	割材								1	1
	不明					1				1
二又状	Y字状芯持丸木							1		1
合計		12	1	2	2	1	1	3	3	25

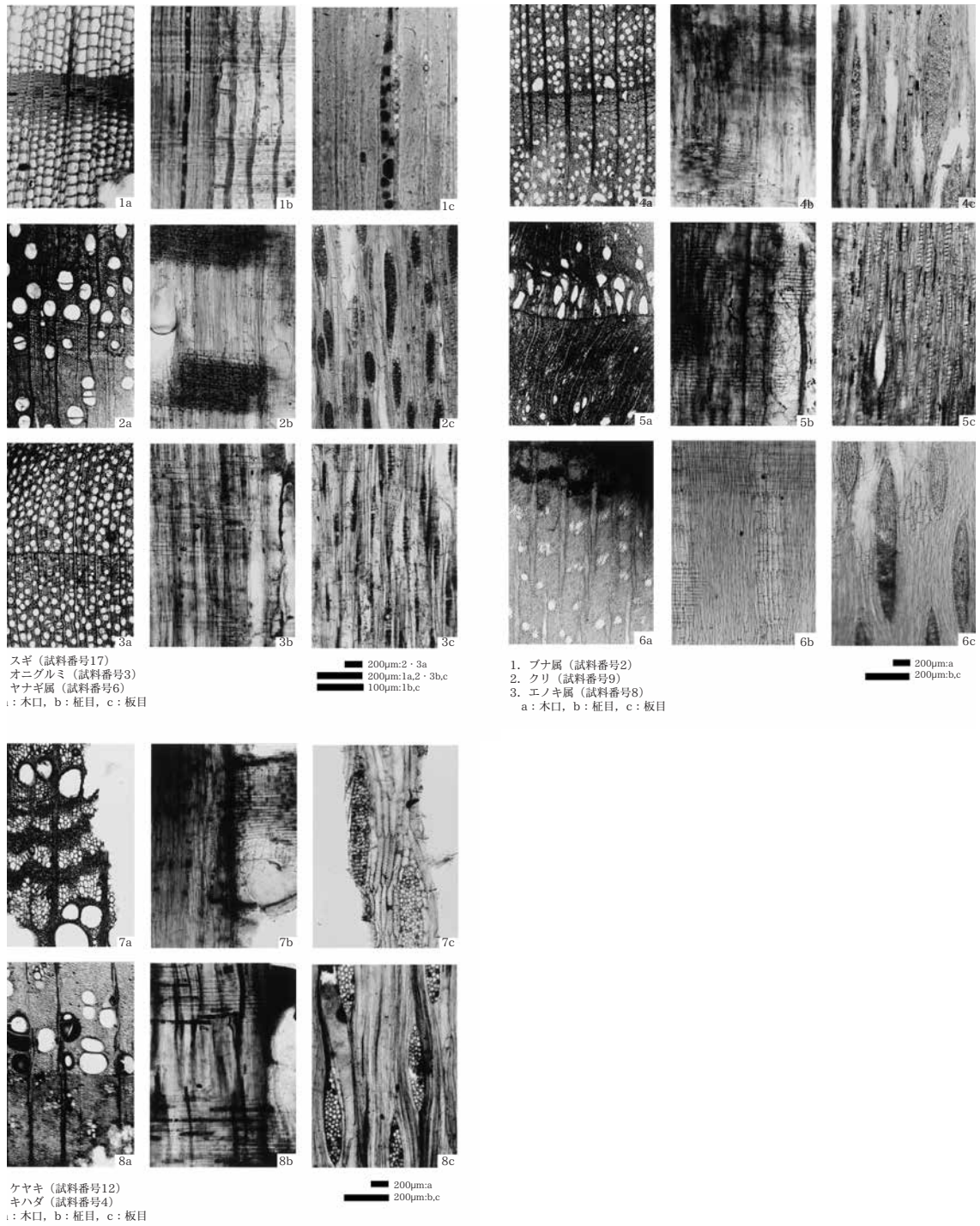
第 20 表 器種別種類構成

する背景としては、木製品の製作や用途を意図した材質による選択的な利用が考えられる。また、本遺跡周辺の古植生をみると、前述の仲田遺跡の出土遺物から9～12世紀頃と考えられる川跡堆積物を対象とした花粉分析結果から、スギ林の形成や落葉広葉樹のコナラ亜属やトチノキ属の分布が推測されている[鈴木2003]。このことから、10～11世紀頃には本遺跡周辺にスギが生育し、これらの木材を入手、利用することが可能であったと考えられる。

一方、柱材は、芯持丸木・半裁・ミカン割・割材といった利用が認められ、芯持丸木が5点と最も多かった。これらは全て広葉樹材であり、オニグルミ、ヤナギ属、ブナ属、クリ、エノキ属、キハダと多様な種類が認められた。これらの樹種については、材質的に強度の高い種類が多いことが特徴として挙げられるが、強度や保存性の低いヤナギ属が含まれる点は注目される。重硬な材質を有する種類を中心として、多様な種類が認められる傾向は、隣接する仲田遺跡の中世と考えられる柱材の調査結果[三村・植田2003]と調和的である。なお、古代の柱材については、新潟県内ではクリやスギが多い利用される傾向が認められているが、江添C遺跡（吉田町）では、同一遺跡内で掘立柱建物の柱材にクリ・スギで構成される、雑多な種類で構成される、といった異なる傾向が確認されており、建物の規模や用途により木材利用が異なる可能性が指摘されている[パリノ・サーヴェイ株式会社2000]。本分析試料については、いずれも掘立柱建物跡に帰属しない、あるいは、帰属関係が不明な柱材であり、現時点では、その用途や選択的利用を言及することはできない。

引用文献

- 鈴木 茂 2003 「花粉分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ 仲田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.42-45
- 橋本 鉄男 1979 ろくろ.法政大学出版局 p.444
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2000 「自然科学分析」『吉田町文化財調査報告書第5集 新潟県西蒲原郡吉田町江添C遺跡 -吉田町米納津地内国営排水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』吉田町教育委員会・山武考古学研究所 p.206-213
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2003 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第120集 一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅰ 下割遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.26-29
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2004 「木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第134集 上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅱ 下割遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.39-44
- 三村昌史・植田弥生 2003 「仲田遺跡出土木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ 仲田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.35-41



第24図 木材切片顕微鏡写真

B 五反田遺跡出土鍛冶・鑄造関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター 大澤正己・鈴木瑞穂

1) いきさつ

五反田遺跡は新潟県上越市（旧中頸郡板倉町）に所在する。奈良～平安時代に比定される掘立柱建物群等が検出されている。また鉄・青銅器生産を直接証明する遺構は確認されていないが、鉄滓・炉壁片・羽口片等の鍛冶・鑄造関連遺物が少量出土した。遺跡周辺での金属器生産の実態を検討するため、調査を実施する運びとなった。

2) 調査方法

2-1. 供試材

第21表に示す。鍛冶・鑄造関連遺物計11点の調査を行った。

2-2. 調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) 顕微鏡組織
- (3) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査
- (4) 化学組成分析

3) 調査結果

GTN-1：椀形鍛冶滓（報告番号429）

- (1) 肉眼観察：灰褐色の偏平な椀形鍛冶滓である。上下面と側面の一部は本来の表面で、残る側面3面は破面と推測される。また上面には羽口先端の溶融物が点在する。下面には鍛冶炉炉床土が少量固着する。破面の気孔は少なく、緻密である。
- (2) 顕微鏡組織：第26図①に示す。白色樹枝状結晶ウスタイト (Wustite : FeO)、発達した淡灰色盤状結晶ファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が晶出する。鍛錬鍛冶滓に一般的な鉱物組成である。
- (3) 化学組成分析：第22表に示す。全鉄分 (Total Fe) が51.67%と高値であった。金属鉄 (Metallic Fe) は0.07%、酸化第1鉄 (FeO) が52.45%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 15.48%の割合である。主に炉材に由来する造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は26.43%である。また製鉄原料の砂鉄に由来する二酸化チタン (TiO_2) は0.38%、バナジウム (V) が0.06%と低値であった。酸化マンガ (MnO) は0.21%、銅 (Cu) <0.01%である。

当試料は製鉄原料の砂鉄に由来するチタン (TiO_2) の影響がほとんどなく、鉄器製作の鍛錬鍛冶 (高温沸し鍛接) での派生物と推定される。

GTN-2：椀形鍛冶滓（報告番号430）

- (1) 肉眼観察：完形の椀形鍛冶滓である。下面端部が瘤状に突出しており、二段椀形鍛冶滓の可能性もある。色調は灰褐色を呈する。上面表層には皺状の送風痕が残る。側面から下面にかけては、細かい木炭痕による凹凸が著しい。
- (2) 顕微鏡組織：第26図②に示す。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色盤状結晶ファイヤライトが晶出する。さらに一部ウスタイト結晶内には、微細な淡褐色のヘーシナイト (Hercynite : $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) が

5 自然科学分析

符号	報告番号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		磁着	メタル度	調査項目						
						大きさ(mm)	重量(g)			顕微鏡組織	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
GTN-1	429	五反田	32B8 III層	椀形鍛冶滓	8c後半 ～11c初			弱	なし	○			○			
GTN-2	430	五反田	SD178	椀形鍛冶滓					強	H(○)	○			○		
GTN-3	431	五反田	32C8 III層	鍛冶滓					弱	なし	○					
GTN-4	432	五反田	32C16 III層	炉壁片(溶解炉)					弱	H(○)	○		○			
GTN-5	433	五反田	SK179 4層	炉壁片(溶解炉)					なし	なし	○		○			
GTN-6	435	五反田	31C24 III層	鉄塊系遺物					強	特L(☆)	○					
GTN-7	434	五反田	31B25 III	銅製品(薄板状、鍛造品)					なし	特L(☆)	○		○			
GTN-8	436	五反田	32B17 III	鋳造鉄器片					強	特L(☆)	○					
GTN-9	437	五反田	35B21 III層	鋳造鉄器片					強	特L(☆)	○					
GTN-10	438	五反田	33B4 IV a層	羽口(先端部破片、炉壁付着)					なし	なし	○		○			
GTN-11	439	五反田	33B5 IV a層	鋳造鉄器片					強	特L(☆)	○					

第21表 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化ケイ素 (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	Σ*		TiO ₂	注	
																							造滓成分	造滓成分			
GTN-1	五反田	32B8 III層	椀形鍛冶滓	8c後半	51.67	0.07	52.45	15.48	18.20	6.66	0.57	0.50	0.35	0.15	0.21	0.38	0.05	0.04	0.83	0.32	0.06	<0.01	26.43	0.512	0.007		
GTN-2	五反田	SD178	椀形鍛冶滓	～11c初	62.30	0.11	63.01	18.89	10.57	2.82	0.48	0.41	0.28	0.12	0.14	0.20	0.11	0.04	0.99	0.09	0.10	<0.01	14.68	0.236	0.003		

第22表 供試材の組成

散在する。このため、椀形鍛冶滓(GTN-1)より高温の沸し鍛接作業での派生物の可能性が考えられる。

- (3) 化学組成分析：第22表に示す。全鉄分(Total Fe)は62.30%と高値であった。金属鉄(Metallic Fe)は0.11%、酸化第1鉄(FeO)63.01%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)18.89%の割合である。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)14.68%である。また主に製鉄原料の砂鉄に由来する二酸化チタン(TiO₂)は0.20%、バナジウム(V)が0.10%であった。さらに酸化マンガン(MnO)は0.14%、銅(Cu)<0.01%である。

当試料も鉄酸化物が主体で、製鉄原料の砂鉄に含まれるチタンの影響がほとんど見られない。鍛造鉄器製作(沸し鍛接)に伴い派生した鍛錬鍛冶滓に分類される。

GTN-3：鍛冶滓(報告番号431)

- (1) 肉眼観察：椀形鍛冶滓の縁辺部の小破片と推定される。灰褐色を呈する。上面及び破面には中小の気孔が散在するが、緻密な滓である。また下面表層には薄く鍛冶炉の炉床土が固着する。
- (2) 顕微鏡組織：第26図③に示す。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色盤状結晶ファイヤライトが晶出する。また椀形鍛冶滓(GTN-2)と同様、ウスタイト結晶内に微細な淡褐色のヘーシナイトが散在する。高温沸し鍛接時の鍛錬鍛冶滓と推定される。

GTN-4：炉壁片(溶解炉)(報告番号432)

- (1) 肉眼観察：内面がガラス質化した炉壁片である。ガラス質滓の表層は、若干赤みを帯びる。内面表層には、最大0.6mm程の溶着金属が複数点在する。また炉壁胎土は淡褐色の粘土質で、粉殻が混和されている。
- (2) 顕微鏡組織：第26図④～⑥に示す。④はガラス質滓部分である。灰褐色多角形結晶マグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)、不定形の錫酸化物などが晶出する。また写真右上の明色部は銅(Cu)粒である。素地は赤銅色の多角形結晶(α相)で、粒界には明白色の銀(Ag)の割合が高い(Ag-Cu合金)相が点在する。

⑤⑥は銅粒の表層部分である。素地は多角形結晶（ α 相）で、粒界の粒状・不定形青灰色部は白鍍¹⁾、淡青灰色部は砒鍍²⁾である。硫黄（S）・砒素（As）など、銅鉱石に由来する不純物が残存している。

(3) EPMA 調査：内面表層ガラス質滓及び銅粒部分の調査を実施した。第29図の1段目は反射電子像（COMP）で、暗色部がガラス質滓、明色部は銅粒である。ガラス質滓中の粒状結晶（番号:12）の定量分析値は68.5%Sn－4.5%Fe－27.0%Oであった。若干鉄（Fe）を含むが、錫酸化物に同定される。多角形結晶（13：番号）は52.4%Fe－27.6%Oであった。マグネタイト（Magnetite：Fe₃O₄）に同定される。青灰色針状結晶（番号：14）の定量分析値は38.8%Cu－22.3%Fe－5.1%Pb－4.6%As－3.5%Sn－18.9%Oであった。銅（Cu）と鉄（Fe）主体の酸化物と推定される。

また銅粒の素地部分（番号：15）の定量分析値は99.2%Cu－0.8%Agである。純銅に近い組成で、微量銀（Ag）を固溶している。また粒界の微小明白色部（番号：16）の定量分析値は91.4%Ag－8.6%Cuと銀主体の合金相であった。南蛮吹きにより銀の回収が可能となる、近世以前の様相を呈している。

さらにもう1箇所、銅粒の調査を実施した。第29図の2段目は反射電子像（COMP）である。網状淡青灰色部（番号：17）の定量分析値は70.7%Cu－27.8%As－1.0%Sbで、微量アンチモン（Sb）を含む砒鍍に同定される。また淡黄色部（番号：18）の定量分析値は84.7%Cu－14.4%As－0.9%Sb、素地の淡赤銅色部（番号：19）の定量分析値は92.8%Cu－7.2%Asであった。全体に砒素（As）の含有量が高い銅粒といえる。

ただし赤銅色の小銅粒（番号：20）の定量分析値は92.9%Cu－6.3%Oであった。若干錆化しているが、本来は純銅に近い組成であったと推定される。

以上の調査結果から、当試料は青銅鑄造に用いられた溶解炉の炉壁片と推定される。またガラス中に鉄酸化物が晶出していることや、溶着した微細な銅粒内に白鍍（Cu₂S）、砒鍍（Cu₅As₂）が含まれることから、やや純度の低い銅素材を溶解したと判断される。これらの不純物は銅鉱石に由来するもので、硫砒鉄鉱（Arsenopyrite：FeAsS）を共伴する黄銅鉱（Chalcopyrite：CuFeS₂）が始発原料の可能性が高い。さらに銅粒中には、銀（Ag）も微量含まれており、銀を含む銅鉱山から産出した鉱石が始発原料と判断される。

GTN－5：炉壁片（溶解炉）（報告番号433）

(1) 肉眼観察：内面がガラス質化した炉壁片である。内面表層は中小の気孔で覆われており、強い熱影

1) 伊藤尚『金属通論』1983 3-2-3 Cu製錬 の記載をもとに加筆

銅の主要な鉱石に黄銅鉱（CuFeS₂）が挙げられる。これは主に銅（Cu）鉄（Fe）硫黄（S）で構成される鉱物である。このため鉱石中から金属銅を採取するには鉄、硫黄分を除去する作業が必要となる。

銅（Cu）は硫黄（S）、酸素（O）と結びつく力に（親和力）あまり差がないが、鉄（Fe）は硫黄より酸素と結びつく力の方が著しく大きい。この性質を利用して鉱石を加熱酸化するとFeSが優先的に酸化されて、鉄は酸化物（FeO）の滓になる。

製錬中途の硫化銅と硫化鉄の混合物（xCu₂S・yFeS）をマット（鍍）、分離された滓をからみと呼ぶ。できた₁はさらに酸化製錬され、まずFeSが除去される。次に残ったCu₂S（白鍍）が酸化されると銅（Cu）から硫黄（S）がとり除かれて金属銅が得られる。

2) 『講座・現代の金属学 製錬編2 非鉄金属製錬』日本金属学会 1980

3・1 (3) スパイス（砒鍍）スパイス（Speiss）は砒鍍ともよばれ、重金属ヒ化物が融体で均一に溶け合った人工的な混合物である。（中略）スパイスに入りやすい金属元素は、Ni、Co、これについてCu、Feといわれる。これは単にAsとの親和力で決まるのではなく、SやOとの親和力が関連する。CuはOと親和力が小さいがSとの親和力が大きいため、マット（鍍）に入りやすくなる。FeはAs、S、Oのいずれとも大きい親和力を持つため、スパイス、マット、スラグの各相に分配する。各系のスパイスでは存在量の多いFeがFeヒ化物として基本になる場合が多い。

響を受けている。裏面には灰白色の炉壁胎土が若干固着する。

- (2) 顕微鏡組織：第27図①に示す。内面表層ガラス質滓部分で、微小球状白色部は金属鉄 (Metallic Fe) である。
- (3) EPMA 調査：金属粒及び周囲の晶出物の調査を実施した。第29図の3段目は反射電子像 (COMP) である。暗色片状結晶 (番号：8) の定量分析値は29.2%Fe - 6.3%Mg - 4.6%Al - 25.7%Si - 34.2%Oであった。斜方輝石 [Orthopyroxene : (Fe,Mg) SiO₃] と推測される。金属粒 (番号：9) の定量分析値は99.5%Fe - 0.5%Pで、金属鉄 (Metallic Fe) に同定される。

当試料のガラス質滓中には、多数の微小金属鉄粒が散在しており、鉄器生産に関連した遺物と推測される。小破片のため判定は難しいが、铸造鉄器の製作に用いられた溶解炉の破片の可能性が高いと考えられる。

GTN - 6 : 鉄塊系遺物 (報告番号435)

- (1) 肉眼観察：小型でやや扁平な鉄塊系遺物である。表面はやや風化気味で、暗褐色の鉄錆化物に覆われる。また表面には小型の木炭痕が薄く残り、鍛冶炉内で熱影響を受けた小鉄塊の可能性が考えられる。なお当試料は特殊金属探知機の特L (☆) で反応があり、金属鉄が良好に遺存すると推定される。
- (2) 顕微鏡組織：第27図②~④に示す。②は試料表層の付着滓である。微細な白色樹枝状結晶ウスタイト、及び発達した淡灰色柱状結晶ファイヤライトが、素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛冶滓の晶癖である。

③④は金属鉄を5%ナイトルで腐食した組織である。③は上面表層部の低炭素域 (亜共析組織)、④は芯部の高炭素域 (過共析組織) を示した。当試料は部位により0.4~1.2%程度の炭素濃度の偏析がみられるが、高炭素域が主体である。

以上の調査結果から、当試料は鍛打作業前の鍛冶原料鉄と推定される。また炭素含有量の高い過共析組織主体の鋼であり、硬さを必要とする刃器の製作に適した鉄素材といえる。

GTN - 7 : 青銅製品 (鍛造品) (報告番号434)

- (1) 肉眼観察：ごく薄い板状の銅ないし銅合金の小破片である。表面は錆化物に覆われる。当試料は特殊金属探知機の特L (☆) で反応があり、内部には金属が遺存する。
- (2) 顕微鏡組織：第27図⑤⑥に示す。酢酸・硝酸・アセトンで腐食した組織を示した。均一な多角形状のα相で、焼きなまし双晶がみられる。金属組織の特徴から、加熱鍛打後焼きなましを施した鍛造製品と判断される。

また展伸状の介在物が多数散在するが、この組成に関してはEPMA 調査の項で詳述する。

- (3) EPMA 調査：第29図の4段目に反射電子像 (COMP) を示す。中央は反射顕微鏡下では暗色を呈する、展伸状の酸化物である。

25の番号をつけた個所の定量分析値は30.5%Cu - 40.8%As - 10.3%Bi - 2.8%Pb - 1.2%Sn - 14.4%Oであった。銅 (Cu) に加え、始発原料の銅鉱石に由来する、砒素 (As)、ビスマス (Bi) 等の不純物を含む、さらに錫 (Sn) も少量検出された。また26の定量分析値は13.3%Cu - 66.8%As - 1.6%Sb - 18.2%Oと、銅 (Cu)、砒素 (As) 主体の酸化物である。なお微量アンチモン (Sb) も検出された。また27の定量分析値は95.2%Cu - 4.3%Asで、砒鍍と推定される。

当試料は熱間で鍛造された青銅製品の破片と判断される。成分的には砒素 (As)、アンチモン (Sb)、ビスマス (Bi) などの、銅鉱石由来の親銅元素の影響が確認された。当遺跡出土の炉壁片 (GTN - 4) の

付着銅粒とは、不純物の傾向がやや異なる。当試料が遺跡内で製作されたか、製品として搬入されたのかに関しては、関連遺物が乏しいため不明である。

GTN-8：鑄造鉄器片（報告番号436）

- (1) 肉眼観察：平面は不整三角形で薄板状の鉄器破片である。鉄鍋など鑄造器物の体部破片と推定される。厚みは3mm程で、側面3面は全面破面である。また当試料は特殊金属探知機の特L（☆）で反応があり、内部には金属が遺存する。
- (2) 顕微鏡組織：第28図①に示す。残存金鉄部を5%ナイトルで腐食した組織を示した。亜共晶組成（C:<4.26%）白鑄鉄組織を呈する、鑄造鉄器片であった。

GTN-9：鑄造鉄器片（報告番号437）

- (1) 肉眼観察：平面が菱形を呈する、板状の鉄器破片である。側面4面は全面破面と推定される。厚みは最大5mm程で、鑄造鉄器片（GTN-8）と比較するとやや厚手である。断面は若干弧状を呈しており、鉄鍋など鑄造器物の体部破片の可能性が高い。また当試料は特殊金属探知機の特L（☆）で反応があり、内部には金属が遺存する。
- (2) 顕微鏡組織：第28図②に示す。残存金属鉄部を5%ナイトルで腐食した組織を示した。当試料も亜共晶組成白鑄鉄組織の鑄造鉄器片であった。比較的蜂の巣状のレデブライト（ledeburite）の面積率が高い。

GTN-10：羽口（報告番号438）

- (1) 肉眼観察：黒色ガラス質滓が瘤状に固着した、羽口先端の小破片である。羽口胎土は緻密な粘土質で、熱影響が大きく灰褐色に変色している。内部には僅かに通風孔の痕跡が残るが、径の復元は難しい。なお断面観察のため供試材を採取したところ、瘤状部分は、羽口胎土と異なる粗い質感の炉材と判明した。炉壁胎土ないしは羽口を固定した粘土と推定される。
- (2) 顕微鏡組織：第28図③～⑤に示す。③は羽口外面のガラス質滓である。最表層の白色多角形結晶はマグネタイトである。
④⑤は炉壁部分である。強い熱影響を受けており、素地の粘土鉱物は完全にガラス質化している。また内部には微小金属鉄粒が多数晶出している。これらの金属鉄粒を5%ナイトルで腐食した組織を示す。フェライト単相から共析組織（C：0.77%）が確認された。さらに金属鉄の周囲の微細な青灰色不定形結晶は、チタン酸化物である。
- (3) EPMA調査：金属粒及び周囲の晶出物の調査を実施した。第29図の5段目に反射電子像（COMP）を示す。微小金属粒（番号：1）の定量分析値は97.4%Feで、金属鉄（Metallic Fe）に同定される。周囲の青灰色不定形結晶（番号：2）の定量分析値は54.0%Ti-32.8%Oであった。チタン酸化物（Rutile：TiO₂）と推定される。砂鉄を高温製錬³⁾した際に派生する晶出物である。

当試料中には微小金属鉄粒が多数晶出するなど、炉壁片（GTN-5）と類似する特徴が確認された。炉壁片（GTN-5）と同様、鉄の鑄造用溶解炉に付属する羽口の可能性がある。

GTN-11：鑄造鉄器片（報告番号439）

- (1) 肉眼観察：平面は不整五角形で板状の鉄器破片である。側面5面は全面破面。厚みは約4～6mmで、

3) J.B.Mac chesney and A. Murau：American Mineralogist, 46 (1961), 572
イルミナイト（Ilmenite：FeO・TiO₂）、シュードブルーカイト（Pseudobrookite：Fe₂O₃・TiO₂）、ルチル（Rutile：TiO₂）の晶出はFeO-TiO₂二元平衡状態図から高温化操業が推定される。

一端が薄く一端がやや厚手の形状を呈する。鉄鍋など鑄造器物の体部破片の可能性が高い。また当試料は特殊金属探知機の特L(☆)で反応があり、内部には金属が遺存する。

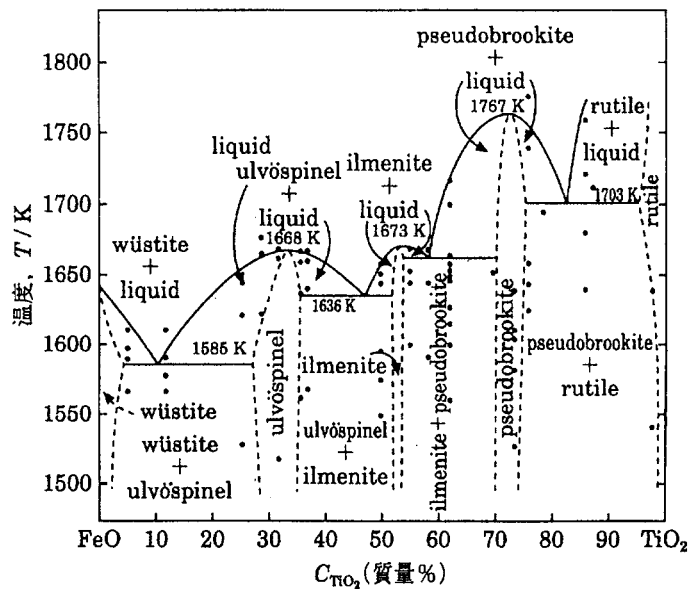
(2) 顕微鏡組織：第28図⑥に示す。金属鉄部を5%ナイトルで腐食した組織を示した。当試料も亜共晶組成白鑄鉄組織の鑄造鉄器片であった。

当遺跡内では、鉄の鑄造用溶解炉の可能性が考えられる炉壁(GTN-5)・羽口(GTN-10)が出土しているが、小破片2点のみであり、近接地域で鑄造鉄器(GTN-8, 9, 11)が製作されたか判断するのは困難である。鑄造鉄器は製品として搬入されており、使用後に鍛冶原料鉄として再生されていた可能性も高い。

4) おわりに

出土遺物を分析調査した結果、鉄・青銅器生産に関わる遺物と、製品破片が確認された。当遺跡の周辺で、鍛造・鑄造製品が作られていたものと推測される。なかでも鍛造鉄器の製作と青銅製品の鑄造が行われたことは確実である。

ただし調査地区内で生産遺構が検出されず、出土遺物も少量であった。地域の金属器生産の詳細を把握するためには、周辺地区での遺構の確認を含めた、今後の調査事例の蓄積が待たれる。

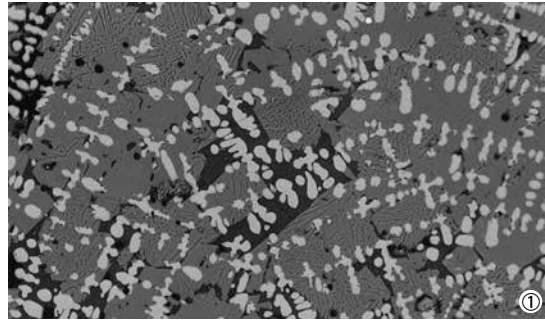


第25図 FeO-TiO₂二次元平衡状態図

GTN-2

椀形鍛冶滓

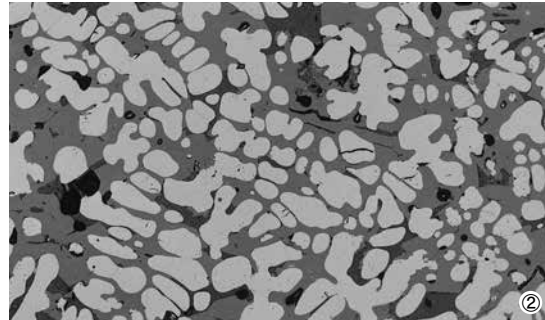
①×85 ウスタイト・ファイヤライト



GTN-2

椀形鍛冶滓

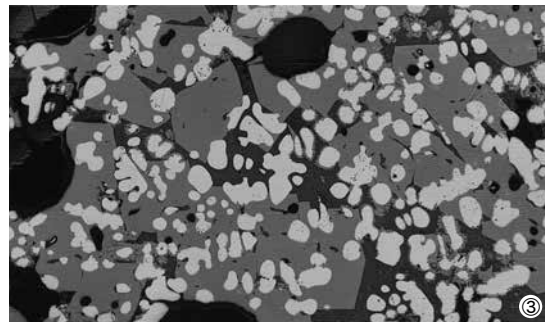
②×85 ウスタイト



GTN-3

椀形鍛冶滓

②×85 ウスタイト・ファイヤライト



GTN-4

炉壁片（青銅溶解）

酢酸・硝煙・アセトン etch.

④×85 内面表層：ガラス質滓

マグネタイト。錫酸化物晶出

明色部：銅（Cu）粒

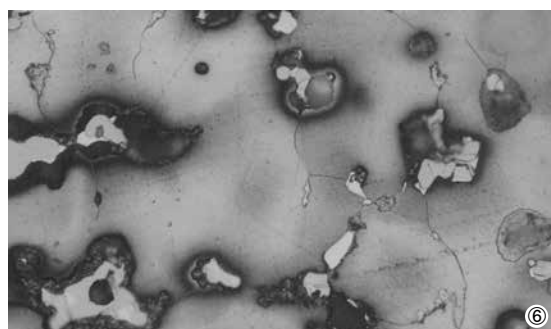
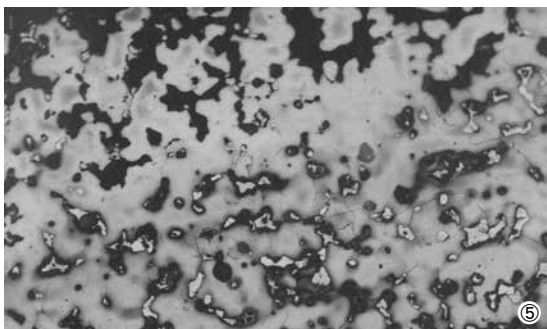
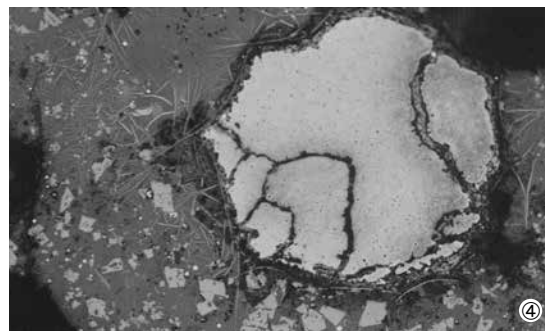
素地：多角形結晶（d相）

粒界：Ag-Cu 相点在

⑤×85 ⑥×470 附着銅粒

素地：多角形結晶（d相）

粒界：白鉍・砒鉍



第26図 椀形鍛冶滓・炉壁片の顕微鏡組織

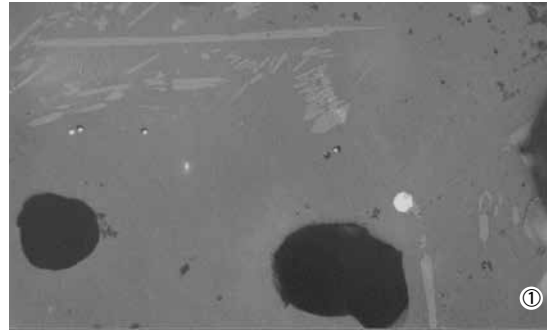
GTN-5

炉壁片（鑄鉄溶解）

①×470 内面表層：ガラス質滓

微小金属鉄粒散在

ナイトル etch 変化なし



GTN-6

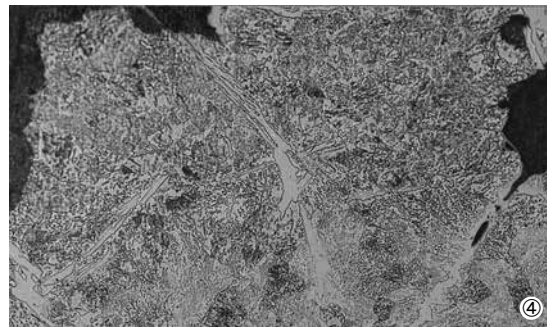
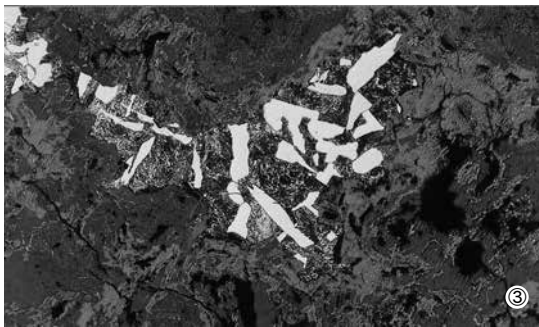
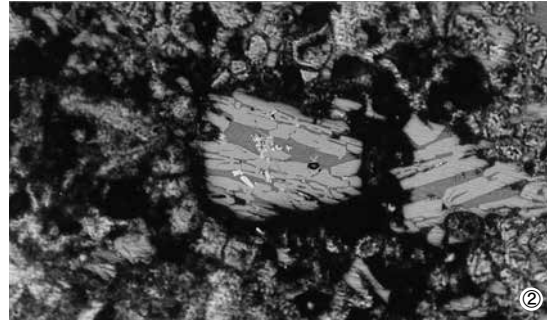
鉄塊系遺物（鍛冶系）

②×85 試料表層付着滓：ウスタイト・ファイヤライト

③④×85 金属鉄部 ナイタル etch

③亜共析組織

④過共析組織



GTN-7

青銅製品（鍛造品）

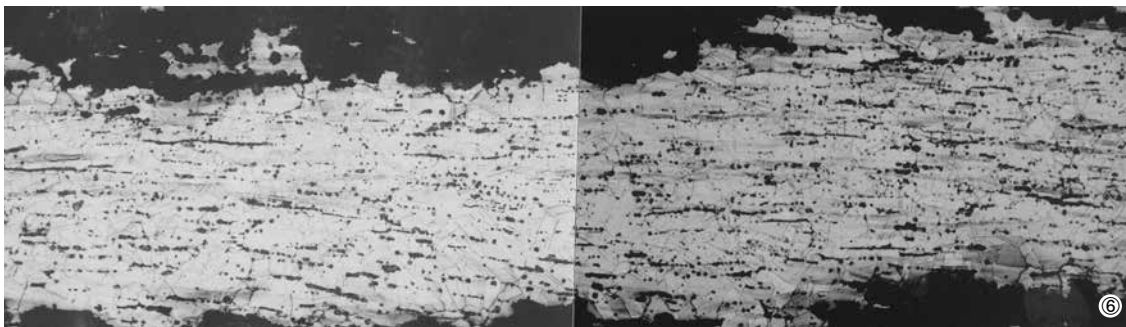
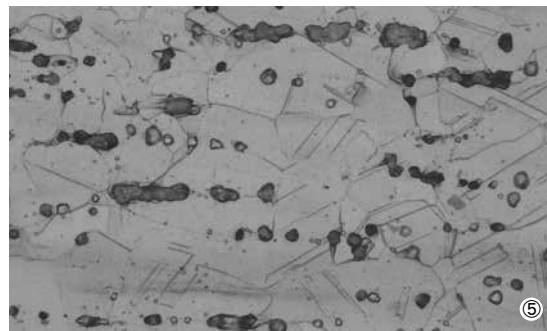
酢酸・硝酸・アセトン etch

⑤×470 ⑥の拡大

⑥×85 素地：多角形結晶（d相）

双晶を伴う

暗色部：展伸状酸化物



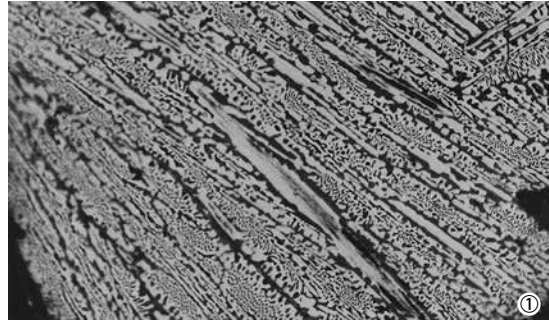
第27図 炉壁片・鉄塊系遺物・青銅製品の顕微鏡組織

GTN-8

鑄造鉄器片

①×85 ナイタル etch

亜共晶組成白鑄鉄組織

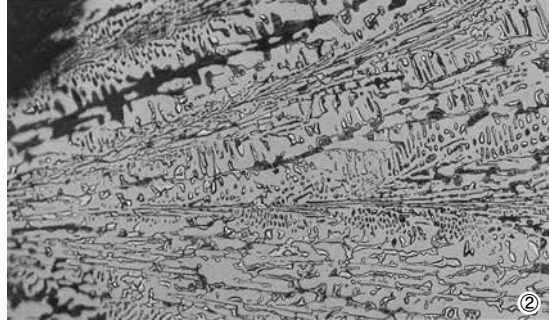
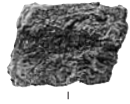


GTN-9

鑄造鉄器片

②×85 ナイタル etch

亜共晶組成白鑄鉄組織



GTN-10

羽口片

③×85 羽口外面表層・ガラス質滓

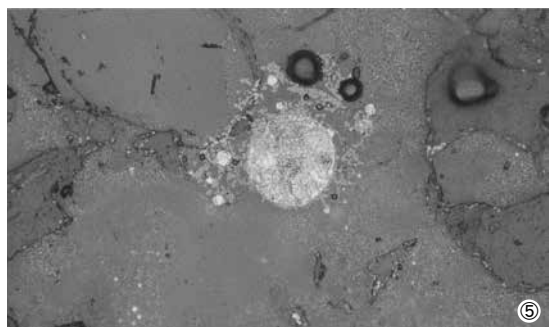
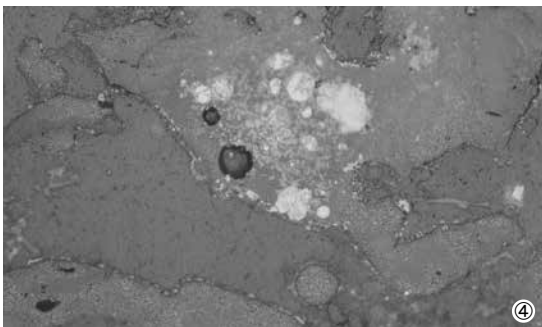
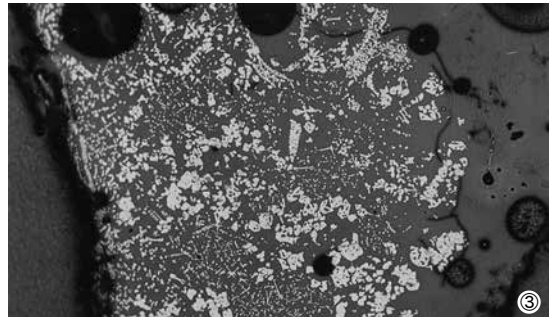
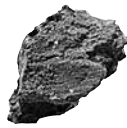
マグネタイト晶出

④⑤×470 炉壁胎土部分

微小金属鉄粒散在

ナイタル etch フェライト单相～

亜共析組織

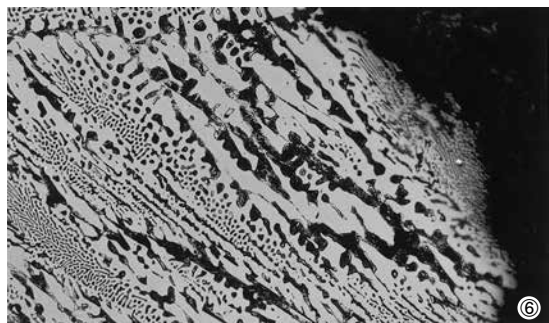


GTN-11

鑄造鉄器片

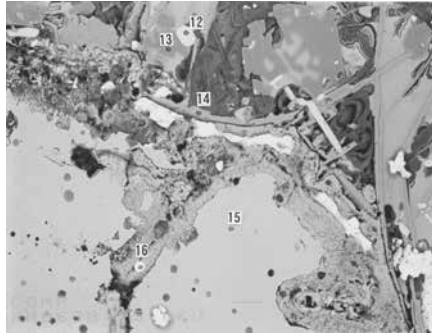
⑥×85 ナイタル etch

亜共晶組成白鑄鉄組織



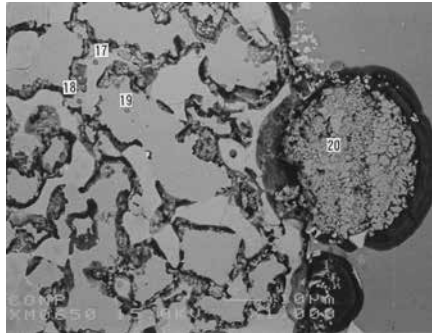
第28図 鑄造鉄器片・羽口片の顕微鏡組織

COMP × 800



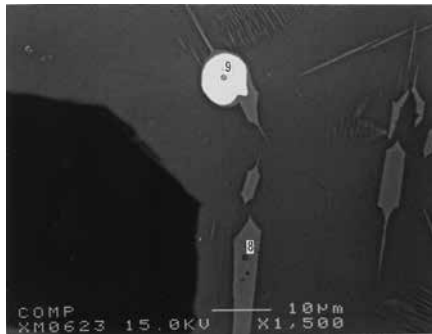
Element	12	13	14	15	16
P	-	-	0.696	-	-
Ti	-	-	-	-	-
Fe	4.477	52.352	22.315	-	-
O	27.021	27.639	18.907	-	-
Mg	-	2.831	-	-	-
Al	-	3.729	2.857	-	-
Si	-	2.403	3.158	-	-
S	-	-	-	-	-
Sn	68.502	2.125	3.469	-	-
Cu	-	4.816	38.826	99.171	8.583
Pb	-	4.104	5.140	-	-
As	-	-	4.631	-	-
Ag	-	-	-	0.829	91.417
Total	100.000	99.999	99.999	100.000	100.000

COMP × 1000



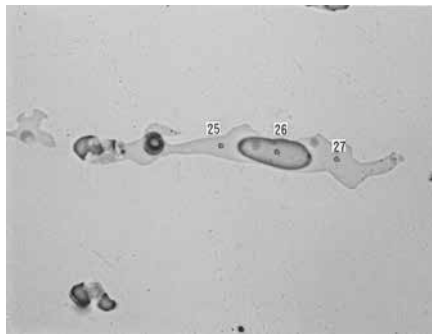
Element	17	18	19	20
P	-	-	-	0.367
O	-	-	-	6.277
Si	-	-	-	0.427
S	0.490	-	-	-
Cu	70.695	84.657	92.808	92.929
Pb	-	-	-	-
As	27.797	14.432	7.192	-
Ag	-	-	-	-
Sb	1.018	0.911	-	-
Total	100.000	100.000	100.000	100.000

COMP × 1500



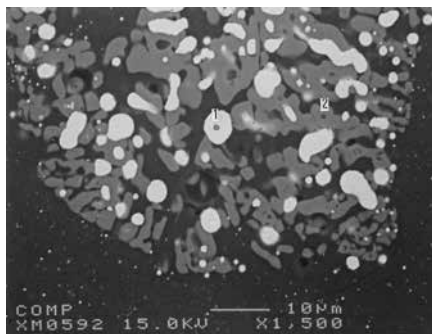
Element	8	9
P	-	0.480
Ti	-	-
Fe	29.228	99.520
O	34.152	-
Mg	6.333	-
Al	4.579	-
Si	25.709	-
Total	100.001	100.000

COMP × 1000



Element	25	26	27
P	-	-	0.533
O	14.398	18.232	-
Sn	1.212	-	-
Cu	30.525	13.337	95.159
Pb	2.816	-	-
As	40.779	66.793	4.308
Ag	-	-	-
Sb	-	1.638	-
Bi	10.270	-	-
Total	100.000	100.000	100.000

COMP × 1500



Element	6	7
P	-	0.611
Ti	-	-
Fe	65.366	8.277
O	28.386	40.433
Mg	4.006	1.390
Al	2.243	8.348
Si	-	29.862
K	-	4.459
Na	-	1.004
Ca	-	5.615
Total	100.001	99.999

第29図 EPMA調査結果 反射電子像 (COMP) [70%縮小] 及び定量分析値

第Ⅶ章 ま と め

1 五反田遺跡出土の平安時代の土器

平成15～16年の2か年にわたって行った五反田遺跡の発掘調査では、古代から中世におよぶ大量の土器・陶磁器が出土した。主体を成すのは平安時代の土器で、遺物量が希薄な時期が若干あるものの、ほぼ8世紀～10世紀にわたる土器の変遷を追跡することができる。これまで、高田平野西部に比べて、平野東部の扇状地では消費地遺跡の検出例が少なかった。五反田遺跡は比較的長期間にわたる土器の推移を知らううえで良好な資料を提供していると言えるだろう。

ここでは、一括あるいはそれに準ずる資料を得ることができた9世紀中葉前後と10世紀前半の土器についてのみ概観し、平安時代後半の土器について若干の検討を試みる。

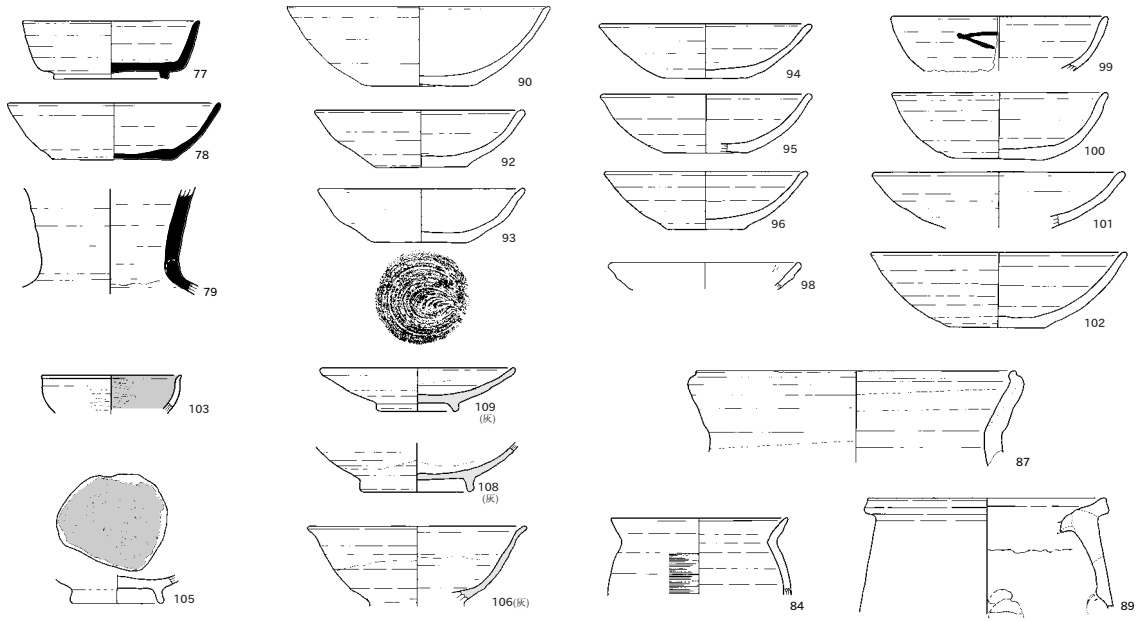
A 9世紀中葉の土器 (第30図)

平成16年調査区のSD178・SD435からまとまって出土した。ただし、両遺構共に10世紀後半の遺物を伴出しており、一括出土例としての評価はやや低いとせざるを得ない。

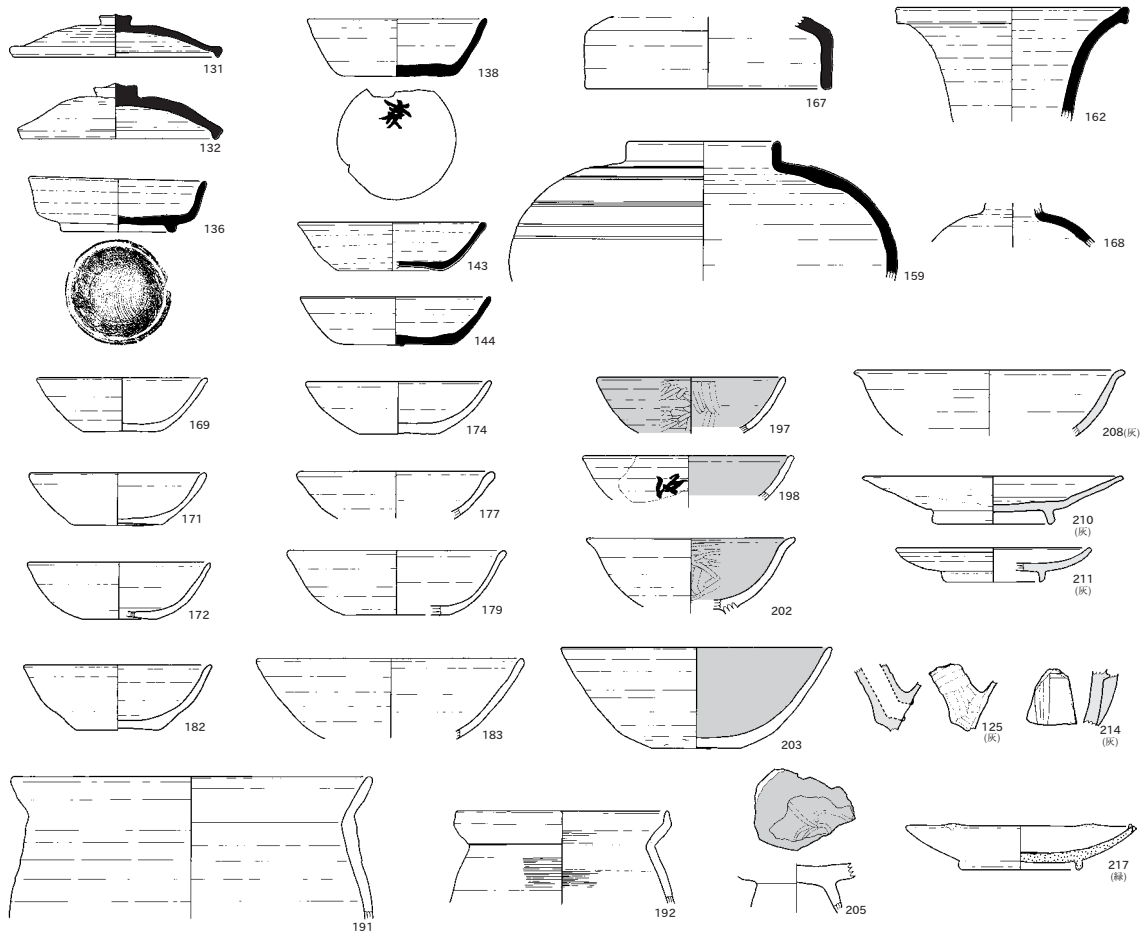
SD178からは、須恵器杯類・瓶類・甕、土師器無台碗・甕、黒色土器碗類、灰釉陶器碗・皿などが出土した。数量的に最も多い土師器無台碗には、口径13～14cm・器高3.5～4cmと、口径17cm前後・器高5cm前後の2法量がある。調査時には、93・100・102の3枚が直接重なり、さらに数cmの間層を挟んで96が重なって出土した。また70cmほど離れた場所からは90が出土している。これは、ほぼ近接した時間における廃棄の結果と考えられ、一時期のセット関係を示していると見て良いだろう。SD435出土の土師器無台碗に比べると、器壁が厚く、口径・器高が大きいことを指摘できる。個別に見ていくと、92・93・100・101など、口縁部直下で軽い稜を持ち、口縁部が外側にわずかに外反する形態が特徴的である。104の黒色土器の口縁部形態は土師器無台碗に比べて外反度が大きいのが、同じ形成を示すものであろうか。内外面共にロクロナデされ、ナデ調整時についた擦痕(指紋?)が良く残る。底部は全て糸切りで、切り離しの際に生じた粘土のはみ出しが顕著である。また、1～1.5mmの比較的大粒の砂粒が胎土中には含まれている。相対的にSD435出土土師器碗に比べて作りは粗雑である。共伴した須恵器有台杯(77)・無台杯(78)は共に底部へら切りである。有台杯は焼成が不良で、淡い紫～紺色を呈した軟質のものである。胎土は高田平野東部窯跡群の特徴を示している。SD178では明らかに上記の一群よりも新しく位置づけられる資料が存在する。黒色土器有台碗(105)は、内面のへらミガキが顕著で、放射状の工具痕が明瞭に確認できるものである。黒色土器有台碗が主要器種として定着するのは10世紀前葉とされる[笹澤2003]。また灰釉陶器は、高台が三日月高台を逸脱していること、碗の器高が深いこと、10世紀以降に操業が活発化する東濃産(106・107)が伴うことなどから、いわゆる0-53窯式期に比定され、やはり10世紀代に下るものである。

SD435はA・Bの2本の川が重複している。9世紀の遺物はSD435BおよびAの覆土から、10世紀代の遺物がSD435Aの覆土から出土している。しかし、層位的に明瞭に区別することができず、SD435Aでは両時期の遺物が混在している。9世紀代の遺物を位置づけるうえで基準となるのは、佐渡産須恵器

1 五反田遺跡出土の平安時代の土器



SD178



SD435

第30図 五反田遺跡出土の9・10世紀の土器

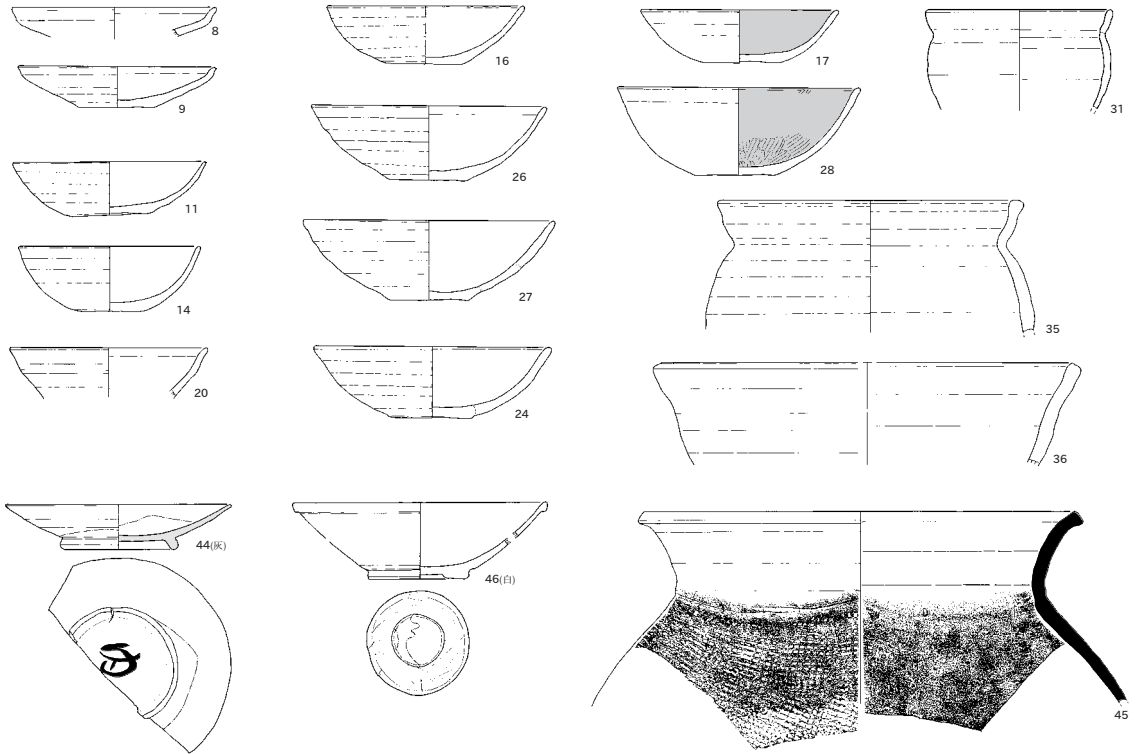
(143・144など)の存在である。これにより9世紀中葉以降にひとつの定点を求めることができる。須恵器杯類は糸切りが大半を占めてヘラ切りは少ない。土師器無台碗は口径12～13cm前後・器高3.5～4cmのもの(169～172・182など)が主体的で、SD178出土土器に対して口径は小さく、深身となる。表面の摩滅が著しく、色調は特徴的な淡橙色を呈する。しかし胎土は比較的精良で、白色軟質粒子を多く含むものの、大粒の砂粒は認められない。器壁は薄い。須恵器貯蔵具の大半と土師器甕の一部(192など)も同時期を構成するものであろう。特筆すべきはSD435Bから灰釉陶器水瓶(125)が出土していることである。これはK-90号窯式に比定され、9世紀後半に位置づけられる。胎土の特徴から猿投窯産の可能性が高い。水瓶は仏具や奢侈品としての性格が強いとされるが、包含層からさらにもう1点出土している(図版90-344)。これは、9世紀代における五反田遺跡が一般集落とは異なる性格を持っていたことを物語っており、高い階層の人々の存在を示すものと考えられる。

以上見てきたように、SD178・SD435ともに他時期のものを含んでおり、一括資料として取り扱うには注意を要する。しかしながら、9世紀代と認定した土師器無台碗には、両遺構間で相違が認められる。上越地方における9世紀初頭の資料は、上押出遺跡SX91一括資料が基準とされている。当該期の多くの遺跡では食膳具の主体は在地産須恵器であるが、上押出遺跡では底部糸切りの土師器無台碗が一定量伴う。口径12.5cm・器高3.5cm・底径7cm前後の土師器無台碗が特徴的で、口径17cmを超える大型品も存在する。共伴する須恵器食膳具には底部ヘラ切りと糸切りの二者がある。9世紀の土師器碗の型式組列は、上押出遺跡出土土師器碗の器形の変化を基準として構築されてる。SD178出土の土師器無台碗をみると、主体となるものの口径は13～14cmを測り、上押出遺跡例と同じかむしろ大きい。しかし、底部径はSD178が6cm前後であるのに対して上押出遺跡例は7cm前後と後者がやや大きくなる。既存の編年では、口径に対する底径の相対的な大きさは時期が下るごとに縮小化するとされ、須恵器無台杯の模倣と形骸化が要因と考えられている[坂井1984]。わずかではあるものの底径の縮小化が認められることから、SD178は上押出遺跡例よりも新しく位置づけたい。なお、底部ヘラ切りの須恵器有台杯と無台杯が共伴するのは、ヘラ切りから糸切りへと転換する当該期の様相を示すものであろうか。また、SD435の無台碗は、SD178よりも法量の縮小化が明瞭であり、佐渡産須恵器を共伴することから、より新しく位置づけられよう。他遺跡と比較すれば、SD178は上越市今池遺跡SX186出土土器、SD435は子安遺跡SK522・保坂遺跡SD51などに類例を求められ、おおよそ9世紀中葉前後の年代を与えることができるだろう。

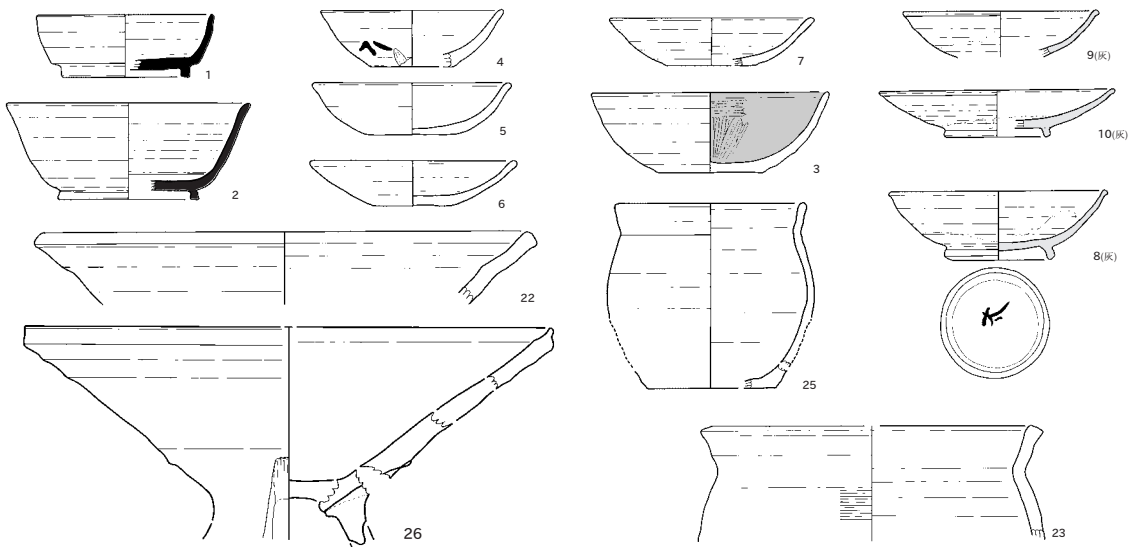
B 10世紀前半の土器(第31図)

平成15年調査区のSX3・SX16、平成16年調査区のSK179・SK50・SX211から良好な一括資料が得られている。当該期を構成する主な器種は、土師器碗・甕・鍋、黒色土器碗、須恵器瓶類・甕などで、定量の灰釉陶器がこれに伴う。量的には土師器が大半を占め、須恵器は少ない。当該期の編年指標となる土師器碗類を見てみると、おおまかな型式変化の方向を見出すことができる。SX3では口径13cmの小型品と15～16cmの大型品の2法量に分かれ、やや深身の形態が特徴的である。一方SK50やSX211では口径12～13cmが主体的で、器高が低く小ぶりのものが多い。SK179・SX16は、口径13cm前後で、身が浅く皿に近い形態を示している。土師器碗は、9世紀末に口径が縮小した後、10世紀前葉で大型化し、中葉に至って再び小型化するとされる[笹澤2003]。ここでみた各遺構における土師器碗の法量・形態差を時間差として捉えれば、最も大型なSX3出土土器を古く、小型品が主体的となるSK50・

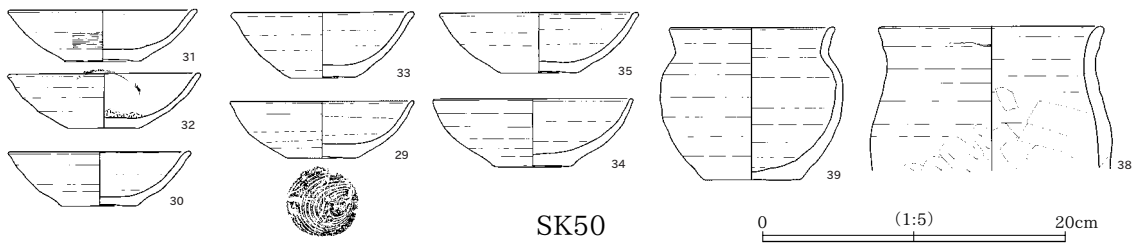
1 五反田遺跡出土の平安時代の土器



SX3



SK179



SK50

第31図 五反田遺跡出土の10世紀前半の土器

SX211 出土土器を新しく位置づけることができるであろう。そしてSK179・SX16出土土器を中間的な様相と捉えれば、SX3→SK179・SX16→SK50・SX211という変遷を想定することができる。これを笹澤正史氏の編年〔笹澤2003〕に照らし合わせれば、Ⅶ-1～3期の特徴に該当することから、ほぼ妥当な型式組列と考えられる。一方、椀類以外の器種では、土師器甕が各遺構から出土している。頸部で「く」字状に外反しながら口縁部で内湾し、端部が肥厚する形態が特徴的である。笹澤編年Ⅶ期には、口縁端部をつまみあげる大型甕が組成するとされるが、当該期の各遺構および遺跡全体を通して量的に少ない。土師器甕には大きく2系統があるとされ、口縁端部をつまみ上げるもの（本遺跡分類：土師器甕A）は北陸系、口縁部下辺が肥厚して稜をもつものは北信濃系と評価されている〔坂井1986〕。上越市一之口遺跡西地区などの平野部の遺跡で主体となる土師器甕Aが、五反田遺跡ではわずかにしか出土していないことから、土師器甕のあり方は地域差を示すものとして良いであろう。しかし、五反田遺跡で主体となる土師器甕Bが、北信濃系とされたものと異なる特徴を示していることには注意しなければならない。一之口遺跡西地区は9世紀中葉に主体があることから時期差の可能性を考慮しなければならないが、いまままで不詳であった高田平野東部における土師器甕のあり方については再検討が必要であろう。

また、灰釉陶器の共伴は、クロスデーティングを進める上で貴重である。灰釉陶器の椀・皿ともに高台の接地面が比較的広く、太く短い点の特徴的である。これはいわゆるK-90号窯式の三日月高台を脱却していることからO-53号窯式に比定することができる。各遺構の出土資料に明瞭な違いを見出せず、土師器椀で認められた時期差を灰釉陶器で確認することはできなかった。これらの灰釉陶器は尾野善裕氏編年のⅥ期新～Ⅶ期古段階に比定され、890～950年の実年代が与えられている。笹澤編年Ⅶ期が10世紀前葉～中葉とされていることから各遺構における組み合わせに大きな矛盾はない。なお、SX3出土の白磁椀Ⅰ類は、大宰府編年により8世紀末～10世紀中葉の基準資料とされている。平安時代において、白磁は威信財として価値が高かったとされることから、より古い時期に五反田遺跡に搬入された後、SX3に投棄されたと考えられる。隣接する掘立柱建物群が8世紀末～9世紀前葉に位置づくことから、白磁椀が掘立柱建物群のうちの1棟で保有されたと考えるのが妥当と思われる。

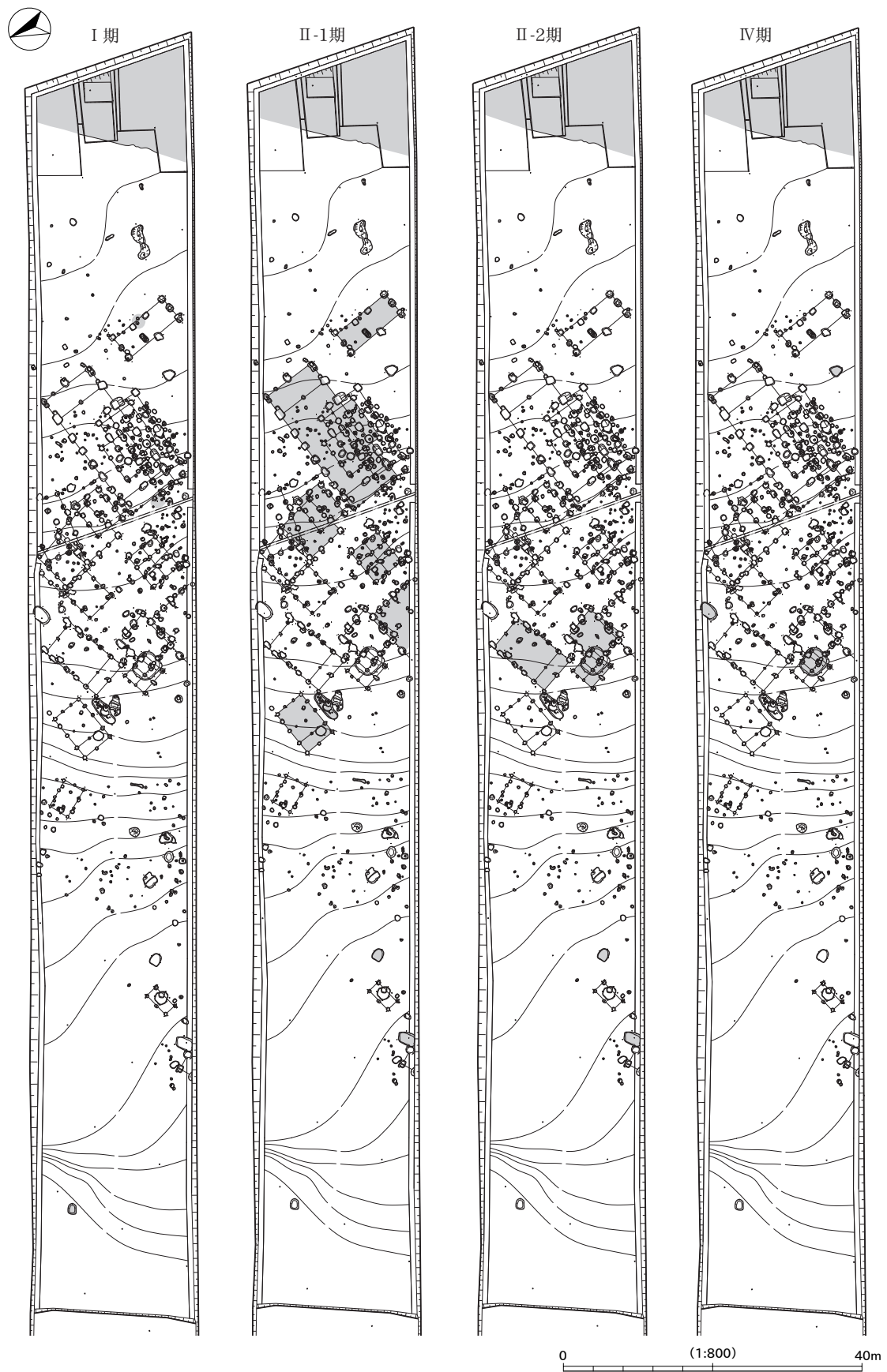
2 五反田遺跡における遺構の変遷（第32・33図）

2か年にわたる調査によって、五反田遺跡では8世紀～11世紀におよぶ遺跡であることが明らかとなった。しかし、細長い地区を調査対象としたため、遺構全体の配置や各遺構の規模などには不詳な点が多い。ここでは、五反田遺跡の存続期間をⅠ～Ⅴ期に区分し、遺構の変遷に主眼をおいて遺跡の動態についてまとめてみたい。

Ⅰ期（8世紀前葉）

当該期の遺構・遺物はわずかで、竪穴住居2基、炭土坑1基が確認されたに過ぎない。竪穴住居は8世紀後葉～9世紀前葉の掘立柱建物群によって削平され、カマドが部分的に残存していた。炭土坑は遺構集中域から離れて存在し、D区のなかでは最も北西側に位置する。遺構の分布状況や試掘調査成果を勘案すると、SX600は遺跡のほぼ西限であると推測される。新井市栗原遺跡〔坂井ほか1982〕はほぼ同時期の大規模集落遺跡であり、五反田遺跡とは3.5kmの距離にあたる。Ⅰ期における両遺跡には大きな差が認められるが、栗原遺跡が衰退するⅡ期において五反田遺跡が盛行期を迎える点には注意する必要がある。

Ⅱ期（8世紀後葉～9世紀前葉）



第32図 D区における遺構の変遷



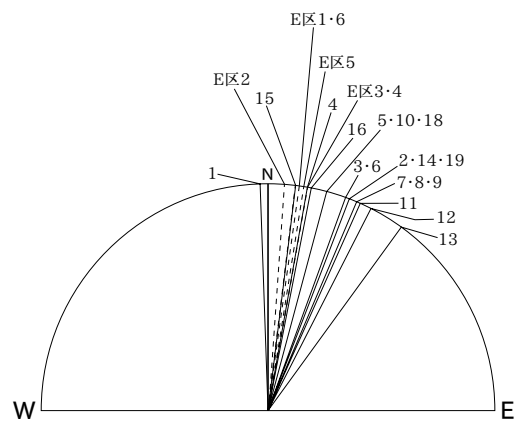
第33図 E区における遺構の変遷

五反田遺跡の盛行期であり、検出された掘立柱建物の多くが当該期に位置づけられると考えられる。建物の主軸方向には大きく2つのまとまりが認められ、それらを時期差と捉えてⅡ-1期とⅡ-2期に細分する。Ⅱ期の遺構からの出土遺物はわずかであるが、掘立柱建物の柱穴や周辺の包含層中から8世紀後葉～9世紀前葉の遺物が出土している。

Ⅱ-1期は掘立柱建物の主軸方向が東偏20～24度を示す段階である。D区においてのみ遺構が確認できる。掘立柱建物9棟(SB2・3・6・7・8・9・11・14・19)、炭土坑2基、川跡SX660が該当する。川跡は当該期には流路を形成していたと考えられるが、具体的な帰属時期については不詳である。掘立柱建物は9～15グリッド列に集中して分布し、東西棟7棟・南北棟2棟の計9棟から構成される。ほとんどが側柱建物で、総柱建物はSB14の1棟だけである。特徴的なのはSB8・SB9・SB7の位置関係である。SB8は桁行8間・梁間2間・床面積138m²を測り、2か年の調査を通して五反田遺跡最大の建物である。SB8の東側梁間の柱筋はSB9の東側桁行の柱筋と若干ぶれるもののほぼ一致する。また西側梁間の柱筋は、北側に並列するSB7の西側梁間の柱筋とやはり一致する。鍵の手状をなすこれら建物の位置は有意な関係を示す可能性が高い。また、建物の規模には規則性が認められ、Ⅰ類(138m²:SB1)を頂点として、Ⅲ類(30m²前後)4棟・Ⅳ類(22m²前後)3棟がそれぞれ組み合わせる。さらに、SB1周辺では4回におよぼ重複が認められ、限定された場所で複数の建て替えが行われていた。これらは五反田遺跡の性格を反映した結果である可能性が高いと考えられる。掘立柱建物のみから構成され、20～30m²の建物を主体として100m²以上の建物がわずかに存在するといったあり方は、春日真実氏の研究[春日1995]によるBⅠ類に該当し、国府・郡衙の官人の居宅が想定されている。ほぼ同時期と推定される今池遺跡と比較してみると、大型の掘立柱建物に中・小型の掘立柱建物が付随するあり方は類似するが、建物群を区画する溝や井戸・土坑といった遺構は五反田遺跡では明確ではない。あるいは、川跡SX660が区画溝として機能していた可能性を考慮すべきかも知れない。極めてグレードの高い奢侈品であった白磁碗がⅣ期の遺構から出土しているが、もとは当該期の建物において管理・使用されていた可能性が高いと思われる。そのような推測が可能であれば、やはり官人の居宅といった性格が想定されて良いであろう。

Ⅱ-2期は掘立柱建物の主軸方向が東偏7～10度を示す段階である。当該期にはE区でも掘立柱建物が構築され、8棟(D区:SB4・15・16、E区:SB1・3・4・5・6)が該当する。E区出土遺物の主体はⅢ期にあるが、E区SB1がⅢ期のSD178によって切られていることから、同じ主軸方向を示すSB1・SB3・SB4・SB5・SB6を1時期古いⅡ期に帰属するものと考えた。Ⅱ-1期と異なり最大規模の建物(SB1:101.8m²)がE区に存在し、D区では中規模以下の建物が3棟認められるだけとなる。このことから、集落の中心が標高の高いE区へ移転した可能性が推測される。しかし、当該期にはD区とE区を分断する川跡が存在しており、両区を同じ領域として括ることができるか否かは検討を要する。E区では、切り合い関係から、SD178がSB1・SB4の廃絶後に構築されていることが明らかである。この2つの建物は東側桁行の柱筋が一致しており、同時存在の可能性が想定される。一方、先後関係は不明ながら、総柱建物のSB3はSB1と重複している。

Ⅱ-1期とⅡ-2期の先後関係は、①主軸方向が東偏



第34図 D区・E区建物の主軸方位分布

20～24度の掘立柱建物が8世紀後葉～9世紀前葉を主体とするD区に多い、②東偏7～10度の掘立柱建物であるE区SB1が9世紀中葉の溝によって切られている、の2点により状況的に判断したものであり、遺構の切り合い関係によって保証されたものではない。この先後関係を妥当なものとする、Ⅱ期における掘立柱建物は東偏20～24度のグループから東偏7～10度のグループへと変遷したと言え、平面的には反時計周りに遺構が推移したことになる。しかし、東偏15度の建物群を介在させて検討してみると、建物群の変遷をそう単純に考えることができない。主軸方向が東偏15度を示すSB5は、東偏20～24度のグループに属するSB6と柱穴1か所において切り合い関係にあり、セクションの観察から後者が前者より新しいと判断した(第Ⅵ章3)。この結果をもとに東偏15度のグループを全て同時期あるいは近似した所産のものとして仮定して作業仮説を提示すると次のようになる。変遷A：東偏15度の建物(D区5・10・18)→東偏20～24度の建物(D区2・3・6～9・11・14・19)→東偏7～10度の建物(D区4・15・16、E区1・3～6)、変遷B：東偏7～10度の建物→東偏15度の建物→東偏20～24度の建物。A案では、建物の主軸方向が一定の変遷を経ず、東に西に振れながら推移したこととなる。またB案は、時計回りのスムーズ変遷が追跡できるものの、これまで述べてきたⅡ-1期とⅡ-2期の先後関係が全く逆転することとなる。さらに、D区とE区とでは、建物の主軸方向の推移が全く関与しない場合が想定できる。現段階では、最初に提示したⅡ-1期：東偏20～24度→Ⅱ-2期：東偏7～10度の変遷を妥当なものと考えたい。しかしながら、そこには不確定要素が多いことも指摘しておきたいと思う。

Ⅲ期(9世紀中葉)

E区においてのみ遺構が認められ、掘立柱建物1基・溝1条・川跡1条が該当する。当該期の遺物はE区に主体があり、D区ではわずかであった。よって、D区の掘立柱建物の一部が当該期に帰属する可能性は低いと考える。唯一の掘立柱建物であるSB2は、Ⅱ-1期の掘立柱建物群とは主軸方向が明らかに異なり、また、E区SB1によって切られていることから当該期に位置づけた。川跡SD435はAとBの2本が重複しており、川底から当該期の遺物がまとまって出土していることから、SD435AがⅢ期に該当するものとした。SD178は10世紀後葉の遺物を混在するものの、やはり底面近くからⅢ期の遺物が定量出土している。E区では当該期の遺物がかなり大量に出土したにも関わらず遺構数が少ない。小ピット群が建物となる可能性や、調査区外に中心部が広がっているなどが想定できるが現在までのデータでは不問とせざるを得ない。

出土遺物の点からも指摘しておかねばならない点がある。それは五反田遺跡で定量の出土をみた緑釉陶器・灰釉陶器の存在である。10世紀前半に下る資料を少量含むものの、多くはK-90号窯式：9世紀後半に位置づけられる。9世紀後半の在地産土器(土師器・須恵器)は少量が包含層から出土しているのみで、確実な遺構も確認できなかった。現状では、緑釉陶器と灰釉陶器が在地土器をともなわずに孤立した状態となってしまう。かつては官衙遺跡を認定するひとつの基準とされていた緑釉陶器であるが、近年では貴族層の奢侈品としての性格が強調されている[尾野2002]。いずれにしても、ランクの高い階層との関連が強い緑釉陶器の段階に、遺構・遺物が極めて少ないということは考えにくい。Ⅱ期とした掘立柱建物群の一部が9世紀後半に下る、あるいは10世紀前半まで伝世されていた可能性も考慮しなければならない。一方、上越地方の遺跡では、在地土器と緑釉・灰釉陶器の共伴で編年的なズレを生じている例がしばしば認められる。地域編年として確立された感がある古代の土器編年において、広域に流通する緑釉・灰釉陶器を介した検証作業が必要であるのかも知れない。

Ⅳ期(10世紀前半)

D区の竪穴状遺構・土師器焼成遺構・炭土坑、E区の土坑などがある。特徴的なのはD区における炭土坑の分布である。出土遺物が少ないことから個々の帰属時期を明確にすることができなかったが、明らかにIV期に位置づく竪穴状遺構(SX3)と覆土を共通することや、II期の掘立柱建物と重複する例があることなどから、9～15グリッド列に分布する炭土坑の多くは当該期のものと考えた。それを前提にすると、I期とII期では少数の炭土坑が遺構集中域から沢状地形を挟んだ西側に分布していたのに対して、IV期では遺構集中域と重なるように存在する。このことは、II期とIV期とで遺跡の性格や土地の利用形態が変化したことを暗示しているようだ。当時の最高級奢侈品である白磁碗がSX3の覆土に投棄されていることを考えると、IV期になってこれまでの価値観が転換するような変化が生じた可能性がある。なお、白磁碗は大宰府編年により8世紀末～10世紀中葉の基準資料とされる。その価値の高さから、五反田遺跡の盛行期であるII期において搬入され、伝世された後の10世紀前半に投棄されたものと考えたい。

V期(10世紀後半)以降

E区においてのみ活動の痕跡が認められる。SK95・SK503・SX280・SX386などの土坑が該当する。また、9世紀中葉以前に機能していた溝や川跡が埋没する過程で当該期の遺物が混入している。定量の遺物の出土が認められるものの、集落の構造を推測し得るような痕跡は希薄である。当該期以降は11～16世紀の遺物が散発的に出土するが実態はさらに不明となっていく。隣接する仲田遺跡では11世紀後半に集落が形成され、14世紀で一度途切れるものの、15世紀まで及んでいる[加藤ほか2003]。11世紀以降における五反田遺跡のあり方は仲田遺跡との関連で理解されるべきであり、12世紀中葉の和鏡の出土が暗示するように、近隣には仲田遺跡とは別の高階層の集落(居宅)が存在する可能性が高い。

要 約

台の上遺跡

- 1 台の上遺跡は、上越市大字木島字峪ノ上107ほかに所在し、標高は約22mを測る。
- 2 発掘調査は、北陸新幹線の建設に伴い平成15年度に実施した。調査面積は980m²である。
- 3 遺跡は関川左岸の河岸段丘上に立地する。後世の削平が大きく、遺物包含層はほとんど残されていないかった。
- 4 発掘調査の結果、古代（8世紀後半）の須恵器・土師器を主体として、中世（11～14世紀）の白磁・龍泉窯系青磁・京都系土師皿がわずかに出土した。しかし全体的に遺物量は少ない。
- 5 検出された遺構は、竪穴住居1・掘立柱建物3・井戸1・土坑1・溝状遺構4・ピット36などがあるが、竪穴住居および溝状遺構1基が古代（8世紀後半）に位置づけられるほかは、遺物の出土がなく帰属時期を明確にし得ない。しかし、遺物包含層出土土器や覆土のあり方から、多くが古代に伴うものと考えられる。
- 6 調査区は段丘の縁辺部に位置することから、南側には平坦地には集落の中心部が広がっている可能性がある。さらに、約90m東方に位置する峪ノ上遺跡では、台の上遺跡と前後する時期の遺構（7世紀前半の竪穴住居、9世紀前半の掘立柱建物）が検出されていることから、同一段丘上に立地する遺跡として何らかの関連が推測される。
- 7 古代以前の段丘崖を確認することができた。この段丘崖が埋没し、段丘平坦面の面積を広げた後に8世紀後半以降の遺構が形成されている。関川の旧河道を復元するうえで重要である。

峪ノ上遺跡

- 1 峪ノ上遺跡は、上越市大字木島字峪ノ上52ほかに所在し、標高は約23mを測る。
- 2 発掘調査は、北陸新幹線の建設に伴い平成15年度に実施した。調査面積は1,160m²である。
- 3 遺跡は関川左岸の河岸段丘上に立地し、台の上遺跡とは約90mの距離にある。
- 4 発掘調査の結果、弥生時代中期、古墳時代後期（7世紀前半）、古代（9世紀前半）、中世（14～15世紀）の遺構・遺物を検出したが、主体は古墳時代後期と古代であり、そのほかの時期はわずかな遺物を出土したに過ぎない。
- 5 検出された遺構は、竪穴住居1、溝4、掘立柱建物1、ピット約80などがある。竪穴住居が古墳後期（7世紀後半）、溝と掘立柱建物が古代（9世紀前半）に位置づけられる。
- 6 古墳後期の竪穴住居は、長軸548cm・短軸546cmの方形プランを呈し、面積約30m²を測る。注目されるのは、南東コーナーから煙道を伴わない火床部2基が検出されたことである。東側火床部では、土師器長胴甕4基が埋設され、支脚と思われる円筒形土製品が出土したことからカマドと判断した。西側火床部ではカマドの存在を示す遺物が出土しなかったことから、カマドが作り替えられたものと考えている。また、東側カマドの袖部からは小型土師器杯の完形品が単体で出土しており、カマド祭祀に関わるものと考えられる。さらに、床面中央部からは焼土が検出された。炉とカマドが併設された過渡的形態の可能性を想定したが、今後の課題である。
- 7 古代の掘立柱建物は、調査区外に延びているため全形が不明であるが、梁行1間×桁行7間超の身舎

に、南北両面と東面に1間の廂が付く側柱建物である。面積は150m²を超え、西側にも廂が付いた四面廂になる可能性がある。柱掘りかたの一部では、掘りかたの長軸が建物の主軸方向と直行する傾向が認められた。注目されるのは、主柱よりも細い柱で構成された長方形の区画が身舎の中に存在することである。どのような機能を果たすものかは明らかにできなかった。また、1基の柱穴では、柱抜き取り後に土師器椀と佐渡産須恵器大甕を投棄しており、廃屋儀礼の可能性を想定した。

- 8 遺跡は段丘縁辺部に立地しており、広い平坦地が背後に存在する。峪ノ上遺跡は古墳時代後期および平安時代の集落の一部である可能性が高く、調査範囲外に集落の中心地が存在すると予測される。

五反田遺跡（平成15年調査区）

- 1 五反田遺跡（平成15年調査区）は、上越市板倉区大字米増字五反田44ほかに所在し、標高は44～46mを測る。
- 2 発掘調査は、北陸新幹線の建設に伴い平成15年度に実施した。調査面積は5,680m²である。
- 3 遺跡は大熊川によって形成された扇状地上に立地する。
- 4 発掘調査の結果、縄文時代中期前葉、古代（8世紀前半～9世紀前葉・10世紀前葉）、中世（14～15世紀）、近世（16世紀末）の遺構・遺物を検出したが、主体は古代であり、そのほかの時期はわずかな遺物が出土したに過ぎない。
- 5 竪穴住居2（カマドのみ）、掘立柱建物19、竪穴状遺構1、土師器焼成遺構1、炭土坑8、ピット約400、川跡が検出された。すべてが古代に帰属し、8世紀後半～9世紀前葉と10世紀前葉の2期に主体がある。
- 6 8世紀後半～9世紀前葉に位置づけられる掘立柱建物群は、大型建物を中心に、小型・中型側柱建物、総柱建物から構成される。長軸を東西方向に向けて整然と配置されて規格性が高い。一般集落とは異なる性格が想定される。
- 7 10世紀前葉になると竪穴状遺構・土師器焼成遺構・炭土坑のみが検出され、建物遺構の存在が不明瞭となる。土地利用あるいは遺跡の性格がそれ以前と変わった可能性が高い。
- 8 須恵器を主体として大量の土器が出土した。特に竪穴状遺構（SX3）からは、在地産土師器・佐渡産須恵器・東海産灰釉陶器・唐産白磁が相伴しており、編年対比を行ううえで良好なデータを提示している。
- 9 灰釉陶器78片、緑釉陶器42個体が出土しており、遺跡の性格を考える上で注目される。しかし、猿投産と推定される両者は9世紀後半に位置づけられ、五反田遺跡では同時期の遺構が明確ではない。在地土器の年代的位置づけや遺構の帰属時期について、今後課題を残すこととなった。
- 10 墨書土器は19点出土した。判読できた文字は「兼公」が4点と最も多く、「万」が3点、「豊」が2点、「西」「稲人」「寺」「内」が各1点ある。ほとんどが8世紀後半～9世紀前半に帰属し、「西」が9世紀後半、「内」が10世紀前葉となる。

五反田遺跡（平成16年調査区）

- 1 五反田遺跡（平成16年調査区）は、上越市板倉区大字米増字横田226ほかに所在し、標高は49～51mを測る。平成15年調査区とは、県道三和新井線を挟んだ東側隣接地にあたる。
- 2 発掘調査は、北陸新幹線の建設に伴い平成16年度に実施した。調査面積は2,030m²である。

- 3 遺跡は、大熊川によって形成された扇状地と丘陵端部が接する緩斜面上に立地する。
- 4 発掘調査の結果、縄文時代後期、古代（9世紀～10世紀）、中世（11～13世紀）、近世（17世紀）の遺構・遺物を検出したが、主体は古代であり、そのほかの時期はわずかな遺物が出土したに過ぎない。
- 5 検出した遺構は、掘立柱建物6、柱穴列1、溝3、川跡2、土坑15、ピット約600である。全てが古代に帰属し、9世紀中葉前後と10世紀代の2期に主体がある。
- 6 掘立柱建物群の多くは、9世紀中葉の遺物を出土した溝（SD178）との切り合い関係から9世紀前葉に位置づけた。また、9世紀中葉で1棟、10世紀前半で2棟以上の存在が想定されたが、柱穴からの出土遺物が少なく判然としない。平成15年調査区と同様に、掘立柱建物は長軸を東西方向に向けて整然と配置されていた。
- 7 集石遺構が数基検出された。浅い掘り込みを持つものと持たないものがあるが、被熱によって赤色化したりや多量の煤が付着する人頭大の礫が集石する点で共通する。SK95では10世紀後半の土器を伴っているものの、ほかの遺構では帰属時期が明確ではない。他遺跡では認められない遺構であり、今後の類例増加が期待される。
- 8 土師器を主体として大量の土器が出土した。遺跡全体に占める土師器の比率が須恵器に比べて格段に高いことから、遺跡の主体が9世紀中葉以降であることが明らかである。溝および川跡からは9世紀中葉前後の遺物が、土坑などからは10世紀前半の遺物が比較的まとまって出土した。特にSK179・SK50出土資料は、平成15年調査区検出の竪穴状遺構（SX3）とあわせて、10世紀前半の土器編年を考えるうえで重要である。
- 9 灰釉陶器805片、緑釉陶器3個体が出土した。灰釉陶器は出土量が多いことに加えて、椀・段皿・皿・瓶・平瓶・四足壺・浄瓶といった多様な器種が認められる点が特徴的である。特に、仏具として珍重された浄瓶は2個体を数え、遺跡の性格を考える上で注目される。9世紀後半～10世紀前葉に位置づけられるが、平成15年調査区と同様、帰属する遺構が明瞭でない点が課題である。
- 10 墨書土器は墨痕だけのものを含めて47点出土した。判読できた文字は「太」が6点と最も多く、「七」が4点、「山（記号化したものも含む）」が2点、「由」「中」「兼」などが各1点ある。また、墨線1～2本を引いただけのものや交差するものなど、文字以外の墨書が9点認められる点が特徴的であり、平成15年調査区との違いが際立っている。
- 11 2ヵ年におよぶ調査の結果、五反田遺跡は、短期間の断続時期が認められるものの、8世紀前葉～10世紀後半のほぼ3世紀におよぶ長期継続型遺跡であることが明らかとなった。出土遺物から、①8世紀後半～9世紀前葉、②9世紀中葉前後、③10世紀代の3時期に主体が認められるが、各期に帰属する遺構は多様であり、遺跡の性格に変遷があったことが窺える。3.5kmほど北西に位置する栗原遺跡は頸城郡衙に比定され、五反田遺跡の最初のピークと前後するように8世紀半ばで衰退する。また、北西400mと至近の距離にある仲田遺跡は11世紀後半に集落が成立し、途中空白期間を持ちながらも15世紀まで存続する。このようなことから、五反田遺跡は、頸城平野南部における古代～中世の遺跡動態を考える重要な意味を持つと言えるだろう。

引用・参考文献

- 板倉町史編さん委員会 2003 『板倉町史』資料編 新潟県板倉町
- 大橋 康二 1993 『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
- 大平 理恵 2001 『板倉町埋蔵文化財調査報告第2集 南原遺跡』板倉町教育委員会
- 尾崎 高宏 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第111集 上信越自動車道関係発掘調査報告書 黒田古墳群』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 尾野 善裕 2000 「猿投窯(系) 須恵器編年の再構築」『第1回東海土器研究会 須恵器生産の出現から消滅—猿投窯・湖西窯編年の再構築—』第1分冊発表要旨 東海土器研究会
- 尾野 善裕 2001 「「戊申年木簡」・尾張国分寺と猿投窯—猿投窯系須恵器編年の再構築・補論—」『第1回東海土器研究会 須恵器生産の出現から消滅—猿投窯・湖西窯編年の再構築—』第5分冊補遺・論考編 東海土器研究会
- 尾野 善裕 2002 「平安時代における緑釉陶器の生産・流通と消費 尾張産を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第92集 国立歴史民俗博物館
- 尾野 善裕 2003 「古代の尾張・美濃における緑釉陶器生産」『古代の土器研究会第7回シンポジウム 古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器—生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会
- 春日 真実 1995 「古代集落の展開—越後を事例として—」『研究紀要』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日 真実 1994 「第VI章2 古墳時代後期の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡(東地区)』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日 真実 1999 「第4章古代 第2節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
- 加藤 学^{ほか} 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 北陸新幹線関係発掘調査報告書II 仲田遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 北野 博司 2003 「江向遺跡」『上越市史』資料編2 考古 新潟県上越市
- 久保 智康 1999 『中世・近世の鏡』日本の美術394 至文堂
- 小島幸雄・中村美恵子 1984 『新潟県上越市長原廃寺確認調査概要』上越市教育委員会
- 小島幸雄・中西聡・笹川修一 1993 「上越市江向遺跡の調査」『新潟県考古学会第5回大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 坂井秀弥^{ほか} 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集 北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書II 一之口遺跡西地区』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥^{ほか} 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井 秀弥 1990 「越後における古代末、中世の土器様相と画期」『シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」』
- 笹澤 正史 1995 「信・越両地区にまたがるロクロ土師器甕の在り方について」『新潟考古学談話会会報』第15号 新潟考古学談話会
- 笹澤正史^{ほか} 1999 『新潟県上越市上千原地区ほ場整備関連発掘調査報告書 津倉田遺跡』新潟県上越市教育委員会
- 笹澤 正史 2003 「時代概説」『上越市史』資料編2 考古 新潟県上越市
- 上越市史編さん委員会 2003 『上越市史』資料編2 考古 新潟県上越市
- 鈴木 俊成 1994 「古墳時代後期の堅穴住居について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成・春日真実^{ほか} 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 保^{ほか} 1993 『和島村埋蔵文化財調査報告書第2集 八幡林遺跡』新潟県和島村
- 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 2003 『古代の官衛遺跡』I 遺構編
- 平尾 政幸 1994 「緑釉陶器の変質と波及」『古代の土器研究会 第3回シンポジウム 古代の土器研究 律令的土器様式の西東3』古代の土器研究会
- 兵庫埋蔵銭調査会 1996 『日本出土銭総覧 1996年版』
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁学会
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 山本 信夫 2000 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集 福岡県太宰府市教育委員会
- 吉岡 康暢 1994 『日本海域の土器・陶磁器〔中世編〕』六興出版
- 秦 繁治^{ほか} 1997 『三和村埋蔵文化財調査報告書第5集 日向古窯跡発掘調査報告書』新潟県三和村教育委員会
- 秦 繁治^{ほか} 1998 『榎井A遺跡 発掘調査報告書』新潟県頸城村教育委員会
- 平野 団三 1969 「(仮説)越後国分二寺址論考」『越佐研究 第28集』新潟県人文研究会

掘立柱建物跡 観察表 台の上遺跡

SB1

図版番号		グリッド	20B	桁行 (m)	2間 (4.2m)	梁間 (m)	1間 (2.2m)	床面積	9.24m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-114-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
34	円形	20	18	21.95	21.706	24.4	34-25	1.58	なし
25	円形	20	16	21.883	21.464	41.9	25-36	2.62	なし
36	不整形	36	34	21.91	21.643	26.7	36-14	2.2	なし
14	円形	26	26	22.043	21.849	19.4	14-38	2.62	なし
38	円形	26	24	21.937	21.727	21			
切り合い									
出土遺物									

SB2

◎調査区外に拡がるため不明

図版番号		グリッド	20・21B	桁行 (m)	2間 (3.4m)	梁間 (m)	?間(1.14m以上)	床面積	3.88m ² 以上
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-110-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
37	円形	20	16	21.852	21.601	25.1	37-23	1.16	なし
23	円形	26	26	21.819	21.372	44.7	23-19	1.74	なし
19	円形	26	22	21.843	21.366	47.7			
切り合い									
出土遺物									

SB3

図版番号		グリッド	23A・B	桁行 (m)	3間 (4.98m)	梁間 (m)	1間 (3.54m)	床面積	17.63m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-114-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
6	楕円形	30	20	21.516	21.238	27.8	6-3	1.68	なし
3	円形	26	22	21.473	21.253	22	3-2	1.56	なし
2	円形	20	20	21.472	21.227	24.5	2-7	1.76	なし
7	楕円形	22	14	21.437	21.086	35.1			なし
1	円形	24	20	21.805	21.64	20.1	1-4	3.14	なし
4	円形	26	24	21.854	21.612	24.2	4-6	3.54	なし
切り合い									
出土遺物									

掘立柱建物跡 観察表 峪ノ上遺跡

SB1

図版番号		グリッド	4,5B・C、6B	桁行 (m)	7間+1間(17m以上)	梁行 (m)	3間+2間(9.4m)	床面積	170m ² 以上
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-94-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
35	不整形	78	62	23.267	22.517	75	35-54	2.26	なし
54	円形	60	54	23.35	22.633	71.7	54-53	2.12	なし
53	方形	94	78	23.371	22.395	97.6	53-57	2.28	なし
57	方形	100	70	23.34	22.587	75.3	57-60	2.12	なし
60	不整形	140	100	23.341	22.69	65.1	60-77	2.18	なし
77	楕円形	102	78	23.28	22.585	69.5	77-107	1.94	なし
107	楕円形	116	58	22.956	22.62	33.6	107-106	1.76	なし
106	不整形	128	(28)	23.275	22.797	47.8	35-34	2.34	なし
34	円形	86	76	23.279	22.881	39.8	34-37	2.28	なし
37	方形	80	62	23.265	22.912	35.3	37-51	2.12	なし
51	方形	80	80	23.363	22.62	74.3	51-50	2.26	なし
50	方形	92	74	23.362	22.822	54	50-61	2.12	なし
61	円形	90	80	23.339	22.837	50.2			あり(痕)
104	楕円形	(78)	54	23.283	22.984	29.9	104-103	2.26	なし
103	長方形	128	56	23.302	22.37	93.2	103-45	2.12	なし
45	方形	72	70	23.328	22.853	47.5	45-46	2.28	なし
46	円形	80	70	23.345	22.887	45.8	46-86	2.12	なし
86	方形	60	50	23.207	22.849	35.8			なし
17	方形	92	60	23.321	22.923	39.8	17-19	2.26	なし
19	楕円形	86	60	23.335	23.06	27.5	19-92	2.14	あり(痕)
92	楕円形	104	54	23.341	22.38	96.1	92-133	2.28	あり(根)
133	(円形)	(58)	(16)	23.32	22.92	40			なし
109	円形	80	60	23.269	22.863	40.6	109-34	1.98	なし
88	円形	42	34	23.262	22.884	37.8	95-109	1.5	なし
39	不整形	88	72	23.349	22.812	53.7	104-95	1.6	なし
95	円形	56	(48)	23.264	23.039	22.5	17-104	2.16	なし
89	円形	44	(36)	23.254	22.935	31.9	109-88	2.16	なし
42	楕円形	70	54	23.32	22.902	41.8	95-89 89-42 88-39	2.16 2.12 2.12	なし
99	方形	100	84	23.302	22.874	42.8			なし
125	円形	38	30	23.082	22.921	16.1			なし
146	(不整形)	(80)	(46)	23.322	22.865	45.7			なし
切り合い	107>SD3, 59<60, 36<37, S11<SD3<Pit17・104・95・108・35								
出土遺物									

遺構観察表

SB2

図版番号		グリッド	4,5B	桁行 (m)	2間 (4.34m)	梁間 (m)	1間 (1.42m)	床面積	6.16m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-94-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
109	楕円形	72	60	23.269	22.863	40.6	109-88	2.26	なし
88	方形	42	36	23.262	22.884	37.8	88-39	2.12	なし
39	不整形	90	72	23.349	22.812	53.7	39-42	1.5	なし
95	楕円形	58	(48)	23.264	23.039	22.5	42-89	2.14	なし
89	円形	44	(36)	23.254	22.935	31.9	95-89	2.26	なし
42	方形	70	52	23.32	22.902	41.8	95-109	1.5	なし
切り合い									
出土遺物									

掘立柱建物跡 観察表 五反田遺跡 (平成15年度)

SB1

図版番号	30	グリッド	8A・B	桁行 (m)	3間 (4.52m)	梁間 (m)	2間 (2.84m)	床面積	12.84m ²
構造	側柱	棟方向	南北棟	方位	N-2-W				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
515	円形	45	40	43.976	43.585	39.1	515-514	1.28	なし
514	円形	35	35	43.952	43.686	26.6	514-668	1.56	なし
668	円形	44	40	43.951	43.781	17	668-512	1.6	なし
512	円形	40	40	43.926	43.755	17.1	512-663	1.04	なし
663	楕円形	40	33	43.921	43.644	27.7	663-485	1.44	なし
485	円形	36	33	43.9	43.671	22.9	485-487	1.64	なし
556	円形	47	45	43.957	43.452	50.5	487-481	1.24	なし
481	円形	40	38	43.963	43.712	25.1	481-483	1.36	なし
483	円形	38	35	43.943	43.77	17.3	483-484	1.44	なし
484	不整形	40	40	43.961	43.622	33.9	484-515	1.32	なし
切り合い									
出土遺物									

SB2

図版番号	31	グリッド	9B	桁行 (m)	4間 (6.56m)	梁間 (m)	2間 (4.24m)	床面積	27.81m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-21-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
74	楕円形	56	40	44.419	44.096	32.3	74-73	1.58	なし
73	円形	48	44	44.389	44.042	34.7	73-72	2.2	なし
72	円形	54	50	44.37	43.951	41.9	72-71	1.56	なし
71	円形	50	47	44.348	43.987	36.1	71-79	2.28	あり (痕)
79	円形	48	47	44.322	44.069	25.3	79-78	1.96	なし
78	円形	60	51	44.185	43.848	33.7	78-77	1.56	なし
77	円形	55	49	44.271	43.812	45.9	77-76	2.16	なし
76	円形	52	45	44.3	43.965	33.5	76-75	1.52	なし
75	円形	62	52	44.319	44.026	29.3	75-102	1.3	なし
102	方形	52	41	44.342	44.132	21	102-84	1.5	なし
84	不整形	35	30	44.361	44.171	19	84-101	1.4	なし
101	方形	40	27	44.371	44.19	18.1	100-77	2.04	なし
100	円形	36	35	44.338	44.036	30.2	72-100	2.2	なし
切り合い									
出土遺物									

SB3

図版番号	32	グリッド	10C・11C	桁行 (m)	5間超 (7.8m超)	梁間 (m)	3間 (6.4m)	床面積	
構造	側柱	棟方向	南北棟	方位	N-20-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
13	円形	80	77	44.592	44.175	41.7	13-20	1.78	なし
20	楕円形	(88)	83	44.595	43.925	67	20-19	1.48	なし
19	円形	87	80	44.583	44.005	57.8	19-395	1.24	あり (痕)
395	方形	90	78	44.591	44.06	53.1	395-399	1.32	なし
399	円形	103	(98)	44.598	44.053	54.5	399-45	2.3	なし
45	方形	132	(84)	44.597	43.836	76.1	45-44	2	なし
44	円形	90	86	44.572	44.033	53.9	44-38	2.04	あり (根)
38	円形	112	96	44.516	43.971	54.5			あり (痕)
切り合い	395<120, 88>45>48								
出土遺物	P45・P38								

SB4

図版番号	32	グリッド	10A・B	桁行 (m)	5間 (9.66m)	梁間 (m)	2間 (5.1m)	床面積	49.27m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-10-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
32	円形	78	(76)	44.578	44.236	34.2	32-33	2	なし
33	楕円形	80	52	44.571	44.387	18.4	33-29	1.84	なし
29	楕円形	67	55	44.621	44.336	28.5	29-7	1.86	あり (痕)
7	円形	75	70	44.639	43.793	84.6	7-46	1.86	あり (痕)
46	方形	(130)	65	44.62	44.053	56.7	46-56	2.08	なし
56	不整形	(120)	(80)	44.57	44.33	24	56-51	2.68	なし
51	楕円形	49	30	44.532	44.471	6.1	51-56	2.7	なし
61	方形	114	60	44.68	44.24	44	47-39	2.06	なし
39	方形	128	54	44.79	44.5	29	42-47	1.8	なし
47	方形	85	56	44.415	44.083	33.2	64-42	1.82	あり (痕)
42	楕円形	76	60	44.491	44.288	20.3	89-64	2	なし
64	方形	64	56	44.477	44.294	31.7	59-32	2.56	あり (痕)
89	円形	54	42	44.401	44.16	24.1	89-59	2.6	なし
59	不整形	56	40	44.517	44.099	41.8	39-61	2.04	なし
87	楕円形	34	26	44.514	44.386	12.8	61-51	2.4	なし
							64-87	2.4	
							87-33	2.74	
切り合い	39 < 54 > 37 , 67 > 32, 46 > 63								
出土遺物	P32・33・29・7・46・56・64・89・47・39・61								

SB5

図版番号	33	グリッド	11A・B、12B	桁行 (m)	3間 (5.5m)	梁間 (m)	2+1間(5.1m)	床面積	28.05m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-15-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
273	方形	76	60	44.559	44.34	21.9	273-322	2.32	なし
322	方形	95	70	44.647	44.247	4	322-259	1.3	なし
259	円形	70	64	44.641	44.265	37.6	8-301	1.98	あり (痕)
238	楕円形	90	85	44.703	44.335	36.8	259-238	1.9	なし
301	円形	56	50				238-301	3.82	
8	楕円形	70	64	44.656	44.345	31.1	429-300	0.94	あり (痕)
15	方形	50	44	44.631	44.405	22.6	1004-15	1.9	なし
1004	楕円形	72	60	44.589	44.347	24.2	267-1004	1.74	なし
267	円形	(65)	56	44.615	44.439	17.6	273-267	2.46	なし
429	円形	(57)	54	44.549	44.38	16.9	1004-429	0.9	なし
300	方形	62	54	44.613	44.38	23.3	300-17	1.8	なし
17	方形	65	55	44.604	44.491	11.3	15-8	1.76	なし
切り合い	267 > 276, 428 > 429, 274 > 273 > 275								
出土遺物	P17・15・8・267・274								

SB6

図版番号	33	グリッド	11・12B	桁行 (m)	3間 (6.04m)	梁間 (m)	3間 (5.38m)	床面積	32.5m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-20-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
214	方形	86	84	44.657	44.238	37.4	214-250	2.1	あり (痕)
250	不整形	(98)	92	44.734	44.399	33.5	250-257	2.04	なし
257	方形	94	66	44.785	44.238	54.7	257-216	1.9	あり (痕)
216	方形	76	74	44.817	44.294	52.3	216-254	1.98	なし
254	円形	54	52	44.734	44.515	21.9	254-179	1.64	なし
179	円形	60	(46)	44.713	44.442	17.9	179-237	1.74	なし
237	方形	64	58	44.734	44.25	48.4	237-522	1.82	なし
522	方形	(48)	60				522-322	2.12	なし
322	方形	96	68	44.647	44.247	40	322-274	2.12	なし
274	方形	76	72	44.6	44.372	22.8	274-278	2.22	なし
278	楕円形	74	60	44.649	44.409	24	278-211	1.68	なし
211	方形	58	56	44.652	44.514	13.8	211-214	1.54	なし
切り合い	257 > 258, 178 > 179, 274 > 273 > 275								
出土遺物	P211・257・273								

遺構観察表

SB7

図版番号	34	グリッド	12B	桁行 (m)	3間 (5.2m)	梁間 (m)	2間 (4.22m)	床面積	21.94m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-23-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
233	楕円形	84	76	44.708	44.327	38.1	233-219	1.66	あり (痕)
219	楕円形	86	78	44.738	44.47	26.8	219-223	1.66	あり (痕)
223	方形	104	68	44.79	44.202	58.8	223-222	1.92	あり (痕)
222	円形	90	80	44.841	44.341	50	222-234	2.26	あり (痕)
234	楕円形	86	68	44.809	44.348	46.1	234-253	1.94	あり (痕)
253	不整形	(128)	(92)	44.759	44.402	31.1	178-237	2.12	なし
263	楕円形	76	60	44.73	44.128	60.2	263-252	1.66	あり (痕)
252	方形	74	68	44.711	44.213	49.8	252-266	2	あり (痕)
266	円形	44	40	44.673	44.138	53.5	266-250	2.06	あり (痕)
250	不整形	(98)	92	44.734			250-233	2.12	なし
切り合い	266 > 176								
出土遺物	P233・223・222・253								

SB19

図版番号	35	グリッド	12B・C、13A・B・C	桁行 (m)	8間 (19.12m)	梁間 (m)	2間 (7.24m)	床面積	138.43m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-23-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
195	方形	58	54	44.731	44.351	38	195-382	1.9	なし
382	楕円形	186	90	44.8	44.283	51.7	382-378	2.32	あり (根)
378	方形	(100)	94	44.789	44.107	68.2	378-328	2	なし
328	円形	114	104	44.871	44.31	56.1	328-334	2.2	あり (痕)
334	方形	104	94	44.839	44.184	65.5	334-355	2.34	なし
355	方形	100	82	44.975	44.227	74.8	355-457	2.28	あり (根)
457	方形	124	(110)	44.905	44.268	63.7	457-153	3.14	なし
153	方形	115	104	44.936	44.425	51.1	153-145	2.94	なし
145	方形	(134)	(78)	45.049	44.721	32.8	145-112	3.6	あり (痕)
112	楕円形	122	90	45.055	44.783	27.2	112-122	3.7	なし
122	不整形	88	72	44.889	44.468	42.1	122-124	2.86	あり (痕)
124	方形	138	102	44.985	44.295	69	124-128	3.22	なし
128	不整形	106	92	44.936	44.263	67.3	128-130	2.2	なし
130	方形	92	90	44.834	44.216	61.8	130-131	2.3	あり (痕)
131	方形	110	108	44.837	44.019	81.8	131-262	2.08	なし
262	楕円形	132	84	44.847	43.996	85.1	262-182	2.24	なし
182	不整形	94	80	44.818	44.132	68.6	182-183	2.08	なし
183	方形	106	90	44.748	44.37	37.8	183-231	2.18	あり (痕)
231	楕円形	70	62	44.636	44.211	42.5	231-195	7.26	なし
245	円形	70	60	44.606	44.151	45.5	231-245	3.74	なし
							245-195	3.52	
191	方形	138	72	44.747	44.092	65.5			なし
1006	円形	56	50	44.883	44.548	33.5	183-191	3.8	
							191-382	3.46	
							124-1006	3.74	
							1006-153	3.5	
切り合い	111 > 112, 229 > 231 < 230, 457 > 470, 324 > 334, 153 > 104, 153 > 104								
出土遺物	P382・379・328・355・457・145・122・128・130・131・262・183・231・191								

SB9

図版番号	34	グリッド	14B・C、15C	桁行 (m)	3間 (8.7m)	梁間 (m)	2間 (3.3m)	床面積	28.71m ²
構造	側柱	棟方向	南北棟	方位	N-23-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
151	方形	96	96	45.074	44.499	57.5	151-154	5.06	あり (痕)
154	方形	104	100	45.071	44.365	70.6	154-415	3.64	なし
415	方形	110	78	45.006	44.371	63.5	415-409	2.06	あり (痕)
409	楕円形	110	88	45.032	44.652	38	409-413	1.26	あり (痕)
413	方形	96	90	45.075	44.461	61.4	413-411	3.32	あり (痕)
411	方形	92	72	45.053	44.386	66.7	411-412	2.24	なし
412	方形	80	78	45.067	44.645	44.2	412-108	3.1	なし
108	方形	82	70	45.13	44.366	76.4	108-105	1.72	なし
105	不整形	88	70	45.089	44.793	29.6	105-151	1.62	あり (痕)
切り合い	415 > 416								
出土遺物	P151・154・415・409・413・411・412・108・105								

SB10

図版番号	36	グリッド	11B	桁行 (m)	3間 (4.84m)	梁間 (m)	2 (3)間 (4.16m)	床面積	20.13m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-15-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
296	円形	76	(56)	44.607	44.214	39.3	296-295	1.76	なし
295	円形	58	50	44.634	44.202	43.2	295-280	1.76	なし
280	円形	54	50	44.626	44.219	40.7	280-275	1.76	あり (痕)
275	円形	50	(40)	44.586	44.174	41.2	275-276	1.28	なし
276	円形	60	(54)	44.624	44.418	20.6	276-318	1.62	なし
318	円形	70	58	44.596	44.38	21.6	318-428	1.28	なし
428	円形	44	(42)	44.462	44.208	25.4	428-18	1.84	なし
18	円形	60	58	44.56	44.201	35.9	18-307	1.5	なし
307	円形	50	42	44.568	44.153	41.5	307-424	1.52	なし
424	円形	48	40	44.584	44.212	37.2	424-299	2.12	なし
299	円形	44	44	44.483	44.248	23.5	299-296	2.04	なし
切り合い	296 < 297 , 276 < 267, 428 < 429, 275 < 273 < 274								
出土遺物	P275・276・316・428								

SB11

図版番号	36	グリッド	13B・C	桁行 (m)	3間 (6.4m)	梁間 (m)	1間 (4.88m)	床面積	31.23m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-24-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
371	円形	100	100	44.823	44.47	35.3	371-363	1.26	なし
363	楕円形	86	72	44.848	44.517	33.1	363-136	2.02	あり (痕)
136	楕円形	130	74	44.895	44.642	25.3	136-134	2.1	なし
134	方形	78	78	44.934	44.684	25	134-440	4.86	なし
440	円形	86	78	44.947	44.415	53.2	440-447	2.12	なし
447	方形	64	62	44.952	44.617	33.5	447-326	2.14	なし
326	円形	80	72	44.936	44.627	30.9	326-330	2.16	あり (痕)
330	円形	58	70	44.871	44.57	30.1	330-371	4.86	なし
切り合い	330 > 331, 446 > 447								
出土遺物	P371・330								

SB12

図版番号	37	グリッド	12C、13B・C	桁行 (m)	5間 (11.2m)	梁間 (m)	1間 (4.6m)	床面積	51.52m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-27-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
473	方形	104	84	44.844	44.295	54.9	473-345	3.2	あり (痕)
345	不整形	136	110	44.882	44.056	82.6	345-385	1.68	あり (痕)
385	楕円形	(120)	(76)	44.921	44.196	72.5	385-454	1.88	なし
454	方形	86	86	44.936	44.17	76.6	454-468	2	あり (痕)
468	方形	82	70	44.971	44.255	71.6	468-408	2.46	あり (痕)
408	方形	100	90	44.933	44.616	31.7	408-453	4.6	なし
453	方形	106	(78)	44.916	44.488	42.8	453-137	2.4	なし
137	円形	82	80	44.946	44.418	52.8	137-139	2.86	あり (痕)
139	楕円形	(82)	80	44.89	44.324	56.6	139-455	2.04	あり (痕)
455	楕円形	104	84	44.851	44.311	54	455-372	1.74	あり (痕)
372	方形	(92)	90	44.835	44.236	59.9	372-241	3.2	あり (痕)
241	不整形	102	82	44.775	44.298	47.7	241-473	4.6	あり (痕)
切り合い	346 < 345 > 344 , 138 > 139, 173 < 174								
出土遺物	P454・408・137・345・455・241・344								

SB13

図版番号	38	グリッド	11A・B、12A・B	桁行 (m)	4間 (7.86m)	梁間 (m)	3間 (4.86m)	床面積	38.20m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-36-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
260	円形	82	(74)	44.617	44.228	38.9	260-520	2	あり (痕)
520	方形	74	66	44.67	44.199	47.1	520-178	1.92	なし
178	円形	72	60	44.716	44.402	31.4	178-180	1.96	なし
180	円形	64	60	44.786	44.422	36.4	180-217	1.96	あり (痕)
217	円形	68	58	44.838	44.384	45.4	217-672	1.72	あり (痕)
672	円形	50	44	44.76	44.43	33	260-270	1.94	なし
270	楕円形	80	64	44.57	44.214	35.6	270-6	1.52	あり (痕)
6	円形	98	66	44.627	44.09	53.7	6-14	1.5	なし
14	円形	84	78	44.607	44.197	41	14-670	2.04	あり (痕)
670	不整形	84	78	44.687	44.262	42.5			あり (痕)
切り合い	178 > 179								
出土遺物	P270・6・14								

遺構観察表

SB14

図版番号	38	グリッド	11C、12C	桁行 (m)	3間 (4.94m)	梁間 (m)	2間 (4.46m)	床面積	22.03m ²
構造	総柱	棟方向	東西棟	方位	N-21-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
12	方形	110	(80)	44.599	44.233	36.6	12-310	1.68	あり (痕)
310	円形	64	(60)	44.616	44.185	43.1	310-227	1.6	なし
227	方形	64	64	44.681	44.147	53.4	227-181	1.64	あり (痕)
181	円形	56	(50)	44.63	44.37	26	181-207	2.26	なし
207	方形	76	50	44.68	43.898	78.2	207-283	2.22	あり (痕)
283	楕円形	100	74	44.373	44.362	1.1	283-434	1.68	あり (痕)
434	方形	54	54	44.608	44.373	23.5	434-304	1.68	なし
304	方形	46	44	44.667	44.357	31	304-404	1.64	あり (痕)
404	楕円形	76	54	44.623	44.207	41.6	404-405	1.94	あり (痕)
405	不整形	88	32	44.581	44.238	34.3	405-12	2.54	なし
286	円形	46	(40)	44.652	44.484	16.8	207-286	1.68	なし
288	楕円形	80	56	44.636	44.411	22.5	286-288	1.68	なし
							288-405	1.64	
切り合い	396<407, 310>311>312, 283>121, 286<291								
出土遺物	P12・11・434・304								

SB15

図版番号	39	グリッド	10B・C、11C	桁行 (m)	3間 (5.24m)	梁間 (m)	3間 (4.68m)	床面積	24.52m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-7-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
52	方形	88	74	44.574	44.193	38.1	52-48	1.74	なし
48	不整形	104	(42)	44.594	44.897	69.7	48-399	1.96	あり (痕)
399	楕円形	104	94	44.598	44.053	54.5	399-403	1.52	あり (痕)
403	不整形	(144)	60	44.569	44.159	41	403-400	1.52	なし
400	円形	106	96	44.579	44.161	41.8	400-65	1.66	なし
65	方形	112	(56)	44.612	44.066	54.6	65-43	1.52	なし
43	方形	132	86	44.598	44.163	43.5	43-34	1.9	なし
34	不整形	130	36	44.571	44.393	17.8	34-633	1.64	なし
633	方形	(54)	80	44.436	43.987	44.9	638-57	1.3	なし
57	楕円形	104	64	44.719	44.038	68.1	57-49	1.6	あり (痕)
49	方形	100	80	44.568	44.079	48.9	49-52	2	なし
切り合い	88>45>48, 65<58, SX3>638・633								
出土遺物	P65・43・34								

SB16

図版番号	39	グリッド	10C	桁行 (m)	2間 (3.8m)	梁間 (m)	2間 (3.36m)	床面積	12.77m ²
構造	総柱	棟方向	南北棟	方位	N-11-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
94	円形	(44)	40	44.366	44.136	23	94-85	1.82	なし
85	不整形	80	38	44.435	44.155	28	85-55	1.96	なし
55	方形	60	58	44.458	43.995	46.3	55-637	1.56	あり (痕)
637	方形	(50)	46	44.43	44.214	21.6	637-634	1.78	なし
634	楕円形	60	46	44.469	44.121	34.8	634-632	1.98	なし
632	円形	62	54	44.469	44.159	48.7	632-68	1.82	なし
68	楕円形	54	38	44.518	44.234	28.4	68-70	1.8	なし
70	円形	34	32	44.422	44.358	6.4	70-94	1.6	なし
635	方形	46	44	44.459	44.202	25.7	635-632	1.78	なし
							635-85	1.58	
							635-70	1.82	
							635-637	1.96	
切り合い	94>95、SX3>632・634・635・637								
出土遺物	P55・70								

SB17

図版番号		グリッド	4・5C	桁行 (m)		梁間 (m)			
床面積		時期		構造		棟方向	南北棟?	方位	
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
599	(楕円形)	(48)	(40)	43.481	43.295	18.6	599-527	1.58	なし
527	不整形	103	78	43.297	42.323	97.4	527-528	2.02	なし
528	(円形)	108	96	43.69	43.012	67.8			
切り合い									
出土遺物									

SB18

図版番号	40	グリッド	5・6C	桁行 (m)	2間 (3.64m)	梁間 (m)	1間 (1.6m)	床面積	5.8m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-15-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
531	円形	44	44	43.46	43.047	41.3	531-543	1.88	なし
543	楕円形	52	36	43.649	43.173	47.6	543-544	1.74	なし
544	円形	50	46	43.468	43.168	22.8	544-545	1.58	なし
545	円形	44	40	43.411	43.183	22.8	545-630	2.26	あり (根)
630	方形	74	74	43.364	43.078	28.6	630-542	1.36	なし
542	方形	54	52	43.65	43.295	35.5	542-531	1.6	あり (根)
切り合い	SX540>P630								
出土遺物	P630								

SB19

図版番号	40	グリッド	12・13BC	桁行 (m)	3間 (5.5m)	梁間 (m)	1間 (3.96m)	床面積	21.78m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-21-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
228	方形	94	62	44.821	44.325	4.96	228-342	1.7	なし
342	円形	(60)	60	44.815	44.47	34.5	342-443	2	なし
443	方形	54	50	44.849	44.566	28.3	443-48	1.8	なし
448	方形	66	60	44.845	44.552	29.3	448-140	3.96	なし
140	円形	(52)	(46)	44.931	44.657	27.4	140-323	1.5	なし
323	円形	50	42	44.869	44.434	43.5	323-366	2.46	あり (痕)
366	方形	(64)	(64)	44.852	44.577	27.5			なし
切り合い	448>449, 140>340, 366<387								
出土遺物	P288・366・443								

掘立柱建物跡 観察表 五反田遺跡 (平成16年度)

SB1

図版番号		グリッド	31B・C,32B・C	桁行 (m)	5間 (11.7m)	梁間 (m)	4+1間 (8.7m)	床面積	101.8m ²
構造	庇付側柱	棟方向	東西棟	方位	N-97-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
P 518	楕円形	145	83	49.147	48.816	33.1	518-606	4.5	あり (痕)
P 606	楕円形	92	75	49.102	48.746	35.6	606-610	2.16	
P 610	方形	80	50	49.147	49.785	36.2	610-900	2.48	
P900	円形	(70)	(60)	49.17	48.821	34.9	900-625	2.2	
P 625	楕円形	105	55	49.083	48.576	50.7	625-302	1.84	
P 302	方形	87	73	48.865	48.506	35.9	302-643	2.6	
P 643	方形	108	77	48.992	48.35	64.2	643-336	1.93	
P 336	方形	90	70	48.945	48.488	45.7	336-256	2.08	
P 256	方形	60	60	48.971	48.33	64.1	256-89	2.3	あり (痕)
P 89	方形	80	80	49.038	48.239	79.9	89-16	2.26	あり (痕)
P 16	方形	68	55	48.973	48.818	15.5	16 - 504	2.27	
P 504	方形	95	70	48.988	48.523	46.5	504 - 96	2.3	
P 96	方形	83	62	49.088	48.477	61.1	96 - 210	2.26	
P 210	方形	83	80	49.227	48.706	52.1	210 - 627	2.4	
P 627	方形	90	65	49.173	48.549	62.4	627 - 632	1.95	
P 632	方形	100	78	49.189	48.669	52	632 - 640	2.22	
P 640	方形	103	70	49.102	48.607	49.5	640 - 518	1.96	
P 127	方形	(120)	(70)	49.074	48.562	51.2	640 - 127	2.25	
P 637	方形	85	63	48.953	48.487	46.6	127 - 637	2.23	
P 634	方形	80	78	49.077	48.567	51	637 - 634	2.28	
P 572	方形	95	83	49.081	48.62	46.1	634 - 572	2.19	
							572 - 302	2.43	
切り合い	P89<P57 (SB2)								
出土遺物									

SB2

図版番号		グリッド	31B・C	桁行 (m)	5間 (9.3m)	梁間 (m)	1間 (3.9m)	床面積	36.3m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-93-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
P 667	楕円形	66	51	48.976	48.268	52.8	667-657	2.01	あり (痕)
P 657	方形	60	40	48.822	48.521	24.1	657-490	2.2	
P 490	方形	70	56	48.961	48.609	35.2	490-271	1.68	
P 271	楕円形	72	58	48.967	48.561	40.6	271-628	1.6	
P 628	方形	64	54	48.941	48.636	30.5	628-57	1.76	
P 57	方形	64	54	48.998	48.678	32	57-261	3.9	
P 261	楕円形	50	42	48.944	48.541	40.3	261-292	1.72	
P 292	方形	58	(54)	48.956	48.563	39.3	292-75	1.62	
P 75	楕円形	68	50	48.896	48.51	38.6	75-77	1.68	あり (痕)
P 77	方形	50	50	48.839	48.549	29	77-671	2.21	
P 671	楕円形	70	44	48.804	48.446				
切り合い	P57>P89 (SB1)								
出土遺物									

遺構観察表

SB3

図版番号		グリッド	31・32B	桁行 (m)	2間(4.84m)	梁間 (m)	2間 (4.5m)	床面積	21.8m ²
構造	総柱	棟方向	東西棟	方位	N-100-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
P 263	不整形	(55)	88	49.249	48.675	57.4	263-278	2.14	
P 278	楕円形	84	72	49.235	48.887	34.7	278 - 497	2.3	あり (痕)
P 497	方形	90	54	49.087	48.835	25.2	497 - 101	2.54	あり (痕)
P 101	楕円形	78	46	49.052	48.782	27	101 - 49	2.16	
P 49	方形	116	92	49.022	48.337	68.5	49 - 374	2.34	あり (痕)
P 374	方形	(48)	(44)	49.034	48.628	40.6	374 - 532	2.54	あり (痕)
P 532	楕円形	(100)	52	49.046	48.857	18.9	532 - 296	2.34	
P 296	方形	94	76	49.063	48.71	35.3	296 - 497	2.16	
							263 - 296	2.3	
							296 - 49	2.54	
切り合い									
出土遺物									

SB4

図版番号		グリッド	32・33B	桁行 (m)	3間超(5m超)	梁間 (m)	2間 (3.5m)	床面積	17.5m ²
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-97-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
P 645	方形	59	50	49.458	48.991	46.7	645 - 502	1.51	
P 502	楕円形	100	62	49.378	49.002	37.6	502 - 340	1.63	
P 340	方形	81	56	49.254	48.817	43.7	340 - 341	1.77	あり (痕)
P 341	楕円形	96	52	49.233	48.757	47.6	341 - 573	1.84	あり (痕)
P 573	方形	86	86	49.181	48.837	34.4	573 - 621	1.7	
P 621	円形	70	60	49.165	48.815	35	621 - 1010	1.55	あり (痕)
P 1010	円形	70	58	49.213	48.957	25.6	1010 - 544	1.51	
P 544	ひさご形	136	(76)	49.296	48.984	40.2			
切り合い									
出土遺物									

SB5

図版番号		グリッド	30A・B	桁行 (m)	2間超(4.2m)	梁間 (m)	1間 (2.7m)	床面積	11.3m ² 超
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-97-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
P 199	方形	66	50	48.947	48.538	40.9	199 - 524	2.78	あり (痕)
P 524	方形	130	76	48.958	48.369	58.9	524 - 380	2.06	
P 380	方形	90	70	48.941	48.45	49.1	380 - 187	2.08	あり (痕)
P 187	楕円形	98	78	48.92	48.163	75.7			
切り合い									
出土遺物									

SB6

図版番号		グリッド	30A・B	桁行 (m)	2間超(4.2m)	梁間 (m)	1間 (2.7m)	床面積	11.3m ² 超
構造	側柱	棟方向	東西棟	方位	N-97-E				
柱穴番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (cm)	柱穴間隔		柱根 (痕)
P 5	方形	112	92	48.957	48.621	33.6	5 - 202	2.7	あり (痕)
P 202	不整形	(130)	(86)	48.967	48.66	30.7	202 - 521	2.32	
P 521	方形	88	82	48.9	48.199	70.1	521 - 188	1.98	
P 188	方形	78	76	48.915	48.502	41.3			
切り合い									
出土遺物									

台の上遺跡

報告番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	色調	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
1	須臾器	杯蓋			S11	1層	13.10	3.75	-	灰	チャート・石・角	回転茶切り(石)		内面にヘラ記号 外面自然釉
2	土師器	小甕			S11	1層	-	-	7.00	-	石・角・白	口縁：ヨコナデ 外面：胴部上部カキ目 下部ヘラケズリ 内面：カキ目		
3	土師器	長甕			S11	1層	22.80	-	-	灰白	石・白・角	胴部外面上平：カキ目 下半：ヘラケズリ	内外面一部スス 外面全体に灰付着	
4	土師器	長甕			S11	1層	23.00	-	-	漆漚	石・白・角	胴部内面：カキ目		
5	土師器	甕			S11	1層	13.60	2.45	-	灰～灰白	微細灰砂	天井部：ロクロナデ		応用祝？ 天井部磨滅
6	須臾器	杯蓋	23B	13	S11	IV	13.60	2.45	-	灰白	白	口縁調整線ナデ 外面下端ヘラナデ 貼付高台ナデ 回転ヘラナデ		
7	須臾器	有台杯	25A	25	S11	IV	11.00	3.95	6.40	灰白	白	口縁調整線ナデ 外面下端ヘラナデ 貼付高台ナデ 回転ヘラナデ		
8	須臾器	有台杯	21A	17	S11	IV	11.80	3.40	8.20	灰	白	回転茶切り→周縁ロクロナデ		
9	須臾器	有台杯	21A	17	S11	IV	11.50	3.45	6.80	灰	白	回転茶切り		
10	土師器	有台杯	23A	21	S11	IV	13.00	4.05	8.40	灰白	白・石	回転ヘラナデ		底部外面にヘラ記号× 外面胴部自然釉
11	須臾器	有台杯	26B	2	S11	IV	11.40	7.50	6.80	灰白	石・角・白	回転ヘラナデ		
12	須臾器	有台杯	25A	25	S11	IV	15.20	6.10	9.60	灰白・暗灰	石・角・白	高台周縁ロクロナデ		
13	土師器	罎	21A	21	S11	IV	-	-	-	にぶい漆漚	石・石・雲・角	脚部貼付		
14	須臾器	無台杯	22B22A	924	S11	IV/IV	-	-	7.80	にぶい漆漚	石・白・角	底部 回転ヘラナデ		
15	須臾器	甕	27B	18	S11	IV	24.00	-	-	灰白・灰	白	口縁：ヨコナデ 内外面：タタキ		内外面 自然釉
16	白磁X1類？	罎	20B	1	S11	IV	17.00	-	-	灰白(断面 灰白)	白	内外面に施釉 玉縁状口縁		
17	青磁 龍泉窯系IV類	杯	20A 20B	22 1	S11	IV	16.80	-	-	灰オリーブ(断面または素地、以下断面とする。灰白) 灰白(断面 灰白)				内外面共に長さ3～5mmの表裂
18	白磁V類		21A	21	S11	IV	(13.20)	-	-	灰濁(断面 灰白)				内外面共に長さ3～5mmの表裂
19	白磁VI類？		23B		S11	IV	(11.00)	-	-	灰白(断面 灰白)				内外面共に長さ3～5mmの表裂
20	白磁V類？	皿	20B	8	S11	IV	(9.00)	-	5.20	外：灰濁 内：黒濁	白・石	内外面施釉(底部外面・体部下半部外面を除く) 底外：ロクロナデ		
21	京都系土師	皿	25A	25	S11	IV	(9.00)	-	-	外：灰濁 内：灰白	白・石	外面：器面調整粗く凹凸する。 キ目内：同心円タタキ(片面閉塞) ロクロナデ	内外面灰付着	
22	須臾器	罎	19A19B2 0A20B	255・9・ 20216・7	SX1	IV	9.50	21.90	-	外：灰濁 内：灰白	白			

喙ノ上遺跡

報告番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	色調	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
1	須臾器	杯蓋			S11		(10.00)	(4.25)	-	灰白→にぶい漆漚	白・石	天井部周縁：ロクロナデ(左?)		内外面自然釉
2	須臾器	杯蓋			S11	1層	12.90	3.80	-	にぶい漆漚～灰白	石・白	回転ヘラナデ(左)		
3	土師器	杯			S11		(12.30)	(3.40)	(7.10)	灰白・漆漚	白・角四石・石・長	口縁：ヨコナデ		
4	土師器	杯			S11		(14.00)	-	-	外：灰白 内：黒	白・石・長	口縁：ヨコナデ→ヘラミガキ 胴部：ヘラミガキ		
5	土師器	杯			S11		(14.00)	-	-	外：にぶい漆漚 内：灰白	石	口縁：ヨコナデ 内面：ヘラミガキ 胴部外面：ナデ?		
6	内黒土師器	杯			S11		(16.00)	-	-	にぶい漆漚	石・角四石	内外面ミガキ		
7	土師器	鉢			S11		(19.00)	-	-	にぶい漆漚	石・角	口縁：ヨコナデ 胴部外面：ハケ後ミガキ 内面：ミガキ	内外面に一部スス	
8	土師器	鉢			S11		15.20	8.75	(6.6)	にぶい漆漚	白・石・長・角	口縁：ヨコナデ 外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ		カマド
9	土師器	鉢	4B	18	S11	IV 1層	17.8～ (18.5)	8.73	8.80	にぶい漆漚	石・長・雲	口縁部：線ナデ 外面：斜めハケ 内面：ヨコハケ		
10	土師器	鉢			S11		(17.80)	-	-	にぶい漆漚	石・長・角	胴部内面：ヘラミガキ		
11	土製品	紡錘車			S11		(厚さ) 5.20	2.70	-	にぶい漆漚	全面ミガキ			重さ60g
12	土師器	杯			S11		8.20	3.50	5.40	漆漚	石・角	口縁線ナデ 胴部外面：ヘラナデ 底面：ヘラナデ		カマド
13	土師器	甕			S11		14.00	-	-	外：漆漚 内：褐灰	石・角	口縁：ヨコナデ 胴部外面：タテハケ 内面：ナメハケ→ヨコナデ		
14	土師器	甕			S11		(15.00)	-	-	外：浅灰濁 内：にぶい漆漚	白・長石	口縁：ヨコナデ		内外面磨滅

遺物観察表

報告番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	色調	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
15	土師器	甕		S11			(13.60)	-	-	外：にぶい、橙 内：にぶい、黄橙	長石・石英・チャート	口縁：ヨコナデ 胴部外面：タテハケ 胴部内面：ナナメハケ		
16	土師器	甕		S11			(15.00)	-	-	外：にぶい、橙 内：灰褐	長石・チャート	口縁：ヨコナデ 外面：タテハケ		
17	土師器	甕	4B	22			(15.20)	-	-	外：にぶい、橙 内：灰褐	白・石	口縁：ヨコナデ		
18	土師器	甕		S11			(17.80)	-	-	浅黄橙	石・角	口縁：ヨコナデ	内面一部スス	カマド
19	土師器	甕		S11			16.80	-	-	浅黄橙	角・石・白	口縁：ヨコナデ		
20	土師器	甕		S11			18.00	-	-	にぶい、褐	白・石・角	口縁：ヨコナデ 外面：胴部タテハケ		内外面磨減著しい。
21	土師器	甕	4B	22		1層	(18.00)	-	-	にぶい、橙	白・石・角	口縁：ヨコナデ		
22	土師器	甕		S11			(18.00)	-	-	にぶい、橙～灰褐	石・角	胴部外面：タテハケ 胴部内面：ヨコハケ		内外面磨耗
23	土師器	甕		S11			15.80	-	-	橙～灰褐	白・長・角	口縁：ヨコナデ 外面：胴部タテハケ 内面：ヨコハケ		
24	土師器	甕		S11			15.80	-	-	にぶい、橙	石・長・角・白	口縁：ヨコナデ 外面：ハケナデ/タテハケ? 内面：ヨコハケ		
25	土師器	甕		S11			(16～17くらい)	-	-	外：にぶい、赤褐 内：にぶい、橙	白・石・角	口縁：ヨコナデ 外面：胴部タテハケ 内面：ヨコハケ	外面一部スス	
26	土師器	甕		S11			(21.00)	-	-	灰白	石・角	口縁：ヨコナデ 胴部外面：タテハケ 内面：ハラナデ?		
27	土師器	甕	4B	21			(18.60)	-	-	外：にぶい、黄橙、黒 内：黒	長・角・石	口縁：ヨコナデ 胴部外面：タテハケ 内面：ヨコハケ		
28	土師器	鉢		S11			(19.80)	-	-	外：にぶい、橙 内：黒	石・角	口縁：ヨコナデ		
29	土師器	鉢		S11			(19.80)	-	-	にぶい、橙	石	口縁：ヨコナデ		
30	土師器	甕		S11			(21.80)	-	-	灰白	角	口縁：ヨコナデ 胴部外面：タテハケ 胴部内面：ヨコハケ		
31	土師器	甕	4B 4B 4B	22 16 17		IV	(16.8)	27.45	7.80	にぶい、橙	石・角・白・雲	口縁：ヨコナデ 外面：ハラナデ 内面：ヨコハケ		
32	土師器	甕? 甕?	4B	16		1層 IV	12.80	15.45	9.60	灰白	石・長・角・白	口縁部：横ナデ 胴部外面：ハケ(粗い) ハラミガキ、底面：ハラナデ 口縁内面：ハラミガキ		
33	土師器	甕	4B	21		IV	18.00	27.20	7.80	にぶい、黄橙	石・白・角	口縁：ヨコナデ 外面：タテハケ下(下端) ハラナデ(ケズリ?) 内面：ヨコハケ 底面：ナデ 底部トーナツ状	カマド	
34	土師器	甕		S11			192～196	-	-	浅黄橙	白・長・角・石	口縁：ヨコナデ 外面：タテハケ 内面：ヨコハケ		カマド
35	土師器	甕		S11			16.60	28.25	7.95	浅橙	白・長・角	口縁：ヨコナデ 外面：胴部ハラナデ 内面：ヨコハケ		カマド
36	土師器	甕		S11			17～18	26.35	7.60	橙	白・石・角	口縁部：ヨコナデ 底面：ハラナデ 胴部外面：タテハケ 胴部内面：ヨコハケ		カマド
37	土師器	甕	4B 4C	21 2		1層	18.8～20	-	-	灰	石・長・白・角	口縁：ヨコナデ 外面：胴部タテハケ 底部ハラケズリ 内面：ヨコハケ	外面一部スス	
38	土師器	甕(下半)		S11			-	-	8.00	内外橙色	白・チャ・石	外面：タテハケ、ハラケズリ 内面：ヨコハケ		
39	土師器	甕か(下半)		S11			-	-	6.40	橙	白	胴部外面：ハラナデ後粗いミガキ 下部：ハラケズリ 底部：ハラケズリ		内外面磨減著しい
40	土師器	甕	4B	16		IV	-	-	8.80	灰	長・石・角・白	内外面：ハラナデ 外面：タテハケ(丘外面も) 内面：ちせん状にハケ 底面はナデ		
41	土師器	甕		S11			-	-	7.10	灰	白・石・長・角	胴部外面：タテハケ 内面：ハケ(ちせん状) 底部外面周縁：ハラケズリ	外面スス	
42	土師器	甕		S11			-	-	(7.70)	灰白	白・石・角	胴部外面：タテハケ 胴部内面：ハケ(ちせん状) 底部外面：ナデ 底部内面：ナデ		
43	土師器	甕?		P144 S11		1層	-	-	4.60	灰白	角・白・長	外面下部ハラケズリ 底部ハラケズリ 内面：ハラミガキ		
44	土師器	甕か(下半)	4B	16		IV 排土	-	-	8.60	灰白・暗オリーブ灰	石・白・チャ	胴部外面：ハラナデ後粗いハラミガキ 胴部内面：ナデ	底部外面に木炭痕	
45	土師器	甕		S11			-	-	6.60	灰白・暗オリーブ灰	石・チャ	外面：胴部ハラケ後(粗い) ハラミガキ		
46	土師器	甕か		S11		1層	-	-	-	灰黄褐・橙	長・白・石・角・チャ	外面：タテハケ		
47	土師器	甕		S11			20～23	25.80	12.00	灰黄褐	石・雲・白	外側：ハラナデ 胴部ハラナデ下(下) ハラナデ後ミガキ 下(下) ハラケズリ 口縁部：ヨコナデ 胴部内面：タテハケ 胴部内面：ハラケズリ 胴内面：ヨコハケハラミガキ 胴下(下) ハラケズリ		把手部を欠損
48	土師器	甕		S11			16.7～17.2	17.10	9.10	漆橙・黒褐	白・石・角	口縁：ヨコナデ 胴部外面：タテハケ		把手1コ
49	土師器	甕	4B	21		IV (S11?)	-	-	-	にぶい、橙	長・角・チャ			把手

報告番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	色調	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
90	土師器	無台碗 4B	12	12.80	IV	5.30	浅黄褐色	角・石・白	回転糸切り(右)					
91	土師器	無台碗 4B	4	12.80	IV	3.50	浅黄褐色	石・白・チャ・角						
92	土師器	無台碗 4B	3	13.20	IV	3.65	褐色	石・白・長・角・チャ	回転糸切り				内面に磨痕	
93	土師器	無台碗 4B	12	13.60	IV	3.30	にぶい褐色	石・白・角	回転糸切り(右)					
94	土師器	無台碗 4B	3	13.20	IV	3.95	灰白～にぶい褐色	石・長・チャ・角	回転糸切り(右)					
95	土師器	無台碗 5A	25	13.20	排土	3.40	褐色	石・白・チャ・角	回転糸切り(右)			外面一部ス		
96	土師器	甕 5B	23	(13.00)	IV	-	にぶい褐色	石・チャ	口縁：ヨコナデ 胴部外面上半：タテハケ 胴部外面下半：ヘラケズリ 胴部内面下半：ヘラケズリ					
97	土師器	甕 4B	22	(23.80)	IV	-	淡赤褐色	石・長・白	口縁：横ナデ 胴部外面上半：ハケ目					
98	土師器	甕 4B	12	(21.00)	IV	-	外：にぶい褐色 内：にぶい褐色	石・白	口縁：ヨコナデ			外面一部ス		
99	土師器	甕 5B	3	-	IV	-	灰白	白・石・角						
100	土師器	甕 5B	1	-	-	-	外面：灰白	長石・石英・角	内面：ミガキ丁寧に磨かれた光沢					把手
101	土師器	甕？ 5A	21	(23.80)	-	-	にぶい褐色	石・長	口縁：横ナデ 胴部上半：ヘラミガキ 内面：(木口)ナデ					
102	珠洲焼	磨り鉢		-	I・II	-	灰白	白色粒子・石	口縁：横ナデ 口縁部反り 顔目1単位口糸					
103	弥生土器	小松式 甕		-	I・II	-	赤	白・石・チャ・角	内外ハケ調整 口縁部部にハケ工具圧痕(キザミ)有り。口縁ヨコナデ					
104	弥生土器	箱清水 式鉢	8A	-	-	4.40	にぶい褐色	白・石・チャ・角	内外面赤彩、ヘラミガキ				上部欠損	
105	石製品	砥石		(長さ) 5.50 (幅) 4.10 (高さ) 2.50			にぶい褐色	凝灰岩						

五反田遺跡 (平成15年調査)

報告番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
1	土師器	大型甕			SI417		(19.80)	34	6.3	石・長・チャ	胴部外面：タテハケ 胴部外面上半：タテ方向ハケ 胴部外面下半：ヘラケズリ 胴部内面：ヨコハケ→ナデ 底部にもハケ	内外摩滅著しい。	
2	土師器	大型甕			SI417		-	-	8.2	石・チャ・角・長		外面一部スス	
3	土師器	甕			SI417 P567	2層 1層	29.4	20.8	11.3	チャ・白・石	口縁：轆子デ 胴部外面：タテハケ 胴部内面：ハケ→ヘラミガキ 胴部外面：オナメハケ→ヘラミガキ 胴部内面：ヨコハケ→轆子デ	253・254と接合	
4	土師器	高杯			SI417	-	-	-	12.2	石・長・チャ			
5	土師器	甕			SI417		17~19	14.55	9.2	白・長	口縁：轆子デ 外面底面：ヘラナデ 胴部外面：タテハケ 胴部内面：ヨコハケ 胴部内面：ヨコ方向ハケ	摩滅著しい。把手の形不明 内面上部 器面剥離 把手片側のみ	
6	土師器	大型甕			SI539	1層	16~17	-	-	石・長・角・チャ	口縁外面：ヨコナデ 胴部外面：タテハケ 口縁内面：ヨコナデ	外面一部スス	
7	土師器	甕			SI539	2層	(14.30)	-	-	石・長・角・チャ			
8	土師器	皿			SX3	3層	13.3	-	-	角・石・白・チャ		内外器面荒れ	
9	土師器	皿			SX3	1層	12.9	2.72	5	白・角・白		内外器面荒れ著しい	
10	土師器	無台碗			SX3	2層	12.8	3.8	4.8	角・白・長	回転糸切り (右) ロクロナデ		
11	土師器	無台碗			SX3	1層	12.5	3.55	5	チャ・長・角・白		内外器面荒れ	
12	土師器	無台碗			SX3	1層	130~12.8	3.75	5.5	チャ・長・角・白	ロクロナデ	内外器面荒れ	
13	土師器	無台碗			SX3	1層	12.8	3.85	4.3	角・白・長・石・チャ	内面：ヘラミガキ	内外器面荒れ	
14	土師器	無台碗			SX3	1層	11.8	4.2	5	角・石	回転糸切り (右)	内外器面荒れ	
15	土師器	無台碗			SX3	2層	(290)132 底 駒下駄跡	(4.20)	(5.10)	白・長・角・チャ		内外器面荒れ著しい	
16	土師器	無台碗			SX3	2層	12.8	3.75	5.1	白・石・長・角・チャ		内外器面荒れ	
17	(内面) 黒色土器	無台碗			SX3	2層	12.8	3.45	5	角・石・白		内面一部スス	
18	土師器	無台碗			SX3	2層	13.4	-	-	角・石・白・チャ		内外器面荒れ	
19	土師器	無台碗			SX3.No.50	2層	13.9	3.7	5	長・角・チャ		内外器面荒れ	
20	土師器	無台碗			SX3	2層	(12.80)	-	-	白・石		内外器面荒れ	
21	土師器	無台碗			SX3	2層	12.8	-	-	白・石・角		内外器面荒れ	
22	土師器	無台碗			SX3	2層	(15.80)	(4.2)?	(6.80)	角・石・角	ロクロナデ		
23	(内面) 黒色土器	無台碗			SX3	3層	16.8	-	-	長・角・白	内面：ヘラミガキ		
24	土師器	無台碗			SX3	2層	15.4	4.7	5.6	角・チャ・石	回転糸切り (右)	内外器面荒れ	
25	土師器	無台碗			SX3	2層	15.2	-	-	角・石・白		内外器面荒れ	
26	土師器	無台碗			SX3	2層	15.3	4.85	5.25	白・長・角・石	回転糸切り (右)	内外器面荒れ	
27	土師器	無台碗			SX3.No.12	2層	(16.40)	5.2	5.2	白・チャ・角・石	回転糸切り (右)	内外器面荒れ	
28	(内面) 黒色土器	無台碗			SX3	2層	15.8	5.7	5.4	長・角	回転糸切り 内面：ヘラミガキ	内外器面荒れ	
29	土師器	無台碗			SX3	2層	(15.80)	(5.25)	(4.80)	石・角・白	回転糸切り	底部外面に黒斑	
30	(内面) 黒色土器	無台碗			SX3.No.61	1層	15.8	-	-	白・石・角	内面：ヘラミガキ	内外器面荒れ	
31	土師器	小型甕			SX3	2層	12.2	-	-	角・白・石・チャ		内外器面荒れ	
32	土師器	小型甕			SX3.No.2	2層	(12.20)	-	-	チャ・石・白・角	ロクロナデ	内外器面剥離	
33	土師器	小型甕			SX3	3	12.8	-	-	角・白・チャ・石	口縁：轆子デ	内外器面	
34	土師器	甕			SX3	3層	(19.60)	-	-	回転チャート・石・角	外面：平行タタキ 下半：ヘラケズリ	粘土層が接合部で残存	
35	土師器	甕			SX3	3層	(26.80)	-	-	角・石・チャ・白		外面一部スス	
36	土師器	銅			SX3			-	-	石・角・チャ・白		外面スス	
37	須臾器	凸唇付甕			SX3			-	-	白			
38	須臾器	長頸甕	9C	5	SX3	III 1層地	-	-	-	白・石	胴部外面下半：ロクロナデ 外面：格子タタキ (擬格子?) 内面：平行タタキ	自然釉、251と接合	
39	須臾器	甕			SX3	2	-	-	-	白色粘土			
40	須臾器	甕			SX3	1	-	-	-	白色粘土・チャー ト	外面：格子タタキ 内面：同心円タタキ	内面に一部残付着	
41	須臾器	甕			SX3	1層-2層	-	-	-	白色粘土	外：格子タタキ 内：平行タタキ		393と同一の可能性高い。

五反田遺跡（平成15年調査）

報告 番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
42	須臾器	甕			SX3	1層	-	-	-	白色粒子	外：平片タタキ		
43	灰釉陶器	甕			SX3	3			8.6	粗	内外面施釉 内面立ち上がりに乗ね焼き痕 高台部付きに少しの軸着		
44	灰釉陶器	皿			SX3	3層	14.8	3	7.2	粗、径7mmの白色粒子が器面に露出	内外面ロコナデ ヘラ切り 軸ツケガケ 底部へ脚部下半施釉 内面へラ切り (左) → 底部外面ロコナデ		底外面に墨書「内」あり。
45	須臾器	甕			SX3	2層	28.1	-	-	白	脚部外面：格子目タタキ (内面ロコナデ)		
46	白磁		11B	12	SX3	2層 II	15.5 (5.50)		6.4	精緻、乳白色	内外面施釉 胎の目高台 (IA) 帯付きは軸を置き取る際に付いたヘラ状工具による削り痕が明瞭。凹点をそのまま残してある。		内底部に黒痕5×6cm 内面体下側に粉痕
47	土師器	無台碗			SX16		12.6	3.65	5.4	白・長・角・海	回転系切り (右)		
48	土師器	無台碗			SX16		12.4	3.32	5.1	白・長・角・海	回転系切り		
49	土師器	無台碗			SX16		13.6	3.4	5.5	白・石・海・角	回転系切り		
50	土師器	無台碗			SX16		12.8	3.25	5.1	海・白・長・石・角	回転系切り		内外器面荒れ
51	土師器	無台碗			SX16		13	3.1	5.9	石・角・海・白	ロコナデ 回転系切り 痕2つ (右)		
52	土師器	無台碗			SX16		13.6	3.32	5.2	白・海・石・角	回転系切り (左)		
53	土師器	無台碗			SX16		12.7	3.14	4.8	白・石・海・角	回転系切り (右)		内外器面荒れ
54	土師器	無台碗			SX16		13.75	3.1	5.4	白・角・石・海	ロコナデ		内外器面荒れ
55	土師器	無台碗			SX16		14	3.1	5	白・石・角・チャ	ロコナデ 回転系切り		
56	土師器	無台碗			SX16	4層下	12.7	2.93	5.5	白・石・海・角	回転系切り		内外器面荒れ
57	土師器	無台碗			SX16		13.1	3.2	5.2	白・長・角・海	回転系切り		
58	土師器	無台碗			SX16		13.2	3.05	5.1	白・石・角・海	回転系切り (右)		内外一部に黒痕
59	土師器	無台碗			SX16		12.7	3.5	5	白・海・長・角	回転系切り (右)		内面器面荒れ
60	土師器	無台碗			SX16		(13.14)	3.6	5.5	白・石・長・角・海	回転系切り (右)		内外部分的に器面荒れ
61	土師器	無台碗			SX16		12.8	3.8	5.2	白・角・石・海	回転系切り		
62	土師器	無台碗			SX16		12.8	3.5	5.6	白・長	回転系切り		
63	土師器	無台碗			SX16		13.4	3.5	5	白・石・海・角	回転系切り (右)		
64	土師器	無台碗			SX16		13.4	3.4	5	白・石・海・角	回転系切り (右)		
65	土師器	無台碗			SX16		13	3.8	5.4	白・石・長・チャ・海	回転系切り (右)		
66	土師器	無台碗			SX16		13.6	3.5	5.3	白・石・長・角・海	回転系切り		器面剥離・荒れ著しい
67	土師器	無台碗			SX16		13.14	3.65	5.2	白・海・石・角	ロコナデ 回転系切り (右)		内面特に器面荒れ
68	土師器	無台碗			SX16		13.5	3.4	5.35	白・石・長・角	回転系切り (右)		
69	土師器	無台碗			SX16		13.6	3.7	5.2	白・石・角・海	回転系切り (右)		内面器面荒れ
70	土師器	無台碗			SX16		14.8	-	-	濃紺・石・角・チャ	ロコナデ		内外器面荒れ
71	須臾器	杯蓋			SX526		13	3	-	白色粒子	天井部中央：ロコナデ 天井部周縁：ヘラケズリ		胎土②群 胎土③群
72	須臾器	無台碗			SX526	3層 2層	12	2.95	8.2	白	外面底部：回転ヘラ切り後ヘラナデ		
73	土師器	無台碗			SX526		12.8	3.8	6.4	白・石・チャ・角	回転系切り		
74	須臾器	無台杯			SX526		10.8	3.95	6.8	白・長	底部外面：ヘラケズリ		
75	土師器	小型甕			SX526		10.8	8.9	6.2	石・長・白・角	ロコナデ 回転系切り (右)		内面全面に煤 外面一部スス
76	土師器	小型甕			SX526	2層	11.8	-	-	白・石	ロコナデ		内外面保付着
77	土師器	小型甕			SX526		11	-	-	白・石・チャ・角	ロコナデ		内面に保付着
78	土師器	小型甕			SX526		9.8	-	-	石・角	ロコナデ		内外に保付着
79	土師器	小型甕			SX526	1層	10	-	-	白・角閃石、微	口縁：微ナデ ロコナデか		内外器面荒れ
80	須臾器	瓶			SX526	2層	19.8	-	-	白			
81	土師器	大形甕			SX541	2層	(25.60)	-	-	石・角・チャ	脚部上：ロコナデ 脚部下：ヘラケズリ		
82	土師器	有台碗			SX21		11.8	4.8	5.6	飽和・赤ト・球角	底部系切り？ナデ		黒痕
83	須臾器	無台杯	3B		SX600	III	11.7	3.6	8.7	白	回転ヘラ切り (右)		
84	須臾器	有台杯	3B		SX600	III	15.9	3.8	11.3	白	回転ヘラ切り (右)		胎土②群？
85	土師器	甕	3B	4・9	SX600	III	(12.80)	-	-	白・石・海・角	口縁：ヨコナデ		把手剥落
86	土師器	甕	3B	7・8	SX600	III	(15.00)	-	-	石・長・角	口縁：微ナデ 脚部外面：タテハケ 脚部内面：ヨコハケ		

五反田遺跡（平成15年調査）

報告番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
87	須臾器	小径壺	3B 3A	3・8	SX600	II	(6.80)	(5.50)	(3.80)	白	胴部外面下半：ハラケズリ ロクロナデ		
88	土師器	鉢	3B 3D	2	SX600	III	17.8	-	-	白・石・角・海	胴部外面：タテハケ・下半ハラケズリ 内面：ヨコハケ		
89	土師器	甕	3B	3・8	SX600	III	(16.00)	-	-	白・赤・長・角・海	口縁：ヨコナデ 胴部外面：タテハケ 内面：ヨコハケ		
90	土師器	甕	3B	2	SX600	III	(18.80)	-	-	石・長・角	口縁：ヨコナデ 胴部外面：タテハケ 胴部内面：ヨコハケ		
91	土師器	甕	3B	3・8	SX600	III	(19.00)	-	-	白・石・角	口縁：ヨコナデ 胴部外面：タテハケ 胴部内面：ヨコハケ	外面炭化物付着	
92	須臾器	杯蓋			P61 (SB4)		(12.80)	-	-	白・長	天井部：回転ハラ切り→ナデ		
93	須臾器	杯蓋			P61 (SB4)		(14.80)	-	-	白	天井部：ロクロナデ (左)		
94	須臾器	杯蓋			P56	I	12.8	-	-	白色粒子	天井部：ロクロナデ		
95	須臾器	杯蓋			P61 (SB4)	I層	-	-	-	(12.8) 白	天井部：ロクロナデ (右)		天井部内面：ハラ記号
96	須臾器	杯蓋			P61 (SB4)		-	-	-	(12.8) 白			酸化炭焼成
97	須臾器	有台杯			P61 (SB4)		12	3.92	7.00(割合 内面で計測)	白	内外ロクロナデ		
98	須臾器	有台杯			P89 (SB4)	I層	-	-	(8.60)	石・白	底部：回転ハラ切り→ナデ 内外ロクロナデ		
99	須臾器	無台杯			P47 (SB4)	2層	11.8	3.4	7.8	白	回転ハラ切り→ナデ	火だすき	胎土②群
100	須臾器	無台杯			P61 (SB4)		(12.00)	-	-	白・石	内外ロクロナデ		
101	須臾器	無台杯			P61 (SB4)		13	3.9	8.2	白	底部外面：ロクロナデ 内外ロクロナデ		
102	須臾器	凹面甕	8B 8B 9B 9B 9C 9C 10A 10A 10B	17 15 3 22 9 3 25 2		II III II II II III? III III III上	14.2	6.25	19.00?	白	底部外面：ロクロナデ	内面に漆が多量に付着。文字は見えない。	胎土②群
103	(内面) 黒色土器	無台杯	11B	11 13	P32 (SB4)		-	-	5.5	白・石・海	底部外面：ロクロナデ		
104	須臾器	杯蓋			P328 (SB8)		12.8	-	-	白色粒子	天井部：ロクロナデ		内面に黒書
105	須臾器	杯蓋			P183 (SB8)		12.8	-	-	白	内外ロクロナデ		胎土②群
106	須臾器	杯蓋			P231 (SB8)		15.4	-	-	白・石	内外ロクロナデ		
107	土師器	甕			P131 (SB8)		-	-	-	白・石・長・角	口縁：ヨコナデ 胴部外面：タテハケ 胴部内面：ナメハケ		
108	須臾器	有台杯			P131 (SB8)		-	-	7.6	白・石	底部回転ハラ切り→ナデ		
109	須臾器	有台杯			P378 (SB8)		-	-	9.8	白色粒子・石英	内外ロクロナデ 底部ハラ切り→ナデ		底部内面ハラ記号「×」
110	須臾器	無台杯			P262 (SB8)		16.8	-	-	白	内外ロクロナデ		
111	須臾器	無台杯			P457 (SB8)	I層	(12.00)	(3.40)	(7.0?)	白・長	回転糸切り (右)		
112	須臾器	無台杯			P183 (SB8)		11.8	-	-	白	回転ハラ切り		
113	須臾器	無台杯	13B	25	P457 (SB8)	I層	12.4	3.85	8	白・海	回転ハラ切り		
114	須臾器	無台杯			P154 (SB9)	I層	11.8	3.77	6.6	長・角・白	内外ロクロナデ 底部ハラ切り?		
115	須臾器	無台杯			P105	I層	-	-	(7.00)	白・石	(内面底部：平滑) 回転糸切り (右)		
116	須臾器	無台杯			P411 (SB9)	2層	(13.17)	4	8	白・角	回転ハラ切り		
117	須臾器	杯蓋			P154 (SB9)		18.2	-	-	白			
118	土師器	甕			P105 (SB9)		(22.00)	-	-	石・角・チャ	口縁：ヨコナデ 胴部：タテ・ヨコハケ		
119	須臾器	杯蓋			P12 (SB14)		12.6	3	-	白色粒子	天井部：糸切り→ロクロナデ		器面荒れ
120	須臾器	杯蓋			P12 (SB14)		13	-	-	白色粒子	回転ハラ切り後ナデ 内面：ハケ→ナデ		
121	須臾器	鉢	13C	13	P345 (SB12)	I層	-	-	12	白色粒子・チャート・珪石		自然釉	
122	須臾器	杯蓋			P386	I層	12.2	-	-	白			
123	須臾器	杯蓋			P1	I層	-	-	-	白色粒子・チャート・石	内面：回転ロクロナデ (時計回り) 天井部：ロクロナデ		
124	須臾器	杯蓋			P104	2層	12.1	2.6	-	白・石	天井部：回転ハラ切り→ナデ		
125	須臾器	杯蓋			P402		-	-	(13.8) 白・石	回転ハラ切り			
126	須臾器	杯蓋			P402		(13.80)	-	-	白	回転ハラ切り		
127	須臾器	杯蓋			P344	I層	-	-	-	白	天井部：ロクロナデ (右)		
128	須臾器	有台杯			P344	I層	12.6	4.3	7.2	白	天井部：ロクロナデ (右)		

五反田遺跡 (平成15年調査)

報告 番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
129	須臾器	有台杯			P344		12	3.8	7.2	白・石	静止糸切り？	胎土②群	
130	土師器	無台杯	14B	11	P104	1層	12.1	4	8.4	白・石・角	回転ヘラ切り	内外面に欠たすき	
131	須臾器	無台杯			P573	1層	13.6	3.3	9.8	白・長	回転ヘラ切り→ナデ		
132	須臾器	無台杯			SK506	2層	(12.80)	-	-	白	回転ヘラ切り	内面に一部煤付着	
133	土師器	杯			P394		-	-	8.6	石・長・角・チキ	外面：ヘラミガキ		
134	土師器	高杯			P564	1層	(6.80)	-	9.6	白・石・長・チキ・角	外面下半：ヘラケズリ		
135	須臾器	瓶			P175	？	-	-	-	白・石	外面下半：ヘラケズリ		外面 自然釉
136	須臾器	瓶	10C	20	P585	III	-	-	-	白・黒	外面カキ目&タタキ・自然釉		胎土③群
137	須臾器	楕瓶	7C 6C	12 15	P174		(24.00)	-	-	白・長	口縁：ヨココ方向ハケ 胴：タテ方向ハケ	外面に煤付着	
138	土師器	甕			P174		19.6	-	-	石・長・角			内外器面荒れ
139	土師器	甕			P373	1層	(19.80)	-	-	白	内外口縁：横ナデ 内面頭部：ナメ方向ハケ 胴部：タテ方向ハケ		口縁内面・頸部外面 自然釉
140	須臾器	甕			P210		19	-	-	白・石・長・角	天井部：回転ヘラ切り		器面荒れ
141	土師器	杯蓋	12C	12		II	16	2.2	-	白	天井部内面：ロクロケズリ		胎土②群？
142	須臾器	杯蓋	6A	21		III	15.6	2.7	-	白・海	天井部内面：ロクロケズリ→東方向のナデ		
143	須臾器	杯蓋	6C 6C 7B 7B	4 15 9 11		III III III III	14.3	1.95	-	白	回転ヘラ切り後ナデ		外面 自然釉
144	須臾器	杯蓋	9B 9B 9A 8A・9A・ 10A・11A	8 18 24		II II III	14.67	2	-	白	天井部外面：ロクロケズリ 天井部内面：ロクロケズリ		焼き歪み、天井部に杯の高台が融着 外面自然釉
145	須臾器	杯蓋	11C	20		III	17.00?	3.75	-	白	天井部：ロクロケズリ (左)		内面ドーナツ状に自然釉
146	須臾器	杯蓋	10C 10C 10B 11C 11C	4 6 2 10 17		II II II 皿下 II	14.9	3.1	-	白	天井部内面：ロクロケズリ		
147	須臾器	杯蓋	8A 7B	23 8		皿上 II	14.9	3.1	-	白	天井部：ロクロケズリ (右)		外面ほぼ全面に自然釉
148	須臾器	杯蓋	14C	1		III	15	4	-	白	天井部：ロクロケズリ		胎土②群
149	須臾器	杯蓋	13B	24・25		III	13.6	4	-	白	天井部：ロクロケズリ		墨書「康公」 内面全面自然釉
150	須臾器	杯蓋	10A 9B 10A	22 9 21		III 皿上 III	13.6	3.1	-	白	天井部内面：ロクロケズリ 外面：ナデ		胎土②群
151	須臾器	杯蓋	8B 5A・6A・7A	9		III	13.4	3.25	-	白	天井部：ロクロケズリ (左)		天井部に墨書あり
152	須臾器	杯蓋	11C	19		II	13	2.72	-	白	天井部：ヘラ切り→横ナデ		
153	須臾器	杯蓋	9B 9B 9B 9A 10A	5 8 18 25 21		III II II III 皿上	12.6	2.6	-	白	天井部：ナデ		内面にヘラ記号 ツマミ菱形
154	須臾器	杯蓋	7C	14		III	13	2.6	-	白・石	天井部：ロクロケズリ		胎土②群
155	須臾器	杯蓋	11C	3		皿下	12.1	2.75	-	白	天井部：ロクロケズリ (右)		器部打ち欠き？
156	須臾器	杯蓋	10A	25		II	12.2	3.85	-	白	天井部：ロクロケズリ (右)		
157	須臾器	杯蓋	11C	8		皿下	(11.6)	2.3	-	白・石	天井部：ロクロケズリ (右)		
158	須臾器	杯蓋	9A 9B	21 3		II II	9.4	2.62	-	白	天井部内面：ロクロケズリ→ナデ		外面全面 自然釉
159	須臾器	杯蓋	10B	2		皿上	9.9	-	-	白	ロクロケズリ		
160	須臾器	杯蓋	11C 11C 11C 11B	6 3 8 22		II 皿上下 皿下 III	13.1	2.7	-	白	天井部：ロクロケズリ 内面：ナデ (5せん状に)		胎土③群

五反田遺跡（平成15年調査）

報告 番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
163	須臾器	蓋	13C	4		Ⅲ上	-	-	7	白	天井部：回転ヘラ切り→ロクロケズリ（右） 天井部内面中央：ロクロナデ		胎土③群
164	須臾器	杯蓋	8C	14		Ⅳ	(13.00)	-	-	白色粒子	沈線1条		外面自然釉厚い。
165	須臾器	杯蓋	11C 14C	13 20		Ⅱ Ⅱ	-	-	-	白色粒子	天井部沈線1条		
166	須臾器	有台杯	11B	11		Ⅲ下	15.6	4.3	9.3	白	回転ヘラ切り		
167	須臾器	有台杯	7C	1-6, 1-2, 17		Ⅲ	13.8	3.8	9	白	回転ヘラ切り		底→胴部外面一部自然釉
168	須臾器	有台杯	7B 7A 5B	7 24 21		Ⅲ Ⅱ	14	3.9	8.6	白・長	回転ヘラ切り（右）		見込 ヘラ記号「+」？
169	須臾器	有台杯	7B	1		Ⅲ	14.2	4.8	8.8	白	回転ヘラ切り（右）？		
170	須臾器	有台杯	8B 9B	25 18		Ⅲ Ⅲ下	13.4	4.35	7.5	白	回転ヘラ切り 見込み：ロクロナデ→ナデ		
171	須臾器	有台杯	5B	9		Ⅲ	(13.00)	(3.90)	(8.20)	白	回転ヘラ切り		
172	須臾器	有台杯	4C	3		Ⅲ上	11.9	3.8	6.4	白	回転ヘラ切り（右）		
173	須臾器	有台杯	16B	4		攪乱	(12.5)	(4.00)	(8.2)	白	回転ヘラ切り→高台周縁ロクロケズリ		胎土②群 胎土分析：滝寺
174	須臾器	有台杯	10C	13		Ⅱ	12	3.5	7	白	回転ヘラケズリ		内面全面 自然釉
175	須臾器	有台杯	11C	14		Ⅲ下	11	3.6	7	白	回転ヘラ切り		
176	須臾器	有台杯	7C	17		Ⅲ	(14.00)	(5.60)	(9.4)	白			胎土②群？
177	須臾器	有台杯	14B	20		Ⅲ	14.2	5.95	8	石・白			胎土③群
178	須臾器	有台杯	11A 10B	2 7		Ⅲ下 Ⅲ上	16	6.6	8	白・長	回転ヘラ切り（右） 見込み：ナデ		
179	須臾器	有台杯	12B	9		Ⅲ上	-	-	10	黒・白・微	高台側ナデ 回転ヘラナデ		
180	須臾器	杯	5B	21		Ⅲ	(17.00)	-	-	白			
181	須臾器	有台杯	8B	8		Ⅱ	17.8	6.4	11	白	見込み：ロクロナデ→ナデ		
182	須臾器	無台杯	9B 9B 9B	12 6 7		Ⅲ Ⅲ下 Ⅲ	12.3	3.65	7.8	白	回転ヘラ切り（右）		
183	須臾器	無台杯	9B	5		Ⅲ	(12.00)	(2.95)	(7.60)	白	回転ヘラ切り→ロクロケズリ	内外面火だすき	
184	須臾器	無台杯	8B 7B	21 20		Ⅱ Ⅲ下 Ⅲ	12.1	3.7	8.8	白・石	回転ヘラ切り		墨書「平力」院 酸化炭焼成
185	須臾器	無台杯	14B	6		Ⅱ	11.2	3.5	7.9	白・海	回転ヘラ切り→ナデ		
186	須臾器	無台杯	14B	8 12		Ⅱ Ⅱ	12.4	3.7	8.2	白・長	回転ヘラ切り		
187	須臾器	無台杯	6B	4		Ⅲ	12.2	3.75	8.6	白・長	回転ヘラ切り後ナデ		
188	須臾器	無台杯	14B	2		Ⅱ	12	3	7.3	白	回転ヘラ切り後ナデ？		
189	須臾器	無台杯	13B	19		Ⅲ上	13	3.5	8.2	白	回転ヘラ切り→ナデ	火だすき	胎土分析：本野 or 今熊
190	須臾器	無台杯	12C	12		Ⅱ	14	3.54	11.1	白	回転ヘラ切り		
191	須臾器	無台杯	13B 14B	20 24		Ⅲ上 Ⅲ	12.8	3.7	6.6	白・石	回転ヘラ切り（右）		胎土②群？
192	須臾器	無台杯	13B	9		Ⅲ上	12.6	3.6	7.2	白			器面摩耗
193	須臾器	無台杯	11C	5		Ⅲ	13	3.8	7	白・石・角・長	回転ヘラ切り		胎土②群 胎土分析：滝寺・大貫
194	須臾器	無台杯	17C	5		Ⅱ	11.8	2.5	7.2	白色粒子	回転ヘラ切り		胎土③群 胎土分析：今熊
195	須臾器	無台杯	9?	13		Ⅲ	(11.00)	(3.45)	8	白	回転ヘラ切り→ナデ		胎土③群 胎土分析：今熊
196	須臾器	稜碗	10C	1		Ⅱ Ⅲ上	(18.00)	-	-	白			
197	須臾器	稜碗				Ⅱ	(11.00)	-	-	白・海	胴部に稜		
198	須臾器	杯	8A	22		Ⅱ	16.6	-	-	白			
199	須臾器	小壺	9A	24		Ⅲ上	7cm 程度	-	-	白・石	外面：カキ目		胴部外面下半 口縁内面 自然釉
200	須臾器	高杯	12B 10A	15 21		Ⅲ下 Ⅲ	-	-	-	白	内外面ロクロナデ 指オカエ→ナデ		

五反田遺跡（平成15年調査）

報告 番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
201	須臾器	高杯	9B	4		III	-	-	(12.00)	白	内外面クロナデ		
202	須臾器	横瓶	10B	17		III					外面：格子タタキ 内面：同心円タタキ 指頭内面：指頭残存		胎土③群
			8C	10		III							
203	須臾器	横瓶	10D	2		II					外面：カキ目 内面：接合痕・カキ目 クロナデ		外面 自然軸 外面 自然軸
			9C	10		IV							
204	須臾器	横瓶	14B	21						白色粒子・石英			
205	須臾器	横瓶	13B	24・25						白			
206	須臾器	横瓶	4C	8						白			
207	須臾器	小型甕	6B	10		III	12	-	-	白	肩部外面：平行タタキ？ 肩部内面：同心円当具		胎土③群
208	須臾器	小型甕	6B	8		III	(12.00)	-	-	白	外面 格子目タタキ 内面同心円当具		胎土③群
209	須臾器	小型甕	5B	15		III	(14.00)	-	-	白	内面：同心円当具		胎土③群
210	須臾器	小型甕	14C	4		III下	13.8	-	-	白	外面：平行タタキ		
211	須臾器	小型甕	12C	7		II	-	-	-	白色粒子・石英	外面：平行タタキ(粗い) 内面：同心円当具→一部ナデ消し		内面全面 自然軸
212	須臾器	小型甕	10A	21		III	10.2	-	-	白			内外自然軸
213	須臾器	長頭瓶	11C	9		III下	8	-	-	白			内外自然軸
214	須臾器	長頭瓶	10A	3		III上	7.4	-	-	白・石			内外面自然軸
215	須臾器	長頭瓶	9C	15		III	4	-	-	白			内面自然軸 胎土③群
216	須臾器	長頭瓶	11C	17		III	19.2	-	-	白			内外全面 自然軸
217	須臾器	長頭瓶	13C	8		II	(19.90)	-	-	白			
218	須臾器	長頭瓶	15C	11		II	-	-	-	白	肩部内面：指頭残		
219	須臾器	長頭瓶	6C	12		III	-	-	-	白			外面：自然軸
220	須臾器	長頭瓶	13B	18		II	-	-	-	白	外面施軸 頸部・肩部沈線		
221	須臾器	長頭瓶	13C	9		II	-	-	-	白			
222	須臾器	短頭甕	8A	23		II	-	-	-	白	肩：沈線3条		
223	須臾器	短頭甕	8A	4		III	-	-	-	白・石	肩：沈線2条以上あり		外面器面荒れ
224	須臾器	短頭甕	8B	7		II	(10.40)	-	-	白・石	肩：沈線2条以上あり		外面 自然軸
225	須臾器	短頭甕	7B	9		III上	(9.40)	-	-	石・白	肩部外面：カキ目		
226	須臾器	短頭甕	14C	4		III	-	-	-	白			
227	須臾器	短頭甕	14C	3		III	-	-	-	白			
228	須臾器	短頭甕	14C	5		III	-	-	-	白			
229	須臾器	短頭甕	12C	20		III上	-	-	-	白			
230	須臾器	瓶類	13B	4		III下	-	-	6.1	石・白	外面下半：ハラケズリ 回転糸切り後ハラケズリ		
231	須臾器	瓶類	9B	4		II	-	-	5.2	白	底部外縁?：ロクロケズリ		
232	須臾器	瓶類	9B	13		II	-	-	(5.00)	白	回転ヘラ切り		
233	須臾器	瓶類	13B	20		III上	-	-	-	白	胸部沈線1条		
234	須臾器	壺または瓶	9C	11・13・16		II	-	-	-	白			
235	須臾器	凸帯付壺または瓶	10B	23		II	-	-	-	白			
236	須臾器	瓶類	15C	16		III	-	-	(11.20)	白	胸部外面下半：ロクロケズリ(左)		胎土③群
237	須臾器	長頭瓶	5A・6A・7A	17			-	-	9	白・石	胸部外面下半：ハラケズリ	高台内外端部欠け	内外面 自然軸 (外面一部厚い)
238	須臾器	長頭瓶	14B	17		III	-	-	9	白色粒子・石英			
239	須臾器	瓶類	12C	23		III下	-	-	7.6	白	回転糸切り		底部内面一部 自然軸 外面 自然軸
240	須臾器	甕類	8B	17		II	-	-	-	白			
241	須臾器	大甕類	9・10・11C	2		II	(25.00)	-	-	白	肩部：タタキ		
242	須臾器	大甕類	11B	2		II	(25.40)	-	-	白	ロクロナデ 平行タタキ目残る		
243	須臾器	大甕類	13C	16		III	21	-	-	白			
244	須臾器	大甕類	12B	5		III	-	-	-	白			

五反田遺跡（平成15年調査）

報告 番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
237	須臾器	大型甕 9B	16	16		II	(22.20)	-	-	白色粒子	外面：ロクロナデ（タタキ痕がわずかに残存） 内面：同心円当具		
238	須臾器	大型甕 14A	23	23		II	23.4	-	-	白	肩部外面：平行タタキ 肩部内面：同心円当具→カキ目		
239	須臾器	大型甕 6・7・8C	6	6	P175	III下 III下	21.8	-	-	白色粒子	外面：格子タタキ 内面：同心円当具		佐渡小泊産
240	須臾器	大型甕 13C	2	2		III下	-	-	-	白・石	肩部外面：平行タタキ→カキ目 肩部内面：同心円当具		
241	須臾器	大型甕 9・10・11C	13	13		IV	-	-	-	白・石	外面：平行タタキ目 内面：同心円当具		
242	須臾器	大型甕 11C	7	7		II	(70.20)	-	-	白・石	口縁外面：波状文3段		
243	須臾器	大型甕 13C	18	18		III上	-	-	-	白・石	外面：櫛歯波状文・沈線		
244	須臾器	大型甕 9B	17・22	17・22		II	-	-	-	白・石	櫛歯波状文2段・沈線1段		423と同一個体 内外面自然釉
245	須臾器	大型甕 10C・11C・12B	10	10		III上・III	-	-	-	白色粒子	外面：平行タタキ目→ロクロナデ 内：同心円当具		
246	須臾器	大型甕 10C	3	3		IV	-	-	-	白色粒子	外：格子タタキ 内：当具		佐渡小泊産
247	須臾器	大型甕 13B	24・25	24・25		III上	-	-	-	白色粒子・石	外：格子タタキ→カキ目 内：同心円当具		
248	須臾器	大型甕 11C	9・10	9・10		III下 III下	-	-	-	白色粒子	外：平行タタキ 内：同心円当具		
249	須臾器	大型甕 6B	25	25	III III	-	-	-	-	白色粒子	外：格子タタキ 内：同心円当具		
250	須臾器	鉢	5	5		III	26	-	-	白・石			
251	須臾器	鉢	7	7		III上	27	4.1	-	白			
252	須臾器	鉢	5	5		III	27.4	-	-	白			胎土③群
253	須臾器	鉢	23	23		III上	31	-	-	白・長	口縁内面・肩部カキ目		
254	須臾器	鉢	13B 13B 13B 13C 13C 13C 13C 13C 13C 13C 12C~15C	15 11 20 4 10 12 13 14		III上 II III上 III上 III上 III上 III上 III上 III上	25.6	13.4	13.6	白	外面下半：ロクロケズリ	内面：底～胴部に煤 底部外面：一部ス	胎土③群
255	土師器	大型甕 13B	24・25	24・25			(20.00)	-	-	白・石・海・角	(口縁外面：ロクロナデ) 胴部外面上半：カキ目 胴部外面下半：平行タタキ 口縁～胴部内面上半：ロクロナデ 口縁～胴部内面下半：タタキ	外面ス	
256	土師器	無台碗 12B	9	9		III上	12.2	3.65	4.7	石・白・角	回転糸切り（右）		
257	土師器	有台碗 9C	14	14		II	-	-	5.8	白・石・角	回転ヘラ切りか		
258	土師器	有台碗	11	11		III上	-	-	5	白・石・長・角			
259	土師器	小型甕 15C	11	11		III上	-	-	5.9	石・白・角	回転糸切り（右）	内面に煤付着	
260	土師器	把付付置	16A	24		II	(12.00)	-	-	白・石・角・海・長	外面ヘラミガキ		内面摩
261	土師器	甕 13B	24・25	24・25		III下	-	-	-	白・石・角	外面：ヘラケズリ		器面一部剥離
262	土師器	高杯 14C	14	14		III下	-	-	11.8	石・角	外面：ハケ目		
263	土師器	高杯 7B	7	7		II	-	-	9	白磁石・チャート・石・角	外面ミガキ		表面ほとんどが摩滅のため調整見えない。一部のみミガキを確認
264	土師器	高杯 11B	18	18		III下	-	-	7	チャート・白色粒子・石	表面摩耗		表面摩耗
265	土師器	甕	4	4		III下	-	-	-	白・チャート	表面摩耗		剥落痕
266	土師器	甕 14C	4	4		III下	-	-	-	白・チャート・長	口縁：ヨコナデ 外面：ハケ→ナデ 内面：ヘラミガキ		
267	土師器	鉢 15B	21	21		II	11.3	-	-	チャート・白色粒 子・石			
268	土師器	鉢 14C	4	4		III	(15.00)	-	-	チャート・白色粒 子・石英	外面：ヘラミガキ 内面：（黒色処理）ヘラミガキ		
269	土師器	鍋 14C	7	7		III下	(31.80)	-	-	石・角	胴部外面：ナナメハケ 胴部内面：ヨコナデ 口縁（内外）：ヨコナデ	外面一部ス	

五反田遺跡（平成15年調査）

報告番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
270	土師器	大型甕	17B 18B			攪乱	(17.80)	-	-	石・角・チャ	胴部内面ヘラミガキ 口縁：ヨコナデ		
271	土師器	大型甕	15A	5		皿下	(21.70)	-	-	白・赤・石英・チャ ヤード・粗・粗	口縁：横ナデ 胴部外面：タテハケ		器面荒れ
272	土師器	大型甕	14C	4		皿下	(22.00)	-	-	白・角	口縁：横ナデ 胴部外面：タテハケ		器面荒れ、188と同一個体と思われる
273	土師器	大型甕	19C	1		皿下	25.8	-	-	石・長・チャ・角	口縁：横ナデ 胴部外面：タテハケ		内面：器面摩耗
274	土師器	大型甕	15C	12		皿上	(19.20)	-	-	石・長・チャ・角・白	内面：カキ目		外面器面荒れ
275	土師器	大型甕	13B	24・25			(20.00)	-	-	石・長	胴外：カキ目		内外一部スス 111と同一個体
276	土師器	大型甕	6C	7		皿	23.4	-	-	白・角四石・赤、 微・密	口縁：ヨコナデ 胴部外面上半：カキ目 胴部外面下半：ヘラケズリ		内面：灰化物厚く付着 外面一部スス
277	土師器	鍋	13C	14		皿上	38	-	-	赤・白・角四石・白色 灰状物質、微細・粗			器面摩耗
278	緑釉陶器	皿	11C	9 4		皿下	16	2.9	7.7		ヘラ切り、内外面施釉。底部、器付きも施釉。内面に*の筋痕あり、サラサラ状の工具か？器付きは一部で擦れて剥落。底部内外に三又トチン痕あり。		
279	緑釉陶器	皿	12B	9		皿上	-	-	7.5		頸部外面：縦方向にヘラミガキ、ロクロナデ。口縁端部は釉が剥落		
280	緑釉陶器	小瓶	9・10・11C 12			II	4.4	-	-		内外面施釉		
281	緑釉陶器	瓶	13C	20		II	-	-	-		内外面ロクロナデ		
282	灰釉陶器	瓶	13C	15		II	(12.80)	-	-	粗	内外面ロクロナデ		
283	灰釉陶器	瓶	9C	14		II	(18.80)	-	-	粗い	内外面ロクロナデ		
284	灰釉陶器	瓶	9C	3		II	(17.60)	-	-		内外面ロクロナデ		内面に灰化物？少々付着
285	灰釉陶器	瓶	13C	6		皿下	(18.00)	-	-	やや粗雑	内外面ロクロナデ		
286	灰釉陶器	瓶	12C	2		皿上	19.8	-	-	粗	内外面ロクロナデ		
287	灰釉陶器	瓶	8C	14 19		皿 皿	23	-	-	粗製	内外面ロクロナデ		
288	灰釉陶器	皿	11B	22		II	15	-	-	やや粗雑	内外面ロクロナデ		
289	灰釉陶器	皿	8・9・10・11A			II	17.6	-	-	粗・白	内外面ロクロナデ		
290	灰釉陶器	瓶	9C	16		皿 下	(19.00)	-	-		内外面ロクロナデ		
291	灰釉陶器	段皿	11B 11C	22 1		II II	16	-	-	粗	内外面ロクロナデ		
292	灰釉陶器	段皿				II	(18.00)	-	-	粗	内外面ロクロナデ		
293	灰釉陶器	段皿	10C	13		II	16	-	-	粗	内外面ロクロナデ		
294	灰釉陶器	瓶	17B・ 18B 攪乱				-	-	9		内外面ロクロナデ		
295	灰釉陶器	瓶	11C	11		II	-	-	7.2		内外面ロクロナデ		
296	灰釉陶器	瓶	11C	7		II	-	-	(7.20)	精製	内外面ロクロナデ		
297	灰釉陶器	瓶	10C	13		皿上	-	-	9.4		高台周縁		
298	灰釉陶器	瓶	10B 14C	19 7		皿上 II	-	-	5.4		内外面ロクロナデ		
299	灰釉陶器	瓶	13C	9		II	-	-	6.2	粗	内外面ロクロナデ		
300	灰釉陶器	皿	11B	25		皿下	-	-	8		内外面ロクロナデ		
301	灰釉陶器	皿	11C	16		皿下	-	-	8	粗い	内外面ロクロナデ		
302	灰釉陶器	杯蓋	11B	19		II	-	-	-	粗	内外面ロクロナデ		
303	白磁	杯蓋	2・3・ 4A				-	-	3.8		内外面ロクロナデ		
304	灰釉陶器	長頸瓶	8B	14		皿	-	-	-		内外面ロクロナデ		
305	須臾器	杯蓋	9B 9A	4 25		II II	-	-	-	白	内外面ロクロナデ		
306	須臾器	有台杯	14C	10		II・III	13.2	3.2	7.8	白	回転ヘラ切り		
307	須臾器	有台杯	10A	21		皿	-	-	11	白色粒子	回転ヘラ切り→周縁ロクロケズリ(右)		

五反田遺跡 (平成 15 年調査)

報告 番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
308	須臾器	有台杯	表土	8		III	-	-	-	白色粒子	外面：回転糸切り→ロクケズリ (右)	底面外部にヘラ記号「X」	
309	須臾器	有台杯	7C	22		II	-	-	6.8	白色粒子・細砂・長 ガケ状	回転糸切り→周縁ロクケズリ (右)	底面外部にヘラ記号「X」 胎土②群	
310	灰軸陶器	柄また は皿	11B	4		III下	-	-	6.4	内外面ロクケズリ ヘラ切り (右回り) 内外面隆輪・内面ツケ ガケ状 高台付き→線状細かかると重ね焼き ね焼き痕を有する。回転ヘラ切り→底面外部ロクケズリ	底面外部に墨付着		
311	灰軸陶器	柄また は皿	11C	8		III下	-	-	7.4	白・石	内外面隆輪ツケガケ 底面外部：ロクケズリ	底面外部に墨付着	
312	須臾器	有台杯	11C	12		III上	-	-	5.8	白	回転ヘラ切り→底面外部ロクケズリ	底面外部にのみ墨痕 を現す。	接合部で破損。特に傾斜はしていないがほぼ円形を呈する。胎土墨 入れか。
313	須臾器	有台杯	16C	16		III	12	2.9	-	石・白	天井部：ロクケズリ (右)		墨書「万」 酸化鉛焼成
314	須臾器	杯蓋	7C	21		III	13	2.8	-	白	天井部内面：ロクケズリ (右)		墨書「万」 酸化鉛焼成
315	須臾器	杯蓋	7C	2		III	13	2.8	-	白	天井部内面：ロクケズリ (右)		墨書「万」 酸化鉛焼成
316	須臾器	杯蓋	6C 6C	11 6		III III	12.4	2.9	-	白色粒子・石英	天井部：ロクケズリ (右)		墨書「寺」
317	須臾器	有台杯	7C	17		III	-	-	8.2	白色粒子・長	底外：ロクケズリ		底面外部に墨書 胎土②群
318	須臾器	有台杯	7C	14		II	-	-	8.4	白色粒子	回転糸切り→周縁ロクケズリ		墨書「豊」
319	灰軸陶器	柄また は皿	11B	4		II	-	-	8.4	内外面ロクケズリ ヘラ切り (右回り) 内外面隆輪ツケガケか？ 内面に直 ね焼き痕あり、韋部に直焼時の軸を残す。回転ヘラ切り	底面外部に「万」の墨書		
320	灰軸陶器	線状皿	10C	7		II	-	-	(9.00)	割製	内外面ロクケズリ 内面にのみ隆輪確認	底面外部に隆輪あり。	
321	須臾器	杯蓋	7B	7		III	-	-	-	白色粒子		内面に墨書 外面自然軸	
322	須臾器	杯		13		III	13	3.56	7.2	白・石	回転ヘラ切り 板状隆輪	脚部外部に墨書あり	墨書「兼元」
323	須臾器	無台杯		13		III下	-	-	6.2	白色粒子・石	回転ヘラ切り		墨書「万」
324	須臾器	無台杯	7C	4		III	-	-	6.2	白色粒子・石	底面：回転糸切り (右)		墨書「万」
325	須臾器	杯	5C	1		III	-	-	-	白色粒子	回転ヘラ切り→周縁ロクケズリ		墨書「豊カ」
326	須臾器	無台杯	9B	17		II	-	-	-	白色粒子	回転ヘラ切り		墨書「兼公」
327	青磁	杯					-	-	-				外面運弁文
328	青磁	杯	8・9・ 10・11A				-	-	-				外面運弁文 運弁の縦軸線らしき軸の濃い部分がすかすかに認めら れるが極めて不明瞭。
329	珠洲焼	羹	9・10・11C				-	-	-	白・石	脚部外部：平行タタキ		
330	珠洲焼	壺	9B	14		II	-	-	-	白・石	外面：平行タタキ 内面：指頭瓦葺		
331	志野焼	有台杯	16C	16		III上	(11.60)	2.2	7.2		内外面隆輪 葺付のみ隆輪		
332	細文土器	深鉢	4A	24		III	-	-	6	石・長・角			
333	石製品	磨石	14B	5		III	(長さ) 8.70 (幅) 3.90 (厚さ) 1.90	-	-	白色粒子			基部以外は全面研磨、敲打痕残る
334	陶器	勲鐘車	11B	10		III	(直径) 5.60 (厚さ) 2.10	-	-	滑石			器面の磨滅あり
335	石製品	勲鐘車	8B	13		II	(厚さ) 3.90	-	-	滑石			側面削り痕が顕著、上・下は研磨著しく削底はわずかに残るの み。
336	石製品	砥石	17B・C	15		攪乱	(長さ) 7.20 (幅) 3.80 (高さ) 3.50	凝灰岩	-	凝灰岩	5面に底面を形成		
337	石製品	砥石	16B	15		I	(長さ) 7.50 (幅) 5.80 (厚さ) 1.50	凝灰岩	-	凝灰岩	4面に底面を形成		
338	石製品	砥石		5		III上	(長さ) 7.80 (幅) 2.90 (厚さ) 2.20	凝灰岩	-	凝灰岩			四面の研磨が著しい
339	石製品	磨み石	13B	24		III上	(長さ) 8.20 (幅) 7.30 (厚さ) 7.00	安山岩	-	安山岩			
340	石製品	磨み石	13B	24		III下	(長さ) 11.80 (幅) 9.90 (厚さ) 4.90)	安山岩	-	安山岩			
341	石製品	磨み石	9C	5		III	(長さ) 13.20 (幅) 17.90 (高さ) 6.60)	安山岩	-	安山岩			
342	須臾器	長頸壺	川底				8.9	-	-	白			外面：自然軸
343	土師器	無台杯	川底				11.7	3.8	5	石・角	回転糸切り (右?)	内面に漆?	墨書「西」 酸化鉛焼成
344	須臾器	大羹	表土				(74.00)	-	-	白色粒子	細部波状文土条 (工具は4条)		

五反田遺跡(平成16年調査) 土器・陶磁器観察表

報告番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
1	須恵	有台杯		7・8	SK179	4	11.6	4.1	8.4	白凝	内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り→貼付高台		
2	須恵	有台杯	32C		SK179	III 4	16.0	6.3	9.2		内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り、貼付高台		
3	黒色土器	碗			SK179	2・3	15.6	5.2	7.0	白凝・黒色粒子	外面:ロクロナデ 内面:ミガキ 底部:回転系切り	外面に黒凝	
4	土師	碗			SK179	1	12.2	3.7	5.6		内外面:ロクロナデ		
5	土師	無台碗			SK179	3	13.2	3.4	6.2	石・白凝・砂粒	内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り		
6	土師	無台碗			SK179	3	13.7	2.9	5.8		内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り	内面にタール付着	
7	土師	無台碗			SK179	3	13.6	3.1	6.0	白凝・角・砂粒	内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り		
8	灰軸	碗	32B	11	SD178 SK179	3 3	14.4	4.5	7.3		ロクロ成形 底部:回転ヘラケズリ→高台周辺ナデ 施軸:ツケガケ、口縁部~胴部中位	黒書「大」	
9	灰軸	碗			SK179 SK5	2 -	12.8				ロクロ成形 施軸:内面全面、外面胴部中位まで		東濃産
10	灰軸	皿			SK179	3	15.4	3.0	7.0		ロクロ成形 底部:回転ヘラケズリ→貼付高台 施軸:底部をのぞく		
11	灰軸	碗	32B 32C	4 13	SX211 SK179	3 -			7.1		ロクロ成形 底部:回転ヘラケズリ→貼付高台 施軸:底部をのぞく		
12	灰軸	碗	33C	8	SK179	III 4			7.4		ロクロ成形 底部:回転系切り→貼付高台		東濃産
13	灰軸	瓶			SK179	3	10.4				ロクロ成形 施軸:全面		
14	須恵	小型甕			SK179	1			5.6		内外面:ロクロナデ	黒書「大」	
15	須恵	甕			SK179	2・3					内外面:ロクロナデ 底部:ヘラケズリ		
16	須恵	甕			SK179						甕部:ロクロナデ 肩部:タタキ		
17	土師	大型甕	32C	8	SK179	II	21.6			海	内外面:ロクロナデ		
18	土師	大型甕	32C	8	SK179	II	22.6			白凝・角・海	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ+カキメ		
19	土師	大型甕			SK179	3	23.6			雲・白凝・角	内外面:ロクロナデ		
20	土師	大型甕			SK179	3	26.4			金堂母(多)・白凝	内外面:ロクロナデ		
21	土師	大型甕			SK179	3	31.0			白凝・砂粒	内外面:ロクロナデ		
22	土師	甕			SK179	3	33.4			海	外面:ナデ 内面:ナデ+カキメ		
23	土師	大型甕			SK179	3	22.4			白凝・砂粒	内外面:ロクロナデ+カキメ		
24	土師	甕			SK179	4	17.4		8.2	石・灰・雲・砂粒	外面:ロクロナデ、下半ケズリ 内面:ロクロナデ 底部:ケズリ		
25	土師	小型甕			SK179	3	12.6	12.1	8.4	白凝・砂粒	内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り	外面の剥離が顕著	
26	土師	足高台付鉢	33B 32C	24 4	SK179	3 II	(34.4)			海・砂	内外面:ロクロナデ 底部:回転ヘラケズリ 脚部:透かし有り		
27	土師	無台碗	31B	25	SK50	2	12.0			白凝・砂粒	内外面:ロクロナデ	内外面にスス付着	
28	土師	無台碗	31B	25	SK50	1	12.4	3.4	4.8	白凝・砂粒	内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り		
29	土師	無台碗			SK50		12.0	3.7	4.6	白凝・砂粒	内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り		
30	土師	無台碗	31B	25	SK50	2	12.0	3.5	5.0	白・砂	内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り		
31	土師	無台碗	31B	25	SK50	1・2	12.4	3.4	5.0	白凝・海	外面:ロクロナデ、下半ケズリ 内面:ロクロナデ 底部:回転系切り	外面にスス付着	
32	土師	無台碗	31B	25	SK50	1	12.6	3.5	4.6	白凝	内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り	内外面スス、内底面にタール付着	
33	土師	無台碗	31B	25	SK50	2	12.0	4.3	4.4	白凝・砂粒	内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り	外面にスス付着	
34	土師	無台碗	31B	25	SK50	1	13.2	4.4	5.2	砂粒・角	内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り		
35	土師	無台碗	31B	24	SK50	2	13.0	3.9	5.2	白凝・砂粒	内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り	口縁部内面にタール付着	
36	土師	無台碗	31B	25	SK50	2	14.8	3.9	5.6	白凝・海・砂粒	内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り		
37	土師	甕	31B	25	SK50	1	(26.0)			白凝・海	内外面:ロクロナデ		
38	土師	小型甕	31B	25	SK50	2	14.8			海・砂粒	外面:ロクロナデ、下半ケズリ 内面:ロクロナデ、下半ナデ	外面にスス付着	
39	土師	小型甕	31B	25	SK50	1・2	10.8	10.0	6.4	白凝・砂粒	内外面:ロクロナデ 底部:回転系切り		
40	黒色土器	有台碗			SK95		10.8	4.1	5.8	海	外面:ロクロナデ、口縁部ミガキ 内面:ミガキ 底部:貼付高台		

五反田遺跡(平成16年調査) 土器・陶磁器観察表

報告 番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
41	土師	有台碗			SK95	I	10.4	3.8	6.0	海	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ 底部：貼付高台	内面にスス・溜付着	
42	黒色土器	有台碗			SK503	I	16.0	6.1	7.0	白・砂	外面：上半部ロクロナデ、下半部ズリ 内面：ミガキ 底部：ケズリ、貼付高台		
43	黒色土器	無台碗			SK503	I	15.4	4.8	5.6	白・海・角	外面：ロクロナデ、下半部ズリ 内面：ミガキ 底部：回転ヘラケズリ 外面に黒斑		
44	土師	小型甕	33C	10	SK503	I			5.4	砂	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り	外面にスス付着	
45	土師	無台碗			SK382	I	13.1	3.4	5.8	砂	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り	墨線一本	
46	土師	無台碗			SK7	I	13.1	3.4	5.8	砂	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
47	須恵	杯			SK347	III	13.0			白臈	内外面：ロクロナデ	墨書「大」	
48	灰軸	皿	32C	2	SK347 P304	I	14.3	2.8	6.3	黒色粒子	ロクロ成形 底部：回転ヘラケズリ 胎軸：刷毛塗り、底部をのぞく		軸うすい
49	灰軸	皿	32C	13	SK179 SK347	I	13.6	2.7	7.2		ロクロ成形 胎軸：刷毛塗り、底部をのぞく	墨書「大」カ	
50	土師	無台碗			SX211	III	13.0	3.6	5.0	海・白	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
51	土師	無台碗			SX211	III	11.6	3.1	5.0	砂粒	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
52	土師	碗			SX211	III	13.2			白臈	内外面：ロクロナデ	墨書「十」カ	
53	土師	無台碗			SX211	III	12.4	3.8	5.8	白臈	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
54	土師	無台碗			SX211	III	13.4	3.7	6.4	角・白	内外面：ロクロナデ		
55	黒色土器	杯			SX211	III	12.4			白臈	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ	墨書「大」カ	
56	灰軸	皿			SX211	III	14.0	3.1	7.0		ロクロ成形 胎軸：回転ヘラケズリ 胎軸：ツケガケ、底部をのぞく		象投蓋
57	緑釉	皿	32B	3	SX211	III	13.6				ロクロ成形 胎軸：全面		
58	土師	無台碗			SX211	III	13.8	3.5	6.2	砂・石	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
59	土師	無台碗			SX211	III	14.4	4.1	5.6	白	内外面：ロクロナデ	墨書「内」か「材」カ	磨滅著しい
60	須恵	杯			SX280	III	14.4			白臈	内外面：ロクロナデ	墨書「内」か「材」カ	SK280は集石付近
61	土師	無台碗	32・33B	25・21	SX280	III	12.2	3.6	4.4	白臈・海	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
62	土師	無台碗	32・33B	25・21	SX280	III	11.4	3.6	4.9	白・砂・海	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
63	黒色土器	無台碗	32・33B	25・21	SX280	III	12.4	4.3	4.6	砂	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ		
64	黒色土器	杯	32・33B	25・21	SX280	III	18.4			白臈	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ		
65	黒色土器	無台碗	32・33B	25・21	SX280	III	16.4			白臈・角・海	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ		
66	土師	小型甕	32・33B	25・21	SX280	III	12.0			角・海	内外面：ロクロナデ		
67	黒色土器	有台碗	32・33B	25・21	SX280	III	12.0		6.4	白臈・海	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ 底部：貼付高台		
68	黒色土器	有台碗	32・33B	25・21	SX280	III	11.2	3.6	4.8	白	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ 底部：回転ヘラ切り		
69	土師	無台碗			SX66	I	11.2			白臈	内外面：ロクロナデ 底部：マメツ		
70	土師	無台碗	31B	6	SX66	I				白臈	胎軸：回転糸切り	墨書「山」カ	
71	須恵	甕	30B	5	SX66	I				白臈	外面：タタキ 内面：タタキ→ナデ消し		
72	黒色土器	有台碗			SX386	I	14.8	6.2	5.8	砂	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ 底部：回転糸切り→貼付高台		
73	土師	有台碗			SX386.d	I	14.0	6.7	6.8	白臈・海	外面：ミガキ 内面：ミガキ 底部：回転糸切り→ナデ、貼付高台	外面にスス付着	
74	土師	無台碗	34C	16	SD713	I	12.4	4.0	4.8	石・白臈・海	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り	内外面にスス付着	
75	土師	小型甕	35D	1	SX444	I			8.6	石・砂粒	外面：ヘラケズリ 内面：ナデ 底部：ヘラケズリ		
76	土師	碗			SX281	I	11.6				内外面：ロクロナデ	墨書「口」	
77	須恵	有台杯	32B 32B 32C 34D	15 6 2	SD178 SD178 SD435 SK179	I	11.6	3.8	7.6	石・白臈	内外面：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り		
78	須恵	無台杯	32B	22・23	SD178	III	14.0	3.7	8.0	白	内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		
79	須恵	長頸瓶	32B	18	SD178	I				白臈	内外面：ロクロナデ	外面に自然釉	
80	須恵	短頸甕	32B	23	SD178	I	14.6			白臈	内外面：ロクロナデ		
81	須恵	甕	32C	11	SD178	I				石・白臈	内外面：ロクロナデ		
82	須恵	甕	33A	22	SD178	I				白臈	内外面：タタキ		
83	須恵	甕	32B	21	SD178	III	(50.2)				内外面：ロクロナデ		
84	土師	小型甕	32C	2	SD178	I	11.6			角・砂粒	内外面：ロクロナデ		

五反田遺跡（平成16年調査） 土器・陶磁器観察表

報告 番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
85	土師	甕	32C	1・6	SD178	III	12.0	15.6	9.2	砂・白・海	外面：ハケス・ケズリ（縦） 内面：ハケス（横）		裾口縁の可能性あり
86	土師	大型甕	32A	25	SD178	I	20.6			白・角	内外面：ロクロナデ		
87	土師	大型甕	32C	7	SD178		21.2			海	内外面：ロクロナデ		
88	土師	小型甕			SD178	3			5.5	白・海・砂	外面：ロクロナデ 底部：糸切り	外面底部までスス付着	
89	土師	蒸籠	33B	1	SD178	III・IVa	21.0			石・白凝・砂粒	内外面：ナデ		
90	土師	無台碗		22	SD178	I	17.4	5.3	6.8	白・角	外面：ロクロナデ、下半ヘラナデ 内面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
91	土師	碗	32B	18	SD178		13.0			白・角	内外面：ロクロナデ	内面にスス付着	
92	土師	無台碗	32B	23	SD178	I	13.8	3.6	6.0	白・角	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り	内面にスス付着	
93	土師	無台碗			SD178	1	13.6	3.5	6.2	白・角・砂	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り	底部にタール付着	
94	土師	無台碗	32B	22	SD178	3	14.0	3.5	5.6	白・白凝・砂	外面：上半ロクロナデ、下半ケズリ 内面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
95	土師	無台碗	32B	18	SD178	1	14.0	3.8	5.6	白凝・角・砂	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
96	土師	無台碗			SD178	1	13.4	3.7	5.0	白・砂	内面：ロクロナデ 底部：糸切り		
97	土師	無台碗	32B	23	SD178		14.0	3.0	7.0	砂	内外面：ロクロナデ	口縁部内外にタール付着	
98	土師	碗	31B	23	SD178		12.8			白・砂	ロクロ成形	墨書「口」	
99	土師	無台碗	31C	19	SD178	III	14.4			白・砂	内外面：ロクロナデ		
100	土師	無台碗			SD178	1	14.2	4.3	5.8	砂	内外面：ロクロナデ 底部：糸切り		
101	土師	碗	31C	19	SD178	3	16.6			砂・海	内外面：ロクロナデ		
102	土師	無台碗			SD178	1	17.0	4.9	6.2	白・砂	内外面：ロクロナデ 底部：糸切り		
103	黒色土器	碗	32B	23	SD178		9.2			白凝・砂凝	内外面：ミガキ		
104	黒色土器	碗	32B	23	SD178		15.6	3.6	7.8	白凝	外面：ロクロナデ、下半ケズリ 内面：ミガキ 底部：回転糸切り		
105	黒色土器	有台碗	32C	3	SD178	III			6.2	黒・白凝・海	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ 底部：ヘラ切り		
106	灰軸	碗	31C	19	SD178		14.4			長・白凝	内外面：ロクロナデ 軸：口縁～胴部中位 施軸：ツケガケ		軸うすい 東濃産？
107	灰軸	碗	32C	6	SD178				7.0		ロクロ成形 底部：ヘラケズリ→ナデ消す 取付高台		東濃産？
108	灰軸	碗	32B	18	SD178	III			7.6		底置：ケズリ 施軸：ツケガケ		縁投産
109	灰軸	皿	32C	6	SD178	2	12.8	2.8	5.4		ロクロ成形 底部：ヘラケズリ 施軸：ツケガケ		軸うすい
110	須恵	蓋	34C 34B 35B	5 25 11	SD485B		10.0	3.4		白凝	外面：上半ケズリ、下半ロクロナデ 内面：ロクロナデ		
111	須恵	蓋	34C 35B	20 11	SD485B		12.8	3.1		石・チ・白凝	外面：上半ケズリ、下半ロクロナデ 内面：ロクロナデ		
112	須恵	蓋	34C 34B	24 -	SD485B	I	12.6	2.6			内外面：ロクロナデ		
113	須恵	蓋	34C 34D	18 6	SD485B	底				白凝(多)	外面：上半ヘラ切り、下半ロクロナデ 内面：ロクロナデ	内面に墨	
114	須恵	有台杯	34B 34C	10 5	SD485B				8.0	白凝	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
115	須恵	無台杯	34B	10	SD485B		12.9	3.5	6.9	白凝	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
116	須恵	無台杯	34D	6	SD485B	底	12.0	2.7	6.4		内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		胎土②群
117	須恵	杯	34C 34C 32B	5 15 15	SD485B	カイキヨ	15.2				内外面：ロクロナデ 施軸：口縁～胴部中位		
118	須恵	壺	34D	6	SD485B	底			13.2		内外面：ロクロナデ		
119	須恵	瓶か壺 （継手形）	34B	15	SD485B						内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り	高台内にヘラ趾号	
120	須恵	瓶か壺 （継手形）	35B	6	SD485B					チ・白色粒子	内面に墨		
121	須恵	瓶か壺	34D 34D	2 7	SD485B				14.0	白凝(多)	内外面：ロクロナデ 底部：ナデ、貼付高台		
122	須恵	瓶か壺	34B	10	SD485B				9.4	石・白凝	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		
123	須恵	瓶か壺	34B	25	SD485B				8.2	長・白凝・海	外面：ヘラケズリ 内面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 貼付高台		
124	須恵	英帯付 四耳壺	34C	14	SD485B					白色粒子(多)	内外面：ロクロナデ		

五反田遺跡（平成16年調査） 土器・陶磁器観察表

報告 番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
125	灰釉	煮瓶	35B	6	SD435B						外面：ヘラによる面取り 内面：ロクロナデ		
126	土師	無台碗	34C 34C	13 13	SD435B		12.0	4.0	6.0		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
127	黒色土器	無台碗	34B	15	SD435B		14.0	4.1	5.2		外面：ロクロナデ、下半ケズリ 内面：ミガキ 底部：ヘラ切り		
128	土師	大型甕	34C 34C 34B	8 15 25	SD435B						外面：タタキ 内面：ハケナデ		底部丸底
129	須恵	蓋			SD435A		16.4			石・白(多)	内外面：ロクロナデ		
130	須恵	蓋			SD435A		14.4	3.2		雲・白	外面：上半ケズリ、下半ナデ 内面：ナデ		墨書「中」カ 内面に環（底出環か） 墨書「山」カ
131	須恵	蓋	34D	2	SD435A		14.0	2.8		石・白	内外面：ロクロナデ		
132	須恵	蓋	34C	15・20	SD435A		13.4	3.6			外面：上半ケズリ、下半ロクロナデ 内面：ロクロナデ		
133	須恵	蓋	34C	24	SD435A		12.4				内外面：ロクロナデ		
134	須恵	蓋	34C	4	SD435A						内外面：ロクロナデ		墨書「口」
135	須恵	杯	34C	18	SD435A		11.2				内外面：ロクロナデ		墨書「口」
136	須恵	有台杯			SD435A		11.7	3.5	7.6	石・雲・白凝	内面：ロクロナデ 底部：糸切り+ロクロケズリ		
137	須恵	有台杯			SD435A				7.6	白凝	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
138	須恵	無台杯	34C	19・23	SD435A		12.0	3.8	7.7	白・黒色粒子	内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		
139	須恵	無台杯	34C	15・24・13 砂・10・23	SD435A		11.6	3.8	6.4		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
140	須恵	無台杯	34B 34C	25 23	SD435A		11.8	3.3	6.6	白凝	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
141	須恵	無台杯	34D	6	SD435A		12.4	3.5	8.2		内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		
142	須恵	無台杯	34C	23	SD435A		13.2	3.4	9.0		内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		
143	須恵	無台杯	34C	5・10・ 14・15	SD435A		12.3	3.1	7.0	白凝	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		胎土③群
144	須恵	無台杯			SD435A	IVa	12.4	3.1	8.0		内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		胎土③群
145	須恵	無台杯	34C	23	SD435A		12.8	3.6	6.4	石・雲	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
146	須恵	無台杯	34B 34C	25 5	SD435A		12.8	3.0	7.2	白凝	内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		墨書「大」か「十」
147	須恵	無台杯	34C	13	SD435A		13.6	3.8	6.6	白凝	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
148	須恵	杯			SD435A		(15.4)			白凝	内外面：ロクロナデ		
149	須恵	杯	34C 34C 34B	5 14 25	SD435A				6.8		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
150	須恵	無台杯	34C	5	SD435A				6.4		内外面：ロクロナデ		
151	須恵	無台杯	34C	5・15	SD435A				7.0		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		墨書「七」カ
152	須恵	有台杯	34B	15	SD435A		7.8	9.7	4.6	石・白	内外面：ロクロナデ		墨書「口」と「七」
153	須恵	甕	34D	1	SD435A		41.2				内外面：ロクロナデ		
154	須恵	甕	34D	28.8	SD435A		28.8			白凝	内外面：ロクロナデ		
155	須恵	甕	34C	22	SD435A		27.2			白凝	内外面：ロクロナデ		
156	須恵	甕	34C	23	SD435A					白凝	内外面：ロクロナデ		
157	須恵	甕	34C	10	SD435A		(710~770)			白凝・砂粒・砂粒	内外面：ロクロナデ		外面に波状文
158	須恵	甕	34D	3	SD435A					長・白	内外面：タタキ		
159	須恵	短頸壺	32C・ 34D・ 34C・ 34C・ 33C・ 32B	2 2 23 17 12 25	SD178A SD435A SD435A - - -	I - III III III	10.2			白凝・砂粒	内外面：ロクロナデ		外面乳線二条×3 乳線一条×1
160	須恵	甕	35B	9	SD435A					白凝	内外面：ロクロナデ		
161	須恵	甕	34C	22	SD435A		21.0			白凝	内外面：ロクロナデ		
162	須恵	甕	34C	23	SD435A		15.2			白	内外面：ロクロナデ		
163	須恵	長頸瓶			SD435A						内外面：ロクロナデ		ヘラ記号

五反田遺跡（平成16年調査） 土器・陶磁器観察表

報告 番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
164	須恵	壺か瓶	34C	14B	SD435A				10.0		内外面：ロクロナデ 内底面：指押さえ		
165	須恵	壺か瓶	34D 35C	3	SD435A				8.4	石・長・白臈	内面：ロクロナデ 外面：ケズリ 底部：回転糸切り		
166	砥石		34C	4		III							
167	須恵	蓋	34B 34C	25 20	SD435A		16.2				内外面：ロクロナデ		
168	須恵	小甕	34C	23	SK503A SD435A	I					内外面：ロクロナデ		
169	土師	甗	34D	3	SD435A		11.2	3.4	5.2	石・長・雲・白	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
170	土師	無台碗	34D	3	SD435A		11.6	3.6	6.0	石・長・雲・白	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
171	土師	無台碗	34D	3	SD435A		11.6	3.4	5.8		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
172	土師	無台碗	34C	23	SD435A		12.0	3.7	4.8		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
173	土師	無台碗	34C	9	SD435A		12.2	3.5	6.2	石・チ・白	内外面：ロクロナデ 内面・底面：マメツ		
174	土師	無台碗	34C	5	SD435A		12.2	3.4	5.2		内外面：ロクロナデ 底部回転糸切り		
175	土師	無台碗	34C	5	SD435A		12.8	3.4	4.8		内外面：ロクロナデ 底部回転糸切り		
176	土師	無台碗	34D	2	SD435A		12.2	3.5	5.6		内外面：ロクロナデ 底部回転糸切り		
177	土師	甗	34D	6	SD435A		13.0				内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		口縁部にタール付着
178	土師	無台碗	34D	6	SD435A		13.4	3.8	6.0	石・チ・白臈	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
179	土師	無台碗	34C		SD435A		14.4	4.2	7.0		内外面：ロクロナデ		
180	土師	無台碗	34C		SD435A		13.4	3.2	5.4		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
181	土師	無台碗	34D		SD435A		12.7	4.3	6.0		外面：ロクロナデ 内面：マメツ 底部：回転糸切り		
182	土師	無台碗	34D	6	SD435A		12.4	4.2	5.4	白臈・砂粒	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
183	土師	甗	34C	13	SD435A		17.6				内外面：ロクロナデ		
184	土師	無台碗	34D	2	SD435A				5.2		外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		内面に付着物
185	土師	無台碗	34D		SD435A				5.2		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
186	土師	無台碗	35B・35C	18 14	SD435A		14.2	4.8	6.4	石・長・白臈	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		内外面にスズ付着
187	土師	杯	34C	22	SD435A				5.2		外面：ロクロナデ 内面：回転ナデ 底部：マメツ		
188	土師	有台碗	34C	14	SD435A				6.2		内外面：マメツ 底部：貼付高台		
189	土師	有台碗	34D	3	SD435A						外面：ロクロナデ		
190	土師	脚部	34D	3	SD435A				8.0	石・白臈・角	内外面：ナデ		
191	土師	大型甗	34D	3	SD435A		24.0				内外面：ロクロナデ		
192	土師	小型甗	34C	15	SD435A		14.0			石・雲・白・海	外面：カキメ 内面：ナデ+カキメ		
193	土師	小型甗	34C	18・19	SD435A		8.1	4.5	5.4		内外面：ロクロナデ 底部回転糸切り		
194	土師	小型甗	34D	2・2底	SD435A		13.0	(15.4)	7.0		外面：ヘラナデ 内面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
195	土師	大型甗	34C	23	SD435A		22.0				内外面：ロクロナデ		
196	土師	大型甗	34D	3	SD435A		22.0			石・長・雲・白	内外面：ロクロナデ		頸部内面にヘラ記号
197	黒色土器	甗	34D		SD435A		12.6				内外面：ミガキ		
198	黒色土器	甗	34C		SD435A		11.4				外面：ロクロナデ 内面：ミガキ		墨書「政」か「改」
199	黒色土器	杯	34D		SD435A		14.0				外面：ロクロナデ 内面：ミガキ		
200	黒色土器	杯	34D	2	SD435A						外面：ロクロナデ 内面：ミガキ		墨書「口」
201	黒色土器	甗	34C		SD435A		16.0				外面：上半ロクロナデ、下半ケズリ		
202	黒色土器	有台碗	34C	19	SD435A		14.0				外面：ロクロナデ 内面：ミガキ		
203	黒色土器	無台碗	34D	6・2	SD435A		17.8	6.6	5.8		外面：上半ロクロナデ、下半ケズリ 内面：ミガキ 底部：ヘラ切り		
204	黒色土器	無台碗	34C	22	SD435A				6.0		外面：マメツ 内面：ミガキ 底部：マメツ		
205	黒色土器	有台碗	34C	19	SD435A					白臈・角・海	内面：ミガキ・暗文		
206	黒色土器	有台碗	34C	15	SD435A	IV a	19.2	5.0	7.8		外面：マメツ 内面：ミガキ 底部：回転ヘラ切り		
207	灰軸	甗	34B 34C 31B	15 22 12	SD435A	II	18.6				ロクロ成形 施釉：全面		
208	灰軸	甗	35B 34B	21 25	SD435A		17.8		8.7		ロクロ成形 施釉：全面		
209	灰軸	甗			SD435A						ロクロ成形 施釉：全面		

五反田遺跡（平成16年調査） 土器・陶磁器観察表

報告番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
210	灰軸	段皿	31C 32B 31C 32B	3 18 3 19	SD485A P304A SD178A	3 III III	17.2	3.1	8.0		ロクロ成形		
211	灰軸	皿	35B 32B 34B	13・12 19	SD485A		12.8	2.2	6.8	白凝	ロクロ成形 胎軸：内面全面、外面高台、高台内をのぞく		
212	灰軸	壺	34C	23	SD435A					白凝・黒色粒子	内外面：ロクロナデ		
213	灰軸	水注	34C	15・8	SD435A					白凝	内外面：ロクロナデ		
214	灰軸	四足壺	35B	16	SD435A					白凝	ロクロ成形 外面：粘土細罫り付け		
215	白磁	椀	34D	1	SD435A					白凝	ロクロ成形 胎軸：全面		
216	白磁	椀	34C	22	SD435A		17.0			白凝	ロクロ成形 胎軸：全面		
217	緑軸	皿	34D 34B	24	SD435A	III	15.0	2.8	8.0	白凝	ロクロ成形 胎軸：全面		輪花、内底面に刻線
218	須恵	有台杯			P518				8.0	白凝	外面：ロクロナデ、下半ケズリ 内面：ロクロナデ 底部：屈折高台		
219	土師	壺			P518				7.0	白凝・海・砂粒	内面：ナデ 充填法		
220	土師	皿			P518					白凝		把手破片	
221	土師	大型壺			P544					白凝	外面：ロクロナデ+ケズリ 内面：カキメ		
222	土師	無台碗	31B	10	P49	I	13.2	3.2	6.0	白凝・砂粒	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り		
223	土師	椀			P49	I	13.6			石・灰・白凝	内外面：ロクロナデ	口縁にタール付着	
224	土師	無台碗			P49	I	13.4	3.7	5.6	石・灰・白凝	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り	口縁部にタール付着	
225	灰軸	椀			P49	I	17.8			黒色粒子	内外面：ロクロナデ		
226	須恵	大甕			SK5		58.8				内外面：ロクロナデ		
227	須恵	大甕			SK5						内外面：ロクロナデ		
228	須恵	大甕			SK5・P196						内外面：タタキ		外面波状文
229	土師	無台碗	31A	21	P380	I III	12.8	4.2	5.6	白凝・海	内外面：ロクロナデ 底部：マメツ		
230	土師	無台碗			P81		14.4	3.0	6.8	白凝	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り		
231	土師	無台碗			P81		13.2	3.3	5.5	白凝	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り		
232	須恵	蓋			P196					白凝	外面：ケズリ、下半ケズリ 内面：ロクロナデ		
233	須恵	無台杯			P196				8.0	白凝	内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り	墨線二本	
234	須恵	無台杯	33C	9	P387	I			6.4	白凝	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り	墨書「二」カ	
235	須恵	杯			P306					白凝	内外面：ロクロナデ	墨書「天」か「七」カ	
236	土師	無台皿	32A	23	P262	1	8.8	1.9	4.7	黒・角・砂粒	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り	内面に油痕	
237	土師	無台碗	36B	17	P436		12.0	4.1	4.6	石・砂粒	内外面：ロクロナデ		
238	土師	椀			P88		12.4			白凝・角・砂粒	内外面：ロクロナデ		
239	土師	椀			P194		11.6	3.2	3.6	白凝	内外面：ロクロナデ		
240	土師	無台碗			P306		13.2	3.1	6.0	白凝・砂粒	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り	内面にスチス付着	
241	土師	無台碗			P242		13.0	3.7	6.4	石	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り		
242	土師	無台碗			P379		15.2	5.5	5.4	白凝	内外面：ロクロナデ		
243	土師	無台碗			P194		13.2	3.5	5.8	白凝・砂粒	内外面：ロクロナデ		
244	土師	椀			P194		12.4			白凝	内外面：ロクロナデ		
245	土師	無台碗			P517		12.8	3.4	5.2	白凝・海（やや多）・砂粒	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り		
246	土師	無台碗	31B	1	P194		14.0	3.2	6.6	白凝・角・砂粒	外面：ロクロナデ 内面：マメツ 底部：回転系切り	墨書「千」カ	
247	土師	杯			P517		14.0			白凝・砂粒	内外面：ロクロナデ		
248	土師	杯			P517		14.0			白凝	内外面：ロクロナデ		
249	土師	無台碗			P306		13.0	3.9	5.8	白凝	内外面：ロクロナデ、下半ケズリ 底部：回転系切り		
250	土師	無台碗			P306		13.8	3.9	5.4	白凝	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り		
251	土師	無台碗			P359		11.2	4.2	5.6	白凝	内外面：ミガキ 底部：ケズリ		
252	土師	小型壺			P293		6.8			白凝・海	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り	外面にスチス付着	
253	土師	有台碗			P138		6.4			白凝・砂粒	内外面：ロクロナデ 底部：系切り		
254	土師	大型壺			P306		23.2			白凝・砂粒	内外面：ロクロナデ	外面に炭化物付着	

五反田遺跡（平成16年調査） 土器・陶磁器観察表

報告番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
255	土師	鍋		P517			27.0			チ・白凝	外面：ロクロナデ、下半ケズリ 内面：ロクロナデ		
256	土師	大型甕		P404			(22.4)				内外面：ロクロナデ		
257	須恵	壺		P3・4			28.6						
258	須恵	甕	30B	10	P3・4	II	64.0				頸部：ロクロナデ 肩部：タタキ		
259	須恵	大甕	31B	6・11b	P2 P383 SK68	1・2					内外面：タタキ	内面にタール付着	
260	須恵	瓶か壺	30B	10	P3・4	II		15.0			外面：ケズリ 内面：ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ		
261	須恵	瓶		P404				13.6	白凝		内外面：ロクロナデ 底部：貼付高台		
262	須恵	瓶か壺		P94				15.0	白凝		外面：ロクロナデ 内面：外周は回転ナデ 中心部押さえ 底部：回転ヘラケズリ		
263	黒色土器	蓋		P194			12.4	2.7			外面：ロクロナデ 内面：ミガキ		
264	土師	有台碗		P409			12.6	5.5	5.8		外面：ロクロナデ、下半ケズリ 内面：ミガキ 底部：回転糸切り		
265	黒色土器	有台碗		P404					7.6	白凝・海	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ		
266	土師	有台碗		P404					6.8	白凝	外面：ロクロナデ		
267	黒色土器	碗		P540						白凝・砂凝	内外面：ミガキ 内面：暗文		
268	黒色土器	無台碗		P383			13.2	3.5	4.8		外面：ロクロナデ 内面：ミガキ 底部：マメツ		
269	灰軸	碗		P306					7.2	白凝	ロクロ成形 底部：回転ヘラケズリ→貼付高台 胴軸：ツケガケ、口縁部→胴部中心	墨書「大」	
270	須恵	蓋	31B	9		III					内外面：ロクロナデ		
271	須恵	有台碗	32B	18		III	11.4	4.1	7.6	チ・白凝	内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→貼付高台		
272	須恵	有台杯	31C 31B	4 24		III	12.8	5.1	7.0		内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		
273	須恵	無台杯	33C 33B	2 22		III	13.0	3.8	5.4		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
274	須恵	無台杯	34D	2		III			7.4	白凝	内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り	墨書「福」カ	
275	須恵	水瓶	36C	1		III					内外面：ロクロナデ		
276	須恵	小型甕	31B 31B 31B	6 6 1		II III II					内外面：ロクロナデ		
277	須恵	短頭壺	31B			II	11.2				内外面：ロクロナデ		
278	須恵	大甕	33C	12・17・18		III	26.8				内外面：タタキ		
279	須恵	樽瓶	34D			III				白凝	内外面：タタキ、充填閉塞	内面・断面に付着物有り	
280	須恵	大甕	31B	6		II					内外面：タタキ		
281	須恵	鉢	33B	2		IVa	27.0			白凝	内外面：ロクロナデ		
282	須恵	鉢	34D	7		III	26.0			白凝	内外面：ロクロナデ		
283	須恵	無台杯	35C	24		II		6.4			内外面：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	墨書「村」カ「材」カ	
284	須恵	無台杯	30A	25		II		6.4			内外面：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	墨書「山」カ	
285	須恵	杯	32B	2		III					内外面：ロクロナデ	墨書「十」カ	
286	土師	無台碗	34C	15		II	8.0	2.2	4.6		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
287	土師	無台碗	34B	6		III	8.4	2.1	4.2	雲	内外面：ロクロナデ 底部：摩擦		
288	土師	無台碗	33B	2		IVa					底部：回転糸切り→穿孔		未製品か
289	土師	蓋	32B	24		III	13.4	28.0			内外面：ロクロナデ 天井部：回転糸切り		
290	土師	無台碗	31B	13		III	12.4	3.8	5.1		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
291	土師	無台碗	33C	3		III	13.2	3.9	5.7		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
292	土師	碗	34・35B			III	10.6	2.9	5.4		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
293	土師	無台碗	31B			III	11.6	3.5	5.4	白凝・海	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
294	土師	碗	33C	12		III	11.6			精良	内外面：ロクロナデ		
295	土師	無台碗	32C	7		III	12.0	4.0	5.2		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
296	土師	無台杯	32B	24・20		III	12.6	4.0	4.9	長・白凝	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
297	土師	碗	32B	5		III・IVa	12.8			長・白	外面：ロクロナデ		
298	土師	無台碗	32C	16-d		IVa	12.0	4.0	4.4		内外面：ロクロナデ 底部：糸切り		

五反田遺跡（平成16年調査） 土器・陶磁器観察表

報告 番号	種別	器形	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
299	土師	無台碗	33B		III	11.9	4.0	4.6	赤・白臙・海	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
300	土師	無台碗	31B		III	12.0	3.7	5.6		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
301	土師	無台碗	33C		III	12.4	4.0	4.7		外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
302	土師	碗	33C		III	13.0				内外面：ロクロナデ	口縁部にタール付着	
303	土師	碗	32B		III			13.2		内外面：ロクロナデ	口縁部にタール付着	
304	土師	碗	31A		II	15.2				内外面：ロクロナデ	裏書「丁」	
305	土師	無台碗	32C		III	14.0	3.1	6.4		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
306	土師	高台	33B		III			17.0		内外面：ロクロナデ		
307	土師	無台碗	31B		III	15.6	4.5	6.0		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り	口縁～胴部中位にスス付着	
308	土師	無台碗	33C		III	14.2	5.0	5.6	石・長・白臙	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
309	土師	有孔碗	34B		III	12.4	3.8	4.6		内外面：マメツ 底部：円孔 マメツ		
310	土師	碗	34B		III	15.6			白臙・砂粒	内外面：ロクロナデ	内面にスス付着	
311	土師	無台碗	32B		III	11.3	4.2	6.4		外面：ナデ、下半ケズリ 内面：ミガキ 底部：回転糸切り→ケズリ		
312	土師	無台碗	32B		III	12.4	4.3	6.8		外面：ロクロナデ、下半ケズリ 内面：ロクロナデ 底部：ケズリ		
313	土師	無台皿	32C		II	11.4	2.2	6.0	石・赤・白臙・砂粒	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り		
314	土師	碗	32C		III					内外面：ロクロナデ	裏書「口」	
315	土師	碗	33C		III					内外面：ロクロナデ	裏書「甲」	
316	土師	碗	32C		II					内外面：ロクロナデ	裏書「大」カ	
317	土師	杯	33C		III			4.8	砂粒	底部：回転糸切り	底部調整後にヘラ記号	
318	土師	無台碗	32B		III			5.6		底部：回転糸切り	底部調整後にヘラ記号	
319	土師	裏	34C	開渠	III	23.2				外面：上半カキス、下半ケズリ（上→下） 内面：カキメ	外面にスス付着	
320	土師	大型裏	33B・33C		III					外面：ロクロナデ、下半ケズリ+タタキ 内面：ロクロナデ、下半タタキ		
321	土師	大型裏	32C		III	22.8			白臙・砂粒	内外面：ロクロナデ		
322	土師	裏	31B・24		III	22.0			白臙・角	内外面：ロクロナデ	外面にスス付着	
323	土師	大型裏	32C		III	20.2			赤・白臙・角・砂粒	外面：ロクロナデ+ケズリ（縦） 内面：ロクロナデ		
324	土師	大型裏	32B		III	22.0				内外面：ロクロナデ		
325	土師	大型裏	32B		IV a	16.8				内外面：ロクロナデ		
326	土師	小型裏	34C		III	12.2				内外面：ロクロナデ	外面にスス付着	
327	土師	小型裏	32B		III	11.2			白臙・砂粒	外面：ヨコナデ 内面：ロクロナデ		
328	土師	小型裏	32C		III	13.2			白臙	内外面：カキメ	内面にスス	
329	土師	小型裏	31B		III	10.8				内外面：ロクロナデ	口縁部内面と外面にスス付着	
330	土師	銅	33B		III				白臙・砂粒	外面：ロクロナデ+タタキ	被熱	
331	灰軸	皿	33C		III	14.6				ロクロ成形 施釉：全面		
332	灰軸	皿	31A	カクラン 下段、排土	III	14.4				ロクロ成形 施釉：口縁～胴部中位		
333	灰軸	皿	32C		II	13.6	3.0	7.2		ロクロ成形 施釉：口縁～胴部中位		
334	灰軸	碗	32B 32C		III			6.7		ロクロ成形 内底面に軸着痕 施釉：ツケガケ、覆付・高台内をのぞく 底部をのぞく		
335	灰軸	碗	35C		III			6.9		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 施釉： 底部をのぞく		
336	灰軸	碗	32B 1・13		II	16.6				ロクロ成形 施釉：回転糸切り→ナデ消す 施釉：内面全面		
337	灰軸	碗	33C 33B		III	13.6				ロクロ成形 施釉：口縁～胴部中位		
338	灰軸	碗	33B 32B 32B 32B 33B		III II III III III	16.1	5.0	7.6		ロクロ成形 底部：ケズリ→ナデ消し 施釉：口縁～胴部中位		
339	灰軸	碗	32B 20		II			7.6		ロクロ成形 底部：回転糸切り→貼付高台	外面にスス付着	
340	灰軸	碗	34B 32B 9		II			7.4		ロクロ成形 底部：回転糸切り 施釉：全面		東濃産
341	灰軸	皿	35C 21・23		III	13.2	2.9	5.2		ロクロ成形 施釉：内外無釉		
342	灰軸	皿	34D 35C 34C		II	14.0	2.6	6.4		底部：回転糸切り→貼付高台 施釉：口縁部のみ		

五反田遺跡（平成16年調査） 土器・陶磁器観察表

報告番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
343	灰釉	平瓶	31B・32B	20・17		III							
344	灰釉	水瓶	31B	3		II							
345	白磁	碗	31B	13		III	14.8						
346	緑釉	皿	32C	20		III	13.2						
347	緑釉	皿	31B 32B	13 4		III			6.6				
348	緑釉	碗	33B	19		III			6.4				
349	緑釉	碗	32C 33C	11 16		III			6.8				
350	緑釉	香炉	32B	8		III							
351	緑釉	無台碗	33B	5		II			4.0				
352	黒色土器	碗	33B	11		III	12.0			石・灰・海 白色粒子			
353	黒色土器	碗	32C	8		III							
354	黒色土器	無台碗	32B	24・25		III	12.0	3.6	4.1				
355	土師	無台碗	31B	20		III	12.6	3.7	5.4				
356	黒色土器	無台碗	32C	7		III	13.4	3.7	5.2				
357	土師	無台碗	32C	7		III	13.1	4.3	4.8	白凝・海			
358	黒色土器	無台碗	31B	11		II	14.2	5.0	6.0				
359	黒色土器	碗	32C	12		II							
360	黒色土器	無台碗	33B	1		IV a	13.2	4.5	6.1				
361	黒色土器	碗	31B	1		II	14.2	5.0	6.0				
362	黒色土器	無台碗	31B	18		III	17.2	5.2	5.4	石・白凝・砂粒			
363	土師	無台碗	32C	7・13		III			7.0				
364	黒色土器	無台碗	33B	19		III			7.4	白凝・砂粒			
365	黒色土器	無台皿	35C	18		III	13.8	2.1	5.4				
366	土師	無台碗	33C	21		III	13.6	3.4	7.4				
367	黒色土器	碗	32B	25		III				白凝			
368	黒色土器	鉢	33B	22・23		III							
369	細文	鉢	33B	24・25		III							
370	細文		35D	2		III							
371	細文		34C	10	SD435	III							
372	細文		34C	23	SD435	III							
373	細文		32B	11		III				海綿骨針			
374	白磁	碗	31C	20		III				海綿骨針			
375	白磁	皿	31C	5		III			9.8				
376	白磁	槽鉢	33C	25		III			5.8				
377	珠洲	鉢	35A	22		II			4.8				
378	青磁	皿			SD662								
379	肥前系陶器	向付			SD662		10.4	3.1	4.9				
380	越中瀬戸	槽鉢			SD662								
381	唐津	槽鉢			SD662								

遺物観察表

五反田遺跡 (H15年調査) 木製品観察表

報告番号	分析番号	種別	器種	樹種	木取り	大グリッド	小グリッド	遺構種別	遺構番号	層位	長さ・口径 (mm)	幅・底径 (mm)	厚さ・器高 (mm)
346	3	木製品	曲物底板	スギ	板目	A区		SX	21	6層	118	42	7
347	4	木製品	曲物底板	スギ	板目	A区		SX	21	6層	99	25	7
348		木製品	曲物側板		板目	A区		SX	21	6層	160	16	2
349		木製品	曲物側板		板目	A区		SX	21	6層	204	10	4
350	2	木製品	刀子形祭祀具?	スギ	板目	A区		SX	21	6層	160	18	5
351		木製品	有孔板		板目	A区		SX	21	6層	153	15	5
352	1	木製品	部材	スギ	柵目	A区		SX	21	6層	145	32	25
353		木製品	木片		板目	5C	17	SX	526	4層	187	19	11
354		木製品	部材片		削り出し	5C	17	SX	526	4層	172	8	8
355	5	木製品	柱材	スギ	芯外し	9C	20	P	315	1層	96	142	54
356	5	木製品	柱材	スギ	芯外し	9C	20	P	315	1層	154	106	79
357	8	木製品	柱根	モクレン属	芯外し	10C	19	P	44		650	162	
358	9	木製品	板材	スギ	板目	A区		SX	21	6層	871	193	30
359	7	木製品	柱材	スギ		A区		SX	21	6層	2997	103	90

五反田遺跡 (H16年調査) 木製品観察表




報告番号	分析番号	種別	器種	樹種	木取り	大グリッド	小グリッド	遺構種別	遺構番号	層位	長さ・口径 (mm)	幅・底径 (mm)	厚さ・器高 (mm)
382	1	木製品	柱根	キハダ	芯持丸木	34B	4	P	564		318	158	117
383	4	木製品	柱根	キハダ	ミカン割り?	31B	23	P	8		344	115	82
384	3	木製品	柱根	オニグルミ	芯持丸木	33C	22・17	P	250		500	97	73
385	2	木製品	柱根	ブナ属	芯持丸木	34B	16	P	563		485	140	133
386	6	木製品	柱根	ヤナギ属	半裁	31B	21	P	76		174	124	78
387	8	木製品	柱根	エノキ属	芯持丸木	33B	15	P	394		250	129	115
388	5	木製品	柱根	ヤナギ属	芯持丸木?	31B	25	P	319		148	124	97
389	15	木製品	曲物底板状	スギ	柵目	37・380A				III	128	128	7
390	14	木製品	曲物底板状	スギ	柵目			SD	435		93	25	10
391	13	木製品	曲物底板状	スギ	板目	34B	3			IV a	65	12	6
392	18	木製品	板状	スギ	柵目	32C	3			III	120	29	5.0~8.0
393	16	木製品	板状	スギ	柵目	35B	17			III	92	45	7
394	19	木製品	板状	スギ	柵目	32C	8			III	92	35	5
395	21	木製品	板状	スギ	柵目	34D	1	SD	435		92	23	10
396	22-a	木製品	板状	-	-	34D	1	SD	435		73	27	8
397	17	木製品	板状	スギ	柵目	34C	13	SD	435		63	20	5
398	22-c	木製品	板状	スギ	柵目	34D	1	SD	435		90	39	20.0~29.0
399	22-b	木製品	板状	スギ	板目	34D	1	SD	435		51	27	5
400	23	木製品	板状	スギ	柵目	33B	5	SK	434	1	220	25.0~57.0	10
401	25	木製品	木筒	-	-	32C	19			II	150	7.0~20.0	2.0~5.0
402	11	木製品	漆器椀	ブナ属	横木取	34C	13	SD	435	砂層		80	
403	10	木製品	漆器椀	ケヤキ	横木取	31C	15			III			
404	12	木製品	漆器椀	ケヤキ	横木取	34D	3			III		50	
405	20	木製品	板状	スギ	角材	34C	14	SD	435		84	20	17
406	24	木製品	二又状	ケヤキ	Y字状芯持丸木	34C	10	SD	435	1	95	24.0~74.0	17.0~30.0

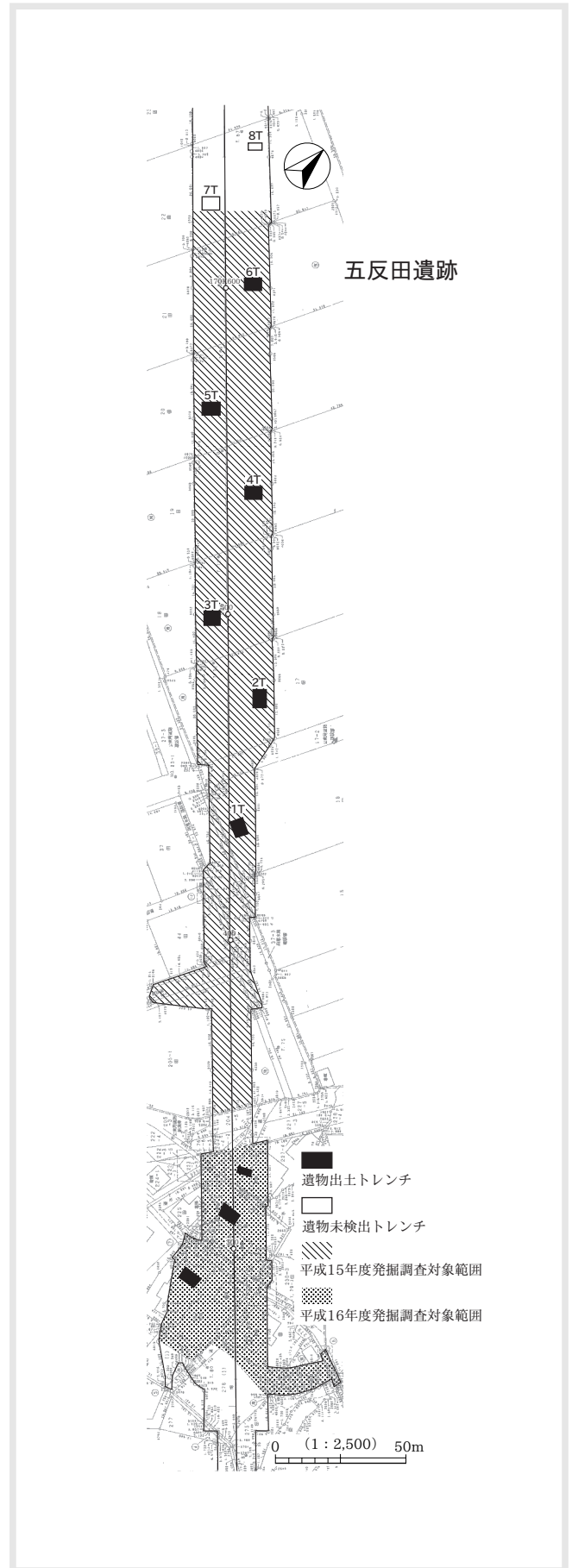
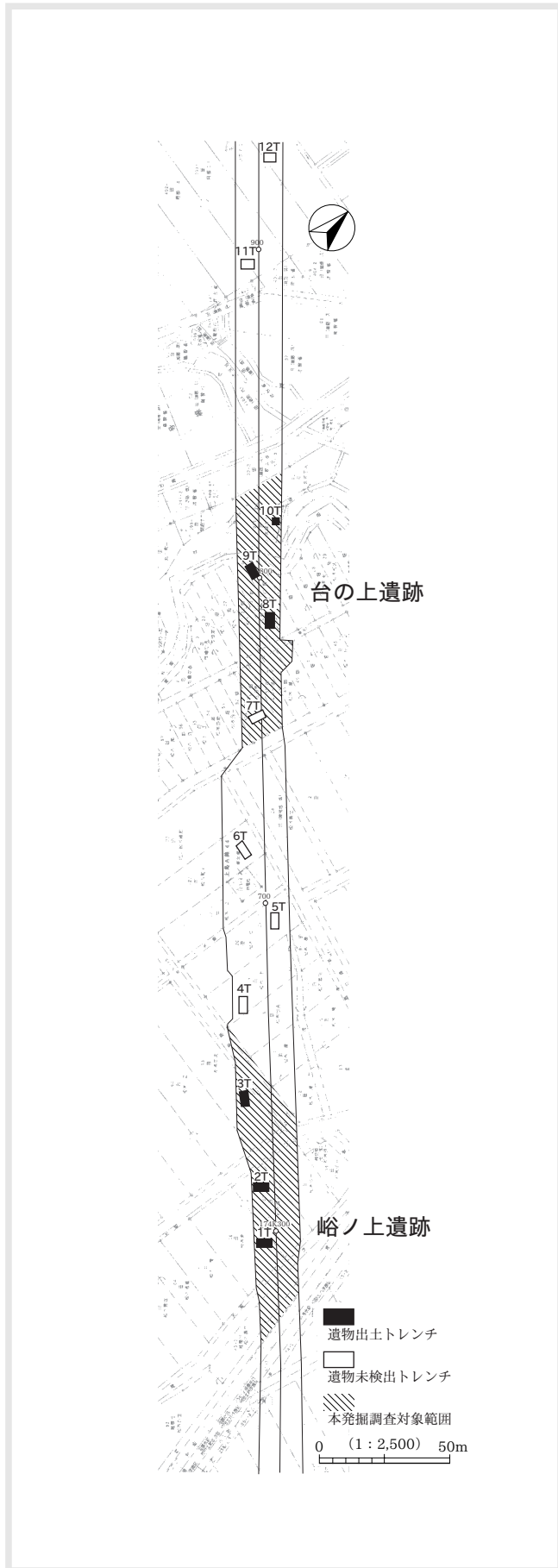
五反田遺跡 (H16年調査) 石製品・金属製品・水晶玉観察表

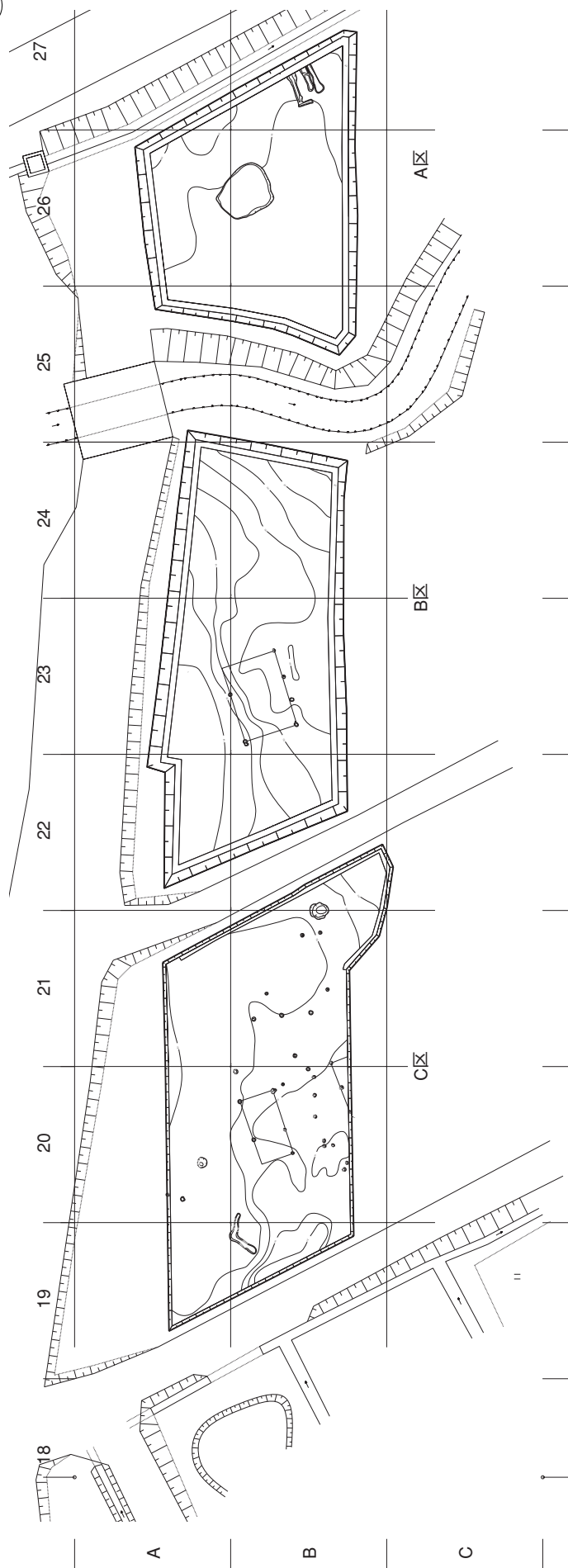
報告番号	種別	分類	石材	大グリッド	小グリッド	遺構種別	遺構番号	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
407	金属製品	刀子	-	32C	15			III	(49)	7	3	
408	金属製品	和鏡	-			SD	435		(93)	(55)	2~3	
409	金属製品	釘?	-	31B	25	SK	50	1	127	21	9	
410	銭貨	乾元重寶	-	排土					24	24		裏面無文
411	銭貨	寛永通宝	-	31C					22	22		裏面無文
412	銭貨	寛永通宝	-	35C				III	22	22		裏面無文
413	銭貨	寛永通宝	-	31C					27	27		裏面11波
414	銭貨	天保通寶	-	33B	14			III	48	32		裏面当百
415	石製品	砥石	凝灰岩	31B	1	P	194		52	60	46	
416	石製品	砥石	凝灰岩	32B	3	SX	211	III	70	50	29	
417	石製品	砥石	砂岩	34C	4			III	55	55	14	
418	石製品	砥石	凝灰岩	32B	15	SD	178		53	37	28	
419	石製品	砥石	凝灰岩	31B	13			III	61	27	19	
420	石製品	砥石	粘板岩	32B	12	SD	178		57	31	4	
421	石製品	砥石	砂岩			SD	713		63	36	14	
422	石製品	砥石	凝灰岩			P	92		44	29	22	
423	石製品	砥石	凝灰岩			SD	435		84	34	35	
424	石製品	砥石	凝灰岩	31B	16			II	80	50	24	
425	石製品	砥石	凝灰岩	34C	13	SD	435		70	34	45	
426	石製品	砥石	凝灰岩	34B	15	SX	386	1	69	46	21	
427	石製品	紡錘車	-	33C	7	SD	176		47	-	18	
428	石製品	水晶玉	-			SK	50		19	(10)	(12)	

図 版

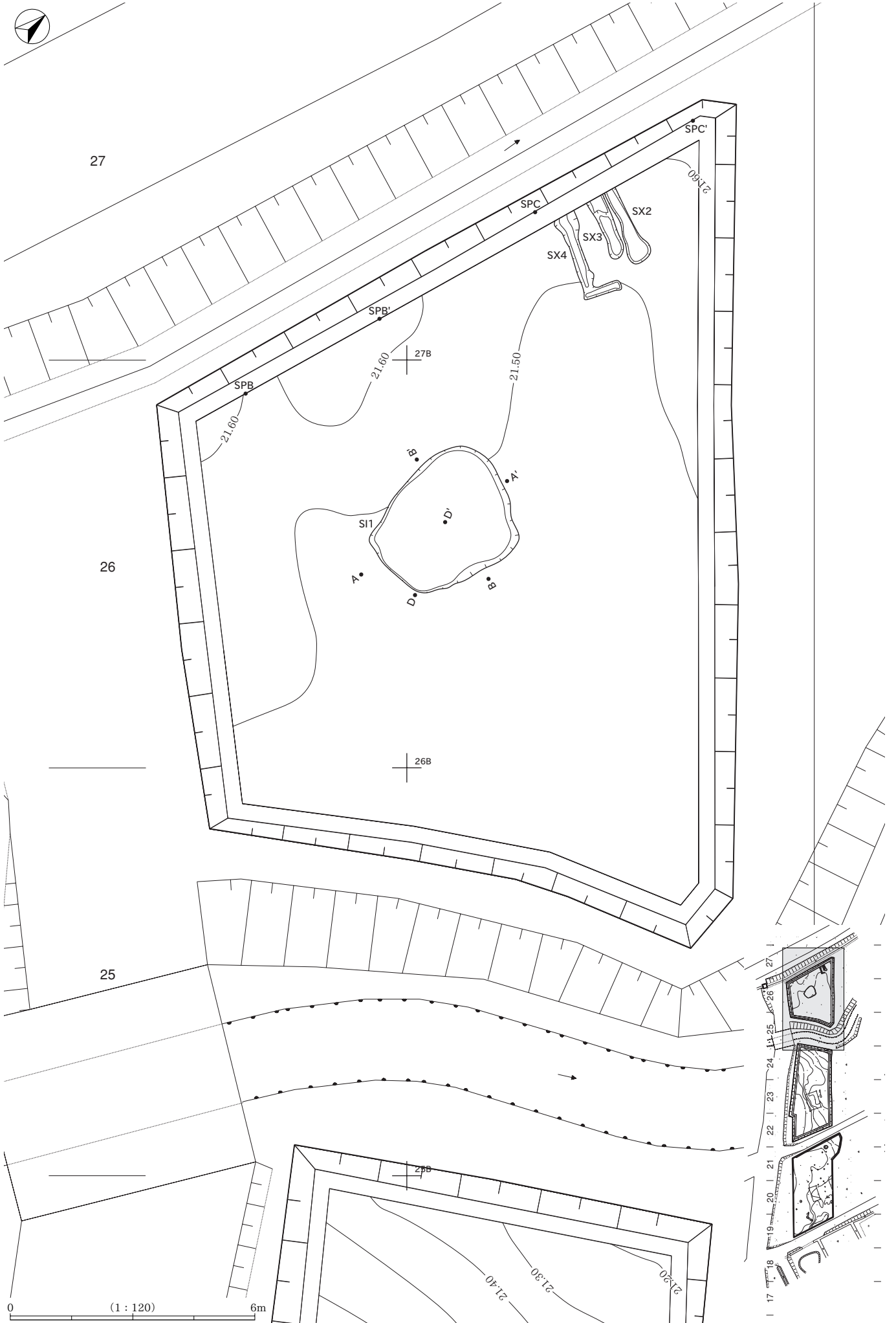
凡 例

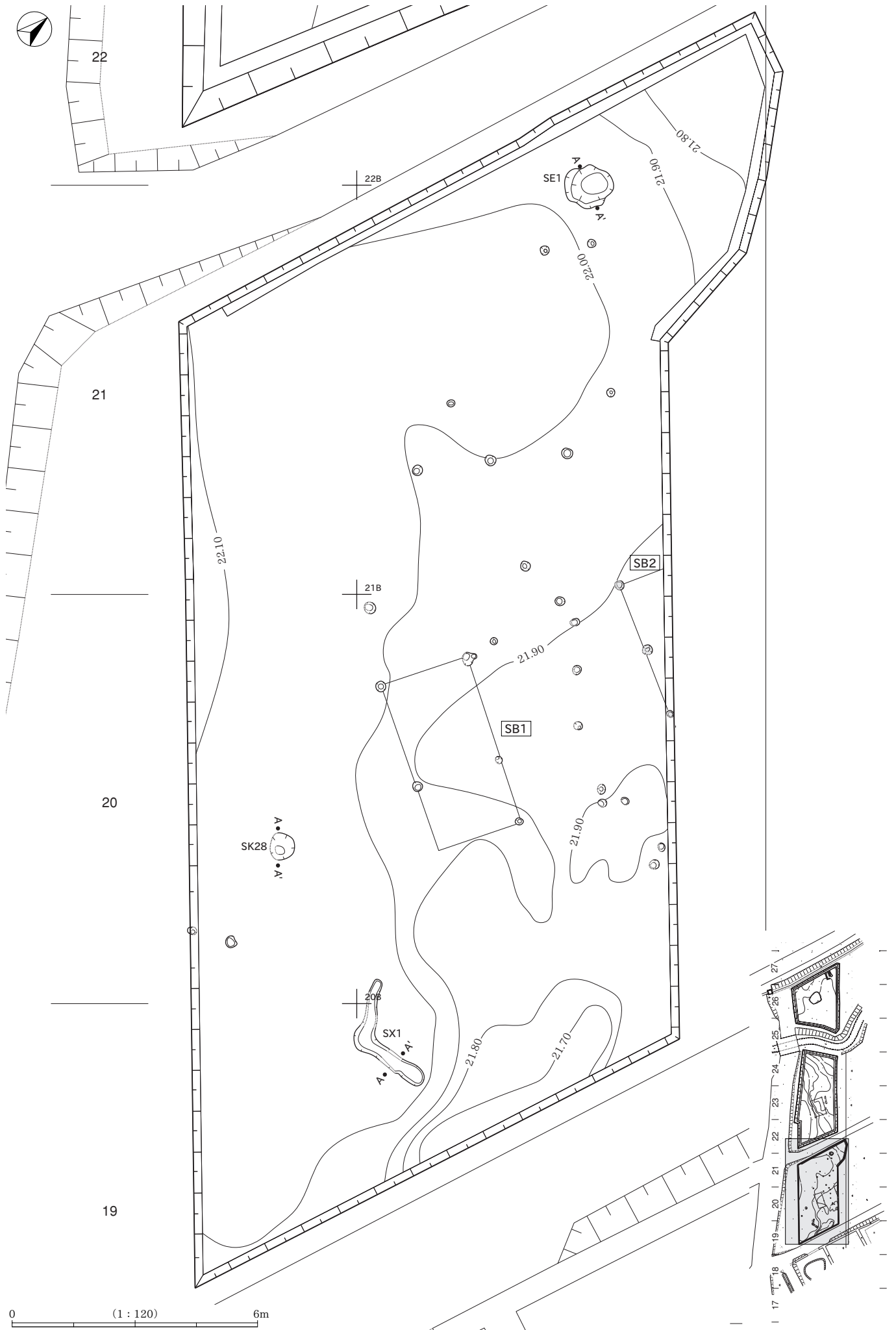
- 1 古代の土器は、種別ごとに次のような表記をした。
須恵器＝断面塗りつぶし
土器＝断面白抜き
灰釉陶器＝断面 、(灰)と注記
緑釉陶器＝断面 、(緑)と注記
白磁＝(白)と注記
黒色土器＝黒色部 
- 2 土器の口縁部実線を中心部両端で切っている場合、
残存率が低いものから口径を復元したものである。
- 3 木製品の木目は、木取りを表示したものであり、実
際の年輪幅とは異なる。



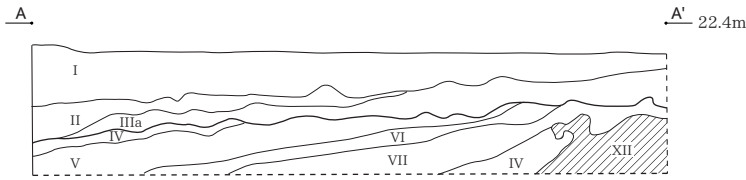


0 (1:400) 20m

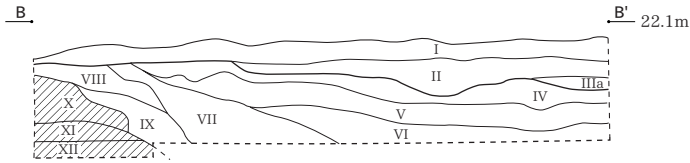




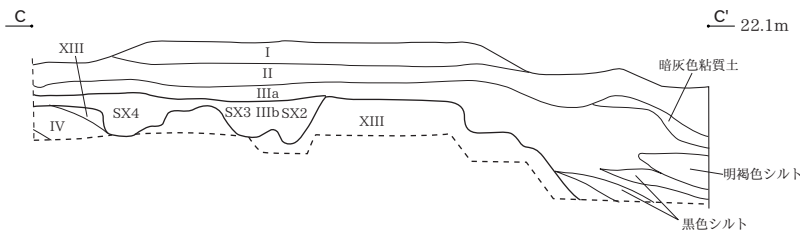
B区東壁セクション



A区西壁セクション

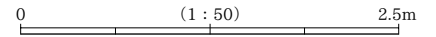


A区西壁, SX2・3・4セクション

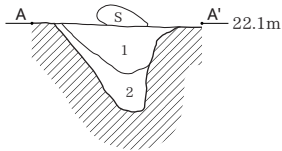


壁セクション

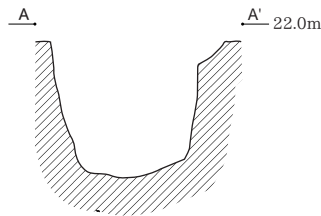
I	耕作土	
II	淡褐色シルト	しまり強い・粘性なし
IIIa	暗灰色粘質土	しまりなし・粘性あり
IIIb	暗灰色シルト	しまりなし・粘性ややあり
IV	灰白色粘質土	しまりなし・粘性あり
V	暗青灰色粘質土	しまりなし・粘性あり
VI	黒灰色粘質土	しまりなし・粘性あり
VII	暗灰色粘質土	しまりなし・粘性あり
VIII	黒褐色シルト	しまりなし・粘性なし
IX	黒褐色シルト	しまりなし・粘性ややあり
X	暗灰色シルト	しまり強い・粘性なし
X I	淡黄色粘質土	しまりなし・粘性あり
X II	暗灰色砂質土	しまり強い・粘性なし
X III	黄橙色砂質土	しまり弱い・粘性ややあり



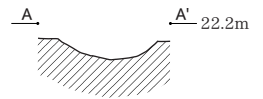
SK28



SE1



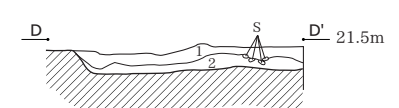
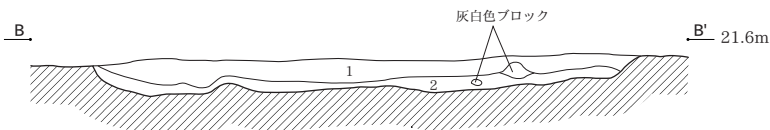
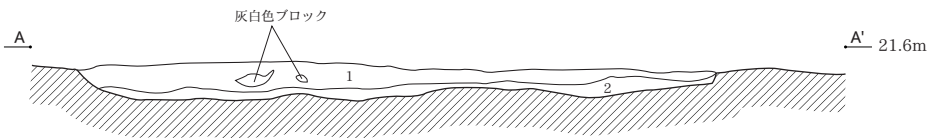
SX1



SK28

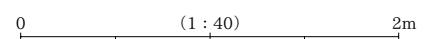
- 1 黒灰色シルト 黄色土ブロックを含む
- 2 暗灰色粘質土 黄色土・黒色土ブロックを含む

SI1

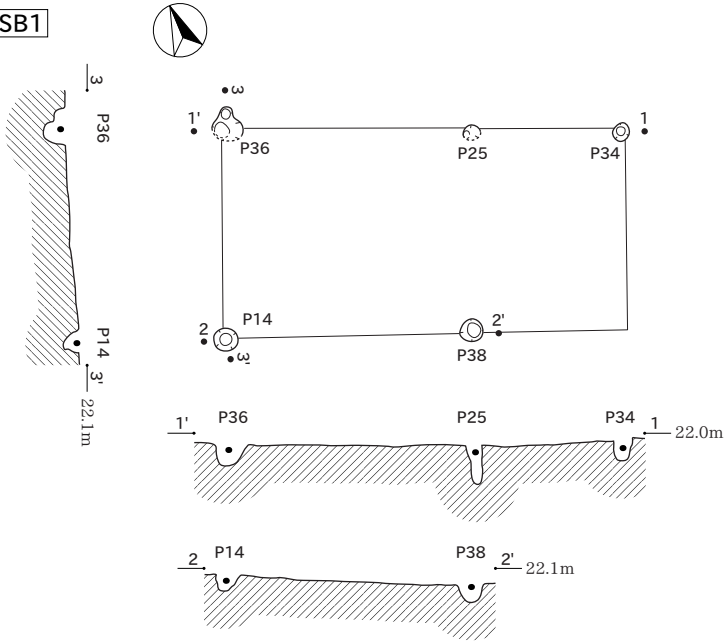


SI1

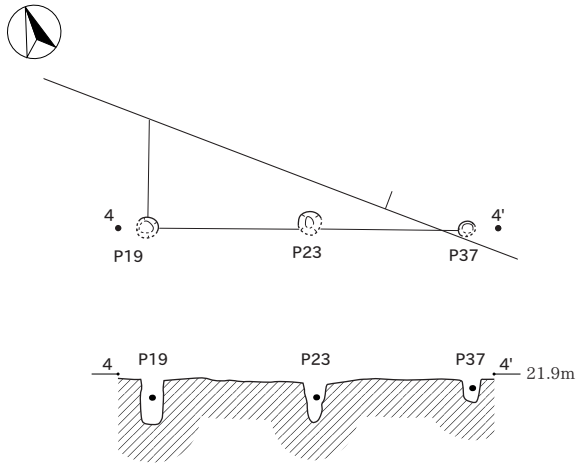
- 1 暗灰色シルト 褐色・白色粒子・炭化物ブロックを含む IIIb層に近似
- 2 黒色シルト 暗青灰色土 (V層)・黒灰色土 (VI層) ブロックを含む



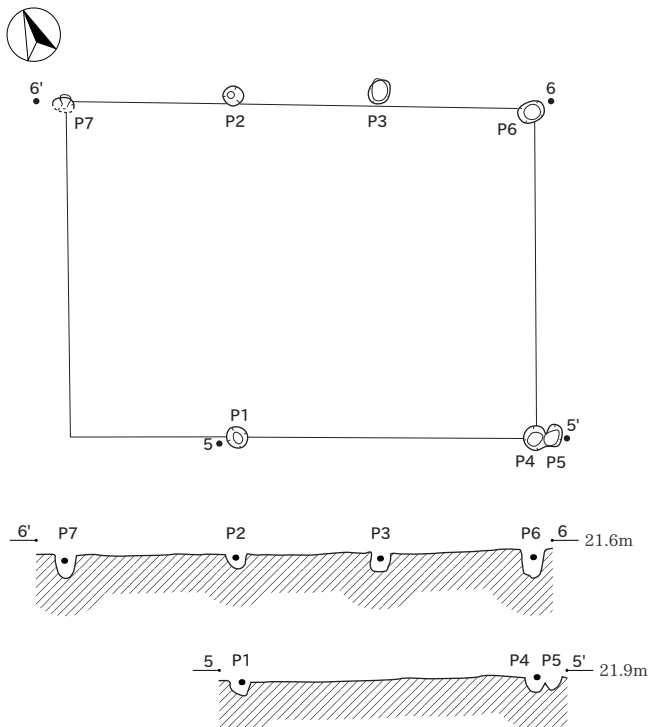
SB1



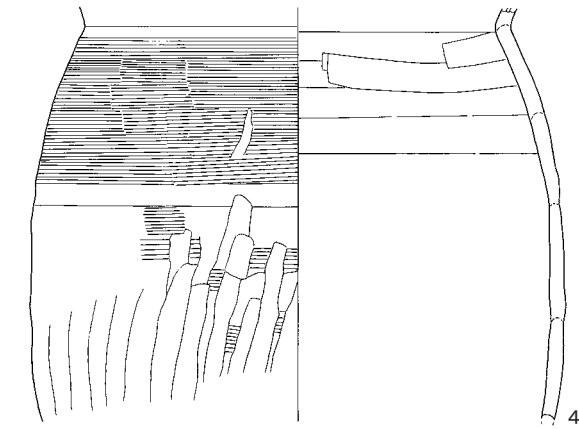
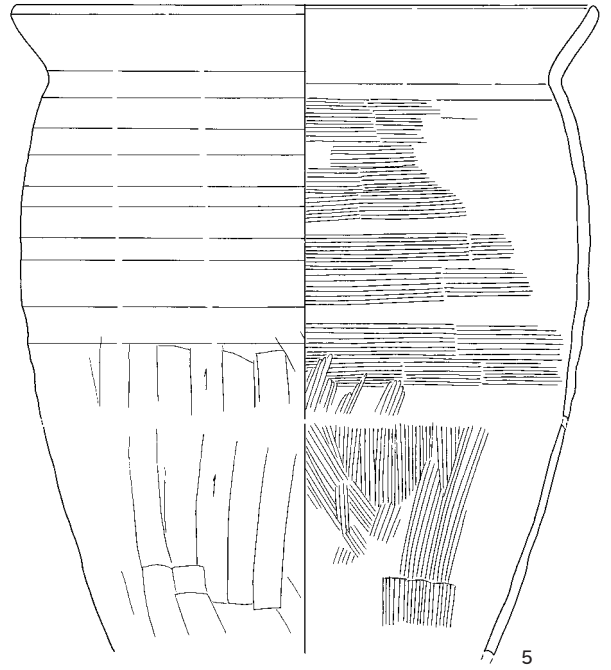
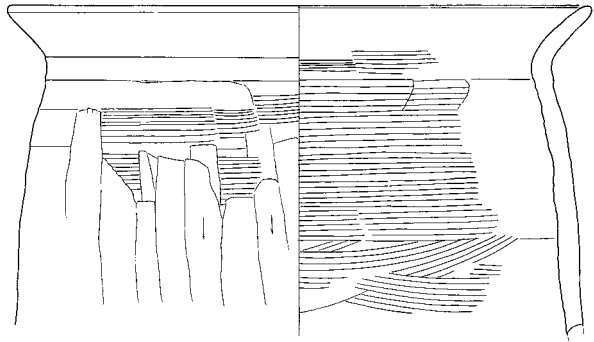
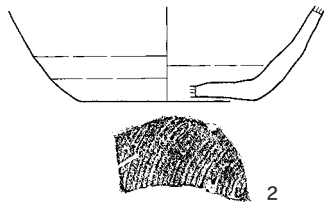
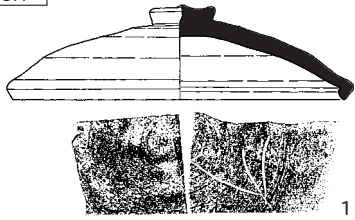
SB2



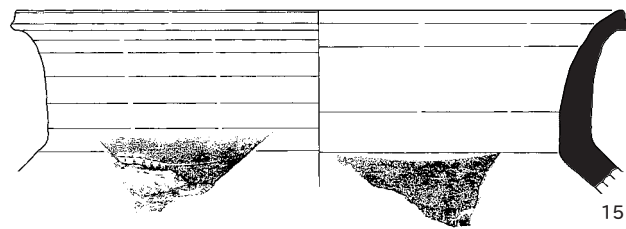
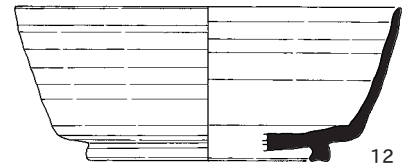
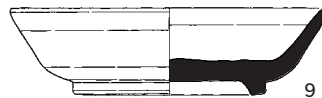
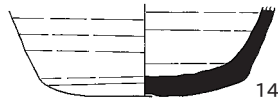
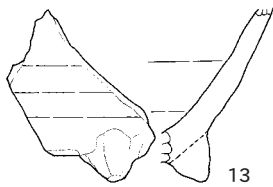
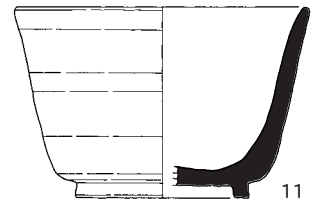
SB3



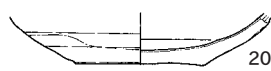
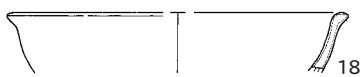
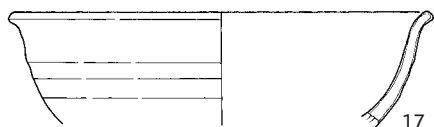
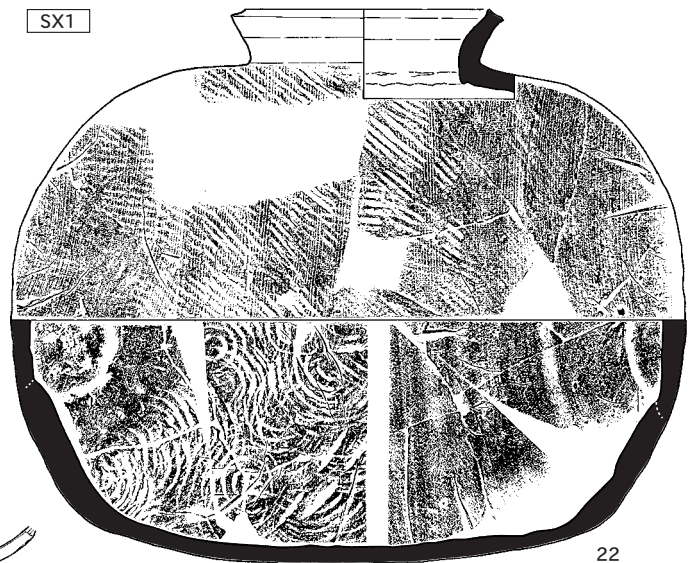
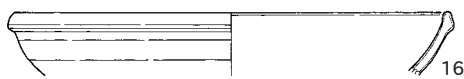
SI1



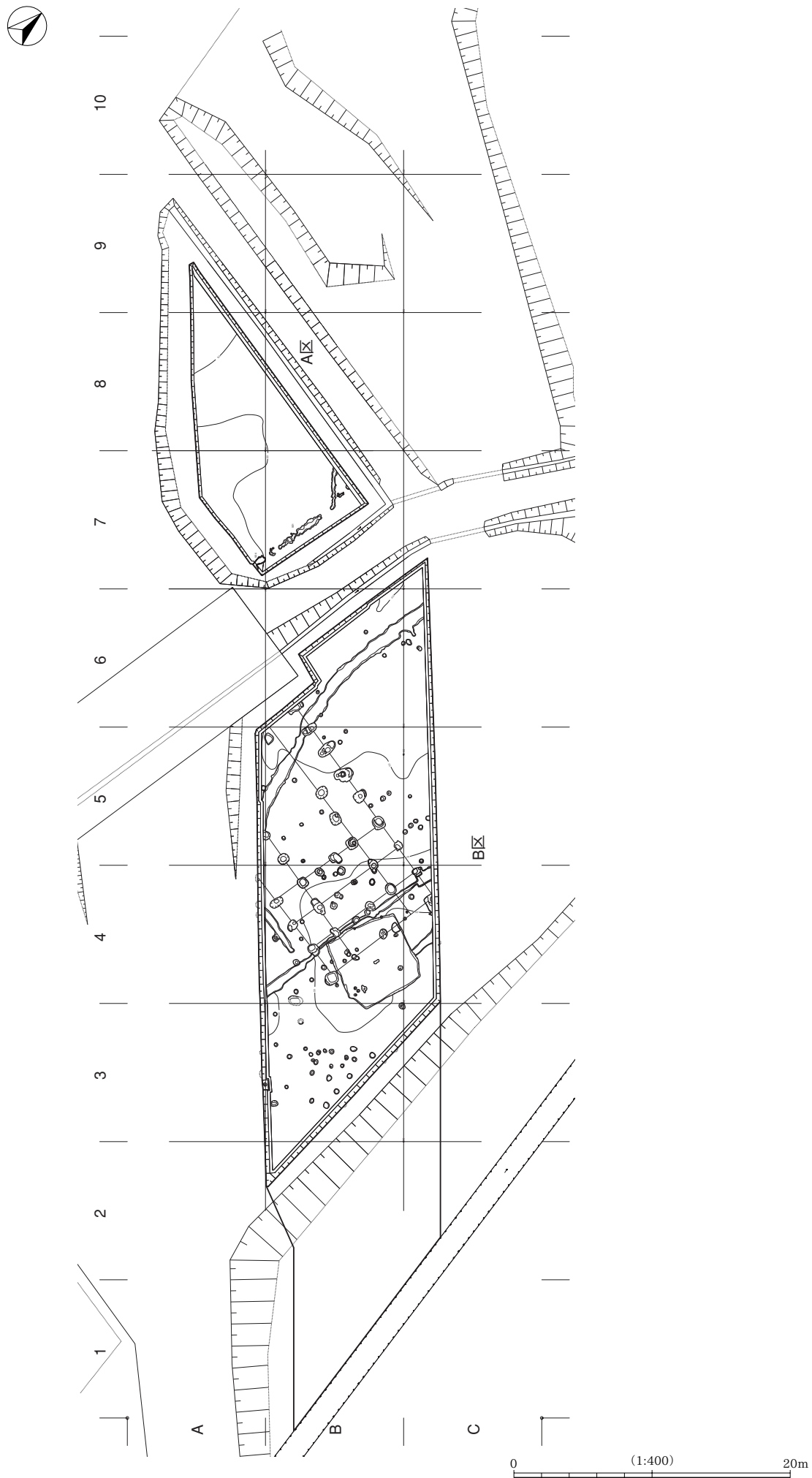
包含層

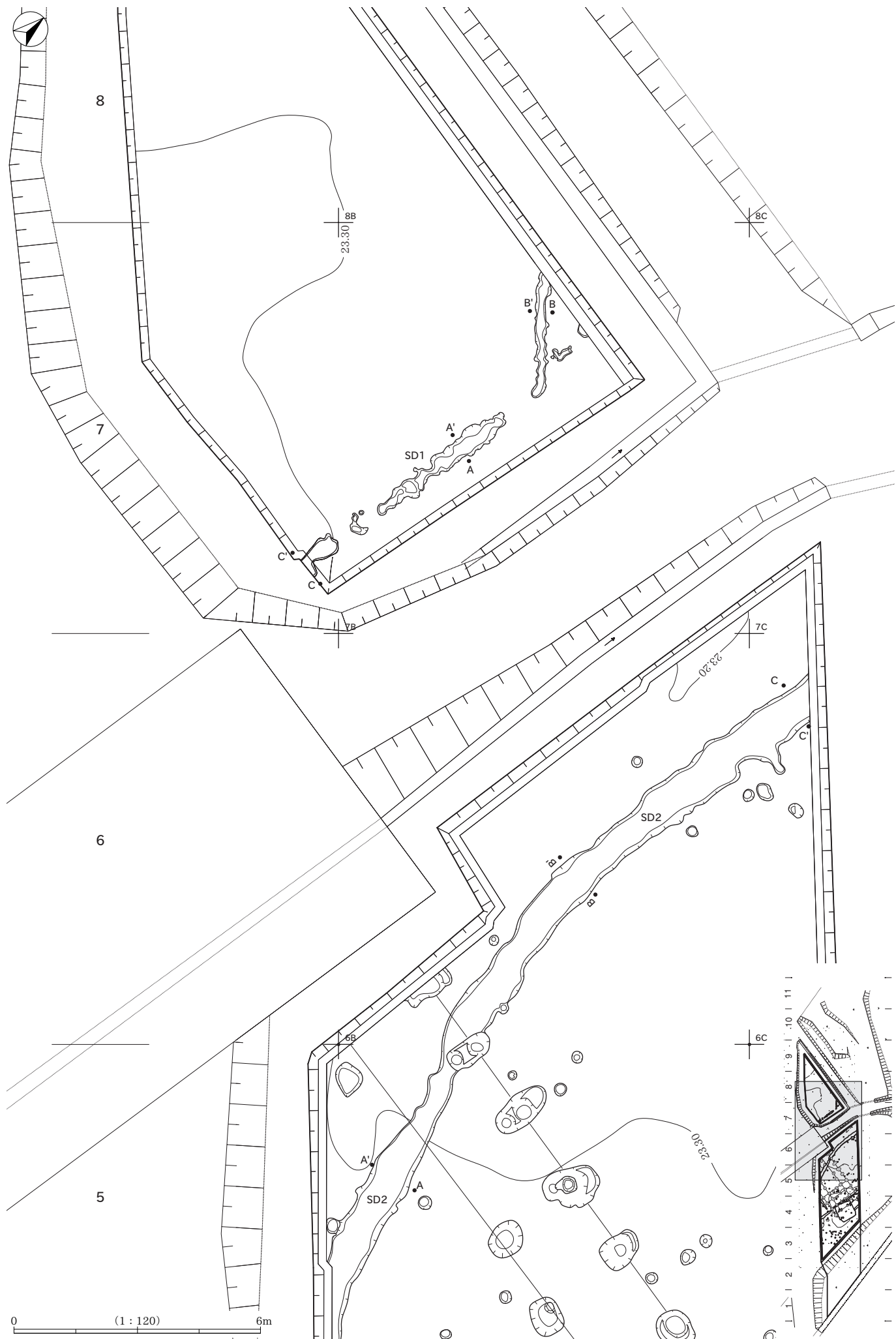


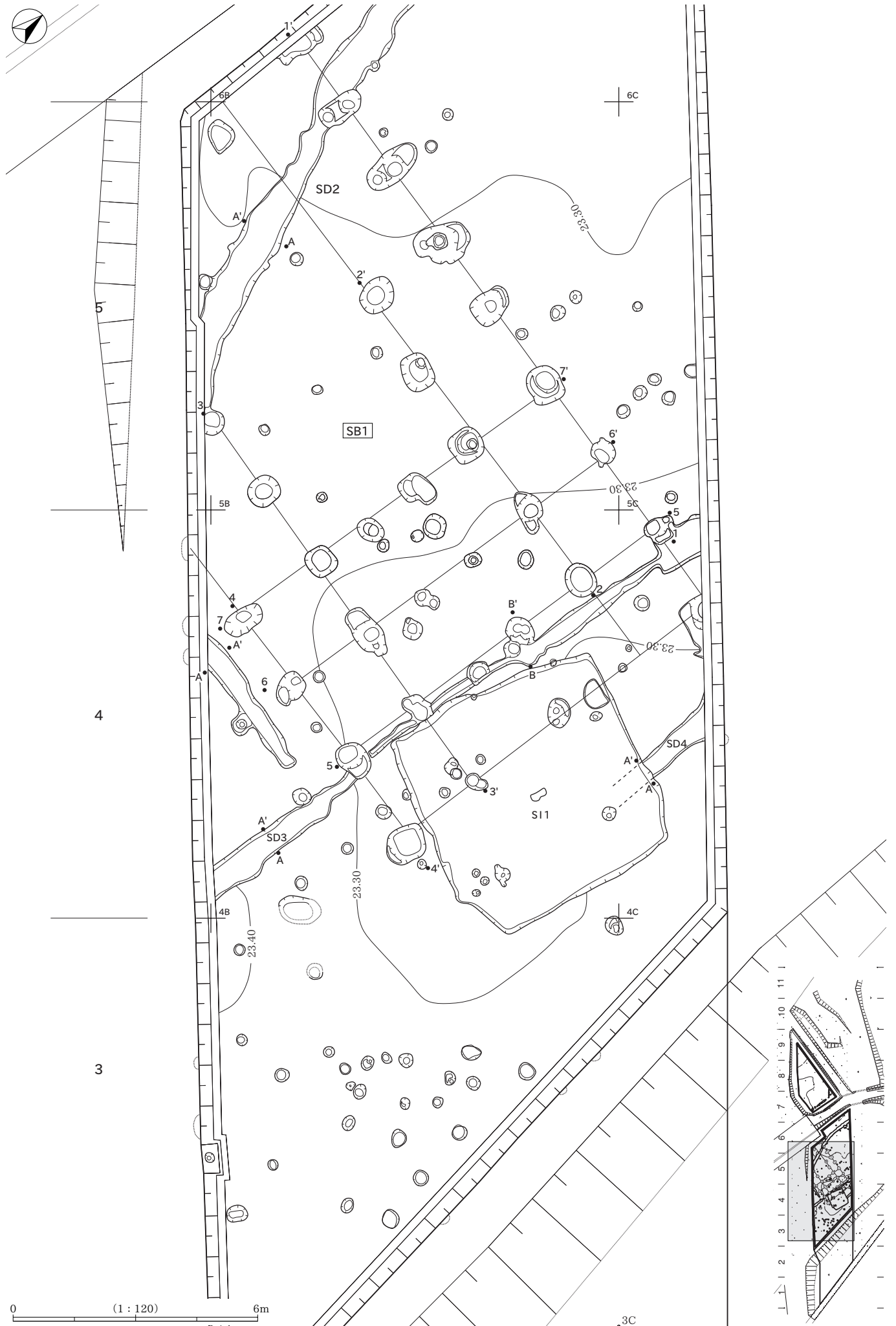
SX1



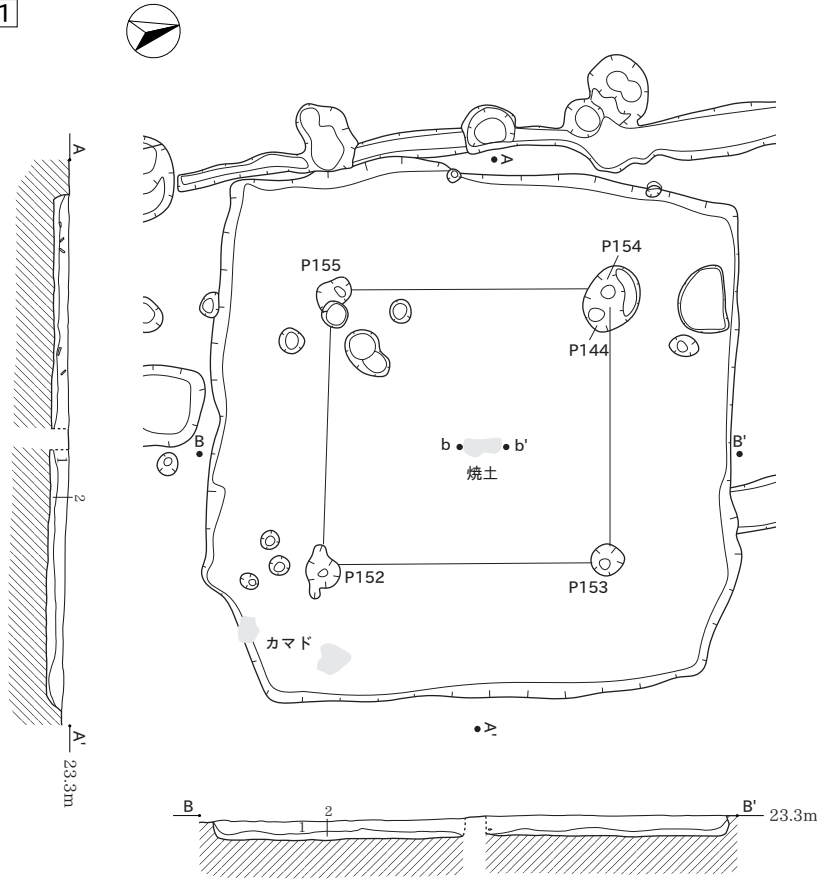
0 (1:3) 15cm







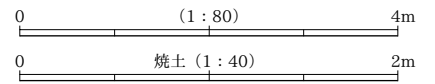
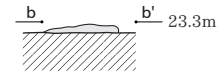
SI1



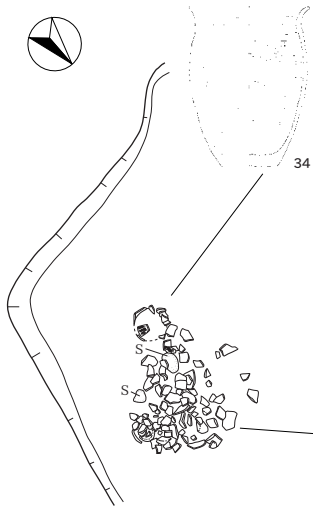
SI1

- 1 暗赤褐色シルト しまりあり・粘性なし
- 2 黒色シルト しまりあり・粘性なし 焼土粒子・炭化物粒子を含む

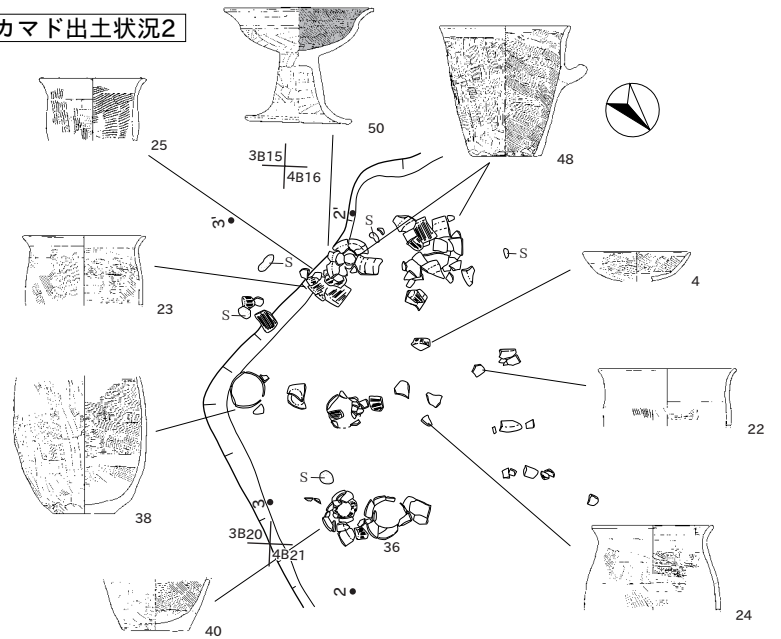
焼土ブロック



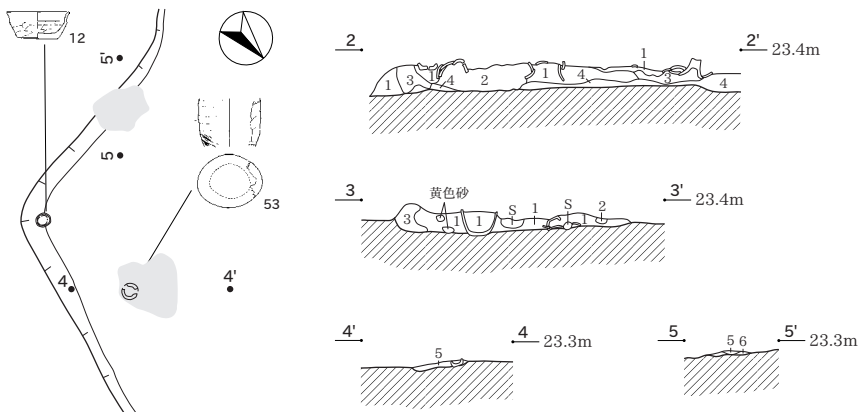
カマド出土状況1



カマド出土状況2

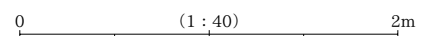


カマド出土状況3

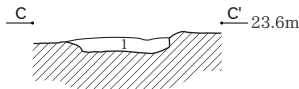
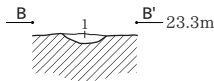
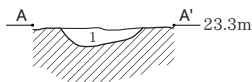
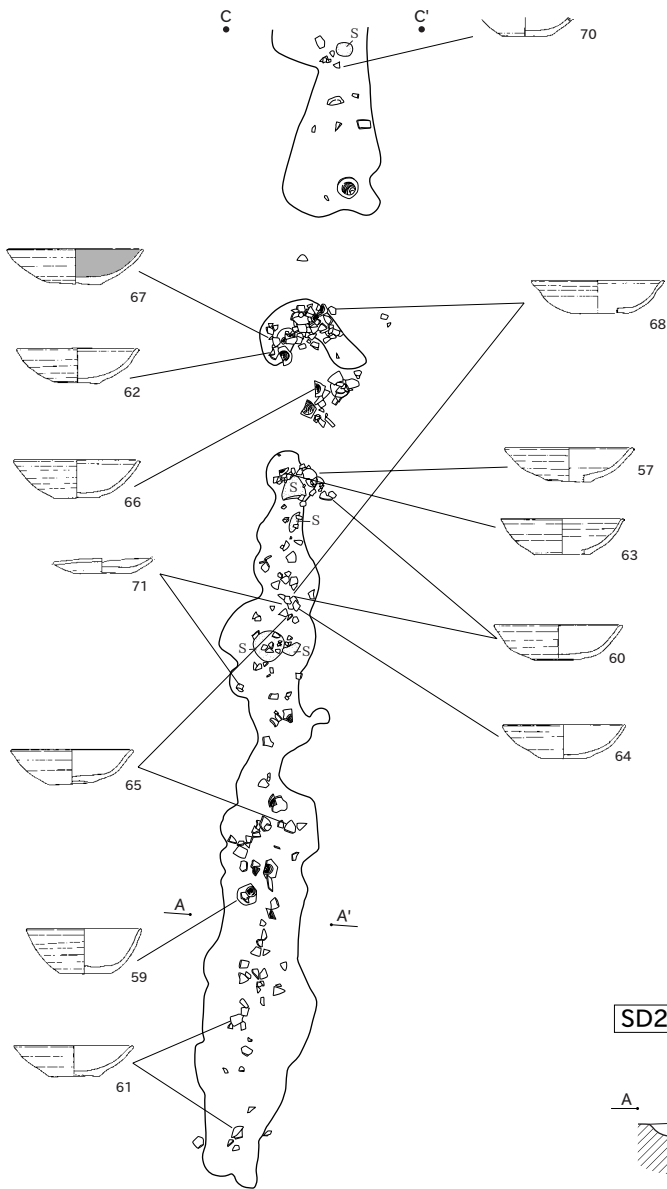


カマド

- 1 赤黒色シルト 黄色砂・焼土・炭粒子を混入する
- 2 赤褐色シルト 焼土を多く含む
- 3 黄褐色シルト 黄色砂を主体に焼土ブロック混入
- 4 黒色シルト
- 5 焼土 赤褐色を呈し、非常に硬い
- 6 暗褐色シルト 炭化物・焼土粒子を含む



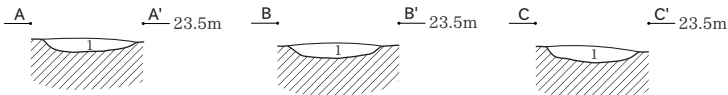
SD1



※セクションポイントは図版11に対応

SD1
1 明黄褐色砂質土 砂・シルトを多量に含む

SD2



※セクションポイントは図版11に対応

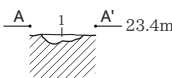
SD2
1 灰赤色粘質土 しまりなし・粘性ややあり

SD3

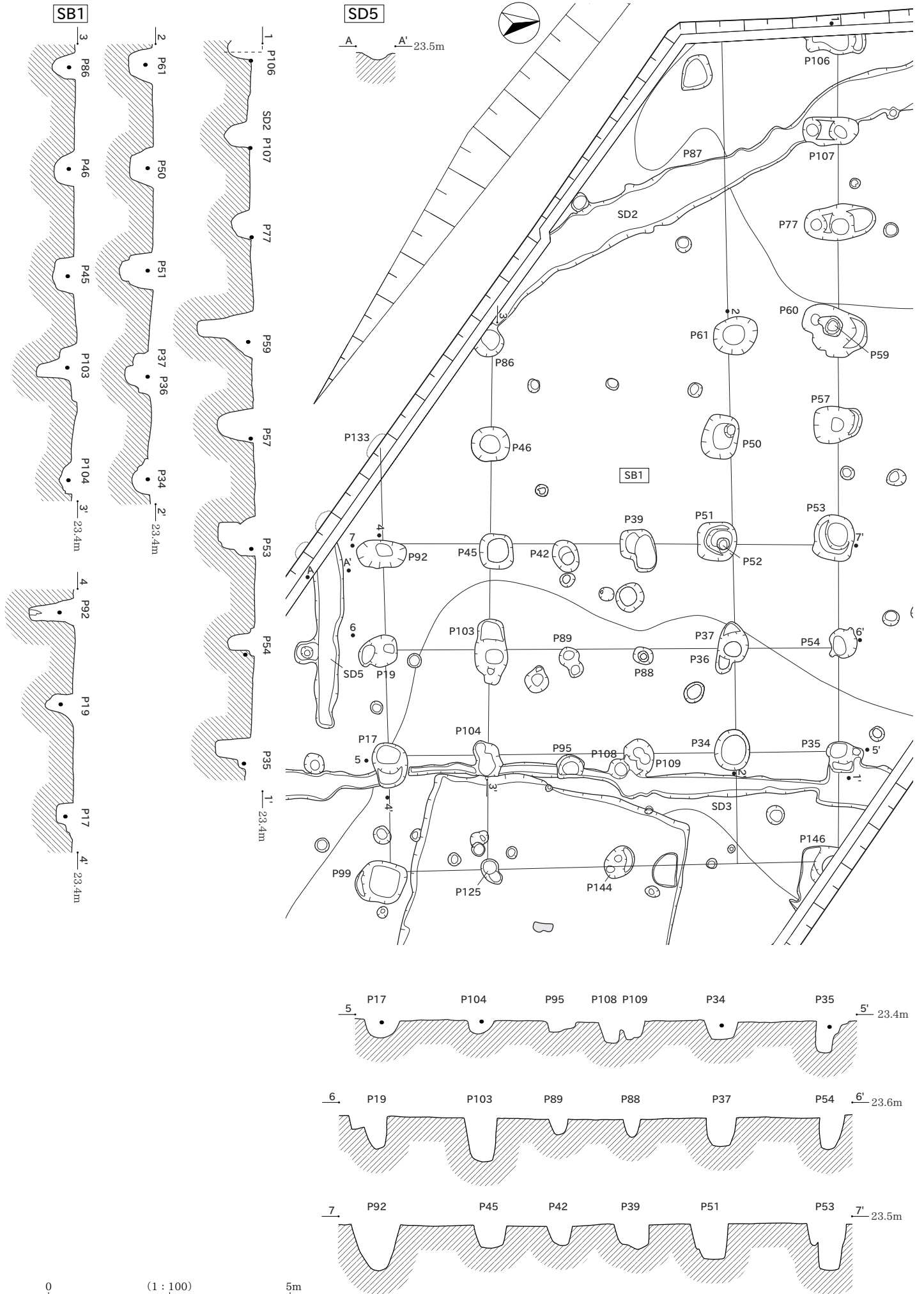


SD3
1 灰赤色粘質土 しまりなし・粘性ややあり
P16
1 暗赤褐色粘質土 しまりなし・粘性ややあり
P109
1 赤黒色シルト しまりあり・粘性なし
2 灰赤色粘質土 しまりなし・粘性ややあり

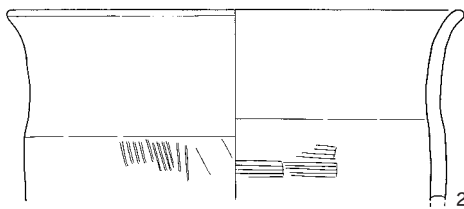
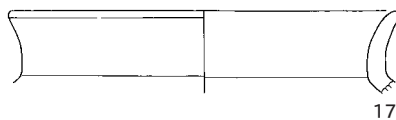
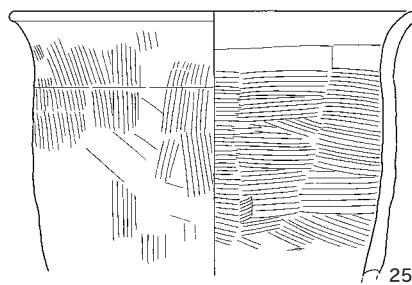
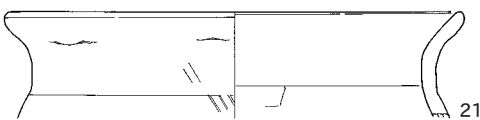
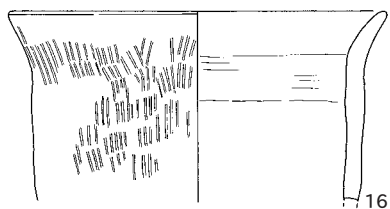
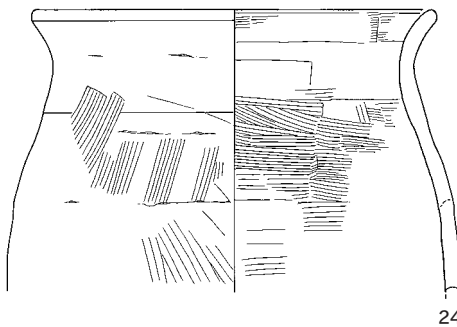
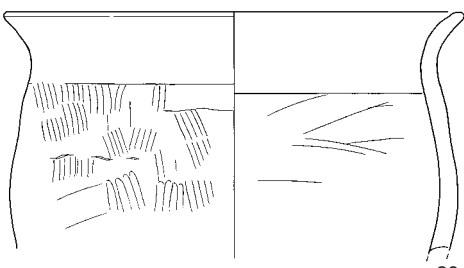
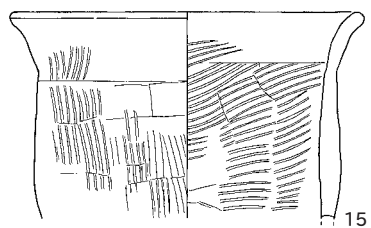
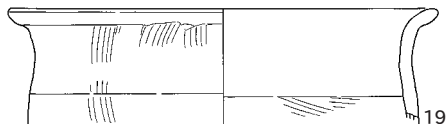
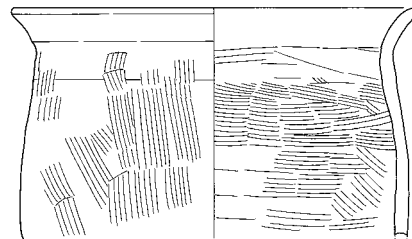
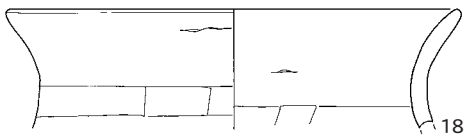
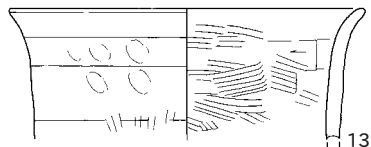
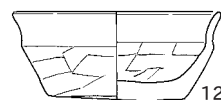
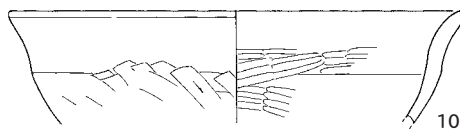
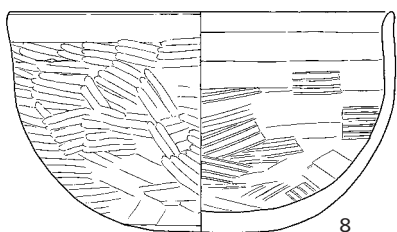
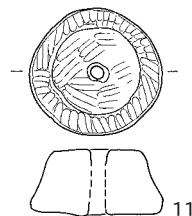
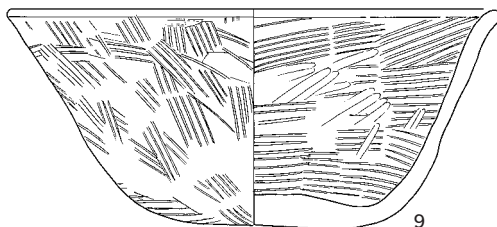
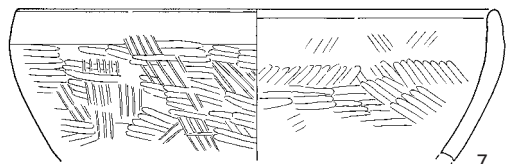
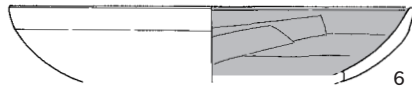
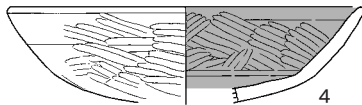
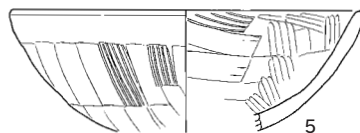
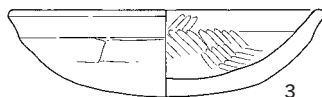
SD4



SD4
1 赤褐色シルト しまりあり・粘性なし
SI1の覆土よりも赤味が強い

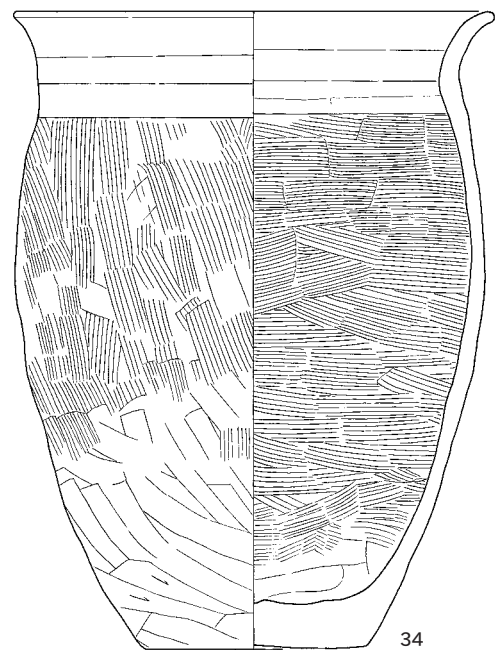
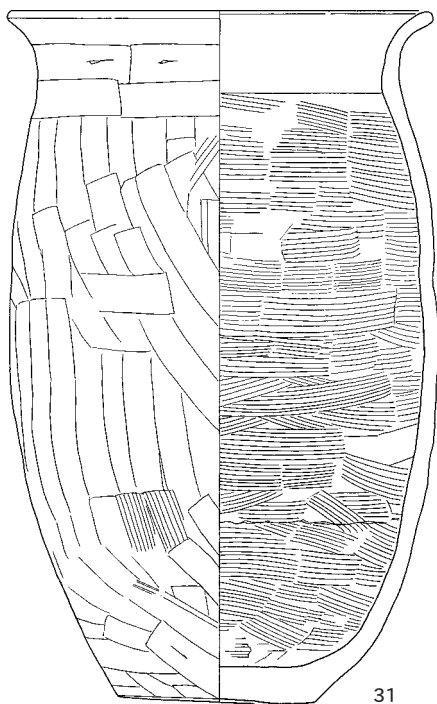
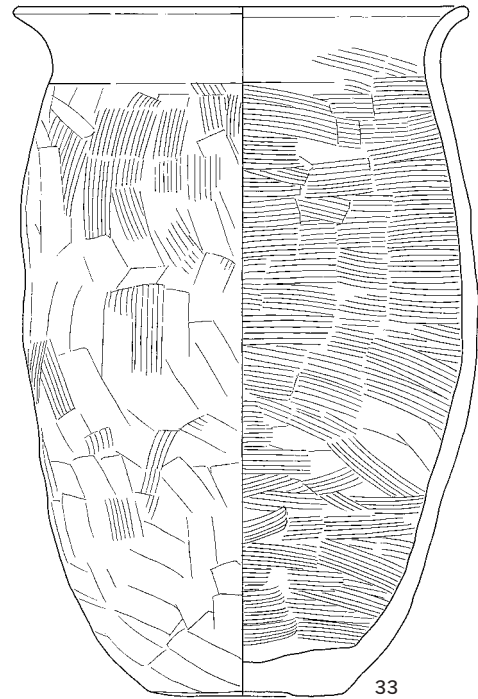
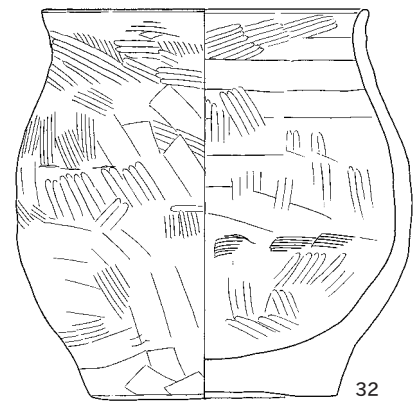
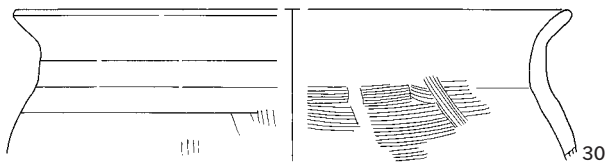
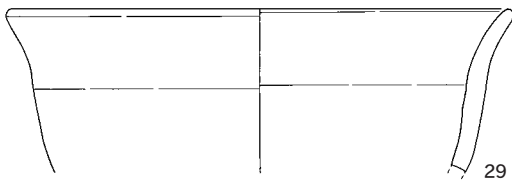
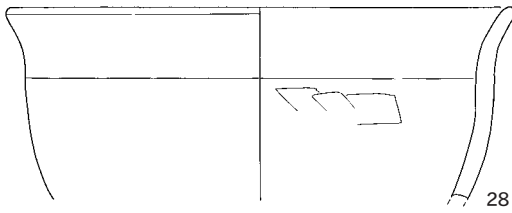
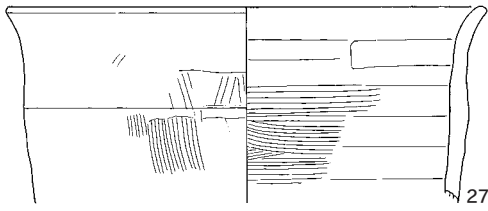
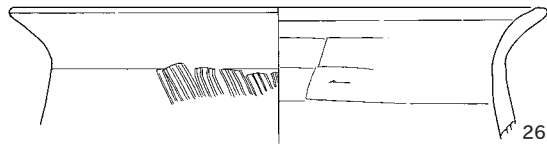


SI1



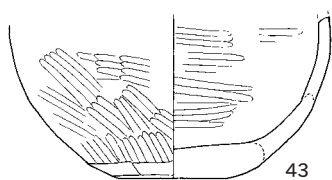
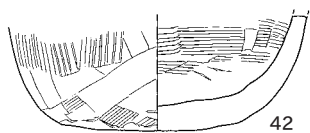
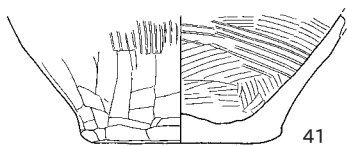
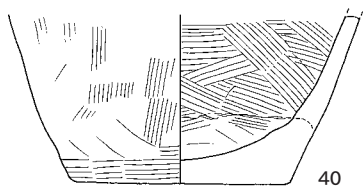
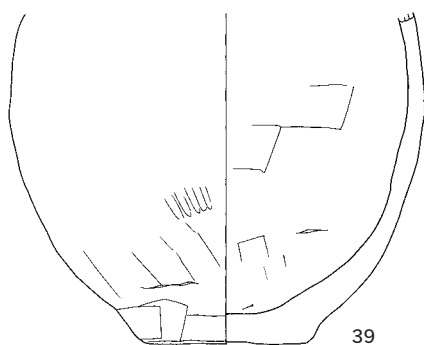
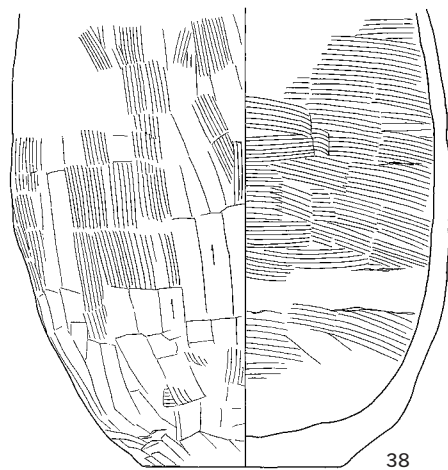
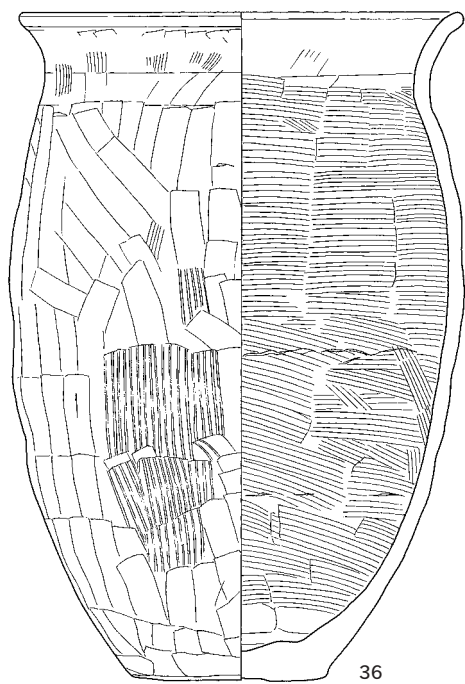
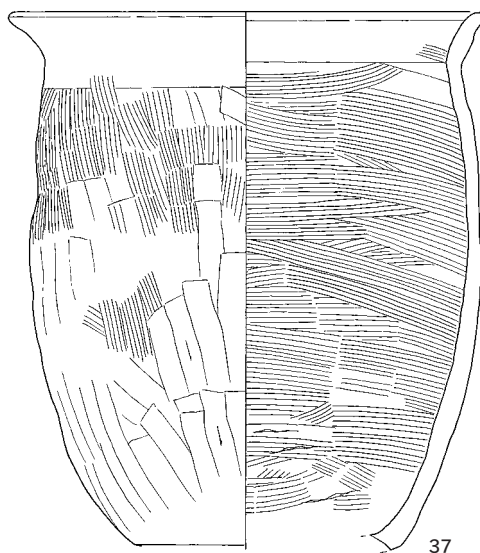
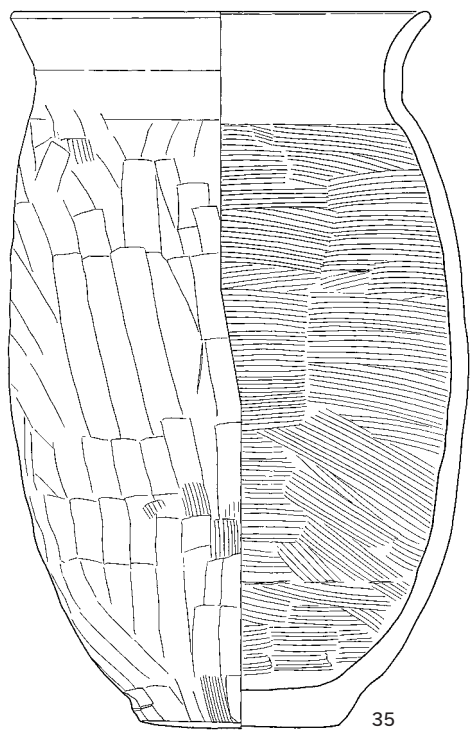
0 (1:3) 15cm

SI1



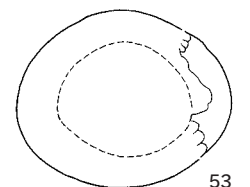
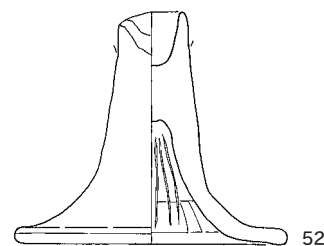
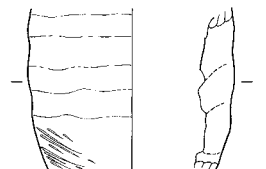
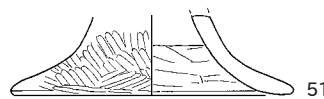
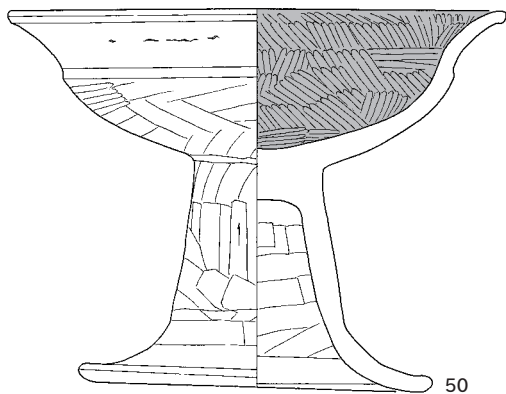
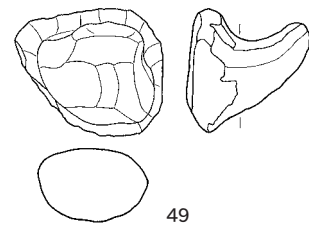
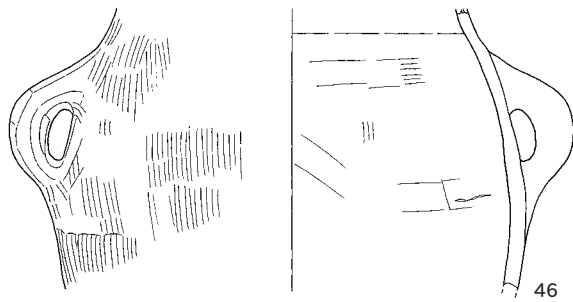
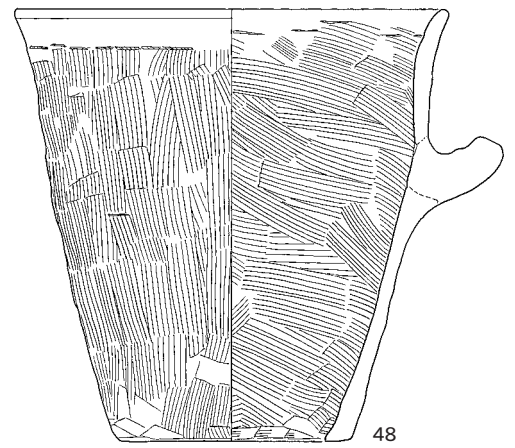
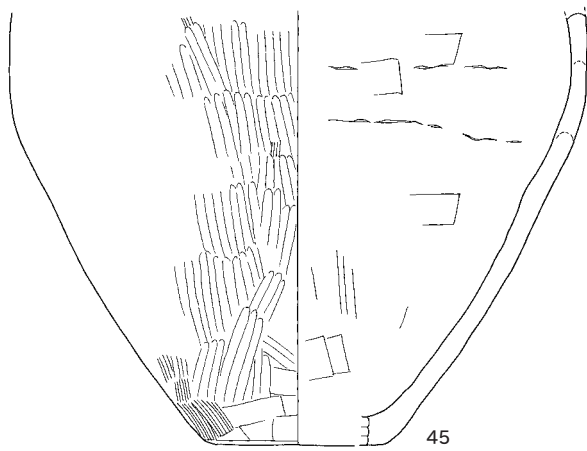
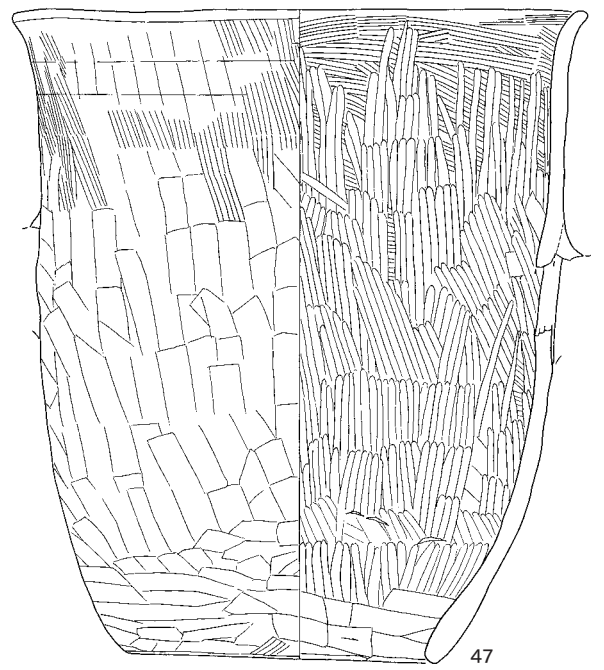
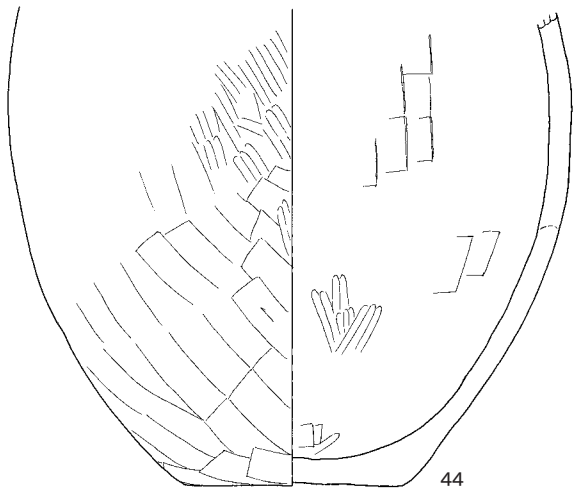
0 (1 : 3) 15cm

S11

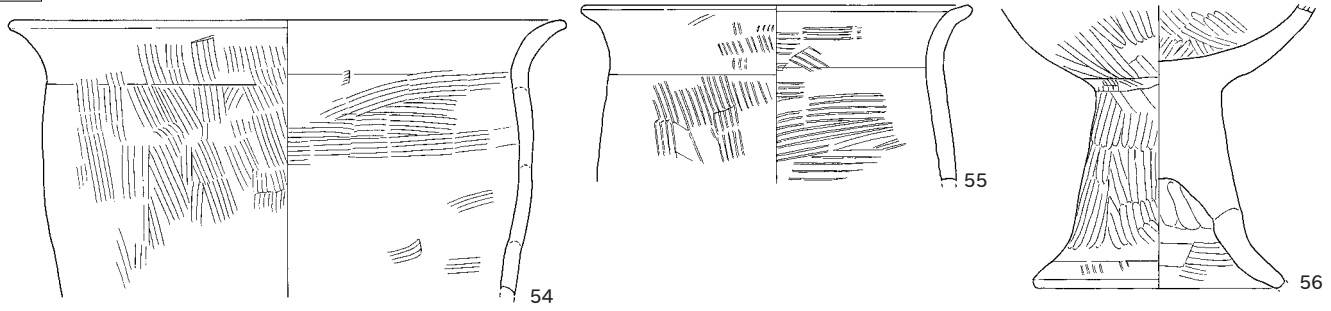


0 (1 : 3) 15cm

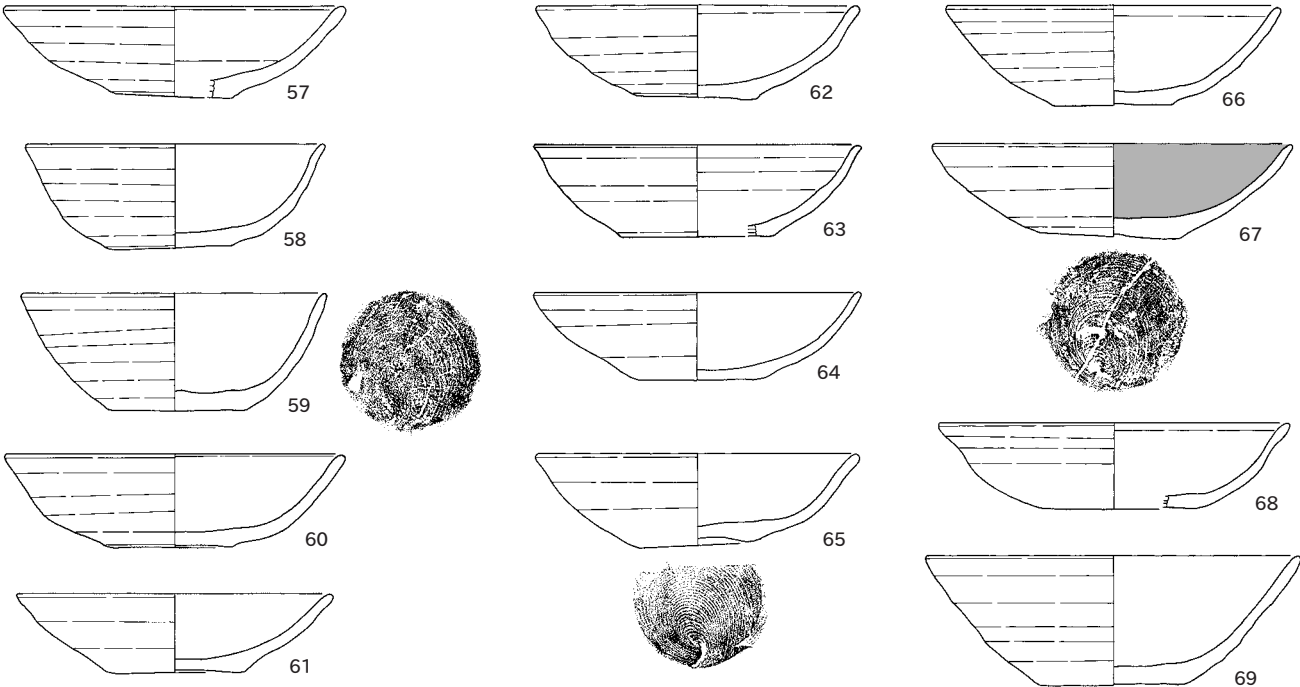
SI1



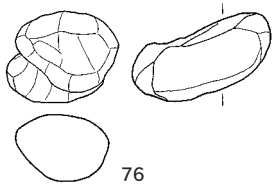
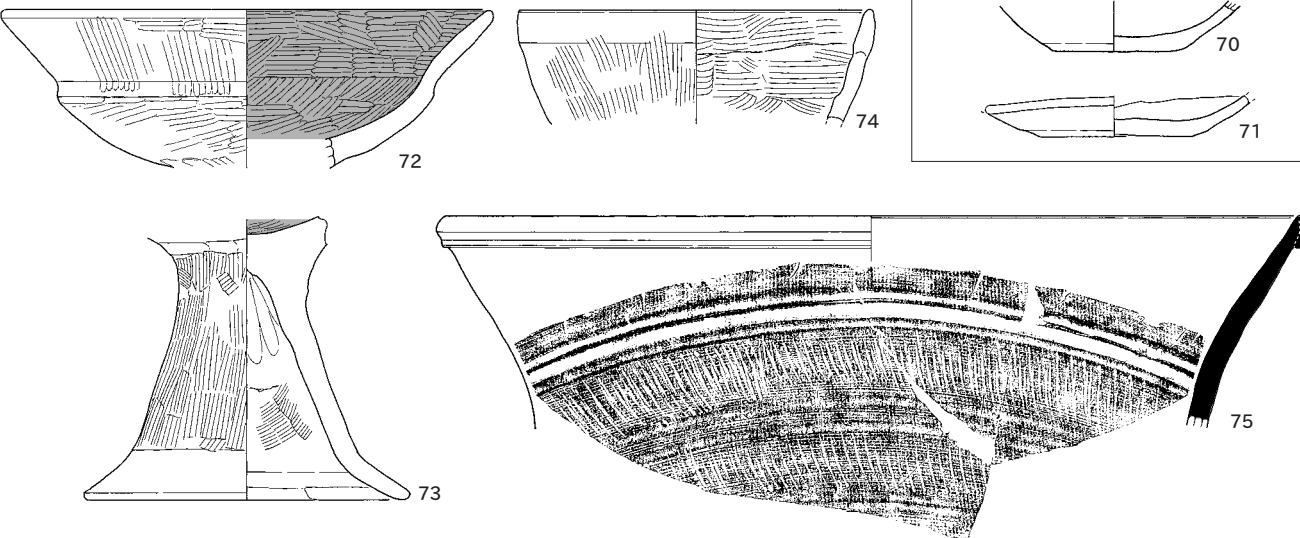
SI1



SD1

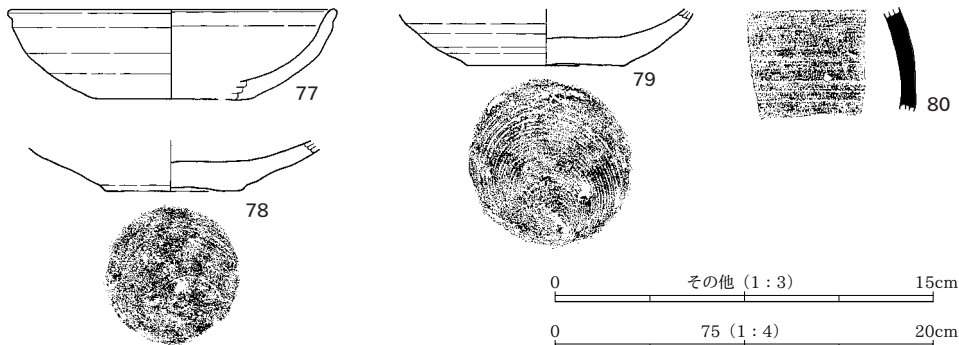


SD2



76

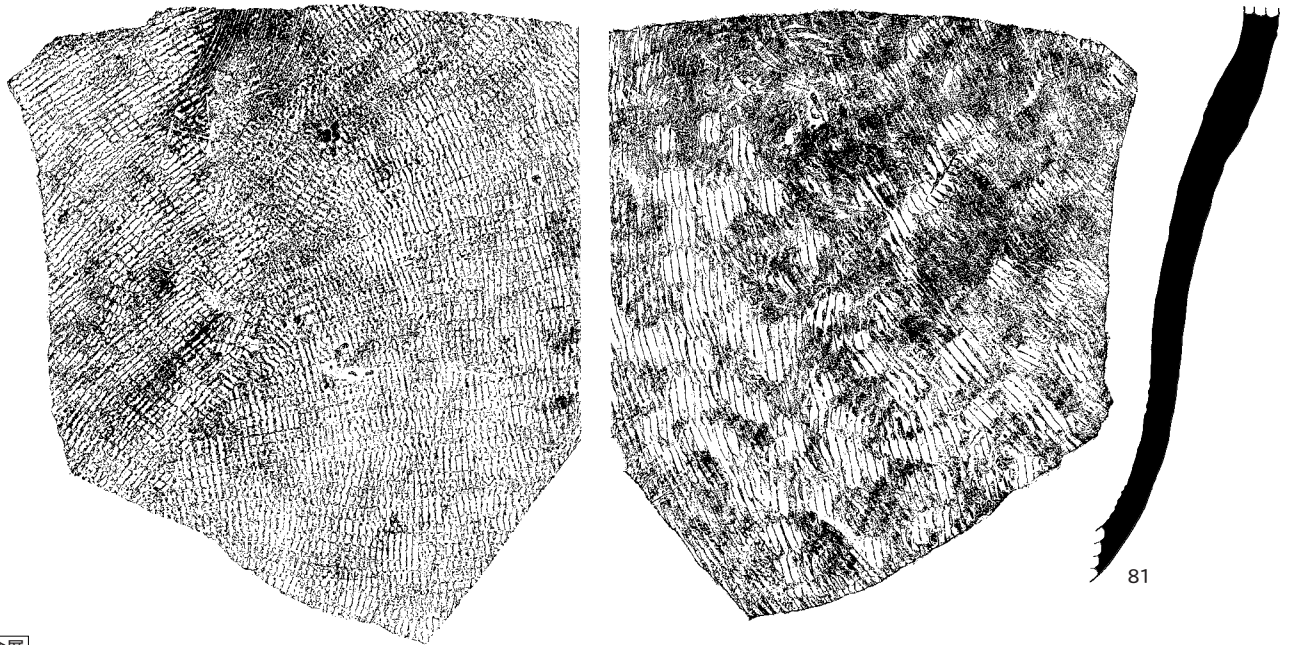
P103



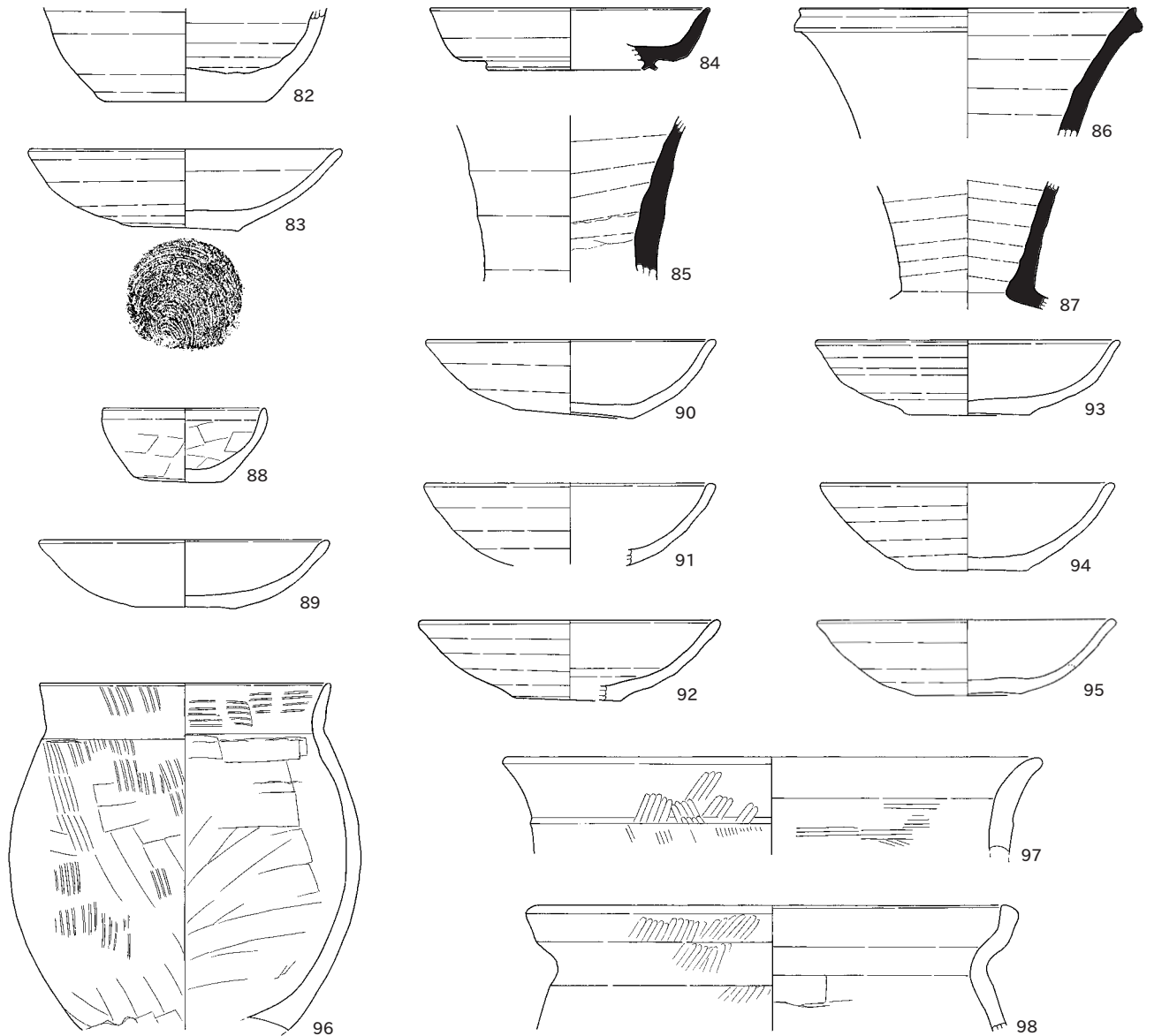
0 その他 (1:3) 15cm

0 75 (1:4) 20cm

P103



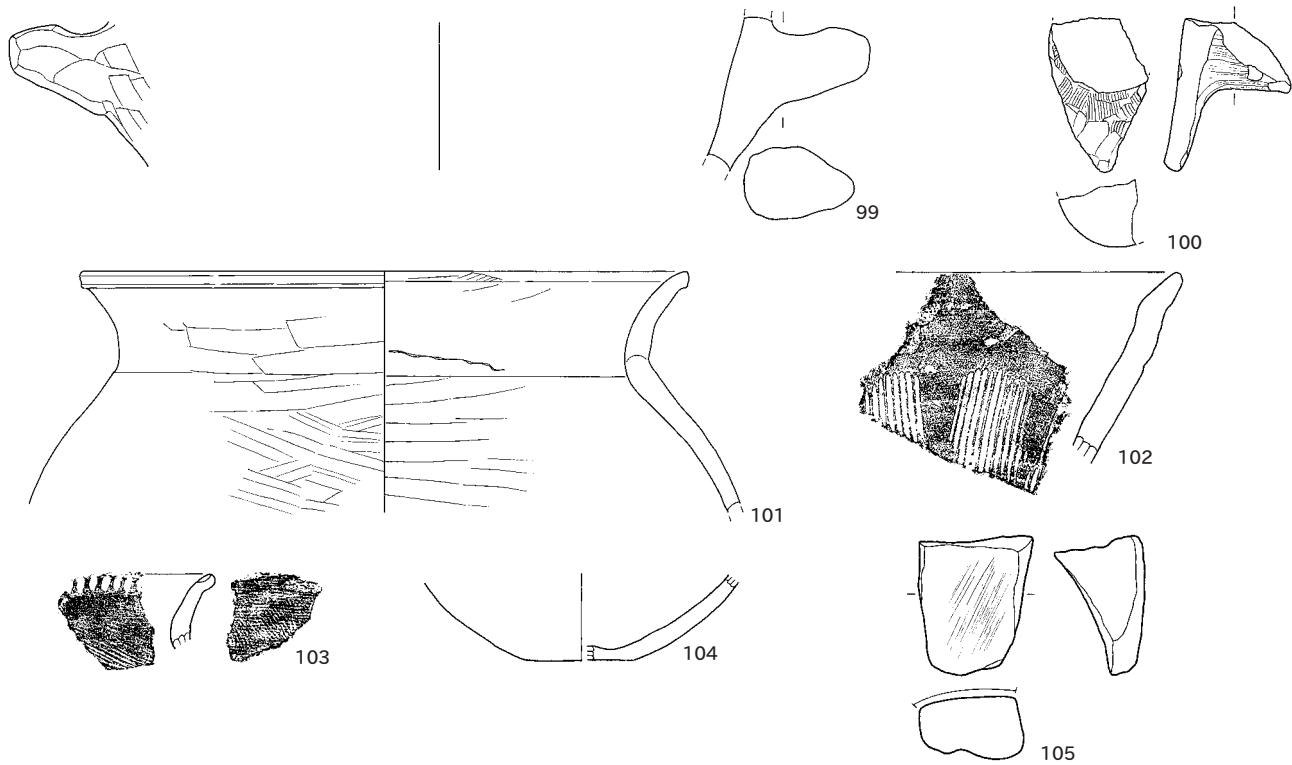
包含層



0 その他 (1:3) 15cm

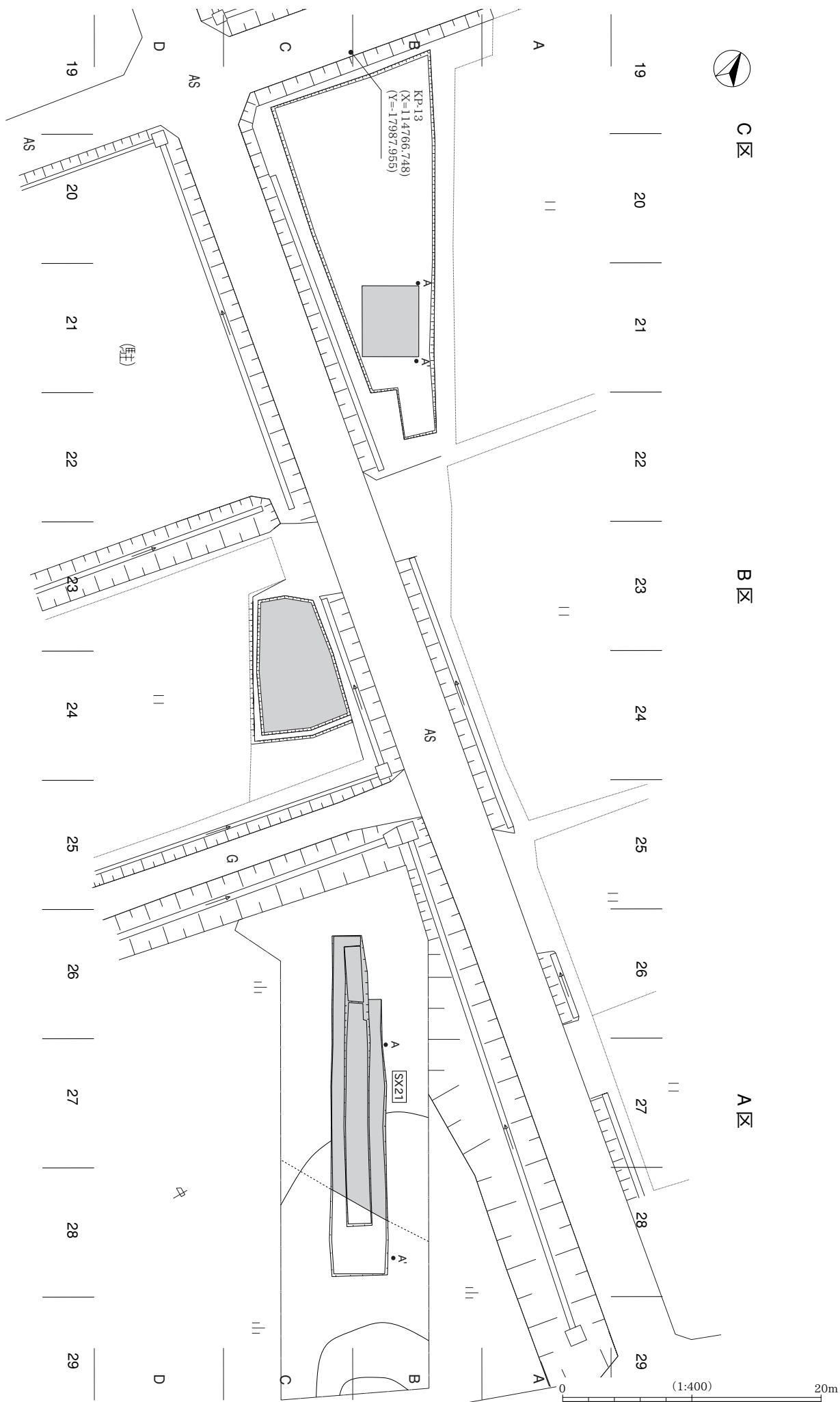
0 81 (1:4) 20cm

包含層

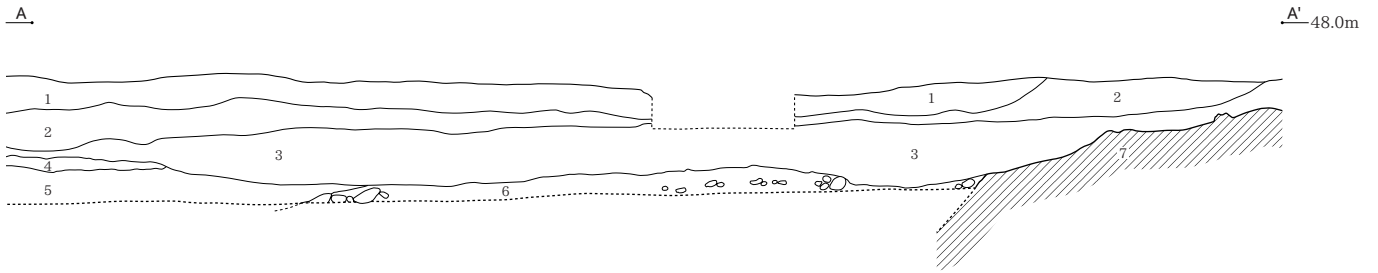


0 (1:3) 15cm





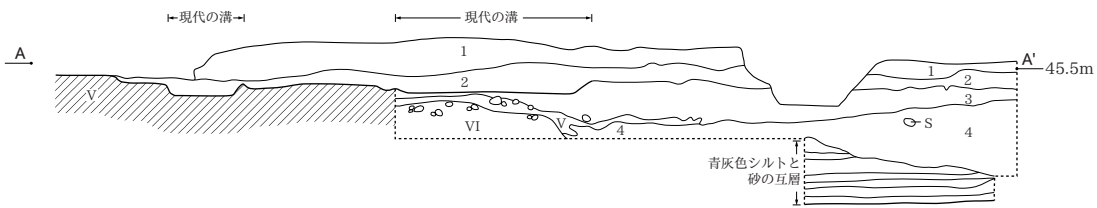
SX21 A区



SX21

- 1 褐色粘質土 攪乱層 人頭大礫・瓦・ビニールのほか、青灰色土（7層）・白色粘土ブロックを多量に混入する
- 2 暗褐色粘質土 攪乱層 ビニール・炭化材を混入する
- 3 暗青灰色粘質土 未分解の有機物を多く含み、ガツボ状を呈する
- 4 青灰色シルト 灰黄褐色シルトをブロック状に含む
- 5 黒灰色シルト 有機物を多く含み、ガツボ状を呈する 層下部に大小の礫を含む
- 6 暗灰色砂 青色砂をラミナ状に含み、水成堆積を示す 人頭大～拳大の礫を多く含む
- 7 青色砂

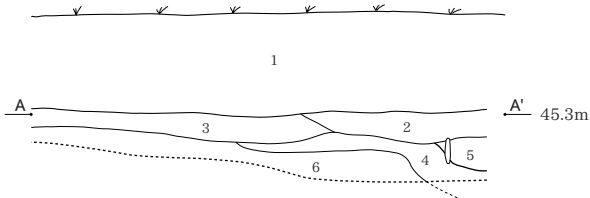
SX660 D区



SX660

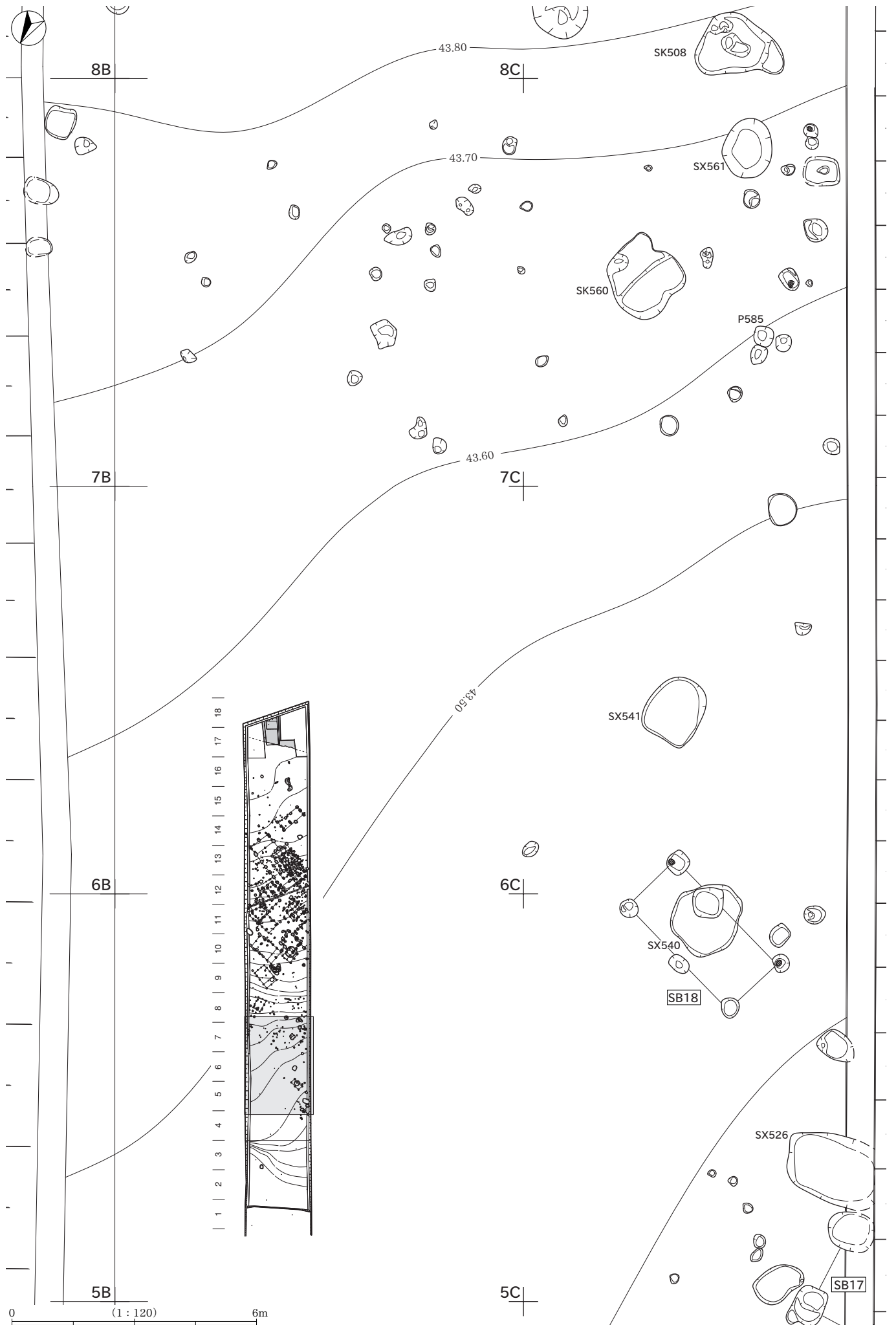
- 1 黒灰色粘質土 攪乱層 ビニール・瓦・ガラスのほか、青灰色・暗灰色粘質土ブロックを混入する
- 2 黒褐色シルト 有機物を多く含む 旧耕作面
- 3 暗灰色粘質土 炭化物小片（直径5mm）を含む 立ち上がり部ではIV層ブロックが攪拌されたように混入する
- 4 黒灰色粘質土 未分解の植物根・枝を含み、ガツボ状を呈する

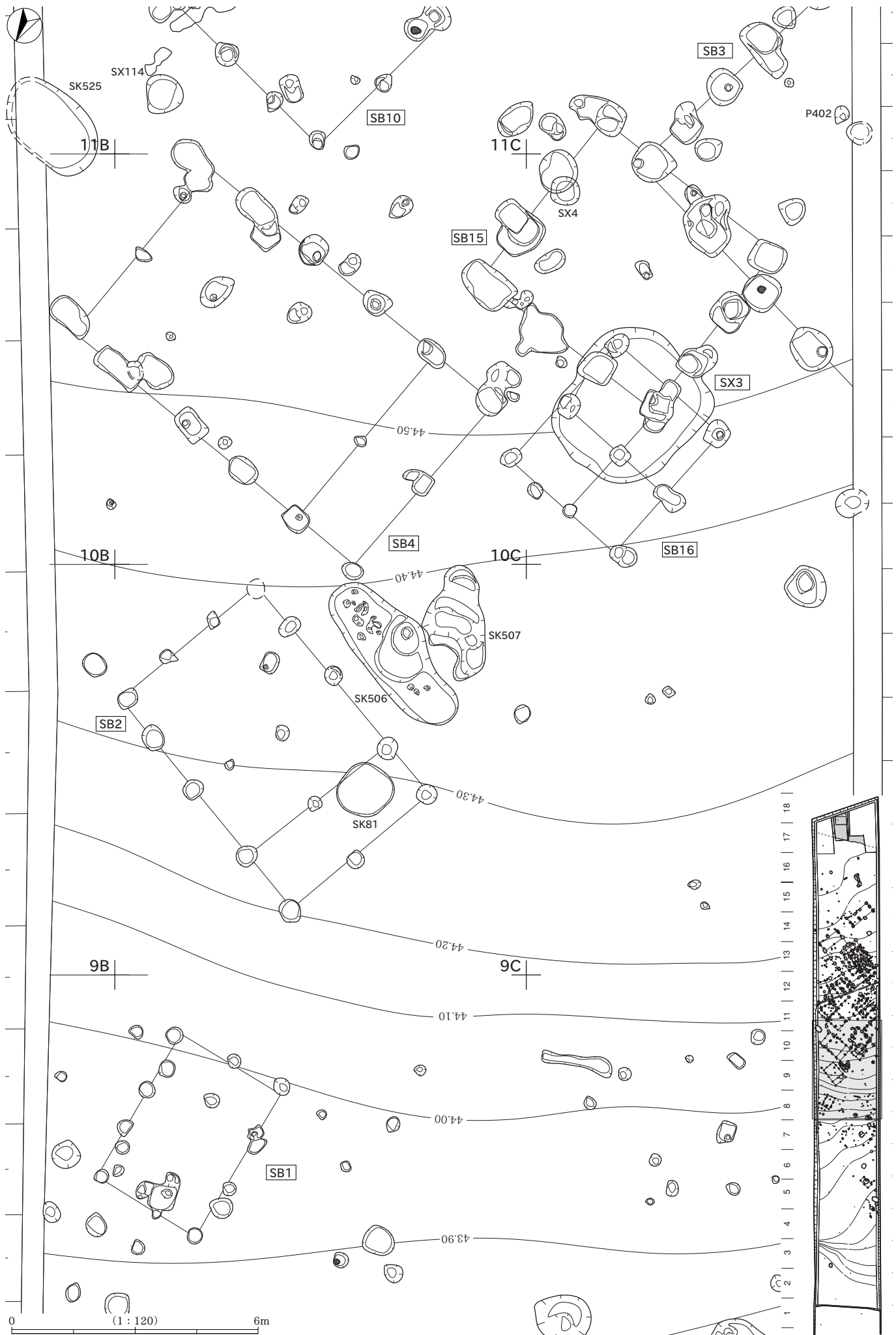
C区北壁

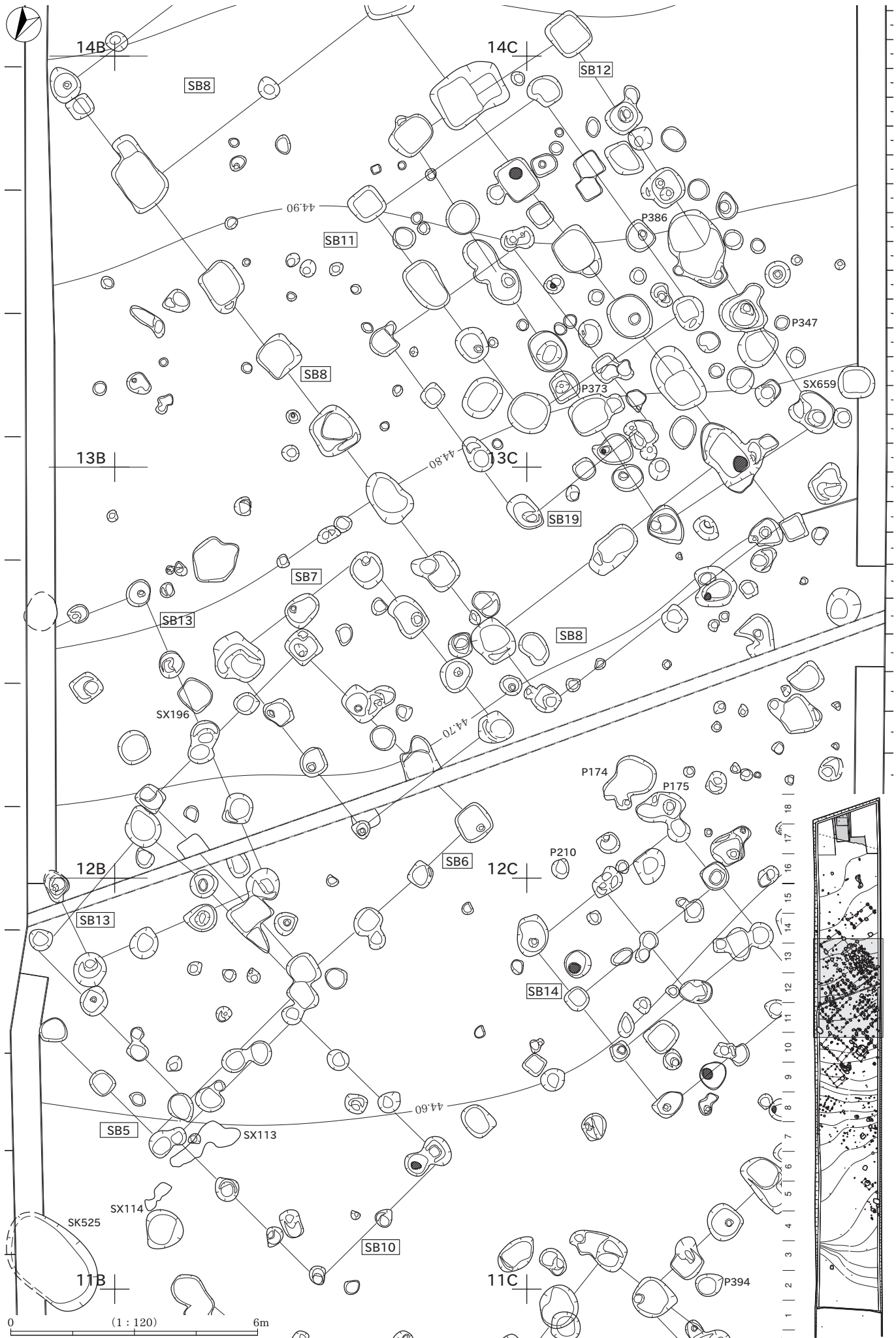


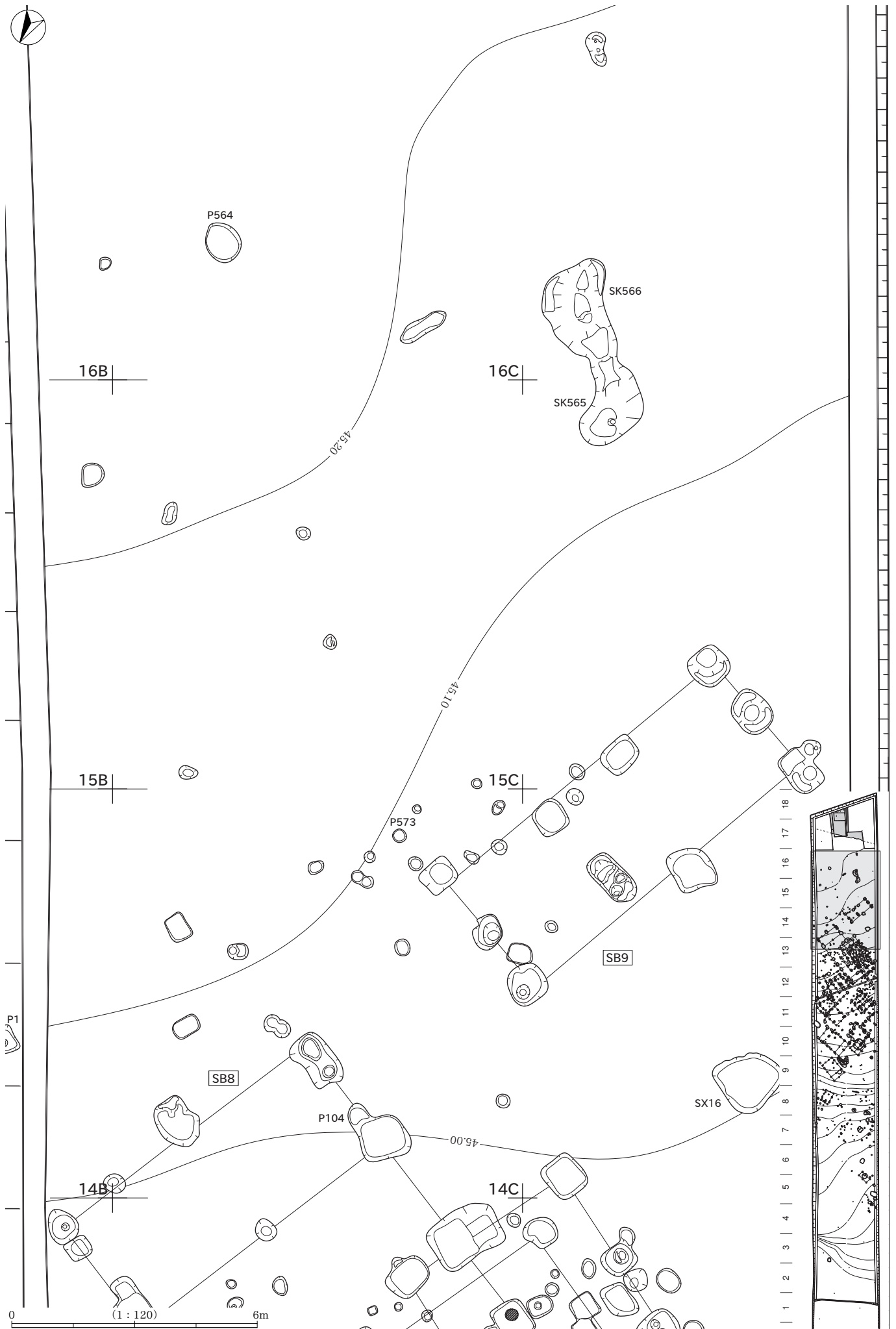
C区北壁

- 1 青灰色粘土 攪乱層 褐色・黒色粘土ブロックが多量に混入する
- 2 暗褐色粘質土 攪乱層
- 3 暗青灰色シルト VI層に類似する
- 4 淡褐色シルト
- 5 黒色細粒砂 溝の覆土 近現代の陶磁器が出土 立ち上がり部で杭を検出
- 6 礫層



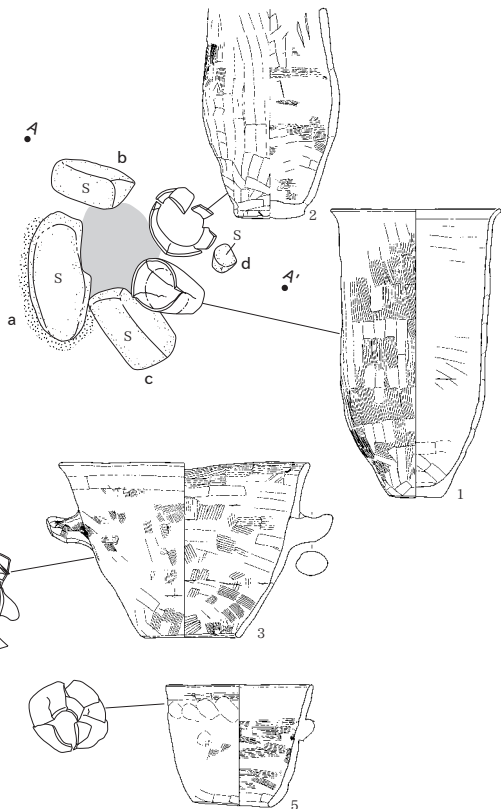




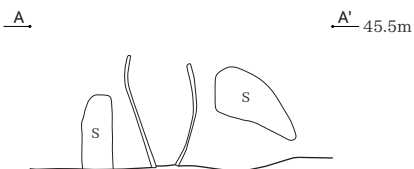


SI417

15C1

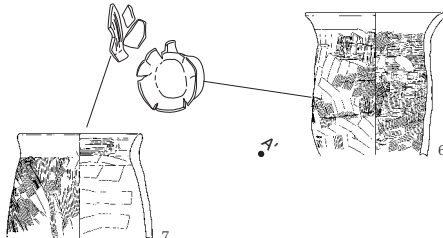


15C6

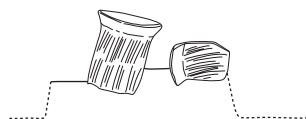


SI539

13C8 13C3



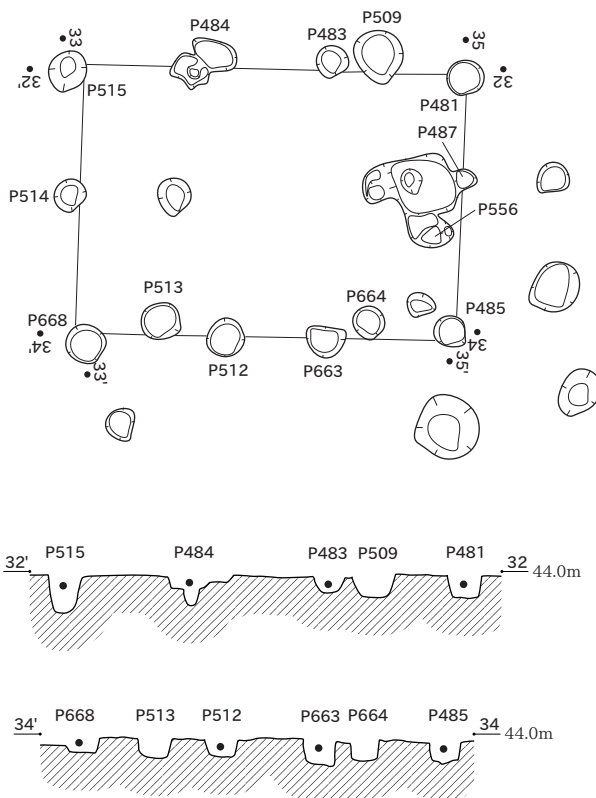
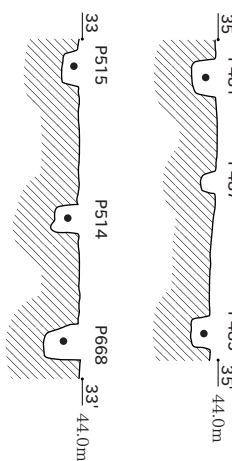
A A' 45.2m



炭 焼土

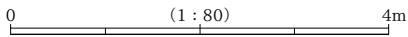
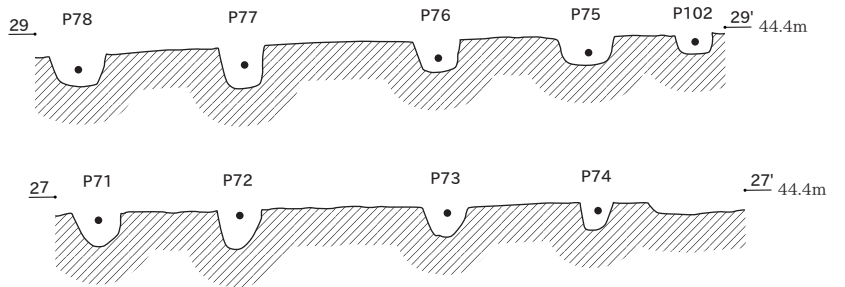
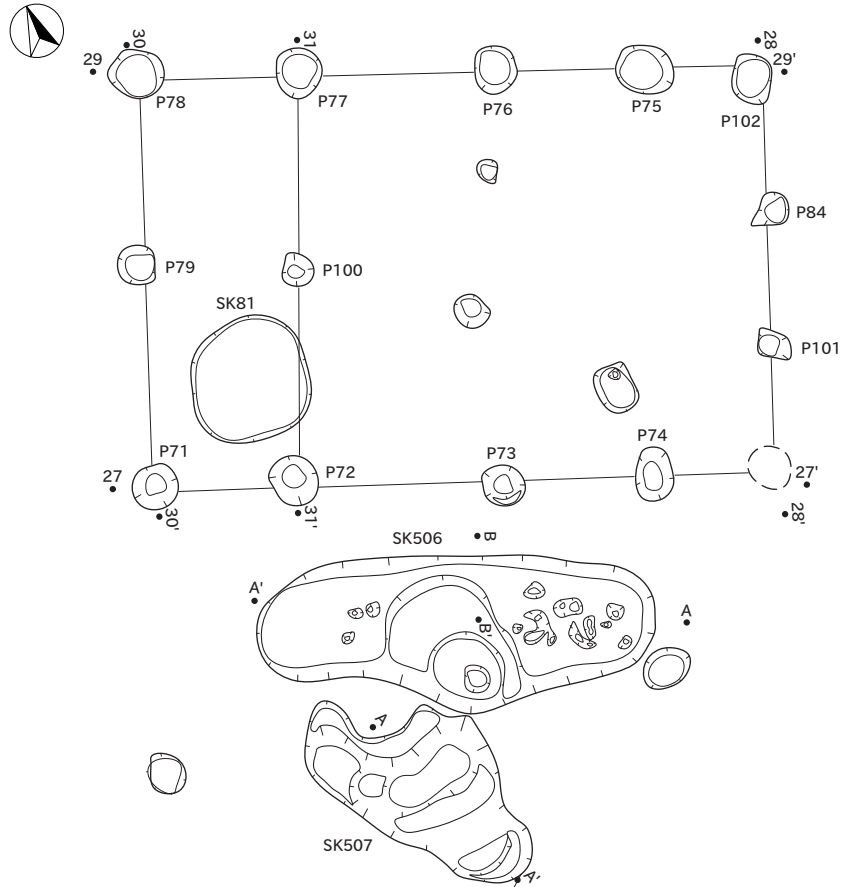
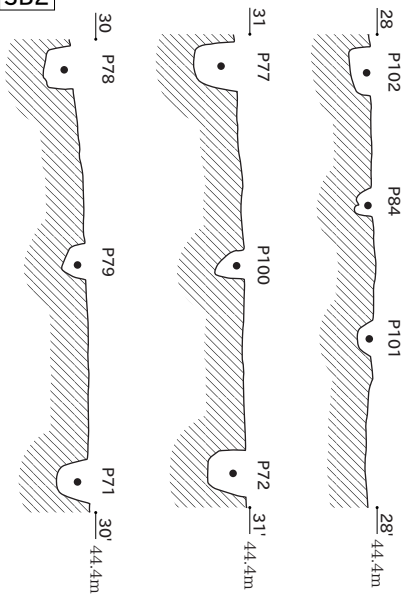
0 (1:40) 2m

SB1

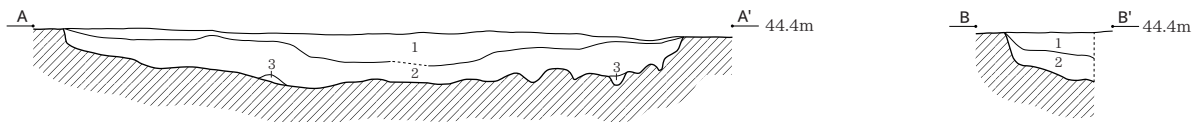


0 (1:80) 4m

SB2

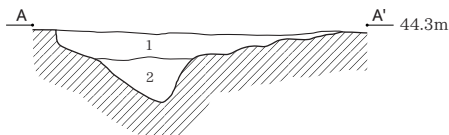


SK506

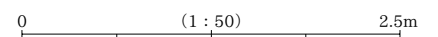


- SK506
 1 暗灰色粘質土 地山ブロック（IV層）を含む
 2 黒灰色粘質土 少量の地山ブロックを含む 底面の凹凸が激しい
 3 青灰色粘質土 青灰色シルト V層に近似

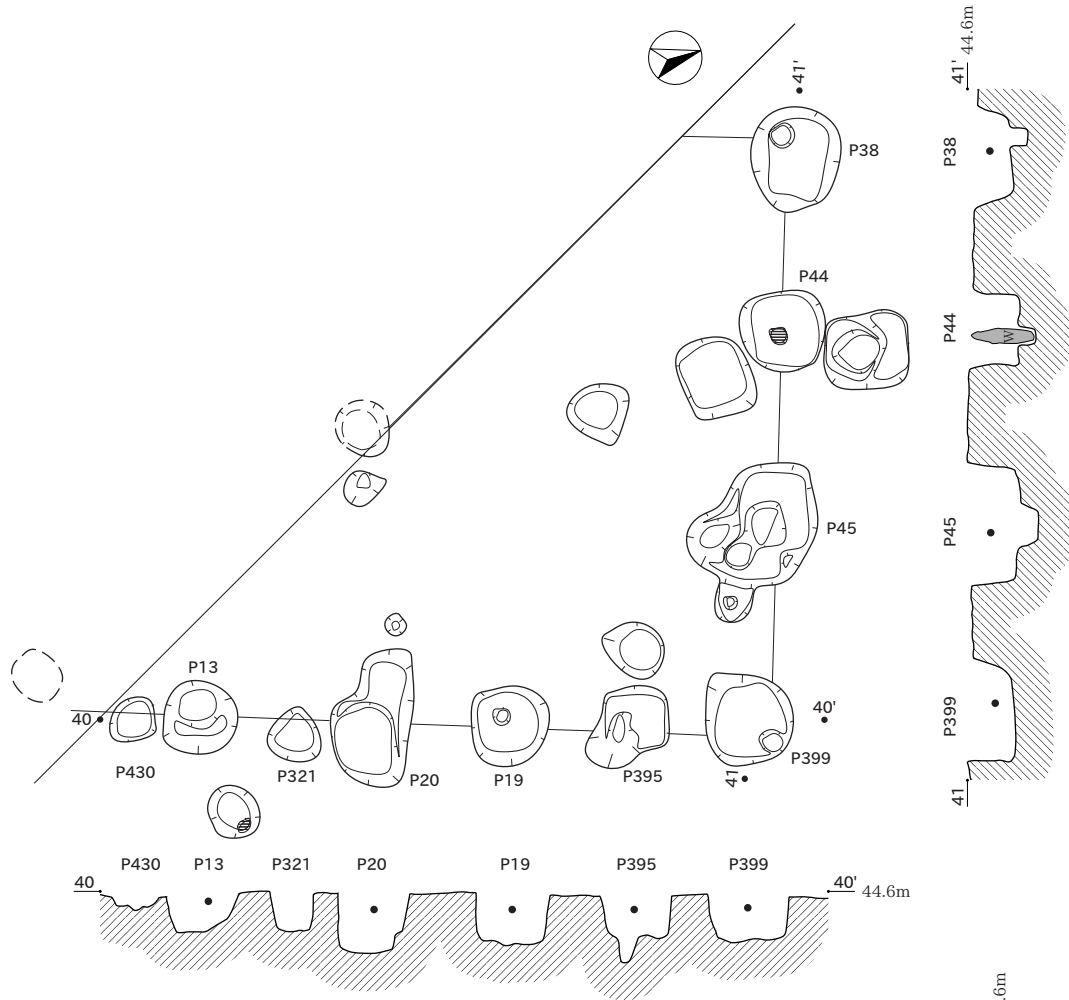
SK507



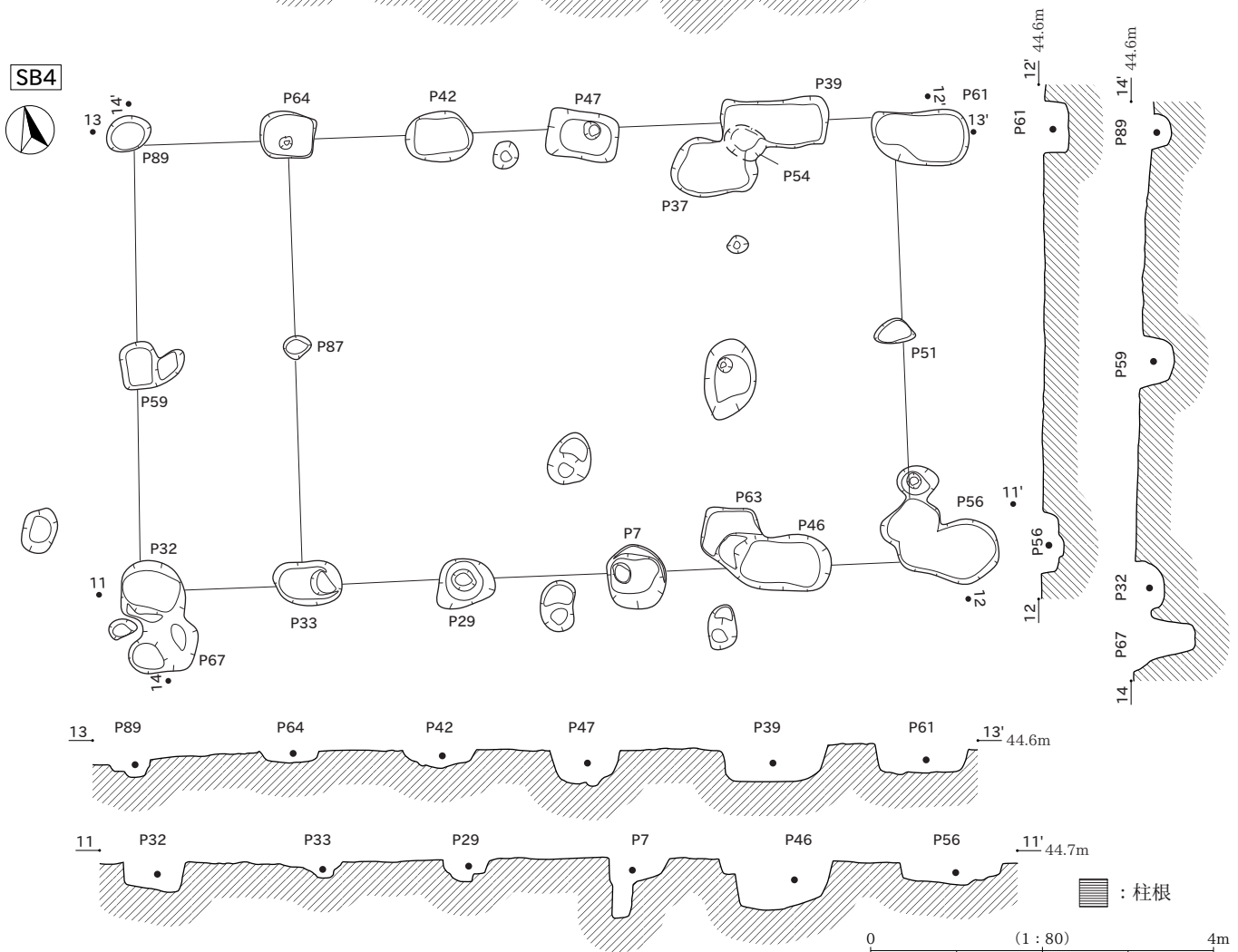
- SK507
 1 暗灰色粘質土
 2 黒灰色粘質土



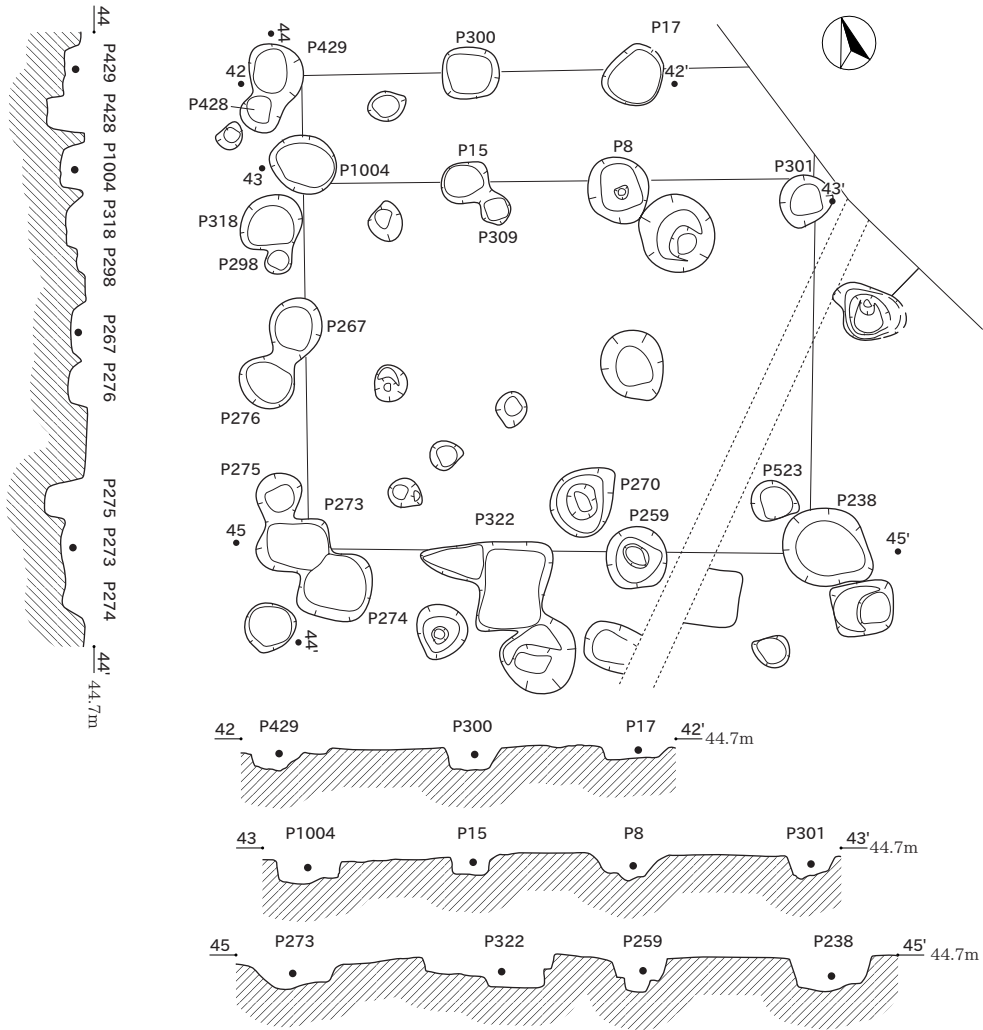
SB3



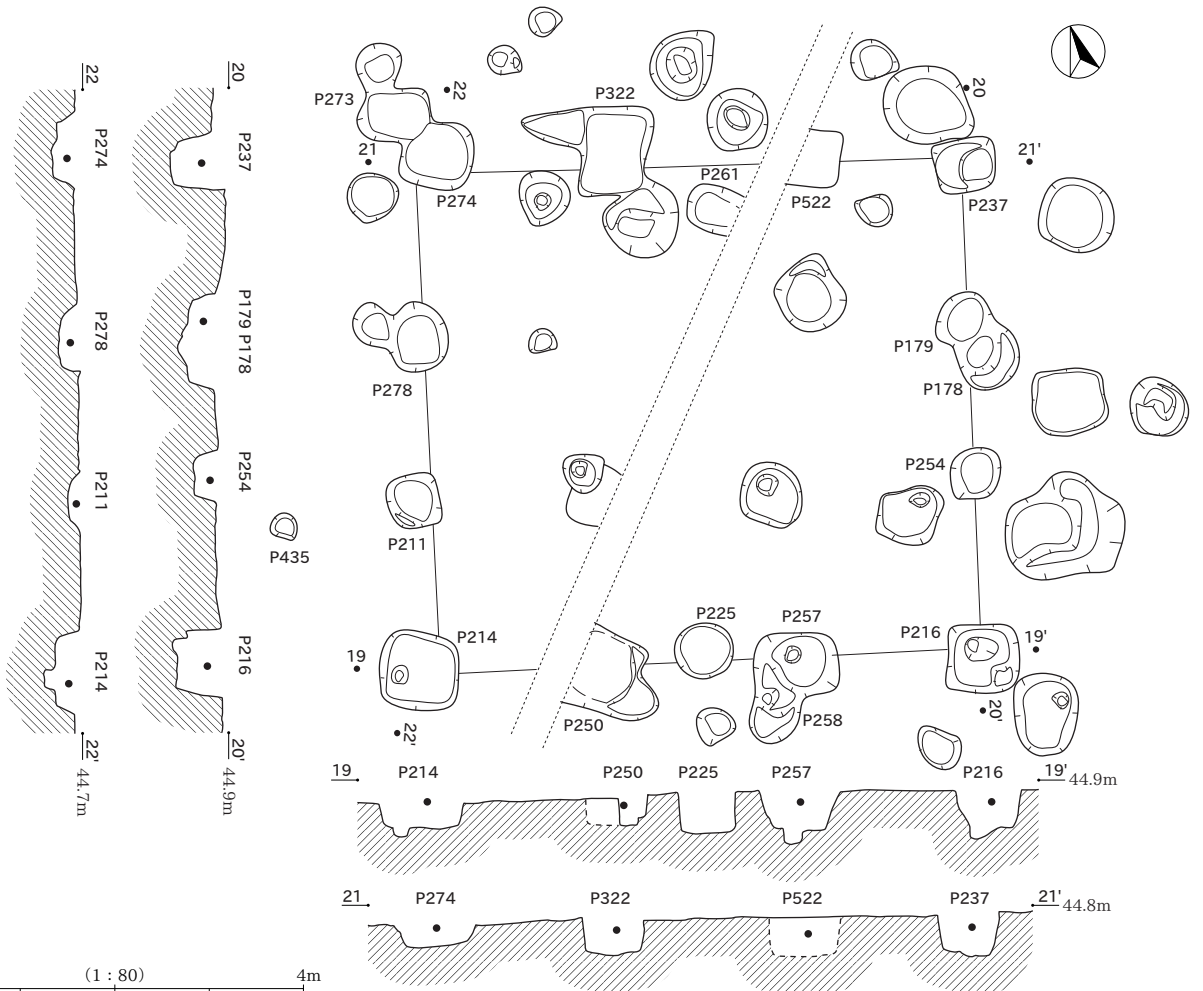
SB4



SB5

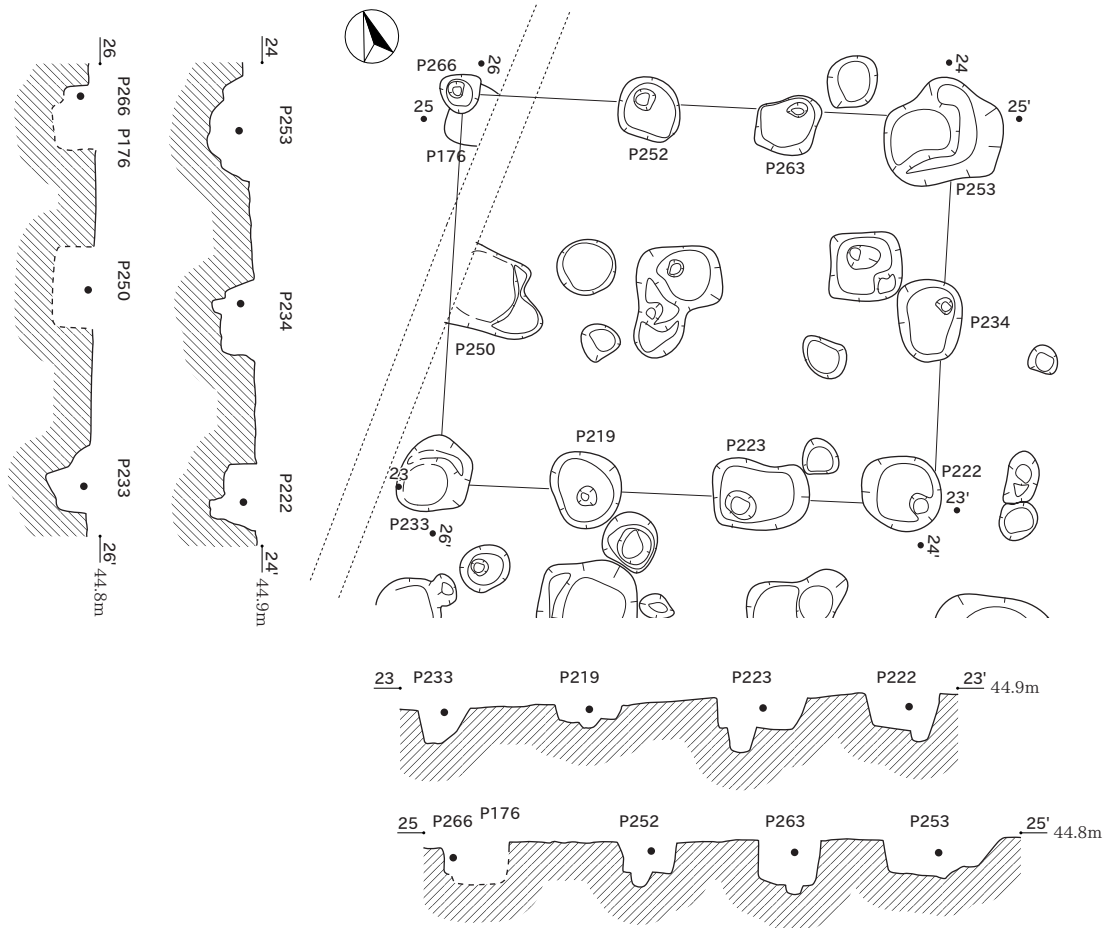


SB6

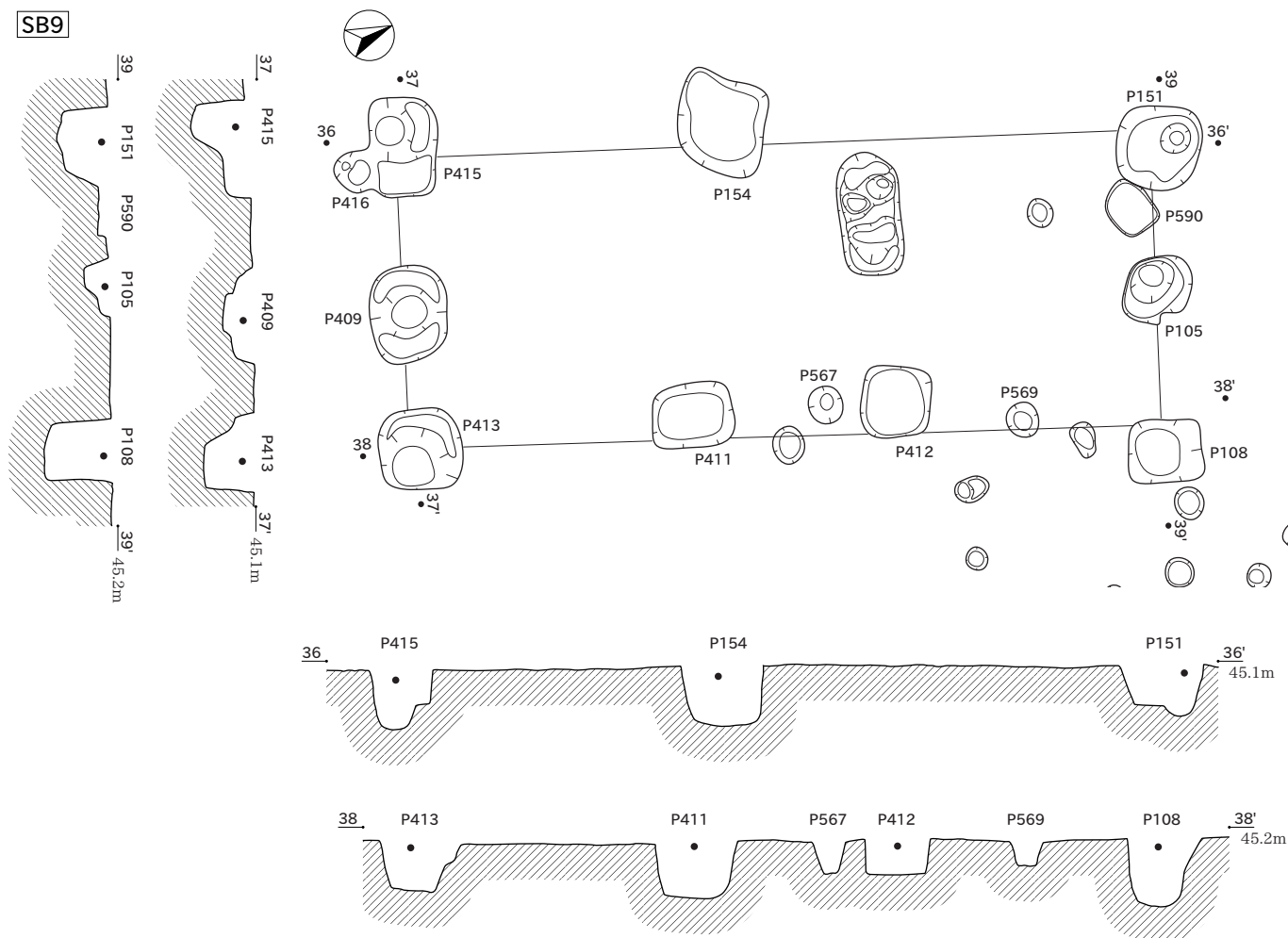


0 (1 : 80) 4m

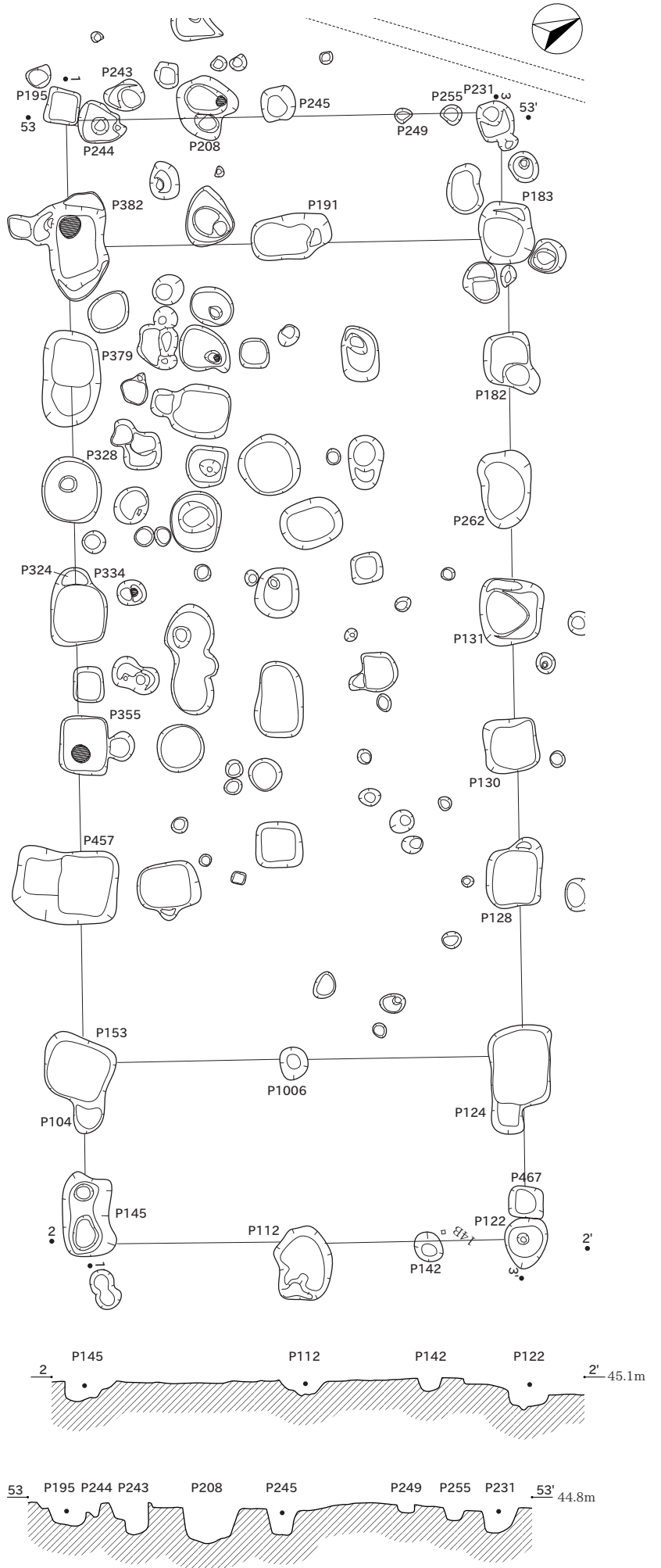
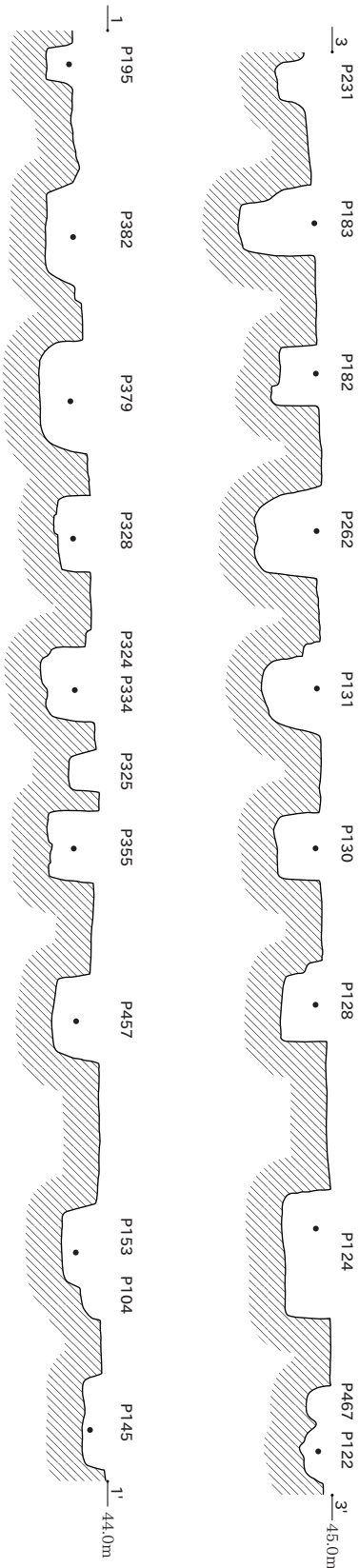
SB7



SB9



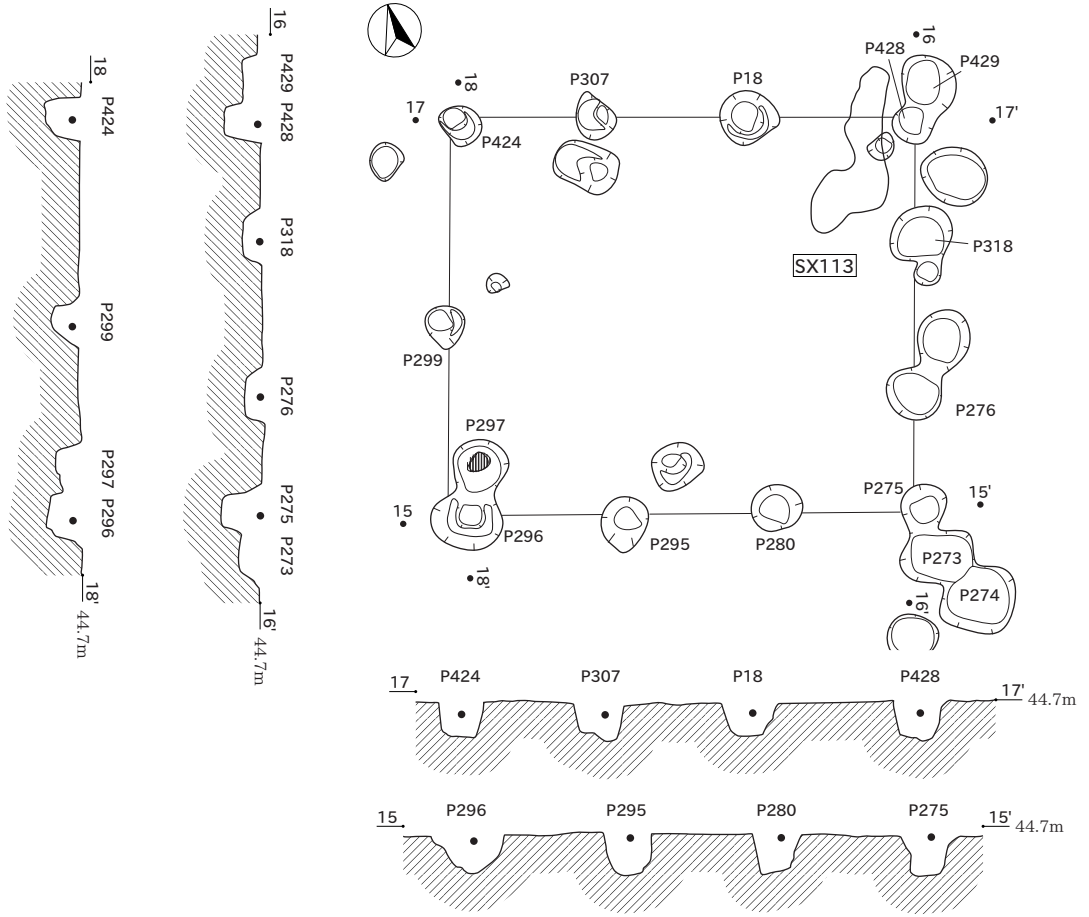
SB8



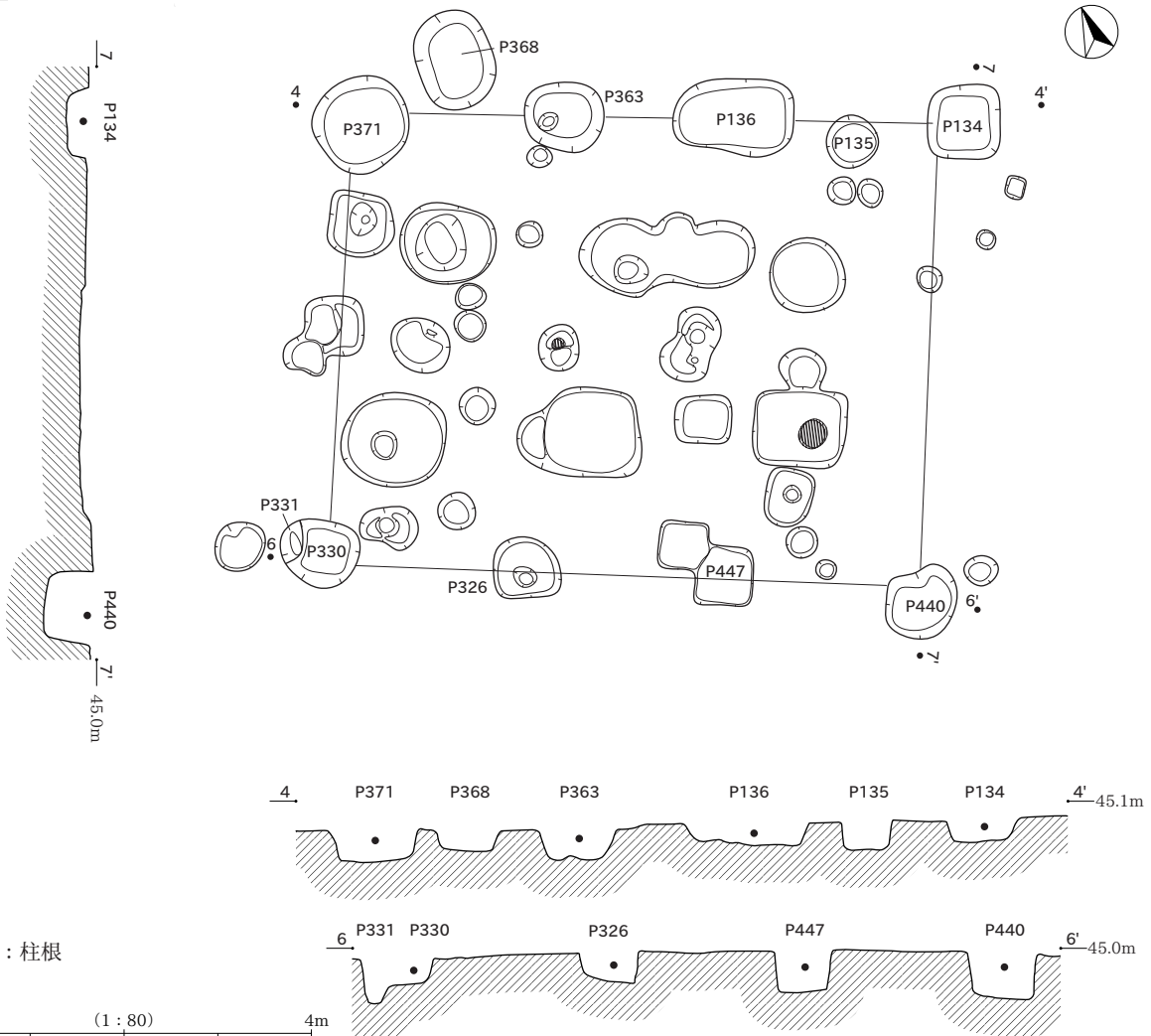
柱根

0 (1:100) 5m

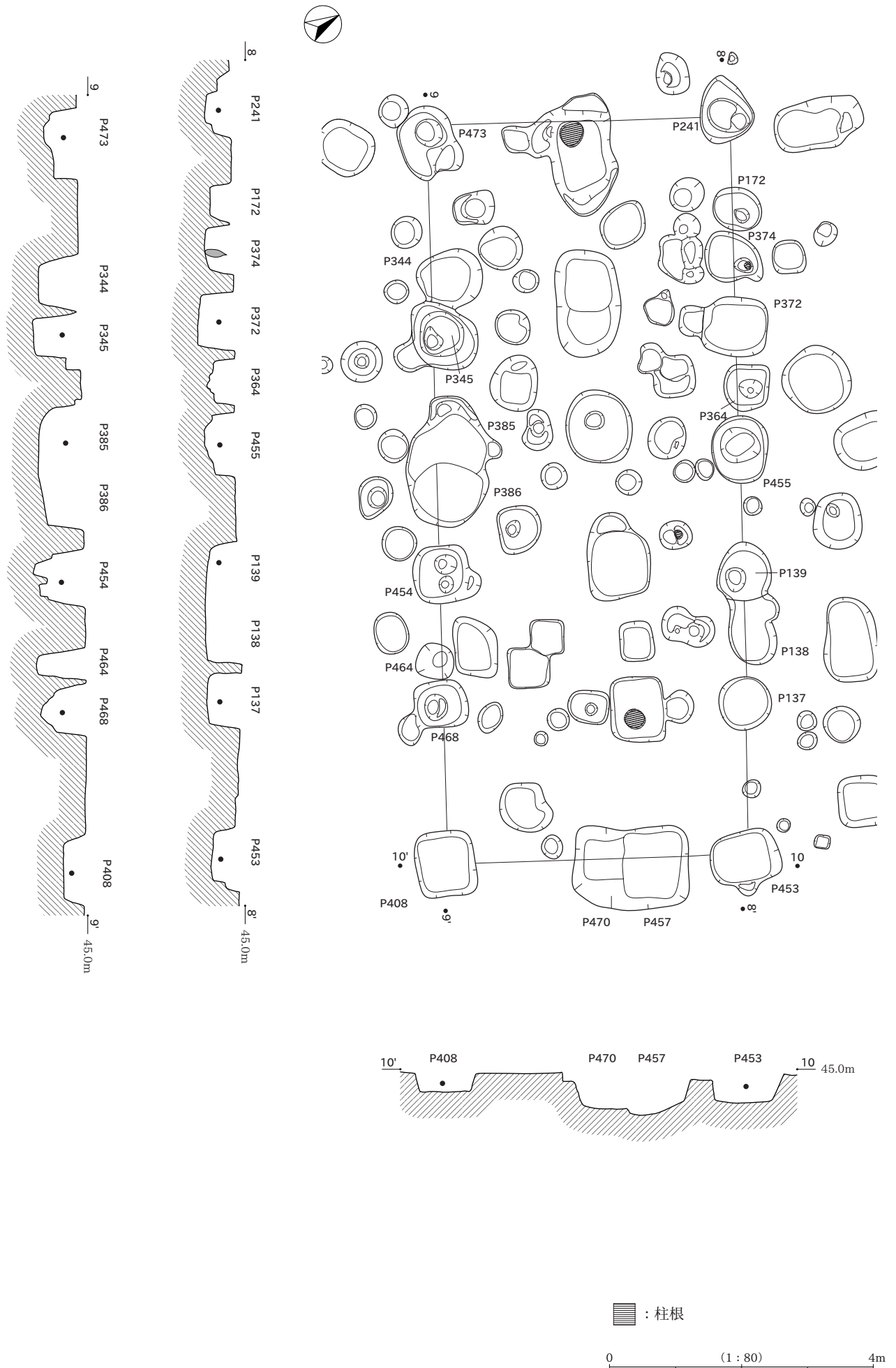
SB10



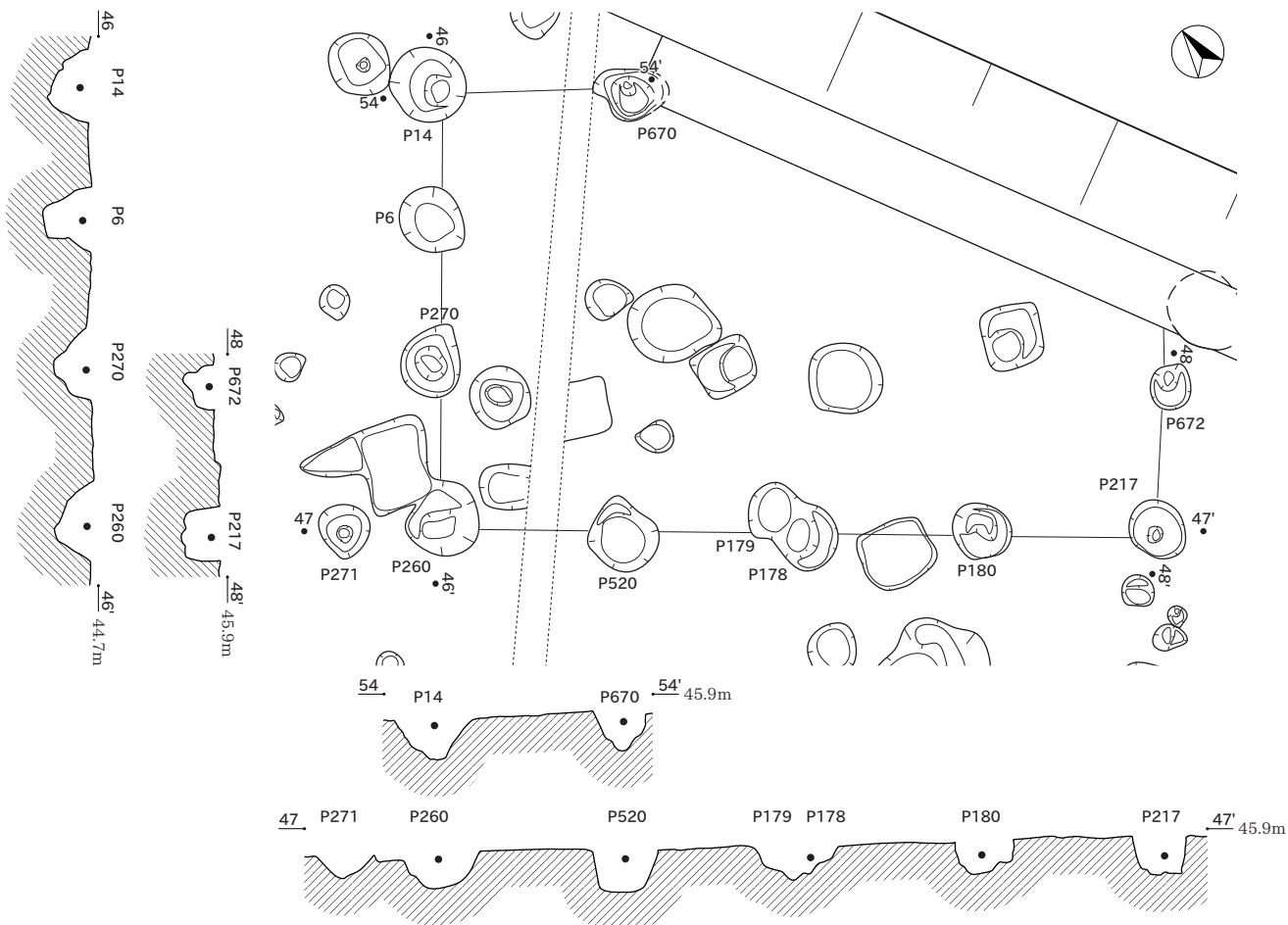
SB11



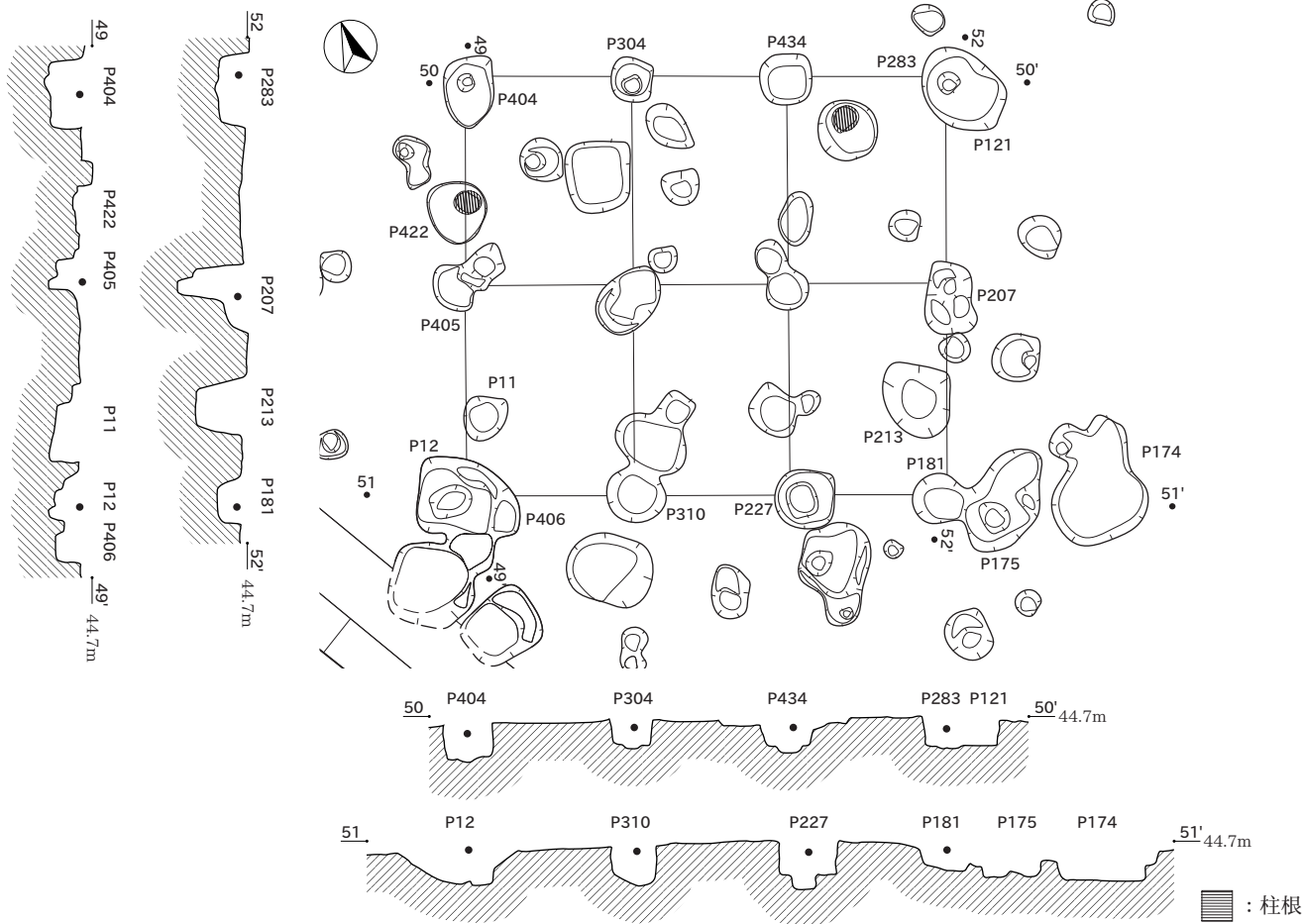
SB12



SB13



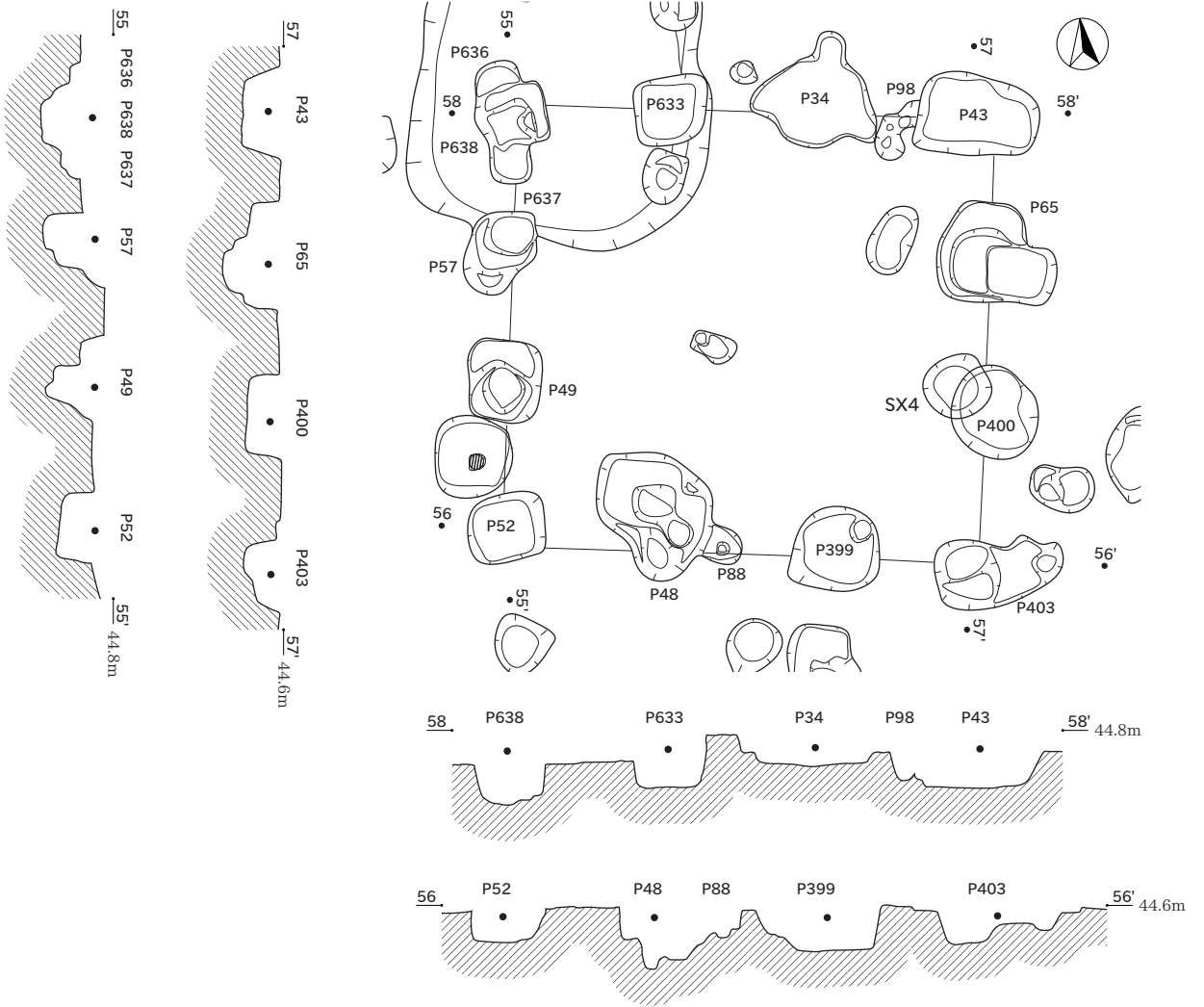
SB14



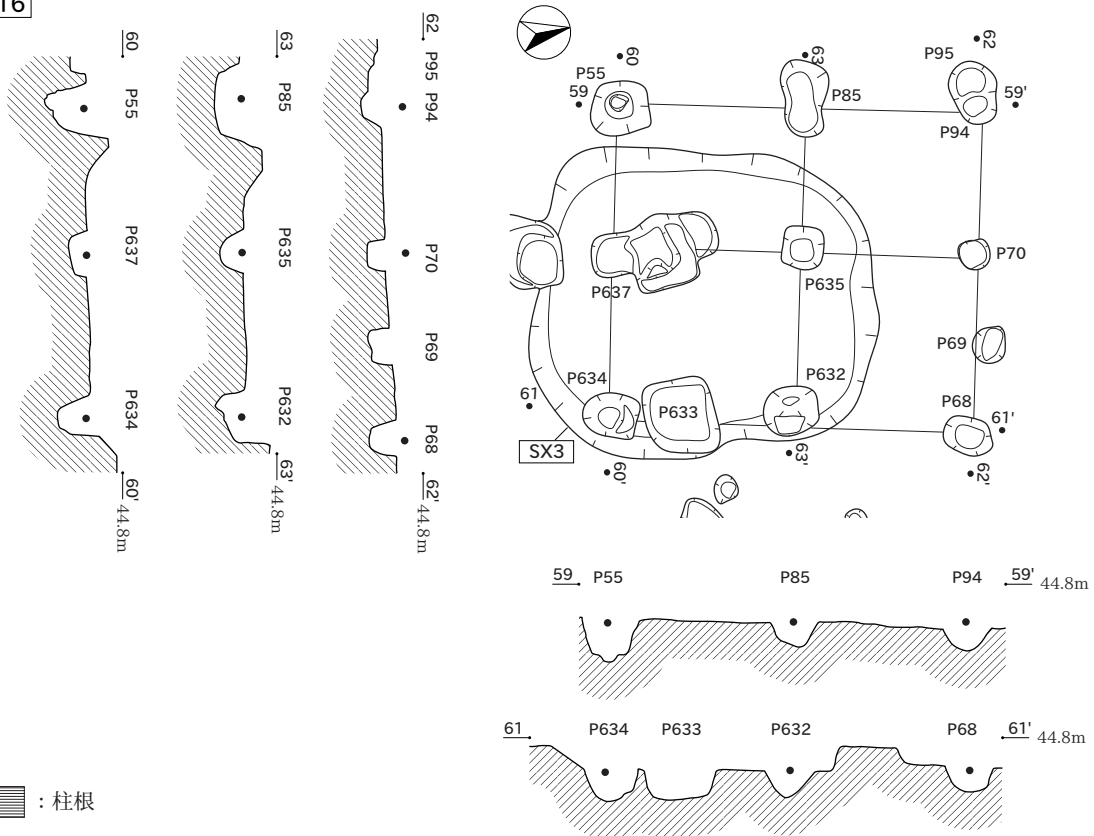
柱根

0 (1:80) 4m

SB15



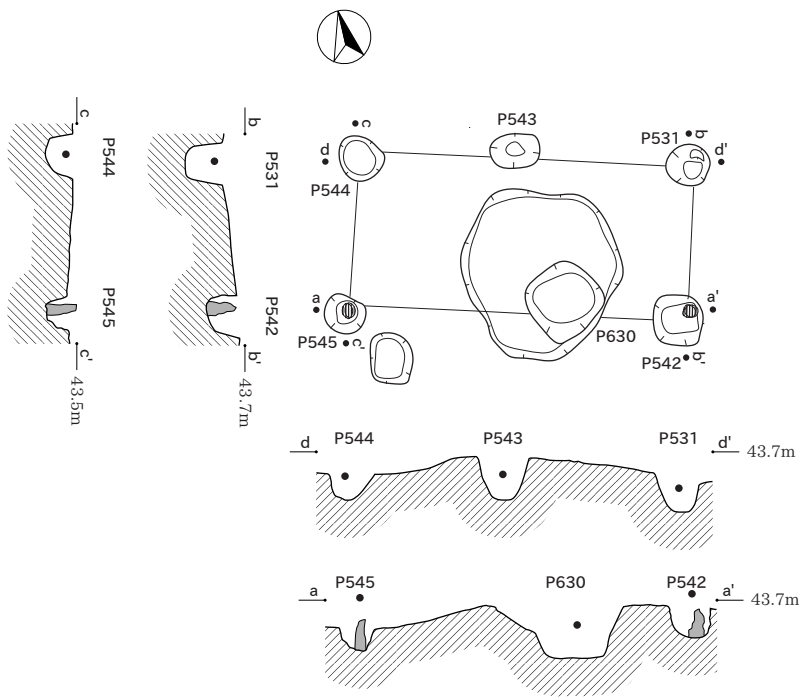
SB16



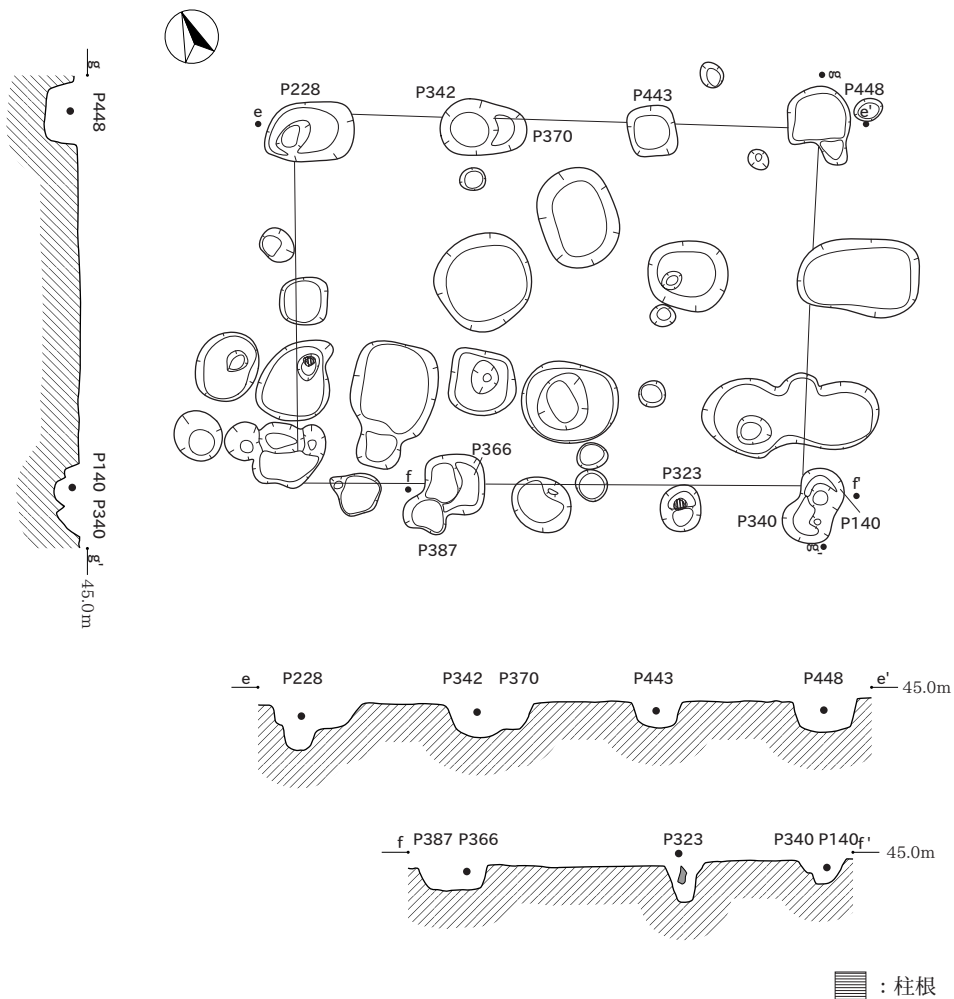
柱根

0 (1:80) 4m

SB18



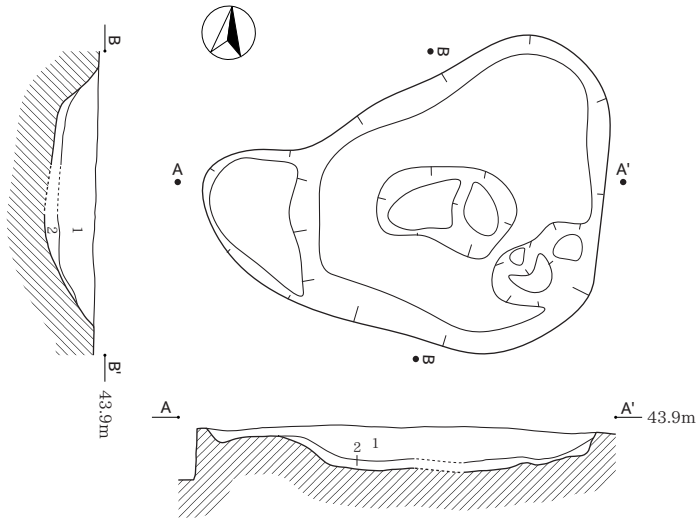
SB19



柱根

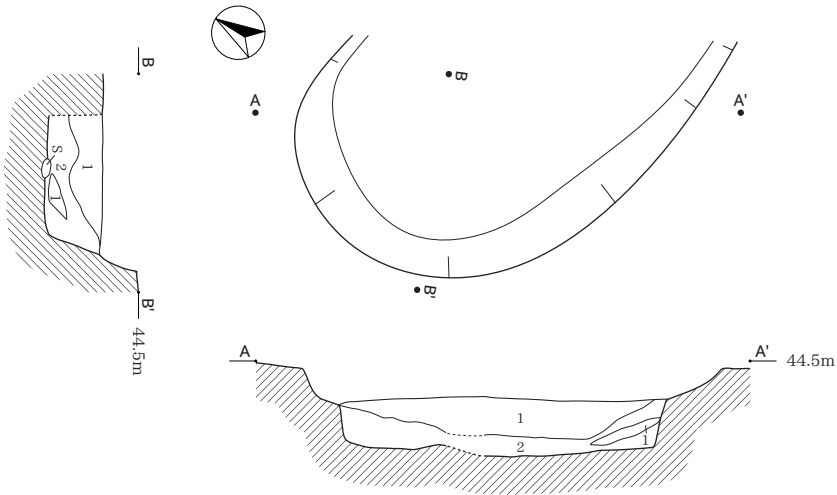
0 (1:80) 4m

SK508



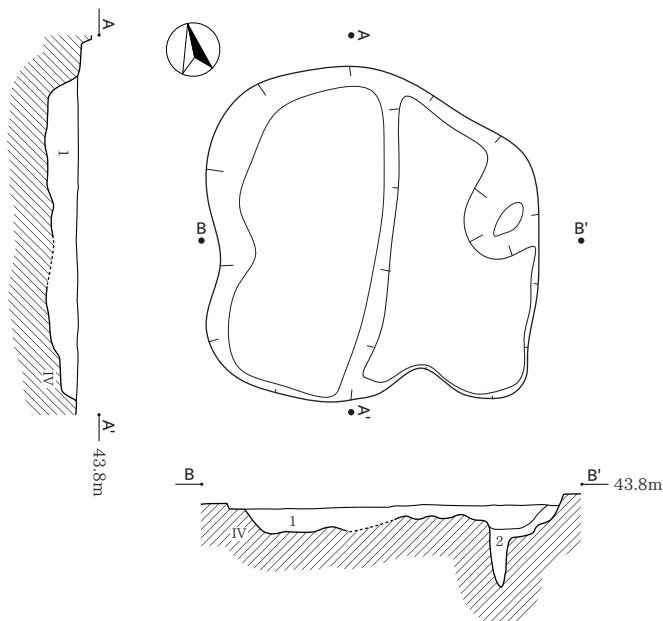
SK508
 1 黒色粘質土 多量の炭化物を含む
 2 暗灰色粘質土

SK525



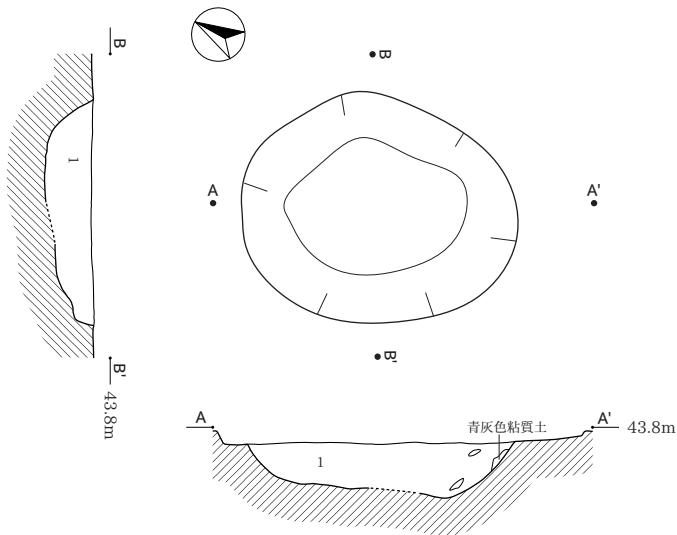
SK525
 1 黒灰色粘質土
 2 青灰色粘質土 黒灰色土をブロック状に含む

SK560



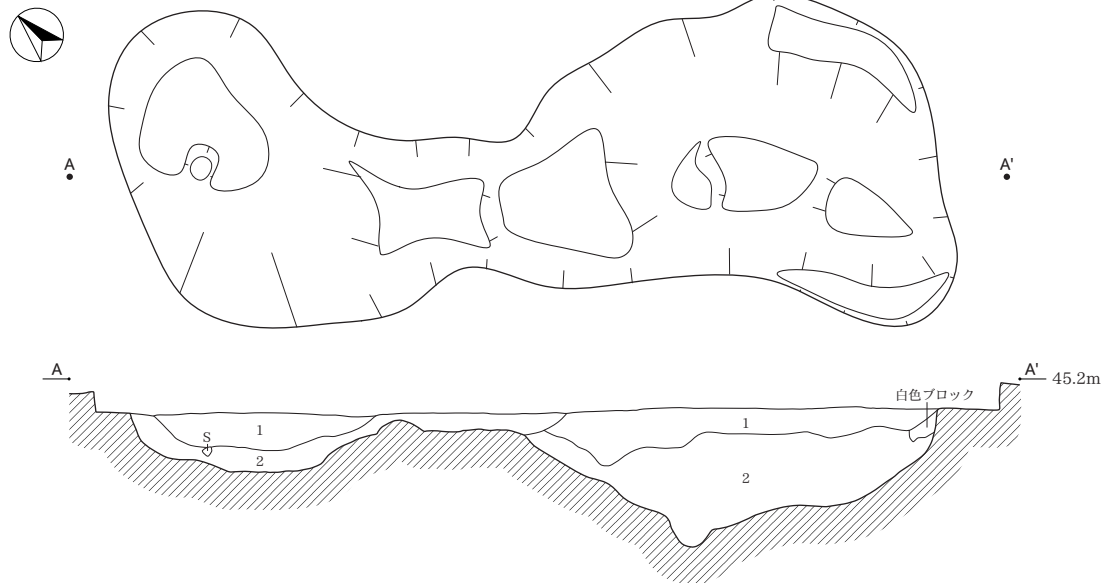
SK560
 1 黒灰色粘質土 直径10mm程度の炭化物粒子を含む
 2 暗灰色粘質土 炭化物を含まない

SK561



SK561
1 黒灰色粘質土

SK565

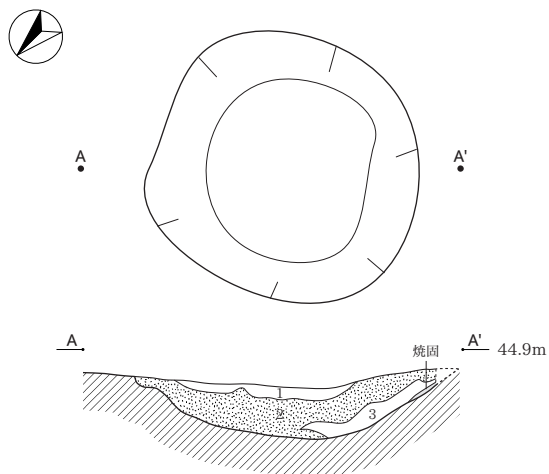


SK565
1 黒褐色粘質土 多くの酸化鉄斑が認められる
2 褐青色粘質土

SK566

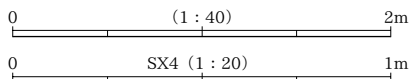
SK566
1 黒褐色粘質土 多くの酸化鉄斑が認められる
2 青灰色粘質土 炭化物なし 青色粘土が混入

SX4

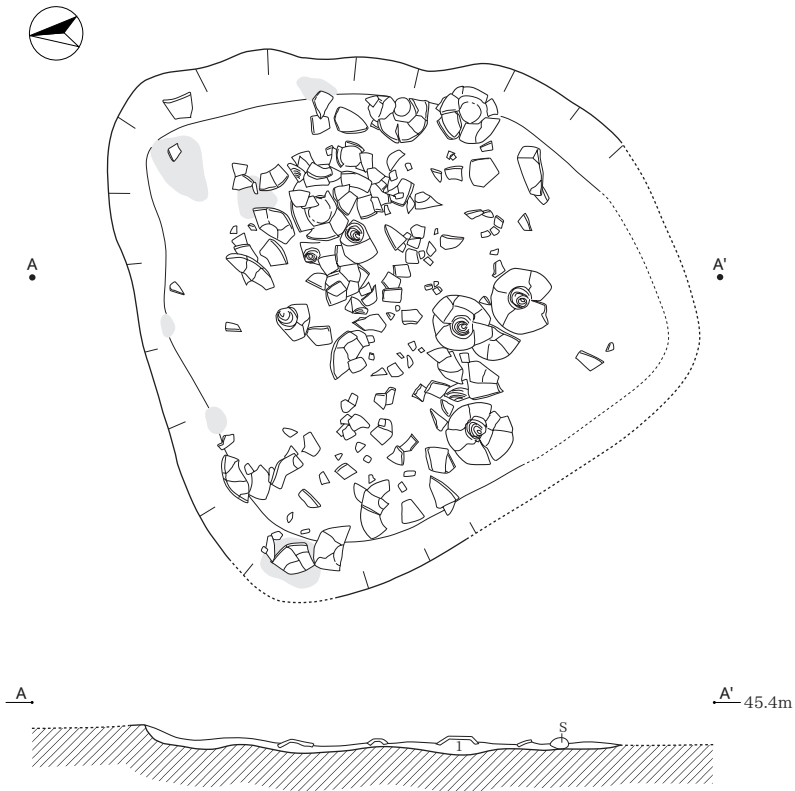


SX4
1 灰色粘質土 直径5mm程度の炭化物粒子を含む
2 炭化物層 焼土粒子を一面に含む
3 暗灰色粘質土 焼土・炭化物微粒子を含む III層とは漸移的

炭化物

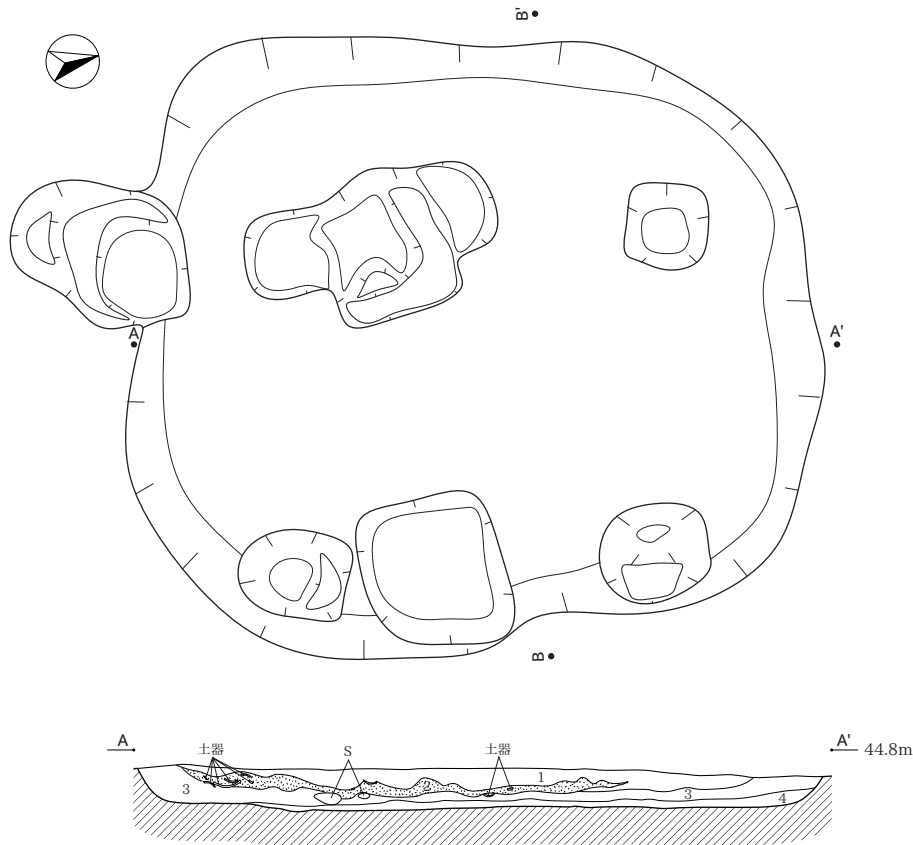


SX16



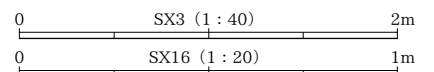
SX16
1 黒色炭化物層 焼土を含む

SX3

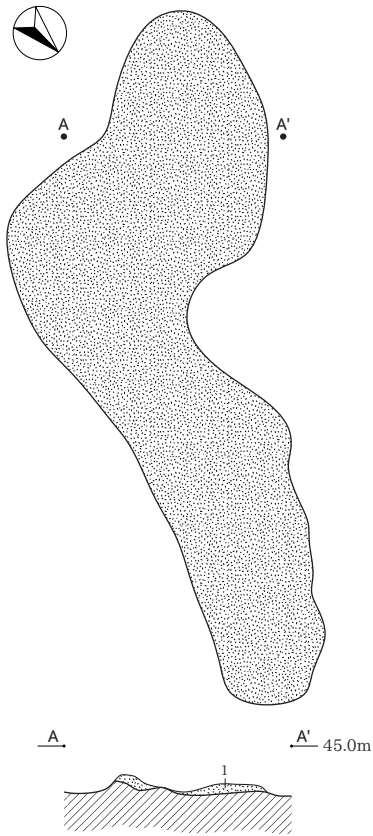


SX3
1 黒灰色粘質土 直径5~10mmの炭化物・焼土粒子を含む 遺物を多量に包含
2 炭化物層 灰・焼土を含む 遺物を多量に包含
3 黒灰色粘質土 炭化物は少ない 完形品に近い遺物を含む
4 暗灰色粘質土 地山白色土を小ブロック状に含み、3層と地山（IV層）との漸移の様相を示す 遺物をほとんど含まない

● : 炭化物 ■ : 焼土

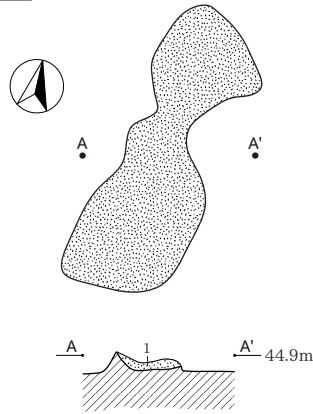


SX113



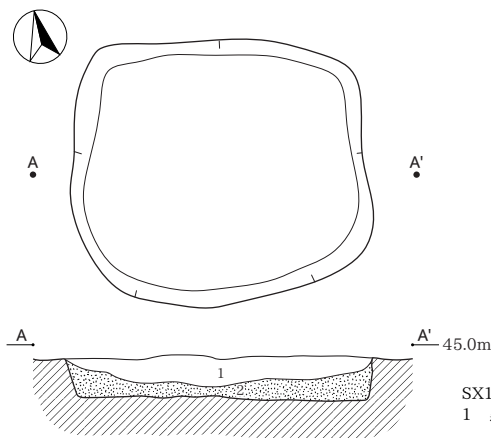
SX113
1 炭化物層

SX114



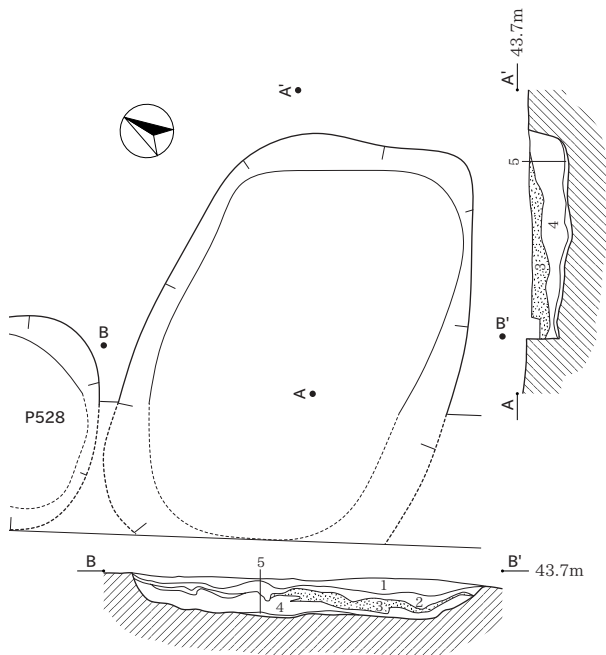
SX114
1 炭化物層

SX196



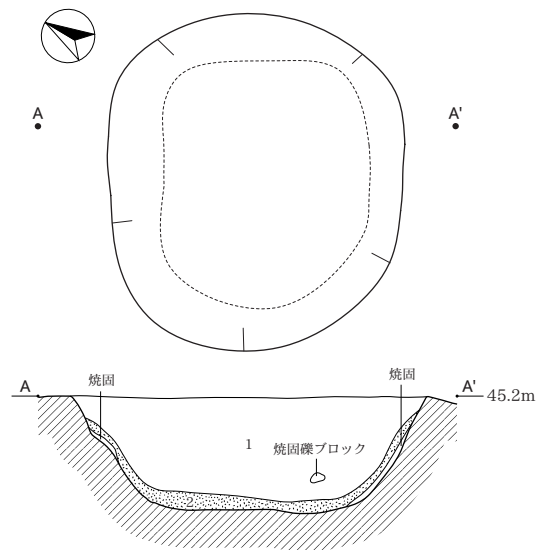
SX196
1 黒灰色粘質土 直径10mm程度の炭化物片・
灰ブロックを含む
2 炭化物層

SX526



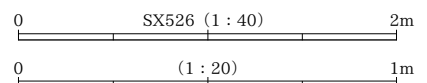
SX526
1 黒灰色粘質土 直径10mm程度の炭化物片・灰ブロックを含む
2 暗灰色粘質土 灰ブロックを多量に含む 炭化物片は少ない
3 炭化物層
4 黒灰色粘質土 直径5mm以下の炭化物粒子・灰ブロック小片を含む
5 炭化物層

SX659

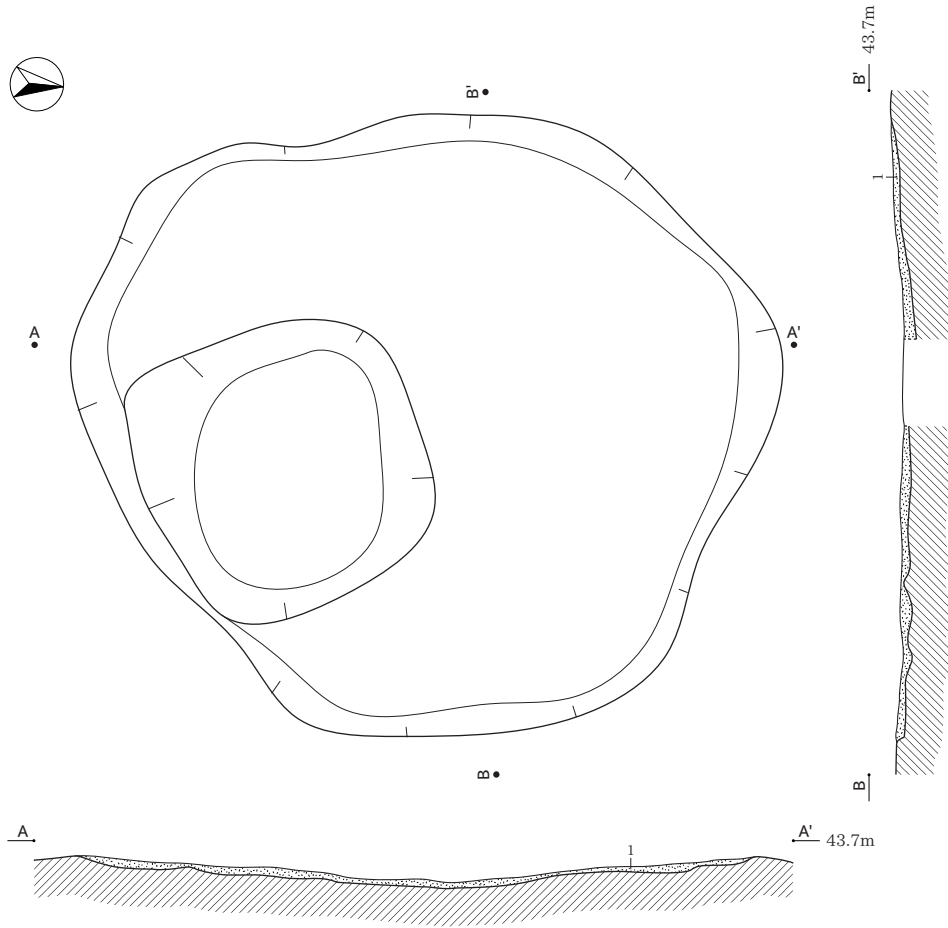


SX659
1 黒灰色粘質土 直径5mmの炭化物粒子を一面に含む
焼土粒子を含む 壁の一部が焼固する
2 炭化物層

炭化物

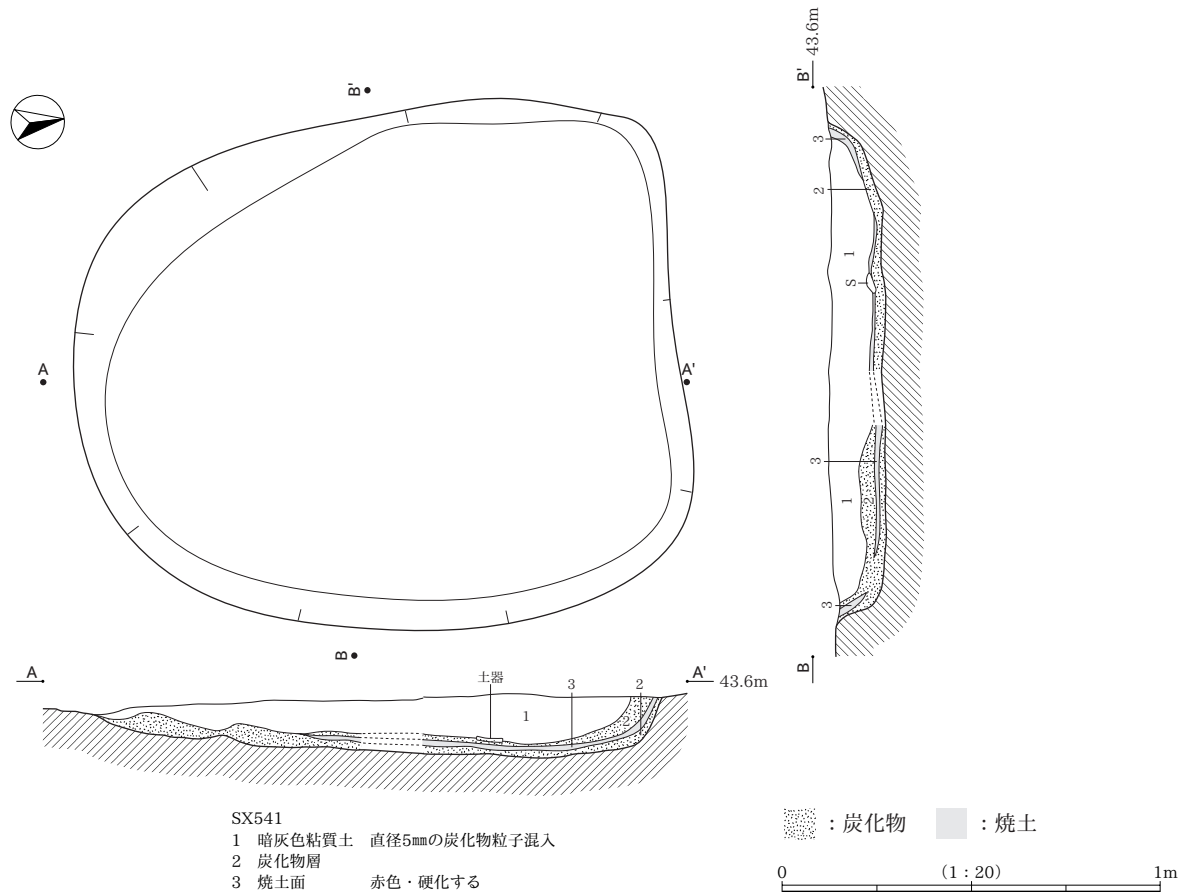


SX540



SX540
1 炭化物層 焼固面を形成しない

SX541

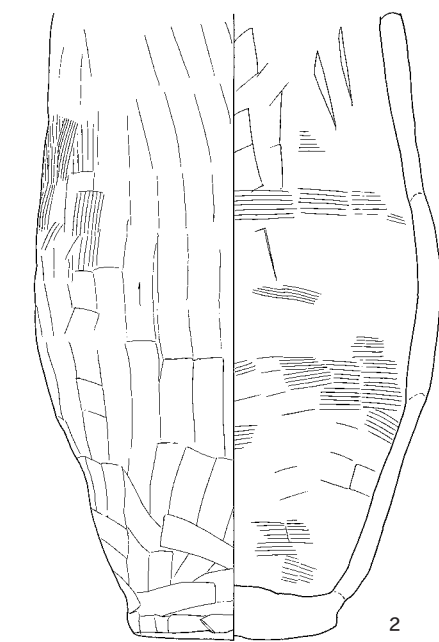


SX541
1 暗灰色粘質土 直径5mmの炭化物粒子混入
2 炭化物層
3 焼土面 赤色・硬化する

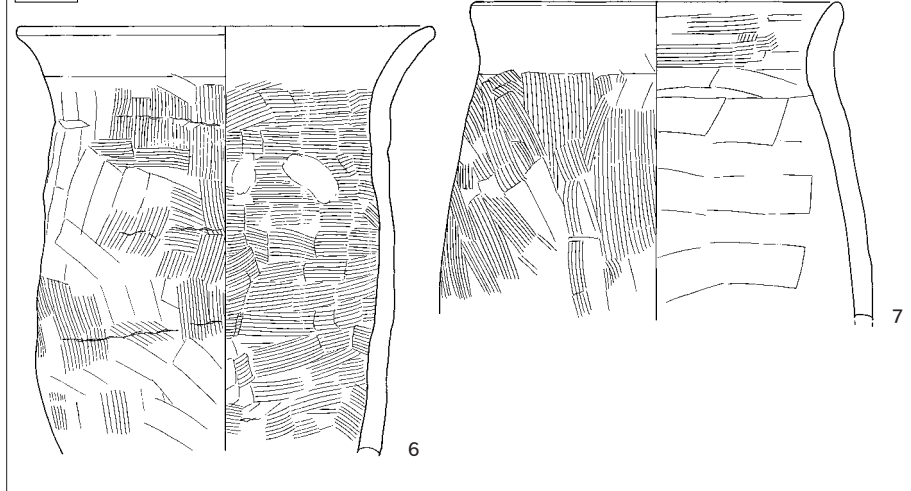
炭化物 焼土

0 (1:20) 1m

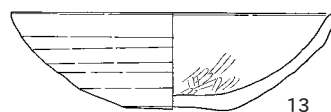
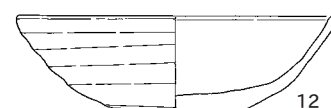
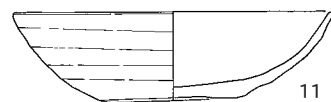
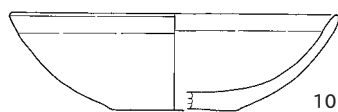
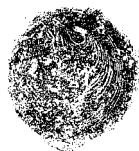
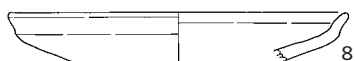
SI417



SI539

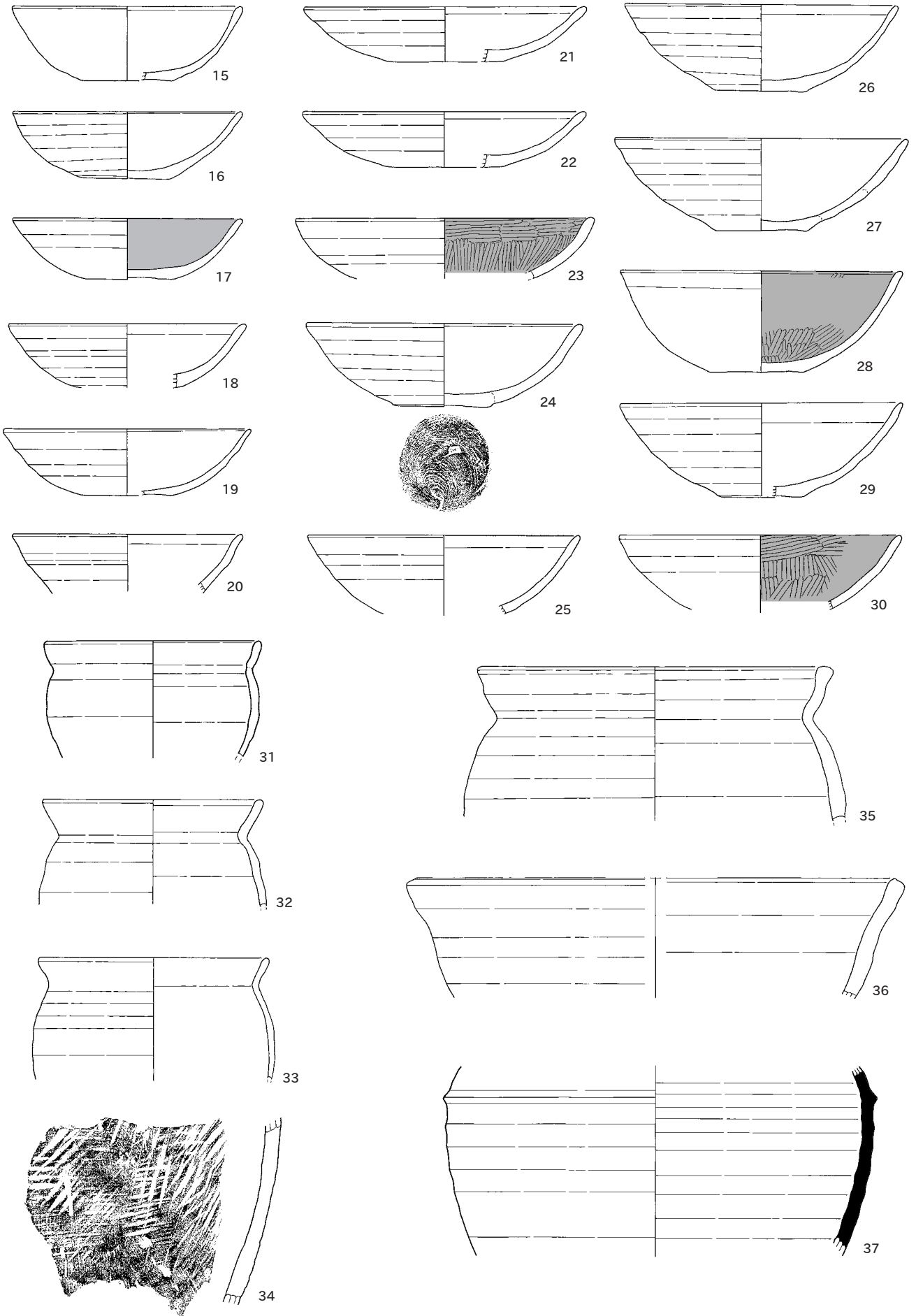


SX3

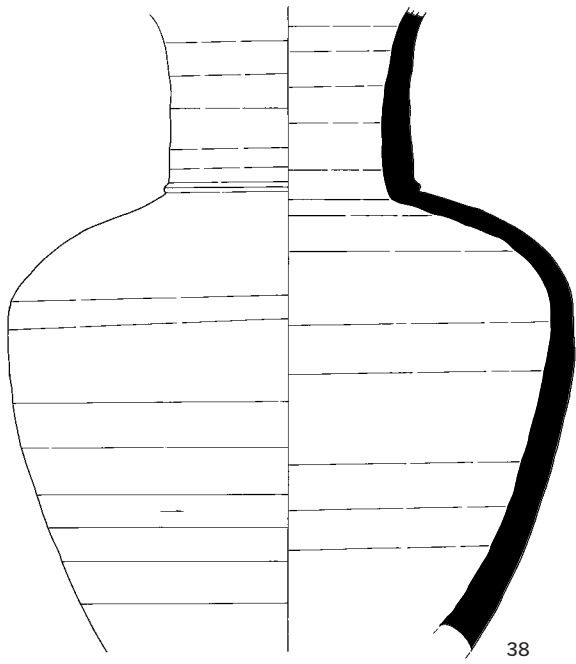


0 (1:3) 15cm

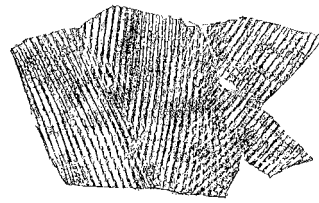
SX3



SX3



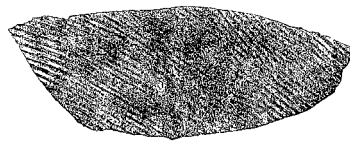
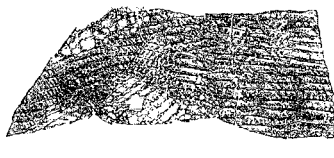
38



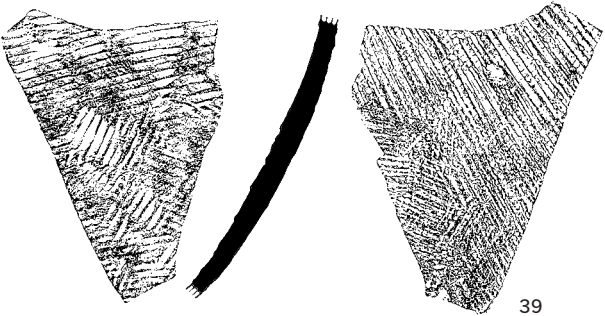
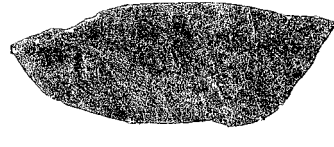
40



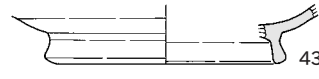
41



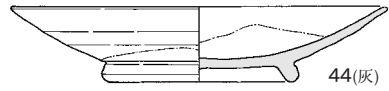
42



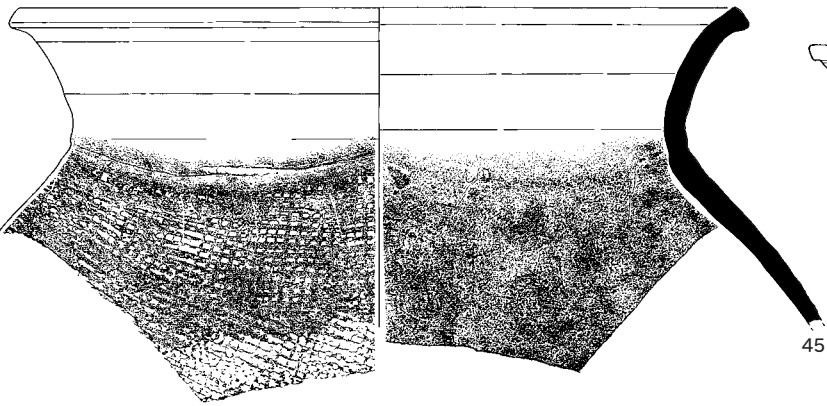
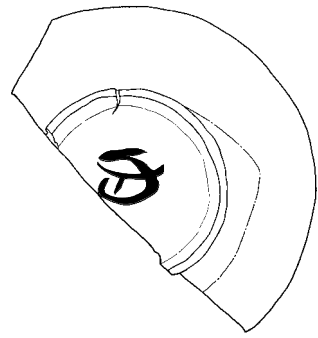
39



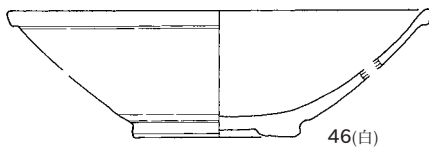
43(灰)



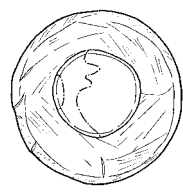
44(灰)



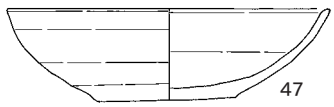
45



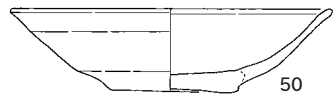
46(白)



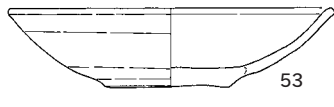
SX16



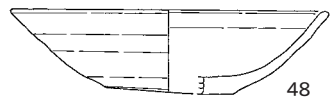
47



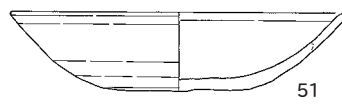
50



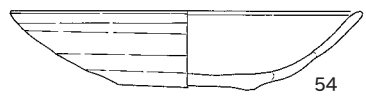
53



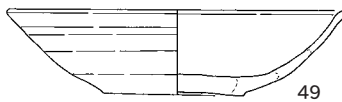
48



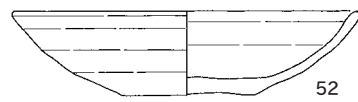
51



54



49



52

0 その他 (1 : 3) 15cm

0 39~42 (1 : 4) 20cm

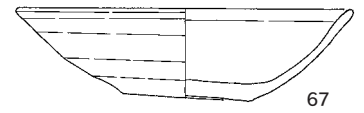
SX16



55



61



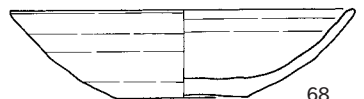
67



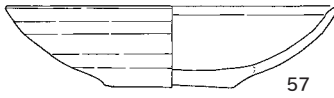
56



62



68



57



63



69



58



64



70



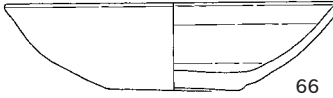
59



65

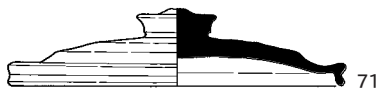


60

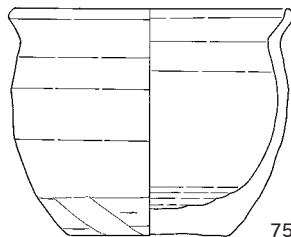


66

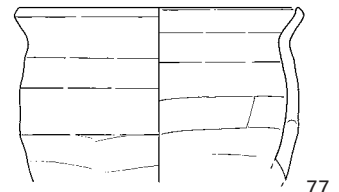
SX526



71



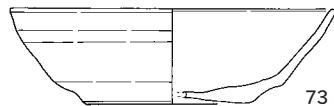
75



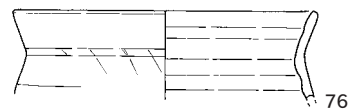
77



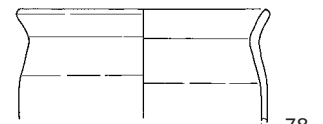
72



73



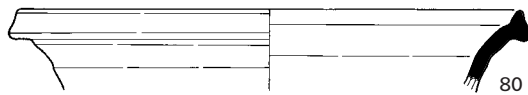
76



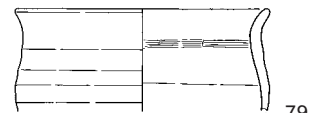
78



74

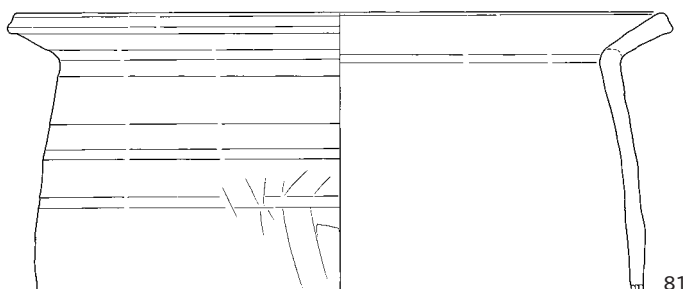


80



79

SX541

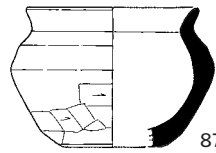


81

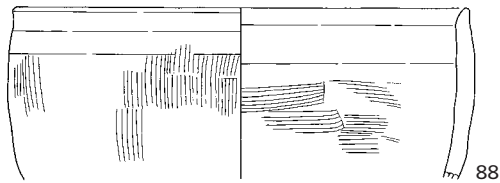
SX600



83



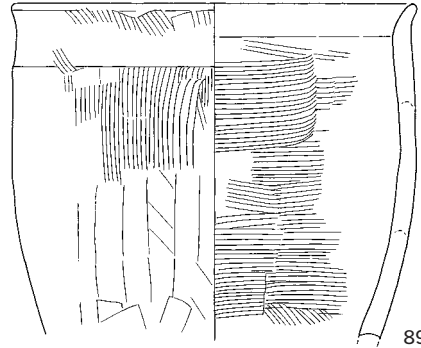
87



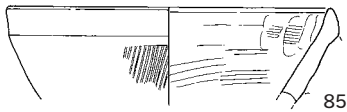
88



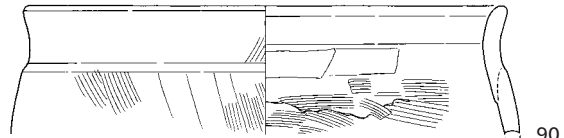
84



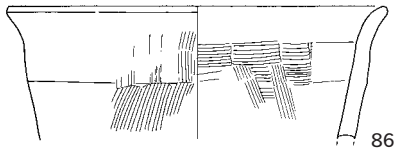
89



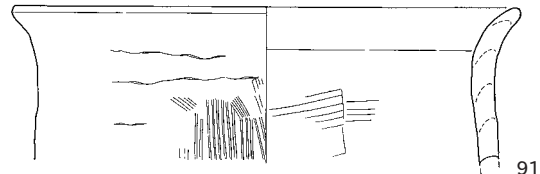
85



90



86



91

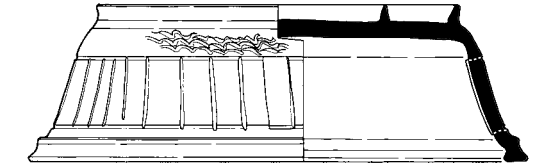
SB4



92



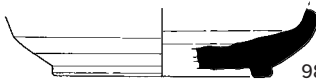
97



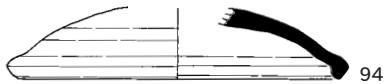
102



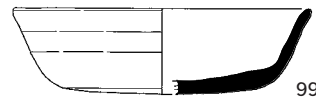
93



98



94



99



95



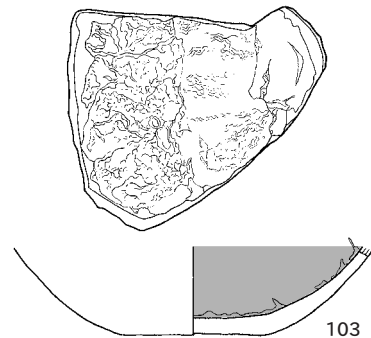
100



96

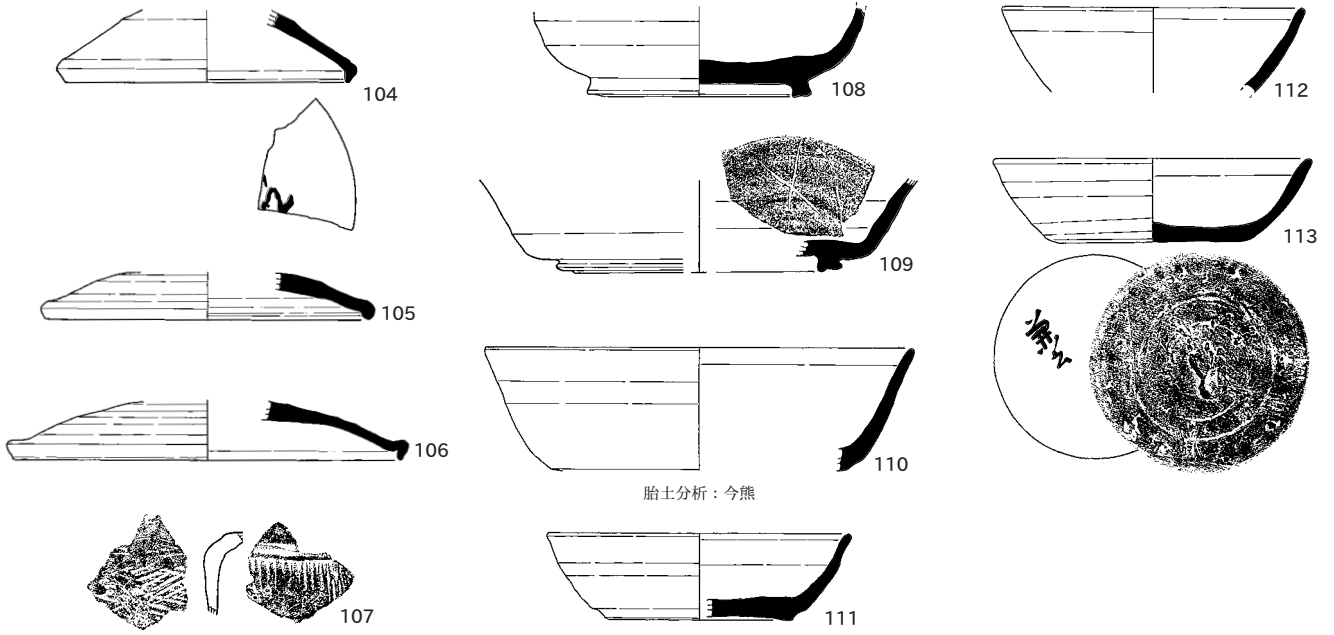


101

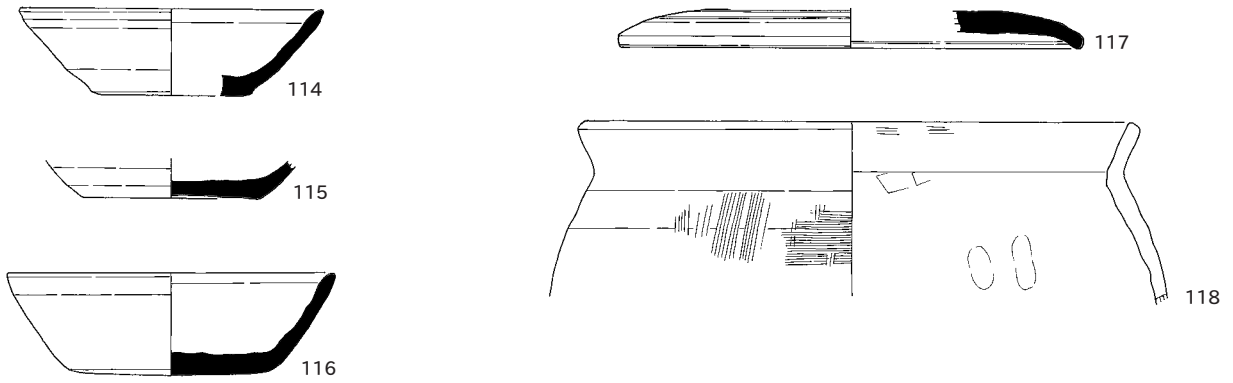


103

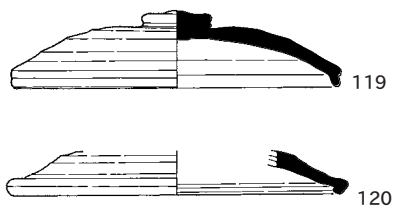
SB8



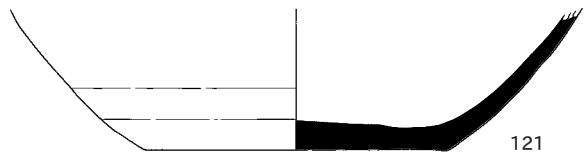
SB9



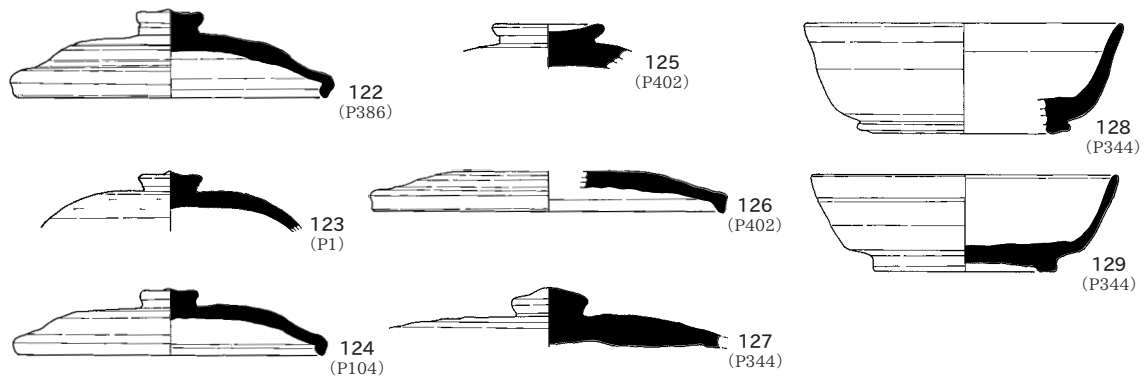
SB14



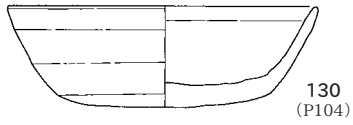
SB12



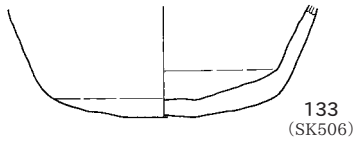
その他のピット出土



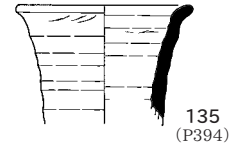
その他のピット出土



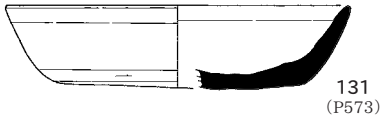
130
(P104)



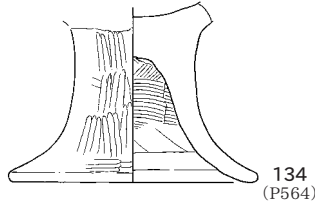
133
(SK506)



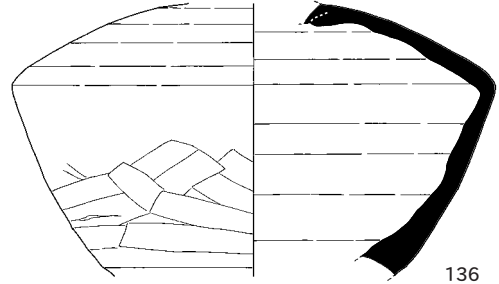
135
(P394)



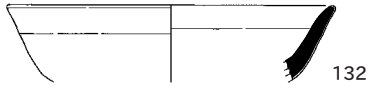
131
(P573)



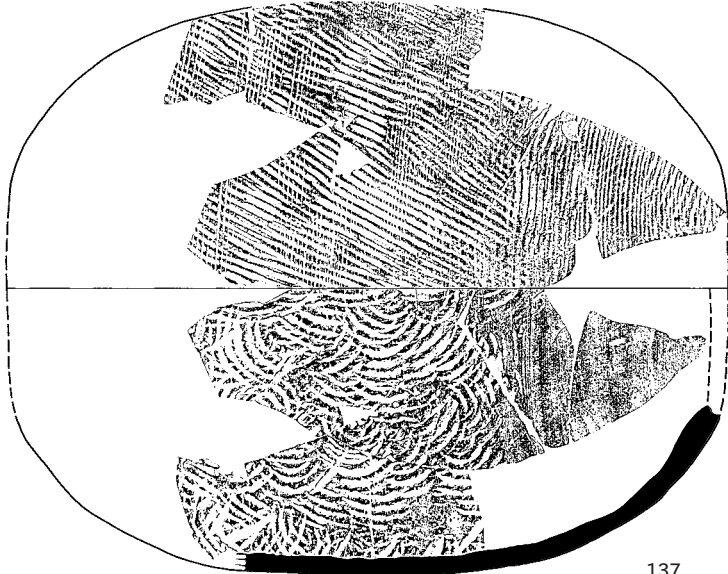
134
(P564)



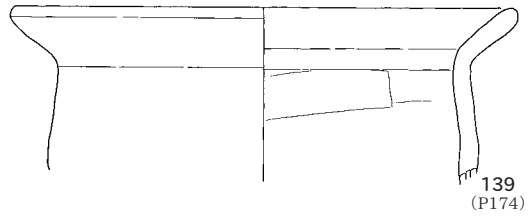
136
(P175)



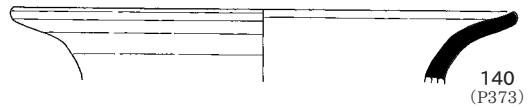
132



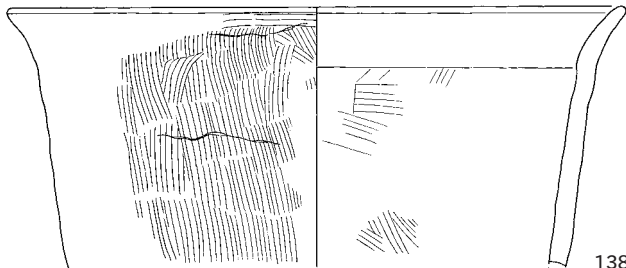
137
(P585)



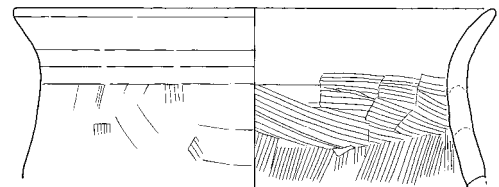
139
(P174)



140
(P373)



138
(P174)



141
(P210)

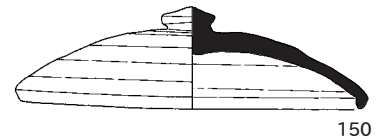
包含層



142



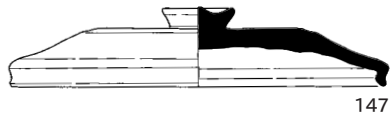
146



150



143



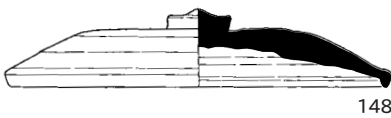
147



151



144



148



152

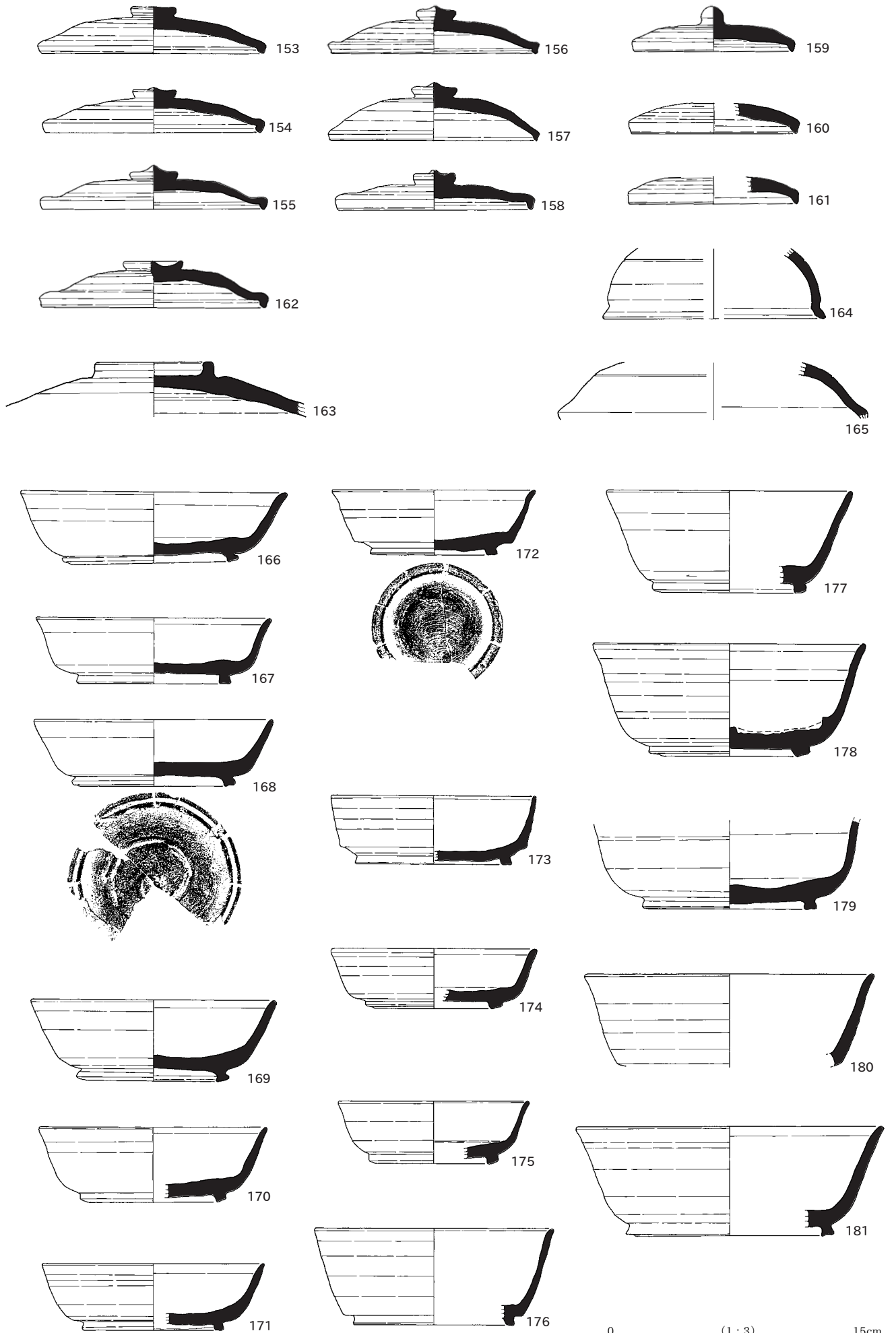


145



149

包含層



0 (1:3) 15cm

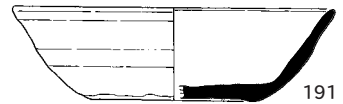
包含層



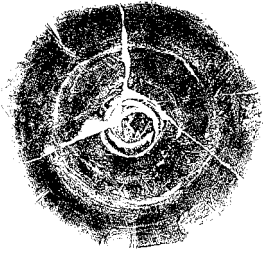
182



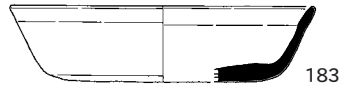
186



191



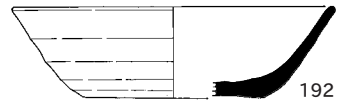
187



183

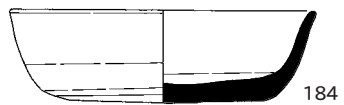


188



192

胎土分析：末野 or 今熊



184

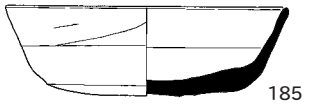


189



193

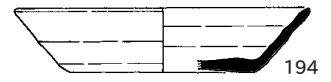
胎土分析：滝寺・大貫



185

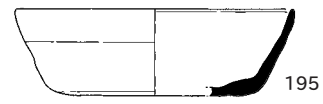


190



194

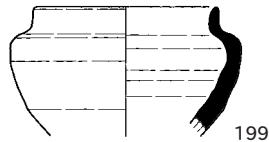
胎土分析：今熊



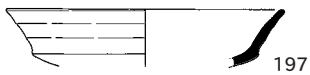
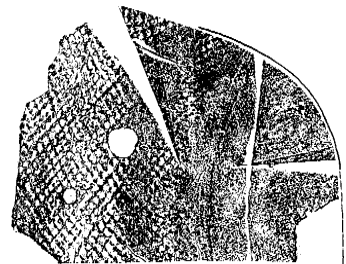
195



196



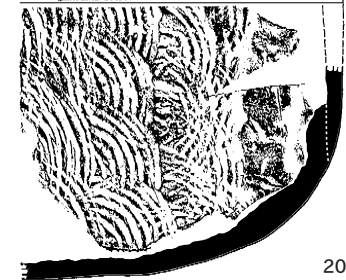
199



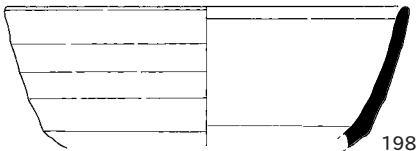
197



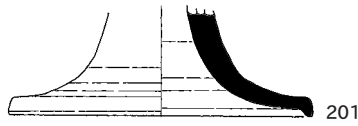
200



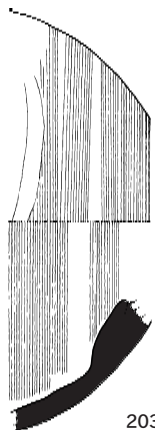
202



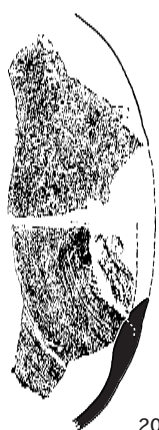
198



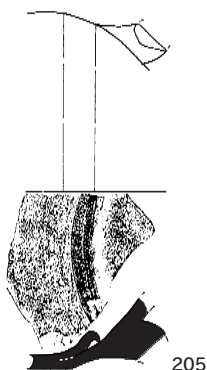
201



203



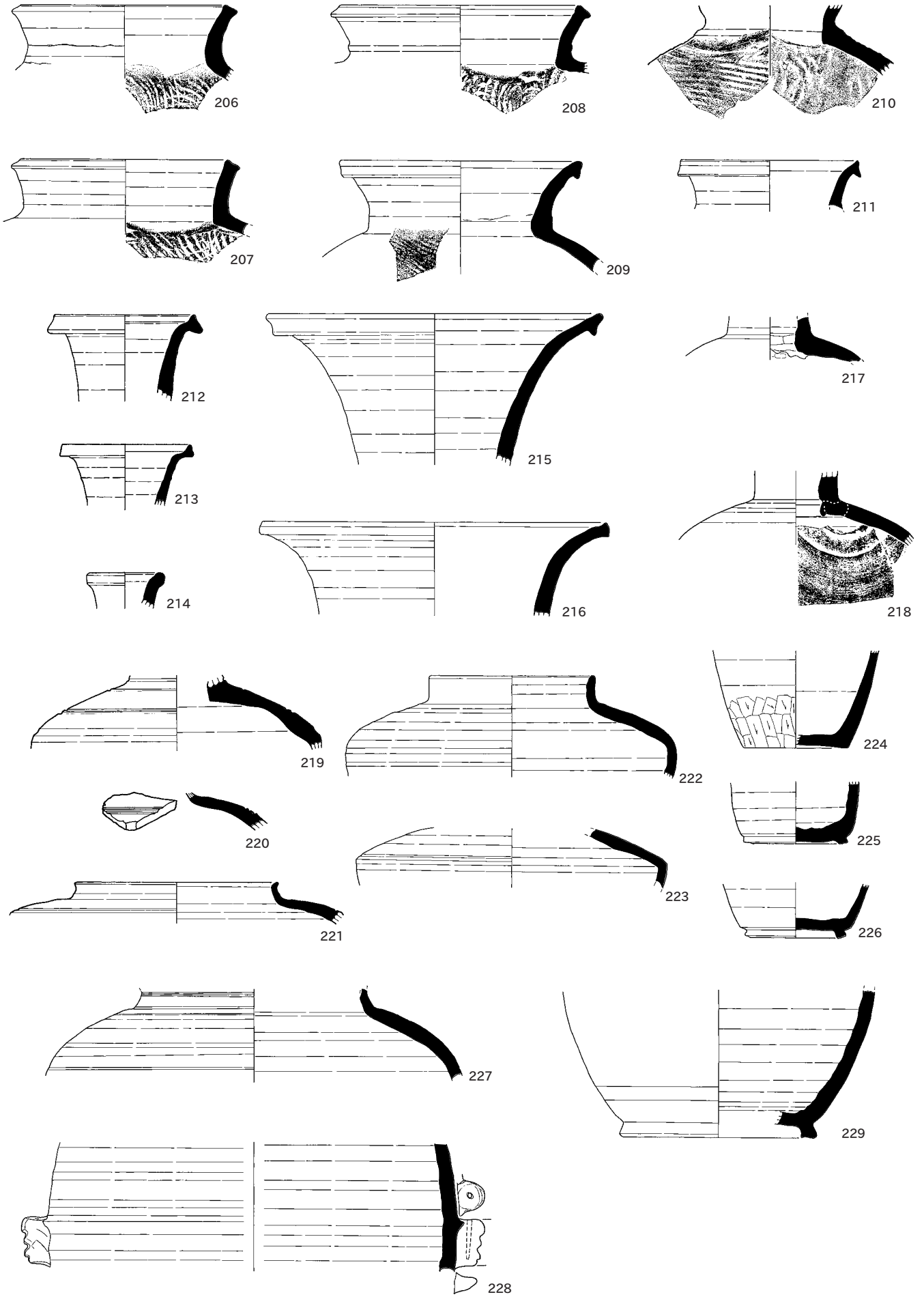
204



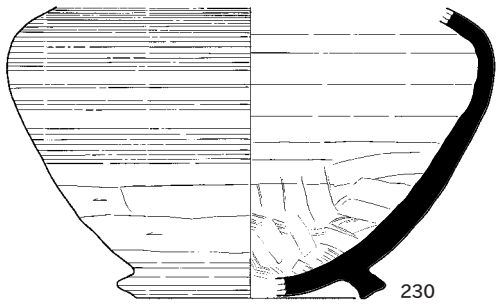
205

0 (1:3) 15cm

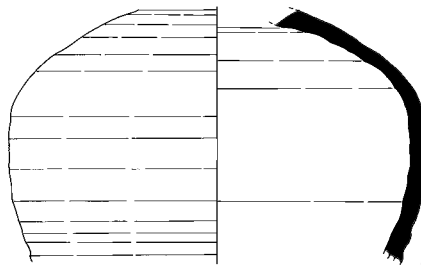
包含層



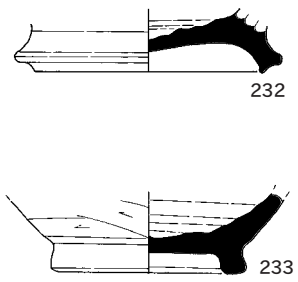
包含層



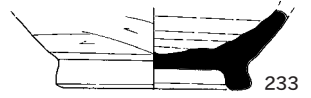
230



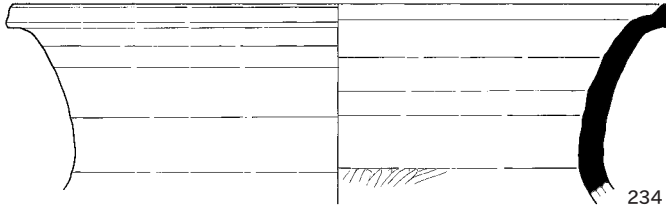
231



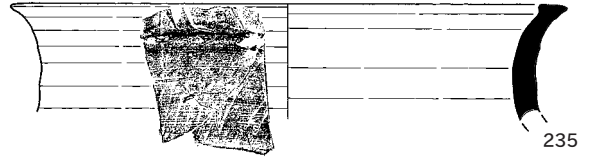
232



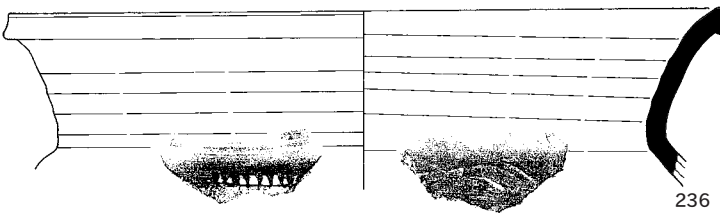
233



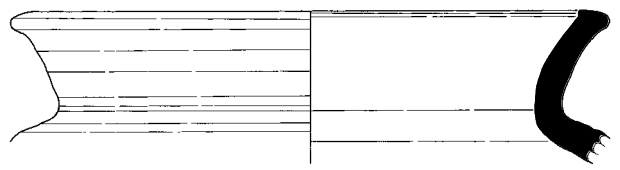
234



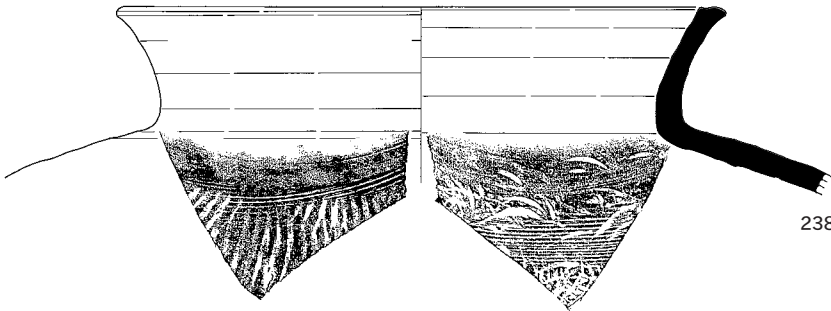
235



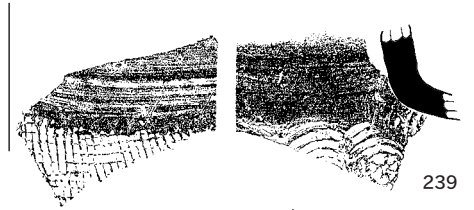
236



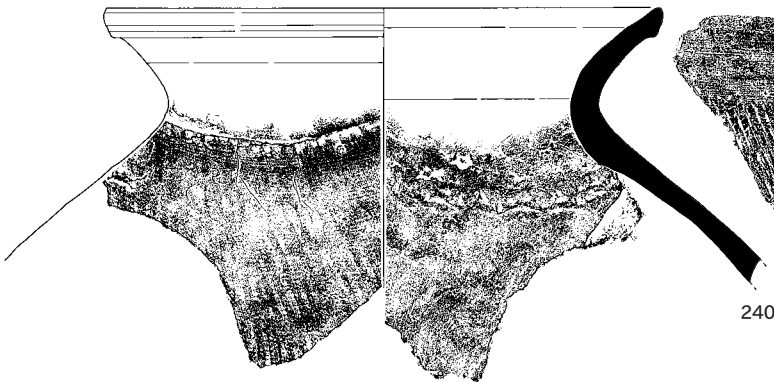
237



238



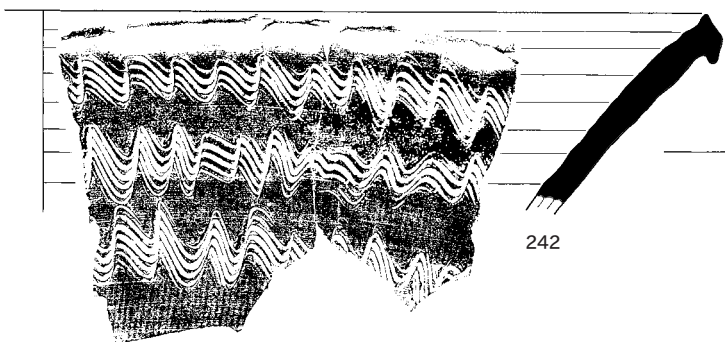
239



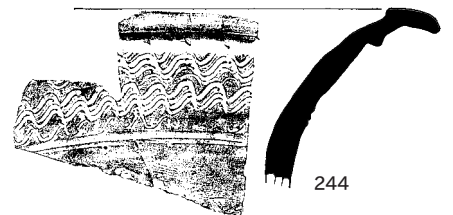
240



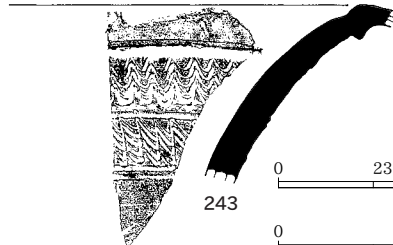
241



242



244

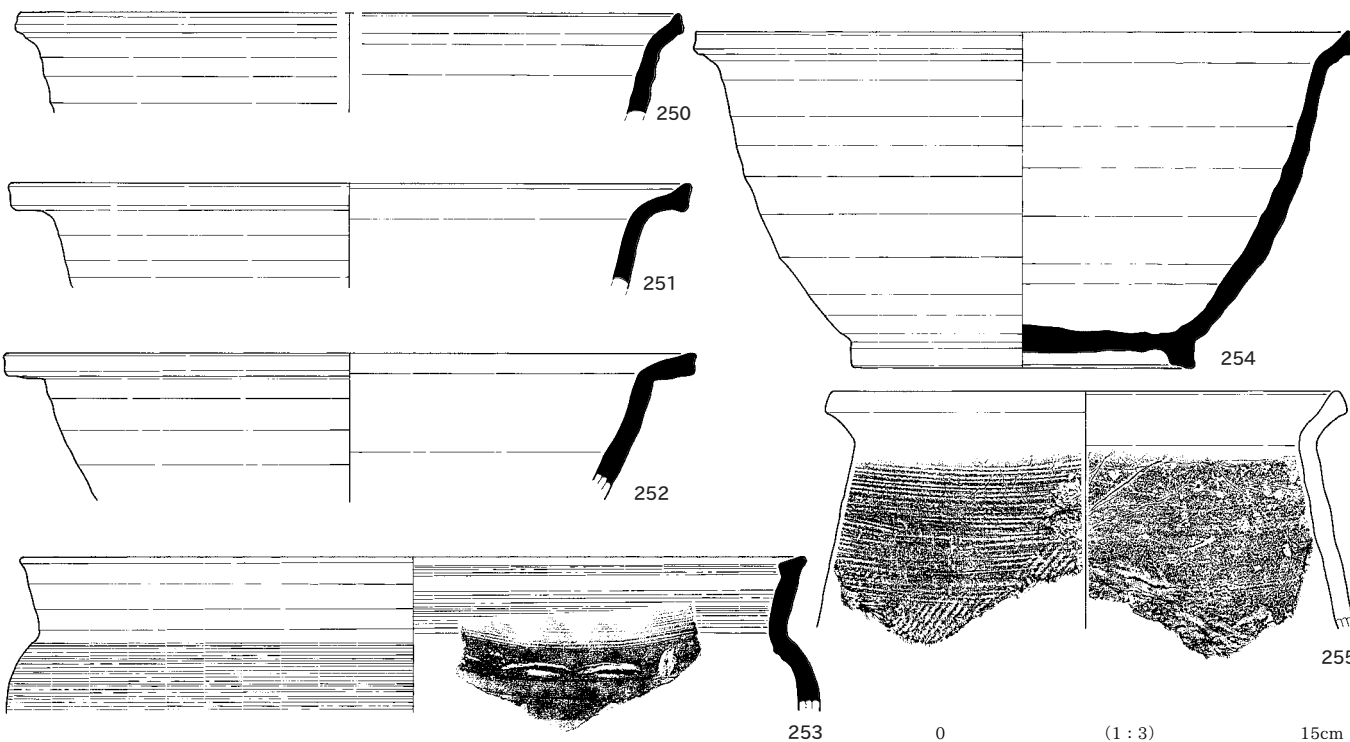
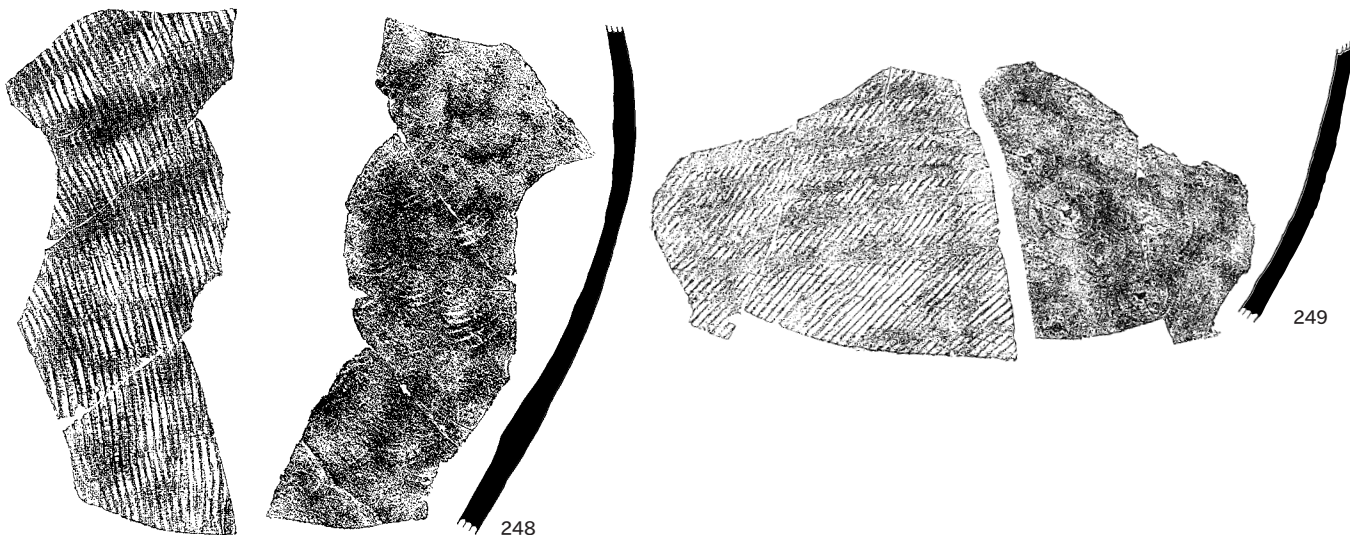
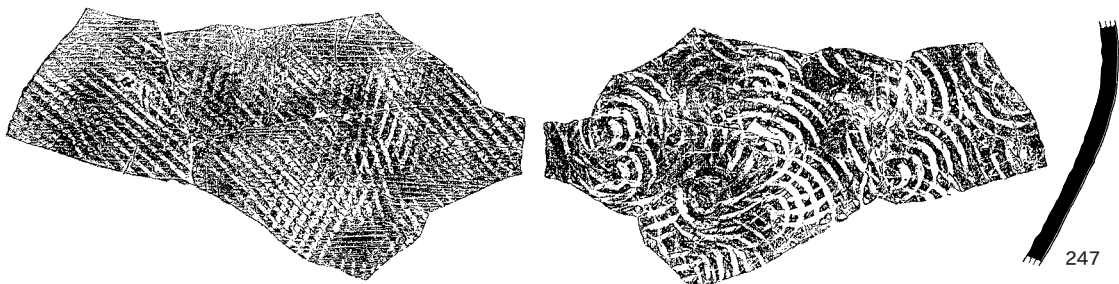


243

0 239・241・242 (1:3) 15cm

0 その他 (1:4) 20cm

包含層



0 (1:3) 15cm

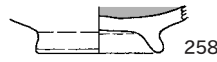
包含層



256



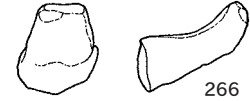
257



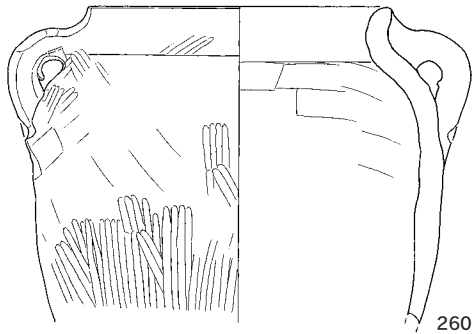
258



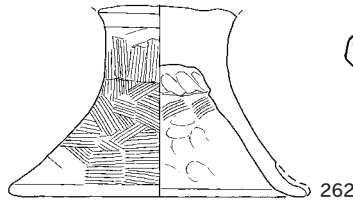
259



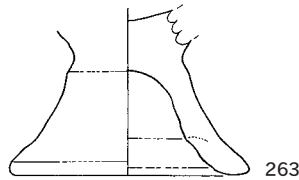
266



260



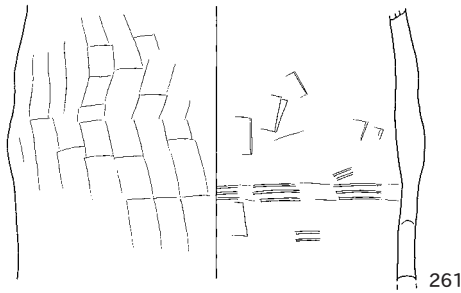
262



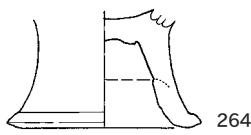
263



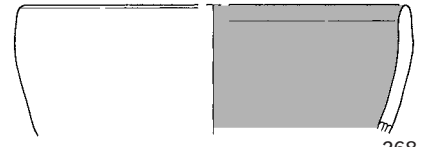
267



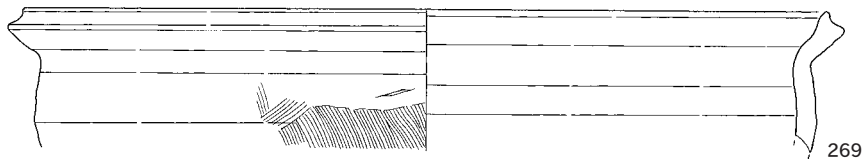
261



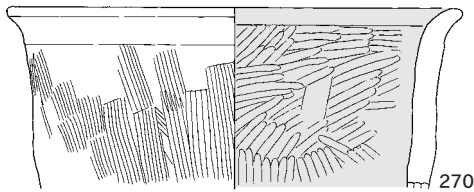
264



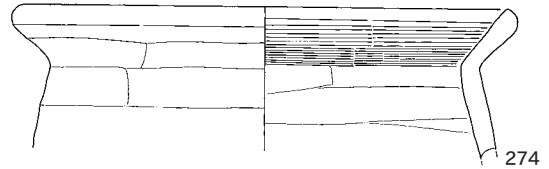
268



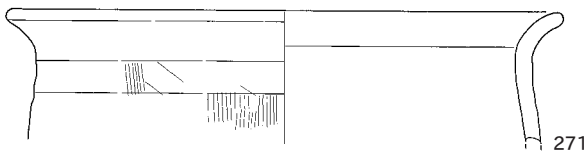
269



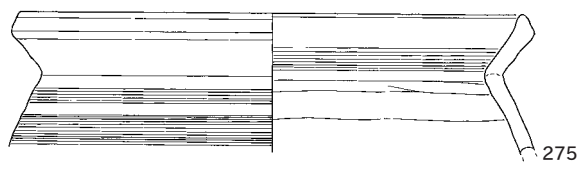
270



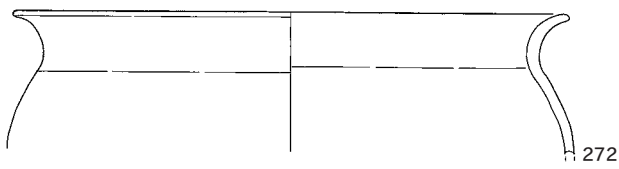
274



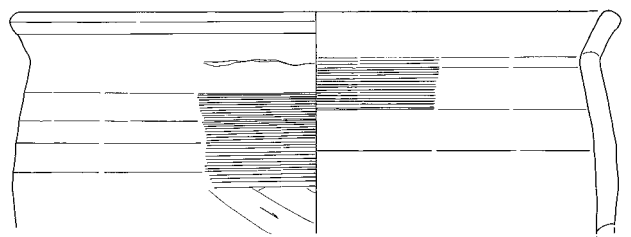
271



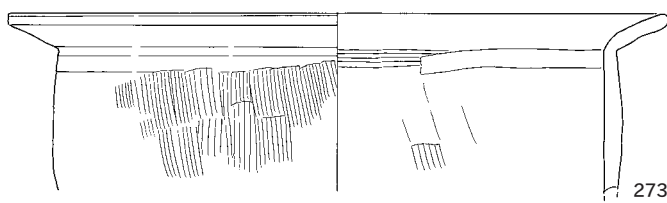
275



272



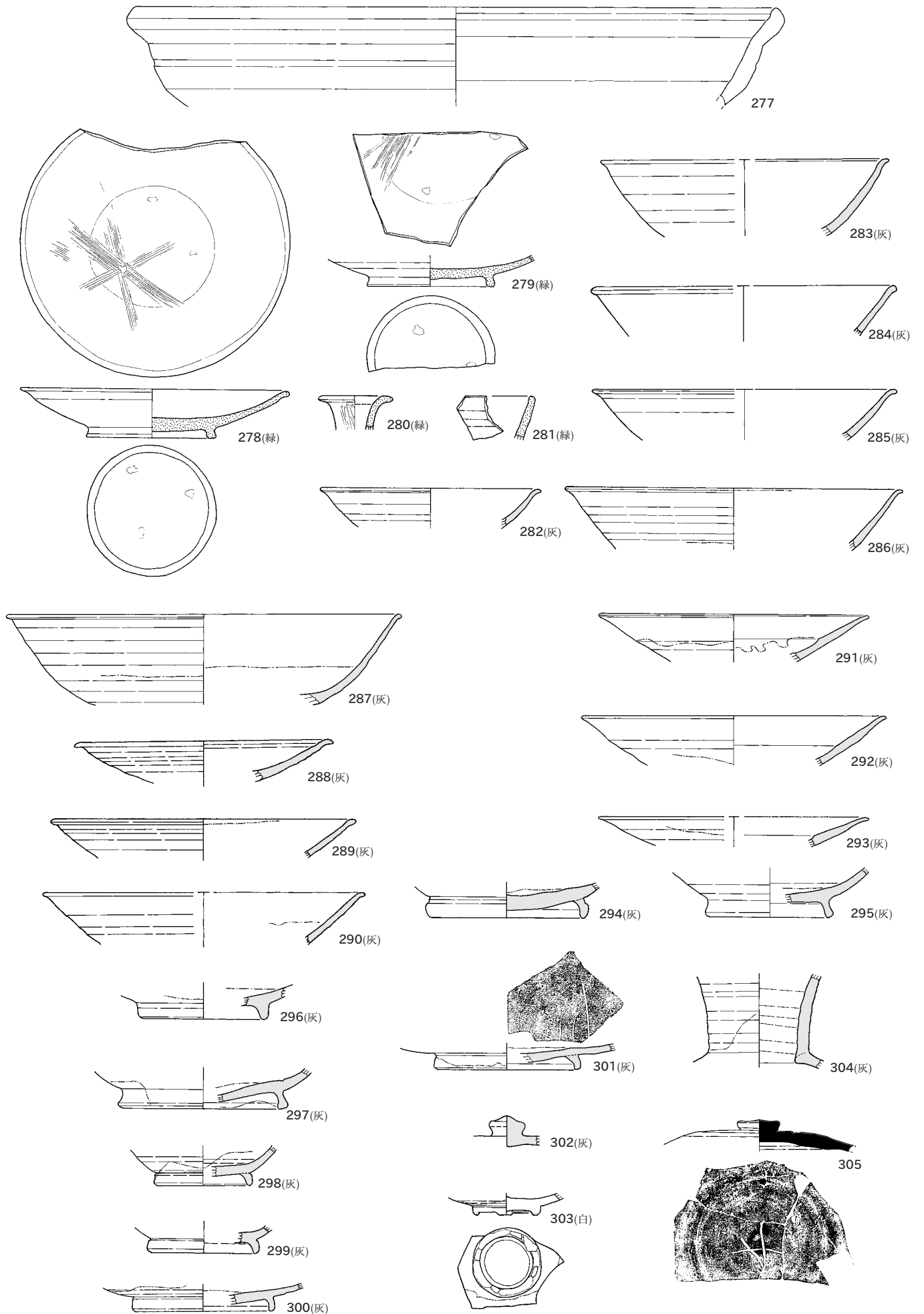
276



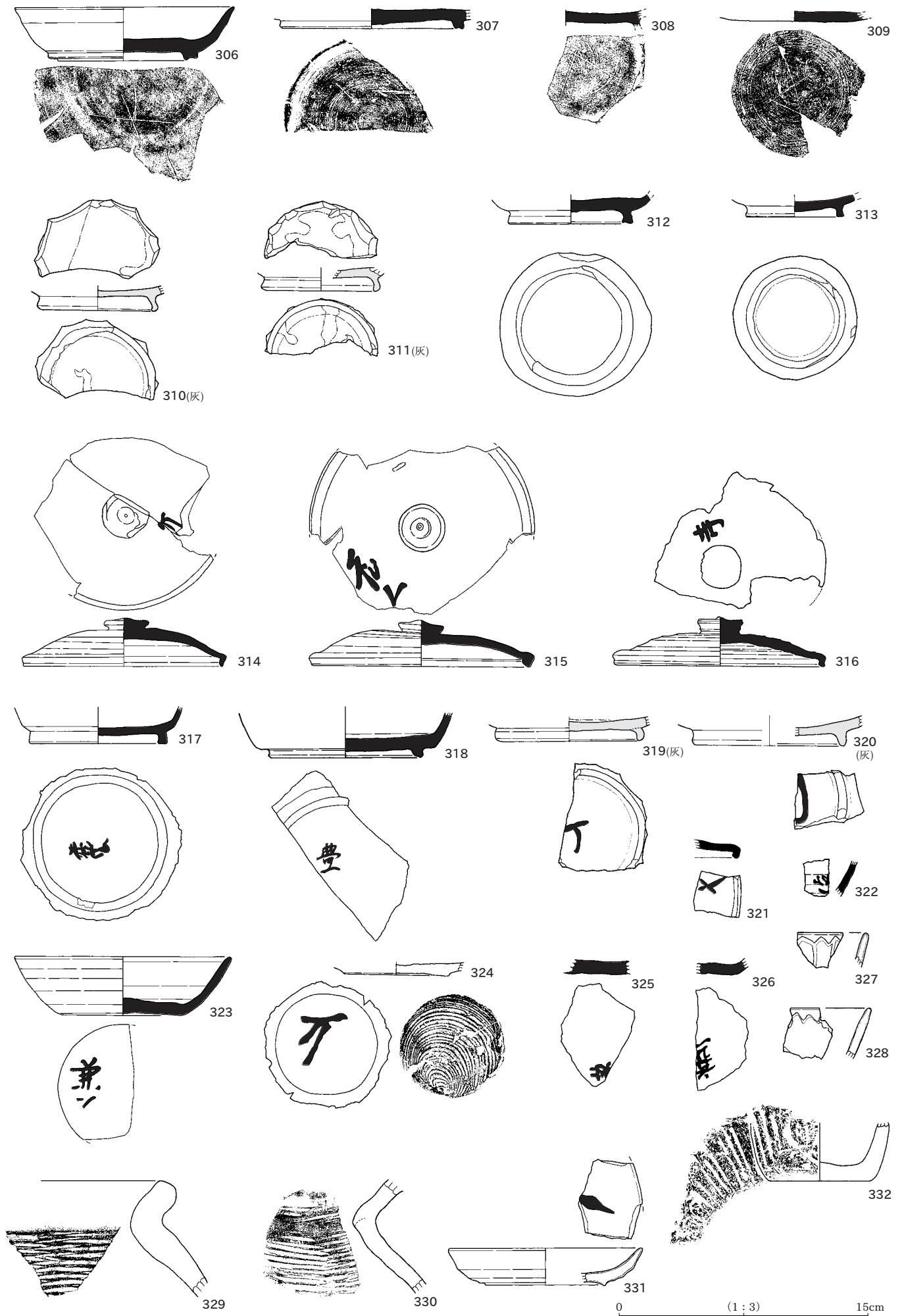
273

0 (1:3) 15cm

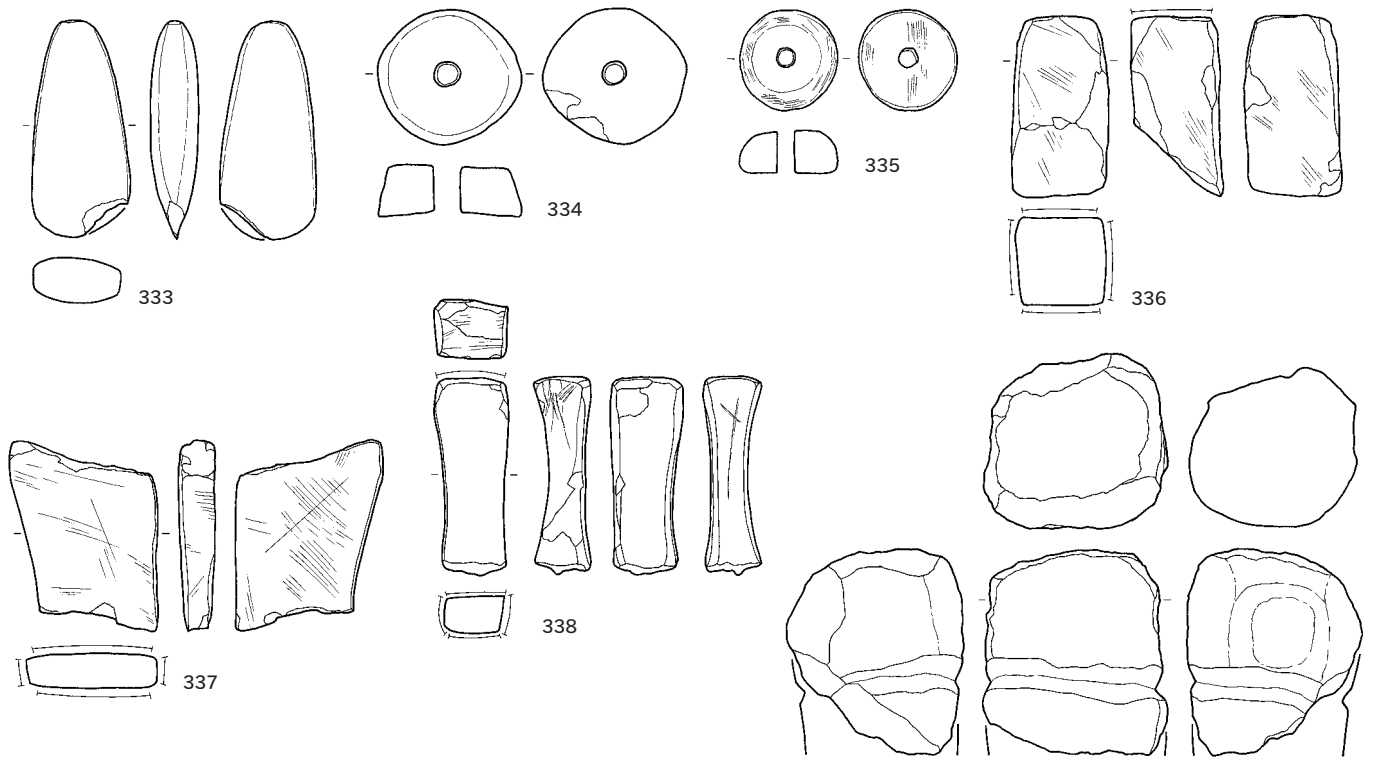
包含層



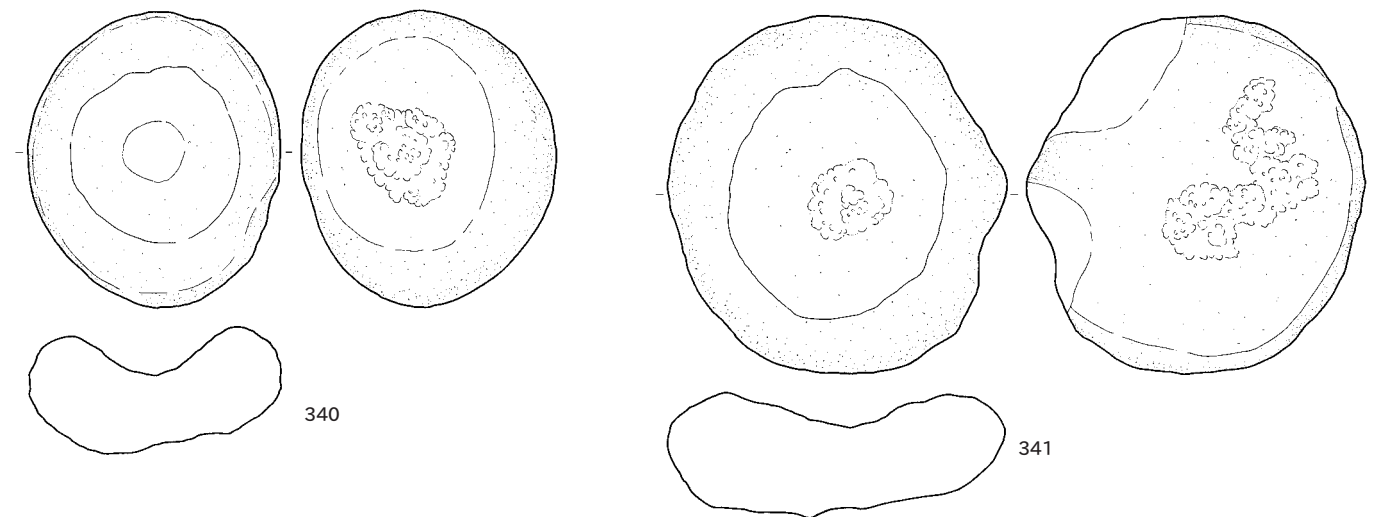
包含層



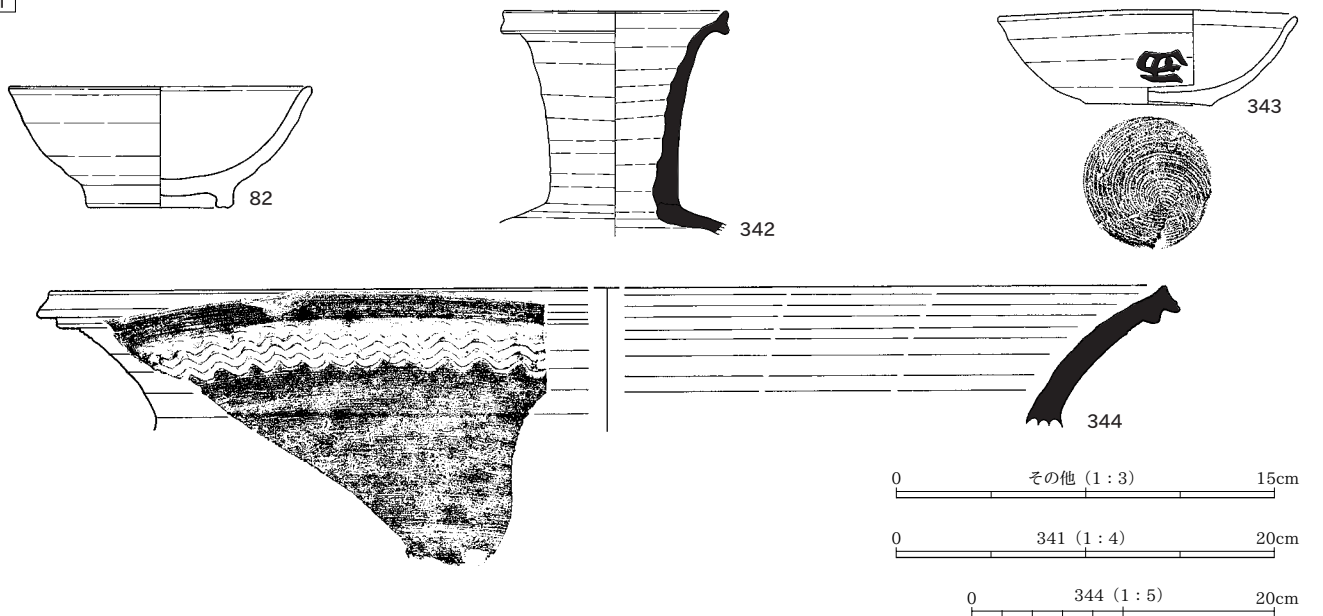
包含層

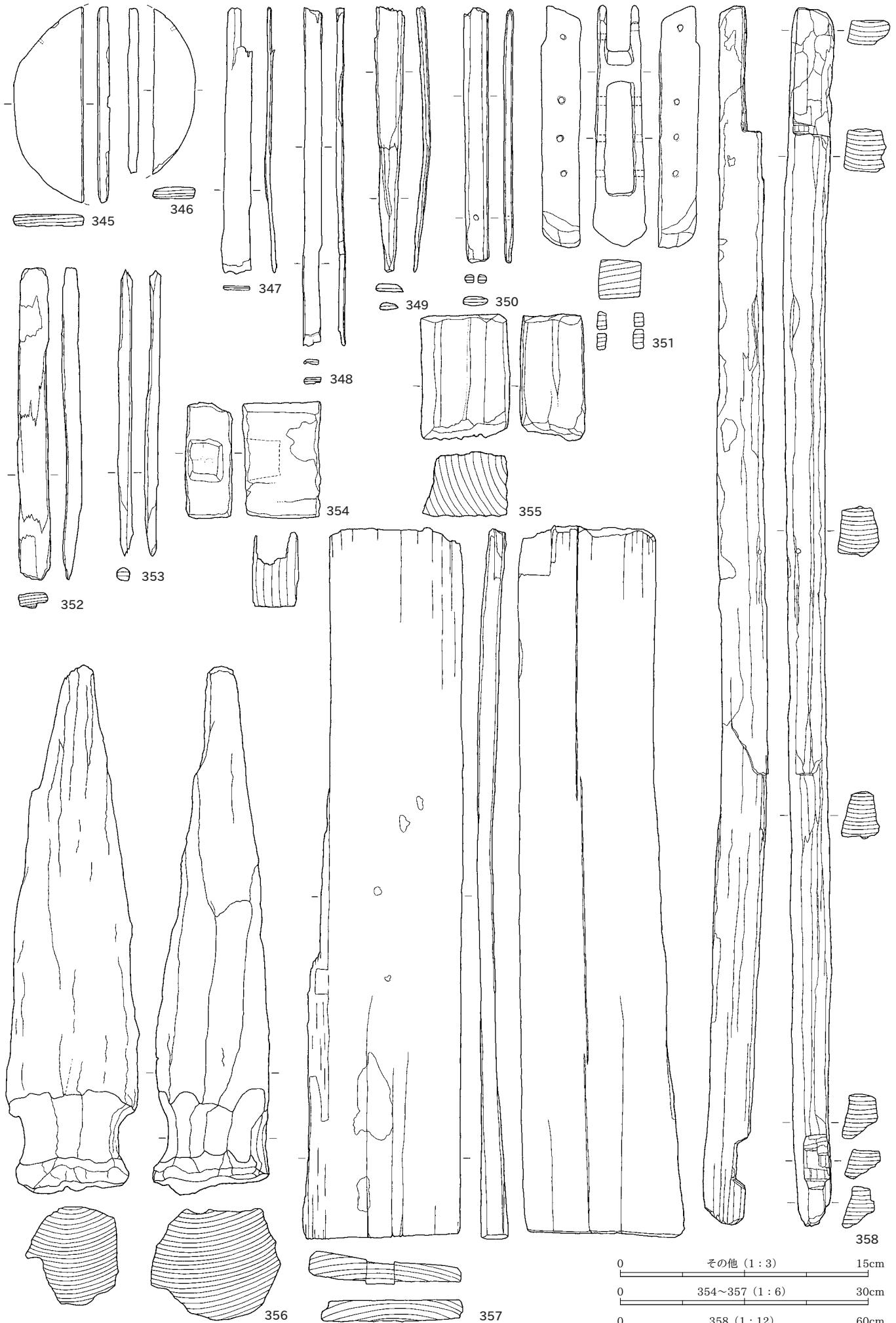


339



SX21

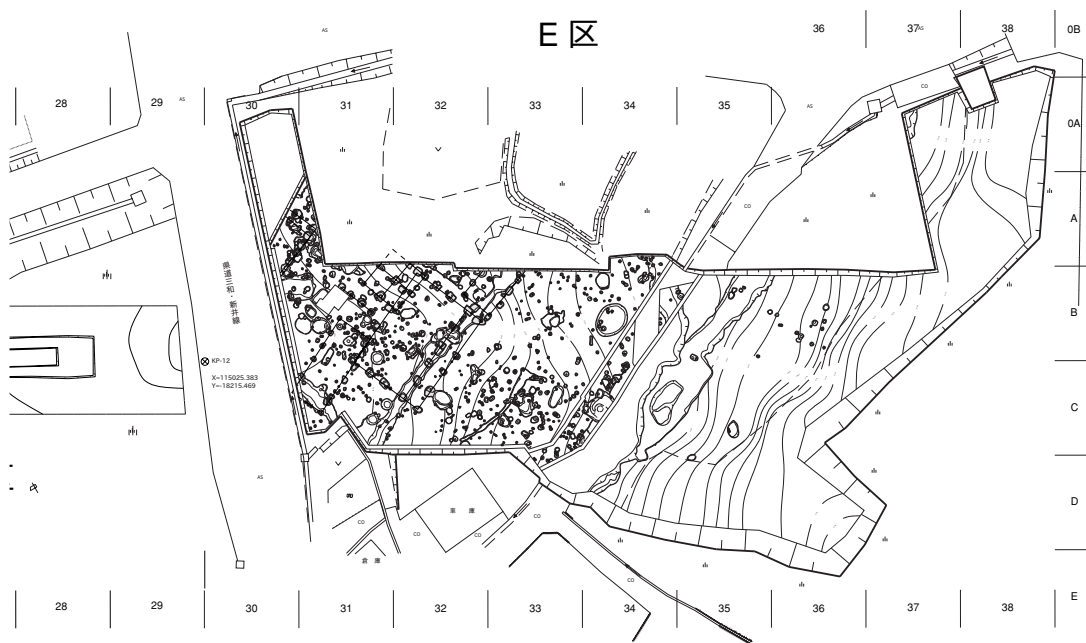
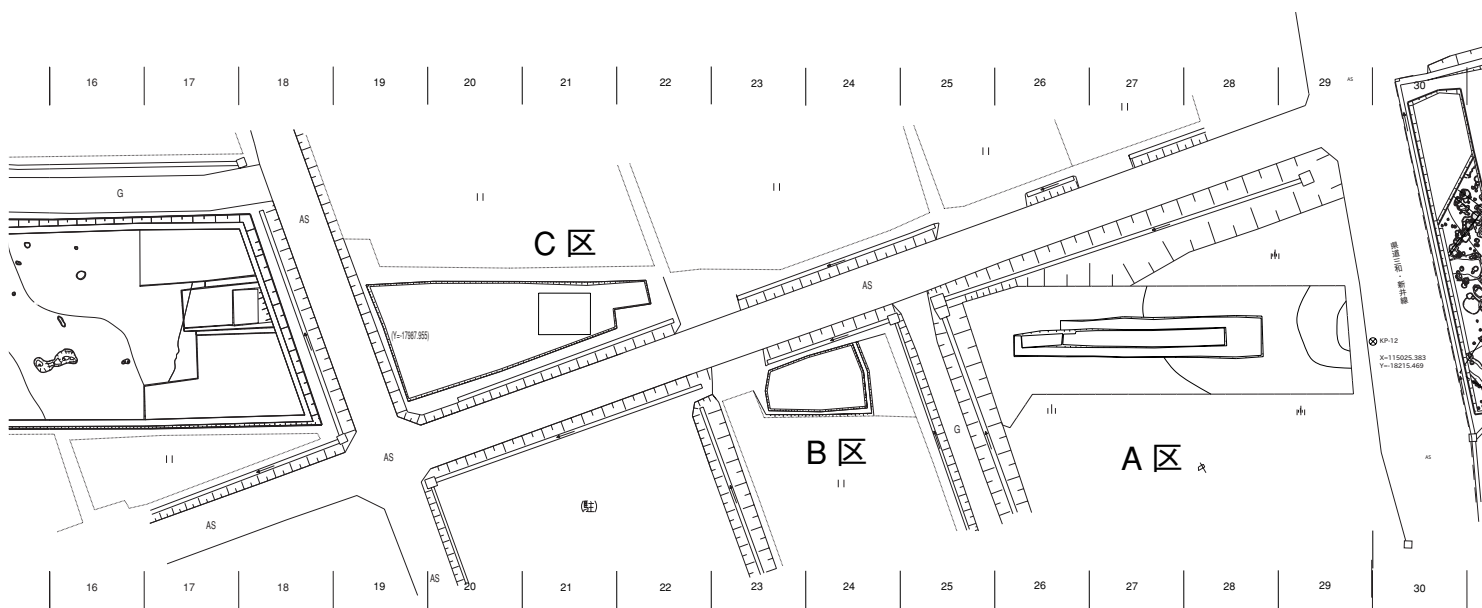
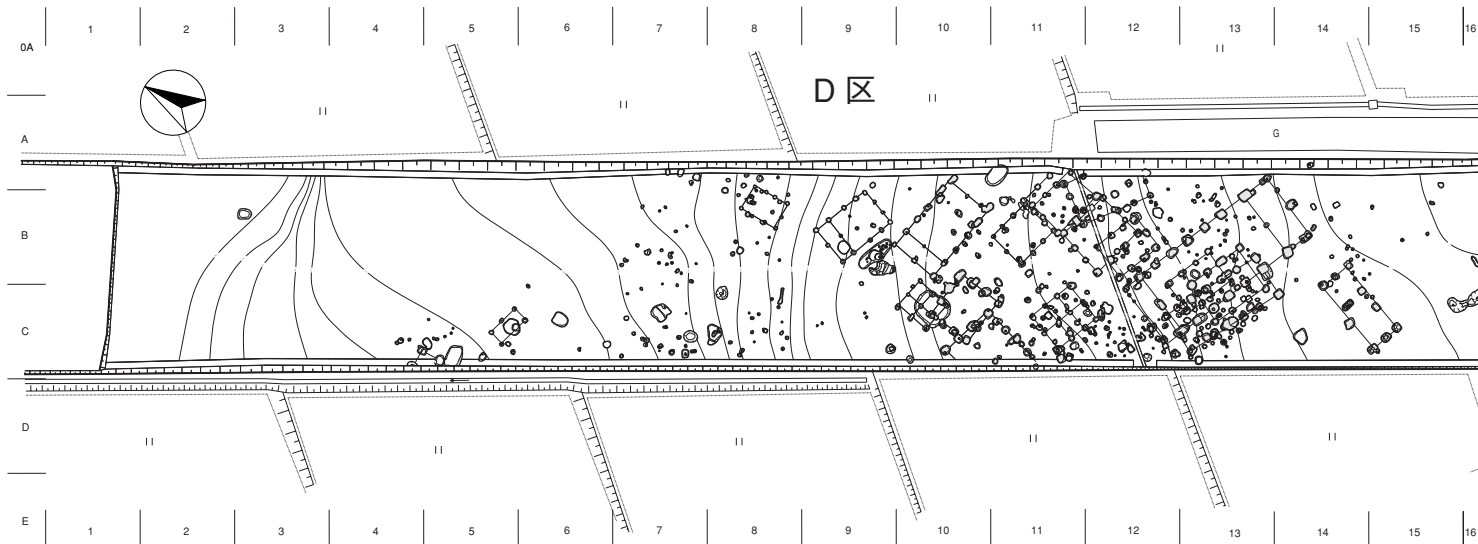




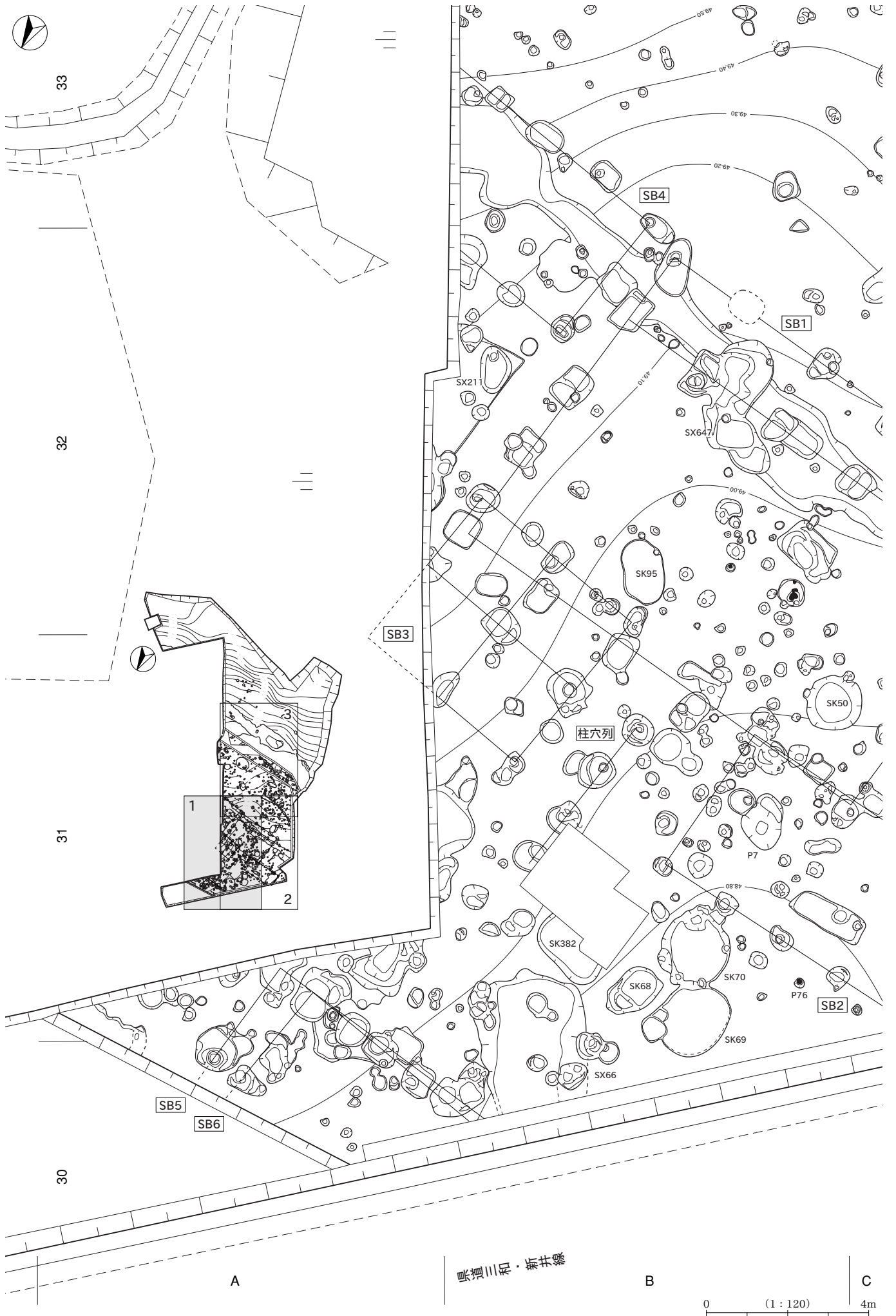
0 15cm
 その他 (1 : 3)

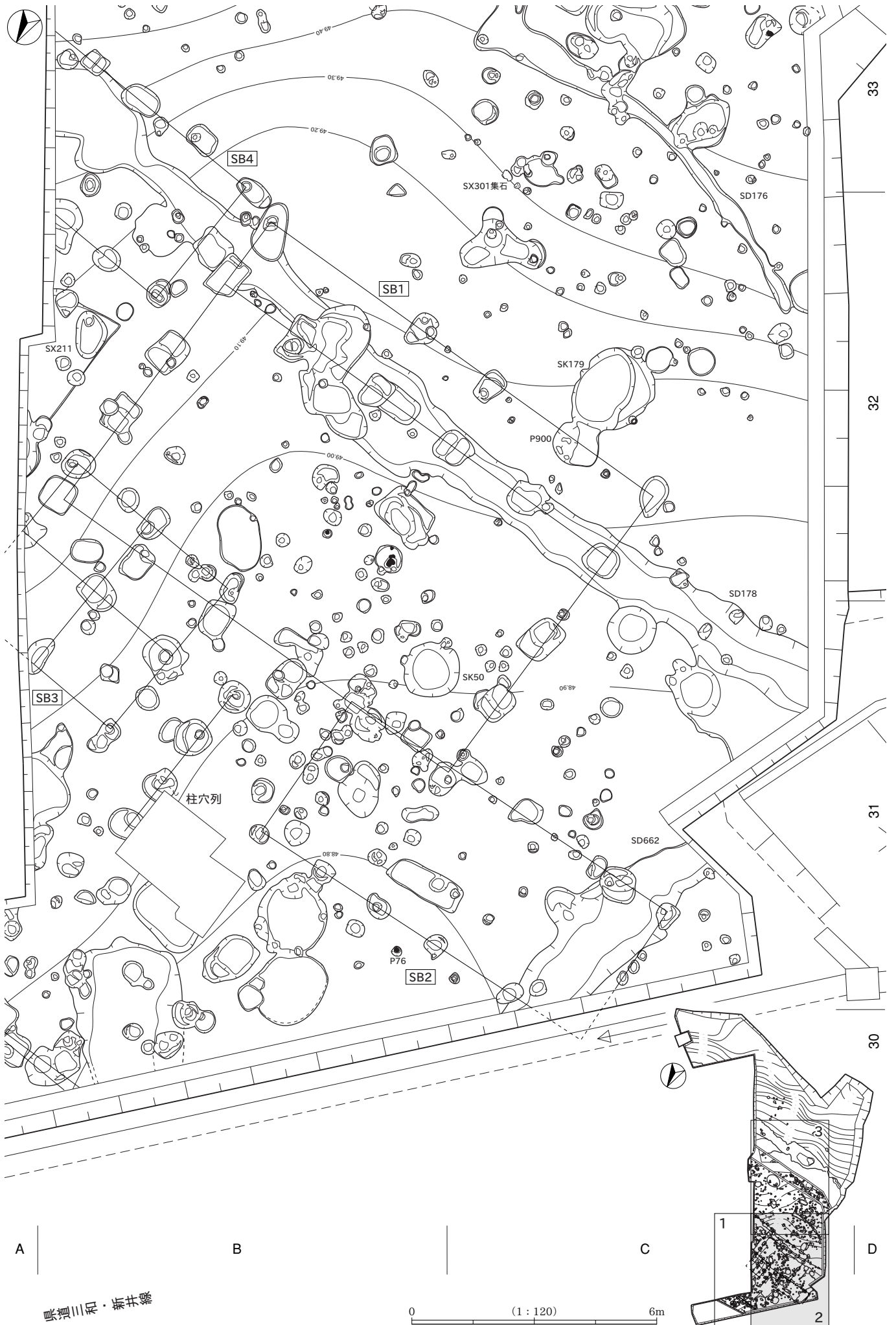
0 30cm
 354~357 (1 : 6)

0 60cm
 358 (1 : 12)



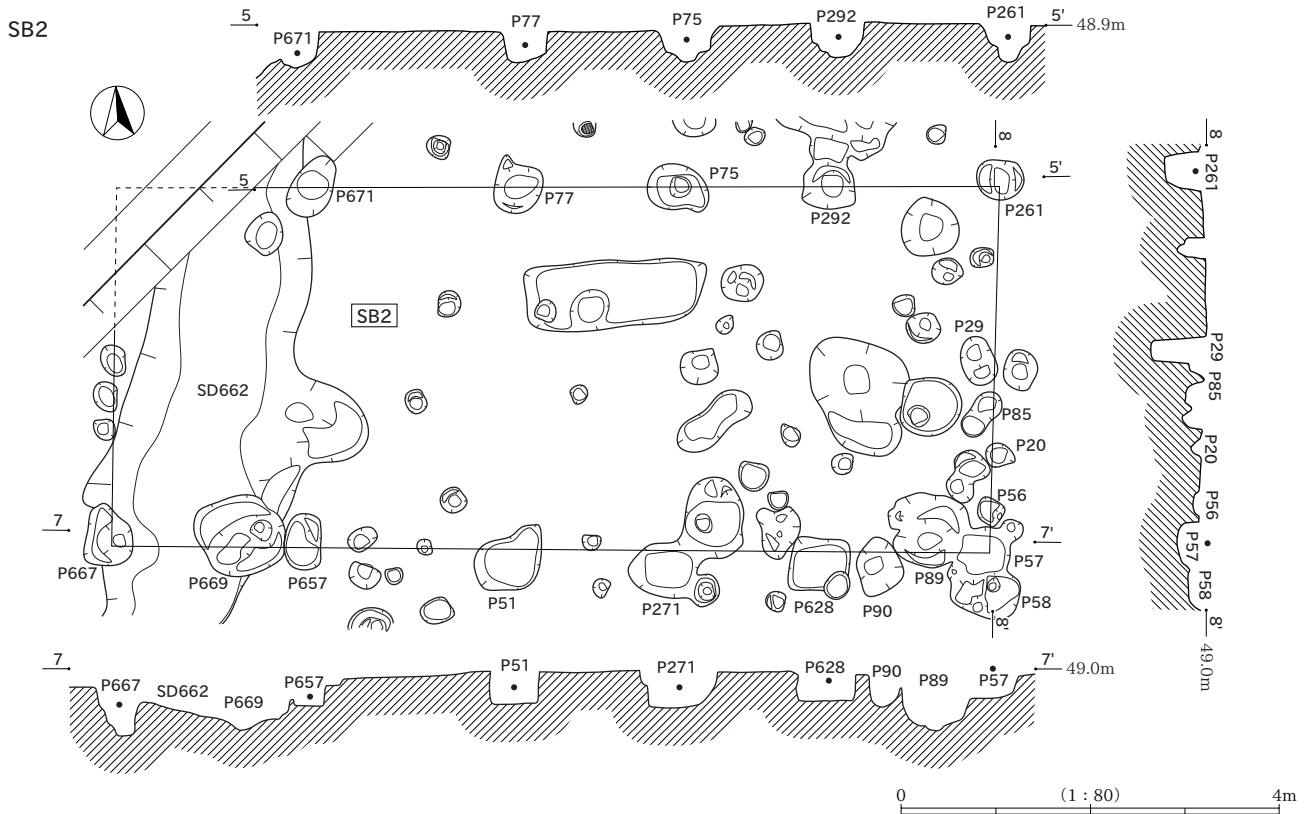
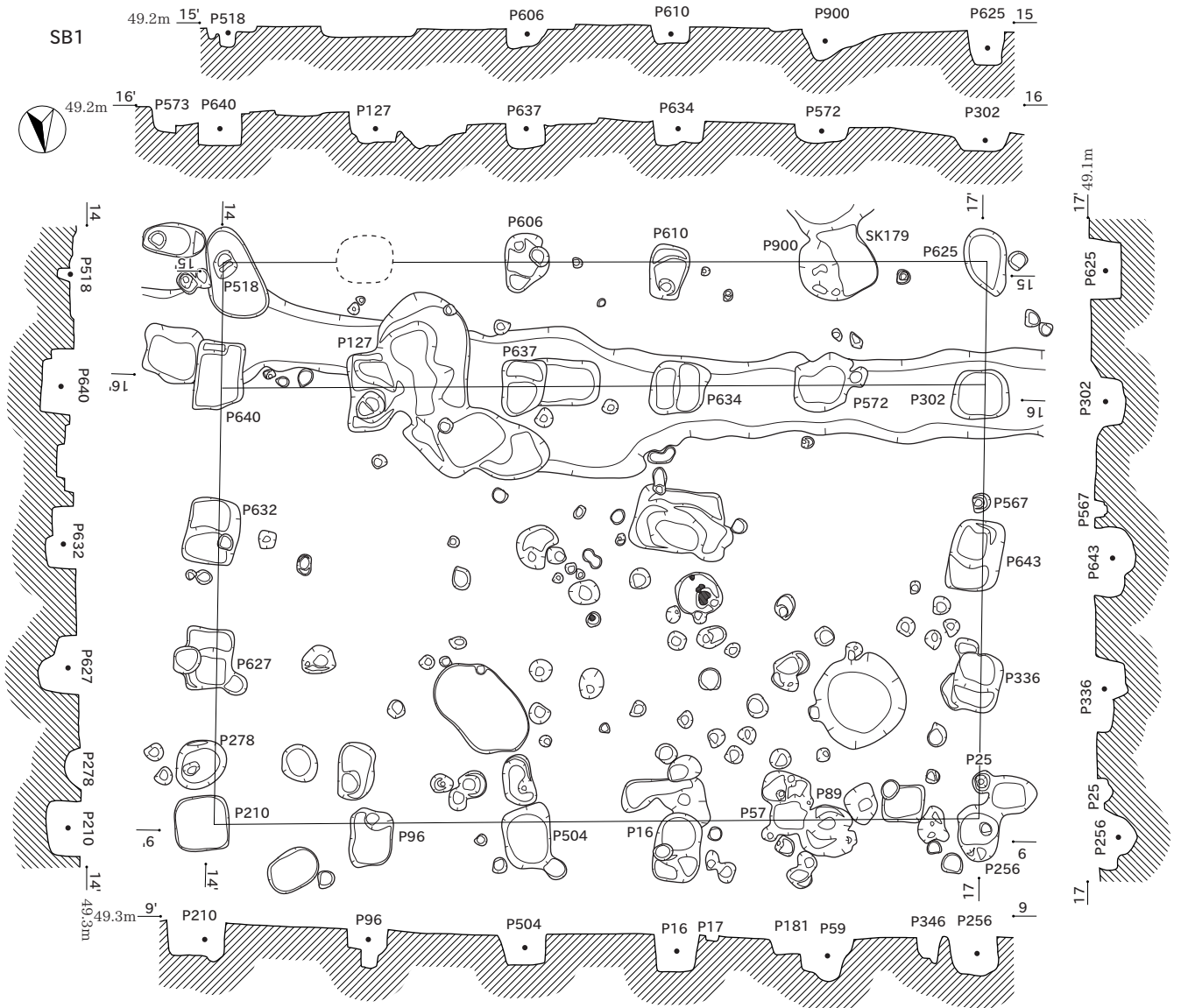




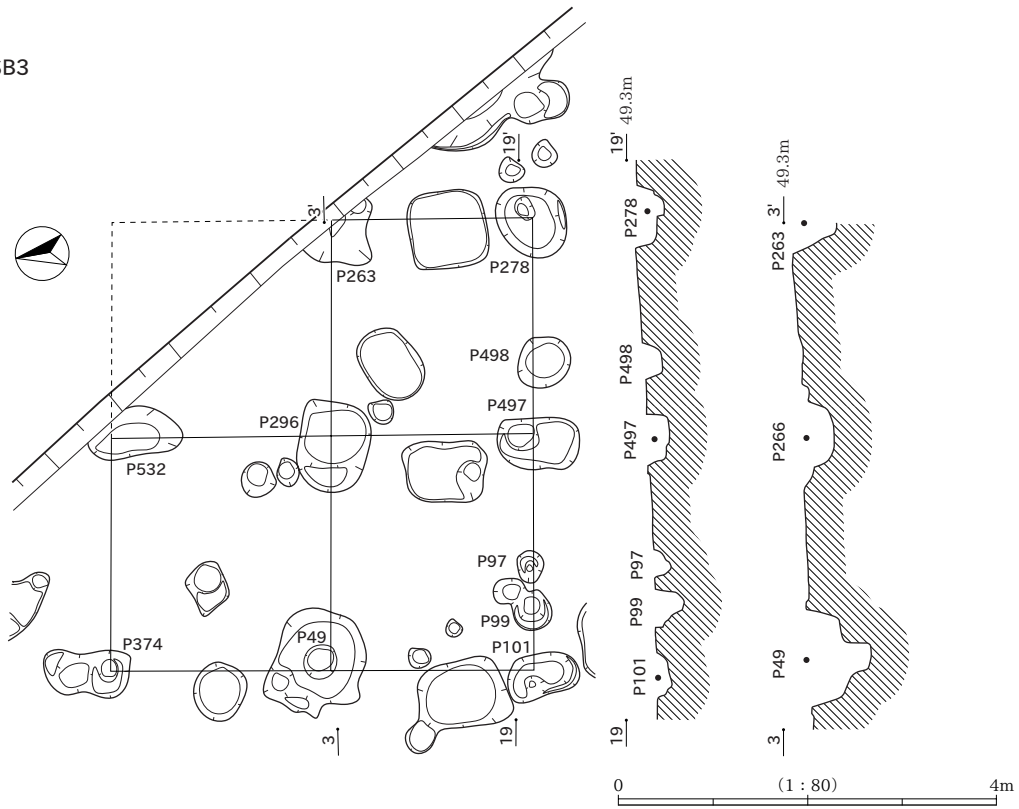


奥三和・新井線

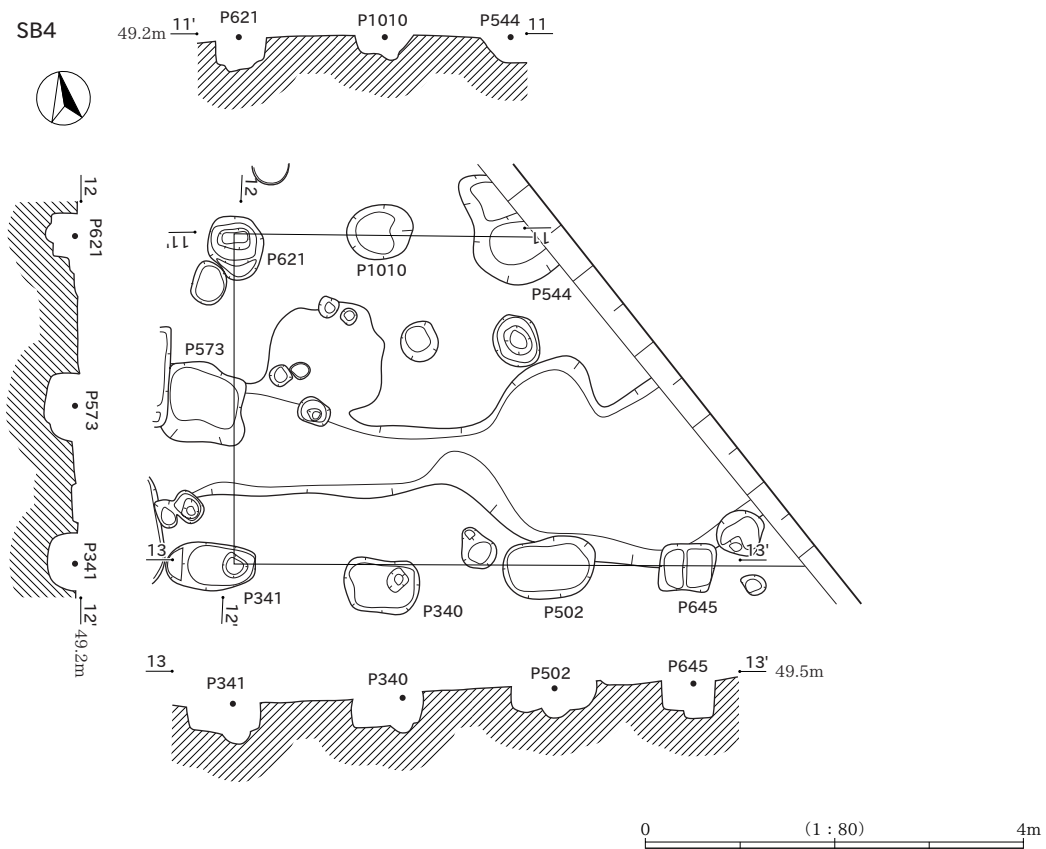




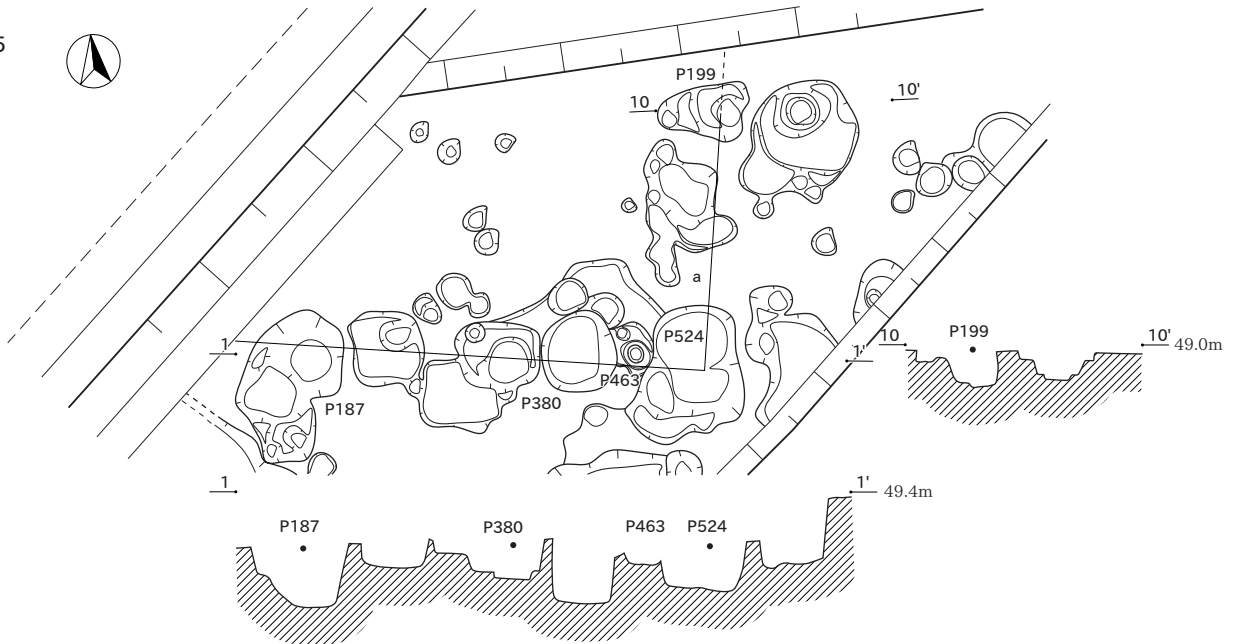
SB3



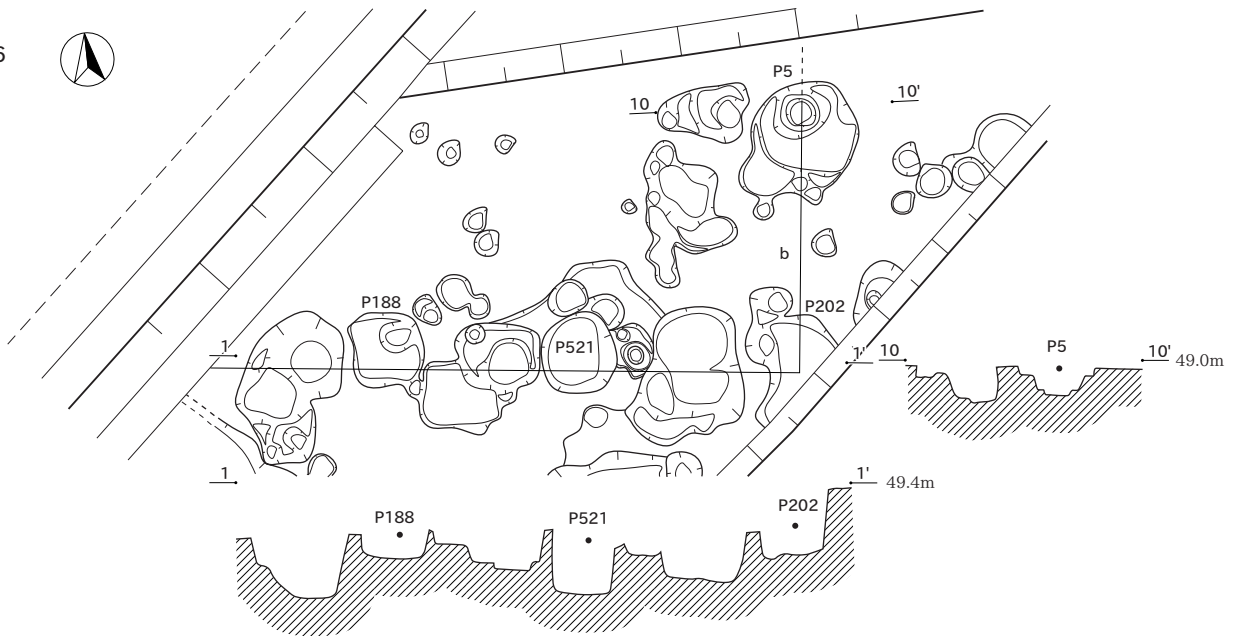
SB4



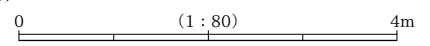
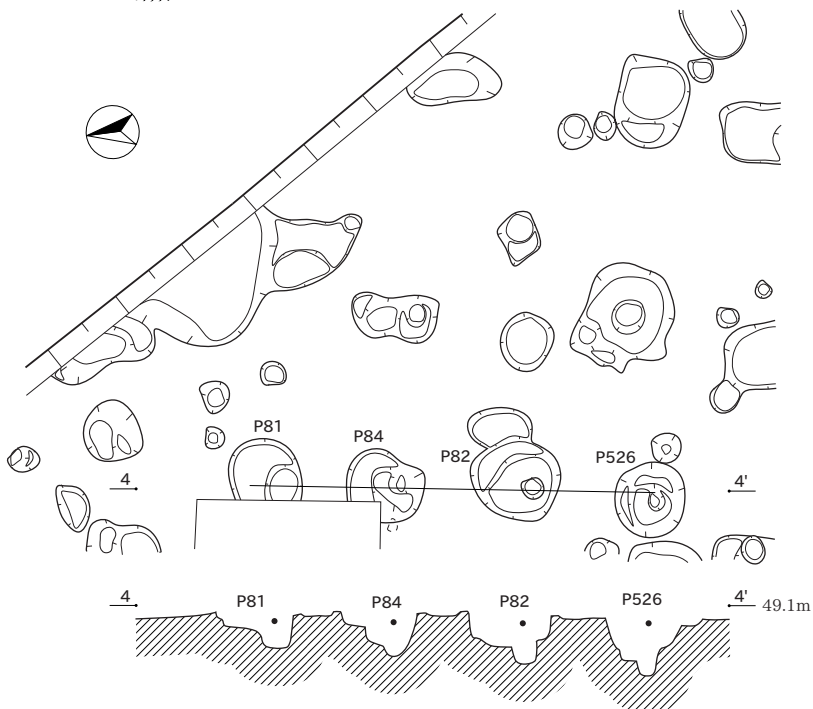
SB5



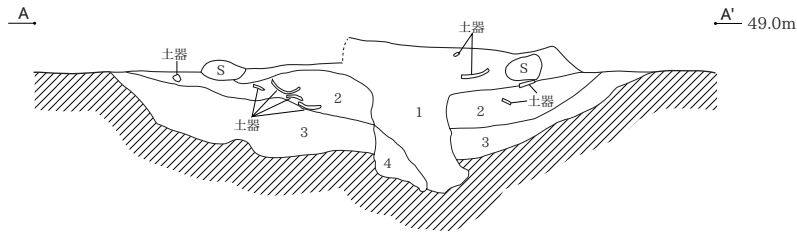
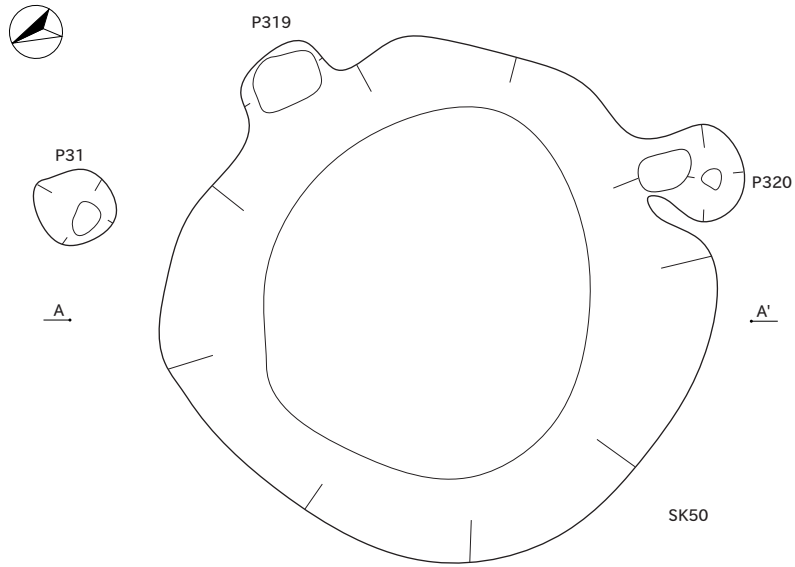
SB6



柱穴列



SK50

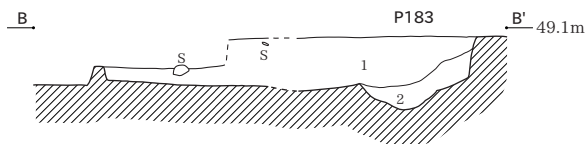
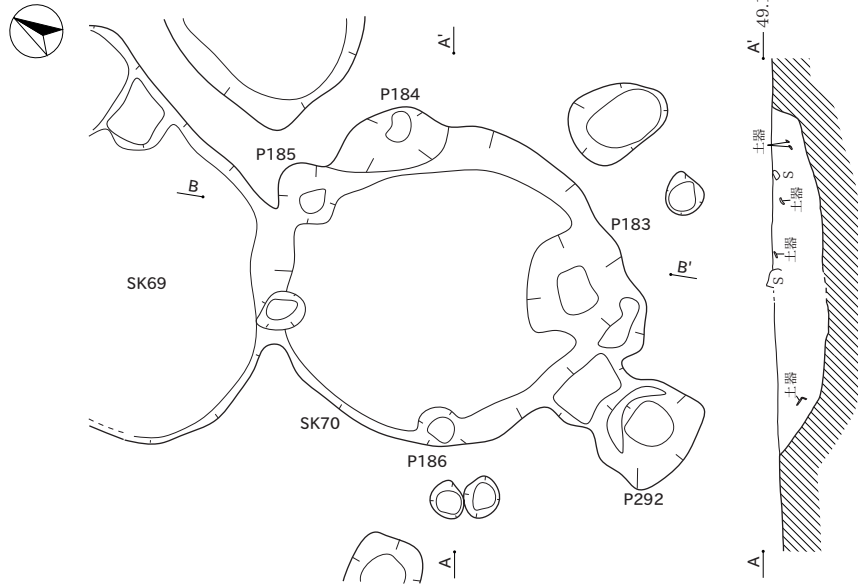


SK50

- 1 黒色粘質土 炭化物を多量に含む
- 2 灰黒色粘質土 炭化物は少ない 完形に近い土器片を多数包含する
- 3 黒色粘質土 直径10~20mmの炭化物をまばらに含む 土器片を多数包含する
- 4 黒色粘質土 青灰色土ブロックが多量に混入する

0 (1:20) 1m

SK70

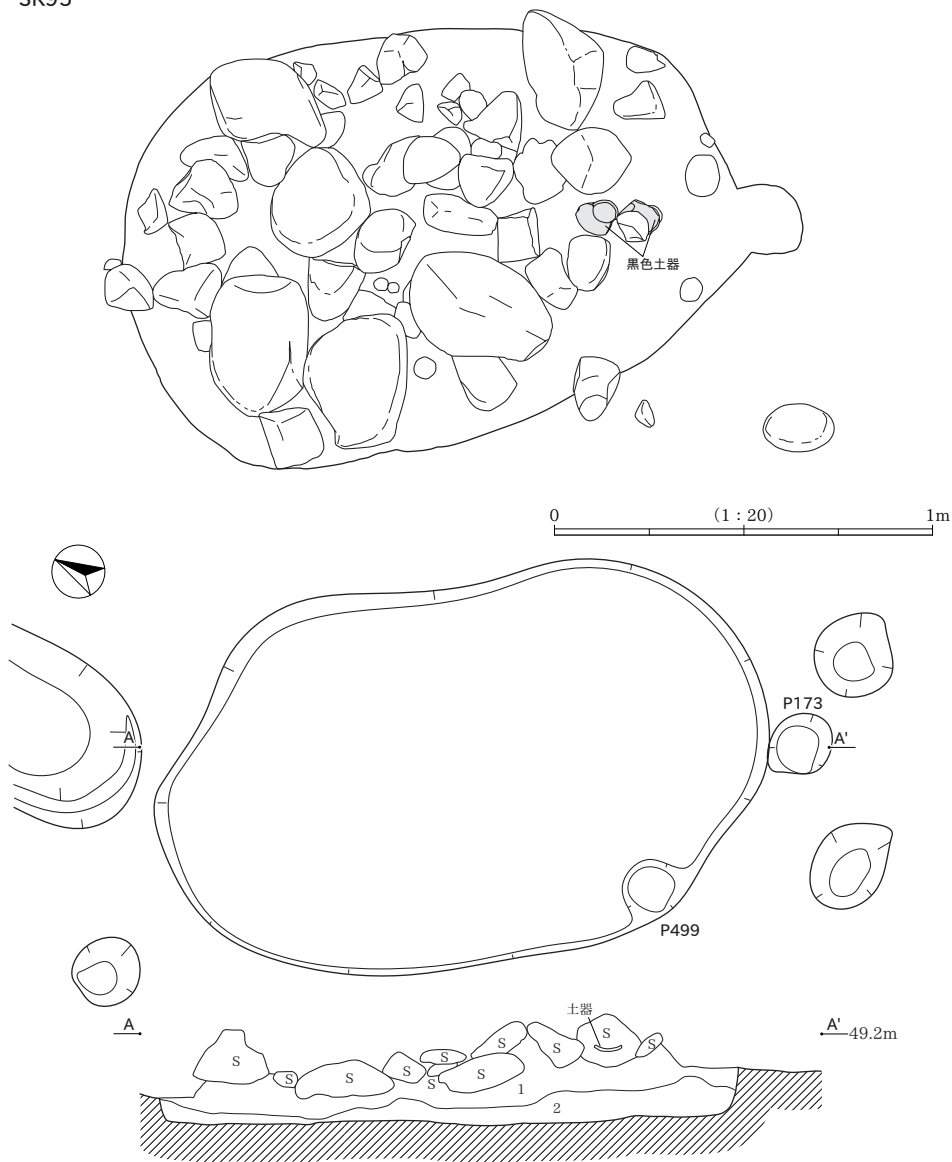


SK70

- 1 黒色粘質土 多量の炭化物と少量の青灰色ブロックを含む
- 2 灰褐色粘質土 青灰色ブロックを少量含む

0 (1:40) 2m

SK95

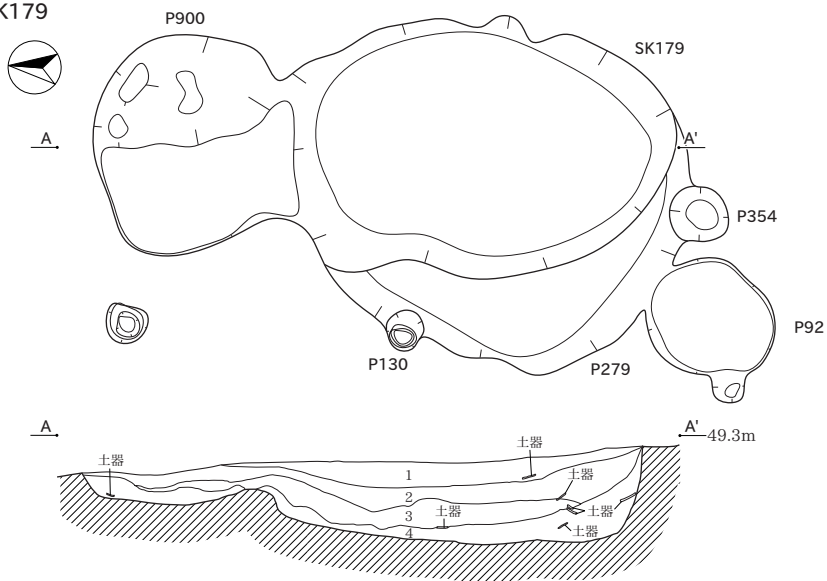


SK95

- 1 黒灰色粘質土 少量の炭化物粒子と青灰色土を含む
- 2 暗青灰色粘質土 IVb層を主体として、黒灰色土粒子をまばらに含む

0 (1 : 40) 2m

SK179

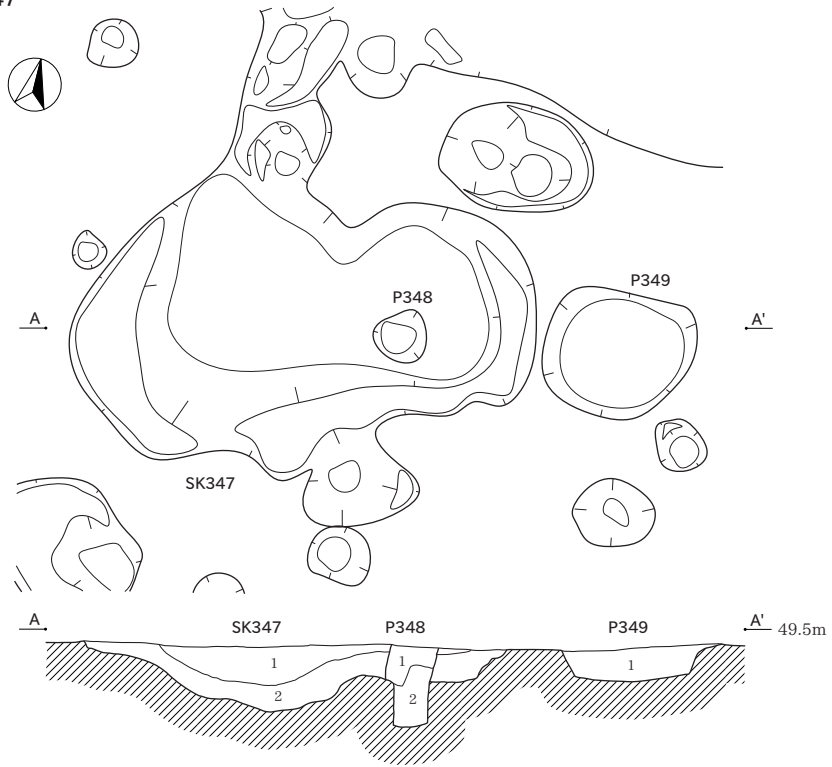


SK179

- 1 黒灰色粘質土 層下部に多量の炭化物を含む
- 2 暗灰色粘質土 暗灰色土ブロックを多量に含む
- 3 黒色粘質土 遺物を多く含む
- 4 暗灰色粘質土 炭化物を多く含む 暗灰色ブロックを混入する

0 (1 : 80) 4m

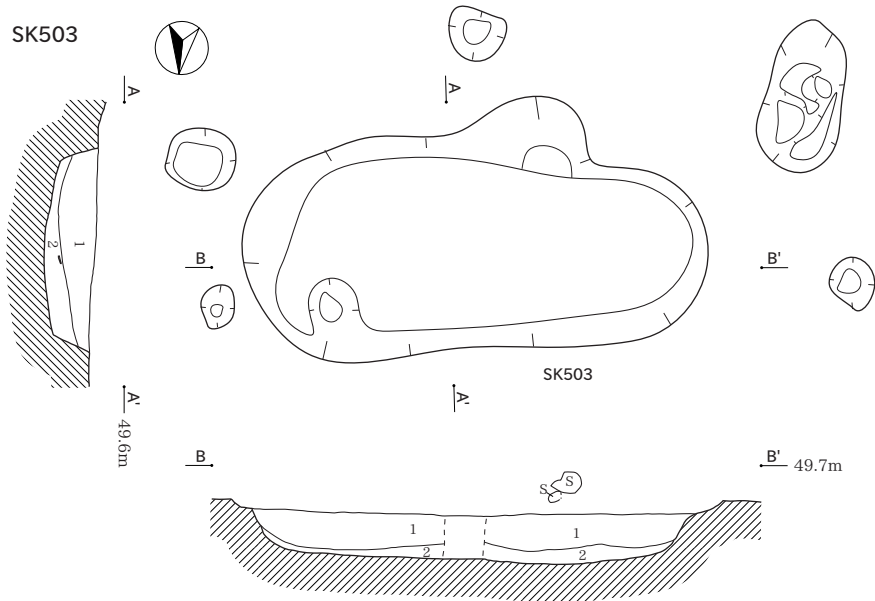
SK347



- SK347
 1 黒色粘質土
 2 灰褐色粘質土
 P348
 1 灰褐色粘質土 暗灰色土ブロックを含む
 2 黒色粘質土
 P349
 1 灰褐色粘質土

0 (1:40) 2m

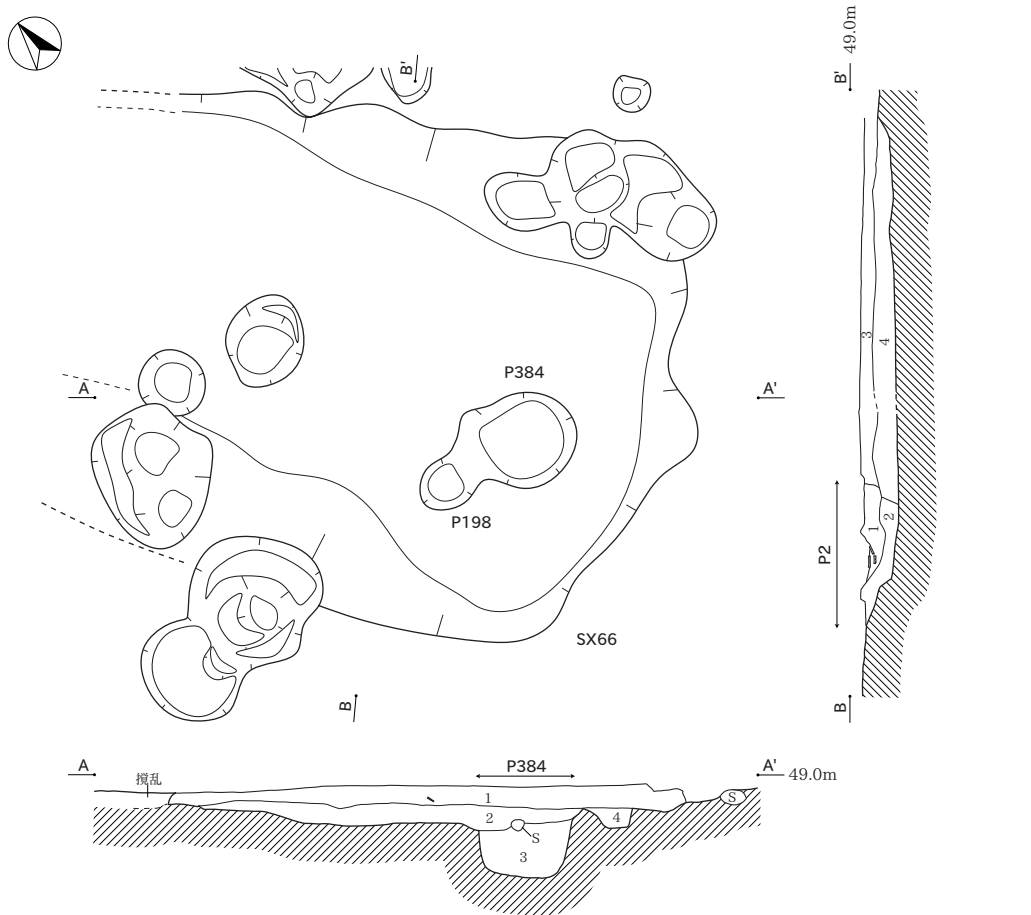
SK503



- SK503
 1 灰褐色粘質土 暗灰色ブロックを含む
 2 灰褐色粘質土 1層との境界に腐植物を含む

0 (1:40) 2m

SX66

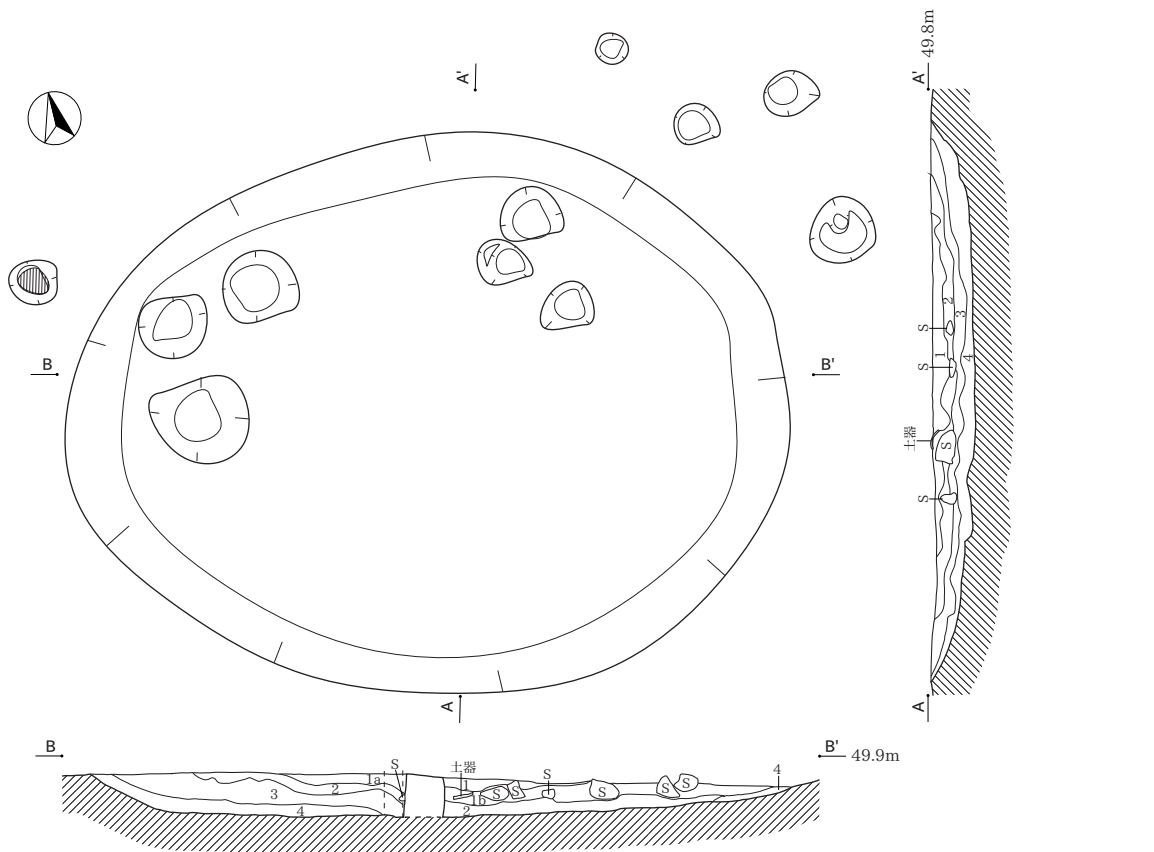


SX66

- 1 黒色粘質土 炭化物を多量に含む
- 2 灰黒色粘質土 1層よりも炭化物が少ない
- 3 黒色粘質土 炭化物を多量に含む P384覆土
- 4 灰褐色粘質土 暗灰色土ブロックを少量含む

0 (1 : 40) 2m

SX386



SX386

- 1 黒色粘質土 炭化物を多量に含む
- 2 暗青灰色粘質土 暗灰色土ブロックを粒子状に少量含む
- 3 灰黒色粘質土 暗灰色土ブロック・炭化物粒子を含む
- 4 青灰色粘質土 IVb層近似

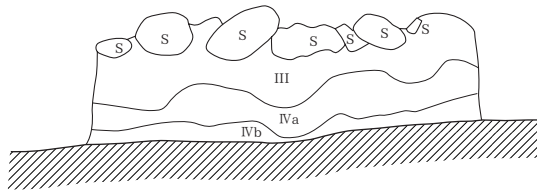
0 (1 : 40) 2m

SX387



A

A'



A' 49.9m

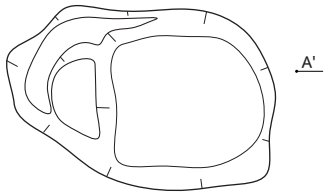
SX387
 III 黒色粘質土
 IVa 褐灰色粘質土
 IVb 青灰色粘質土

0 (1:20) 1m

SK68



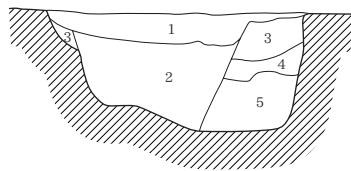
A



A'

A

A' 49.0m

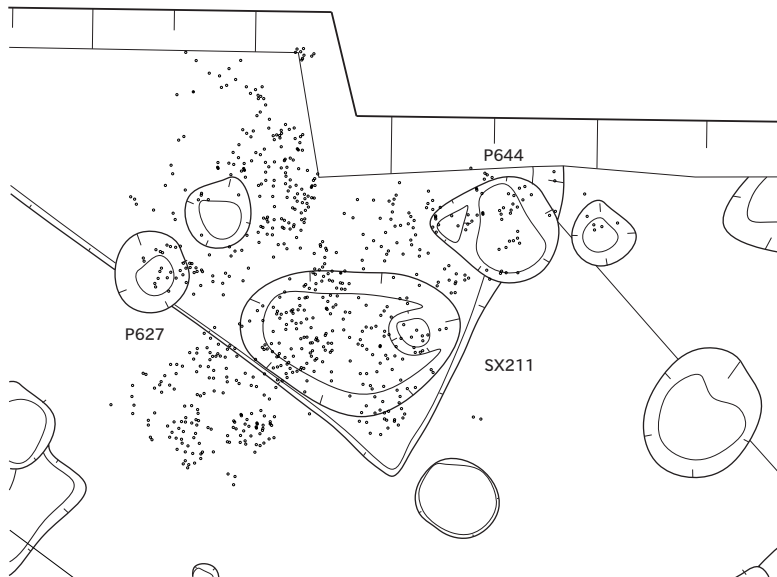


SK68

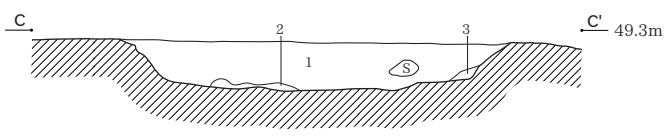
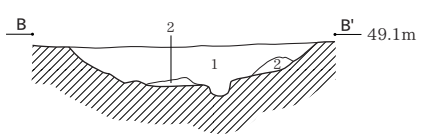
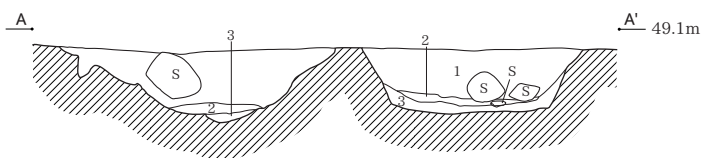
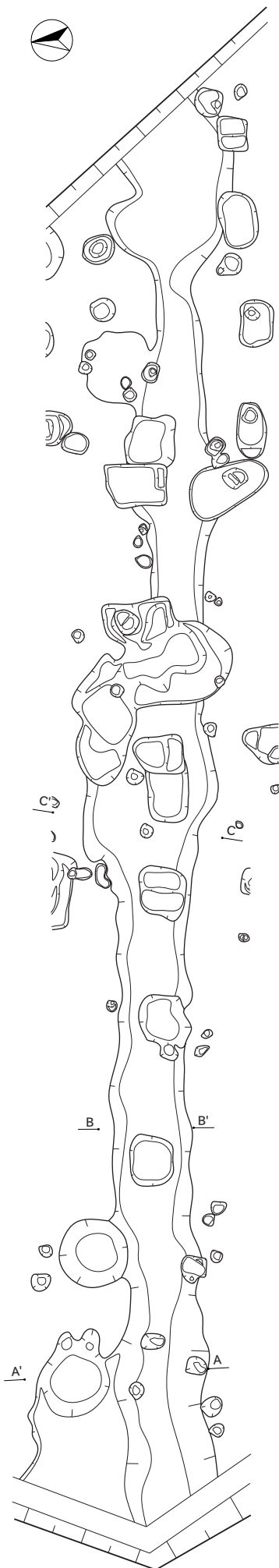
1 黒褐色粘質土 青灰色土ブロック・炭化した植物根を多く含む
 2 黒色粘質土 青灰色土ブロックを多く含む
 3 灰褐色粘質土
 4 暗黄色粘質土 青灰色土ブロックをやや多く含む
 5 灰黒色粘質土 青灰色土ブロックを少量含む

0 (1:40) 2m

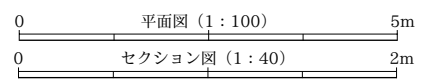
SX211



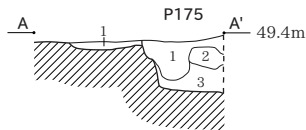
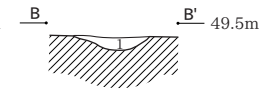
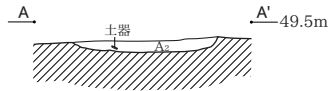
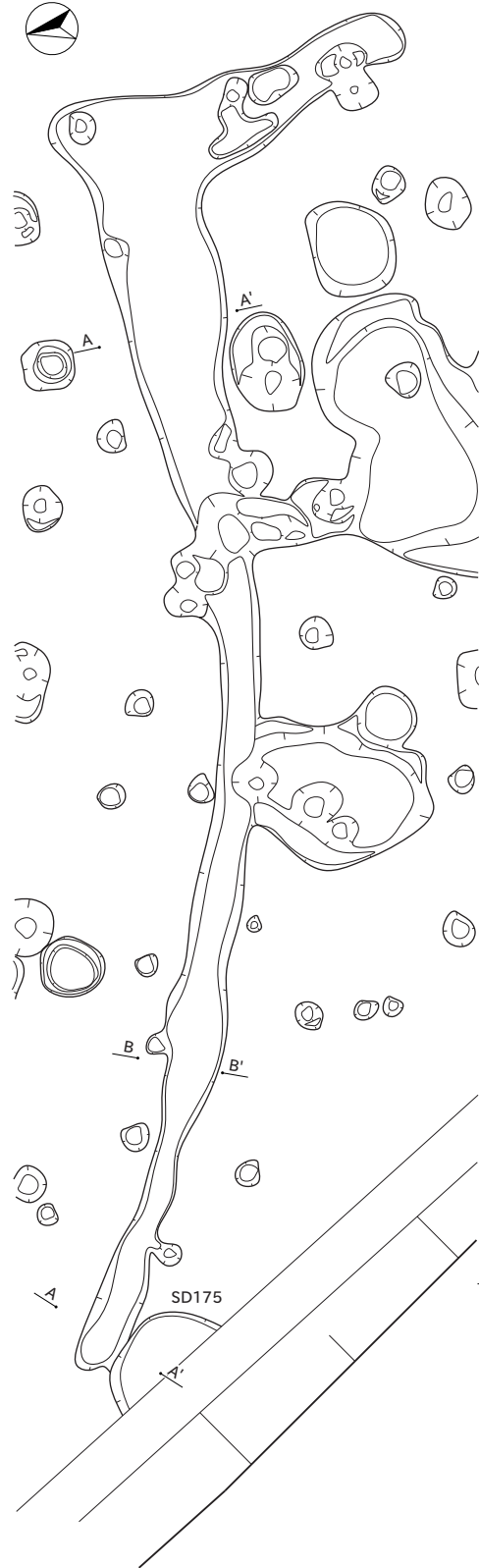
0 (1:40) 2m



- SD178
- 1 黒色粘質土 青灰色土ブロックを少量含む
 - 2 黒灰色砂質土 砂を多く含む
 - 3 黒褐色粘質土 黒色土・青灰色土ブロックを含む

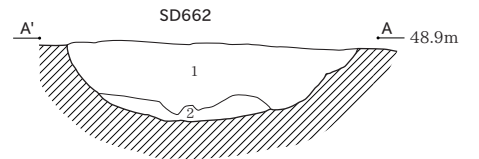
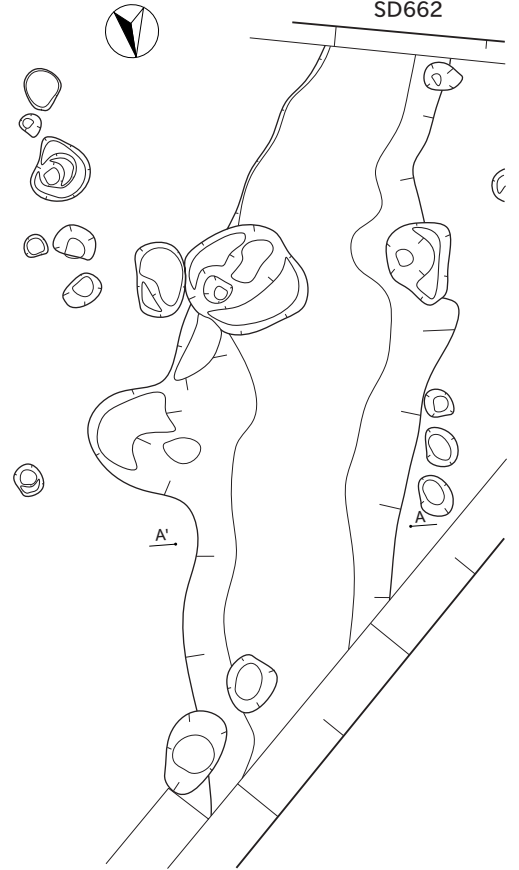


SD176

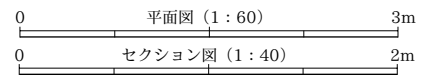


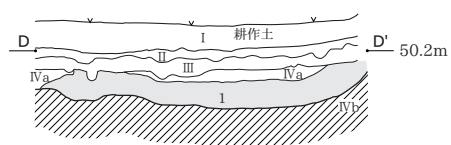
- SD176
 1 黒色粘質土 青灰色土ブロックを含む
 P175
 1 黒色粘質土 炭化物粒子を含む
 2 暗青灰色粘質土
 3 褐色粘質土

SD662



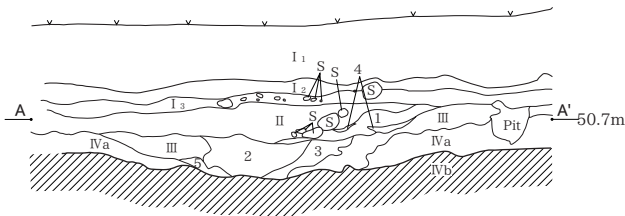
- SD662
 1 黒褐色粘質土 未分解の有機物を含み、近世陶磁器を包含する
 2 暗灰色黄砂礫層





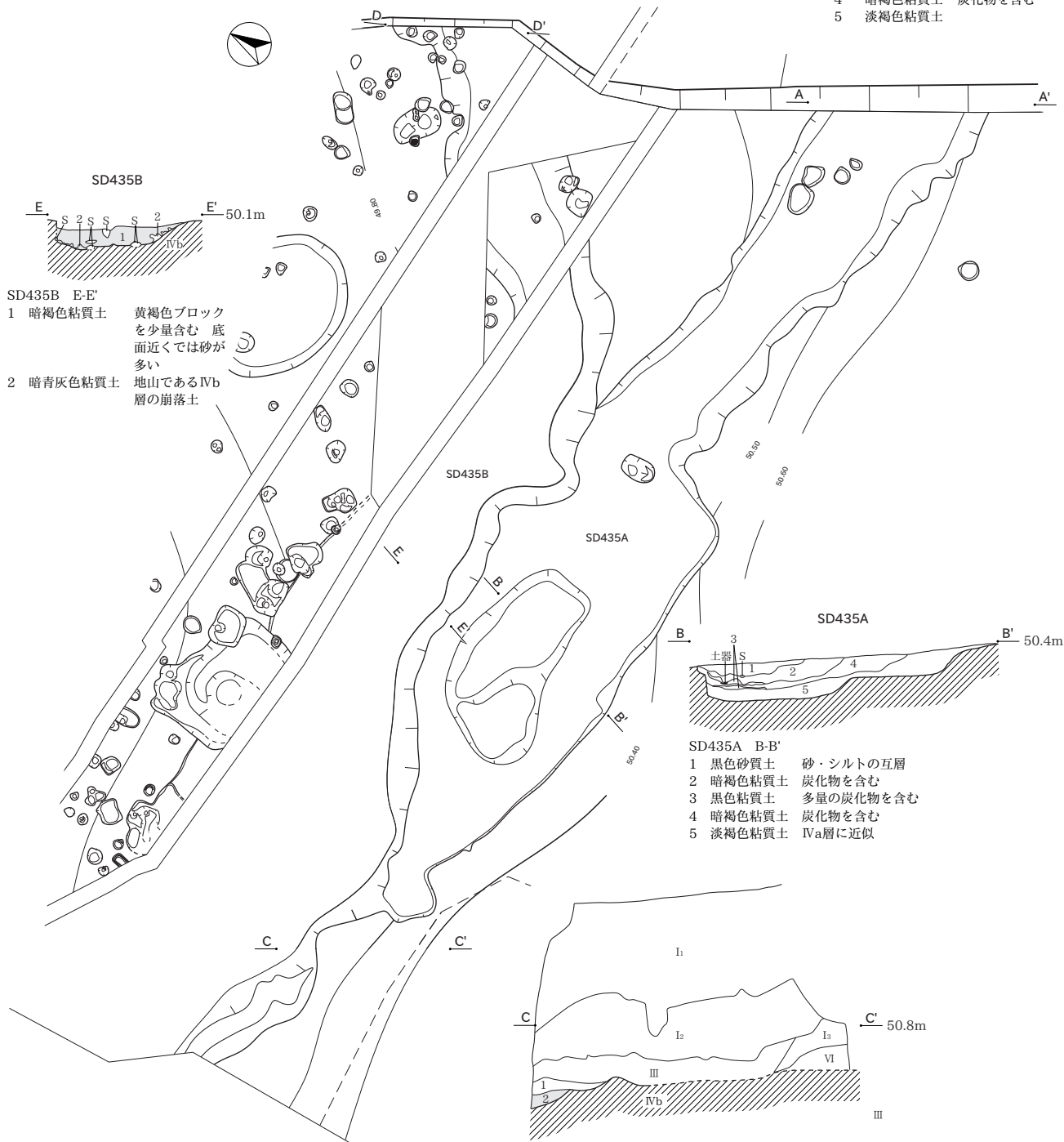
SD435B D-D'

1 黒灰色粘質土 青灰色粘質土ブロックを底面近くに含む炭化物粒子を混入

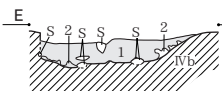


SD435A A-A'

1 1 灰色土	人頭以上の礫を含む 盛土層	IVa 褐色粘質土
1 2 暗灰色土	盛土層	IVb 青灰色粘質土
1 3 黒灰色土	拳大の礫を多く含む 盛土層	1 黒色砂質土 砂・シルトの互層
II 暗灰色粘質土	旧表土	2 暗褐色粘質土 炭化物を含む
III 黒色粘質土		3 黒色粘質土 多量の炭化物を含む
		4 暗褐色粘質土 炭化物を含む
		5 淡褐色粘質土



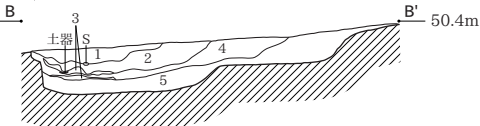
SD435B



SD435B E-E'

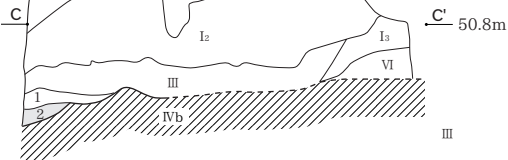
1 暗褐色粘質土 黄褐色ブロックを少量含む 底面近くでは砂が多い
2 暗青灰色粘質土 地山であるIVb層の崩落土

SD435A



SD435A B-B'

1 黒色砂質土 砂・シルトの互層
2 暗褐色粘質土 炭化物を含む
3 黒色粘質土 多量の炭化物を含む
4 暗褐色粘質土 炭化物を含む
5 淡褐色粘質土 IVa層に近似



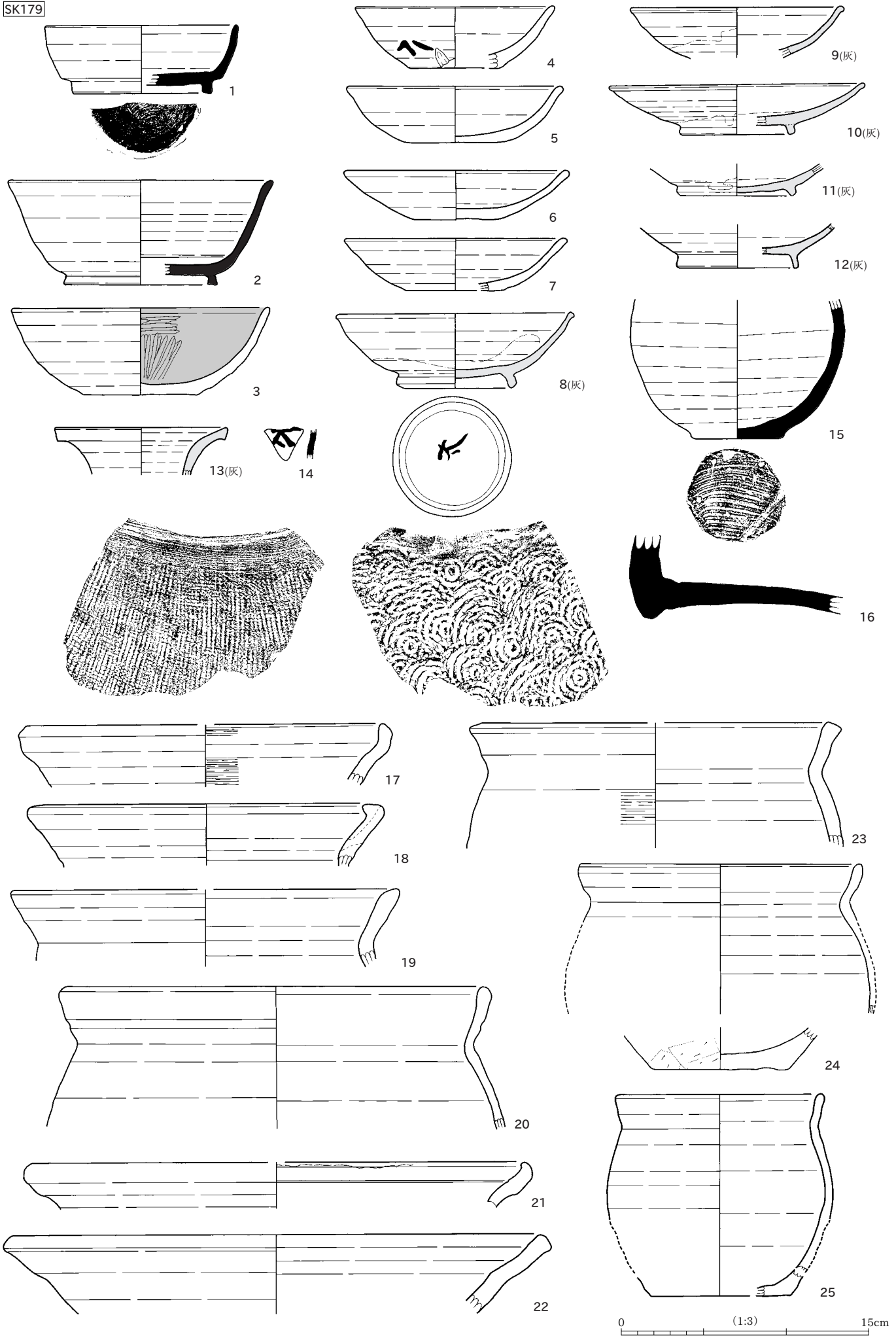
SD435A C-C'

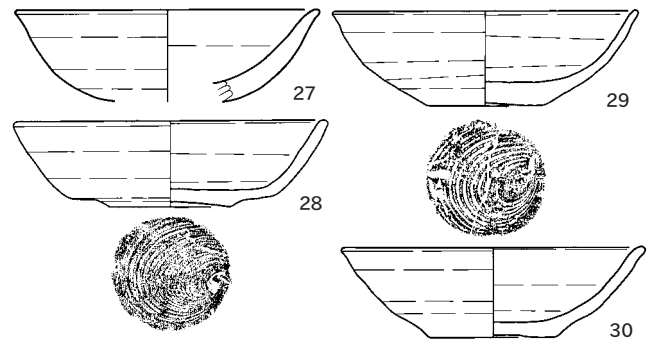
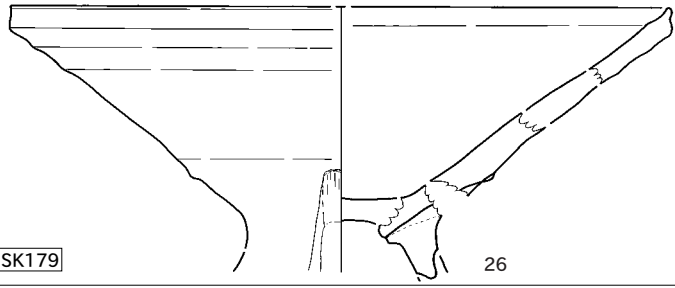
I 1 褐色土 しまりなし 人頭以上の礫を多く含む III・IV層を削平する
I 2 暗褐色土 しまりなし 拳大の礫を大量に含む
I 3 灰白色粘質土
III 黒色粘質土 拳大～人頭大の礫を含む
IVb 青灰色粘質土
VI 礫層
1 暗褐色砂質土 砂を多く含む 拳大の礫を混入 SD435Aの覆土
2 黒褐色粘質土 SD435Bの覆土

平面図 0 (1:150) 6m

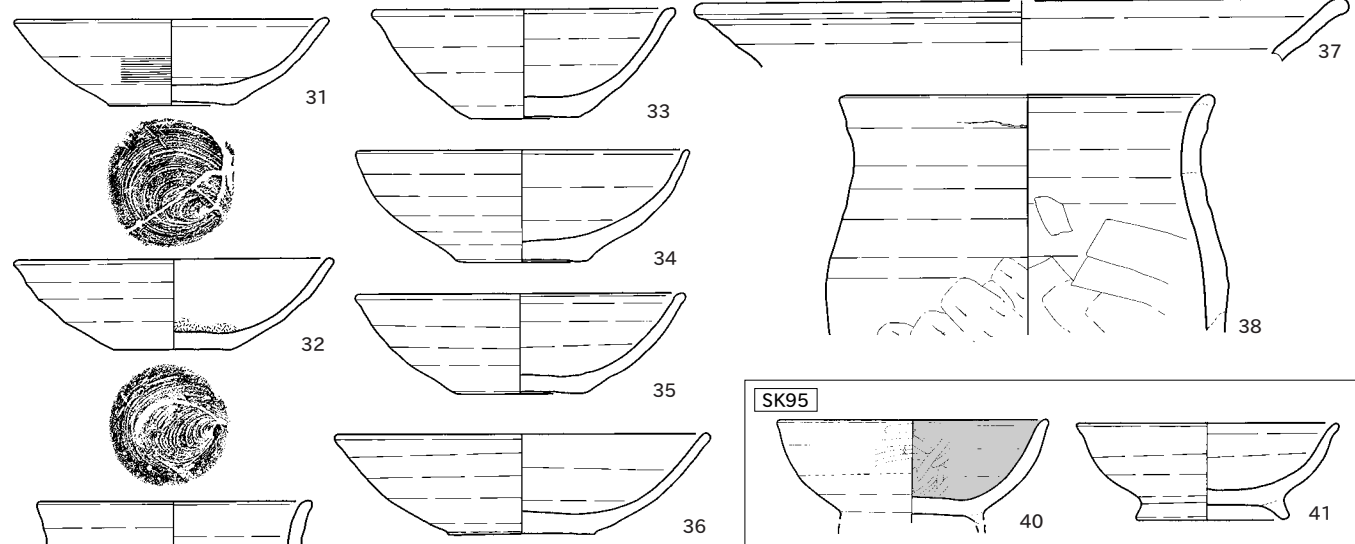
セクション図 0 (1:80) 4m

SK179

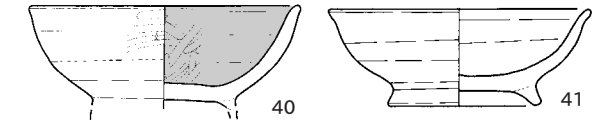




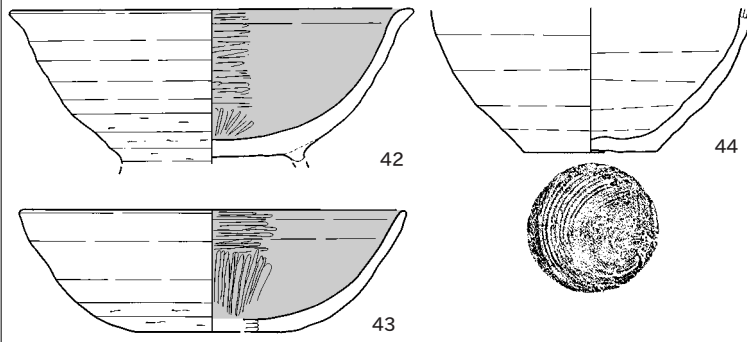
SK50



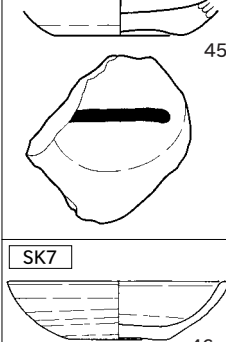
SK95



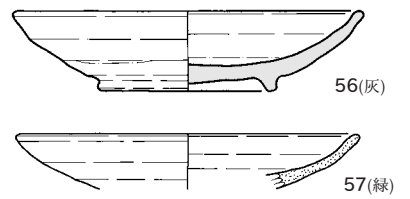
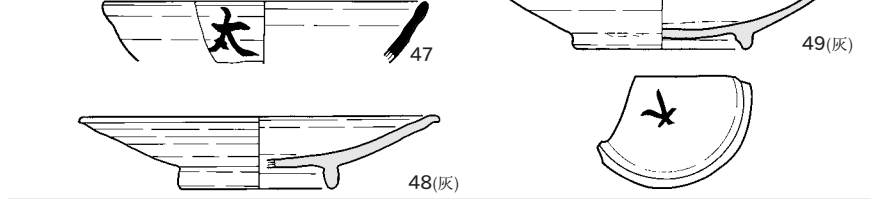
SK503



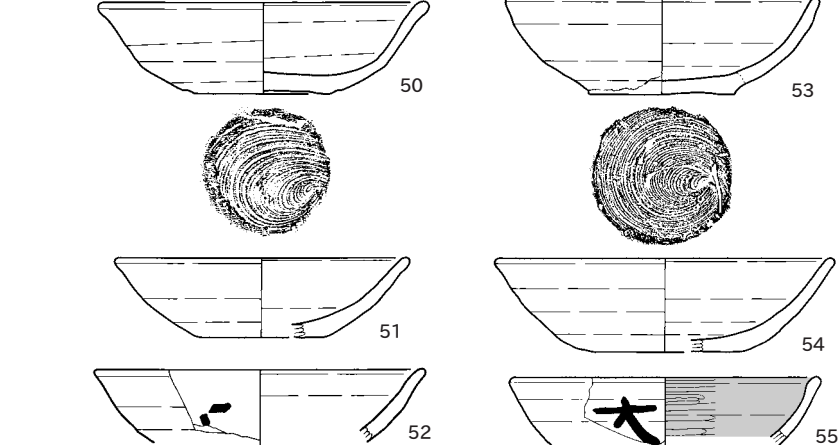
SK382



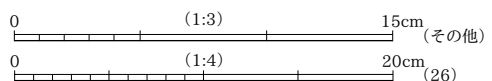
SK347



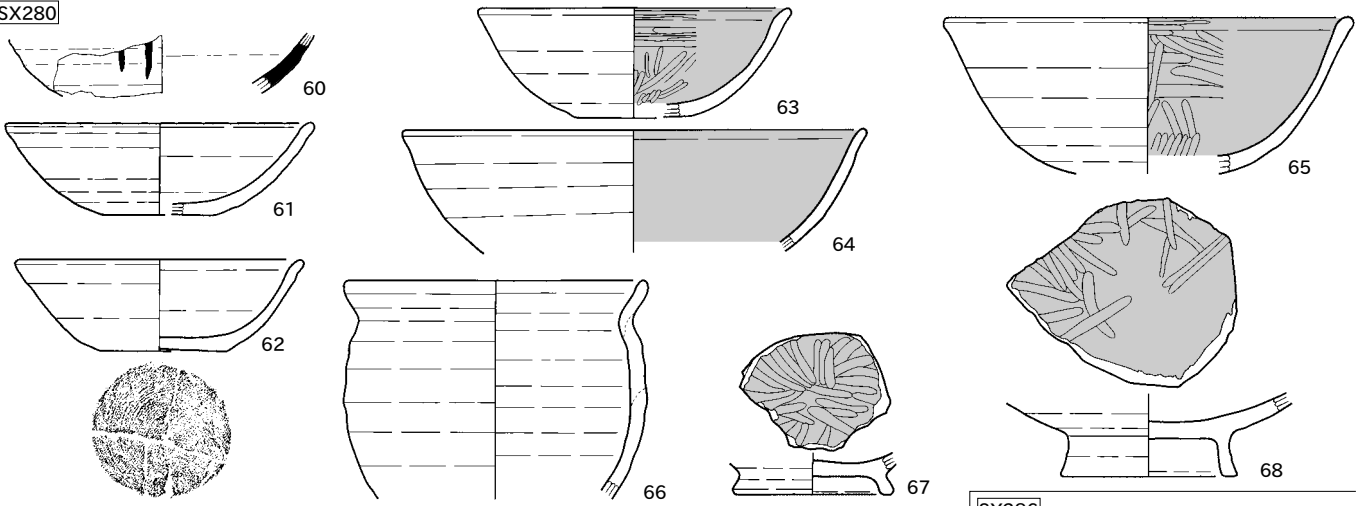
SX211



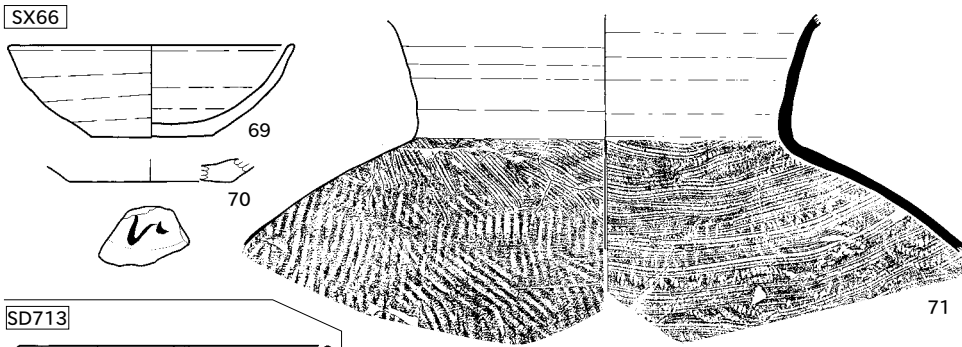
タール



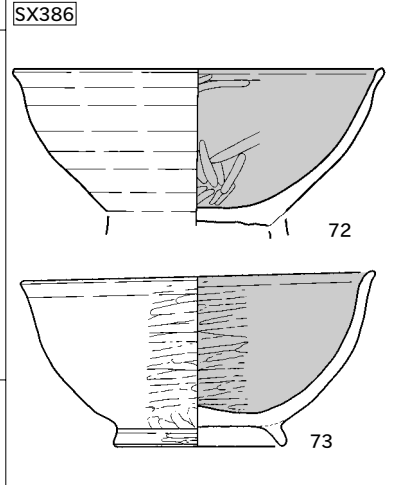
SX280



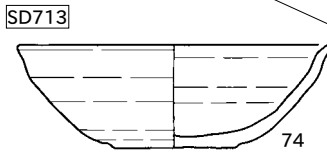
SX66



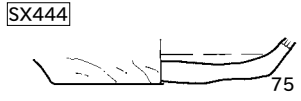
SX386



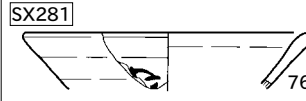
SD713



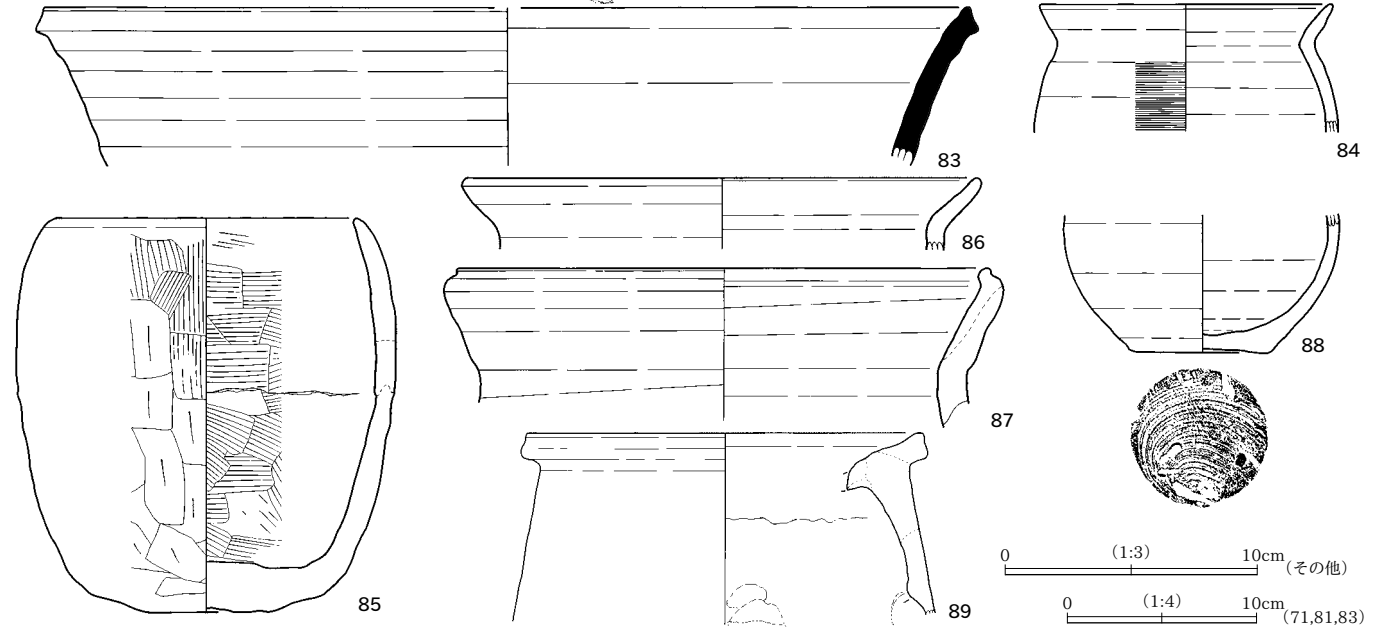
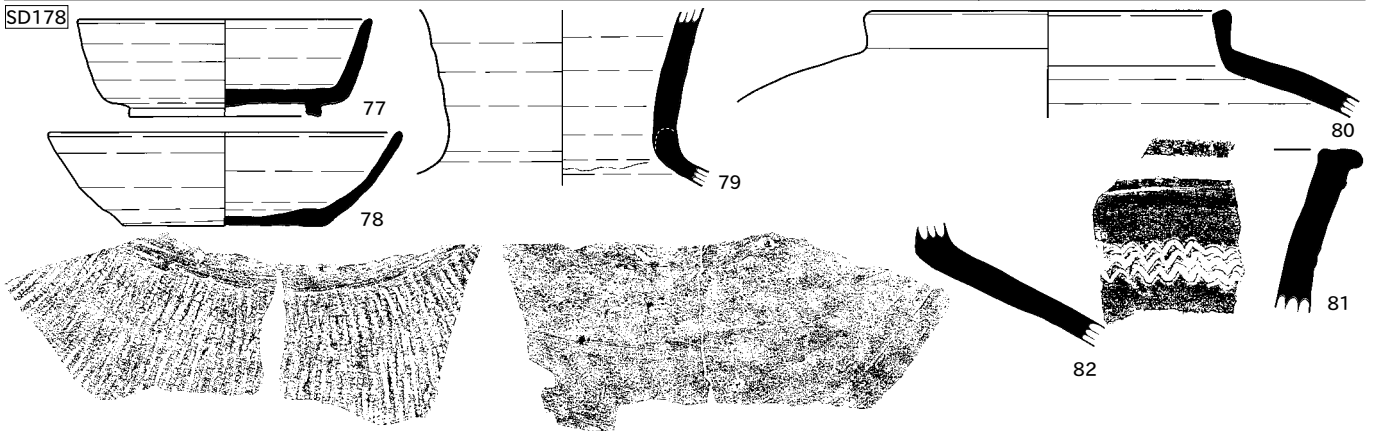
SX444



SX281

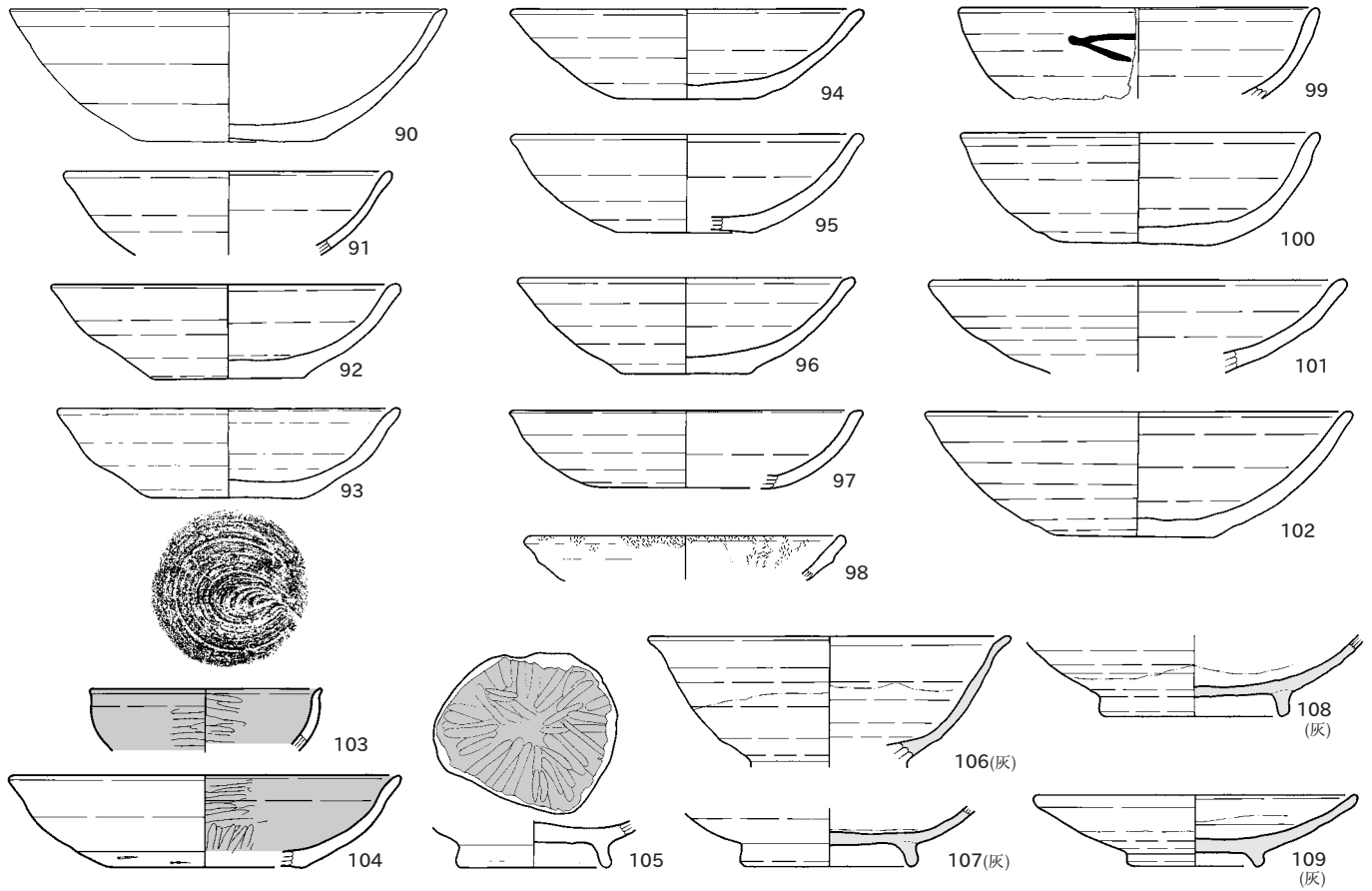


SD178

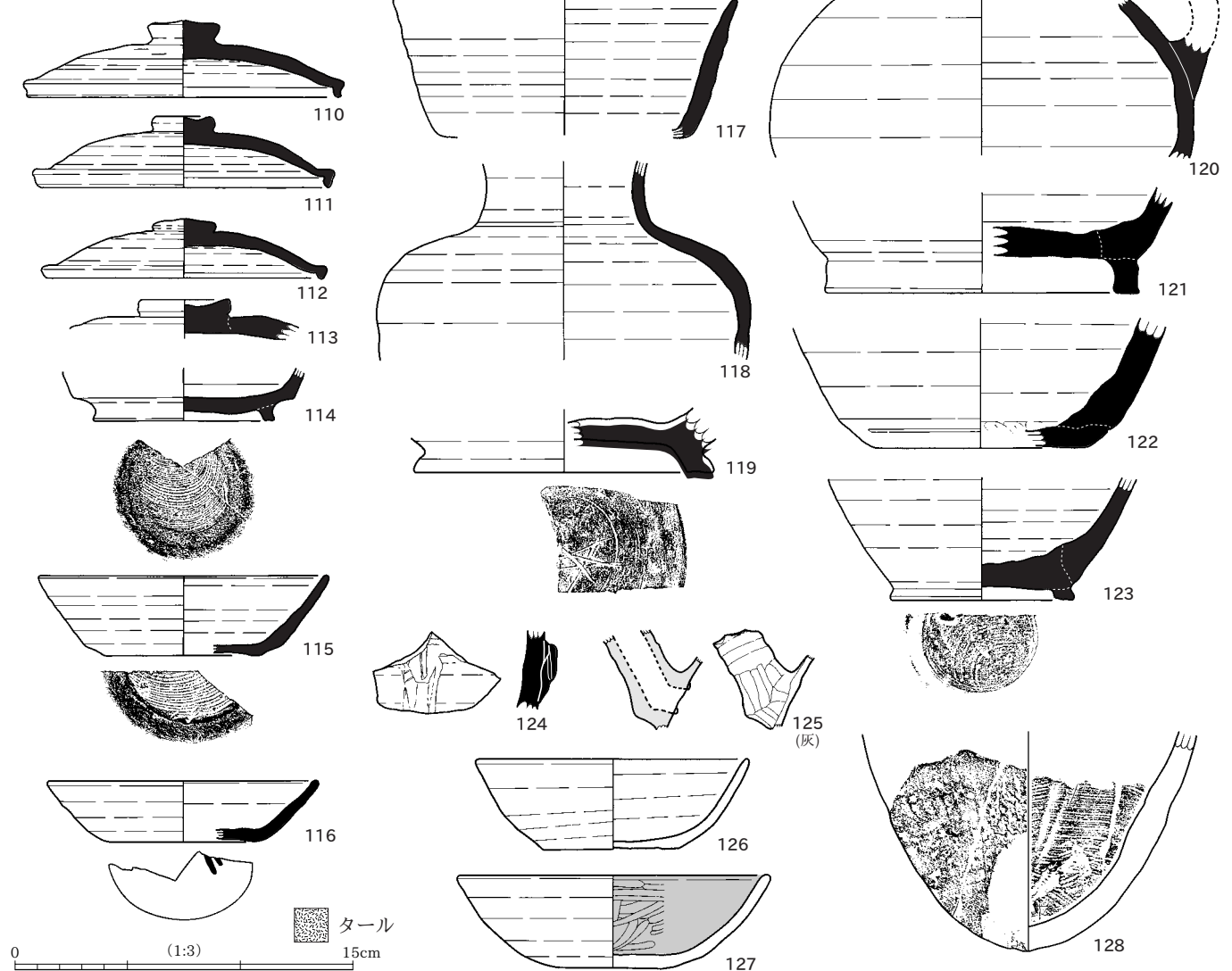


0 (1:3) 10cm (その他)
 0 (1:4) 10cm (71,81,83)

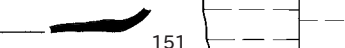
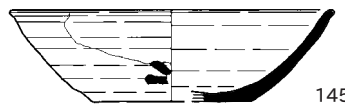
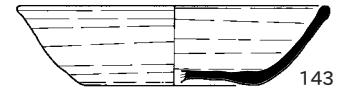
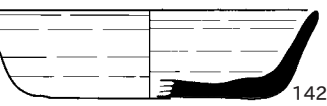
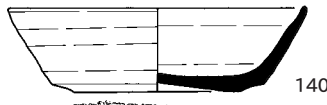
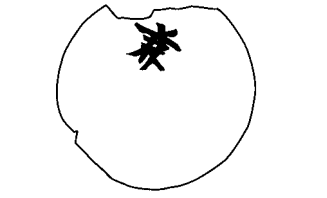
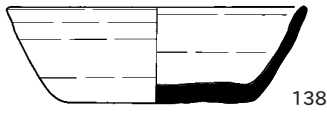
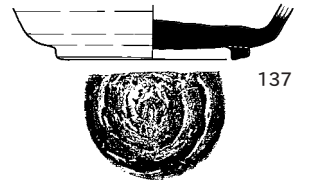
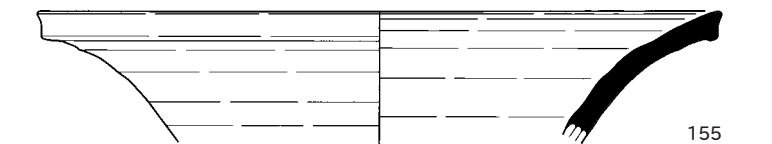
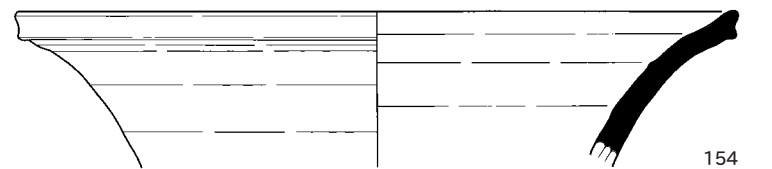
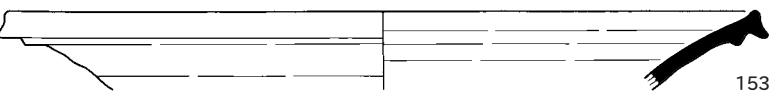
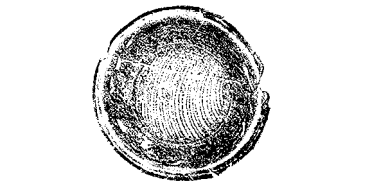
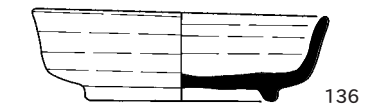
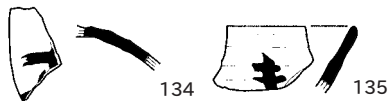
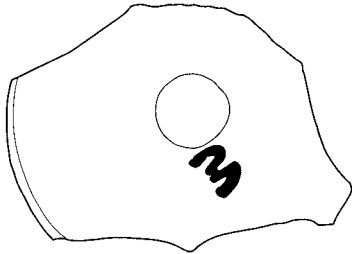
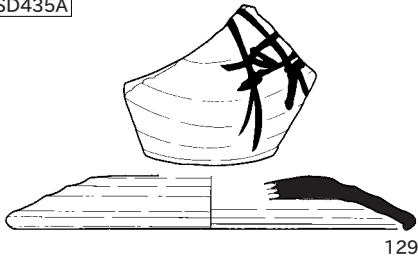
SD178



SD435B

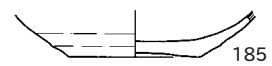
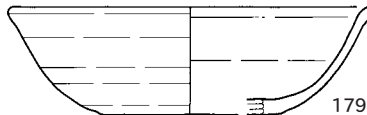
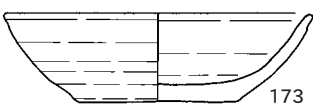
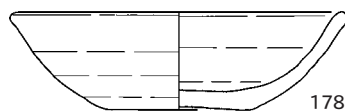
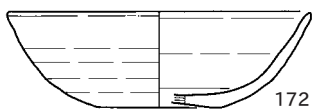
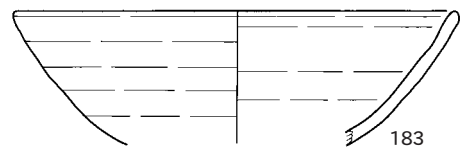
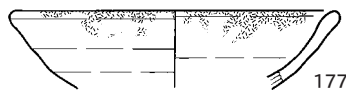
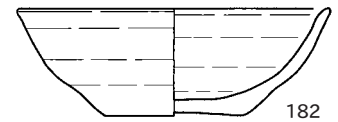
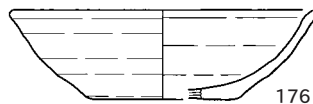
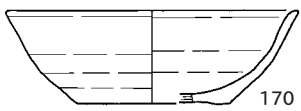
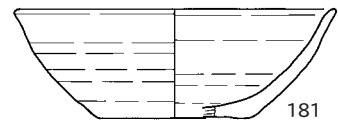
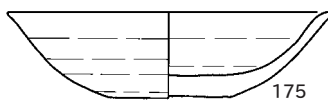
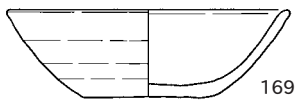
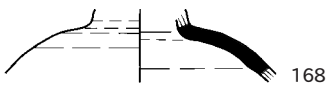
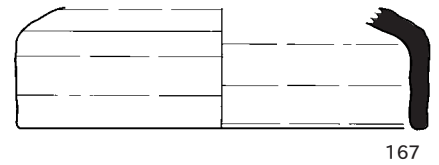
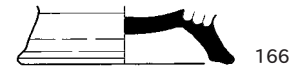
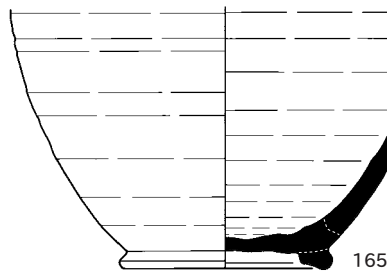
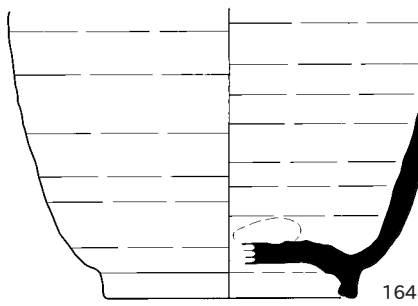
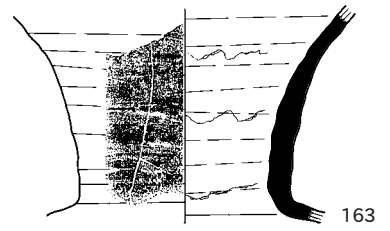
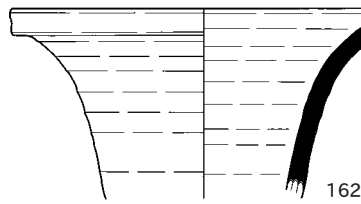
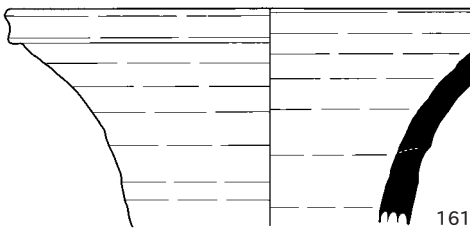
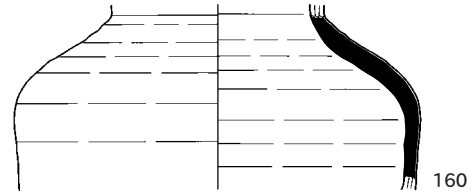
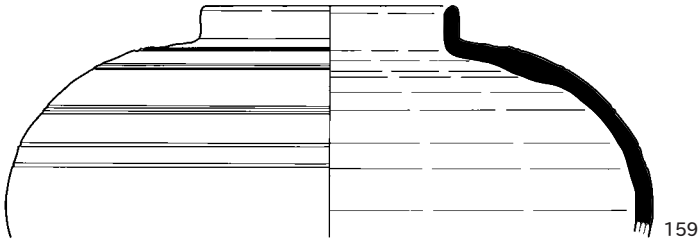
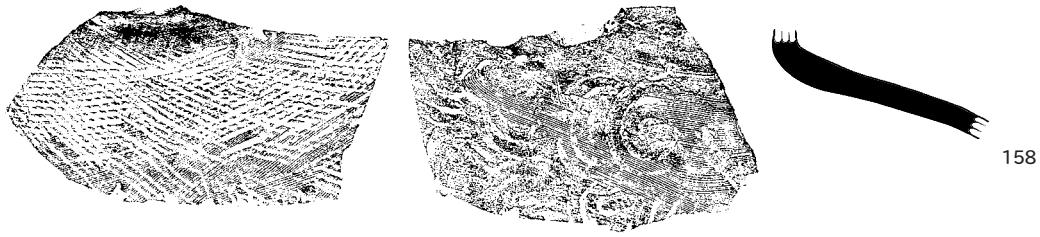


SD435A



0 (1:3) 15cm (その他)
 0 (1:4) 20cm (153)

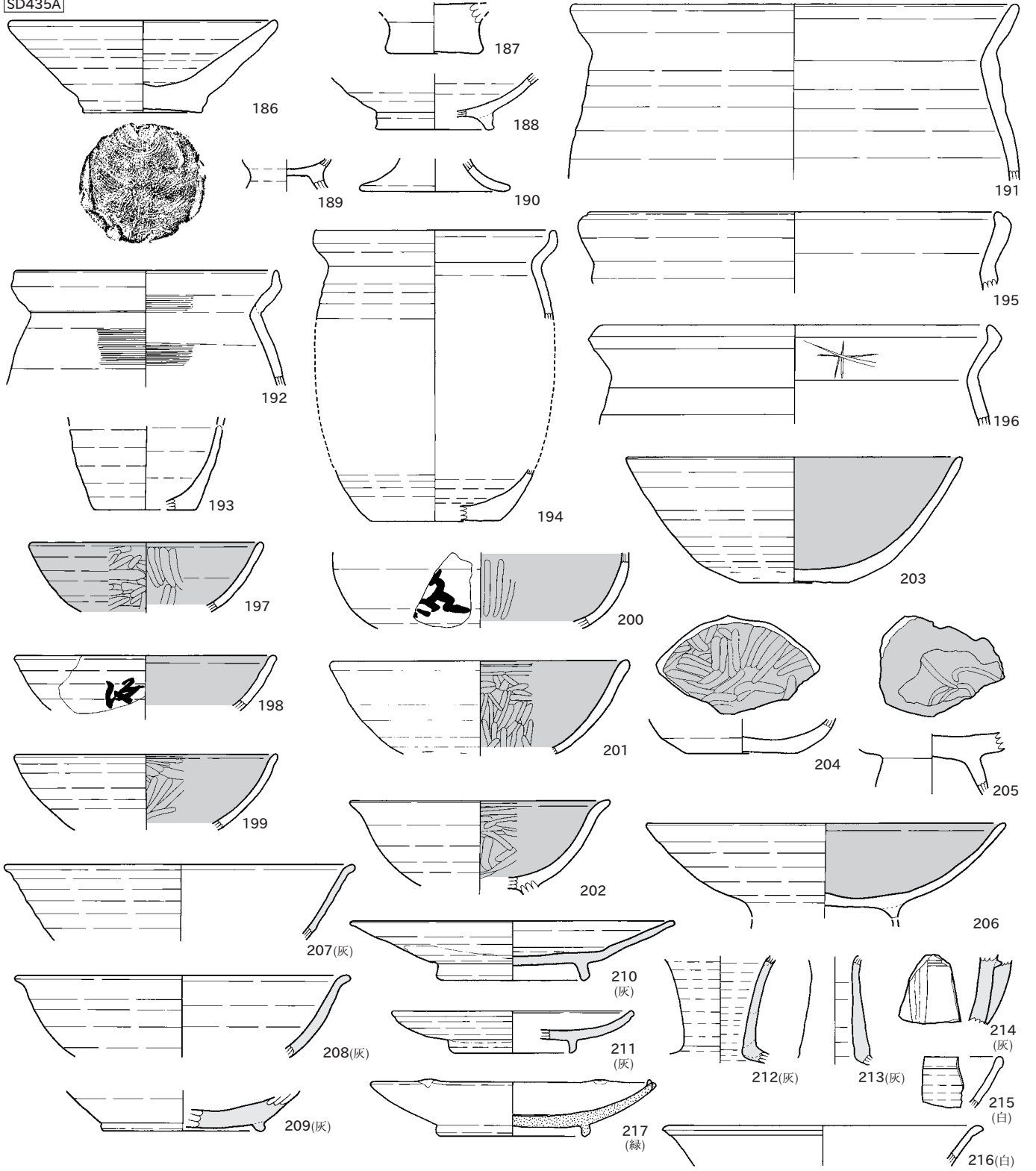
SD435A



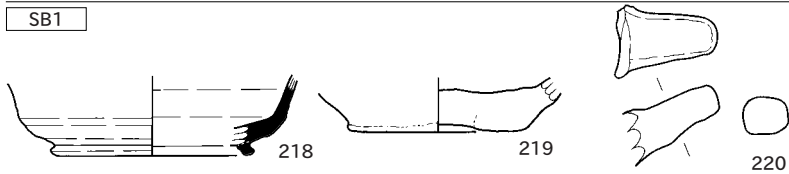
タール

0 (1:3) 15cm

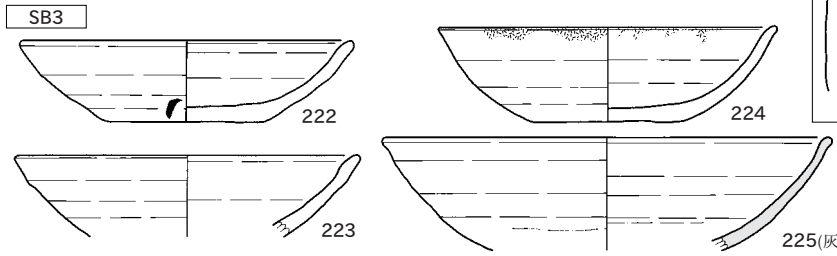
SD435A



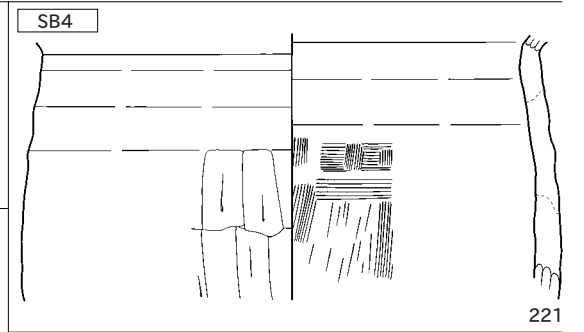
SB1



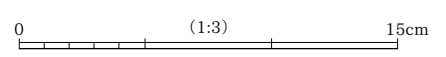
SB3



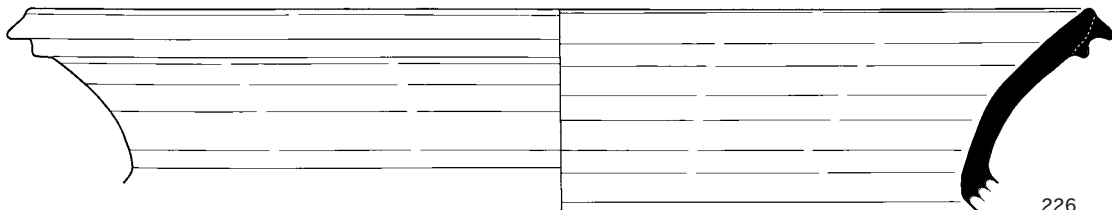
SB4



タール



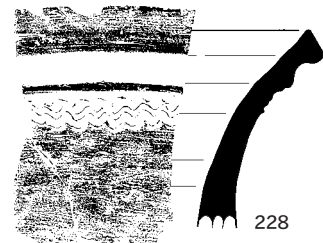
SB6



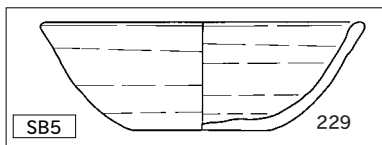
226



227

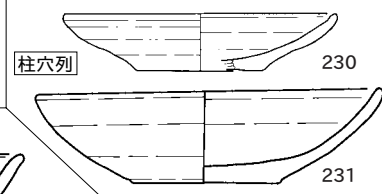


228



SB5

229



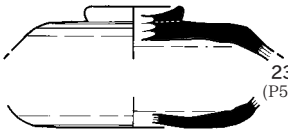
柱穴列

230

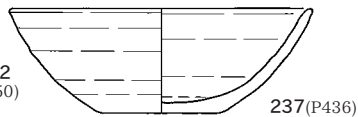


231

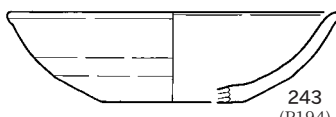
その他のビット



232
(P550)



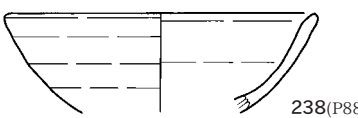
237(P436)



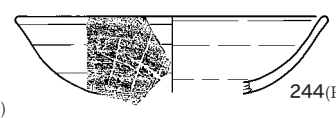
243
(P194)



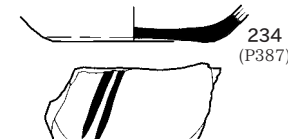
233
(P196)



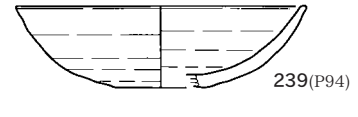
238(P88)



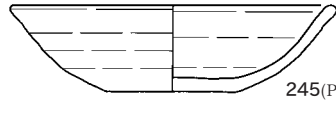
244(P194)



234
(P387)



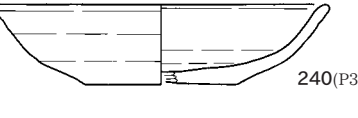
239(P94)



245(P517)



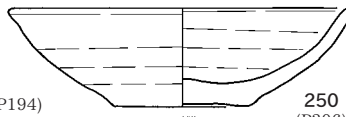
235(P306)



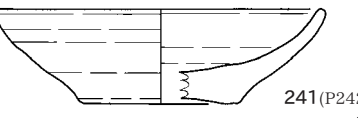
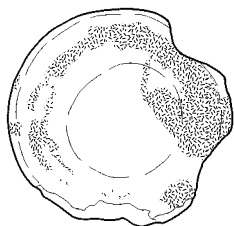
240(P306)



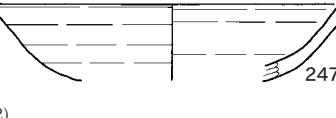
246(P194)



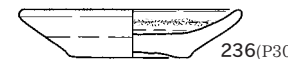
250
(P306)



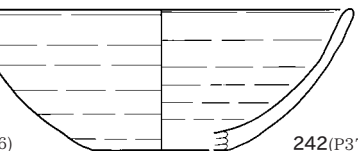
241(P242)



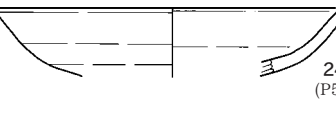
247(P517)



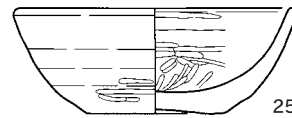
236(P306)



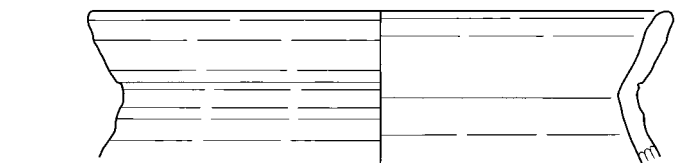
242(P379)



248
(P517)



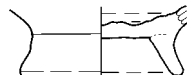
251
(P359)



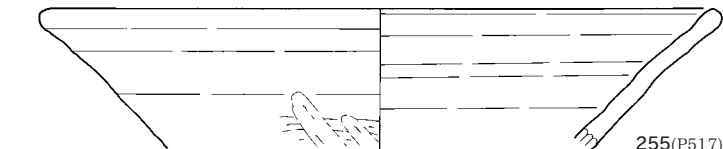
254(P306)



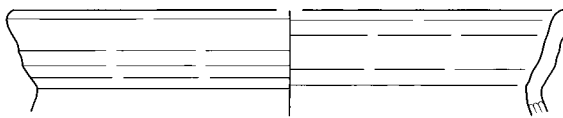
252
(P293)



253
(P138)



255(P517)



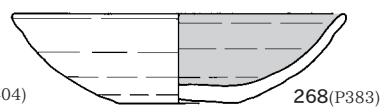
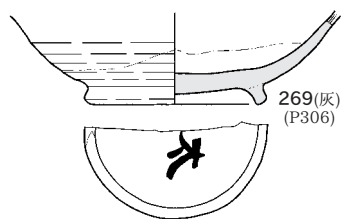
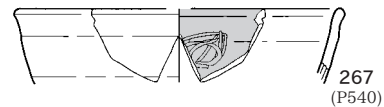
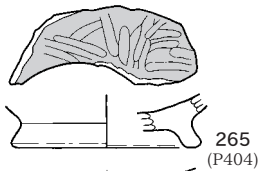
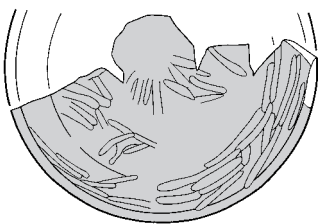
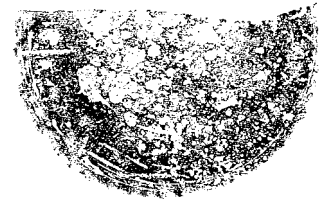
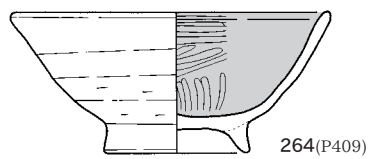
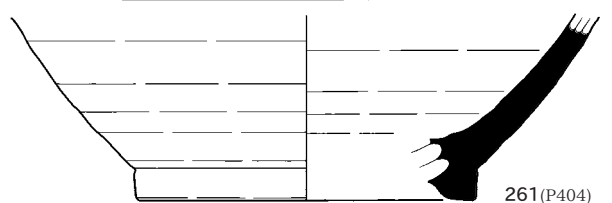
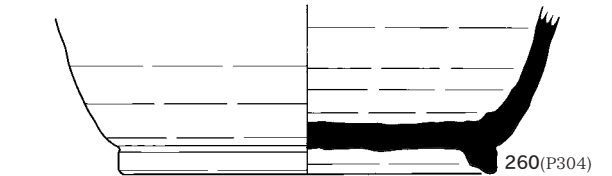
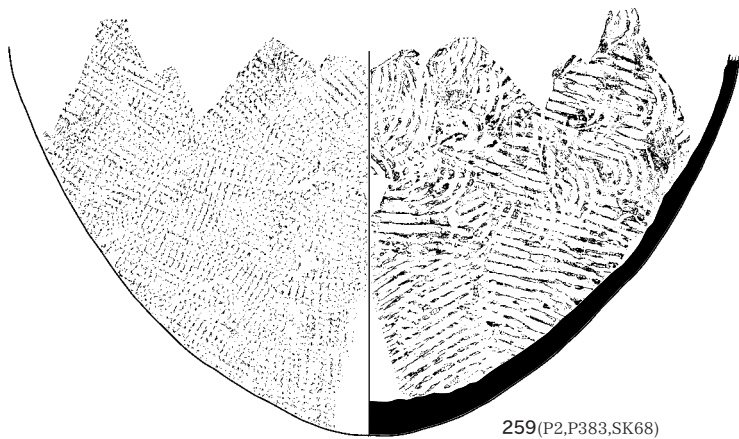
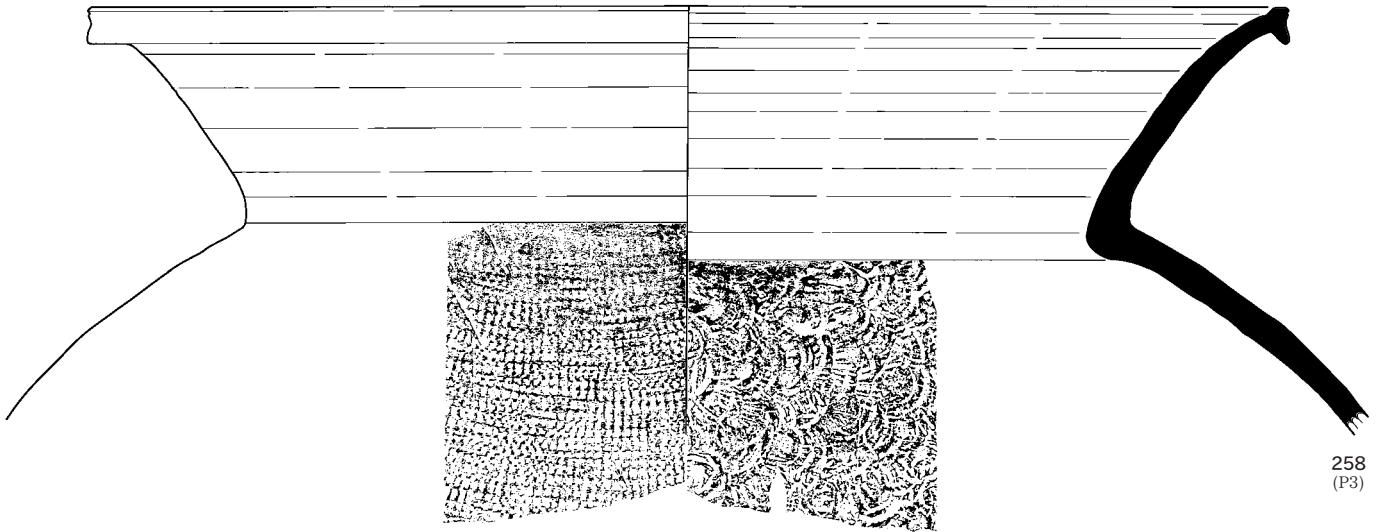
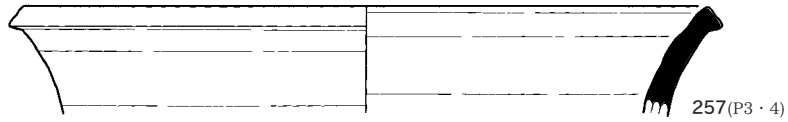
256
(P404)

タール

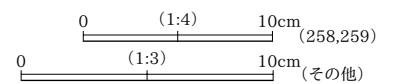
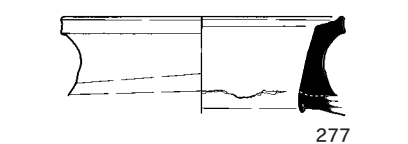
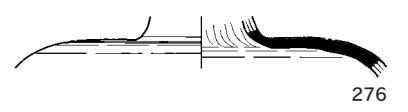
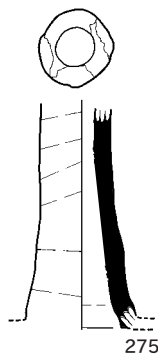
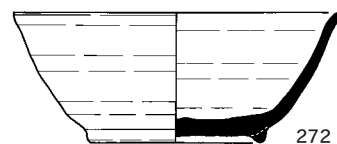
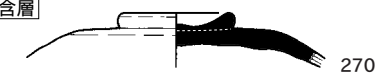
0 (1:3) 15cm (その他)

0 (1:4) 20cm (226,227,228)

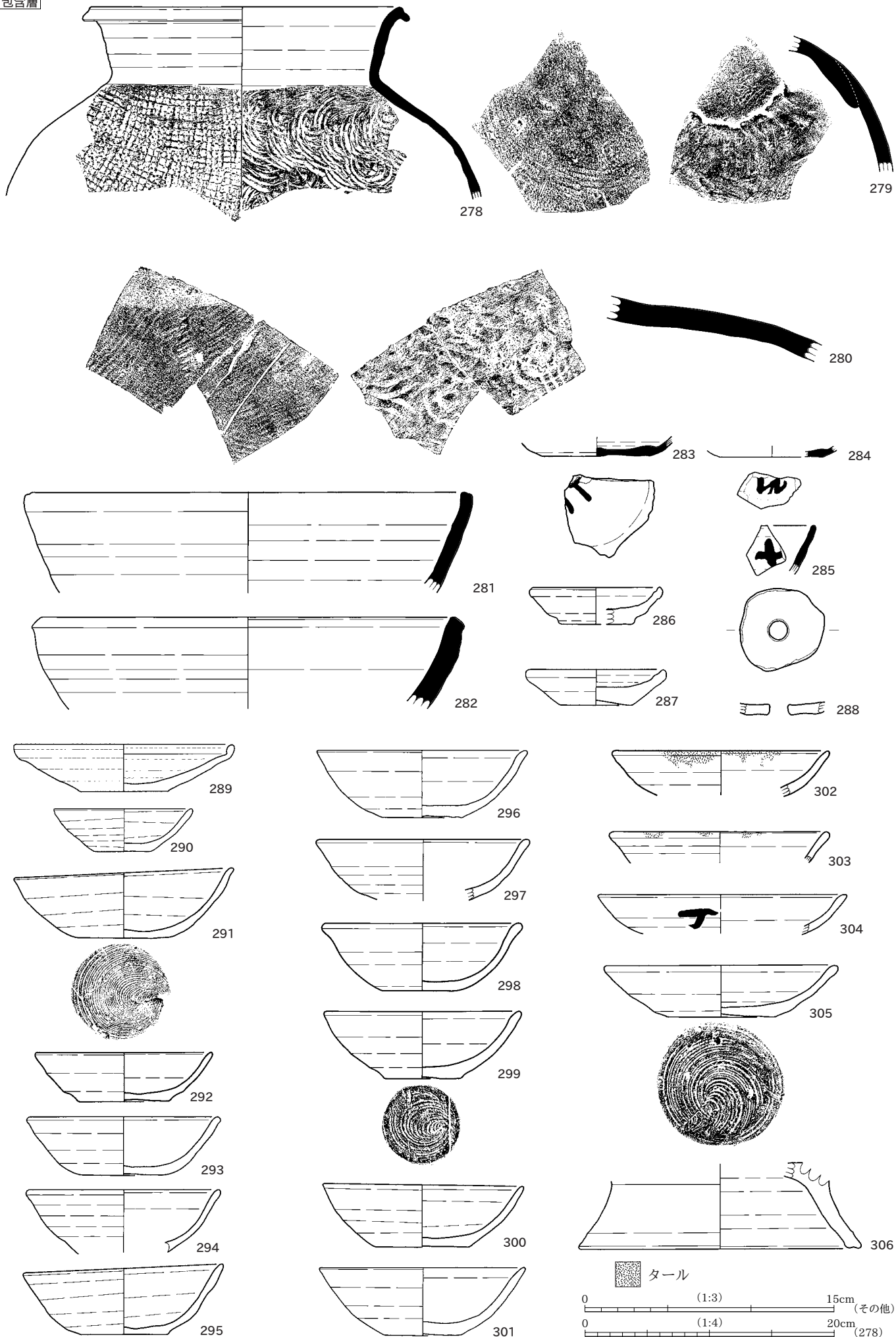
その他のピット



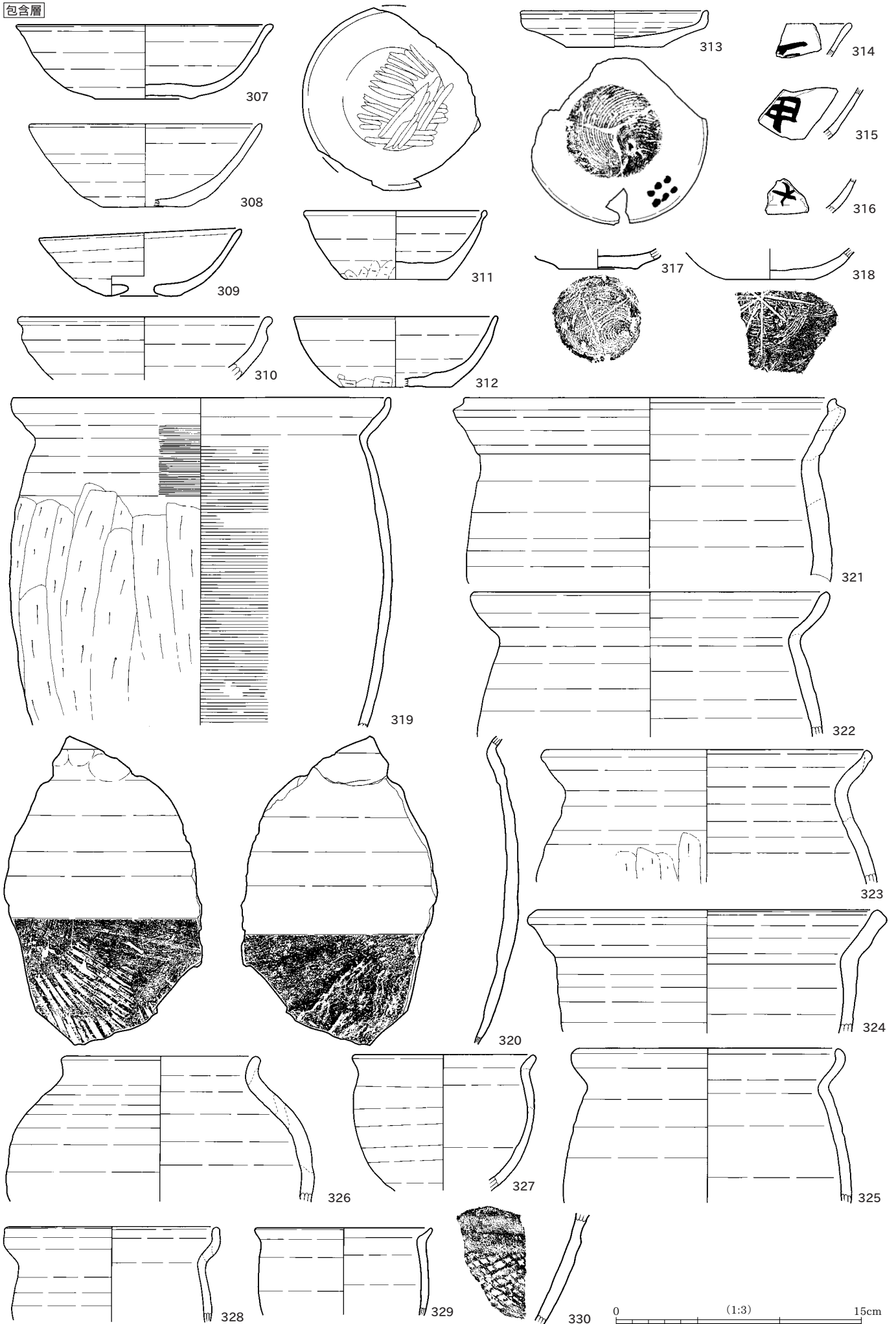
包含層



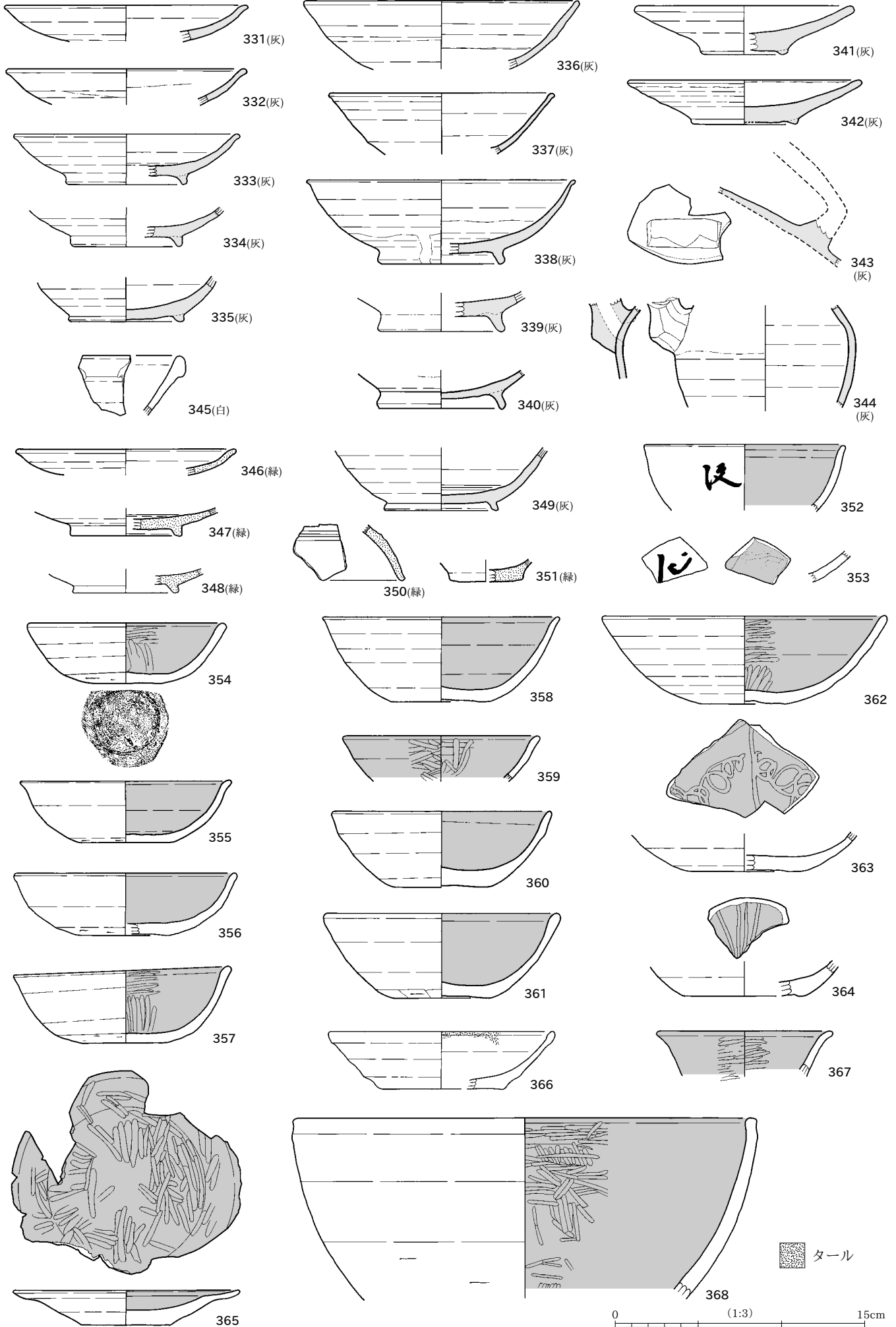
包含層



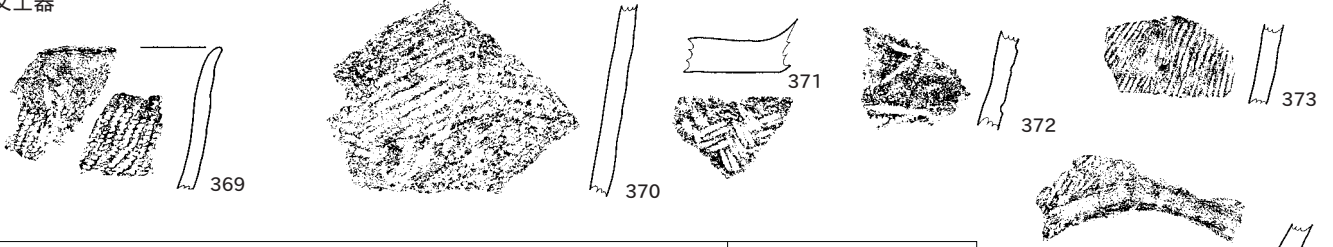
包含層



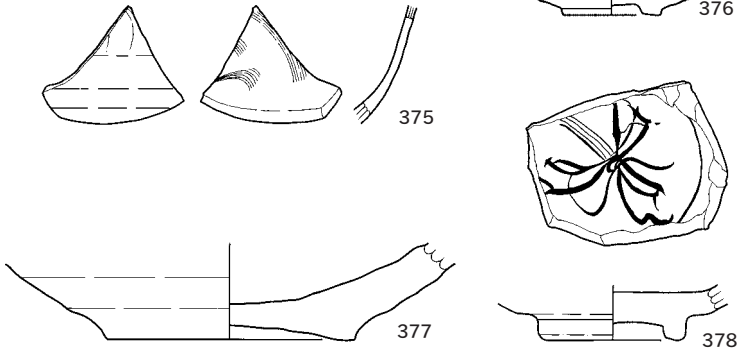
包含層



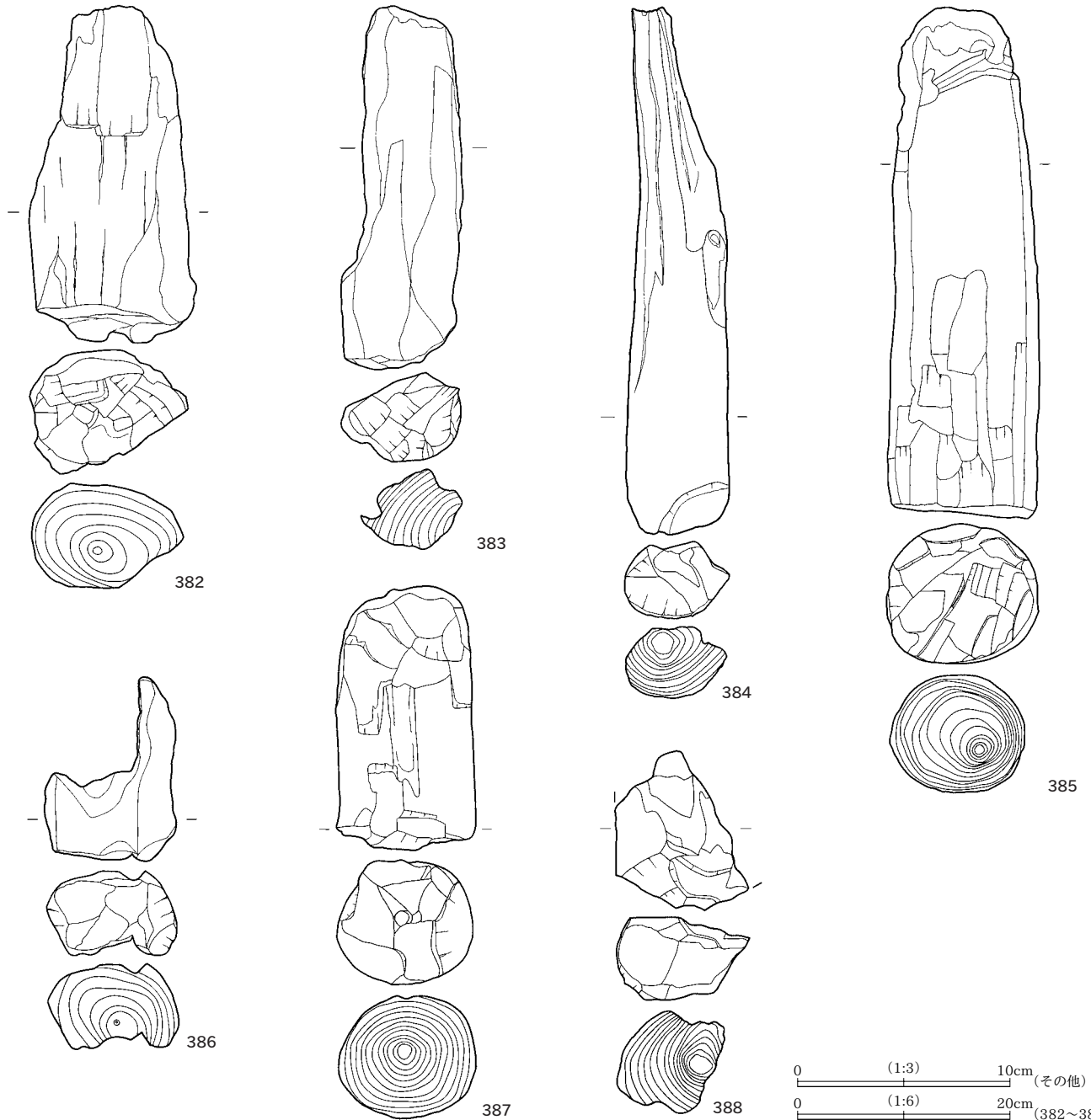
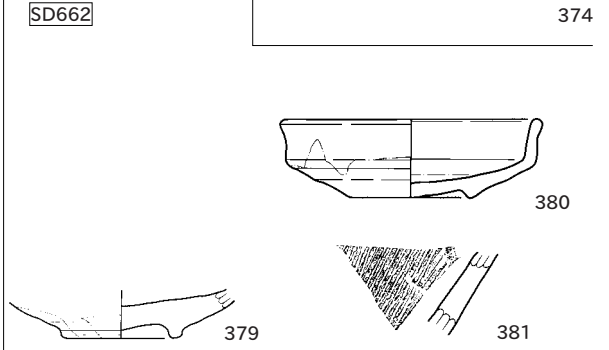
縄文土器



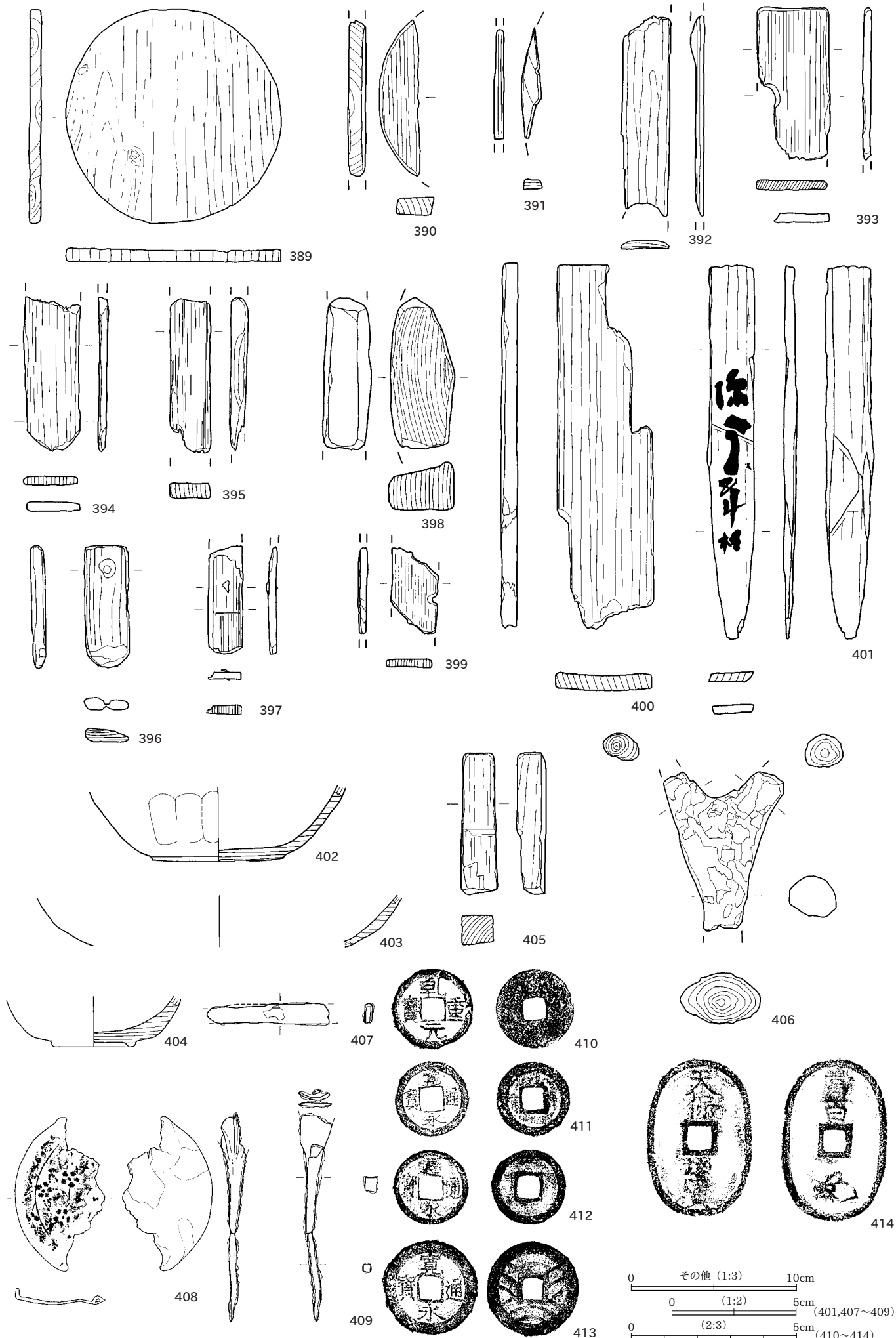
中世の遺物

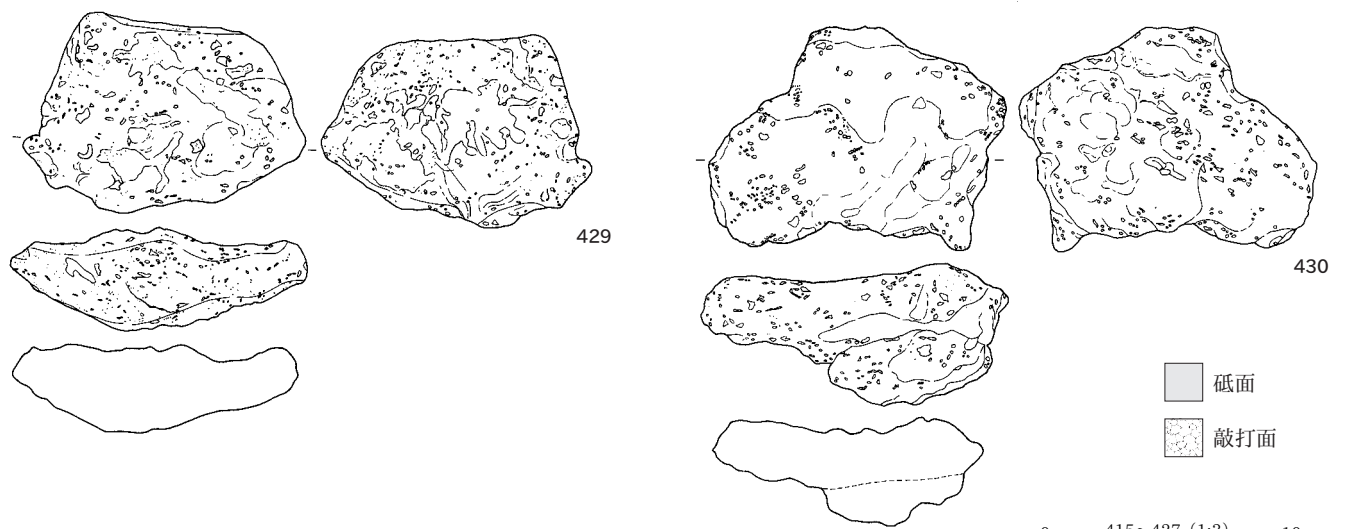
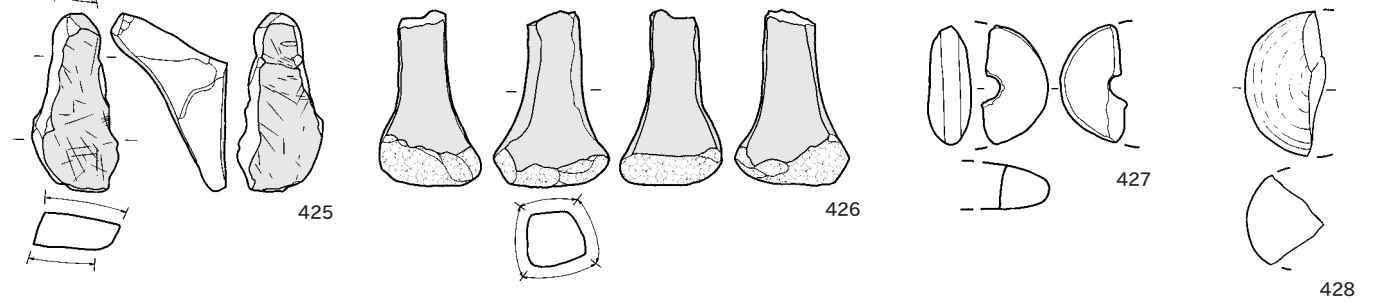
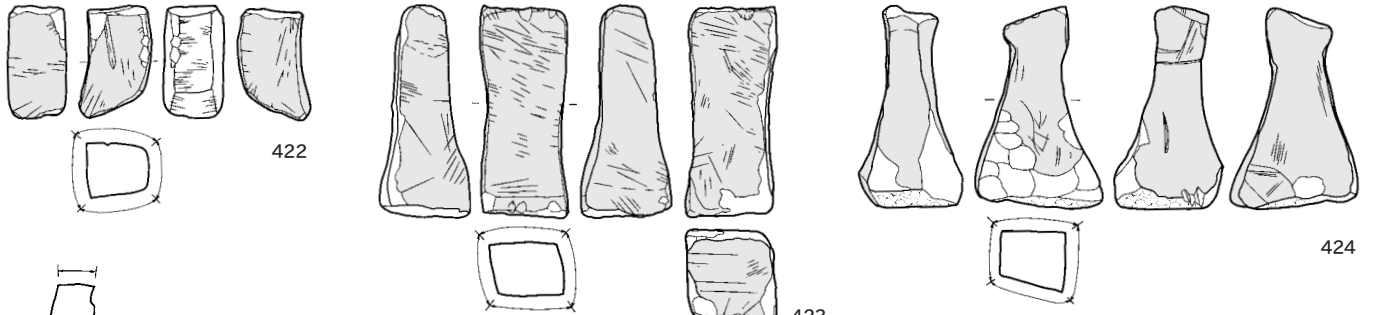
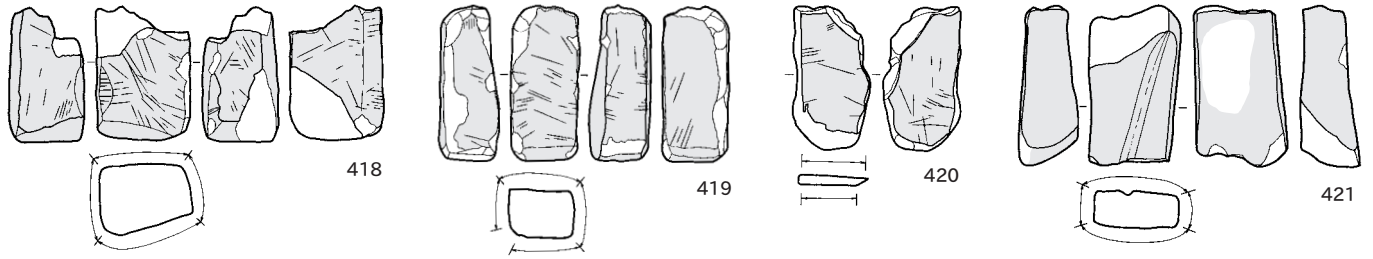
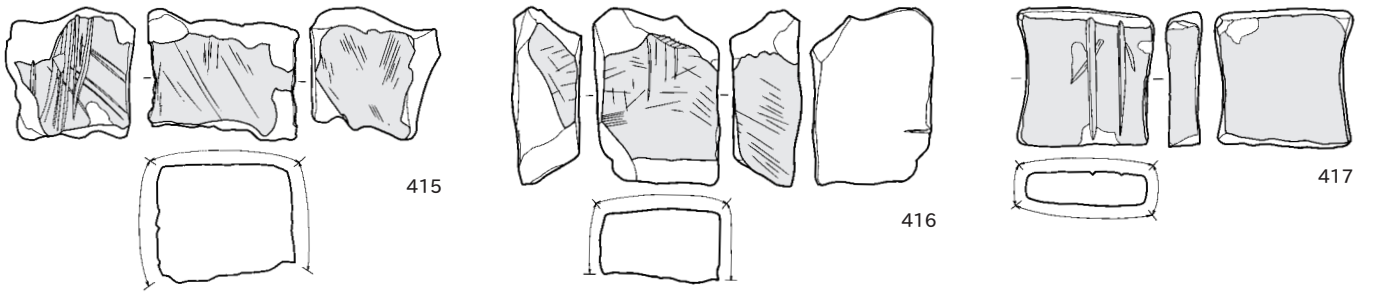


近世の遺物

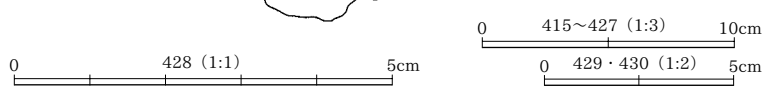


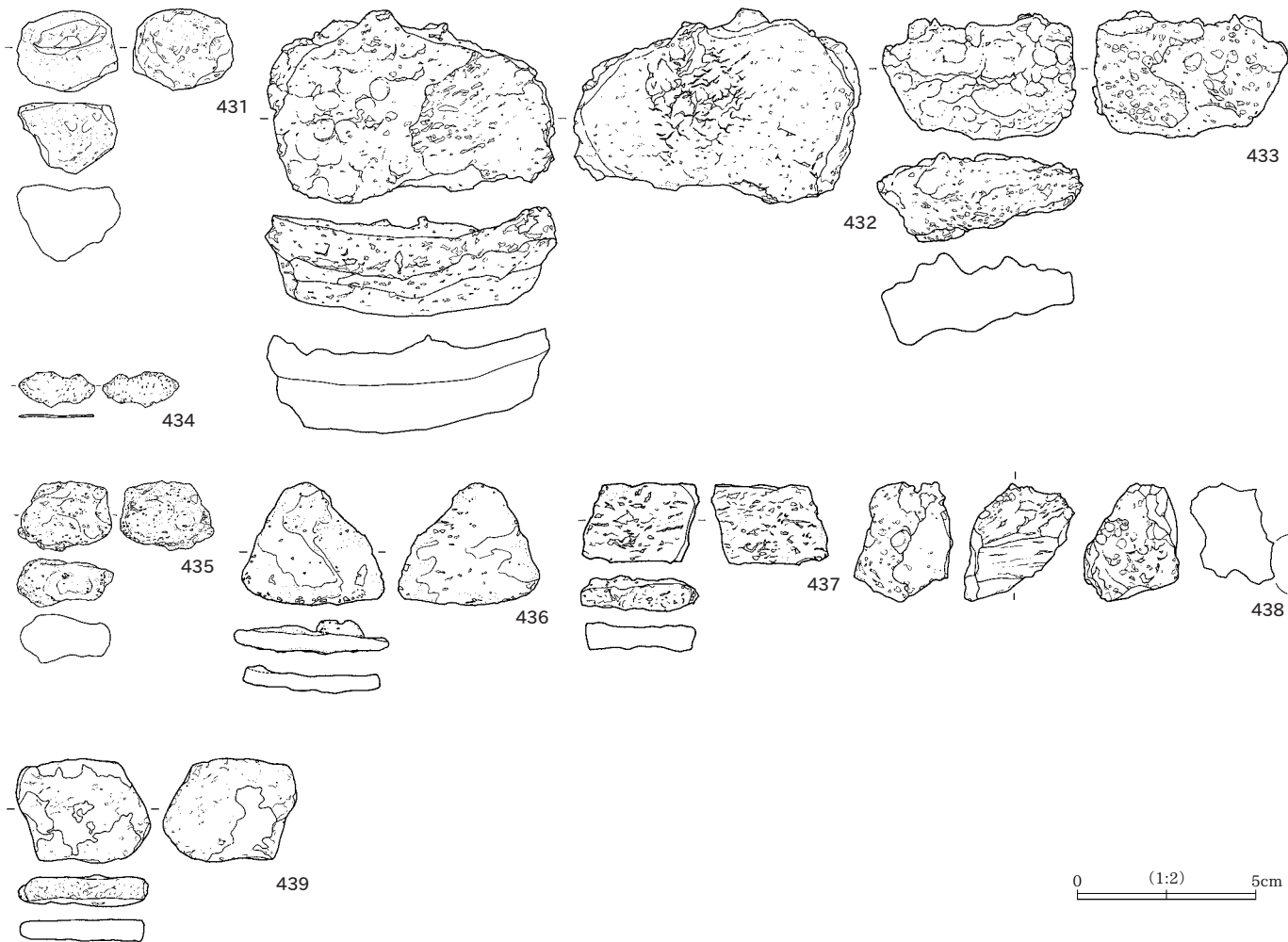
0 (1:3) 10cm (その他)
 0 (1:6) 20cm (382~388)





■ 砥面
 ■ 敲打面







遺跡近景 (西から)



遺跡近景 B・C区 (西から)



A区西壁 セクション (北東から)



B区 深掘セクション (西から)



A区埋没崖 検出状況 (東から)



SI1 完掘状況 (南から)



SI1 南東壁際遺物出土状況 (南から)



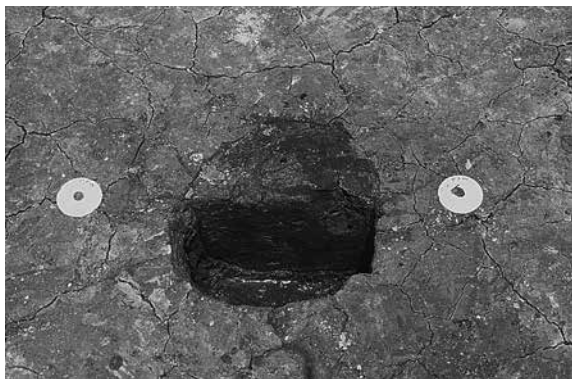
SK28 セクション (南から)



SE1 完掘状況 (南から)



P23 (SB2) セクション (南から)



P3 (SB3) セクション (南から)



SB3 完掘状況 (東から)



P33 セクション (北から)



P24 セクション (南から)



SX1 遺物出土状況 (東から)



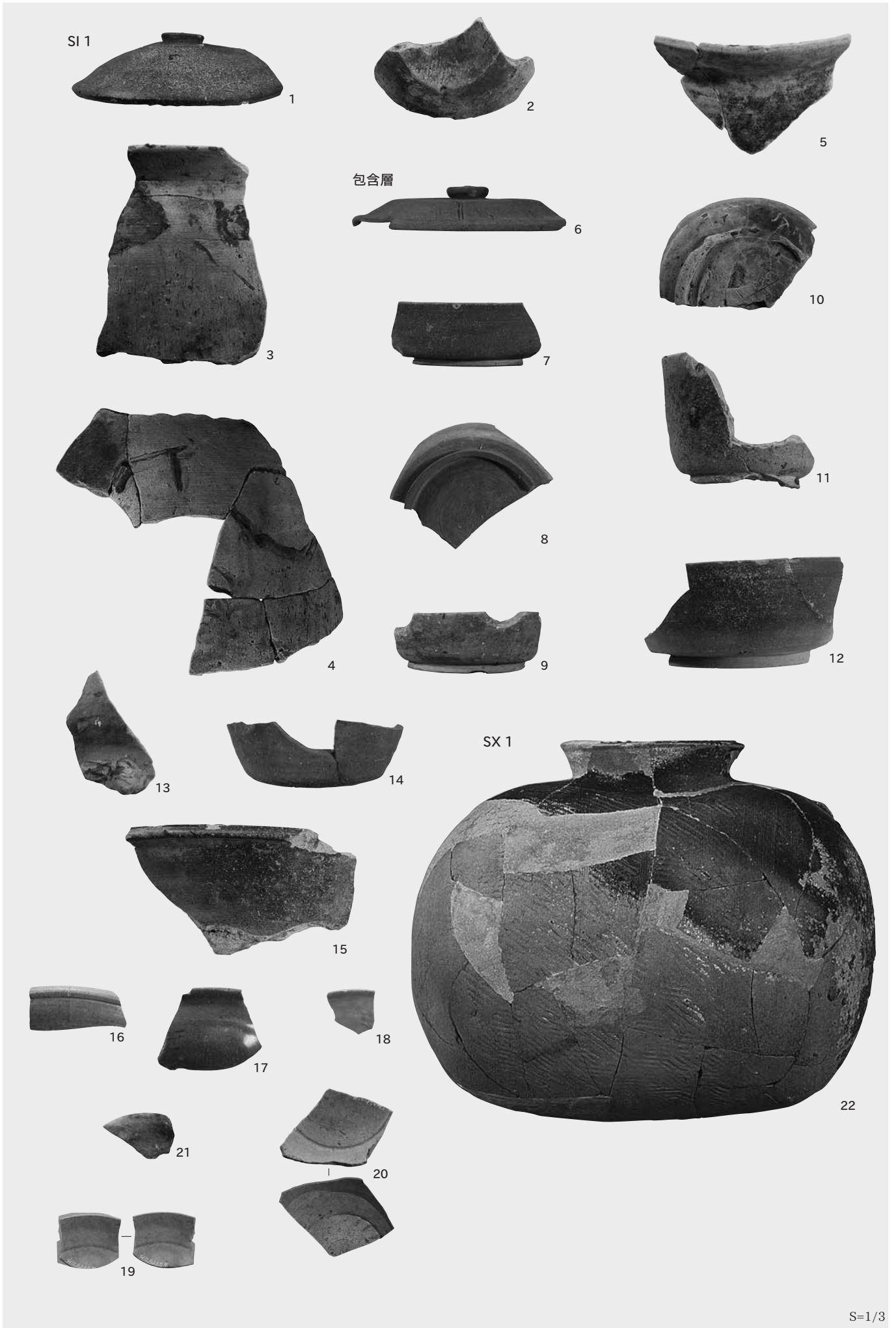
SX1 完掘状況 (南から)



SX2~4 完掘状況 (西から)



SX2~4 西壁セクション (東から)





峪ノ上遺跡全景（南から）



峪ノ上遺跡 S11 カマド出土遺物



遺跡近景（東から南葉山を望む）



遺跡近景（南西から）



B区 完掘状況（西から）



B区 完掘状況（南から）



S11, SD3・4 完掘状況（南から）



P134・P135 セクション（北から）



S11 遺物出土状況（南から）



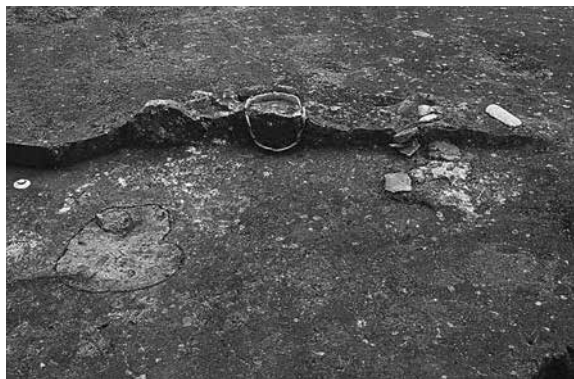
S11 カマド 検出状況（北西から）



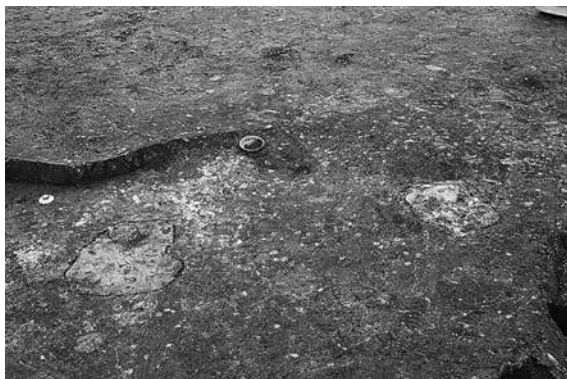
S11 カマド 遺物出土状況（北西から）



S11 カマド袖 高杯・甕出土状況（北西から）



S11 カマド 断割状況 (北西から)



S11 カマド袖内 土器出土状況 (北西から)



S11 床面中央焼土とカマド (北西から)



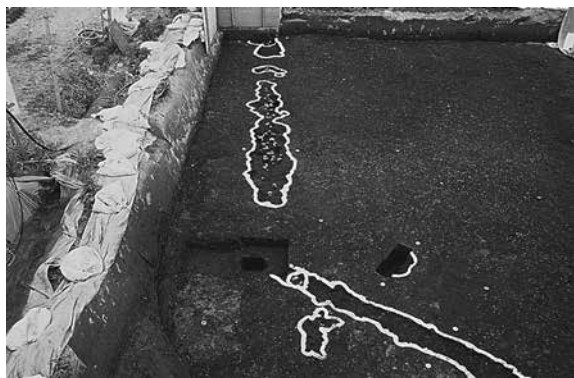
S11 床面中央焼土 (西から)



S11 完掘状況 (南から)



P125 (S11)・P126 セクション (南東から)



SD1 遺物出土状況 (北から)



SD1 セクション (北から)



SD1 遺物出土状況 (西から)



SD2 完掘状況 (南から)



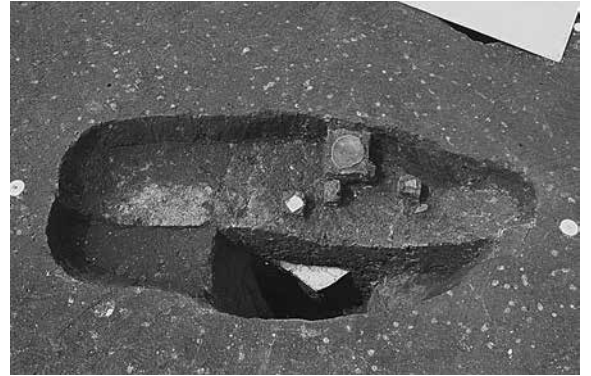
SD2・P107 切り合い状況 (南から)



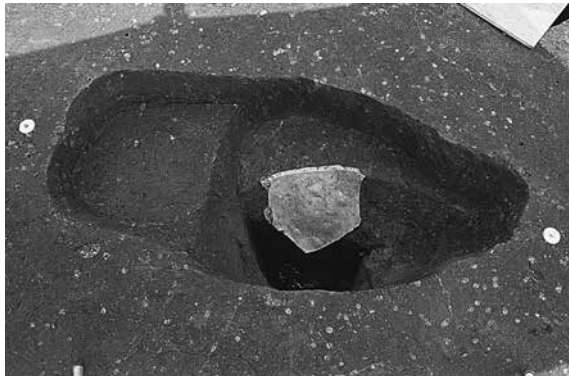
P56・60 (SB1) 完掘状況 (西から)



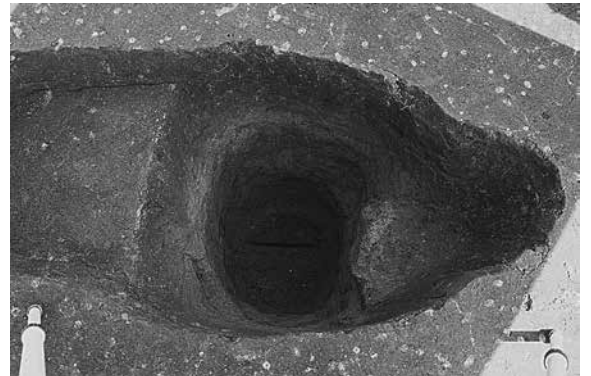
P92 (SB1) 柱根出土状況 (北から)



P103 (SB1) 遺物出土状況① (南から)



P103 (SB1) 遺物出土状況② (南から)



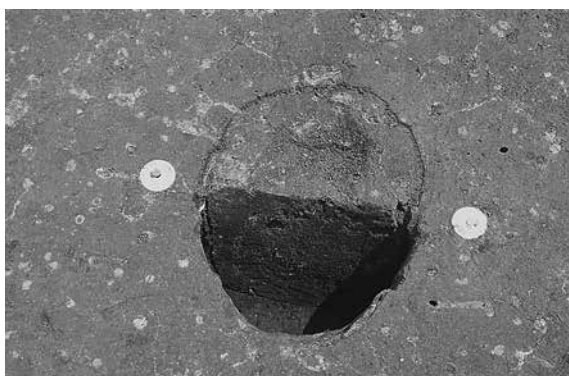
P103 (SB1) 完掘状況 (南から)



P107 (SB1) 完掘状況 (西から: SD2を切る)



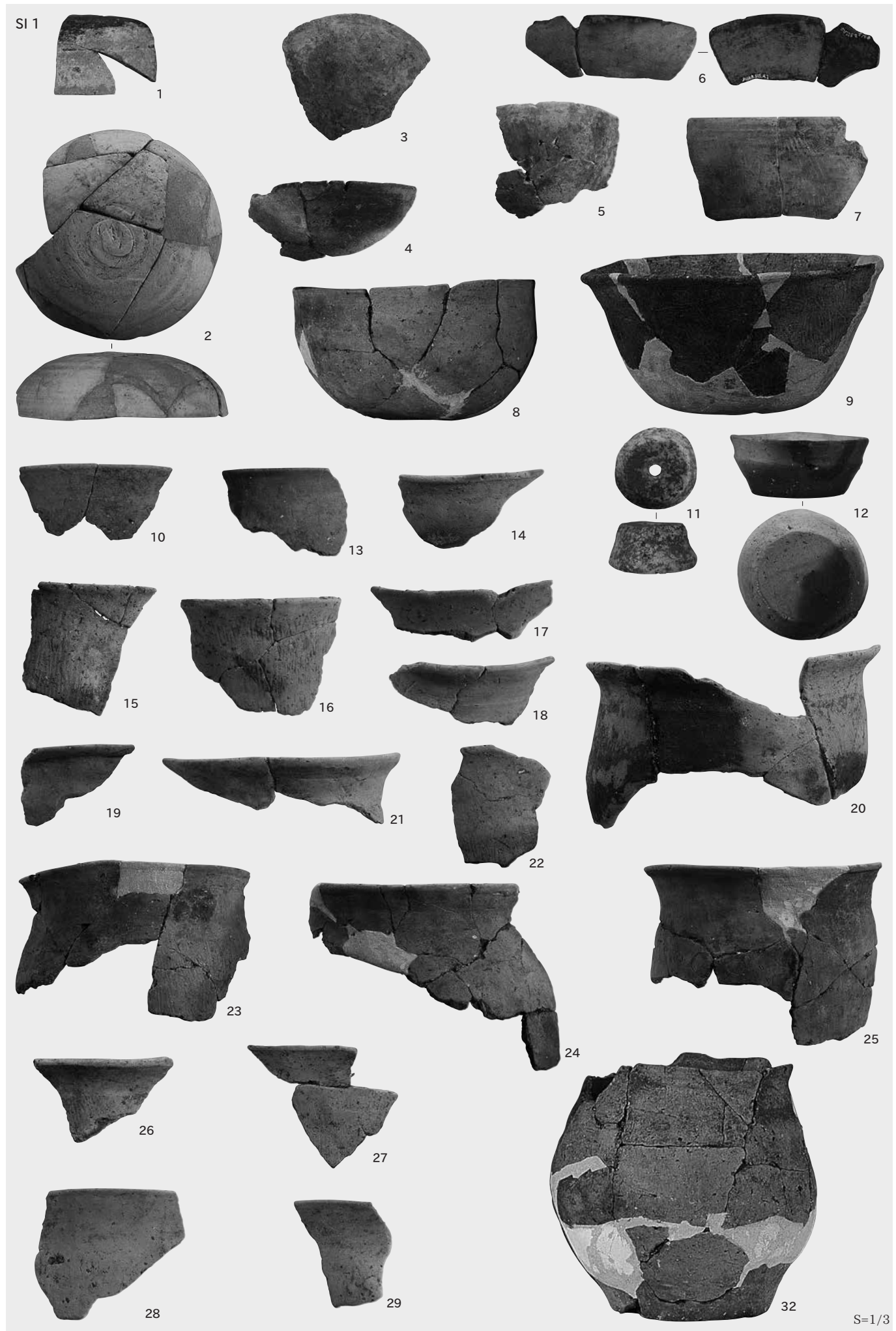
P53 (SB1) 完掘状況 (南から)



P23 セクション (南から)



遺跡遠景 (北から)



SI 1



SI 1



36



39



40



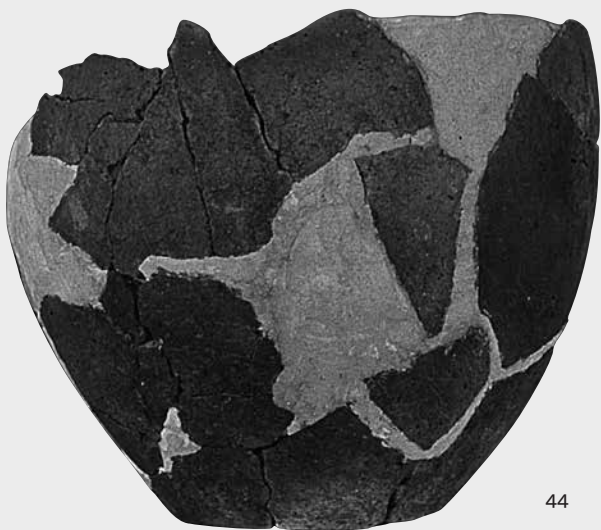
41



42



43



44



47



45



48

SI 1



SD 2



72



73



74



76



75

P103



77



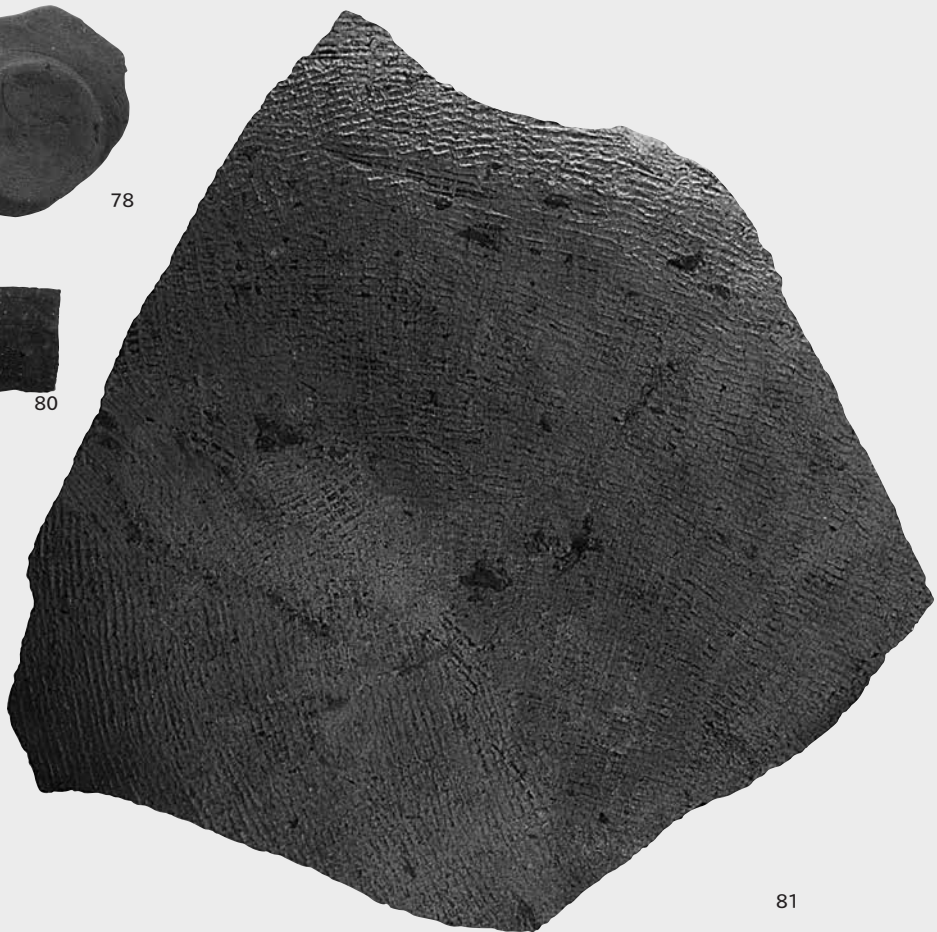
78



79

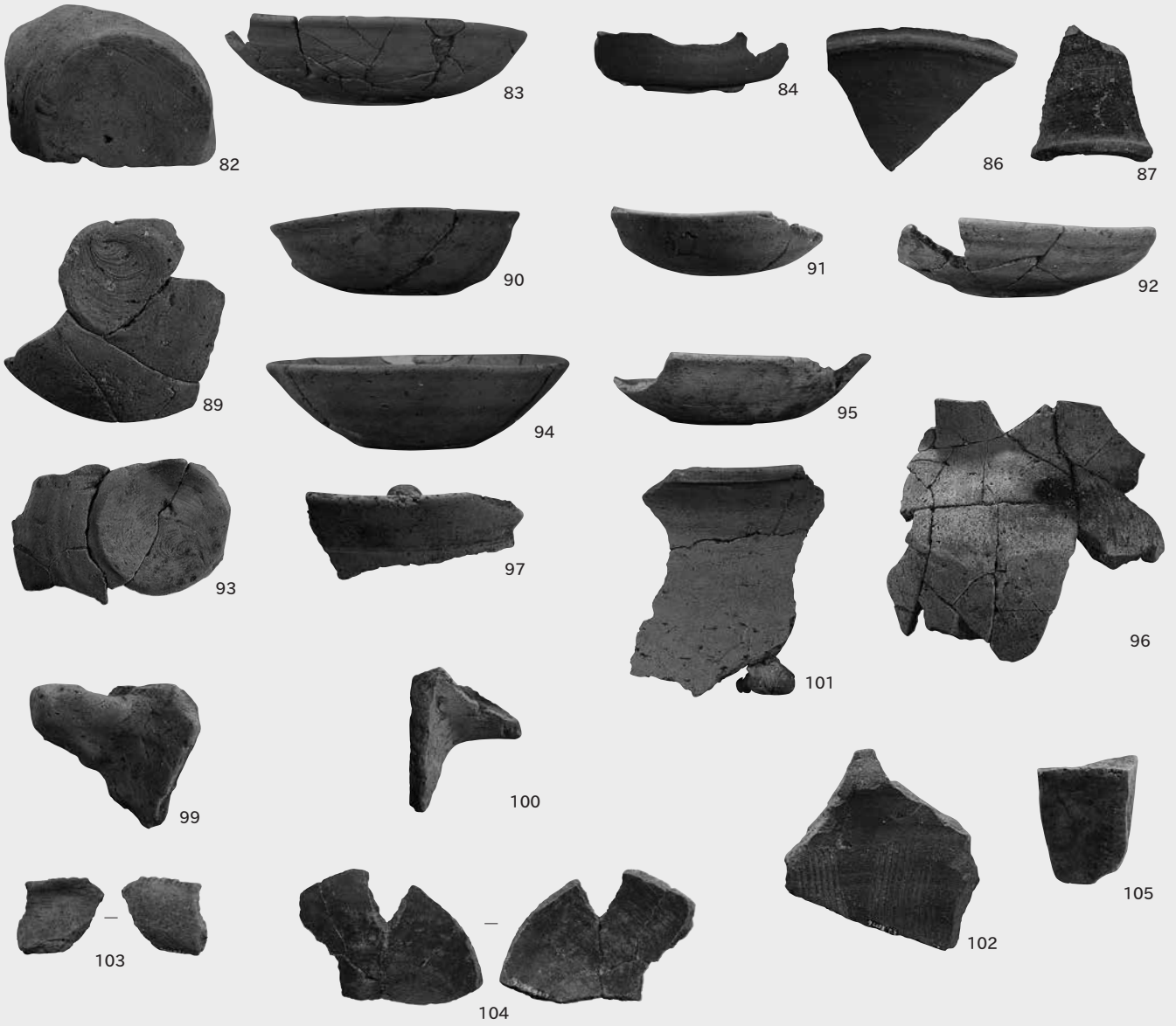


80



81

包含層





五反田遺跡 SB8 完掘状況 (東から)



五反田遺跡 SX16 検出状況 (西から)



五反田遺跡 土師器焼成遺構出土土器



五反田遺跡 緑釉陶器 皿 (278・279)



調査区近景 (北から妙高山を望む)



調査区近景 (西から箕冠山を望む)



調査区全景 (上空から)



④北壁 (7A16 グリッド) 土層セクション (南西から)



①北壁 (16A16 グリッド) 土層セクション (南西から)



⑩南壁 (4C25 グリッド) 土層セクション (北東から)



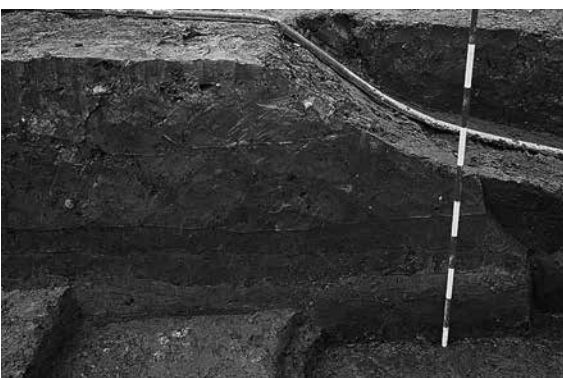
⑨南壁 (7C25 グリッド) 土層セクション (北東から)



⑥南壁 (15C25 グリッド) 土層セクション (北東から)



P1 完掘状況 (南から)



SX21 (26B24 グリッド) セクション (南から)



SX21 調査状況（東から）



SX21 (28B22グリッド) セクション（西から）



SX21 遺物（44・47）出土状況（北から）



SX21 木製品（358・359）出土状況（北から）



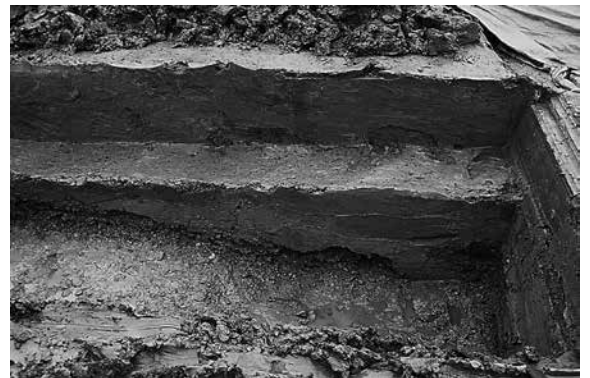
SX660 検出状況（南西から）



SX660 セクション（南から）



SX660 (18B11～12グリッド) セクション（南西から）



C区北壁 セクション（南から）



SI417 遺物出土状況（東から）



SI417 カマド検出状況①（東から）



SI417 カマド検出状況② (東から)



SI539 遺物 (6・7) 出土状況 (南東から)



SB4・5・10・13周辺 完掘状況 (東から)



SB8・11・12・19 完掘状況 (東から)



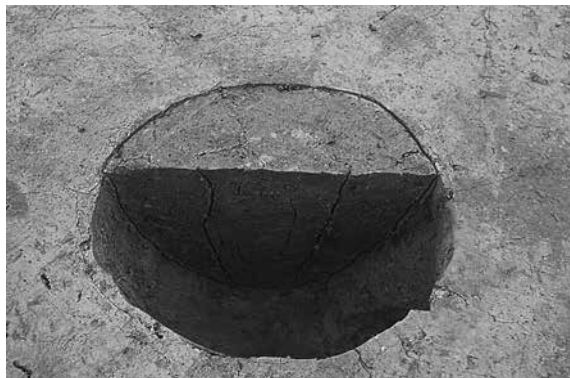
SB9 完掘状況 (東から)



9~11グリッド 完掘状況 (東から)



P514 (SB1) セクション (南から)



P71 (SB2) セクション (南から)



P76 (SB2) セクション (南から)



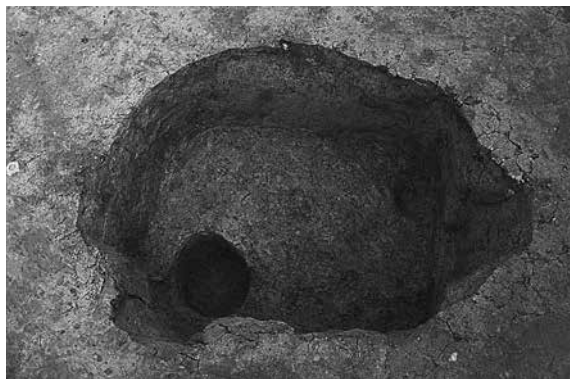
SK506・507 完掘状況 (西から)



P395 (SB3)・P120 セクション (南から)



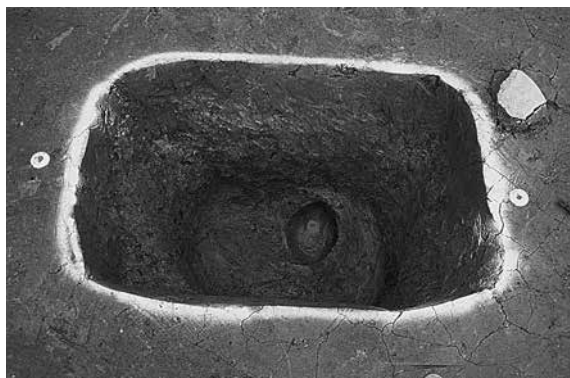
P44 (SB3) 完掘状況 (南西から)



P38 (SB3) 完掘状況 (南から)



P59 (SB4) セクション (南東から)



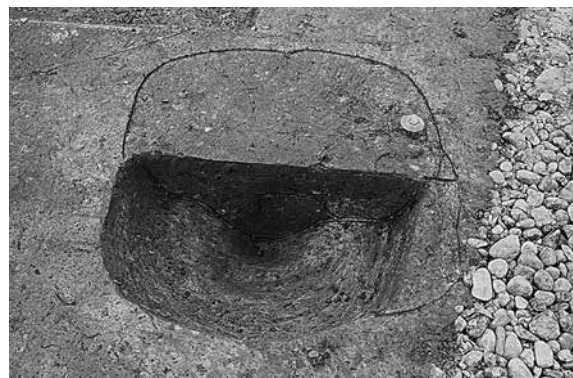
P47 (SB4) 完掘状況 (南から)



P7 (SB4) 完掘状況 (南から)



P238 (SB5) セクション (南から)



P259 (SB5) セクション (南から)



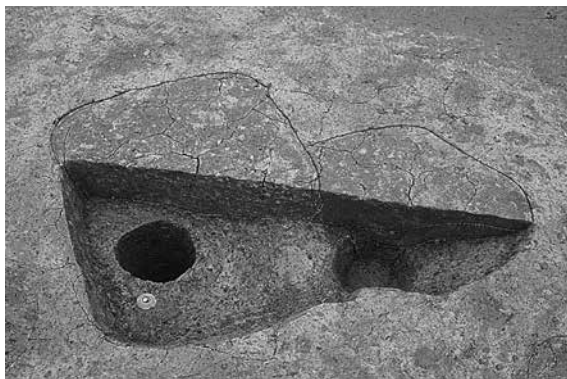
P429 (SB5)・P428 (SB10) セクション (南から)



P15 (SB5) 完掘状況 (南から)



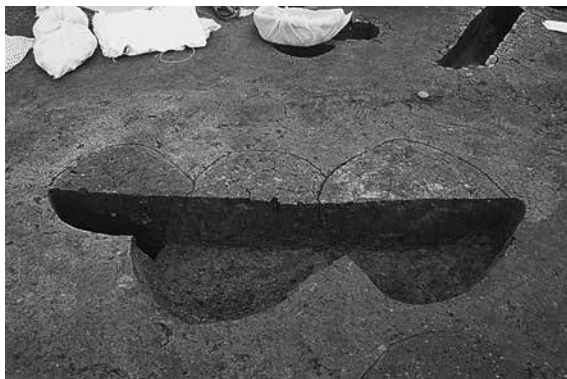
P216 (SB6) セクション (南から)



P257 (SB6)・P258 セクション (西から)



P322 (SB6) セクション (南から)



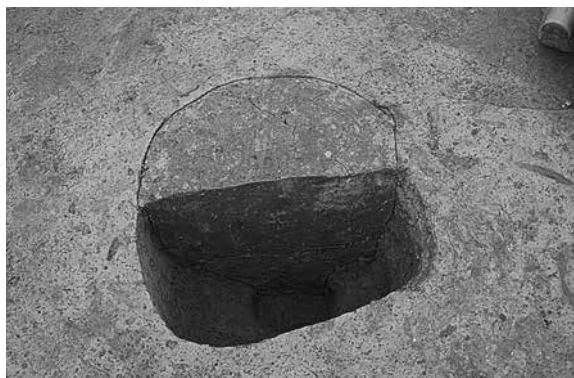
P274(SB6)・P275(SB10)・P273 (SB5)セクション (南から)



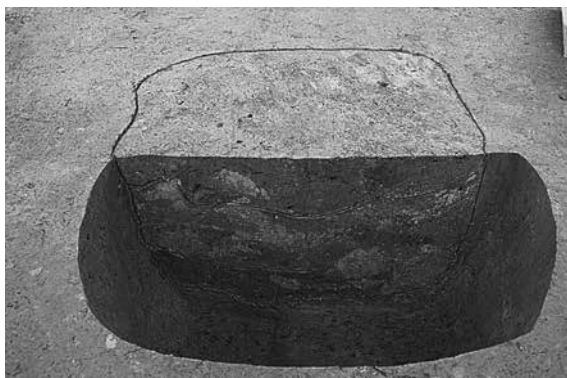
P223 (SB7) セクション (南から)



P233 (SB7) セクション (南から)



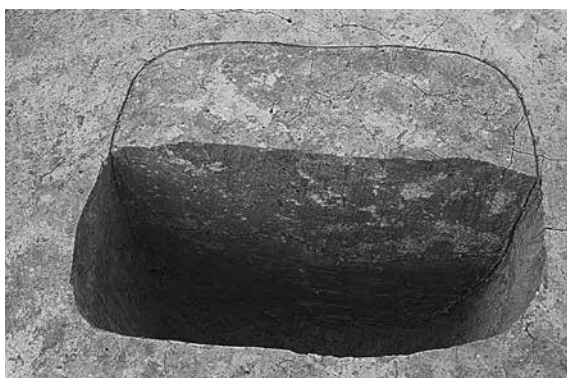
P252 (SB7) セクション (南から)



P108 (SB9) セクション (南から)



P151 (SB9) セクション (南から)



P411 (SB9) セクション (東から)



P112 (SB8)・P111 セクション (南から)



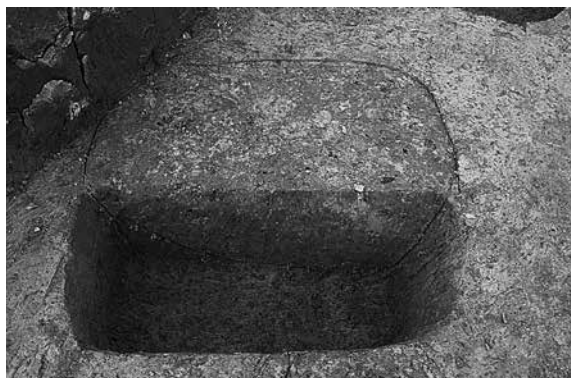
P379 (SB8)・P378 セクション (南から)



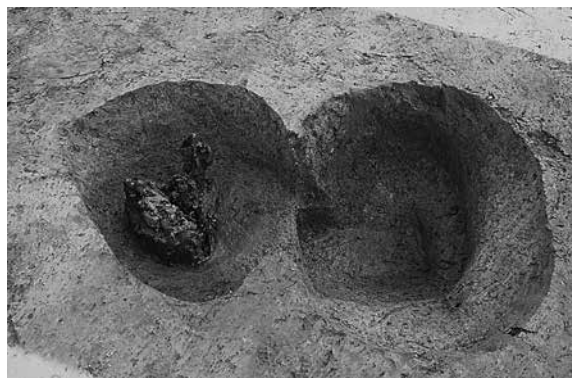
P382 (SB8)・P189 セクション (南から)



P130 (SB8) 木製品出土状況 (南から)



P318 (SB10) セクション (南から)



P297 (SB10)・P296 完掘状況 (南西から)



P345 (SB12)・P344 セクション (南から)



P344 遺物 (129) 出土状況 (南から)



P468 (SB12) セクション (南から)



P180 (SB13) セクション (南から)



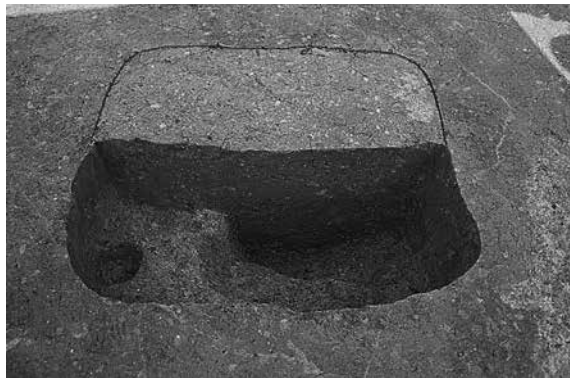
P227 (SB14) セクション (南から)



P45 (SB3) ・ P48 (SB15) 切り合い (北から)



P65 (SB15) ・ P58 セクション (南西から)



P49 (SB15) セクション (西から)



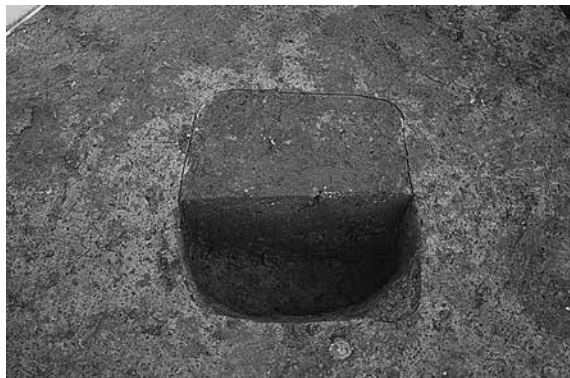
P399 完掘状況 (西から)



P55 (SB16) セクション (南から)



P636 ・ P637 (SB16) ・ P638 (SB15) セクション (西から)



P443 (SB19) セクション (南から)



P448 (SB19) セクション (南から)



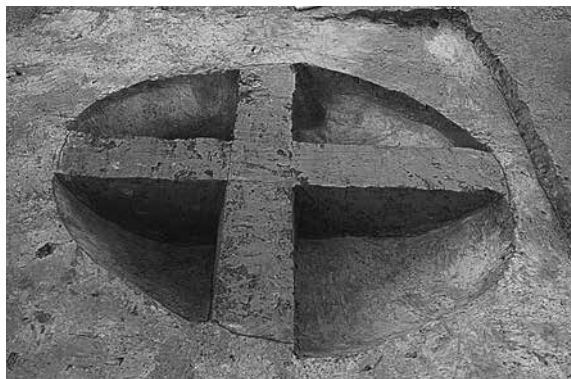
SK508 セクション (北から)



SK525 セクション（南西から）



SK560 セクション（南から）



SK561 セクション（北から）



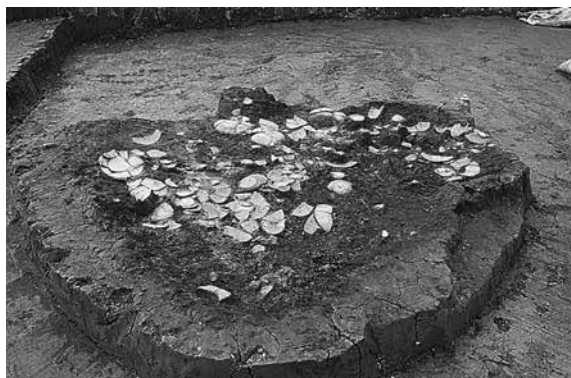
SK565 セクション（東から）



SK566 セクション（東から）



SK565・SK566 完掘状況（東から）



SX16 検出状況（北から）



SX16 遺物出土状況①（南西から）



SX16 遺物出土状況②（西から）



SX16 完掘状況（西から）



SX3 検出状況 (東から)



SX3 遺物出土状況 (東から)



SX3 セクション (西から)



SX3 完掘状況 (東から)



SX526 セクション (北から)



SX526 完掘状況 (北から)



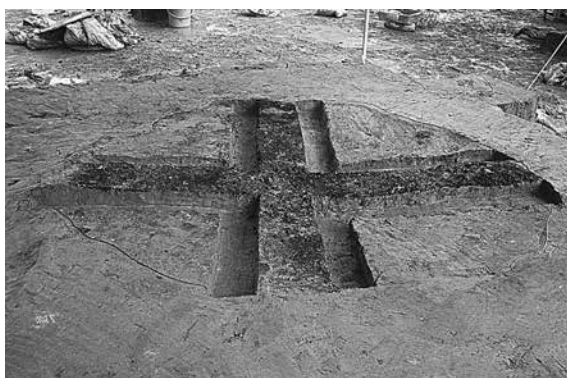
SX600 セクション (東から)



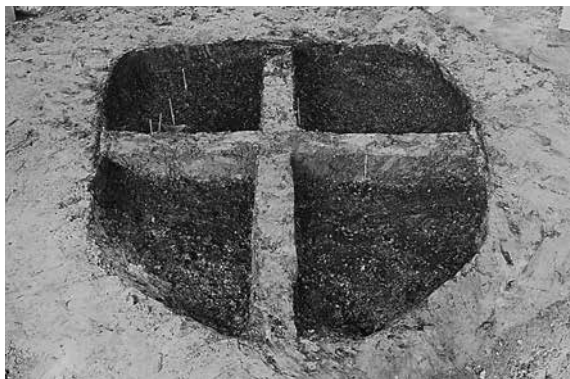
SX659 セクション (北から)



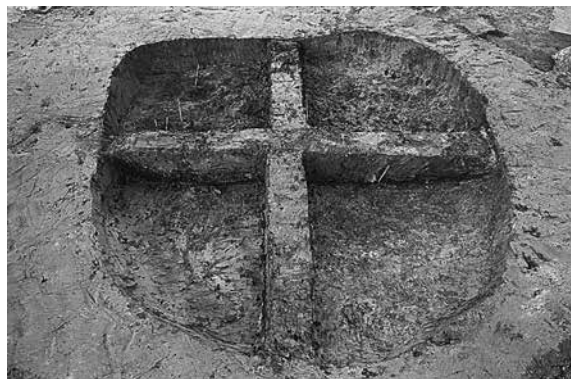
SX540 検出状況 (北西から)



SX540 セクション (南西から)



SX541 炭層検出状況（南東から）



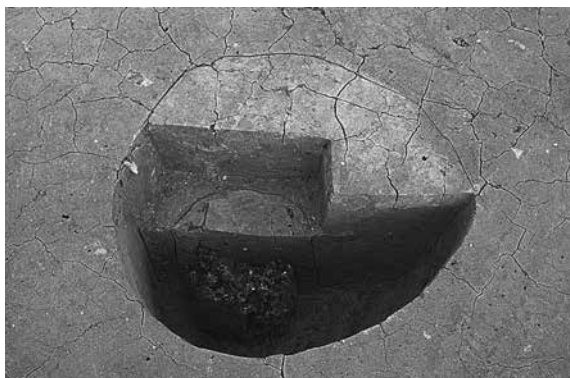
SX541 セクション（南東から）



SX4 セクション（西から）



SX9 検出状況（西から）



P10 セクション（西から）



P44 セクション（南西から）



P42 完掘状況（西から）



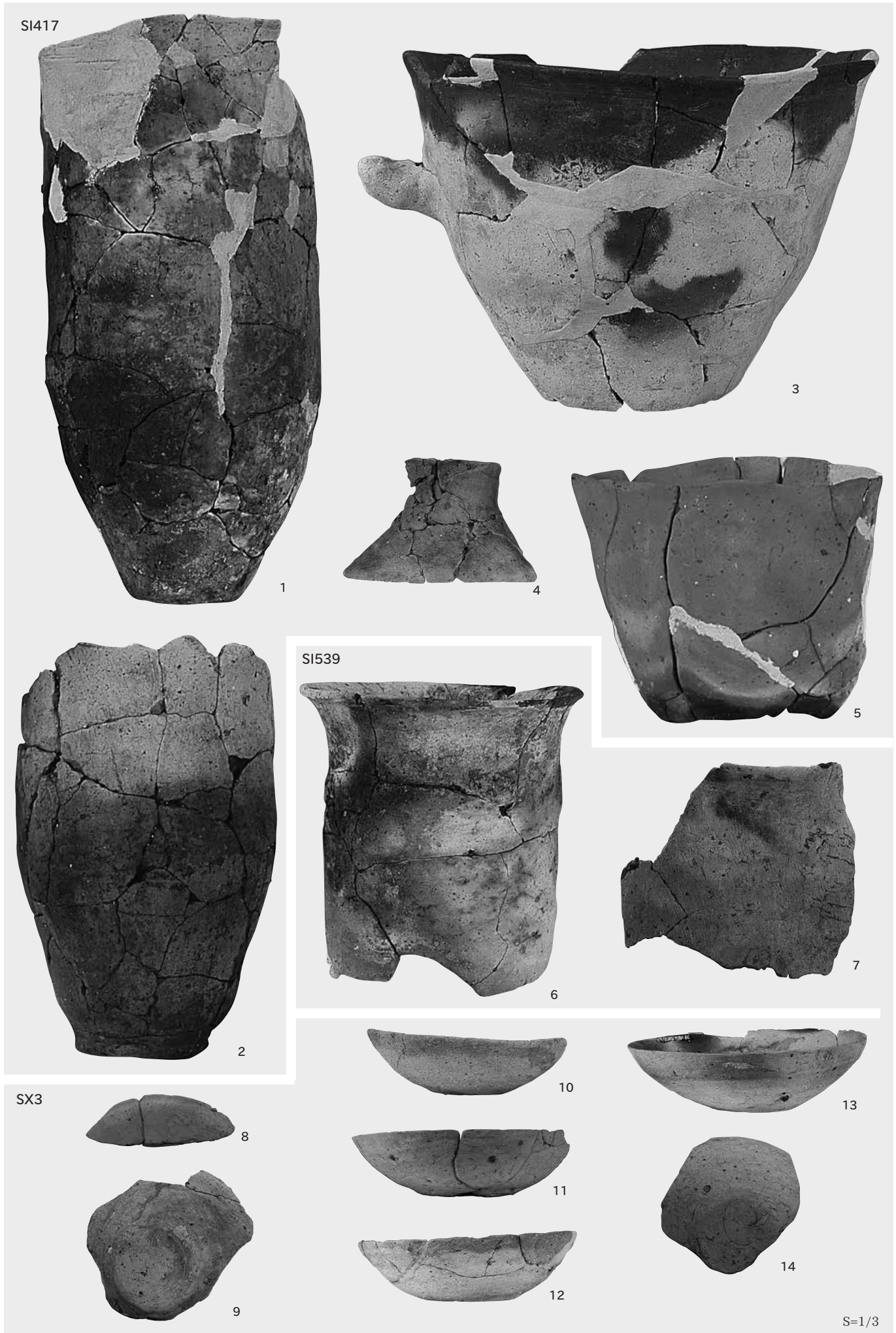
P542 セクション（東から）

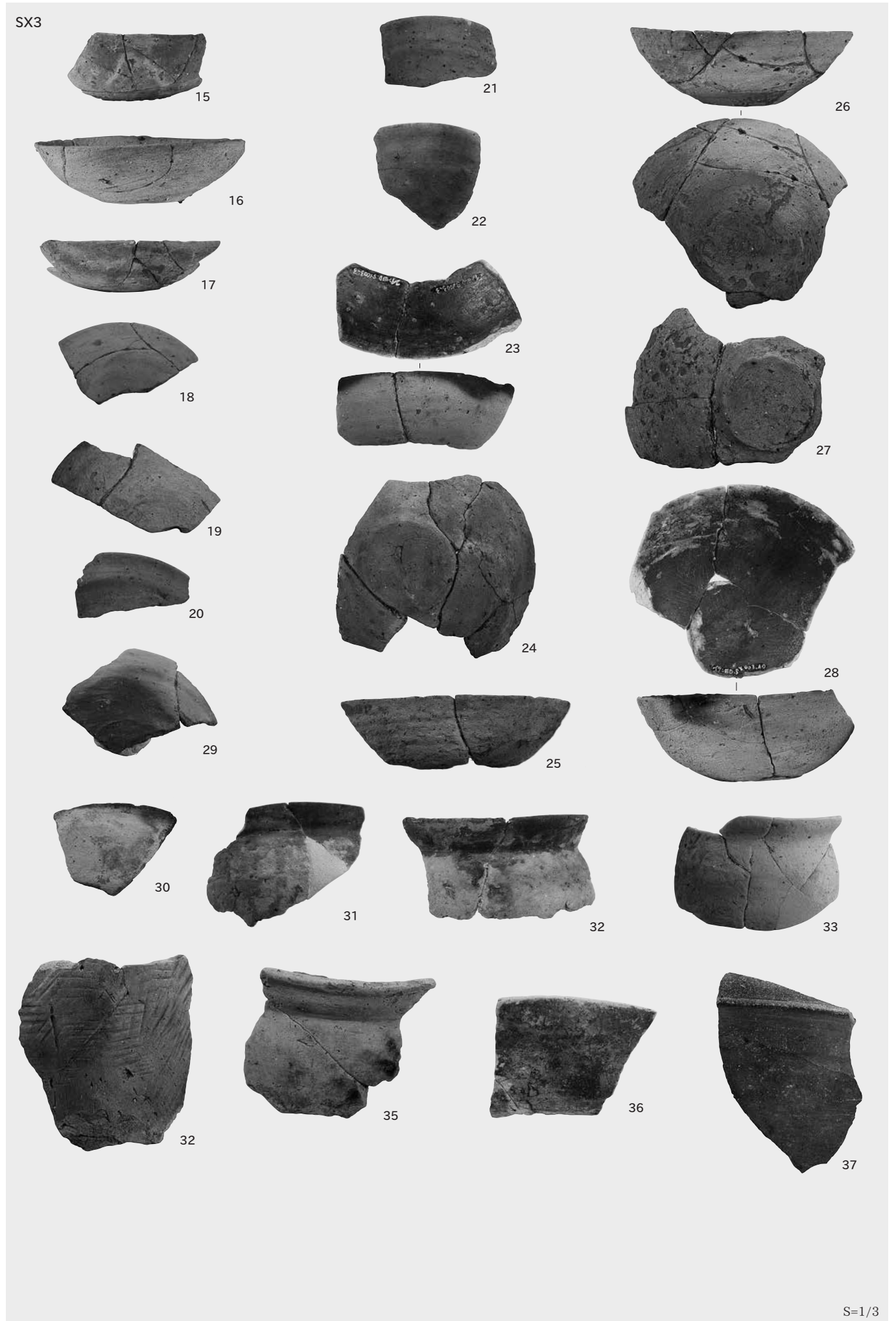


緑釉陶器（279）出土状況（12B9）（東から）

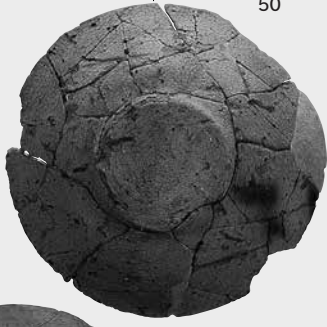
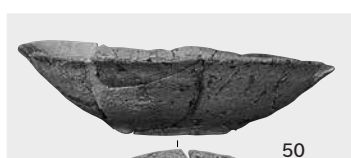
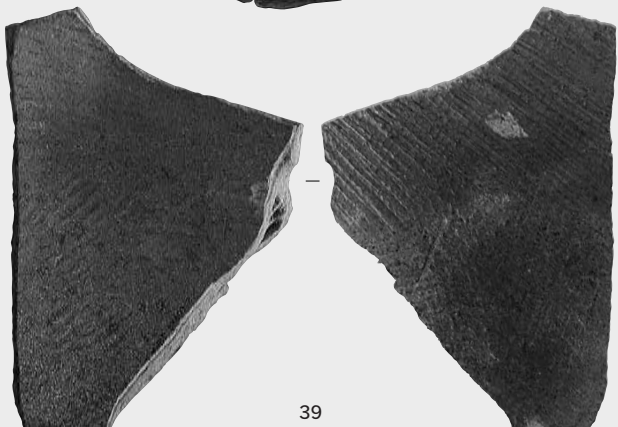
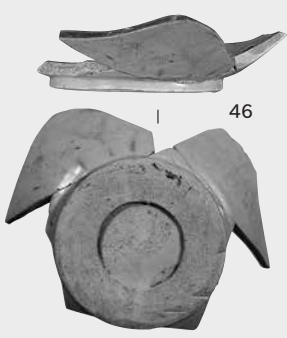
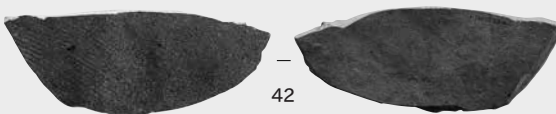
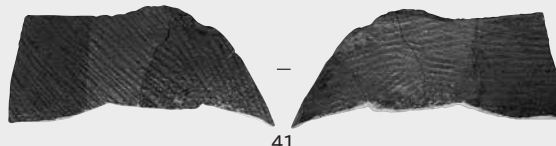


調査風景（東から）



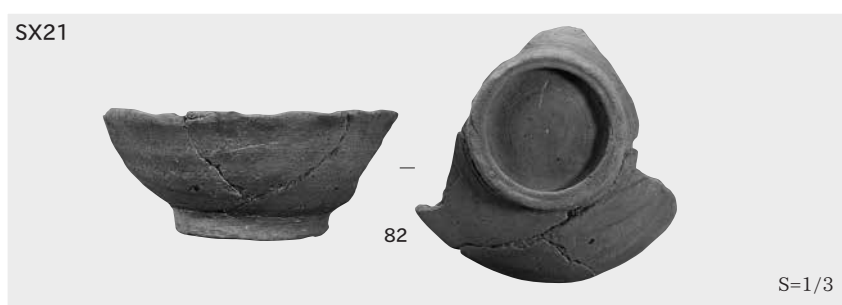
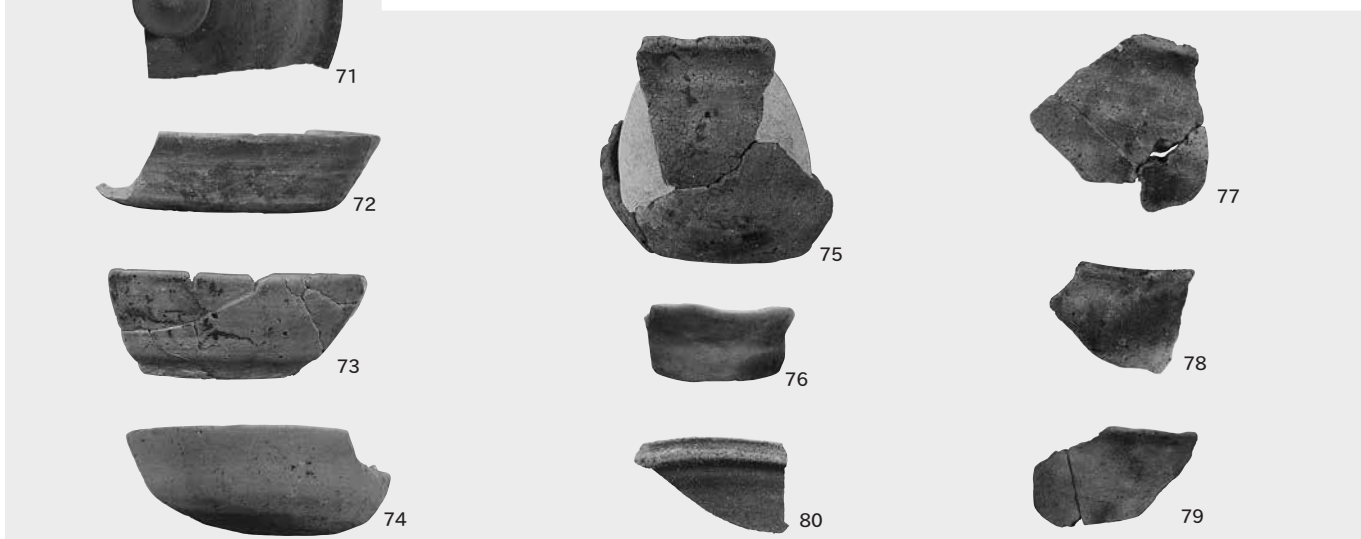
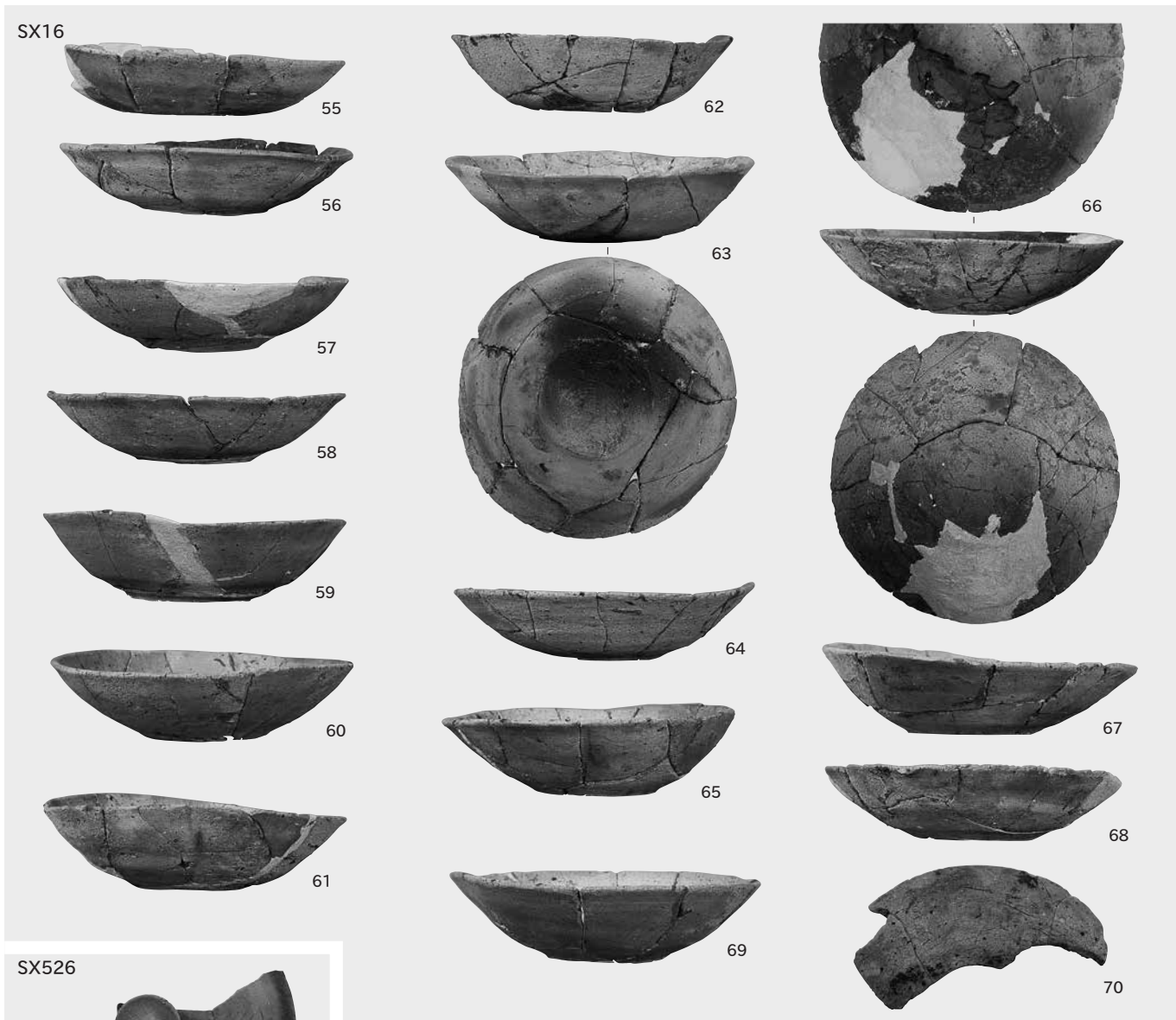


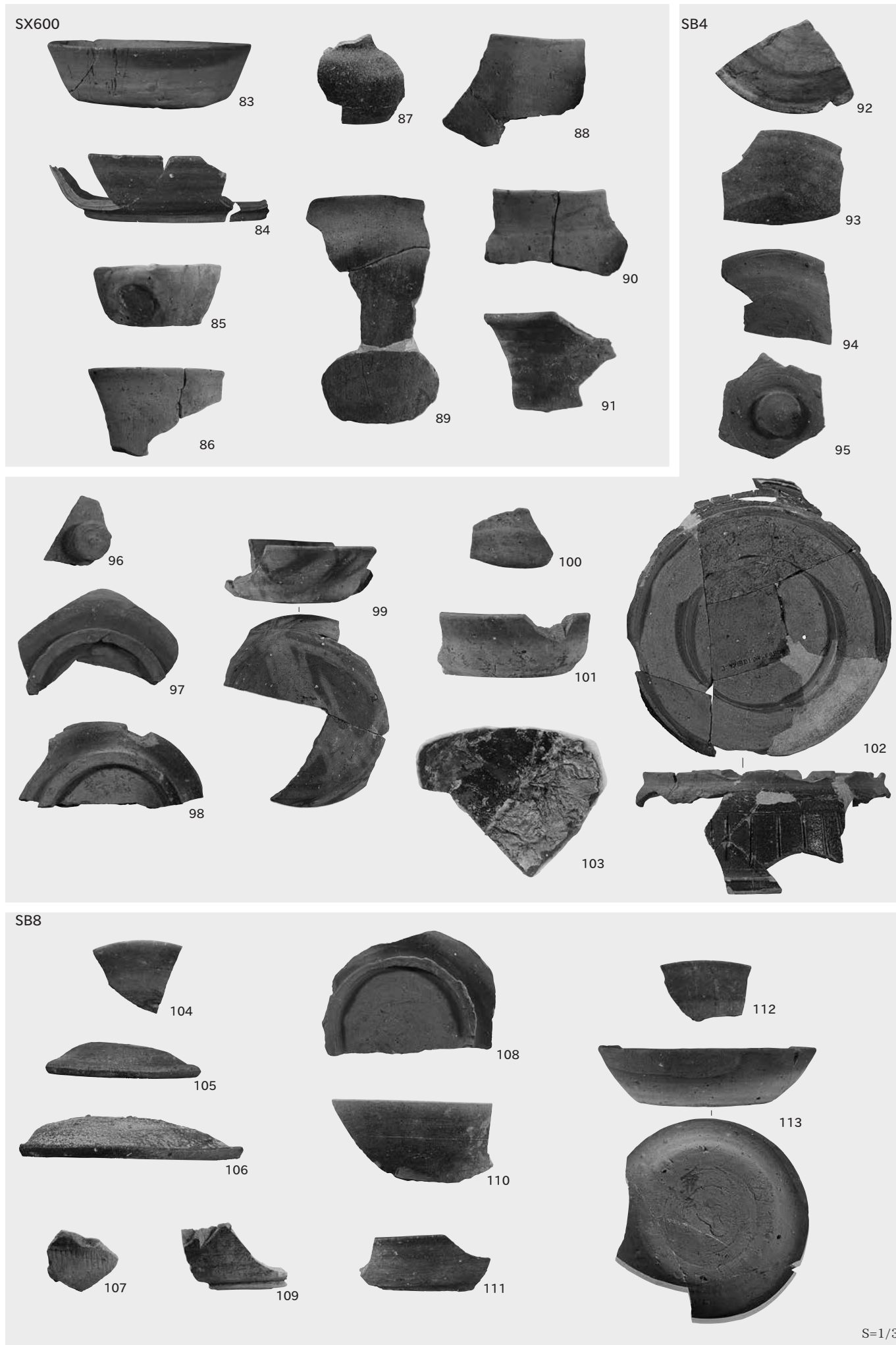
SX3

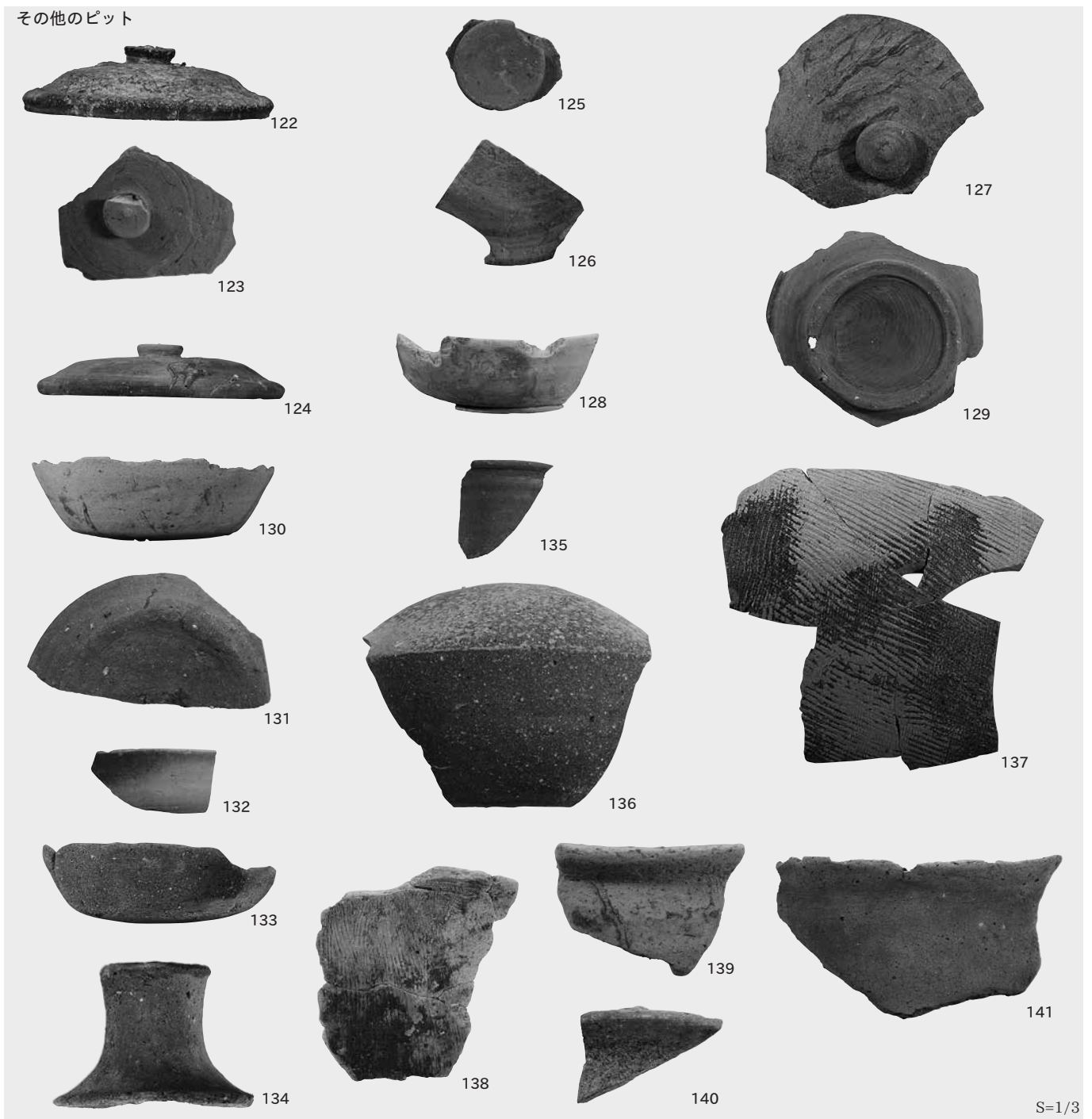
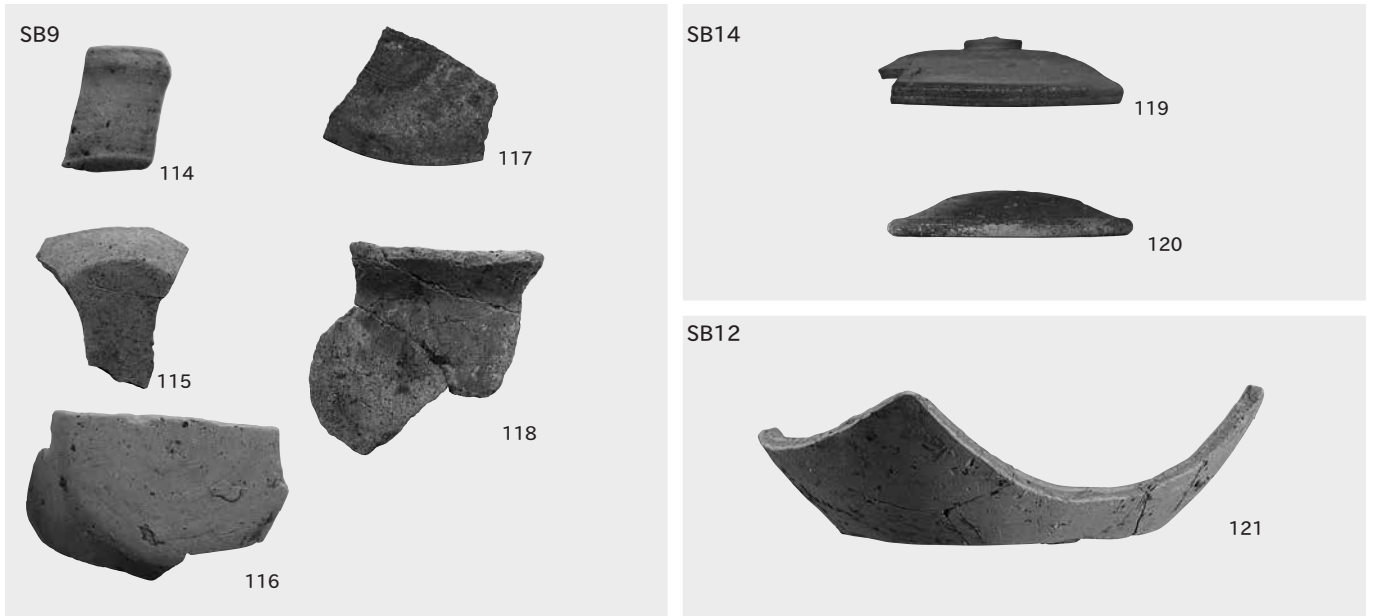


SX16

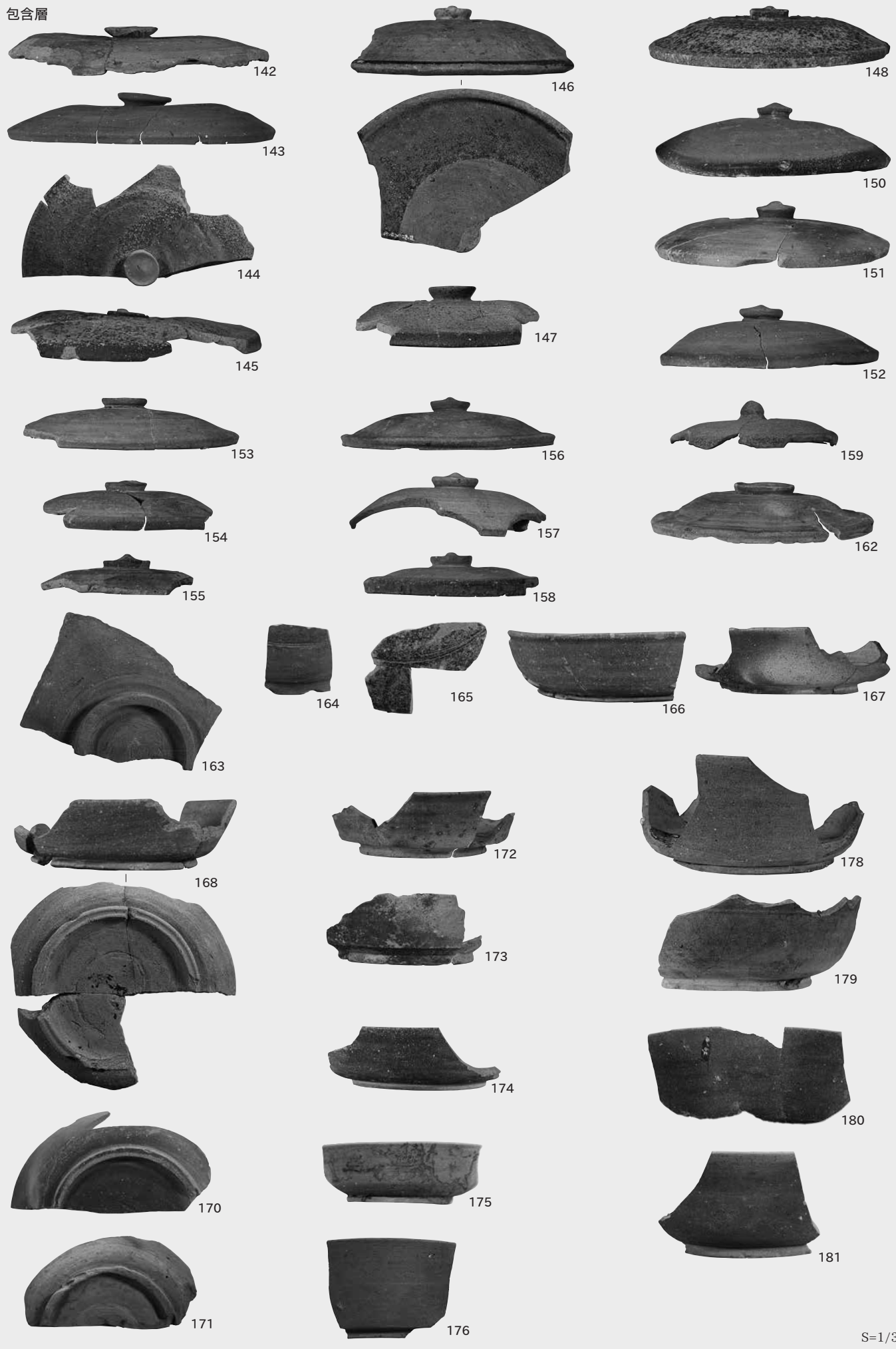


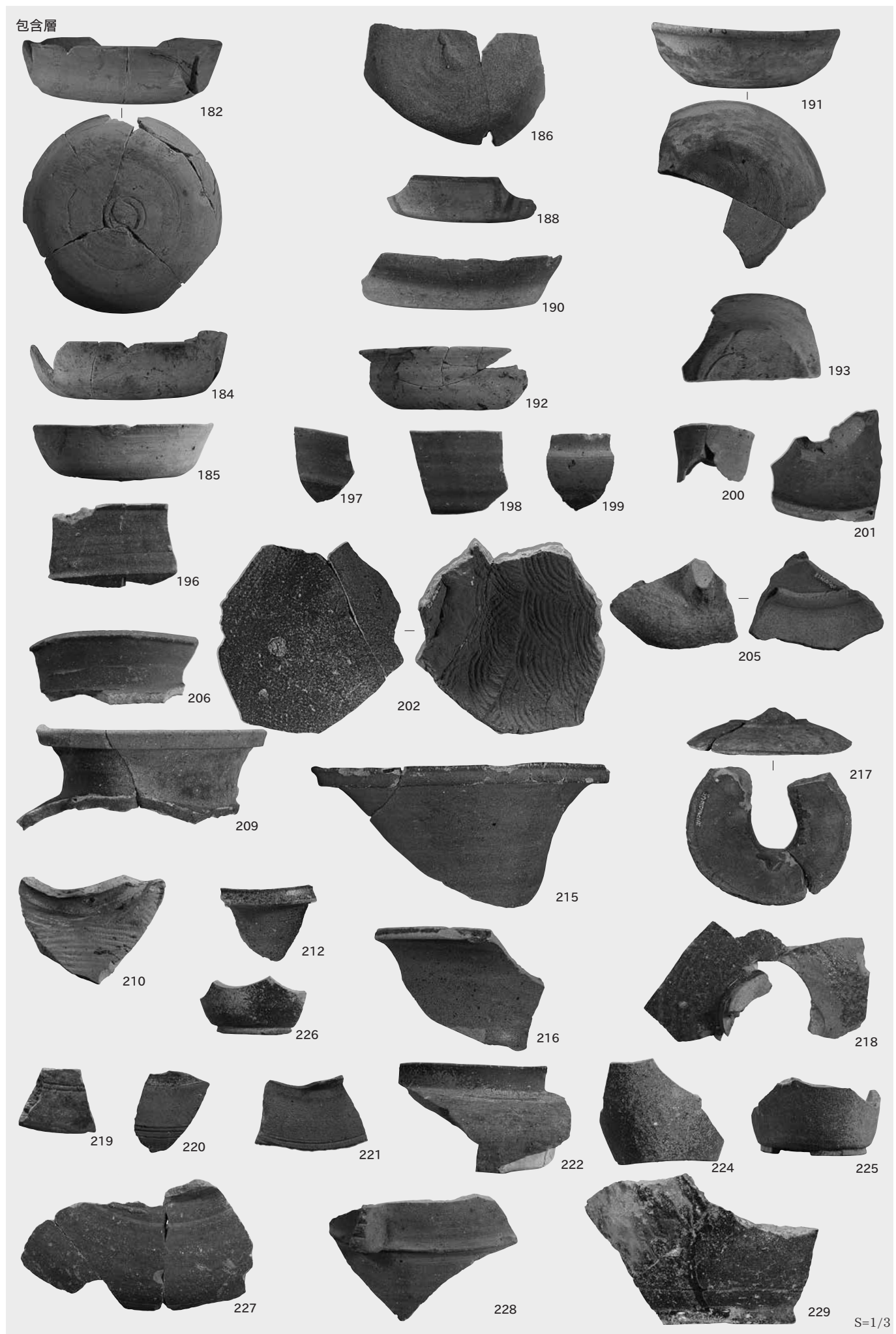




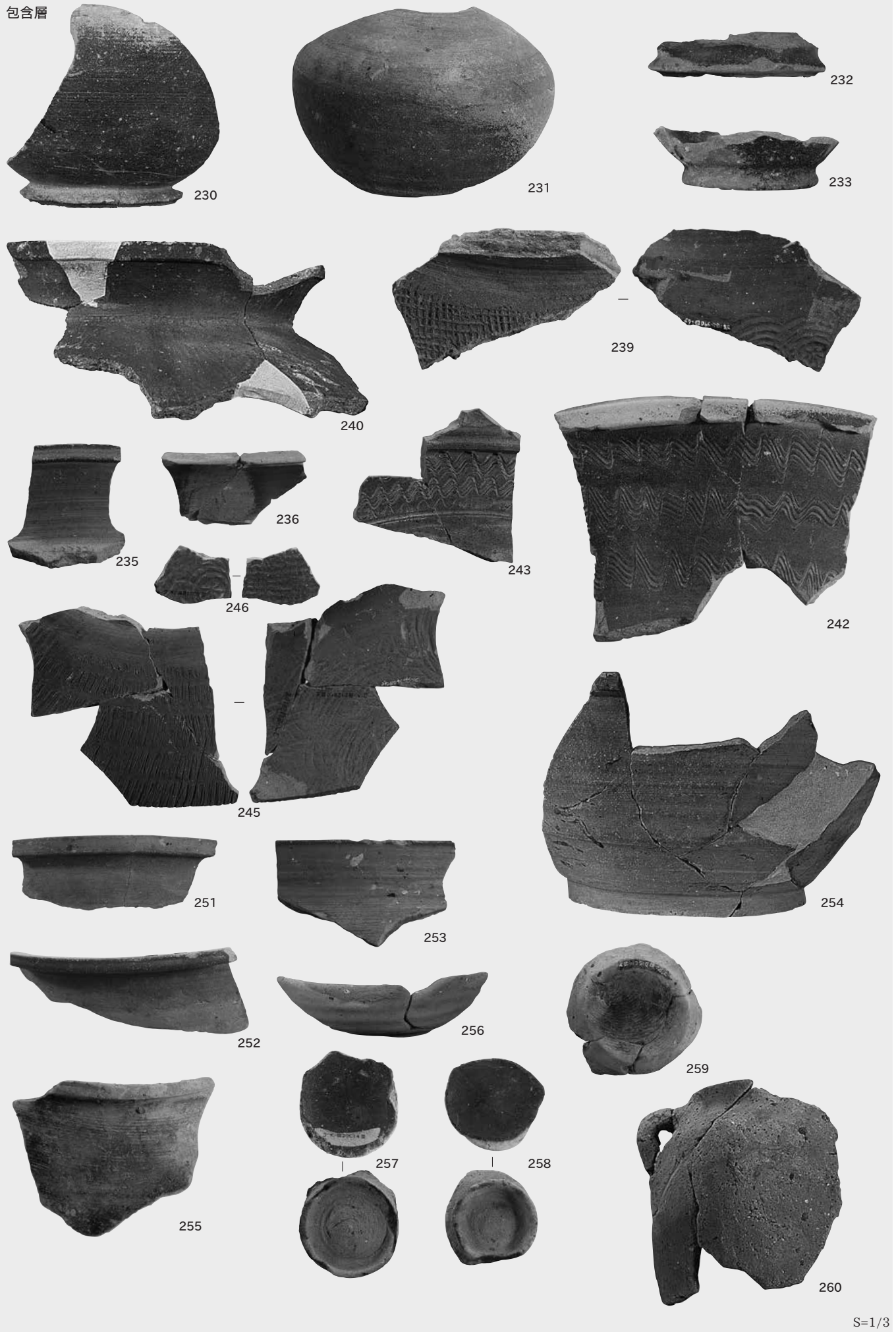


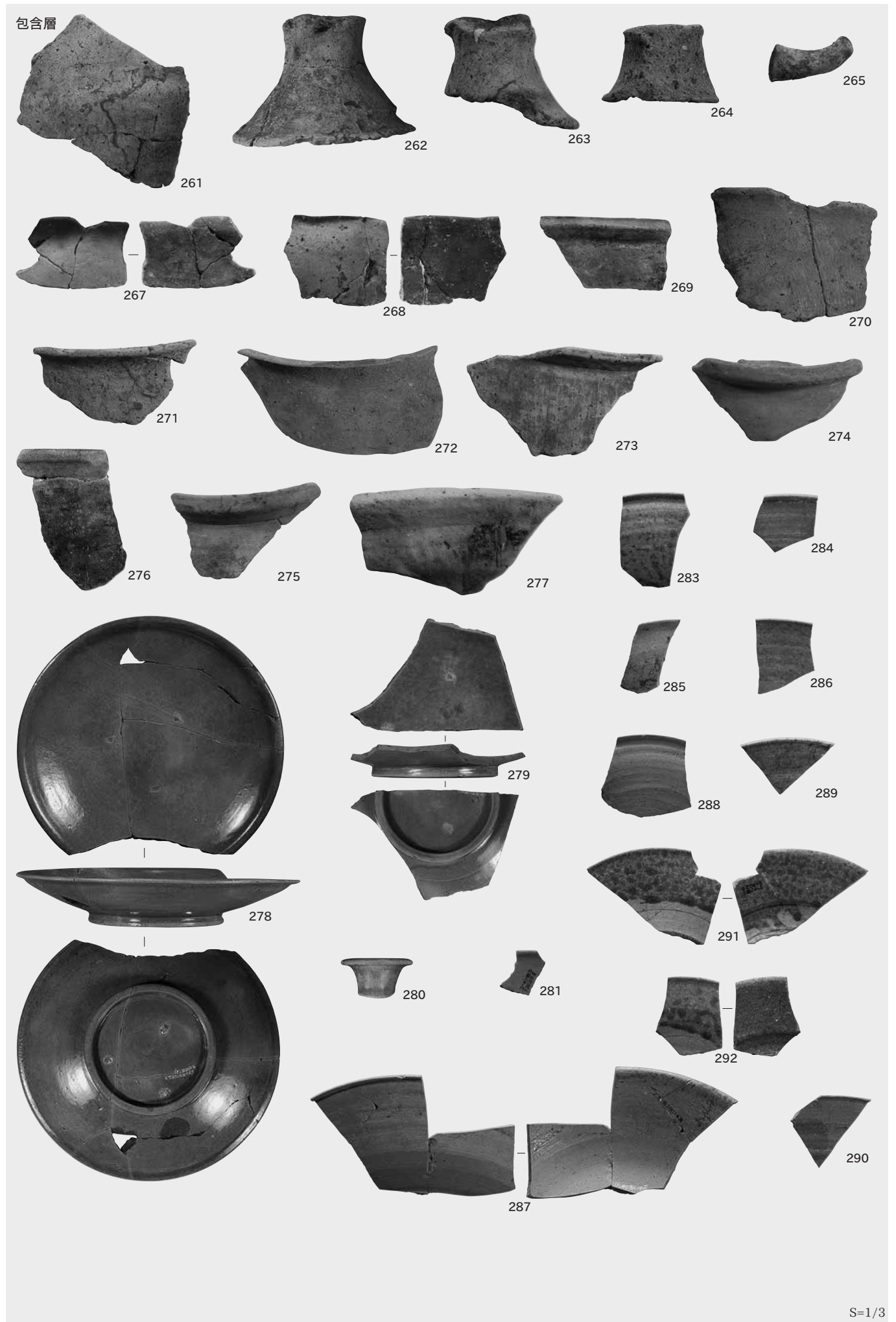
包含層



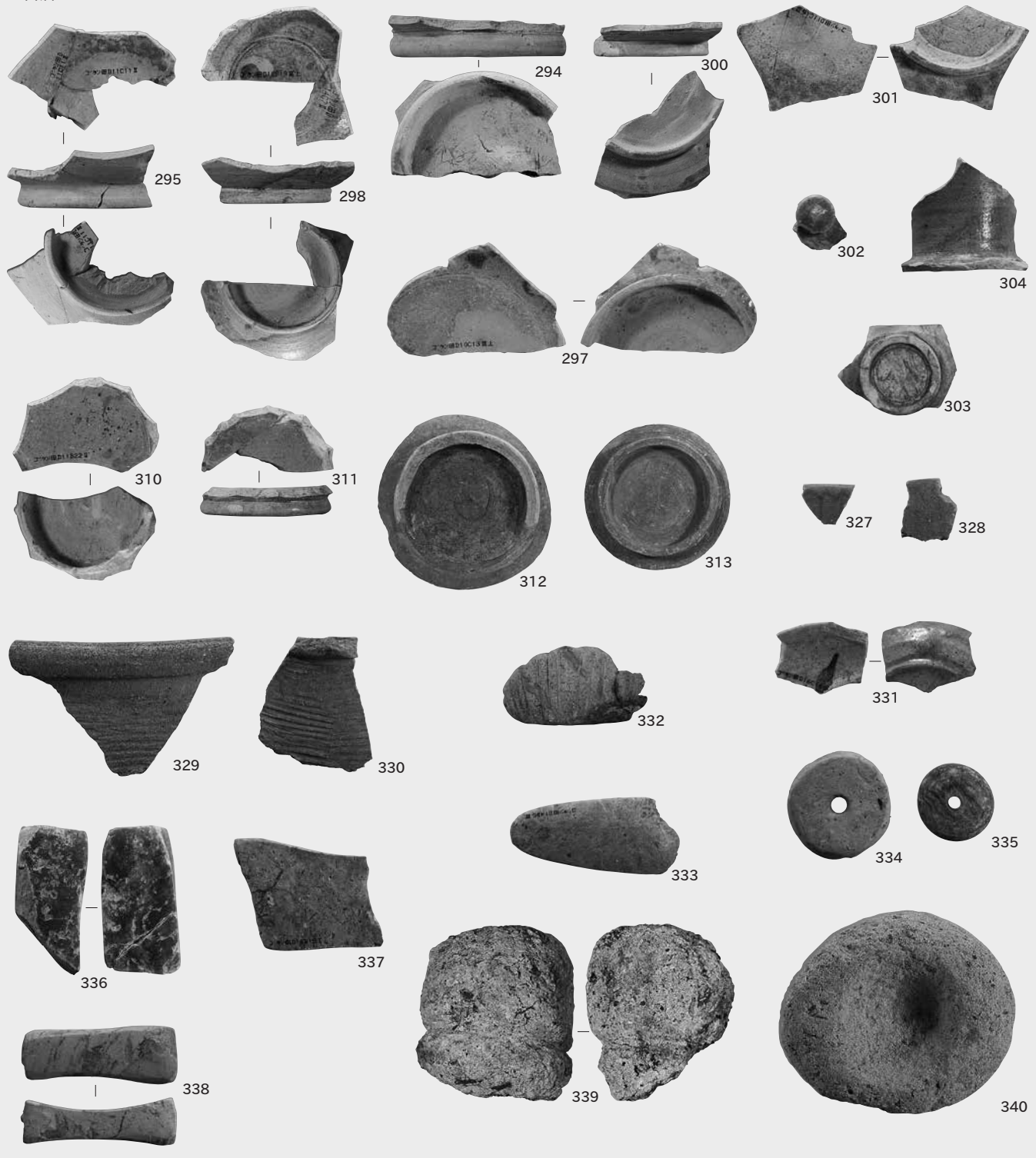


包含層



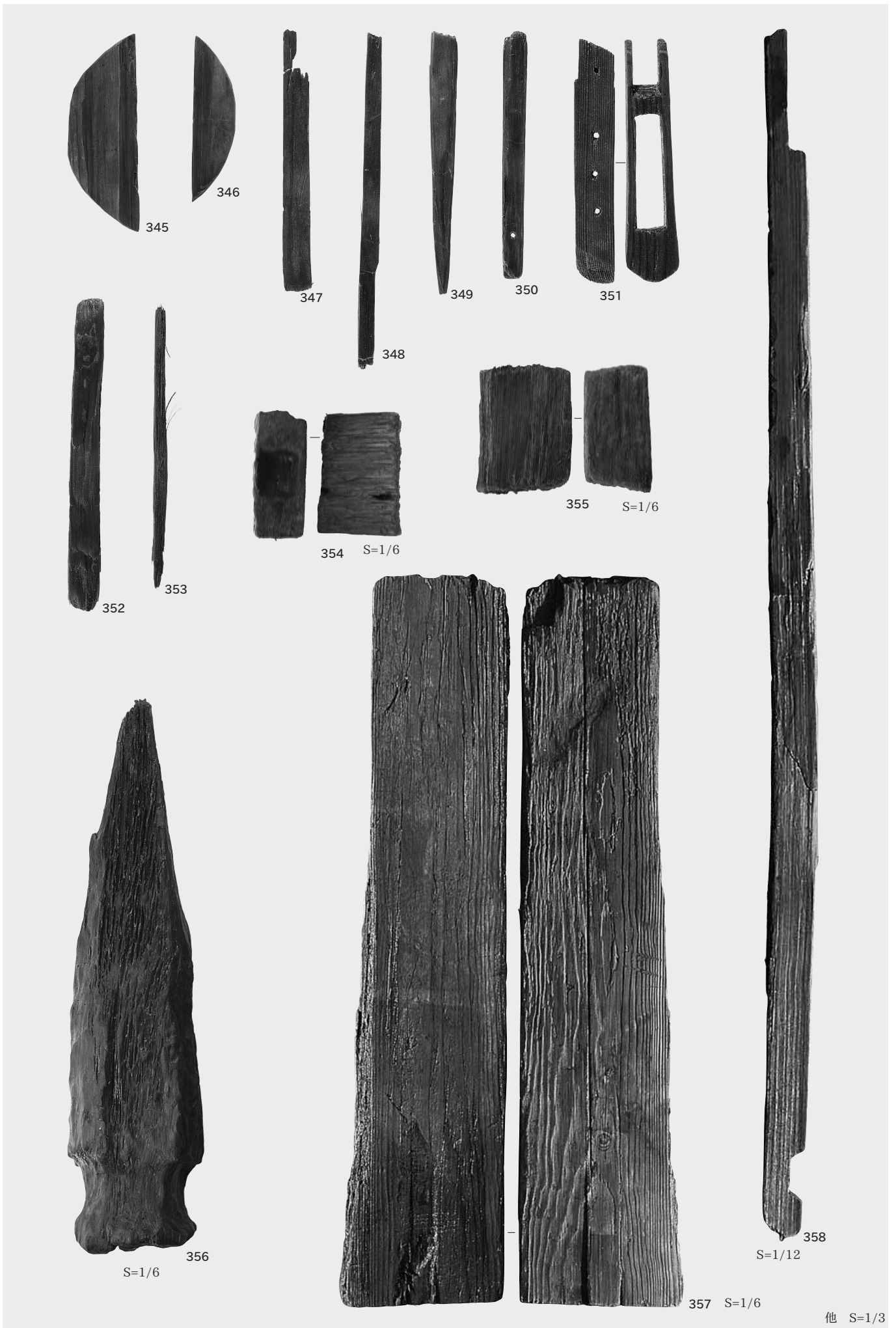


包含層



SX21







遺跡近景 北東から



遺跡近景 南東から



SK95 検出状況 西から



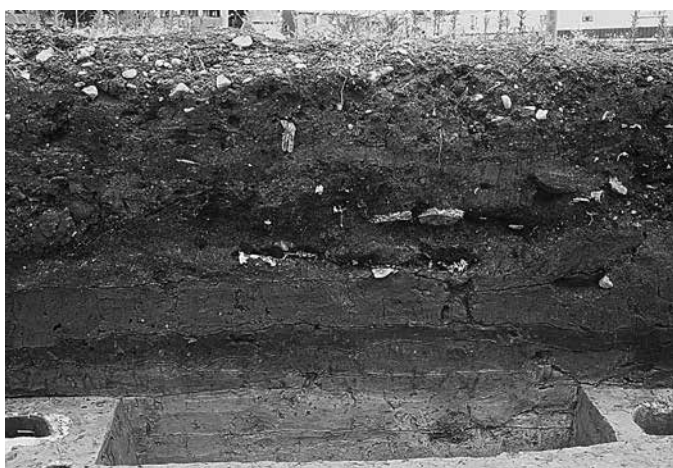
P279 · SK179 遺物出土状況 西から



遺跡近景 北西から



下段 (32~34 グリッド) 完掘 西から



基本土層 (33B3 グリッド) 西から



水路下完掘 北から



SD435A 基本土層セクションA 南から



SD435B セクションD



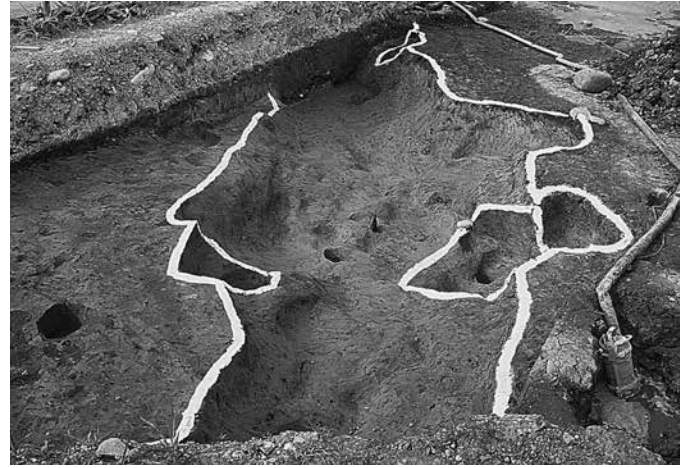
SD435A セクションB 南西から



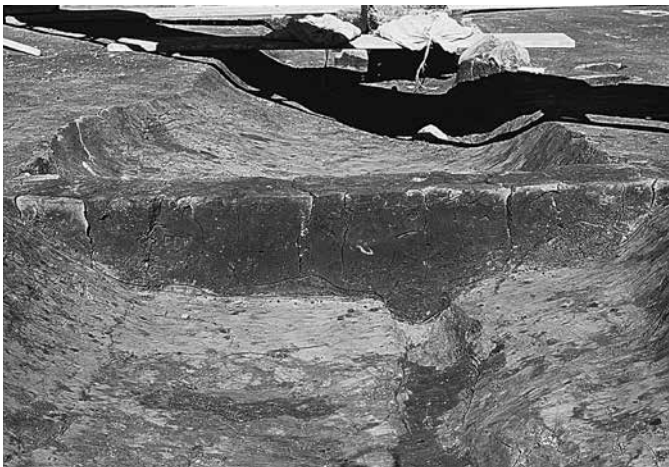
SD435B 遺物出土状況 南西から



SD435完掘 南から



SD662完掘 南から



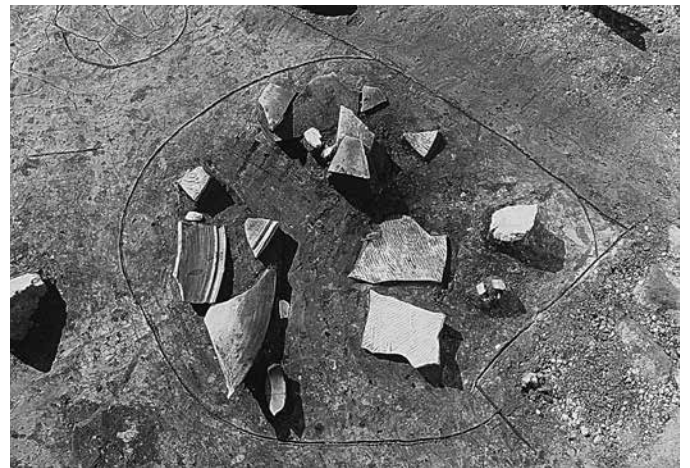
SD178セクション (32Cグリッド)



SD178遺物出土状況 東から



P2検出状況 西から



SK5検出状況 東から



SX387 検出状況 南から



集石検出状況 (32C4~9グリッド) 西から



SX211 遺物出土状況 南西から



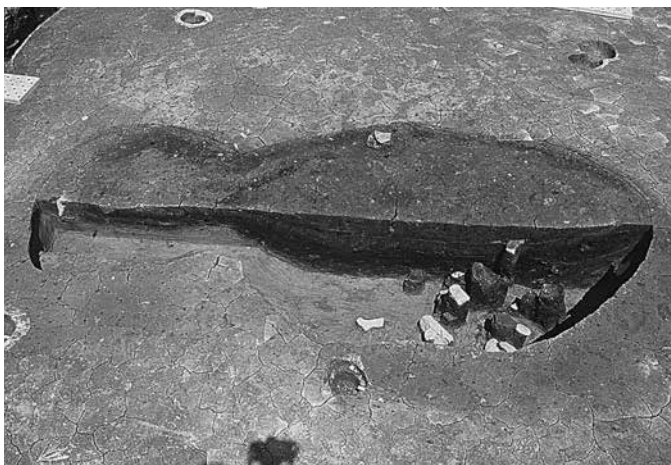
SX211 遺物出土状況 南から



SK70 セクション 東から



SK70 完掘 南から



P279・SK179 セクション (SB1) 南から



P279・SK179 完掘 南西から



SX386 遺物出土状況 北から



SX386 セクション 東から



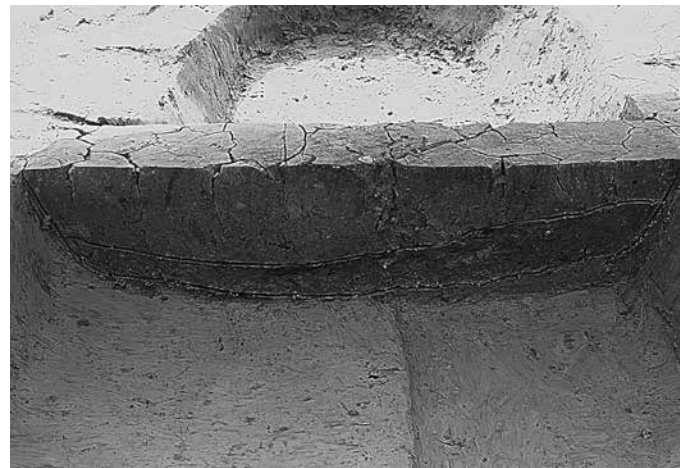
SX386 北壁セクション 北から



SX386 完掘 北から



SK503 セクションa 西から



SK503 東壁セクション 東から



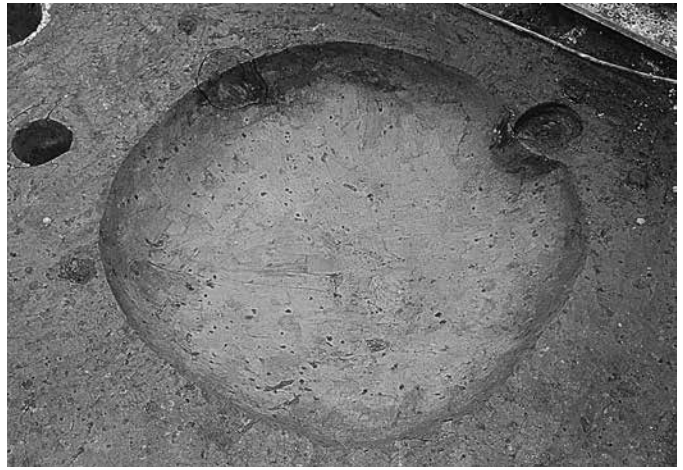
SK503 完掘 北から



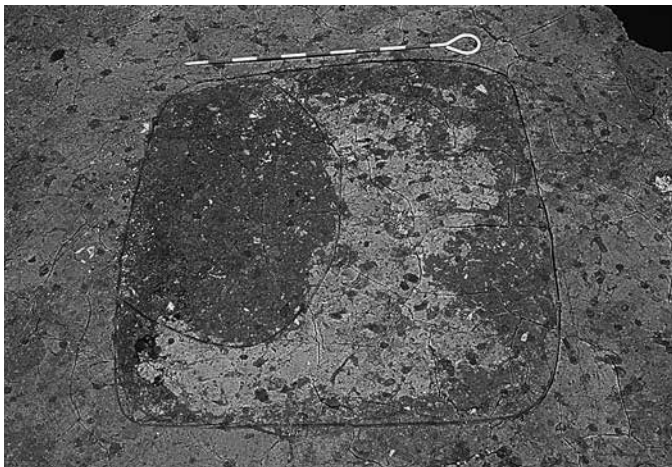
SK50 検出状況 北から



SK50 出土状況 西から



SK50 完掘 西から



P210 検出状況 (SB1) 南から



P210 セクション (SB1) 南から



P210 完掘 (SB1) 南から



P261 セクション (SB2) 南から



P261 完掘 (SB2) 南から



P8・26・256 完掘 (SB1) 南西から



SK753 セクション 西から



SX390 セクション 西から



SK95 セクション 南から



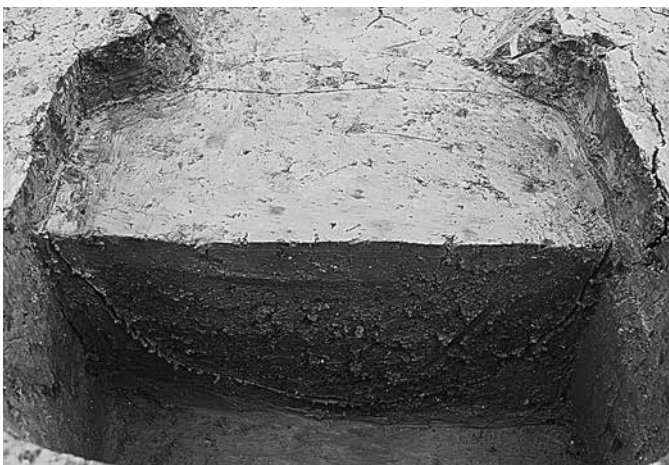
P49 セクション 南から



P77 セクション (SB2) 西から



P278 セクション (SB3) 南から



P292 セクション (SB2) 南から



P296 セクション (SB3) 南から



P319 柱根検出状況 西から



P380 セクション (SB5) 北から



P564 柱根検出状況 北から



SX444 完掘・遺物出土状況 東から



遺物出土状況 (32C 7 グリッド) 南東から



遺物出土状況 (SD435・34D 7 グリッド) 北から

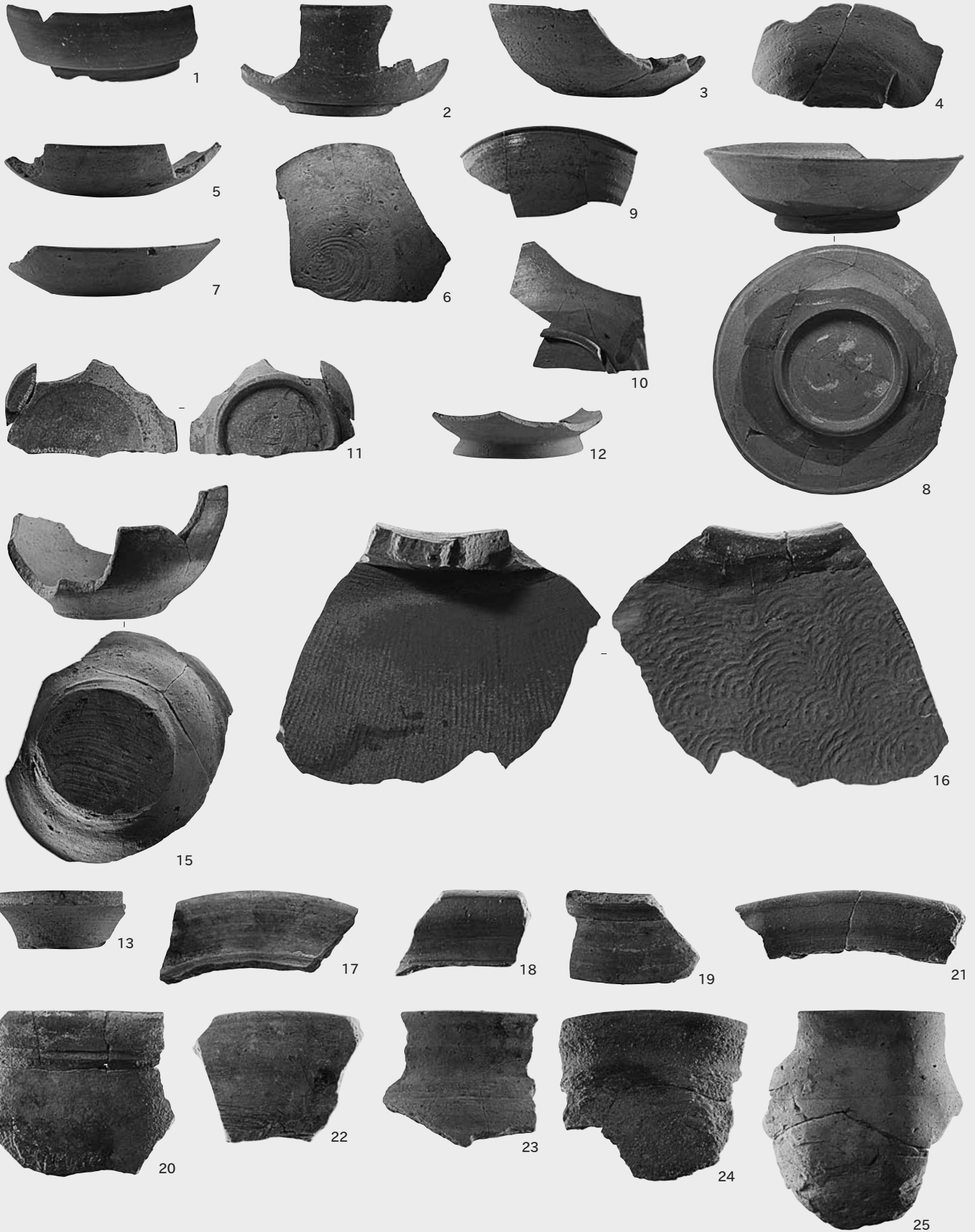


作業風景



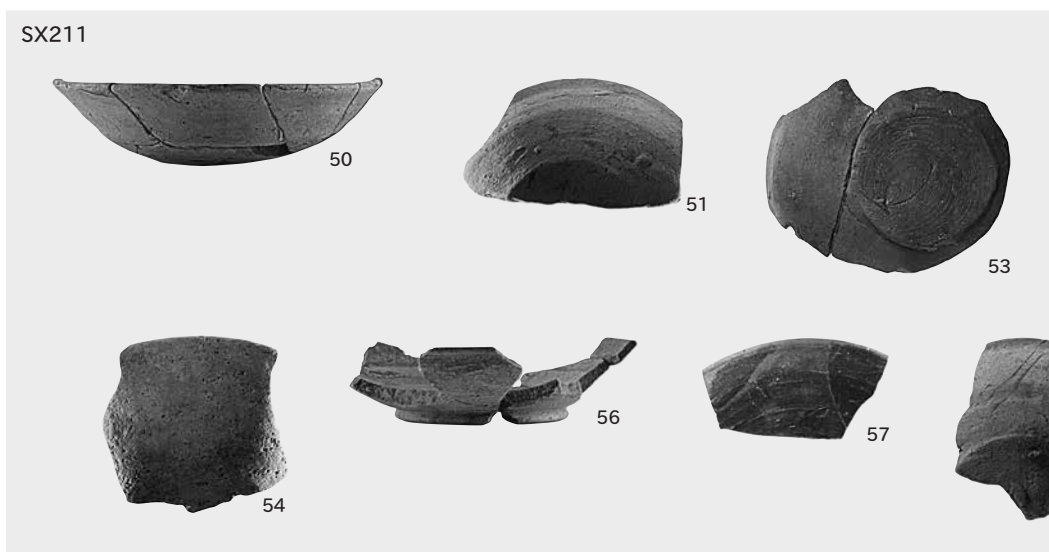
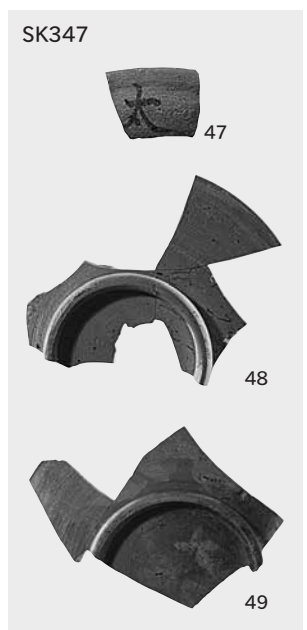
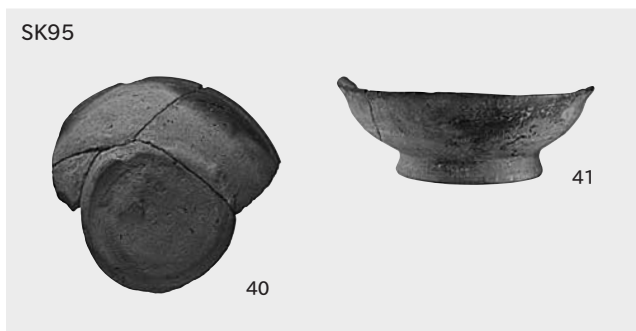
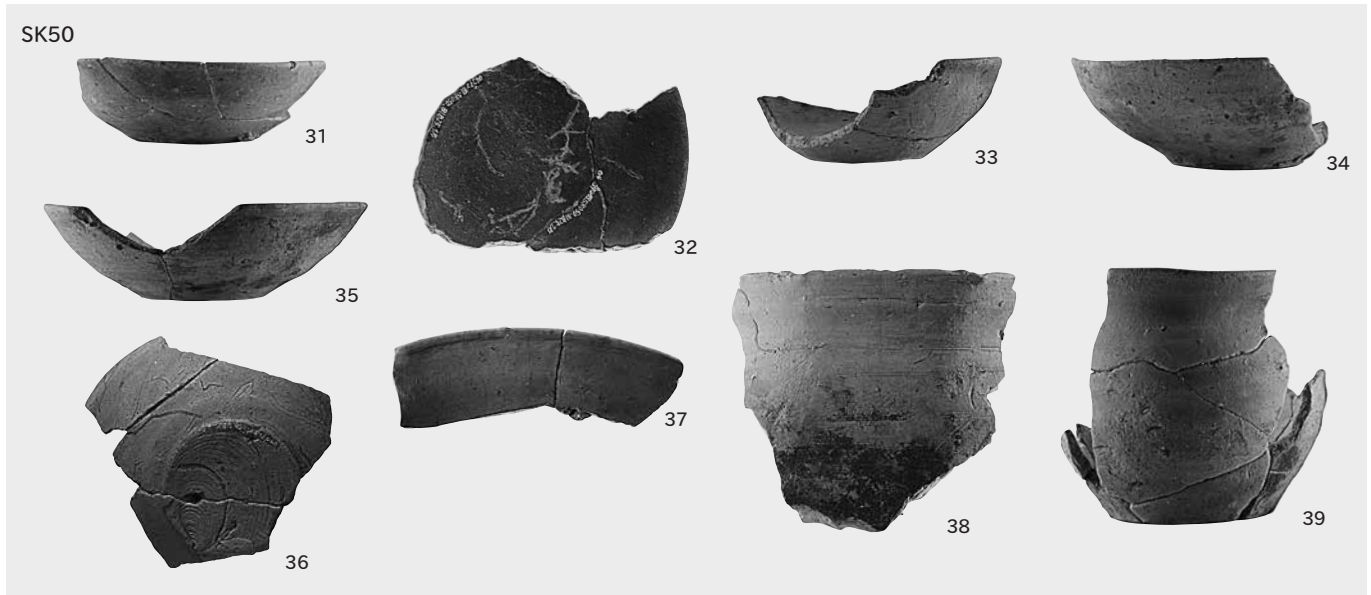
町道工事立会い 東から

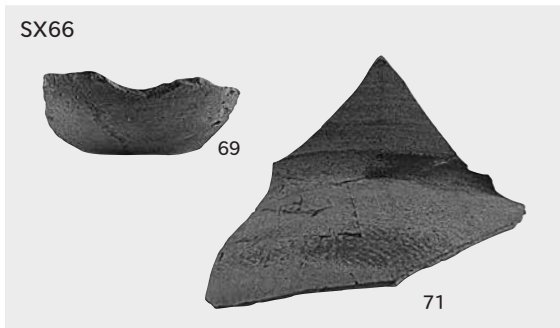
SK179

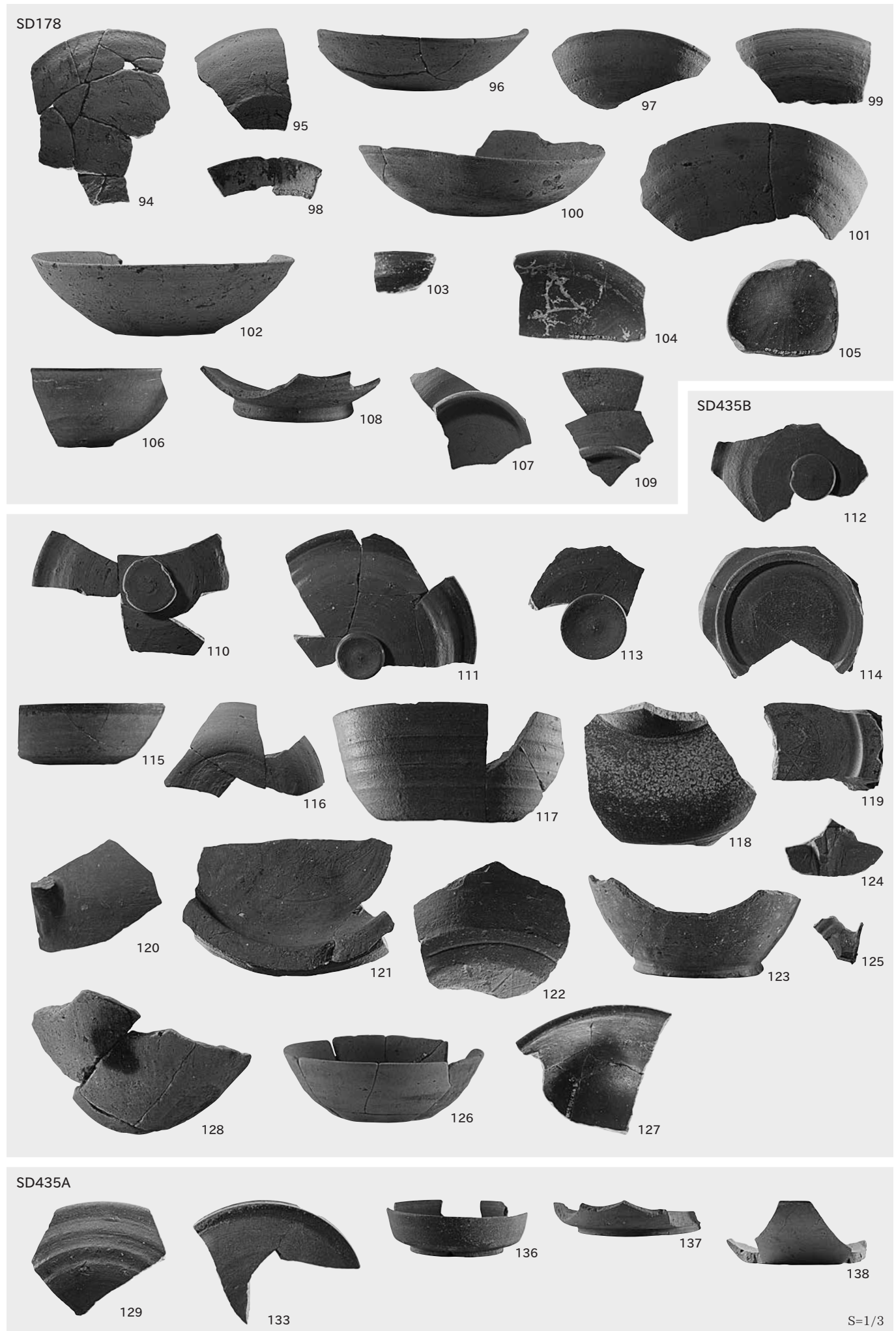


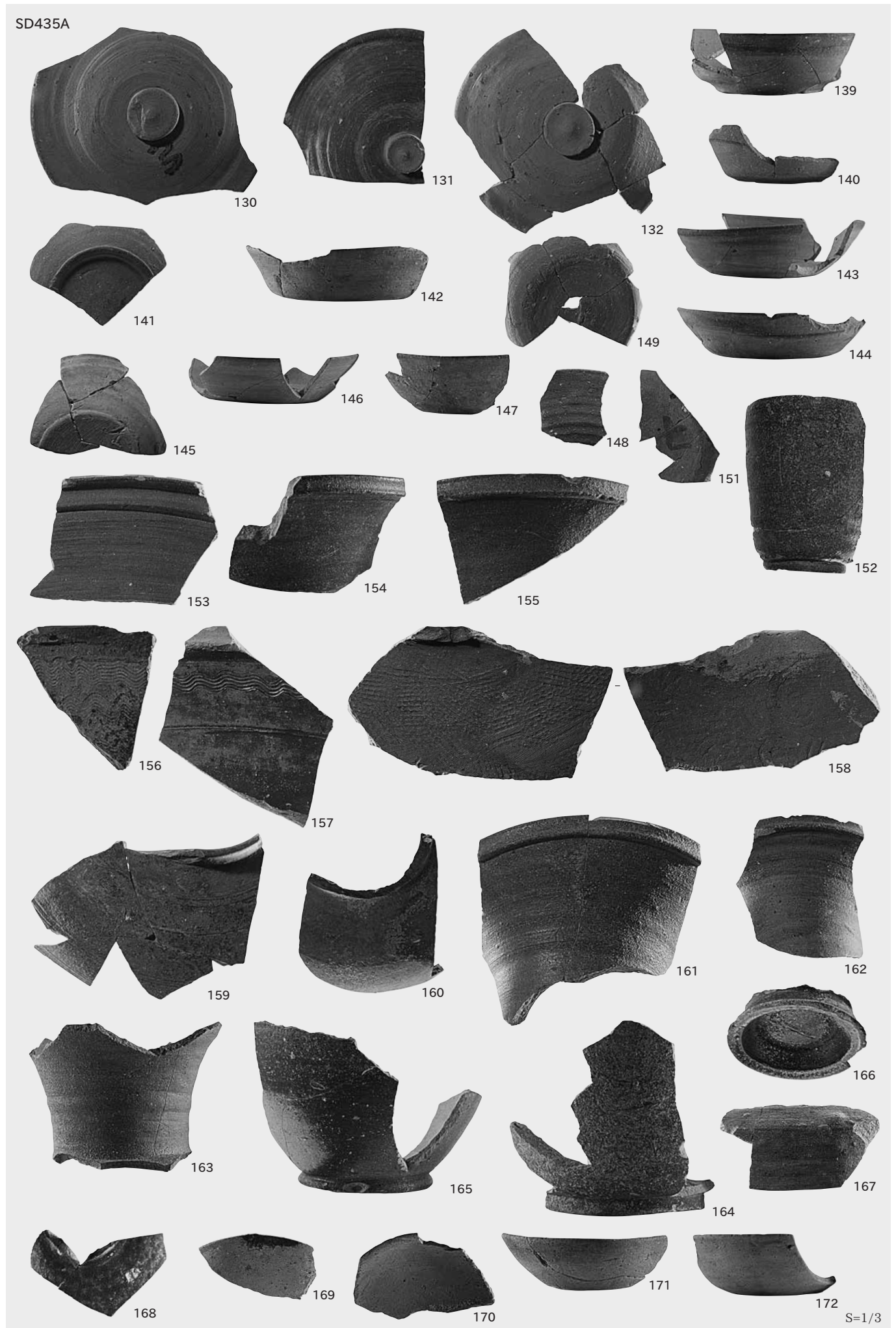
SK50



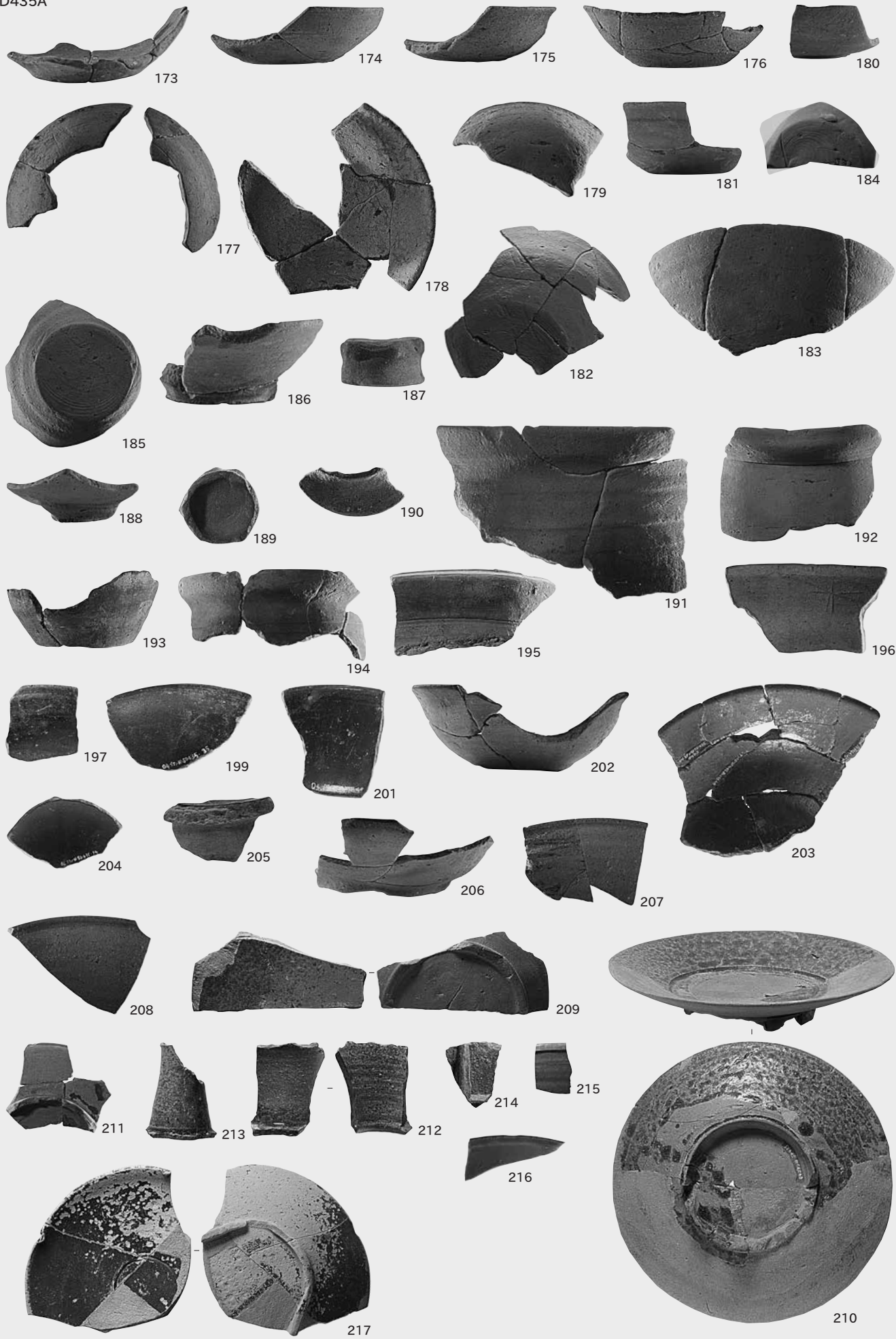


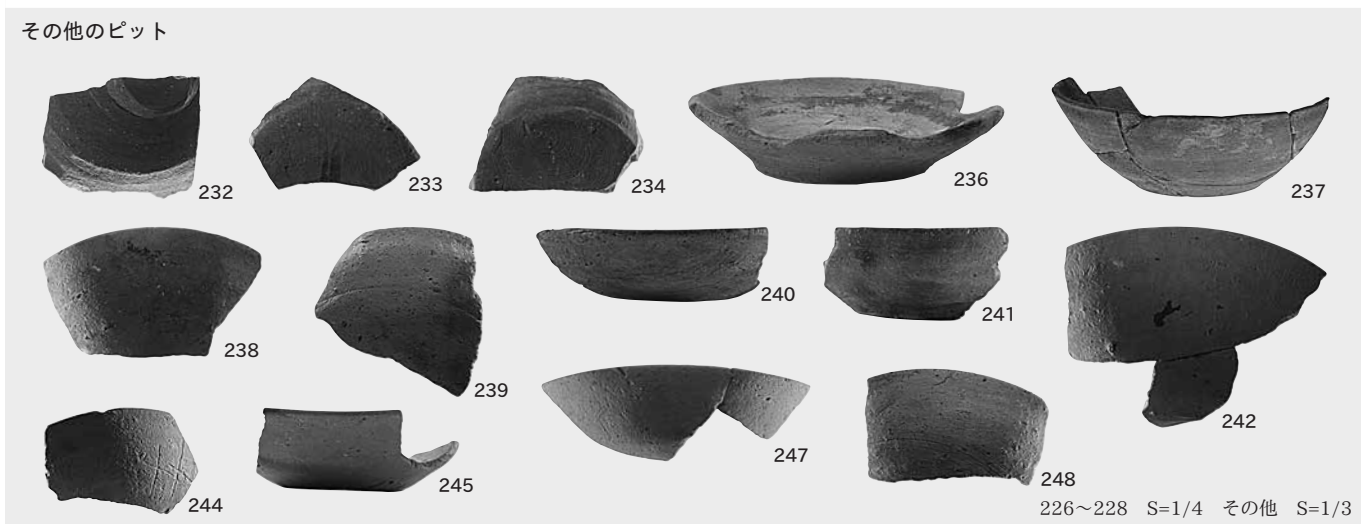
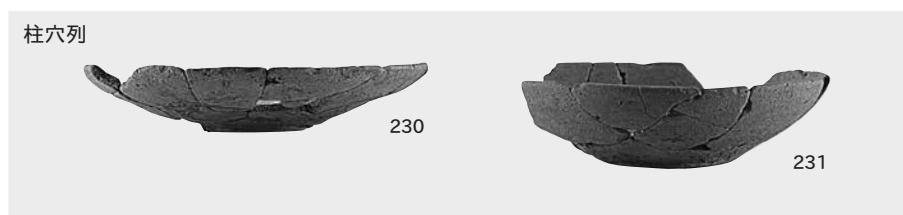
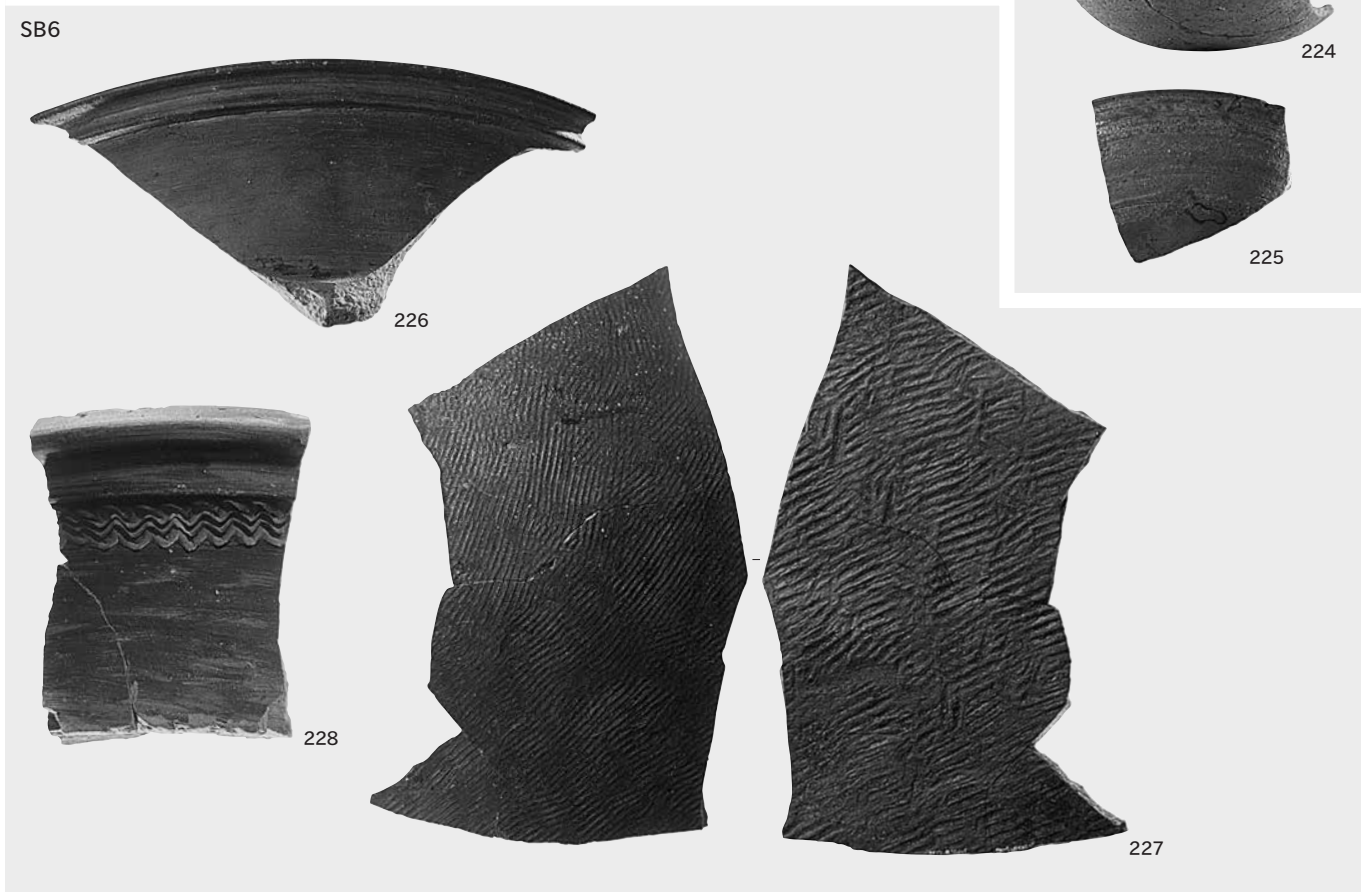
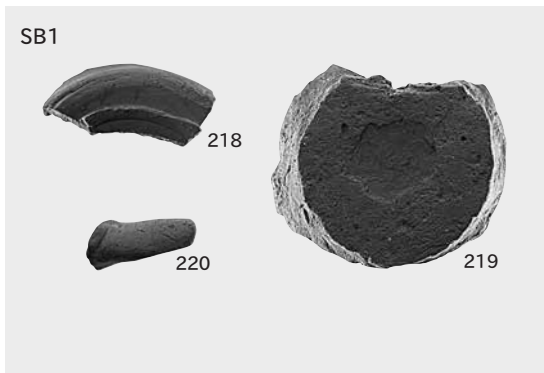




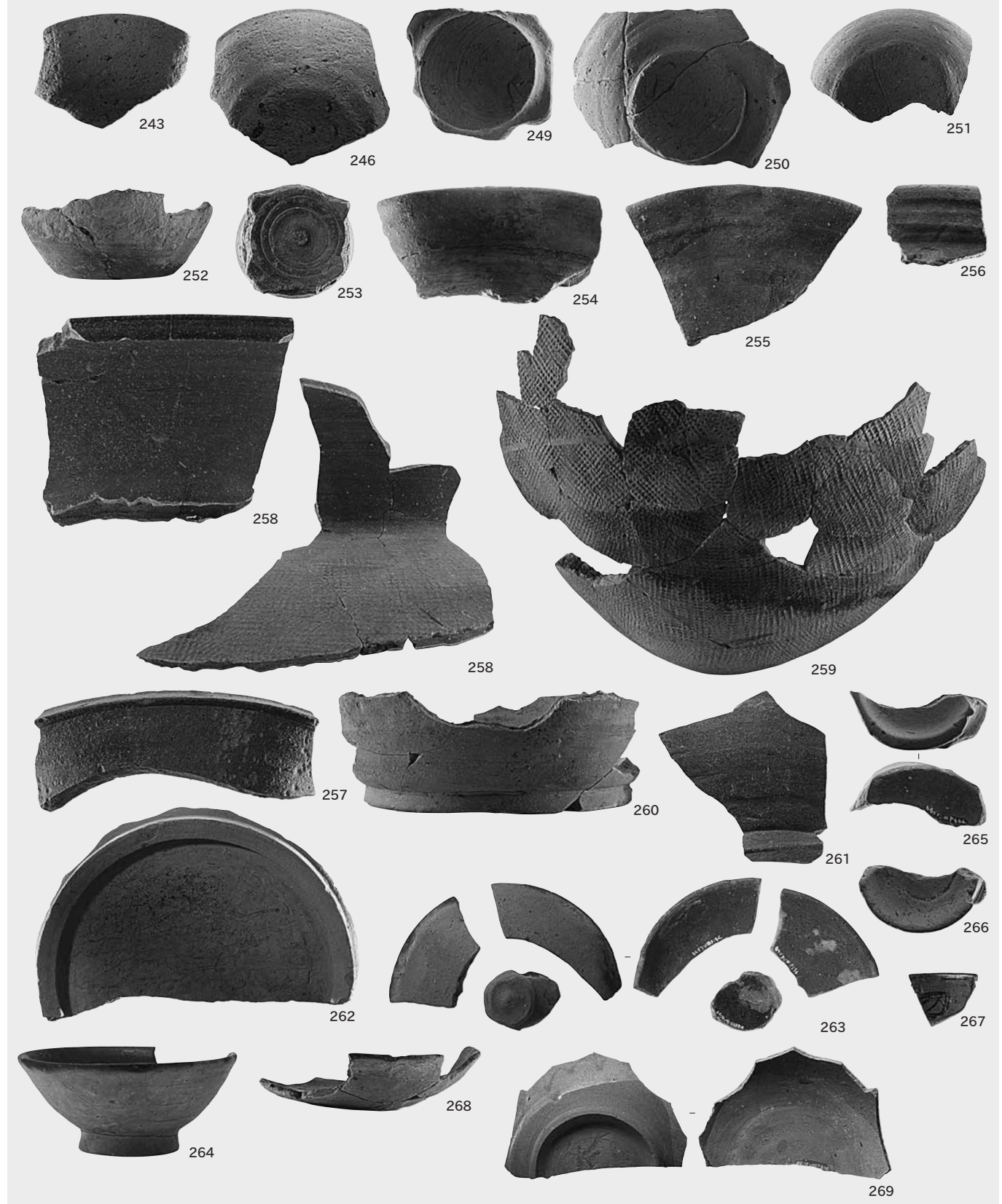


SD435A





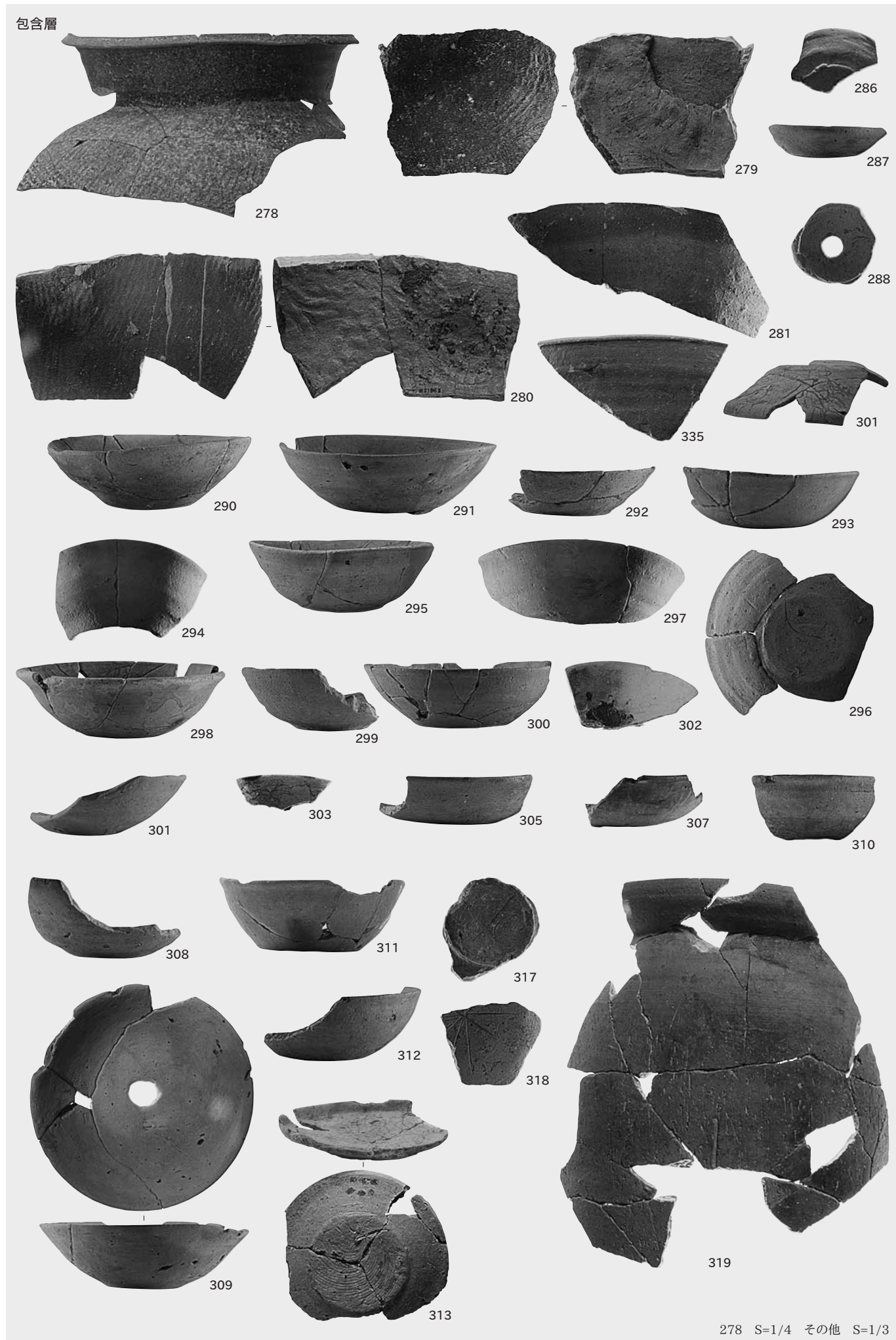
その他のピット



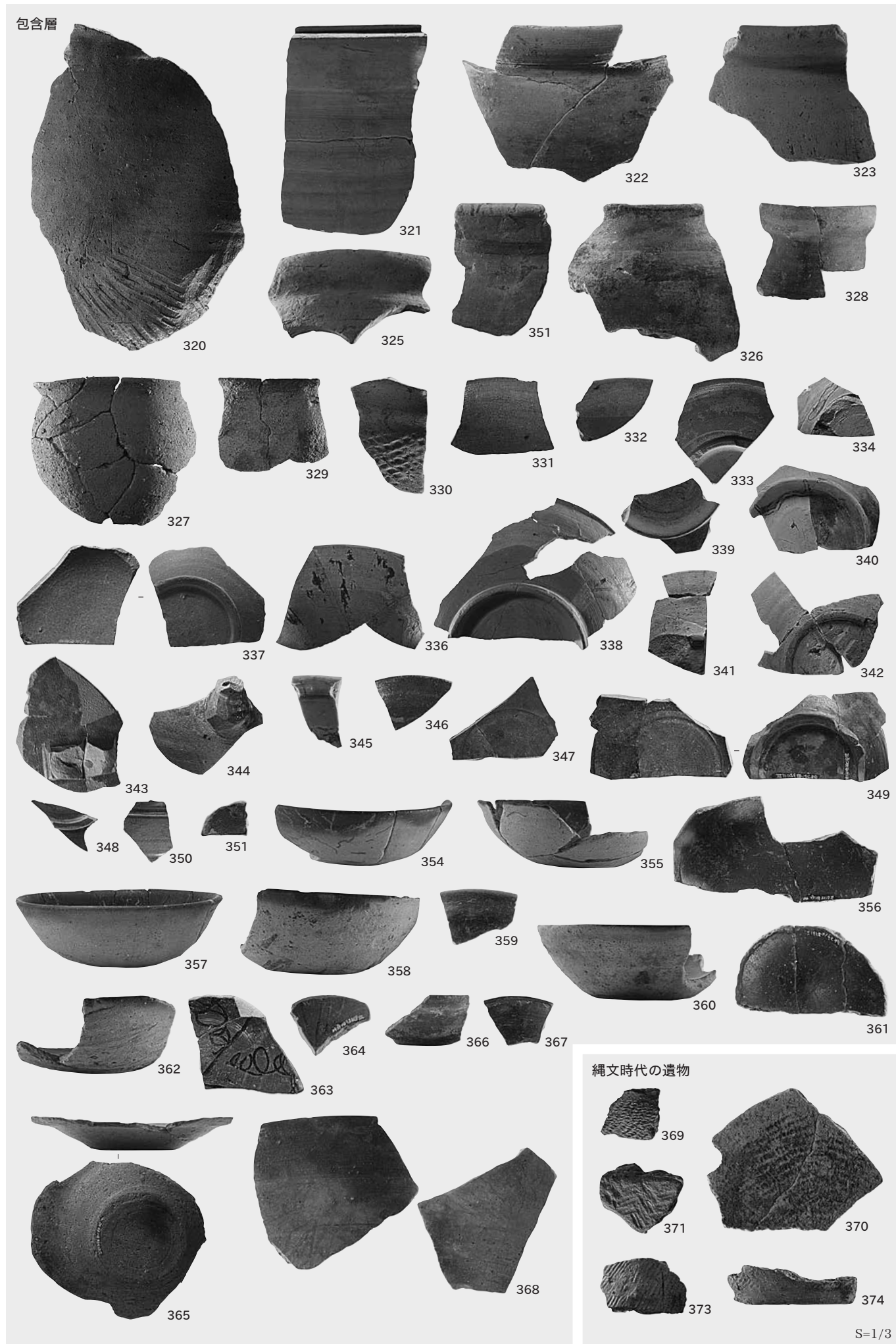
包含層



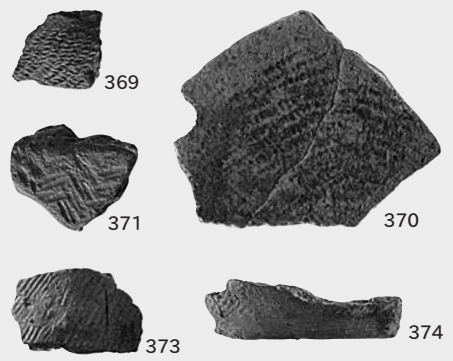
257~259 S=1/4 その他 S=1/3



包含層

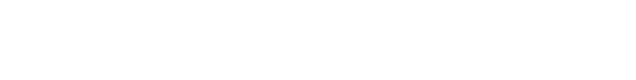
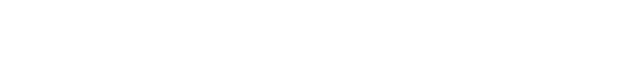
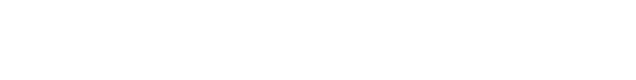
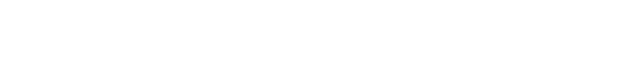
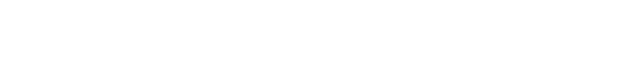
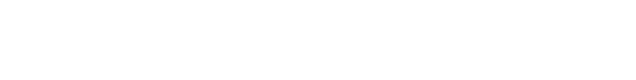
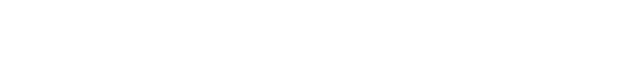
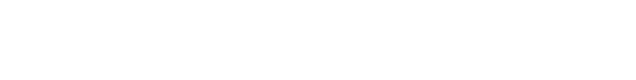
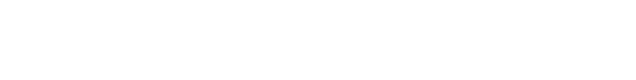
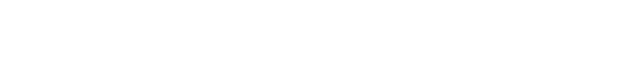
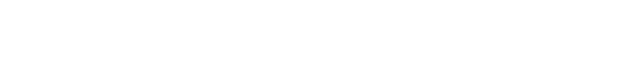
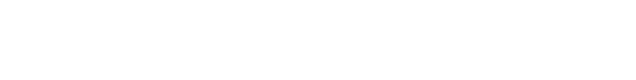
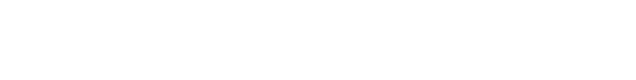
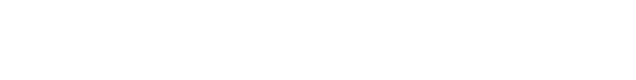
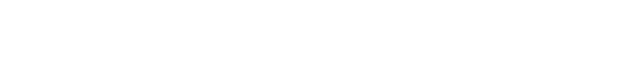
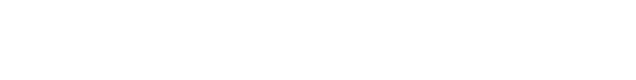
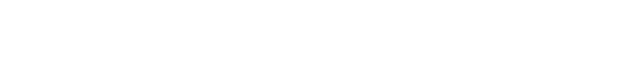
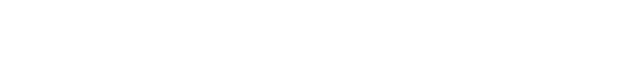
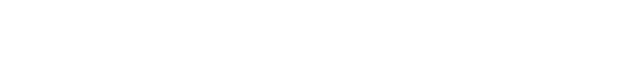
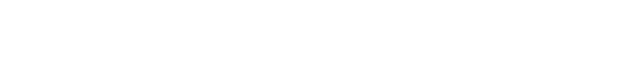
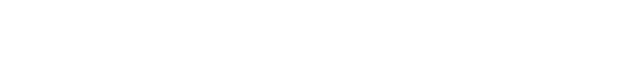
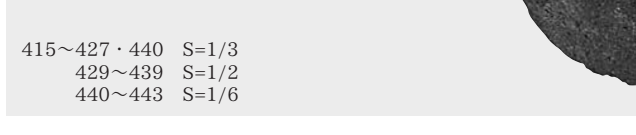
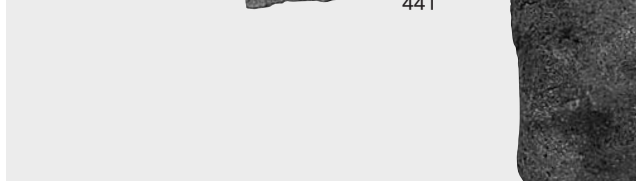
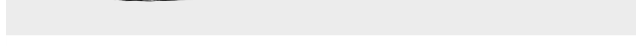
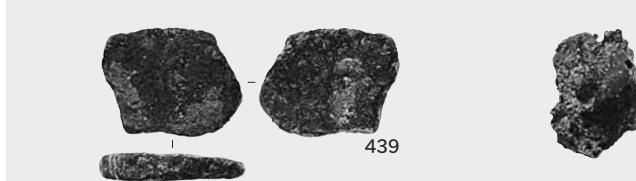
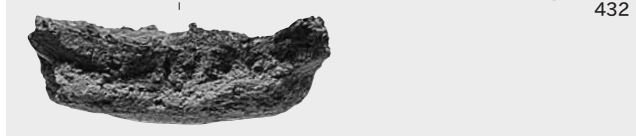
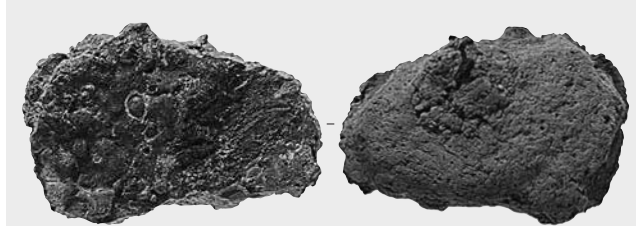
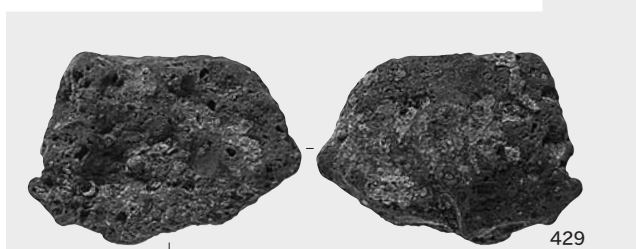
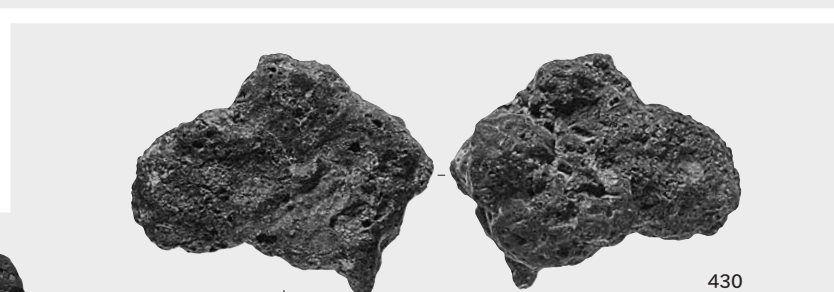
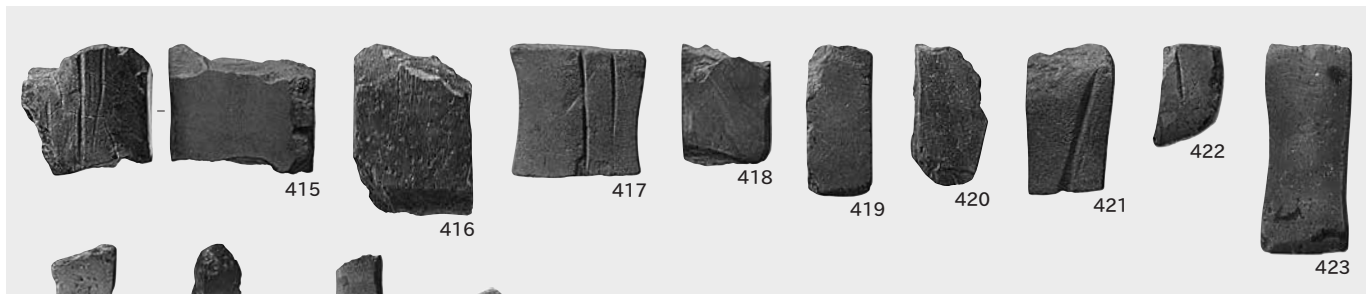


縄文時代の遺物



中世の遺物





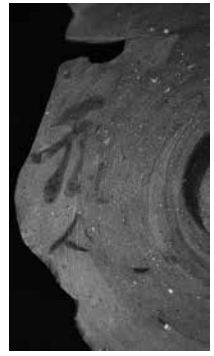
H15 五反田遺跡出土墨書土器



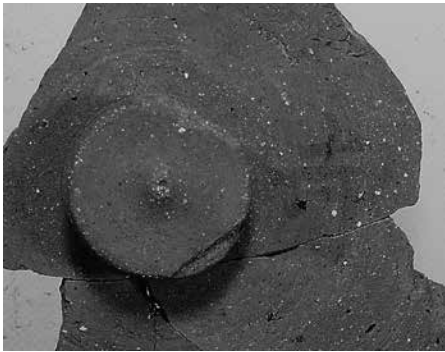
H15 44



H15 113



H15 315



H15 316「寺」

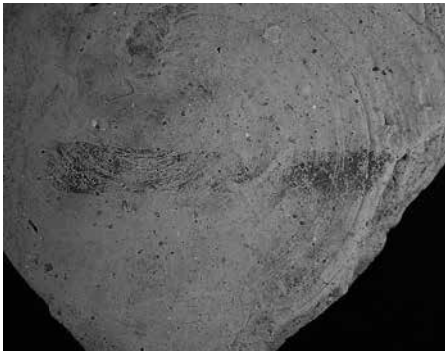


H15 323



H15 324

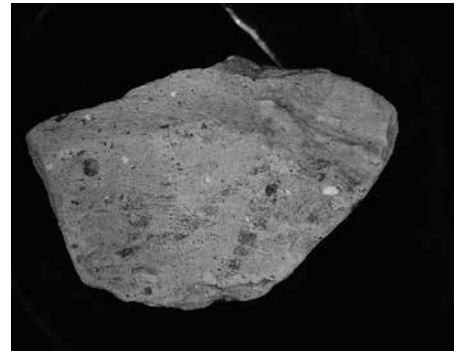
H16 五反田遺跡出土墨書土器・刻文のある土器



H16 45



H16 47



H16 70



H16 76



H16 99



H16 129



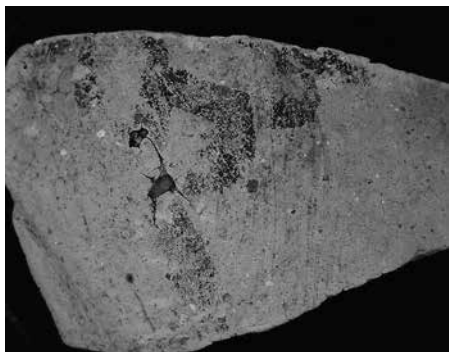
H16 130



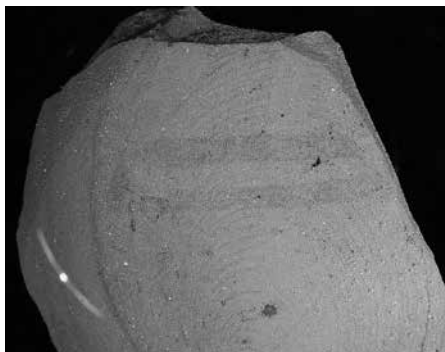
H16 151



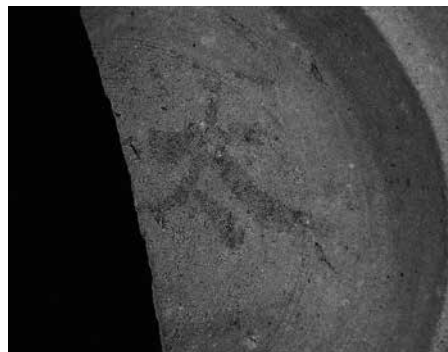
H16 198



H16 200



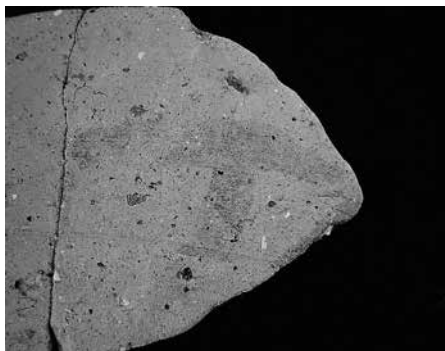
H16 234



H16 269



H16 274



H16 304



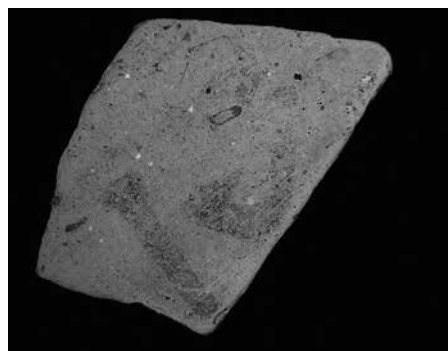
H16 313



H16 315



H16 352



H16 353



H16 刻文 96



H16 刻文 119



H16 刻文 318

報告書抄録

ふりがな	だいのうえいせき・がけのうえいせき・ごたんだいせき							
書名	台の上遺跡・峪ノ上遺跡・五反田遺跡							
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第138集							
編著者名	渡邊裕之・辻範朗・相羽重徳							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市金津93番地1 TEL 0250-25-3981							
発行年月日	西暦2005(平成17)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
台の上遺跡	新潟県上越市木島字峪ノ上52ほか	15-222	206	37° 04' 00"	138° 52' 57"	0040415～ 20050606	980 m ²	北陸新幹線建設 工事
峪ノ上遺跡	新潟県上越市木島字峪ノ上107ほか	15-222	284	37° 03' 57"	138° 15' 57"	20040418～ 20050701	1,160 m ²	北陸新幹線建設 工事
五反田遺跡	新潟県上越市板倉区米増字横田226ほか	15-222	70	37° 02' 11"	138° 17' 43"	0040507～ 20051111 20050413～ 20050806	7,710 m ²	北陸新幹線建設 工事
所収遺跡	種別	時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
台の上遺跡	集落	古代(8世紀後半) 中世(11～14世紀)		竪穴住居1 掘立柱建物3 井戸1 土坑1 溝状遺構4 ピット36		土師器 須恵器 白磁碗・皿 龍泉窯系青磁碗 京都系土師皿		
峪ノ上遺跡	集落	弥生中期 古墳後期(7世紀前半) 古代(9世紀前半) 中世(14～15世紀)		竪穴住居1 掘立柱建物1 溝4 ピット約80		箱清水式土器 土師器 須恵器 珠洲焼		竪穴住居から、古墳後期の一括資料が出土 1×7間超の身舎に廂が付く古代の大型掘立柱建物を検出
五反田遺跡 (平成15年調査)	集落	縄文中期前葉 古代(8～10世紀) 中世(14～15世紀) 近世(16世紀末)		竪穴住居2 掘立柱建物19 竪穴状遺構1 土師器焼成遺構1 炭土坑8 ピット約400		土師器 須恵器 灰釉陶器 緑釉陶器 白磁I類 墨書土器		整然と配置された古代の掘立柱建物群を検出 灰釉陶器78片、緑釉陶器42個体が出土 「兼公」「万」「西」「稲人」「寺」「内」などの墨書土器 県内初例となる白磁碗I類が出土
五反田遺跡 (平成16年調査)	集落	縄文後期 古代(9～10世紀) 中世(11～13世紀) 近世(17世紀)		掘立柱建物6 柱穴列1 溝3 川跡2 土坑15 ピット約600		土師器 須恵器 灰釉陶器 緑釉陶器 墨書土器		灰釉陶器805片、緑釉陶器3個体が出土 墨線1～2本だけの墨書土器が多く出土

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第138集
北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅲ
台の上遺跡・峪ノ上遺跡・五反田遺跡

平成17年3月30日印刷
平成17年3月31日発行

編集・発行 新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市新光町4番地1
電話 025(285)5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986

URL <http://www.maibun.net>

印刷・製本 株式会社 第一印刷所

〒950-8724 新潟市和合町2丁目4番18号
電話 025(285)7161

お詫び

以前お送りいたしました『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第138集 台の上遺跡・
峪ノ上遺跡・五反田遺跡』に落丁がありました。

巻末峪ノ上遺跡遺物観察表 NO50～NO89 が抜けておりましたので別紙観察表を
P120の後にご挿入ください。 今後ともよろしく願いいたします。

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第138集『台の上遺跡 峪ノ上遺跡 五反田遺跡』 正誤表追加
2018年11月追加

頁	位置	誤	正
抄録	台の上遺跡 北緯	37度04分00秒	37度04分02秒
抄録	台の上遺跡 東経	138度52分57秒	138度15分52秒

報告 番号	種別	器形	大グリット	小グリット	遺構	層位	口径	器高	底径	色調	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
50	土師器	高杯			SI1		19.80	15.30	13.10	浅黄橙	石・長・角	口縁部：ヨコナデ 杯部外面：ヘラミガキ 脚部：ヘラケズリ ヘラミガキ 裾部：横ナデ 杯部内面：ヘラミガキ 脚部内面：ヘラケズリ		
51	土師器	高杯 (裾部)			SI1		-	-	(11.00)	にぶい赤褐	石英(多い)	内外面ヘラミガキ		
52	土師器	高杯 (脚部)			SI1		-	-	10.20	外：褐、内：黒色	石・白	裾部：ヨコナデ	内外面器面荒れ著しい	
53	筒形土製品				SI1		-	-	-	にぶい褐	石・角	手づくね整形 外面上半ナデ、下半ハケ。内面ほとんど剥落 一部に器面残存	カマド内焼土出土	
54	土師器	甕	4B	21	SB5	IV	(21.80)	-	-	灰白	石・長・角	口縁：ヨコナデ 胴部外面：タテハケ内面：ヨコハケ、ナデ		
55	土師器	甕	4B	21		IV	(15.20)	-	-	浅黄橙	石・長・角・チャ	口縁内外：ヨコナデ 胴部外面：タテハケ 胴部内面：ヨコハケ		
56	土師器	高杯 (脚部)	4B	2116		IVIV	-	-	9.80	浅黄橙	石・白・チャ・角	杯部外面及び脚部外面：ヘラミガキ 杯部脚部の境目：ハケ・ヘ ラナデ 杯内面：ヘラミガキ		
57	土師器	無台椀			SD1		11.30	3.15	5.10	にぶい橙	白・石・角	回転糸切り	全面摩滅著しい	
58	土師器	無台椀			SI1SD1		11.60	4.15	5.00	にぶい橙	白・石・角	回転糸切り(右)		
59	土師器	無台椀			SD1		12.00 (~12.5)	4.65	5.50	にぶい橙	白・石・角	回転糸切り(右)		
60	土師器	無台椀			SD1		13.45	3.70	5.20	橙	白・チャ・石・角	回転糸切り(右)		
61	土師器	無台椀			SD1		12.50	3.15	5.30	にぶい橙	白・石・角		内外面摩滅	
62	土師器	無台椀			SD1		12.50	3.70	4.90	にぶい橙	白・石・角	回転糸切り(右)		
63	土師器	無台椀			SD1		13.00	3.70	5.00	灰黄褐・橙	白・石	回転糸切り		
64	土師器	無台椀			SD1		12.90	3.45	5.00	橙	白・石・角		内外面器面摩滅著しい	
65	土師器	無台椀			SD1		13.60	3.55	4.90	にぶい橙	白・石・角	回転糸切り(右)		
66	土師器	無台椀			SD1		13.00	4.00	4.80	にぶい橙	白・石・角	回転糸切り(右)		
67	土師器	無台椀			SD1		14.20	3.70	5.60	にぶい橙	石・白・角	回転糸切り(右)	底部内面器面剥離	
68	土師器	無台椀			SD1		13.80	3.40	6.20	にぶい橙	石・チャ・角・白	回転糸切り(右)		
69	土師器	無台椀			SD1		14.80	5.05	5.80	橙	白・石・角	回転糸切り(右)		
70	土師器	無台椀			SD1		-	-	5.20	灰黄褐	白色粒子・チャート・石	回転糸切り		
71	土師器	無台椀			SD1		-	-	6.10	にぶい橙	石・白・角	回転糸切り(右)		
72	土師器	高杯			SD2		19.20	-	-	灰白	石・白・角	口縁：ヨコナデ→ヘラミガキ 外面胴部ミガキ 内面：ヘラミガキ(内黒)	器面摩滅	
73	土師器	高杯 (脚部)			SD2		-	-	12.80	にぶい橙杯内面：黒	白・石・角	脚部外面：タテハケ 裾部：ヨコナデ 脚部内面：ヨコハケ 杯内面底面：ヘラミガキ		
74	土師器	杯			SD2		(14.00)	-	-	にぶい橙→灰白	石英	口縁：横ナデ 外面：タテハケ 内面：ヨコハケ		
75	須恵器	甕	4B SD2 SD1	18		IV	45.60	-	-	灰白・暗オリーブ灰	白色粒子・長	外面：カキ目→櫛歯状工具連続刺突	内面自然軸	
76	土師器	甕			SD2		-	-	-	灰白、淡橙	長・石・角		把手	
77	土師器	無台椀			P103.7		12.80	3.50	6.00	橙	白・石・角	回転糸切り		
78	土師器	無台椀?			P103	1	-	-	5.50	橙	白・長・角	回転糸切り		
79	土師器	無台椀?			P103	1	-	-	6.20	内外橙褐色	白・石・角	回転糸切り(右)		
80	須恵器	壺・甕類			P103.2.1		-	-	-	灰	白			
81	須恵器	甕			P103	5?	-	-	-	灰白	白色粒子	外：格子タタキ 内：平行タタキ	佐渡小泊産	
82	土師器	小甕			P36・37		-	-	7.20	浅橙	白・長・角	回転糸切り(右)		
83	土師器	無台椀			P61		13.80	3.50	5.30	橙	石・白・チャ・角	回転糸切り(右)		
84	須恵器	有台杯	4B	15		IV	(12.50)	(2.70)	(7.50)	灰白			内面 自然軸	
85	須恵器	長頸壺	5B	19	IV		-	-	-	灰	白色粒子		内面：粘土組織	
86	須恵器	壺	5C	3		IV	(15.00)	-	-	灰白	白色粒子			
87	須恵器	長頸壺				I・II	-	-	-	灰	白色粒子			
88	土師器	無台椀	4C	8			7.20	3.33	4.00	浅黄橙	石・白・角	口縁ヨコナデ		
89	土師器	無台椀	4B	4		IV	12.80	3.10	4.60	にぶい橙	石・白・チャ・角	回転糸切り(右)	口縁内外面器面荒れる	